まんじ

No. 103

2007.2.1

まんじ第百三号　目次

たまごの殻（一）……千坂精一…4
草庵に結ぶ夢―鴨長明―……島津隆子…19
あばれ天竜（三）―金原明善の一生―……三戸岡道夫…27
伊豆の歯科医業の祖（その二）……堀内永代…40
荒川慕情―小台の渡し―……大和禎人…47
わが愛誦歌（二）―戦後の歌壇逍遥……曽根竣作…50
雁来紅（短歌三十首）……曽根竣作…53
短歌　行雲流水（十五）……石黒修身…57
詩集「ろかいゆ」より　その四　髯……松下壽男…63
ハート・トウ・ハート第四話ア・ラブ・シュプリーム（終編）……松下壽男…64
漢詩　潮騒録（四十九）……鯨游海…74
古い物・遠い夢　第十二章　茶道具三昧……忠内正之…81
針の穴を通った駱駝（六）……鍋屋次郎…91
司馬遼太郎の紀行文（司馬雑感十）……山田嘉久…103
司馬史観の黒田官兵衛に触れて……平山恵敏…116
後進国が支配する韓国……新井宏…127
法は最低の道徳……伊治哲…136
文化勲章に輝く赤堀四郎博士の一生……松下魏三…141
還暦からの考古学（八）……中山喬央…146
空風（四）……太田精一…158
編集後記……編集子…169
表紙……田寺怜葦
カット……宮城正彦
鈴木國男
清水トム

たまごの殻（一）

千坂精一

一

浅はかだったおのれを愧じて、居た堪まれずに城を飛び出し、

（この愚か者めが、愚か者めが）

そう責めながら彷徨い歩いているうちに、いつか峠道に入って關根の羽黒堂近くまできてしまっていた。

陽射しを避けて、傍らの雑木林のなかへ入ってゆくと、折よく涼風が梢を鳴らして吹きつけてきた。その心地よさにわれに返り、平静を取り戻した。

しばらく林の中を歩き廻っていると、突然陰湿な光景が途切れて、目眩めく陽光とともに眺望が展けた。

俯瞰する城下の町並みは、ひっそり沈んでいた。

峻険な山々に囲まれたその盆地は、出羽國置賜郡米澤藩十五万石の城下町である。

ここから遠望する限りにおいては、なんの変哲もない静かな町並みであった。いや、現在はもう確かに静謐を取り戻しているといっていい。

その城下町を腕組みして感慨深げに眺めているこの六尺豊かな大男は、面長の厳つい顔立ちのわりに眼が細く寂しいが、それをぽってりした大きな団子鼻と分厚い唇が賑やかに補っている。

いつも分厚い唇をすこし開き気味にして、心持ち顎を上げている締まらない容貌は、いっけん鷹揚な人柄に見えるが、実はどうして若手藩士のなかでも指折りの俊秀で、武術もまた一、二を争う剣客であった。

この男は、米澤藩主上杉治憲の小姓佐藤文四郎秀周といい、祖先は江戸作事奉行、父は三十人頭を勤めた。

文四郎は、城下町の遠景を飽くことなく眺めながら、

（お屋形様のご英断で、大事にいたらずよかった）

と沁々思った。

あの事件は、まさに世に言う《お家騒動》であった。

もし、幕府に知られてしまったら、公儀は待ってましたと治政よろしからずの廉で外様大名の上杉家を取り潰すにちがいなかった。まさに危機一髪のところであった。

ともかく、なにはともあれ、辛うじてお家の安泰を保てたことは、家臣としてこのうえない慶賀のいたりではあったが、しかし、文四郎にはただひとつ、

（あのおふたかたの心底もはかれずに、今日まで獅子身中の虫と敵視しつづけてきた）

軽率さが悔まれて、なんとも慙愧に堪えなかった。

話は、六年まえに遡る。

明和四年（一七六七）四月二十一日。米澤藩主上杉大炊頭重定は、病気を理由に幕府月番老中へ『隠居願い』を差し出して許され、同二十四日十七歳の養子治憲が家督相続して九代藩主になった。後の鷹山である。

治憲は、重定の従妹の子であった。

筑前國秋月五万石の藩主黒田甲斐守長治の正室豊女が重定の叔母で、その娘春女が日向國高鍋三万石の藩主秋月佐渡守種美に嫁して産んだ二男が治憲である。

治憲は、寶暦元年（一七五一）七月二十日秋月家江戸一本松邸で生まれ、童名松三郎、後に直松と改める。

重定には三人の子があったがいずれも女子で、しかも二人は早世し七歳の幸女だけになってしまったので、齢四十歳の身にもはや子宝は恵まれないと判断して、瑞耀院（豊女）の勧めに従い九歳の直松を養子に内約した。

ところが、翌年二月側室お勢に男子が誕生した。後の勝熙である。

しかし重定は、すでに秋月家と内約したあとであり、男子出生といっても側室の子だから家督を譲らず、六月に秋月家と正式に養子縁組を交わすと、十月には直丸勝興と改めた直松を一本松邸から上杉家江戸上屋敷の桜田藩邸へ引き取って、藩主後継者としての養育をはじめた。

翌年十一月、国家老を命ぜられた芋川縫殿正令のあとの江戸家老に會談所奉行だった竹俣美作當綱が着任すると、直丸の養育を引き継いだ。

ついでながら、米澤藩では国家老のことを奉行職という。これは、謙信が麾下七手隊将のうちから三人を選んで奉行職にした伝統を重んじてのことであるが、一般的ではないので、この稿では国家老とよぶことにする。

竹俣當綱は、藩医で儒者の藁科松伯が主宰する家塾菁莪館の俊英で、この塾の門弟には後に小姓頭に抜擢されて竹俣とともに治憲の腹心となり、藩政改革にその生涯を捧げた荏戸九郎兵衛善政ら革新思想のすぐれた若侍たちが揃っていた。文四郎もそのうちの一人であった。

直丸は、彼らと同席して松伯の講義を受けるかたわ

ら、竹俣の勧めで松伯の師にあたる高名な儒者細井平洲を賓師に迎えて『大学』の講談も聴講した。

こうして直丸は、王侯学の奥義を学び、学問の目的は実践にあることを身につけて育っていった。

明和三年（一七六六）七月、十六歳になった直丸は、元服して治憲と改名した。

三手組配下の與板組に属していた文四郎は、この年の十月に木村丈八高廣とともに治憲の小姓を命ぜられた。

そして、翌明和四年四月に重定が隠居して、治憲が九代藩主になったのである。

以後米澤藩では、重定を大殿様、治憲をお屋形様と申し上げることになる。

ときの幕府は十代将軍家治の世であり、治憲は元服するときこの将軍の一字をいただいて改名したのである。

また、この年は二年後に老中になる田沼主殿頭意次が側用人に抜擢されており、田沼時代の幕開けでもあった。

いっぽう、治憲が襲封した米澤藩の重臣は、国家老が千坂對馬高敦、芋川縫殿正令、竹俣美作當綱の三人、江戸家老が色部典膳照長、須田伊豆滿主の二人、侍頭が本庄大和職長、安田内匠雅元、清野内膳邦秀、市川豐後盛房、竹俣勘解由英秀の五人、という十人構成であった。

竹俣美作とともに菁莪館の双璧と謳われた前述の荏戸九郎兵衛善政は、このときまだ仲之間詰であったが、四箇月後の八月小姓に抜擢されて、治憲の側近になる。

二

文四郎が使いに行って書院に戻ってくると、治憲は厳しい表情で書き上げたばかりの文書を凝視めていた。

「色部様は、ほどなく参られまする」

文四郎に顔を向けて頷いた治憲の視線は、鋭かった。

「文四郎、これへ参れ」

「はっ」

文四郎が恐る恐る近づくと、治憲は文書を示しながら、

「これは、財政破綻した上杉家再建のための大倹令を発するにあたって、まず藩主自身の身辺を整理する覚悟を著した物じゃ。そのほうたちはわたしの決意をしかと心得、肝に銘じて励んでくれよ。よいな。頼むぞ」

「はっ」

治憲の決意は、箇条書きで次のように記述されていた。

一、江戸の藩主年間仕切金は千五百両であったが、これを世子のときのままの二百九両二分銀五匁六分とする。

一、伊勢神宮の代参は、国許や江戸から使者を派遣せず、近くにいる京留守居役におこなわせる。

一、神仏社寺に対する行事は、すべて当分中止する。

一、年間の祝事はすべて延期する。

一、行列の人数はもっと減員する。

一、日常の衣服は木綿、公式の場合のみ絹を着用する。

一、食事は一汁一菜、歳暮だけ一汁二菜で越年を祝う。

一、贈答の慣習は一切禁止する。

一、住居、台所、馬小屋など、あるいは普段使用しないところの補修は簡単にする。

一、幸女も日常の衣服は木綿にする。

一、現在五十数人いる奥女中を九人に減らす。

文四郎は一字一句を心に刻みながら緊張で躰が震えた。泪が止め処なく溢れて読み終えたあとも顔を上げることができなかった。上杉の家に生まれ育った人でもないのに借財の重荷を背負わされて、このような悲壮な決意で藩政改革に臨まなければならない養子の若い主君が、なんとも不憫でならなかった。

むかし父から聴かされた上杉家の不運が思い出された。

足利政権時代には関東管領として栄えた家柄であったが、醜い同族争いで衰微したところを新興勢力の北條氏康に漁夫の利を得られて関東を逐われ、越後へ逼塞した。

豐臣政権の世に秀吉に信頼された景勝が會津百二十万石を与えられて家名を盛り返し、毛利、前田と並ぶ大々名になったのも束の間、三年後には凋落してゆく豐臣家に義理立てした廉で家康に睨まれて取り潰されるところを結城秀康、本多正信、榊原康政らの歎願で存続は許されたものの、米澤三十万石に減知されてしまった。

不運は、まだつづく。

徳川体制に入って、泰平の世が定着した四代将軍家綱時代の寛文四年閏五月七日、景勝の孫三代藩主綱勝が二十七歳の若さで急死した。綱勝にはまだ子がなかった。

幕府は、願ってもない好機到来と、

「嗣子なきときは、家名断絶」

の幕法を楯にとって、外様大名の上杉家を取り潰しにかかったが、このときも、綱勝の岳父で三代将軍家光の異母弟會津藩主保科正之の尽力によって、綱勝の甥吉良三郎（上野介の嫡子）を末期養子に迎えることで辛うじて断絶を免れたが、伊達、信夫両郡と屋代郷三万石を削られ半知相続の置賜郡十五万石に減知されてしまった。

知行高が藩祖景勝最盛期の八分の一に減ってしまったのに、家臣は謙信以来の六千人を抱えたままその俸禄総高だけでも十三万石あるうえに、四代藩主になった綱憲が、吉良家の華美な風習を持ち込んできて減知以前にもまさる格式を張ったので、財政は急激に逼迫した。

さらに藩主の実父吉良上野介がたびたび江戸家老に無心をし、年間千両を超える商人たちからの付けを廻し

てきたので、藩主を二人抱えているような重圧であった。

重臣たちの役料を削ったり家中の奢侈を禁じたりして遣り繰りに努めたが追い付かず、急場凌ぎに家臣の俸禄を四分の一借り上げたが返済できぬままに年々逼迫が募っていって、ついに借り上げは二分の一にまでおよんだ。家臣たちは半額に減俸されてしまったのである。

そのため下士たちは、新しい土地を開墾しながらそこに住み着いて、半士半農の生活を余儀なくされた。

上士たちは、これを、

「原方の糞つかみ」

とよび、下士たちも負けずに、

「城方の粥腹」

と応酬して蔑み合い、領内は重く沈滞していった。

先代重定のとき、その才覚をかわれて小姓頭兼郡代所頭取に出世した側近森平右衛門利眞は、藩の窮乏を救うため積極的に商業政策を採り入れ、領内だけでなくひろく江戸の商人たちをも財政顧問に迎えてその商才を利用し、革新的な政策をつぎつぎに施行していったので、沈滞していた領内は久しく忘れていた活気を取り戻した。

しかし、やがて森は悪徳商人たちに賄賂を掴まされて結託したり、農民を苛めて私服を肥やし堕落していった。

寶暦十三年二月、一年前に江戸家老から国家老同様勤仕になったのちも江戸詰めのままでいた竹俣美作は、密かに米澤へ帰国すると国家老千坂對馬、芋川縫殿、非番の江戸家老色部典膳と謀議して、森を二の丸奉行詰の間に呼び出すとその悪行を並び立てて誅殺してしまったので折角の改革も頓挫してしまい、もとの木阿彌どころか蔓延った悪習だけが遺ってさらに深刻化していった。

そんなことがあって、すっかり藩政への自信を喪失した重定は、翌明和元年、色部典膳を岳父の尾張藩主徳川宗勝の許へ遣わして、版籍奉還の内意を伝えさせた。

愕いた宗勝は、重臣たちに色部を説得させて重定を思い留まらせたのだが、気力が萎えた重定は、三年後に藩政を放擲して隠居してしまったのである。

三

文四郎は、近づいてくる足音にはっとわれに返った。

色部を待つ僅かのあいだに、上杉家の苦難の歳月が目紛しく脳裡を駆けめぐって、新たな泪にくれた。

「お呼びでござりまするか」

「うむ」

文四郎は、泪を拭う暇もなく、色部に、

「これは、お屋形様のご決意でござりまする」

そう判然り伝えて治憲の文書を差し出した。

治憲は、色部が読み終えるのを凝と待ってから、

「今日よりは左様心得てしかと仕置いたしてくれよ」

と頼み入れた。

色部は、

「ご決意のほど、しかと拝見いたしました。なれど、このことは国許の重臣がたにお諮りいただきませぬことには、典膳お受けいたすわけには参りませぬ」

「なぜじゃ。わたしが奢侈を希むというのであれば、財政破綻のおりから重臣たちに諮る必要もあろうが、倹約をいたすのにいちいち断ることはあるまい」

「なにごとでありましょうとも、改むるときには重臣一同の評決を仰ぐのがわが藩の慣例でござりまする」

「典膳。現在わが藩は危殆に瀕しておるのじゃぞ」

「申されるまでもござりませぬ」

「ならば改革は急務であろう。慣習に拘泥わっていては改革などできぬ。先例を破ることがすなわち改革であろう」

「では、お屋形様は、改めようとなされることは今後一切独断でご実行なされるお覚悟でござりまするか」

「そうではない。意見を聴取してもっともなれば従前のままも吝かではないが、このようなことはわたしの一存でよいと思ったまでのことじゃ。よい、よい。そのほうがそれほどまでに申すのなら、国許の重臣たちに諮ろうほどに、典膳は心して江戸屋敷をとり仕切ってくれよ」

「なれど、ご決意のなかにひとつ至難がござりまする」

「なんじゃ。なんなりと申してみよ」

「されば、奥女中のことでござりまする。九人に減らせと仰せられまするが、半数あまりは大殿様の奥方様が当家へお輿入れのおりに尾張藩からつれてこられた者でござりまする。当家お抱えの者たちは減らせても、尾洲様からのお供を勝手に減らすわけには参りませぬ」

「わたしの身辺を贅沢の儘にしておいて、家臣たちに倹約を奨励してもことは成就せぬ。大倹を布くからにはまずもって藩主が率先垂範せねばならぬのじゃ。わが藩の再建のためとあらばたとえ尾洲公であろうともなんの遠慮があろう。なればわたしが直々に頼み入るといたそう」

文四郎は、治憲の名を捨てて実を取ろうとする気概に感銘した。汚濁してやがて腐敗するに違いない水槽にとっぷり漬かってなすすべもなく手を拱いている色部の諦めの静止姿勢と、懸命に踠いてなんとしてでもその水槽から這い出ようとする治憲の活力溢れる行動姿勢との明暗は、藩主と重臣の立場相違だけのものではなかった。

文四郎は、治憲のこの英断には感服したが、しかし、自身にとっては素直に喜べない事情があった。

それは、文四郎が密かに好意を抱いているしずが尾張家からきた奥女中だったからである。これまでも機が熟するのを待つのは辛かったが、それもしずが身近にいる

ことでどうにか耐えることができた。そのしずがいなくなるとなるとなんとも遣り切れない思いで気が滅入った。

だが、文四郎の想いなど知らぬ治憲は、その日のうちに色部と文四郎を供にして市ヶ谷の尾張藩邸を訪れ、藩主徳川宗勝に面会して奥女中の返還を申し入れた。

宗勝はじめ重臣たちは、かつて先代重定が版籍奉還を申し入れにきたことで米澤藩の窮状を知っていたので、

「もっともなこと」

と理解を示し、快諾してくれた。

市ヶ谷からの帰路、文四郎は、

(このお屋形様のなさりようなら、米澤藩はかならず再建されるに違いない)

そう胸を膨らませながらも、しずと別れることになる寂しさとが綯い交ぜになって、複雑な心境であった。

四

九月十八日、麻布中屋敷と白金下屋敷詰の藩士たちに、桜田藩邸への呼集がかかった。

国許でいう総登城である。

治憲は、大広間に集合した江戸詰の全藩士をまえにしてあらためて財政の疲弊を訴え、謙信以来の伝統である質素律義の気風を忘れて奢侈に流れていることを歎き、以後は諸事倹約を堅く守るよう『大倹令』を発した。

藩士たちは、治憲の言葉を神妙に聴いた。

(このままではいけない)

とは誰しも思っているのだが、しかし、藩政をとり仕切るのは重臣たちであって自分たちではない。政を執行する人たちに勇気と決断がなければ、改革はできない。

これまで消極策の耐乏生活だけを強いられて、沈滞しきった領内でひたすら我慢の日々を送らされている歯痒さに地団駄踏んでいる若い下士たちが大勢いた。もちろん、文四郎たち菁莪館社中は全員そうであった。

それが、いま眼のまえに御座す若き主君が襲封早々にして待望久しい藩政改革の決意を披瀝されたのだ。彼らはそっと顔を見合わせて頷き合い、微笑を漏らした。

江戸三屋敷は、久しく忘れていた活気を取り戻した。

文四郎は、同輩たちから、

「お屋形様のお側に仕えている文四郎は、果報者よ」

と妬まれて、小突き廻された。

文四郎は、羨望の眼で見られ得意満面であった。

閏九月十一日、治憲から出府を命ぜられた国家老千坂對馬が桜田藩邸に到着した。

治憲は、千坂と膝詰めでながい刻を費やし、懇々と藩政改革の意図を説いた。

その場にひかえていた文四郎は、辛抱強く諭す治憲の熱意に感服した。

千坂も、ようやく治憲の意中を理解したようであった。

会談が終ると、治憲は、

「對馬、出府いたしたばかりで大儀であるが、さっそく帰国して国許の藩士たちにわたしの意志を伝えてくれ」

と頼んだ。

千坂は、慮外なという表情をして、

「おそれながら、仰せではござりまするが、お屋形様のご意向は重臣たちにだけ伝えるのが先例でござりまするゆえ、直接藩士たちに通達することはできませぬ」

と固辞した。

「そうか、ならばそうしてくれ」

「かさねて申し上げまするが、重臣へのご通達は、文書をもってなされるのがわが藩の慣例でござりまする」

「あい判った。そういたそう。文四郎硯と巻紙を持て」

「はっ」

治憲は、文机に向かうと、さっそく筆を執った。

治憲が、長文の『志記』を認めるあいだ、千坂は微動だにせず見守っていた。

文四郎は、そんな千坂の様子を身近に観察しながら、

(さすが大家のご家老だけあって、なにごとにも動じない風貌を備えておられる)

と感心した。

『志記』を託した千坂が退出すると、治憲は緊張が解れたらしく、相好をくずして、

「文四郎、名家の慣習は難儀なものじゃのう」

と皮肉った。

「はっ」

文四郎は、そう答えるしかなかった。

「こうも先例の壁が厚くては、改革も容易ではないな」

「お察しいたしまする」

「しかし、わたしはかならずなし遂げてみせるぞ」

語気鋭く言い放った治憲の表情は、険しかった。

五

それからひと月余り後に、千坂對馬が突然出府した。

報らせを受けた文四郎が急ぎ出向くと、千坂は、

「文四郎、お屋形様には明日到着したことにしてくれ」

と言った。

「なにゆえでござりまする」

文四郎が訝しんで質したが、

「理由は尋くな。ともかく今日のところは独りにしておいてくれ。明朝色部殿と会ったうえでお目通りいたす」

そんな言葉しか返ってこなかった。

文四郎はその場を退がったが、日が暮れても千坂の逗留部屋には灯火が点かないので、係の奥女中に訊くと、

「ご家老様は、灯火も要らぬ、食事も要らぬ、寝所の用意も無用と仰せられました」

と心配顔で言った。

（いったい、どうなされたのであろう）

文四郎は、千坂の不可解な行動をますます訝った。

そして、気掛かりなまま過ごした一夜が明けた。

文四郎が挨拶に出向くと、気遣っていた千坂は夜を徹したらしくさすがに疲労の色は隠せなかったが、それでも髭を剃り、髪容を整えて小ざっぱりしていた。

「文四郎、早朝から大儀じゃのう」

「ご家老様、お加減でもお悪いのではございませぬか」

「案ずるな。虎穴に入らずんば虎子を得られぬでのう」

「なんのことでございまするか」

「戯れ言じゃ。これより色部殿にお会いする。用事が済みしだいお屋形様へ千坂が出府したと申し上げてくれ」

文四郎にそう告げる千坂の貌には、昨日到着したときの憂色はすでに消えていた。

千坂が、会談を終えた色部と同道して治憲に謁したのは、それから二刻あまりも経ってからであった。

「對馬。急の出府はなにごとじゃ」

「はい。お屋形様のご改革のご意思を国許の重臣たちに伝えましたところ、なにかと異論が出まして――」

「異論が出たとな。誰がどのように申しておるのじゃ」

「それぞれの申しようは内々のことゆえお赦しをいただきまして、重臣一同の総意として申し上げまする」

「構わぬ。遠慮なく申してみよ」

「さればでござりまする。まずだいいちに、これほど重大なことを重臣たちには一言のご相談もなく、お屋形様が独断でお決めになられるのは、先例に背きまする」

「對馬と典膳に諮ったではないか」

「あれはすでにご決断とうかがいましてござりまする」

「典膳。そのほうは改革工夫のおりから側にいて理解し、ともに白子神社へ誓詞を奉納いたしたではないか」

「あのおりには、是非もなきお指図と拝察いたして、やむなく奉納いたしたまでのことでござりまする」

文四郎は、千坂と色部の意外な態度に憮然とした。

（おふたかたの惚けたあの太々しい態度は、お屋形様を蔑ろにしているなによりの証しだ。国許でいったいなにが起きたのかは知らぬが、この豹変は解せぬ。無礼だ）

と心の中で激昂した。

「さらにでござりまする」

千坂は、治憲の矛先を躱してつづけた。

「お屋形様には、大家の格式がお判りになってはおられませぬ。三万石の小藩にお育ちゆえ無理もござりませぬが、ご通達なされました『大倹令』の条々は鎌倉以来の名門上杉家の対面を著しく汚すものでござりまする」

「だが對馬。格式や対面に縛られていたのでは改革はできぬぞ。そうは思わぬか」

「さりとて、上杉家の対面を汚してはなりませぬ」

「――」

「いまひとつ申し上げまする。このたびのお屋形様のなされようは江戸詰の者たちには先例を破って直々にご通達なされておきながら、国許の者たちには重臣から伝えよと仰せられる。これはいかにも片贔屓のなされようでござりまする。お屋形様は、いまだ米澤をご存知ないゆえに、見知らぬ者たちを蔑ろになされておられるのでござりましょうが、どちらも同じ上杉の家臣たちでござりまするゆえ、国許の者たちにも江戸詰の者たち同様に、直々のご通達があって然るべきでござりまする。それが藩主としてのお心遣いと申すものでござりましょう」

文四郎は、千坂の言葉にはっと胸を衝かれて思わず治憲の様子を窺った。治憲も狼狽しているようであった。

ほかのことは国許の重臣たちの言い掛かりとしか思えなかったが、そのことだけはたしかに不覚であった。

困惑した治憲と千坂のあいだに、長い沈黙がつづいた。

気不味い雰囲気を破ったのは、治憲のほうであった。

「わたしの思慮が足りなかったことについては気をつけよう。なれどこのままでは米澤藩は立ちゆかぬ。改革を急がねばならぬのじゃ。のう對馬、国許の重臣たちが承知してくれるにはどうすればよいのじゃ。教えてくれ」

若輩の治憲は、老巧な千坂のまえに屈したかのように下手に出た。文四郎は、改革遂行のためなら形振り構わず耐え忍ぼうとしている治憲の心中を痛々しく思った。

千坂は、息子を諭すような口調で話しはじめた。

「おそれながら、お屋形様は、江戸藩邸に居られたままでいまだご入部なされぬ国許の改革を手掛けようとなされました。したがって、お判りにならぬことは側近の者たちにお尋ねになられましょうし、また、彼らの意見もお聴きなされる。そのようにしてことをすすめてゆかれるということは、とりもなおさず国許の重臣たちを軽視しておられるなによりの証拠でござりまする」

文四郎は、千坂の話を聴いて狼狽えた。改革の推進は治憲とともに学んだ文四郎ら菁莪館社中の者たちが中心であった。そこを国許の重臣たちに衝かれたのである。

「側近の者だけで改革をおすすめになることは、先年の森平右衛門の例もござりますれば、大殿様の轍をお踏みなされぬよう固く慎んでいただかなければなりませぬ」

「国許の事情聴取をいたしておるまでのことじゃ」

「以後はきっと、お慎み下されますように」

「對馬。わたしなりに気配りいたしておるつもりじゃが、若輩ゆえに至らぬこともあろう。それは宥せ。だが、わが藩の再建に心血を注ぐほかに他意はないことをどうして国許の重臣たちは判ってくれぬのじゃ」

「われらもこのままでよいとは思っておりませぬ。しかし再建を急ぐあまり他を顧みぬとあってはなりませぬ」

「だが對馬、ことは急がねばならぬであろう」
「改革は結構なれども名門上杉家の格式はお守りいただかねばなりませぬ。いかに倹約のためとは申せお家の対面を害うことはわれら一同承服いたしかねまする」
重臣たちの総意を担う千坂對馬の意志は固かった。
結局、治憲のほうから折れて自分の非を認め、国許の重臣宛てに『詫び状』を書くことで千坂を納得させた。
こうなっては、どちらが主君なのか判らない。
(これが君と臣との対話なのか)
呆れる遣り取りを一部始終聴いた文四郎は、千坂と色部が退出すると、居た堪まれず治憲のまえに平伏し、
「お屋形様、なにゆえあのような屈辱をお受けにならねばなりませぬのか。文四郎は口惜しゅうございまする」
と無念の泪にくれた。
治憲は、
「文四郎。なにごとも大事のまえじゃ。改革の道は遠く険しい。再建のための辛抱ゆえともに耐え忍ぼうぞ」
自身をも宥めるようにしながら、文四郎を慰めた。
翌朝、文四郎は帰国する千坂を門前まで見送った。
「お屋形様は、さだめしご立腹であろうな」
千坂の呟きに、文四郎はむっとして思わず、
「昨日のご家老様のなされようは――」
と語気を荒らげた。
「言うな文四郎。批判は許さぬ。そのほうは近習のお役目大事に励んでおればそれでよいのじゃ」
千坂は、夜叉のような形相で文四郎を睨みつけた。
文四郎は、臣下の身も弁えずに若き主君を虐め抜いた老獪な千坂對馬に、真底から肝を立てていた。
このときから文四郎は、千坂と色部に敵意を抱いた。

その後の国許の様子は、大殿重定に供奉して米澤へ帰っていた竹俣美作から逐一治憲の許へ報告された。
それによると、国許の重臣たちは治憲直筆の『詫び状』を呼んで溜飲を下げたものの、いぜんとして改革に反対する態度を変えようとはしなかった。
頑迷固陋な重臣たちにほとほと手を焼いた千坂は、思いあまって大殿重定に執り成しを頼んだ。
重定は、さっそく重臣たちを書院に集めて、
「そのほうたちの言い分も道理ではあるが、しかしすでに屋形が江戸で布告し実行しているものを国許では受け入れぬとあっては藩主の威光にかかわる。わしが屋形に代わって申し渡す。屋形の布告をただちに受け入れよ」
といつになく強い語調で命じた。
重定の厳命に重臣たちは渋々承服の体を装っていったん引き退がったが、その後も頑なに拒みつづけて反抗し、竹俣を中心とする改革派の推進を邪魔して困らせた。

なかでも、国家老芋川縫殿は、治憲の新政には服従できぬと公言しており、再三役職の辞任を申し出たが、許されぬとなると、こんどは勝手に職務を放棄して隠居し、家督を嫡子延親に譲ってしまった。
また、非番の江戸家老須田伊豆は、改革実施後も以前の慣習を固持して、毎日平然と縮緬羽織着用で城下を馬で示威してまわり、竹俣らに執拗に反抗しつづけた。
文四郎は、治憲からこうした国許の紛糾情況を聴かされるたびに、改革派と守旧派の対立が深まってゆくことを憂い、菁莪館同志たちの苦悩を慮って切歯扼腕した。

六

藩主になって二年後の明和六年(一七六九)八月、治憲は重定の長女幸女と結婚した。
そして、その年十月、治憲はいよいよ国許米澤へ初入部することになった。
文四郎は、治憲に供奉して帰国すれば、これまで遠く離れた江戸で隔靴掻痒していた日々の苛立ちは解消され、骨身を削って励んでいる同志たちと一緒に直接改革の推進に従事することができるよろこびで胸が膨らんだ。
十九日寅刻、治憲の一行は桜田藩邸を発駕した。
その行列は街道を往く人々が途中で出会っても、とても十五万石の大名とは思えない簡素なものであった。
昨年夏、慰留を諾かずに隠居してしまった国家老芋川縫殿の後任になった色部典膳に替わって出府している、改革反対派の急先鋒須田伊豆は、行列の内容について、
「先例に背きまする」
といきり立って治憲に詰め寄った。
治憲は、
「見栄を張ってもいたしかたあるまい」
そう一笑に付し、須田がなおも、
「倹約もことによりまする。上杉家の対面を汚し、格式を軽んじてはなりませぬ」
と執拗に食い下がるのを退けると、五十人に減らした供の者たちに木綿の旅装を命じた。
須田は、
「屈辱に耐えられぬ」
と千住までの同行を拒んで出立だけ見送ったが、先例も格式も無視したその見窄らしい行列に、情けないやら腹立たしいやらで、地団駄踏んで口惜しがった。
江戸を出た米澤藩主の入部行列は、杉戸、小山、宇津宮、太田原、白河、郡山と宿泊を重ねて、二十五日夕刻福島の寺島吉郎右衛門の本陣に到着した。
(明日はいよいよ米澤領に入る)
文四郎は、久しぶりの帰国に胸をときめかした。
諸国から米澤へ入るには四つの道があった。
福島から板谷峠越えの道。白石から二井宿峠を越え高

畠経由の道。會津から檜原峠を越え船坂峠経由の道。越後から宇津峠を越え今泉経由の道である。

米澤は、峻険な山々に囲まれている盆地なので、どこからきても峠を越えなければならなかった。

翌日は、どんより曇って底冷えのする寒い日になった。

福島を出立した一行は庭坂で小休止した。ここから李平を経て国境の産ケ澤に入り板谷峠を越えれば米澤だ。

ところが板谷峠への山道にかかった頃から雪になった。すすむにつれて烈しくなり厳しい寒気が襲ってきた。

文四郎は、治憲の駕籠に遅れまいと懸命に歩いた。

黙々と山道を辿っていると、とつぜん治憲に、

「文四郎、駕籠を止めよ」

と声をかけられて我に返り、なにごとかと慌てた。

「いかがなされました」

「わたしは駕籠をおりる」

「滅相もございませぬ。戸外は雪でございまする」

「判っておる。だから駕籠をおりるのじゃ」

「なりませぬ。そのままご辛抱下さりませ」

「文四郎。なにを取り違えておる。わたしは雪景色を見たいなどといっておるのではない。雪の山道では担ぐ者がさぞ難儀であろう。よって歩くことにいたすのじゃ」

「初めてお国入りなさる大切な御身でございまする」

「なにを申す文四郎。供の者が寒さに震えているというのにわたし一人が温々と過ごしていてよいものか。君臣水魚の交わりと申すではないか。ならば苦楽はともにせねばならぬ。わたしは風邪などひかぬ。構わぬおろせ」

治憲の激しい叱責に、文四郎は返す言葉もなかった。

駕籠からおり立った治憲は、

「この寒さのなかを板谷の番所まではまだよほどの道程であろう。文四郎。ここで休息させて暖をとらせよ」

「畏まりました」

文四郎は、さっそく手分けをして枯れ枝を集めさせたが、どれもみな湿っていてなかなか火が点かなかった。

近習たちの様子を見かねた治憲が、

「文四郎。わたしの煙草盆を持って参れ」

と命じた。煙草好きの治憲はつねに煙草盆を手許に置いていたのである。

治憲は、煙草盆の灰のなかから熾をひとつ取り出して近習たちに示し、

「この小さな火種を絶やさずに大きく燃え上がらせよ」

と言って、文四郎に与えた。

文四郎は、治憲からあらためて改革の精神を教え諭された思いで、その小さな熾を恭しく押し戴いた。

やがて、数箇所で焚き火が赤々と燃え上がり、充分に暖をとった供侍たちのあいだにようやく談笑が起こった。

その日は、雪に見舞われた難所の山道に手古摺って、板谷へ到着したときにはもう日はとっぷり暮れていた。

代官に迎えられて古びた番所へ入った一行は、逃散した農民の廃屋に分散して綿のように疲れた躰を粗末な煎餅蒲団に包まったが、疲労困憊よりも明日肉親たちに会える昂奮のほうがまさって寝付けないようであった。

文四郎も、暗い床のなかで木村丈八らの同志に会えるよろこびを嚙み締めていた。

七

開けて、十月二十七日――。

いよいよ新藩主治憲の初入部の日を迎えた。

文四郎は治憲に、ここからは下りだからと駕籠を勧めて大澤までおり、齋藤五左衛門の本陣に立ち寄った。

そこにはすでに、米澤から出向いた国家老竹俣美作、町奉行荏戸九郎兵衛、小姓木村丈八らの菁莪館同志たちが詰めていて、一行の到着を待ち侘びていた。

文四郎は、さっそく木村丈八から国許の事情を詳しく聴いた。気遣っていた千坂、色部両家老を中心とする守旧派勢力との確執は深刻のようであった。

いざ出立というときになって、文四郎は治憲から、

「馬の用意をいたせ」

と命ぜられた。

そばにいた荏戸九郎兵衛が、文四郎を制して、

「關根の羽黒堂からのご乗馬が慣例でございまする」

と引き止めた。

「構わぬ。財政に限らず一事が万事じゃ。捨ておけ」

「そこまでなさらずとも、よろしゅうございましょう」

竹俣が穏やかに口を添えた。

「いや、そうではない。些細なことと雖も見過ごさずに慣例をあらためてゆかねば、改革は成就できぬ」

竹俣も荏戸も、治憲の真摯な態度に深く頷いた。

文四郎は、治憲の徹した決意を頼もしく思った。

「文四郎。馬の用意を急げ」

「はっ」

文四郎は、反射的に答えたおのれの声でわれに返り、素早く表へ飛び出した。

治憲に従う馬上は、竹俣、荏戸のほか小姓黒金源五、大熊左内、それに木村と文四郎の六騎であった。

途中、關根の羽黒堂で小休止したあと、治憲は、習い覚えた素鞍流でおりからの風雪を衝いていっきに駆け下り、未下刻に米澤城へ雄々しく入城した。

治憲は、埃に塗れた質素な旅装を解くと、すぐに文四郎を従えてまず不識院殿（謙信）の御堂に参詣し、そのあと先代重定の隠居所を訪ねて帰国の挨拶をした。

そして、休息もとらずに大広間へ出座すると、こんどは居並ぶ重臣たちの一人一人から祝賀の挨拶を受けた。

文四郎らの側近は、治憲の精力的な行動に眼を瞠っ

た。

月があらたまった十一月の三日から、慣例の藩主初入部の祝宴がひらかれることになった。

治憲は、祝宴行事を差配する竹俣を書院に呼んで、

「美作。大倹のおりゆえ質素にいたせ」

と内意を伝えた。

「どの程度にいたしたらよろしゅうございましょう」

「そうよのう。祝宴であるから強飯と酒は欠かせまい」

「左様でござりまするな。してあとはいかように――」

「それだけでよかろう」

「しかし、それではあまりにも粗末に過ぎまする」

「構わぬ。新藩主を迎える祝宴だからといって贅沢はならぬ。祝いの膳など形だけでよいのじゃ。酒宴に愚かな刻を費やすよりも、君臣が一堂に会すまたとない好機ゆえ寸刻も疎かにせず、互いに理解し合う場にいたそう」

「これは恐れ入りました。まさに仰せの通りでござりまする。美作はこのところ江戸を遠く離れておりまするゆえ、いささか頭が惚けましてござりまする」

文四郎は、竹俣が治憲の意中を知悉しながら惚けて確かめている話術の巧みさに感じ入ると同時に、解け合っている二つの心を眼の当たりにして微笑が漏れた。

祝宴は、家臣全員をいくつかに分け、御座の間に集めて執り行うことにした。

千坂對馬は、

「これまで御座の間に足軽を入れた例はござりませぬ」

と反対したが、治憲は、

「あらためるのが改革であろう。改革を実行してもらう者たちがわたしを理解してくれねば成就は覚束ぬ」

と言って取り合わなかった。

三日からはじまった祝宴は、五日五晩つづいた。

祝宴といっても、強飯と少量の酒だけではとても酔うまでにはいたらず、半刻もすれば終わってしまう。

治憲は、

「飲むよりは、語ろうではないか」

といってすすんで家臣たちのなかに入ってゆき、上下の隔てなく膝を交えて改革論を説き、談笑し合った。

痩せても枯れても名門の格式を維持しようとする頑迷固陋な重臣たちは、そんな治憲の態度に苦虫を噛み潰し、

「小家育ちは軽々しい」

と言って露骨に軽蔑したが、若手の下士たちは、新藩主のこれまでにない懇ろな態度に戸惑いながらもその斬新で奇抜な気風を歓迎し、好感を持つ者が多かった。

（以下次号）

草庵に結ぶ夢

―鴨　長明―

島津隆子

そもそも一期の月影傾きて、余山の山の端に近し。たちまち三途の闇にむかはむとす。

月影が西に傾き、山の端に近づくように、私の生涯も終末に近づいてゆく。それは急速に陽が没するように、たちまちにして光明のない真っ暗な冥土の旅に向おうとしている。

これは『方丈記』の結びの一節である。長明はここで、これまで草庵にあってあれこれ述べてきたことは、やはり執着心の現われであり、佛意に背くことゆえ、もう無用のことを語って、空しく時間を浪費することはやめよう、と言って筆を置く。

では、長明はどんな無用なことを語ったのだろうか。

ゆく川の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世の中にある人と住家と、またかくの如し。

流麗なこの文章で始まる『方丈記』は余りにも有名であるが、長明は美文調を以って後世の人々の鑑識を仰ごうとしたのではないだろう。

五十二歳で遁世した長明は、自らの生涯を思い返していた。そして、八年経った建暦二年（一二一二）、『方丈記』という一篇の散文詩を書き上げた。その中で長明は彼なりの一つの思想を述べたかったのにちがいない。

人の世は水の泡のように儚いものであるという明確な考え方を。

だが、人生の有為転変を、流れゆく水の比喩によっていかに巧みに訴えたとしても、それはそれであるという、単純明確な答えしか返らない。

人生は無常なり、という思想に、いったい誰がどんな感想を言えよう。長明はそんなわかり切った考えを長々と語ろうとしたのだろうか。そうではないだろう。

長明の名を鴨と呼ぶように、家系は代々下賀茂神社（賀茂神社）の摂社河合社の禰宜で、仁平二年（一一五三）に父長継の次男として生まれた。幼い時からその社の神官になりたいと願っていたようだ。

幼くして何者かになりたいという願望は、人生に対する確固とした執着であり、一つの運命である。

長明は和歌をよくしたので、その才能が二条天皇の中宮高松女院に認められ、女院に庇護される身になった。だが、この女院の逝去によって、運命は長明を思わぬ方向に連れてゆく。

自分の才能を認めてくれる有力者が、忽然とこの世から消えてしまったことは、当の本人以外にはわからない深い悲哀であったろう。

玉敷の都の中に、棟を並べ、甍を争へるたかき卑しき人のすまひは、代々を経てつきせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり、あるは去年焼けて今年は造り、あるは大家亡びて小家となる。住む人もこれに同じ。所もかはらず、人もおほかれど、いにしへ見し人は、二三十人が中にわづかに一人二人なり。朝に死に、夕に生きるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。

運命とは一つの実感である。いや、実感でしかないと言った方が当っている。この投げ捨てた言葉にこそ、人生の無常観がこめられている。

さらに長明は父の長継を喪う。神官になりたいという願いは、ここに至って、実現の可能性がいよいよ稀薄なものになった。

知らず、生まれ死ぬる人、何方より来りて、行方へか去る。また知らず。仮のやどり、誰が為にか心をなやまし、何によりてか目を悦ばしむる。そのあるじと住家と、無常を争ふさま、いはば朝顔の露に異ならず。あるは露おちて花残れり。残るといへども、朝日に枯れぬ。あるは花しぼみて露なほ消えず。消えずといへども夕を待つことなし。

長明にとっては、自身の身の回りに起る運命と当時の社会のそれとは決して異質なものではなかった。

全盛を極めた平家が、興隆の機運に乗る源氏の急迫に、西海を漂いながら闘い敗れ、一門ことごとく壇ノ浦の海底に藻屑と消えてしまった。

時に長明三十一歳の頃のことである。さらにこの先、四十あまりの春秋を送れる間に、世の不思議を見ること、やや度々になりぬ

私が生まれてから四十年余りの歳月を送っている間に、およそ想像もつかぬような出来事を目にすることが、次第にたび重なるのである。

長明はいわゆる有為転変、天変地異を、身をもって体験することになるのだ。

いぬる安元三年卯月二十八日かとよ、風烈しく吹きて、静かならざりし夜、戌の時ばかり、都のたつみより火出で来て、いぬゐに至る。はてには朱雀門、大極殿、大学寮、民部省などまで移りて、一夜のうちに、塵灰となりにき。ほもとは樋口富小路とかや。舞人を宿せる仮屋より出で来りけるとなむ。

これは安元三年（一一七七）の都の大火を描写したものだが、この火事はよほど有名らしく『平家物語』にも、ほぼ同じような記述がある。「同じき二十八日の夜の戌の刻ばかり、樋口富小路より火出で来って、京中多く焼けにけり。折ふし巽の風烈しく吹きければ、大きなる車輪の如くなる炎が……」と。

当時は消火設備も何もまるで無い時代のこと、激しい風に、燃えるにまかせるより術がなかったのだろう。

吹き迷う風に、とかく移り行くほどに、扇をひろげたるが如く、末広になりぬ。遠き家は煙にむせび、近きあたりはひたすら焔を地に吹きつけたり。空に灰を吹きたてれば、火の光に映じて、あまねく紅なる中に、風に堪えず吹き切られたる焔飛ぶが如くして、一二町を越えつつ移りゆく。その中の人、うつし心あらむや。あるは煙にむせびてたふれ伏し、あるは焔にまぐれてたちたちに死ぬ。あるは身一つ、辛うじて遁るるも資材を取り出づるに及ばず、七珍万宝さながら灰儘となりにき。

まるで当時の大火災の現場シーンを、いながらにして見るような生々しい実感が、読む者の胸に強く迫ってくる。見事な筆致である。

治承四年（一一八〇）の大風や、養和年間（一一八一）の二度にわたる大飢饉の惨状など、再現フイルムを見るような迫力で描写されている。長明が今日に生きていれば、第一線で活躍するジャーナリストになったことだろうとさえ思える。

余談はさておき、次に元暦二年（一一八五）には、突然の大地震に遭う。

そのさま世の常ならず。山は崩れて川を埋み、海はかたぶきて陸をひたせり。土さけて水湧きいで、巌われて谷にまろび入る。渚こぐ船は波にただよひ、道行く馬は足の立所をまどはす。

何の解釈もいらない。今日の私たちにもはっきり分る、簡明な叙述である。

都のほとりには、在々所々、堂舎塔廟、一つとして全からず。あるはくづれ、あるはたふれぬ。塵灰立ち上りて、盛りなる煙のごとし。地のうごき、家のやぶる音、雷に異ならず。家の中に居れば、たちまちにひしげなむとす。走り出づれば地われ裂く。羽なければ空をも飛ぶべからず。竜ならばや雲にものぼらむ。おそれの中におそるべかりけるは、ただ地震なりけりとこそ覚え侍りしか。

事実を事実として語るとき、それは簡潔で力強い描写になる。この種の話の内容は、単なる作られた物語風でなく、どこまでも自身が見聞した事実を述べ、証拠だてている。単なる抽象論でなく、常に客観的な態度で平静に被害状況を述べていることは、次の記述を見てもよくわかる。

かくおびただしくふる事は、しばしにて止みにしかども、その名残しばしは絶えず。世の常驚くほどの地震、二三十度ふらぬ日はなし。十日二十日過ぎしかば、やうやう間遠になりて、あるは四五度、二三度、もしは一日まぜ、二三日に一度など、大かたそのなごり三月ばかりや侍りけむ。

こんな風にはなはだしく揺れることは、しばらく止んでしまったが、その余震がしばらくの間は絶えない。世に普通程度に驚くくらいの地震が、二、三十回揺れない日はない。やがて十日、二十日と日数が経過すると、次第に揺れも遠のいて、四、五回、二、三回、あるいは一日おき、もしくは二、三日に一回と減じてゆき、だいたいその余震は三月ばかり続いただろうか。

まるで現代の気象官の記録を見るようであるが、この具体的な数字は、当時の記録書『山槐記』や、その後の調査ともぴったり一致する。

『平家物語』巻十二の詳細を極めた地震の記述も、方丈記を骨子としていることは言うまでもない。

だが、ここで長明のジャーナリステック性を語ろうとするのではなく、長明の態度が、常に現実的課題をありのままに語っていることを知ればいいのだ。

一知識人がそんな社会情勢を背景として、人々の生活

の惨状を目の当たりにし、しかも今日でいえば自身の就職も果せなかったとしたら、人生の無常を痛感したとしても不思議はない。

このような人が不安と動揺の時代の中で生きるには、僧侶になるか芸術家になるしかなかった。

長明は迷うことなく後者の道を選んだ。

そして、当時藤原俊成と並ぶ歌壇の巨匠、俊恵の門をたたく。

俊恵も瞬く間に長明の歌人としての才能を高く評価する。だが、長明はどこまでも不運の人であった。俊恵も長明に教えを垂れること久しからずして、この世を去ってしまうのだ。

しかし、長明は運命を甘受している人間ではなかった。むしろ積極的にその運命に挑戦してこそ芸術家であると自覚した。

今度は琵琶の名手である中原有安から音楽を学びはじめた。そこでも長明は一流の手腕を発揮する。だが、並み居るその道の人々の面前で、つい興に乗る余り、啄木の秘曲を弾じいて、不都合を難詰されるのである。

しかし、運命とは不運だけを呼称する言葉ではない。新古今和歌集成立の機運に乗じて、ようやく長明にも光明が射してきた。時の上皇後鳥羽院に召されて、和歌所の寄人となる光栄に浴したのである。

不運が打ち続く人間にとって、ただ一度なりと世人に認められる機会に巡りあえたことは、身に余る感激だったにちがいない。

時に長明、四十歳半ばのことであった。

後鳥羽上皇は長明の歌の才能と、和歌所での精勤ぶりに対して、しばしば賞を賜った。そして、さらにもう一つの幸運が長明に訪れようとしていた。

下鴨の河合神社の社司に欠員が生じたのだ。上皇は長明をそこに推そうと考えられたのである。

当時、和歌所の寄人といっても、その地位と待遇は低く、神社の社司とは社会的な評価にも格段の差があった。まして幼い頃から夢みた宿願である。長明は感涙にむせんで、わが身に訪れた幸せを思わずにはいられなかった。いまはじめて訪れた、生涯での幸運を実感していた。

だが、長明にとれば、幸福とは常に悲運の裏返しの表現にすぎなかった。

かねがね上皇の長明に対する好意に反感を抱いていた一族の鴨祐兼は、

「長明殿は神官としての素質に欠け、その道にも疎く、社への奉公が浅いゆえ、社司の役はどうかと危ぶまれまする」

という理由で、強い反対意見を陳情したのである。

この時の上皇や宮廷の態度は、曖昧裳固としていた。鴨一族の有力者である祐兼の意見を尊重しつつ、長明の才能を惜しむという煮え切らないものだった。

事の顛末に失望した長明は、宮廷に出仕しなくなった。そして、そのうちに姿を隠してしまうのだ。

長明は自らの運命を諦観し、結論を下すべき時と決断した。

ついに不遇な知識人長明が選んだ道は、出家することだった。時に元久元年（一二〇四）長明が五十歳の頃と推定される。

すべてあられぬ世を念じ過しつつ、心をなやませる事三十余年なり。その間をりをりのたがひめに、おのづから短き運をさとりぬ。すなわち、五十の春をむかへて、家をいで、世をそむけり。

出家後、長明は大原山に住んで、山の上を去来する白雲を眺めては、悶々のうちに五年の歳月を送った。

さらに承元二年（一二〇八）の頃、山城の日野・外山に移り、そこに方丈の草庵を結ぶのである。時に長明は六十歳に達していた。

ここに、六十の露消えがたに及びて、さらに末葉の宿りを結べる事あり。いはば旅人の一夜の宿を作り、老いたる蚕のまゆを営むが如し。

そして、その草庵は、

齢は年々に高く、住家は折々にせばし。その家のありさま、世の常にも似ず。広さはわづかに方丈、高さは七尺が内なり。

という極めて簡素で小さなものであった。「広さはわづかに方丈」広さはわづか一丈四方というのだ。

「方丈記」という書名はここに由来するのは言うまでもない。なお、後になって寺院の長老、住職の住む処を方丈というようになった。

長明はその小さな草庵に法華経を置き、和歌管弦の書物の書き抜きを入れ、箏・琵琶を一張ずつ立てかけ、わらびのほどろを敷いて寝床とした。

もし余興あれば、しばしば松のひびきに秋風楽をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。芸はつれったなけれども、人の耳をよろこばしめむとにはあらず。ひとり調べ、ひとり詠じて、みづから心を養ふばかりなり。

山奥のひとり寝の草庵の生活といっても、時に歌を詠み風に鳴るかえでの葉音に耳を傾け、それに和して琵琶

を弾ずるのだ。これはもはや詩人の境地である。同じ出家とはいえ西行のそれとはどこかちがう。

かしこに小童あり。ときどきに来りてあひ訪ふ。もし、つれづれなる時は、これを友として遊行す。かれは十歳、これは六十、その齢ことの外なれど心を慰むること、これ同じ。

山のふもとの山番の子が、時々、長明の許にやってくる。十歳の童と、六十歳の老人がともだちになって遊ぶのだ。いい風景である。

「彼は年をとっていた。……老人が来る日も来る日も空の小舟で帰ってくるのを見るのが、少年にはなによりも辛かった。……少年は老人を慕っていた。……老人は日焼けした、信頼深げな、やさしい眼つきで少年を見つめた。……二人は並んで老人の丸太小屋のほうへ歩いていった」

これはヘミングウェイの小説『老人と海』のはじめの部分だが、どこか『方丈記』の一節に似てはいないだろうか。

それ人の友とある者は富めるを貴み、ねんごろなるを先とす。必ずしも情あると、すなおなるとを愛せず。世の常の人は富める人を友とし、賞与の多い人を頼みにするのがごく普通で、心やさしく情のある、真っ正直な人を愛さない。

名誉も何もない老いた自分を慕ってやってくる少年の、純真無垢な心を、長明はこよなく愛したことだろう。まして妻子のなかった長明なのだから。

そんな生活の中で、元久年間（一二〇四・五）、長明は和歌に関する逸話を集めた『無名抄』二巻を執筆した。

この頃、鎌倉にいて和歌に精進していた二十歳の源頼朝は、自分の身辺に歌について語り合える人のいないことに、もの足りなさを感じていた。上洛して師匠の藤原定家に教えを請いたかった。

そんな実朝のたっての願いを聞き入れた藤原雅経は、長明を推挙したのだ。

建暦元年（一二一一）九月末、雅経共々鎌倉に下った長明は将軍実朝に拝謁した。数回に及んだ三人の会話はさぞかし弾んだことだろう。和歌については言うまでもなく、佛法に関しても、はては人生観に至るまで、話題は尽きることが無かったであろう。

折しもこの時代は文学の革命期といわれる。従来は公家社会から出た和歌が主であった。だが、武家出身とはいえ歌人西行が庶民であったことにみられるように、文学も階層を広げつつあった。

低い身分の出である長明だが、その文章は革命的でさえある。漢語を少なくして、いわば和漢混淆文体といわれるもので、格調のある、音楽的なひびきを感じさせる文体を編み出したのだ。

このように思いがけず長明に逢うことができた実朝の感慨も一入であったろう。しかも長明は、頼朝公の忌日に法華堂に入り、

草も木もなびきし秋の霜消えて
　空しき苔を払う山風

と詠って、はなむけとしたのである。

建暦二年（一二一二）三月、草庵で長明は『方丈記』を書き上げた。さらに仏教に関する説話を集めた『発心集』全三巻をまとめ上げた後、久しからずして忽然と世を去った。享年は六十何歳であるか、諸説があって定かではない。

長明ほど運命の波間に漂いつつ、出家というには余りに人間的に生きた人も稀である。

長明にとって運命とは、やはり一つの実感でしかないのだ。そのように生きた長明の生涯であった。

（完）



あばれ天龍（三）

―金原明善の一生―

三戸岡道夫

第七章　藩県時代の治水

（一）静岡藩時代

明善が、天龍川の治水工事と並行して運動していた松平家の安泰は、その後どうなったであろうか。簡単にその経過を記すと、次のようであった。

明治元年六月二十九日に、松平家当主の正當の名によって、

（知行所を上納し、徳川家に随従して、駿府行きを許されたい）

との願書を、大総督の宮へ提出していたが、八月二十六日に鎮台府から松平家へ

（願い出の通り、徳川家に随従して、駿府へ移住することを許可す）

との通達を受けたのであった。

では、松平家が随従する、その徳川の本家の動きはどうであったかというと、徳川家十六代の当主となった六蔵の家達には、駿河、遠州、三河の三カ国において七十三万石が下賜され、明治元年九月に駿河藩が成立したのであった。その徳川家に随従して駿河に移った家臣は約五千人であり、明善が安泰に尽力した松平家もこの中に入っていたのである。

松平家の一行は九月二十三日に東京を船で発ち、駿河の清水港へ十月七日に到着した。

こうして明善の心配した松平家は無事、駿河で安泰となることが出来、当分の間、居所を江尻宿入江岡村（現在の静岡市清水）の東泉寺と定めた。そして翌年の明治二年正月から、五人扶持を与えられた。

明治二年六月には諸大名の版籍が奉還され、駿河府中は静岡と名が改められ、徳川家達は静岡藩知事に任命された。

なおこの頃（明治二年四月）、財政難に苦しむ藩当局は、その対策として借上げ金政策を計画し、百両以上を出金した者は、その身一代限りで、名字帯刀を許すことにした。

この時明善も浜松町奉行所に呼び出されて、その出金を申し渡された。そこで明善も無利息で五百両を差し出し、藩から、

（ご領内の窮民救助のために無利息で出金いたしたのは奇特であるので、その身一代に限って、名字帯刀を許す）

という辞令を受けた。

明治三年（一八七〇）も秋になった頃、三十九歳になった明善のところへ一つの朗報が入った。

それは明治元年に天龍川水防御用掛りとして、大政官政府から遠州へ派遣されていた高石幸治が、そのとき信州伊奈県の大参事心得という任についていた。それで明善を、伊奈県の県官員として迎えたいと、藩庁へ交渉してきたのである。いわば明善に、新政府の役人として地方行政に手腕をふるう機会が訪れたわけで、立身出世のよい機会であった。

しかし明善には、いかにして天龍川の治水を達成するかという悲願があった。明善は立身出世着のためにこの悲願をすてて、たとえ隣国である信州であっても、天龍川から離れる気にはなれなかった。

当時は、継母が病床にあったので、それを理由に、明善は高石幸治からの申出を断った。

その頃になると静岡藩も、成立してすでに二年余りを経過して、藩政もようやく地に着いてきた。そこで領内に、天龍川、大井川、富士川などの大川を抱える静岡藩としては、次第に大川の治水に深い関心を持つようになってきた。

天龍川治水に異常な情熱を持つ明善の真意を理解した藩庁は、明治四年（一八七一）の春、水利郡方御頭の福岡久を天龍川に派遣して、明善の持っている治水計画の説明を聞いた。この時明善は、

（鹿島・掛塚間の七里の川幅を一定にして、川の流れの勢いを平均する）

という、明善の長年にわたる研究と経験を基礎にして築いた、『八町普請』という計画を、実地に当って説明した。そしてこの工事費の一部として、今後、毎年一千両ずつ献金することを申し出た。

そこでさっそく千両の献金をすると、藩庁から、

（まことに奇特であるので、悴の代まで帯刀を許す）

という表彰を受け、さらに、水利についての、

（御蔵番格）

という辞令を受けた。御蔵番格というのは御蔵番待遇ということである。御蔵番というのは、蔵奉行の下に付属する下級の御家人で、明善はそれと同じ待遇の藩役人に任命されたというわけであった。

その後、水利郡方御頭の福岡久は明善をつれて、鹿島へ出張した。そして明善の計画を実行しようと、測量に着手した。

しかし、まもなく福岡久は中央政府の官吏に任命されて、静岡藩を去ってしまったので、残念ながらこの測量は中止となってしまった。

（二）浜松県時代

明治四年（一八七一）七月には廃藩置県が行われ、全国は三府七十二県に分れた。したがって静岡県も明治四年十一月十五日をもって、駿河を管轄する静岡県と、遠州を管轄する浜松県に二分されたのである。

浜松県の初代県令には、林厚徳が任命された。

明善は明治五年一月十二日に、浜松県から「堤防方附属」に任命された。

また明善は明治五年二月に、静岡藩のときと同じように、毎年、千両を堤防費用として献金することを願い出た。そして二月二十七日にそれは認可された。その表彰として、

（三ツ組銀盃一組）

が下賜され、同時に、

（等外准三等第五十六区戸長）

を命じられた（このときの戸長は、後の大区、小区の戸長ではなく、戸籍吏であった）。

さらに明善は明治五年十月に、浜松県から

（天龍川御普請専務）

を申しつけられ、手当として一カ月、六円を下賜されることになった。

その御普請専務の手初めとして、明善は明治五年十月に、浜松県から鹿島村の支川締切り工事を命ぜられた。しかしこの計画は、工事費が巨額となったため、政府の許可が得られなかった。

また引きつづき明善は浜松県から、天龍川を分流して、その水を浜名湖へ注ぐ運河の建設を命じられた。

その運河建設の内容は、天龍川を二俣付近で締め切って、川床であった土地を開墾する、そして浜名湖へ注ぐ新運河を天龍川に代えようとする、雄大な「転川」計画であった。

しかし測量してみると、これもまた巨額な工事費用を要するため、本省の許可を得ることができなかった。

しかしこの運河建設の構想は、後日、明善が推進する

「金原疏水財団の疏水建設計画」の原型ともいうべきものであった。したがって浜松県から命ぜられたといっても、実体は明善の献策によるものだったのである。そして計画は、たんに天龍川の治水だけでなく、遠州の西部地方全体の経済開発を解決しようという、総合的国土開発ともいうべきスケールの大きなものだったのである。

このように二つの治水計画は、費用の点から無理で、残念なから実現しなかった。

また明治六年には、天竜川東支川の締切り工事が計画された。

この東支川とは、当時は天龍東河と呼ばれ、今の東海線の天龍川に鉄橋の下方から東へ分岐して、掛塚港の東側に流出している支流で、幕政時代から掛塚港への水路として利用されていた。そしてこの支流と本流との間に、掛塚輪中があった。

そして明治元年の明善の実施調査によって、分岐点での締切りが計画されたのである。

その理由は、川の分流による水勢の衰えから、この分岐点が土砂の堆積地になってしまい、そのため増水時に水をここで堰止めてしまう。それが上流での堤防決潰の原因になるのだった。

しかし明治元年の時には実現されず、明治六年になって、ふたたび明善の意見によって計画されたのである。

そこで県庁から石黒参事、福永典事、花井土木課長などの幹部が、明善といっしょに、実地検分に訪れた。そして実地検分を終えて、一貫地村（現磐田郡豊岡村一貫地）の大箸家に宿泊した。

大箸家は東岸水防に尽力している富豪酒造家として知られた家だった。県からの役人の宿泊のため、大箸家への人の出入りもはげしく、屋敷内の部屋部屋からはにぎやかな明るい灯光が、広い庭の木々の間に流れていた。

明善は、今夜の石黒参事たちの出張は、長い間の具申の重要性が認められたのだと、心ひそかに喜んでいた。

ところが、その夜一同が就寝して間もない頃、ある騒動が起きたのである。

というのは、掛塚村の村民は、

（この締切工事は、掛塚港への水路の閉鎖であり、掛塚村民の死活問題である）

と、反対していたからであった。そのため、この日の実地検分のことを知って、激昂した掛塚村民が大勢、（金原家を焼打ちしようと、押しよせようとしている）という急報が、明善のところに届いたのである。そのため大箸家に泊まっていた明善は心配のあまり、一睡もできなかった。

しかし幸い、村民たちは途中で引き返したため、金原家は無事助った。

しかしこのような騒動のため、これ以上村民を刺戟してはまずいということで、折角の天竜川東支流の締切り工事は取り止めとなってしまった。

このように切角の治水計画も次々と駄目になってしまうのだったが、しかし明善はそれにくじけずに、

（予防水患策序）

という、半紙二ツ折り五枚で、木版刷りのパンフレットを作成して、県内にひろく配布した。

その内容は、まず河川が人間に与える利害を説き、次いで天龍川の洪水、とくに明治元年五月の大洪水の悲惨であったことを述べ、

（天龍川の大洪水の災害を永久になくすための事業には、皆が心を一致して当らなくては出来ない）

と、天龍川の治水のためには、河岸住民が団結することの必要性を説いたのである。明善の頭の中には、広く民衆の出資に支えられた治水団体を組織しようという構想が浮かんでいたからであった。

（治水工事は官に頼るだけでは駄目だ、自分たちの手でやらなければ成功しない）

という思いが、明善の中で次第に高まってきたからである。

明治元年の洪水以後、明善は藩や県を動かして天龍川の治水に尽力してきた。しかし藩や県の治水工事は、財政難のために一時的な応急工事にすぎず、抜本的な治水工事ではなかった。この頃は明治新政府への過渡期であったので、朝令暮改で行政区画は短時日のうちに変更され、それにともなって担当の官吏の更迭が相次ぎ、その度ごとに治水計画や工事は、変更または中止されてしまうからだった。こうした体験の中から明善は、

（官に頼っているだけでは、自分たちが描く永久的な治水計画は実現できないだろう。実現するためには、志ある同志を集めて、組織上も、財政上も、自由に活動できる共同事業を起し、治水計画を遂行する以外にない）

と思い至ったのだった。

この頃の明善に一つのエピソードがある。

明治六年に地租改正条例が公布され、物納が金納に代った。そのため税金の額を、石高から金高に換算するという、面倒な手続きが必要になってきた。

明善は安間村の名主を勤めるかたわら、明治六年二月には学区取締、第一大区小区区長などを命ぜられ、つづいて明治六年十一月には、資産金御用掛および開墾御用掛を命ぜられた。また十二月には三方ヶ原百里園副園長を命ぜられるなど、公務を次々に命ぜられ、多忙になってきていた。

明治七年になると明善は地租改正惣代人を命ぜられた。明善は四十三歳になっていた。

そのため明善は浜松県庁へ出頭して、長期間、その仕事に従うことになった。

明善といっしょに出張していた他のメンバーは、公用であり、また出張旅費があるので、浜松の高級旅館に泊り、定宿とした。しかし明善はできるだけ倹約しようと、甲斐屋という旅人宿に、宿賃を安く掛合って、定宿とした。

宿屋の方では、宿賃を値切られた上に、粗末な服装や下駄の恰好を見て、

「どこの貧乏おやじか」

と思い、部屋も食膳も下等な待遇をした。そして風呂も、家族や女中までもが済ました後で、

「お湯があきました」

と知らせにくる有様だった。しかし明善は平気な顔で、

「ありがとう」

と入浴した。すると、二、三日すると、女中が、

「風呂が終った後は、そのお湯を落しておいてください」

と頼むのだった。すると明善はこれも平気で、

「はい、はい」

と、お湯を落し、さらに空になった湯槽まで、きれいに洗ってやった。

やがて地租換算の仕事がほぼ終ったので、安間村から主要な人々が二、三人、明善のところに訪ねてきて、丁寧にそのお礼をのべた。宿屋の主人は、その訪問客の明善にたいする態度が丁重なことを不審に思って、ひそかに聞いてみると、

(安間村の金原明善さま)

とわかり、驚きあわてて、

「どうぞ、あちらの部屋があきましたから」

と、急に上等な部屋へ移された。

そして、その夜は風呂も第一番に、

「どうぞ、お風呂へ」

と案内された。明善は、

「今夜はすこし時間が早いな」

と思いながら入浴した。そして入浴が終ると、毎夜のごとく、湯水を落し、湯槽をきれいに洗って、部屋へ戻った。

今夜はまだ、誰も他の者が入っていない湯を落されてしまって、

「おやおや、これは大変だ」

と、大いに困ったということであった。

第八章　治河協力社の設立

(一)　天龍川通堤防会社の設立

廃藩置県の実施を境に、日本は近代的統一国家としての諸制を次々と充実させていったが、それと並行して浜松県においても、行政組織に次々と新制度が施行されていった。

それにともない明善は、明治元年の大洪水以来、遠州一円にその名が知られ、明善の天龍川治水に関する情熱と、知識と経験、企画能力は、浜松県からの信頼がますます厚く、また人々からも熱い信頼が寄せられていたので、治水だけでなく、いろいろな方面の公職をつとめることになった。

明善は明治六年二月に、

(天龍川通総取締)

を命ぜられた。明善が四十二歳のときであった(したがって、これまでに任命されていた、堤防掛付属と御普請専務の役は取り止めとなった)。

明善は天龍川通総取締に命ぜられると、水防施設点検のために、天龍川沿岸の村々を巡回した。

が、そのときは必ず「予防水患策序」のパンフレットを持って歩いて配布し、治水の「民間協力による共同事業化の必要性」を説き、同志の組織化を訴えた。

しかし、当時の沿岸の農民の治水に対する意識はまだ低く、明善の真意はなかなか伝わらなかった。また共同事業のために共同出資してほしいという願いについては、なかなか納得してもらえなかった。

しかし意志の強固な明善は、根気よく共同事業化の必要性を説得してやまなかった。

そして一年以上つづいたたゆみない明善の努力がやっと実って、沿岸住民の同意をとりつけることが出来、村々からの拠出金も三万四千円も集めることが出来た。そして明治七年(一八七四)六月に、明善の念願としていた民間共同事業である、

(天龍川通堤防会社)

の設立を浜松県庁に出願して、許可を受けた。明善はその社長に任命され、副社長は横田降平、幹事には石津松太郎が就任した。

しかしこの堤防会社は、会社といっても、堤防工事によって利益をあげようという、営利を目的とした一般の土建会社ではなかった。天龍川の治水事業を遂行する、公共事業を目的としたものであった。そのために浜松県からの補助金や一般の犠損金をも受けることができたのである。そのために県の特別許可により設立され、社長も県から任命されたのである。すなわち資金を県から補助を受け、工事や会計が県から厳重な監督の下に置か

れている、いわば特殊法人であった。現代の用語で表現すれば『天竜川治水公団』とでも呼べば適切かと思われる。

明善はこの堤防会社の設立についての考え方を、次のように述べている。

会社を大別すると二種類ある。

その一つは、他を利すると同時に、自分にも利益となる事業をやる会社である。すなわち免許工事のようなものをいう。

もう一つは、自分の利益は捨てて、ただ他の利益となる事業をやる会社である。すなわち慈恵会社のようなものをいう。

そしてこの二者は、その方法と目的が違っているから、これを行う困難さでは、天と地ほどの差がある。

すなわち前者では、他を利するの大義名分があり、また自分の利益にもなるという実益があるから、これに応ずる者が多く、したがって成功しやすい。

しかし後者はこれに対して、他の利益にはなるのだが、自分の利益にはならないのである。正に『自分の身を殺して、仁をなすの志』のある者でなくては、これに応じないであろう。だからその成功の困難さは思うべきである。

このように述べ、天龍川通堤防会社がこの後者、すなわち慈恵会社であることを説いたのである。

この天龍川通堤防会社の事業目的を一口で言えば、天龍川の治水、利水事業であるが、その構想を史料から見ると、次の五点に要約された。

一、富田、池田間を標準の川幅（川幅八丁）に一定し、二俣、掛塚間を直流させて、河川の蛇行による堤防破壊の災害を除く。

二、右の目的を完成させるために、掛塚東川を分岐点で〆切り、土砂の堆積を除去すると同時に、分流による水勢の衰えを除く。

三、川幅を一定にして、しかも洪水の難を避けるために、鹿嶋村地先で、天龍川を西方に分流して、浜名湖へ通し、これと同時に運輸水利の便をも図る。

四、これらの計画を実施するとともに、河口付近における凌渫作業によって、直流排水を助ける。

五、以上の計画を二十五カ年間かけて実現するとともに、二俣、掛塚間の二十六キロメートルの堤防を堅牢無比の直流畳式の築堤に仕上げること。

という、遠大、雄大な、天龍川の総合開発ともいえるものであった。

すなわち天龍川を、鹿島村（浜松市天竜二俣）から分岐して、浜名湖へ通ずる新河川を開き、今後はこれを主要な輸送路とする。

これまで天龍本流は、池田・富田間の川幅（八町）を標準とした、直流石畳式堤防に改める（いわゆる八丁普請）。

すなわち、鹿島村（浜松市天竜二俣）から竜洋町掛塚港の河口にいたる六里あまりの川幅を八町に一定にする。そして堤防は、両岸に岩石を積み上げる堅固な堤防を二万間、新たに構築して、水勢の安定をはかることによって、度重なる水害の原因となっている川幅の狭いところを除去しようというものである。また、河口においては、浚渫作業を実施し、これによって蛇行した流路から生ずる堤防破壊の危険を除くことを計画したのであった。

これを要約すれば、

○天龍川の直流、
○堤防の岩積法による構築
○天龍川を浜名湖へ分流する

の三点である。

これを二十五年の継続事業として完成させようという、規模壮大な計画であった。

（二）治河協力社へ改組

堤防会社が設立された翌年（明治八年）の四月に、堤防会社は

（治河協力社）

と改称された。これは内部組織を拡大し、社長の上に総裁を置いて、より多くの社員を加盟させようとしたもので、役員は、

総裁　金原明善
社長　横田降平
副社長　熊谷三郎馬
幹事　中村熊蔵

という構成であった。

事務所としては、堤防会社が当初から使用していた、中野町村堤防上の旧幕府普請役詰所を、引きつづき使用することにした。

しかし問題なのは、名称を改正したのはいいが、会社創立の時に約束した出資金がなかなか集まらず、設立早々に、治河協力社の存続が危いという窮状に追いこまれてしまったことであった。

その明治八年に、静岡県と浜松県が合併して、静岡県となった。そして翌年（明治九年）にはじめて開かれた県会に、明善は議員として選ばれた。遠州選出の公選議員の中には、明善のほかに、気賀半十郎、平野又十郎、

寺田彦八郎、丸尾文六、岡田良一郎、熊谷三郎馬、松島吉平、小野田松一郎などがいた。

そこで明善は、明治十年の一月にこの議員の中で天龍川流域の大区から選出された人々に、

（治河協力社の中に水防委員会を作り、これに天龍川改修計画を協議させて、流域村民よりの資金據出がしやすくなる）

ようにはかったが、やはりうまくいかなかった。

さらに資金面の困難は、明治十年二月の西南戦争の勃発によって、内務省が天龍川改修費の大削減を行ったために、さらに困難になった。

この内務省の予算削減は、天龍川沿岸住民に疑念を抱かせて、ますます資金は枯渇するばかりであり、明善の天龍川治水の大願も、虚しく夢となるばかりであった。

（三）金原家財産の献納

このようにして天龍川治水の明善の事業遂行はますます困難になってきたが、しかし明善の意志はくじけなかった。

これまで明善は治河協力社の総裁であったが、明治十年三月に、その総裁のポストを廃止した。そして明善が社長に就任した。明善は四十六歳になっていた。

それは組織の肥大化を防いで、筋肉質化し、明善の意思が実行しやすいような組織にすることによって、明善の事業への決意の強さを表明するためであった。

事業資金が困窮し、事業の推進が困難になればなるほど、明善の闘志は燃えていった。

明善は非常手段に訴えてでも、天龍川治水百年の計を、実現しようと決意した。

すなわち、資金がなければ、金原家の全財産を天龍川治水事業に提供しようとしたのであった。すなわち明善は、

（金原家の祖先伝来の全財産を、天龍川の工事費として国に献納して、明善の天龍川治水への誠意を披瀝する。その代わり、政府からはこれから二十年間、毎年二万三千円の金を下付をしてもらう。そして天龍川の工事一切を治河協力社に委任してもらう）

そういう願いを明善は、静岡県へではまだるっこしいので、政府へ直接、直訴しようと決意した。

これが江戸時代であったら、さしずめ佐倉惣五郎の江戸での、将軍への駕籠訴が想像される場面である。

この年、明治十年は八月から東京上野で第一回内国勧業博覧会が行われていた。

そこで四十六歳になった明善は、この博覧会見物を理由にして、明治十年十二月に政府へ直訴のために上京した。ちょうど妻の玉城は妊娠中であったが、妻も同伴し、

（もし直訴が聞き届けられないときは、ふたたび生きては国へ帰らない）

という、悲壮な決意を抱いての上京であった。

明善はまず川村正平という官吏を訪れ、決意を語り、協力を求めた。川村正平はこの明治十年五月ごろ、政府から民情視察を命ぜられて浜松地方の巡回中に、明善と知りあった官吏だった。

川村正平は、さっそく明善を、宮内侍補の土方久元に紹介した。

土方久元は、吉井友実をして、時の内務卿の大久保利通に、明善のことを披露させた。

ほかならぬ土方久元の口添えであるので、大久保利通は面会を承諾し、明治十年十二月二十六日の午前中、明善は、霞ヶ関の官舎に出頭して、大久保利通に対面した。

一介の田舎農民が大久保内務卿に謁見するなどということは、想像も及ばないことであった。しかし明善は快く大久保卿への謁見を許されたのである。これは大久保卿に近い土方久元や川村正平の口添えがあったこともあろうが、しかし一方、明善が十余年の間天龍川の治水工事に奔走している誠実一途な篤志家であることが、すでに大久保利通の耳にも入っていたからであった。

明善は大久保利通に、天龍川治水の顛末と、

（金原家の財産一切を工事費に提供する）

という真情を、誠意をもって吐露した。

大久保利通も、ついに明善の熱意と誠意に動かされ、明善の訴えに同意を示してくれた。

その翌日（明治十年十二月二十七日）、明善は、上京中の大迫静岡県令に呼ばれた。そこで明善は、大久保利通との交渉を詳細に報告した。これに対して大迫県令は、

（今後のことは、手紙の順序を経て願い出るように）

と指示した。

そこで明善は全財産を整理して献納出願するために、妻の玉城を東京に残し、明治十年十二月二十八日の朝、急ぎ帰国した。明善はこの時のことを、

（明善が多年の願いがはじめて貫徹できる端緒を得ることができ、この喜びは実に言葉に言い現せないものがある）

と、その喜びをのべている。

川村正平は中込にある二条家の邸内にある家へ住んでいたが、明善は上京のときはその川村の家の一室（四畳間）を借りて住んでいた。だから妊娠中の妻の玉城は、明善が帰国しても、その四畳一室の仮の宿で不便な日々を送っていた。（翌年明治十一年五月二十六日に三男が生まれ、有慶と名前がつけられたが、早世であったので、金原家の戸籍簿には記載されていない）。

帰国した明善は、金原家の財産を全部売却する準備に

着手した。

そして年を越して明治十一年に入ると、所有の山林、田畑のいっさい、それに家屋、家具の一切を売却して、六万三千五百十六円の金を用意することが出来た。すなわち明善は四十七歳にして、先祖伝来伝わっている金原家の資産全部を、天龍川治水のために売却して、身体一つになったのである。

この金原家財産の売却については詳細な記録が残っているが、その大要は次のようであった。

田畑　六五町五反	二九、三一八円
茶畑	一、四五〇円
山林	三、一一〇円
酒造建物ほか	三、七九三円
屋敷建物ほか	一、一八八円
家具	九六五円
他村にある建物	二六五円
貸付金	二三、四二五円
合計	六三、五一六円

この時は一本の錐でも、一箇の茶碗でも、日常生活に最小限に必要なものは残して、すべて換金するといった徹底ぶりであった。

しかしすぐ換金といっても、安間村の村内に持っている二十数町歩に及ぶ田畑や、数千坪の屋敷や建物、国吉村にある酒醸造販売所などは即売が出来なかったので、時価に見積り抵当に入れて、借入した金を差出したのであった。

財産の換金が終ると、明善は明治十一年三月に、静岡県令大迫貞清に家産献納の願書を提出した。それは長大な文章であるが、その要点は次のようである。

私が所有する財産をすべて官に献納いたしますから、これを治河協力社にお下げわたし願いたい。そして天龍川堤防を永久不朽になるような方法を確立いたしたい。

なおこのために、官から治河協力社へ、毎年、二万三千円ずつ、今後二十年の間、工事費としてお下げ渡し下されることを、お願いいたします。

これからは毎年、つねに実地に天龍川の水勢を調べ、疏導法「ケレープ」などを行い、堤防を修築いたします。そして二十年の後は、官費は一切必要ないというようにいたします。

なお同時に、天龍川の橋につきましても、永久に治河協力社にお任せ下さるようにお願いいたします。

このような明善の願いに対し、静岡県は明治十一年六月十七日にこれを聞き届け、次のような指示を明善に与えた。

（申し出の家産献納はこれを許可し、治河協力社へ下げ渡すこととする。ただし、このうち銀行株券の五千円は金原家子孫保続のために、そして、さらに二千五百円は明善夫妻の生活費や長男の家業の資金として必要であろうから、この合計七千五百円を差引いた五万六千十六円を、治水工事費として治河協力社に下げ渡すこととする。

なお、県庁より補助金は毎年二万三千円を十年間下げ渡すこととする）

以上のような内容であった。

申請した県からの補助金の期限が二十年から十年間に短縮されたり、工事委任が工事請負いに変更されたり、その他天龍橋に関する事項も聞き届けられなかったなどの点はあったが、とにかく明善の宿願がはじめて達成されたわけで、明善は前途に光明が開く思いであった。とくに年額二万三千円の補助金が聞き届けられたことは、創立以来財政に悩み、事業遂行にも支障の多かった治河協力社としては、何よりの収穫であった。

金原家財産の治河協力社への受渡しは、明治十一年八月二十七日であった。

すなわち、家財道具いっさいを競売し、また遠隔地にある山林、茶畑、田畑なども売却し、その売却代金や地代に、貸している金の回収金などを加えて、すべて現金で提出した。また安間村の中にある土地家屋は、抵当として引渡したのである。

そしてこれを機会に、明善一家は家屋を明け渡した。そして天龍河の堤の上に小屋を作って、そこへ転居した。

こうして明善はこれから約十年ほどを、天龍川の堤の上の小屋（通称川納屋）で、苦渋の生活を送るのであった。

なお、明善の長男の明徳（二十三歳）は、下渡金の内金一千円を資金にして、金原家旧宅（その時点では供出したから治河協力社の所有になっていた）を借用して、質業を継続した。なお番頭は、これも供出により治河協力社の所有になっている、酒醸造販売器具や家屋を借用して、これまで通り酒屋業を営んだ。

（つづく）

伊豆の歯科医業の祖（その二）

堀内永代

五

建司が暴漢に襲われた翌年、許嫁の佳代は十六歳になった。若い女性の華やかさと聡明さ、淑やかさが匂い立ち、その美しさは奥伊豆小町といわれるほどだった。

明治二十四年七月十四日、松崎では瀬崎稲荷の天王祭が賑やかに行なわれていた。祭りの日の夕方、佳代は左の頤（おとがい）に激しい傷みを感じた。時間の経つにつれて傷みはますます昂じて、祭り料理を食べられる状態ではなかった。夜も更（ふ）けて医者に行くこともできずに床に就いた。あまりの痛さにまんじりともしないまま夜が明けた。翌朝の佳代は、お多福風のように顔全体が赤く腫れあがり、高熱と激痛で半死半生の状態であった。驚いた養母のふじは、

「番頭さん、佳代が大変よ……すぐに中道先生に往診をお願いしておくれ。東京にもすぐ電報を出しておくれ、早くだよ……」

「ヘイ……」

番頭の松吉は、半纏を脱ぎ捨てて一目散に中道医院に駈けた。中道医院は西伊豆地域に一軒しかない診療所で、医師は往診して留守のことが多かった。

「中道先生お宅に居てください。延命地蔵さま、お嬢さんをお助けください……」

松吉は、日頃信仰している無縁堂の延命地蔵尊を念じ、太くて短い足で懸命に駈けた。

幸い中道医師は在宅で、松吉から佳代の容態のあらましを聞いたが、気が動転している松吉の説明では、あまり要領をえなかった。とりあえず解熱剤と鎮痛剤などを取り揃えて往診カバンに詰め込み、松崎に一台しかない舶来の自転車ラージに乗って駆け着けた。

佳代は骨が砕けるような激痛と高熱のためうなされ、うわ言を云っていた。

「けんじにいさん、たすけて……」

ふじは驚いた。佳代はうわ言で建司を呼んだのだ。たった一度だけだったが、ふじにははっきり聞こえた。

佳代は、一ヶ月ほど前から左下の奥歯が痛み、房楊枝で歯を磨いていたようだった。その時点で歯科医師か口科医師の診察を受けていれば、こんなことにはならなかっただろうに、医師がいないばかりに大変なことになってしまった。

中道医師は、発熱、紫斑、口中の出血、貧血、骨の痛みの症状から、左下第二臼歯の歯肉が炎症して歯髄を侵し、菌が骨髄に入って急性白血病を併発したと診断した。この当時の医学では手の施しようがない病気であった。

六

中道医師が診察した翌日の早朝、建司の許に電報が届いた。

「カヨ、タイビョウ、スグカエレ、フジ」

なに、佳代が大病だと。どうしたのか。四月に上京するときは、あんなに元気でオレを松崎の桟橋まで見送ってくれた佳代が大病とは、いったいどうしたことだろう。建司には全く思い当たることがなかった。

建司は身支度もそこそこに、東京駅から東海道線に乗って沼津駅で下車し、狩野川の川口近くの船着場から大瀬崎経由松崎港行きの貨客船に乗船した。松崎に着いた時は、夏の日が暮れて、辺りはすっかり暗くなっていた。

建司の到着を、今や遅しと待っていた会津屋の人たちは、やや愁眉を開いた。

「建司さんが帰ってきた。建司さんは治療に詳しい、きっと佳代さまの病気を治してくれる……」

会津屋の人たちは建司の医学知識が頼りであった。建司は、十七歳まで掛川の親元で、国学・儒学・外国語と共に医学も学び、父・兄の診察や往診の助手を務めながら臨床医学を学んだ。特に、父の産科、兄の外科を熱心に学んだ。それに加えて、東京の下宿が薬種問屋であったので、薬の知識も自然に身に付いた。

建司は養母ふじを始め、店の人たちから佳代の容態を聞き、また中道先生の診断結果も聞かされ、自身も手探りながら診察してあることを予見した。急性白血病では余命はいくばくもない。

白血病は、白血球がどんどん増える替わりに、正常な血液が少なくなり、血液が固まらず、出血が止まらなくなる原因不明の病気で、血液のがんともいわれている。特に骨髄性の急性白血病は、当時の医学では治療方法のない病気であった。

始めは風邪に似た症状だが、やがて関節痛がでたり、身体全体の骨が痛くなってくる。虫歯ぐらいと思って油断しているうちに、恐ろしい病気が併発する。

伊豆は田舎で、松崎には中道医師が一人だけだ。手術できる医師はいないし、手術の設備もない。特に歯科医学を学んだ人は、伊豆半島には一人もいない。だから歯の治療を受けることはできなかったのだ。虫歯になれば自然治癒を待つばかりだ。その間の苦痛は筆舌につくし難い。

佳代の急性白血病も元はといえば、歯の病気から発している。もっと早く歯の治療をしていれば、こんなに悪い病気にならなかった筈だ。オレが一緒にいれば、佳代を救えたかも知れない。佳代は可哀相だが、今のオレにはどうすることもできない。せめてコカインでも持ってきていれば、痛みを少しは和らげるてやることができたかも知れない。建司は、自分の間抜けさに腹が立った。

自分は医師の家庭に生まれながら、政治家を志して東京に行ったばかりに、佳代を苦しい目に遭わせてしまった。今となってはどうすることもできない。看病に全力を尽くそう。そう心に決めた建司は、佳代の枕元に座って不眠不休で看病に当った。

発病してから五日が経過した。高熱と激痛のため水も飲めない佳代は、すっかり憔悴し、意識も混濁の状態であった。六日目の夕刻、佳代の容態はやや落着き、一同をほっとさせた。佳代は病床の周りで心配して自分を見つめている、ふじ、建司、番頭の松吉、女中のおよねの顔をゆっくり見回した。やがて、小さな声ながらしっかりした口調で、

「お母さま、建司兄さん、松吉っさん、およねさん……みなさんありがとう。もうすぐお別れになります……」

「なにを言うのです。佳代、しっかりするのです」

「わたしには、これから自分がどうなるか分るのです……」

「……」

「建司兄さん……わたし、建司兄さんのお嫁さんになりたかったの……わたしの最後のわがままを聞いてね……わたしの手を握って……」

佳代は熱が引いて冷たくなった白い手を、建司の方へそっと伸ばした。

「よし……さあもっと手を伸ばしてごらん……」

「建司兄さんの手は暖かいわ……わたしが目を閉じるまでこうしていてね……」

「分った、だからしかりしろよ……熱も下がったし、痛みも治まってきた。もうすぐ治る」

「建司兄さんありがとう……これでわたしは兄さんのお嫁さんになれたのね。嬉しかった。もうなにも思い残すことないわ……お母さま、十六年間育ててくださってありがとう、松吉っさん、およねさんありがとう」

佳代はかすかに微笑んだと思う間もなく、建司に手を取られたまま静かにまぶたを閉じた。

「佳代、佳代、しっかりしなさい……」

「……」

たった一週間病んだだけで佳代は十六年の短い生涯を終えた。

あまりにもはかない一生であった。

会津屋の佳代が突然死した。この話はたちまち奥伊豆一円に流れた。伊豆西海岸の松崎港や、東海岸の下田港には時々蒸気貨客船が寄港して、珍しい情報が伝えられるが、奥伊豆が陸の孤島であることには変わりはない。村人たちは退屈で、村の話題になる事件の発生を待ち望んでいた。そんな時に奥伊豆きっての素封家、会津屋の跡取娘佳代の突然死である。婿になる筈の諸井建司は、東京大学卒業の法学士、そのうえ伊豆の三四郎と異名を取った柔道家、今流で云えば有名人である。佳代の死は恰好な話題だ。村人たちの間では、

「大身代でも娘の命は救えなかった」

と噂し、さらにこれに尾鰭がついて、

「会津屋は治療代を出し渋って娘を殺した」

と悪口を言い触らす者もいた。裕福な会津屋を羨む者のやっかみであろう。しかし、ふじと建司にはどうすることもできなかった。

満中陰の法事が済んでも、建司は東京に行く様子を見せなかった。佳代が死んだのは自分のせいだと一身に自分を責めた。

それから建司は、次の事を計画した。

「そうだ、オレは医者でもないし、歯医者でもない。しかし、掛川の父や兄から教えられた医学の知識と技術がある。知識と技術があれば歯科の開業資格が無くても、歯痛で苦しむ人々を救うことができる。資格は時期をみて取ればよい。歯科医業を開業しよう」

そう決断した建司は、早速準備に取り掛かった。

七

それから数日後、建司は、養母ふじと歯科医業開業の資金などについて充分話合いをした。幸いなことに、会津屋は江戸時代から続いてきた廻船問屋の暖簾と財産がある。歯科医業を開業する資金にこと欠くようなことはない。このことが建司の計画実現に、大いに役立った。

早速上京した建司は、かねてより世話になっている日本橋の薬種問屋「大阪屋医薬材料店」の主人長谷川泰造に、自分の出目、生家における口科医術の修業、会津屋の養子になった経緯、許嫁佳代の急死、伊豆地方の歯科医療の現状と住民の困窮など、ことの経過を説明して援助を要請した。

店主の長谷川は、建司の申し出を快諾して援助を約束してくれた。明治二十五年三月のことであった。

当時の日本には、歯科医師国家試験はなく、明治十七年に初めて歯科開業試験が行なわれたに過ぎなかった。その後、第一回の歯科医師試験が行なわれたのは、それ

から十年後の明治二十七年（一八九四年）のことであった。

十八世紀頃西洋には歯科医師がおらず、理髪師が歯科治療を行なっていた。江戸時代には、幕府の口科医師が歯科治療を行い、その門下生が市井の患者の治療を行なっていた。ちょっといかさま気味ではあるが、器用な大道芸人が見世物をやりながら抜歯をしたことが記録に残っている。

幕末から明治時代になって外国人医師が来日して日本に歯科医学を伝え、幾人かの日本人医師がその弟子となり、歯科技術を修得して歯科医を開業。希望者には内弟子として歯科医術を教える程度で、歯科医師制度は確立していなかった。

したがって、この時代に伊豆の片田舎で無資格者が歯科医業を開業しても、特に異議を唱える人はいなかった。

建司は、日本橋の大阪屋医薬材料店の好意で、最新鋭の歯科機器や薬品など多数購入して会津屋に帰ってきた。

この当時の医療機器や薬品は、ほとんどが舶来品で高額であった。資力のある会津屋ならばこそできた歯科医業の開業である。

当面の診療室は、会津屋の帳場に続いた十二坪の板の間を当て、東京から送られてきた歯科医療機器、薬品、木製の治療椅子などを並べた。

準備が整って、伊豆で最初の歯科医院「諸井歯科診療所」が開業された。佳代が死んでから二年後の明治二十六年八月二十二日、建司二十八歳の時であった。話題の少ない奥伊豆のこととて、会津屋で歯科医院を開業したという話は、瞬く間に伊豆に広まったが、患者はなかなか来なかった。

開店休業状態の日が続き、建司を始め、ふじ、松吉、よねたちはしびれをきらしていた。開業から十日後の早朝、意外な人物が諸井歯科診療所の玄関に立った。

「諸井先生、お願い致します。岩科村の中村頼三です。歯を治療していただきたい」

と大声で案内を乞うた。岩科村は松崎村に隣接する西伊豆の有力村。中村頼三は村長で、二宮尊徳の教えを守って岩科報徳社を設立して社長となった人物である。中村は自ら率先して勤倹力行を実践、村人たちと共同で山林事業を起こし、さらに各種の農産品を積極的に生産販売して実績を上げている。奥伊豆では、誰一人知らぬ人がないほどの有力者である。その中村が諸井歯科診療所の患者第一号となった。

「村長さん、お待たせしました。さぁ、さぁ、どうぞお入りください」

建司は、中村村長を治療室に通した。

「村長さん、こんなに朝早くどうなさいました……そういえば、右の頬が少し腫れていますね。痛みますか……」

中村の風貌は、日焼けして頑健そのものであったが、今朝は憔悴の様子が色濃く顔に表われていた。

「先生、右の奥歯が痛みます。昨夜は痛くて一睡もできませんでした。以前よりむしかめ（虫歯のこと）ができて、食べ物が歯に詰って厄介でしたが、昨日の昼過ぎからそこが痛み出し、夜になると、ズキズキとうずいて眠れませんでした。とはいうものの伊豆には歯医者はおりませんし、夜が明け次第舟を出してもらって沼津の歯医者さんのところへ行こうと思っていました。その時、会津屋の諸井先生が歯科診療所を始められたことを思い出し、夜明けを待ちかねてやって来たという訳です」

「ズキズキと疼くような痛みを、拍動性疼痛といいますが、よく我慢しましたね。それでは患部を見ましょう」

「先生、正直なことを申し上げますと、大変失礼ですが、先生は開業したばかりですから、少々不安がないわけではありません。しかし、どんな名医でも、始めから名医だった訳ではなく、経験を積んで一人前のお医者さんになっていくわけですから、自分が口開けの患者になれば、ほかの人も安心して治療してもらいに来るだろうと思って参りました。みんな歯科医院のできるのを待っていたのですから」

「いろいろご配慮していただいて、ありがとうございます」

「ところで、歯の治療は痛いと聞いていますが、覚悟はできています。痛いのは我慢します。先生、思い切って歯抜きでも何でもやって、早く治してください」

「村長さん、ありがとうございます。私も遠州の実家で口科医術を習いました。抜歯もやりました。開業するについて、東京で三ヶ月間ではありますが、アメリカ留学を終えた高山紀斎先生が開校された高山歯科医学院で、歯牙充填や抜歯などの新しい医術を学んできました。村長さんの私に対する思いやりのお言葉にお応えするよう、初仕事を精一杯やらせていただきます」

建司は、中村を木製の治療椅子に掛けさせて治療を始めた。心配したとおり右下第二大臼歯が虫歯となり、歯髄の化膿が進行して抜歯する以外に方法がない症状であった。建司は中村にその旨を説明して抜歯の準備をした。

抜歯は激痛が伴うため、クロロフォルムを使う全身麻酔を考えたが、この程度の抜歯ならばその必要はないと判断し、コカインで局所麻酔して抜歯することにした。

開業直後の諸井歯科診療所には、まだ助手がいなかったため、急きょ会津屋の番頭松吉と手代一人を臨時の助手にして、治療をおこなった。幸いにして、コカインを少量使用しただけであったが、村長の我慢強さもあって抜歯が終り、術後の化膿止めの処置をし、血止めにゼラチンを詰めて治療は終了した。

中村村長は、抜歯の治療代として一円を奮発し、小休憩した後、麻酔が残っている頬をいたわりながら岩科村の自宅へ帰った。

中村村長の支払った一円の治療代は、建司の歯科医業における最初の収入であった。

ちなみに、米一俵の値段は三円五〇銭。米一俵は五人家族の一ヶ月分の食糧であり、商店の手代の賃金が月額二円程度であったから、一円の歯科治療代は、庶民にとっては高額であり、安易に治療を受けられなかった。

建司は、治療費をどれほどするか大いに悩んだ。抜歯代一円は、都会においては特に高額な治療費ではないが、奥伊豆のように、現金収入のない片田舎では大変な金額である。治療費の工面がつかないために、歯科治療が受けられないのであっては、歯痛の苦しみから村人を救済したいという理想は無になってしまう。それでは歯科医業を開業した意味がない。治療費は、患者の支払える金額でよいことにしよう。すぐに払えない人は割賦支払いでもよい。支払可能な無理のない金額を貰えばいいではないか。それが「医は仁術なり」である。建司はそのように堅く心に決めて、その旨を、ふじや松吉に伝えた。

やがて中村頼三の抜歯が成功した話が奥伊豆に広まって、少しずつ患者が増えてきた。



荒川慕情

—小台の渡し—

大和禎人

近ごろのある朝のニュースにこんな話題があった。

あるマンションの住人にまつわる訴訟で、隅田川の花火が見えるという期待で、北向きの不利を承知の上購入したが、入居後、幾許もなく同じ建設会社が隣接敷地にその眺望を遮るマンションを建設したため、折角の眺望を妨げられたとあって訴訟の結果、裁判所は慰謝料四十万円を会社側に支払うよう粋な判断を下したという挿話だ。

隅田の花火は江戸期いらい両国の川開きに催された庶民の楽しみとした風物であり、少年期を東京本郷に過ごしている私なぞもその頃の町並み事情で、遠く二階からはるかに望見できた情緒で、トン、パァー、ワァー、擬音を口にはやしたて、夏の景物を楽しんだことだった。

荒川の流れは滔々として流れ、その末を隅田川と呼んだ。荒川と隅田川の呼称の境界は格別の定めがあるようで実は曖昧、仮初めのものぐらいに考えていた。

ここで荒川にまつわり近ごろの話になるのだが、旅行作家の伊佐九三四郎氏の話を引き合いに荒川について少しく懐旧談におよびたいと思う。氏はすでに斯界に十分の実績を積んでいて、「山渓」と略称して呼ぶ「山と渓谷社」ほかにこれまで多くの著作を世に問い、歴史散歩モノの領域ではとくに「幻の人車鉄道」森林書房刊行などの労著を世に問うなど、斯界に重きをなす作家だが、今度は荒川の歴史をたどろうとてスケジュールの手初めに源流をたどり滝壺に足を滑らせて落ちたなぞの近況を聞いた。彼の仕事はさように実証を重んじる労作を積むもので、内外に足跡を印し、たとえば「箱根用水」を検索し洞窟をくぐる冒険などを敢行している人物なのだ。

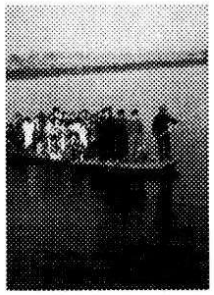
いま荒川の流れを辿って地史を編むとすれば横山大観さんの大作、水流の起承転結を描いた「生々流転」が

あり、発想の拠り所こそ異なれ、労著になるだろう、また岡本かの子の同名の文学作品にもあやかることになるのではと、彼を鼓舞してこの場合の話題を終わった。

奥秩父の甲武信岳に源は発し、関東平野を流れて、東京湾に注ぐ荒川であり、その末流に隅田川があるというのが一般の観念だが、正式には北区志茂の岩渕水門から下流を指して荒川と呼び、鐘ケ淵の屈曲部から下流を隅田川と呼んできた。さらに永代橋下流で二流に分かれ東京の市街地を流れ、古くは浅草川、大川とも呼ばれていた大河という認識が普通だった。

さて、わたしはその荒川の小台の渡しを利用し、しばしば放水路の方へ足を踏み入れ、メダカすくいや川蟹採りに興じる少年時代があるのだ。芦原に小鳥の葦切がさえずり放水路の土手には土筆が愛敬の顔を見せるきわめて長閑な風景のもとで、遊びに夢中になったものだ、遊び相手は尾久町に住む木島くんであった。かれは泳ぎも達者で放水路の流れを対岸まで横断できるし、小石を拾って水切りの試みて、川面の点打も並の手練ではなかった。

江北橋近くかなりの面積の河跡湖と覚しき水たまりがあって、夏は葦簾囲いの臨時の設営プールと化して有料になった。江北プールと呼ばれていた。すでに中学に進んでいて学校設営の霞ケ浦水泳教室などがあっても、貧しい仲間たちが誰彼が寄り合い利用したものだった。



奥手の私は泳ぎが身につかない恥づかしい金槌だったが、この水たまりに育まれた友情は忘れ得ない記憶になっている。荒川放水路は大正二年に工を起こし、同十三年にいたり通水、昭和五年に荒川放水路と名付けられた。北区岩渕に分水門がある。荒川放水路と呼んで親しんだ水路と堤防はここからを指すものであった。本流は同所以南を流れて鐘淵の大屈曲までを荒川、以南を隅田川と呼び親しんできたのであった。

小台の渡船場跡はいまは足立区に属する同二丁目、今は架橋後の歴史を刻み、橋に平行する少しく上流にあった。その架橋前の歴史を刻み、橋に平行する少しく上流にあった。その架橋工事のすでに進められていた昭和十三年三月の在りし日の映像が一枚だけあるので掲げておきたい。廃止寸前の尾久側から名残りを惜しんで撮ったものだ。この渡しを抜きには少年の回想は成り立たない。ついでながら、荒川教育委員会設置の渡しに関する標識写真を掲げる。（小台は今日足立区だが、往時の所管による建碑であろう。）



下部の細字部分の説明は左のようである。

この渡しは尾久の渡し・小田井の渡しとも呼ばれ西新井大師・六阿弥陀詣りのための重要な渡しであった。

と読める。

庶民の信仰上利した渡しなのだ。

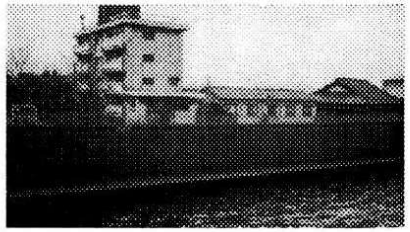
わたしたちの東京の行政区は昭和七年に五郡八十二町村の区域編入により十五区に二十区を加え三十五区となっていたが、戦後昭和二十二年統合して、今の二十三区に落ち着いた。荒川に沿い同名区と川向こうに足立区が誕生、小台の渡しは荒川をはさんで足立区内小台町の飛び地に位置することになり、少年の荒川慕情は少しく違和を感じることになった。

昭和六十年の十一日、私は四半世紀を隔てて慕情を満たそうと思い立って小台を訪ねようと思い立った。きっかけは東京駅北口のターミナルに都バス43系統として荒川土手操車場行きという路線があり、これに乗れば荒川土手に行けるかとかねて目星をつけていたのだ。調べて見ると小台橋を経由する願ったりのコースをたどる好都合を知識にしていたのである。

たまたま小春の好天に恵まれた日を選んでの決行だった。

シルバーパスの無賃旅行だった。それは旅行と呼ぶにふさわしい長途、期待に胸を膨らませる思いであった。

小台橋の橋上に立った私は川面をゆく昔ながらの荷駄のポンポン船を見てまずは良しとしながら、失望したのはまず聳える高さの防潮堤で下の写真を見るかぎり、渡船桟橋にあった料亭は右端に辛うじて二階部分を覗かせて、いまは廃屋ながらの無事とはいえ、左端にはなんと隅田川の標識が見えるではないか、終戦の年に河川法改正があり放水路を荒川とし、岩渕水門以南を隅田川と呼称することに決定の由、調べて判明した。失望を決定的にして橋を渡り切ると、かつての芦原は雑然、埃っぽい町並みに変貌、もはや、足を踏み入れる気持ちを失った。慕情はうたかたとして消え去った。



（H18・12・16）

わが愛誦歌（二）

――戦後の歌壇逍遥

曽根竣作

○ゆずらざるわが狭量を吹きてゆく氷湖の風は雪巻き上げて　武川　忠一

『氷湖』（昭34）の「氷湖」の中の一首。氷湖は故郷の諏訪湖のことであり、作者は凍った諏訪湖の湖面を凝視しているが、そこに降る雪を風は激しく巻き上げながら、湖面を渡ってゆく。そのとき作者は諏訪湖と一体になりきっている。人に譲ることをしない自己の狭量の悲しみも、そしてその自負も諏訪の風土そのものであると言う歌意。写実でありながらそこには自己の内面、思想を語る媒体としての氷湖がある。緊密にして一読、身の引き締まるような作品として心に残る。戦中派としての作者は、病弱のため直接戦場に出ることはなかったが、同世代の友人の戦死は、作者の傷痕として深く残り、武川短歌の底流する一つのテーマともなっている。〈忌の日を長くまもりて戦後ありひとりの夜のわが魂おくり〉は単的に言い切った深い吐息であろう。作者は現在「お歌始め」の選者でもあった。

○他界より眺めてあらばしづかなる的となるべきゆふぐれの水　葛原　妙子

『朱霊』（昭45）の「夕べの声」中の一首。やゝ難解なうたであるが、夕暮の水が窓下に見えているけれど、もしこの水を、「他界」すなわち死者の世界から眺めたなら、水こそは、使者の目をひきつけてはなさない「しづかなる的」となるだろう、と作者は感じとったのであろう。生命は水から発し、水に帰ってゆくが、特に「ゆふぐれの水」は美しい憂愁をたたえて心を惹く。それが死者の視線を集めるという鋭い感覚である。作者は、奔放な想像力とシャープな感性で現代短歌の幻視の一領域を不動のものとしたと言われている。大岡信氏は、彼女を水辺に立たせ、他界の魔性のものが見下ろすなら、たしかにこの光る水面を的にするに違いないと、凶事の予感と鑑賞している。（『折々のうた』昭55）

近代短歌までの約束「歌中に主語なきときの主語は〈われ〉を、この歌ははるかに超えてしまっている。〈奔

馬ひとつ冬のかすみの奥に消ゆわれのみが累々と子を持てりけり〉上句下句の価値転換、四句の破調がポイント。

○兵たりしものさまよへる風の市白きマフラーをまきゐたり哀し　大野　誠夫

『薔薇祭』（昭26）の「薄明」一連の中の一首。風の市は終戦後直ぐ立ち上った所謂闇市のことである。昭和二十二、三年頃の作、戦時中に兵であった者が、今は敗戦直後の冬風の吹き立つ街中を白いマフラーを首に巻いてさまよい歩いている。この昏迷、虚脱の世にそれを見ていると、もの哀しい思いがこみ上げてきたというのである。白いマフラーは落下傘に用いた白絹の転用が多かったが、大体航空兵が使用し、特に特攻隊のシンボルマークでもあったので、この歌も特攻くずれの祖国喪失感の中の青春無頼のすがたととらえてもよい。作者が得意とした風俗詠的なものの代表作であって、どこか甘美で愁いをこめた調子を湛えながら、当時の世相を鋭く描き出している。あるかなきかの光を求めて薄明の廃墟をさまよふ人間、そこには負のロマンだけがある。〈絶望に生きしアントン・チェホフの晩年をおもふ胡桃割りつつ〉。作者は『薔薇祭』の刊行により戦後派第一人者のデビューを果した。

○処女にて身に深く持つ浄き卵秋の日吾の心熱くす　富小路禎子

『未明のしらべ』（昭31）の「秋ふかき日」の中の一首。処女である私は、自分の体の奥深く浄い卵子を秘め持っているのだ―その厳粛な思いが、秋の一日、私の心を熱くさせると詠む。女性でなくては歌いだすことのできない世界を、作者は明快な言葉で、しかも敬虔な心をもって表現し得た。更に、この作品はたんに処女の純潔姓の主張にとどまらず、生理の領域に踏みこみ、女の性の新たなシンボルとして、〈卵〉のイメージをとりあげたところに新しさがある。作者は、実存主義の小説などを読みあさっていたと自注しているが、実存主義、特にボーヴォワールの『第二の性』などの影響も、一首の背後に読みとることができる。作者は、富子路子爵家の末裔として、戦後はおきまりの斜陽族となり、ＯＬとして働きはじめ幾多の辛酸をなめてきたようだが、終生独身を通された。〈女にて生まざることも罪の如し秘かにものの種乾く季〉。下句の象徴的な不毛性の自覚に着目したい。

○沈黙のわれに見よとぞ百房の黒き葡萄に雨ふりそそぐ　斎藤　茂吉

大正、昭和の短歌界の柱石として活躍された大御所である。愛誦している歌も数限りないが、今回は敗戦後直ぐの虚脱感の中で詠まれた著名歌を採り上げてみた。戦時中、いくらか戦意昂揚に関ったその反動として戦後の一時期は沈黙を守らざるを得なかったようだ。沈黙のう

ちに悲しみにたえている目の前に、これ見よとばかり重く房を垂れている黒いぶどうに雨が降りそそいでいる。むなしい敗戦の秋ではなかろうかと言う歌意である。「百房」とは多くの葡萄を簡潔に要約したものであろうが、その造型的な重量感を持つイメージは不思議に表現を越えた何ものかを暗示している。写実でありながら、読者を抽象の世界に踏みこませる何かが感じられる。黒き葡萄に秋雨の降る写象は悲劇的であるとともに、永遠なるものの意志を啓示する趣さえあるのであろう。掲出歌は、昭和20・10の作品であるが、昭和22・2の〈最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりにけるかも〉の絶唱も深く心にひびく作品である。

○あはれしづかな東洋の春ガリレオの望遠鏡にはなびらながれ　永井　陽子

ガリレオ・ガリレイは十六～十七世紀のイタリアの天文学・物理学者で、はじめて地動説を唱えた人。この作品は、昭和六十一年頃のものであるが、東洋も当時は現在のいはゆる〝ならず者〟国家が何かと物議を醸していなかった比較的平穏な頃であった。上句の流れに対し、下句にガリレオのレトロな望遠鏡をもってきたユニークさに惹かれるが、政治・文化・経済などに於ける東洋と西洋の格差に対する痛烈なアイロニーが裏にかくされていると見れば鋭い感覚詠である。作者は、豊かな音楽性と口語律を取りこんだ柔らかな調べ、私生活を排除したような詩世界を構築し独自の歌境を展いた。〈べくべからべくべかりべしべきべけれすずかけ並木来る鼓笛隊〉は、文法上のややこしい仕来りをすずかけ並木を来る鼓笛隊という戦後的風俗によって軽く一蹴しており、また〈丈たかき斥候のやうな貌をしてfが杉に凭れてゐるぞ〉のように*f*（大きく力強く）という音楽記号を歌に取り入れ記号短歌の走りを予言して、その鋭敏な感性は今も着目されている。

参考文献
現代歌人二五〇人（牧羊社）
現代名歌鑑賞事典（桜楓社）
現代百人一首（朝日文芸文庫）
現代短歌の鑑賞事典（東京堂出版）

雁来紅

曽根　竣作

黄落のいてふもみじの散り敷ける径ひとすぢに伽藍にいたる

かくて秋かくありなむと雁来紅の朱のいただき蜻蛉掠めつ

もりあがる山麓の量突き抜けてこゑを限りに夕蝉の啼く

竹林に白雨さ奔りあひ搏てる笹の葉ずれの響み聴きをり

庵庵と舗道によろばふ黒揚羽汝が放蕩の果てにかも似て

地上に生れ短きいのち鳴き継げるあしたの蝉が立秋さそふ

「さっぱりしていい奴だった」、同期なる友の訃を知る行内報に

丹精をこめし歌集のそれぞれに賜びし人顕つ曝書の縁に

戻らざる記憶へんぺん打ち伏せば蜩のこゑ遠ひびき来る

折をりに口遊むかな洋洋乎杳けき「戦友別盃の歌」

対岸に車灯つらなり夜の闇を一筋の帯となりてまたたく

かすみ立つ沖に漁船の二つ三つ靉靆として秋逝かんとす

そよろ吹く風もはつかに秋めきて鶏頭ゆらぐ立秋の昏れ

日に透ける空蝉しかと幹を抱く輪廻の現世空と知らずて

昨夜の雨じっとり含みし砂の上きしきしと往く秋のはざまへ

海越えて二千余粁を翔ぶと言ふ夏蝶のパワー諾ひがたし

青年の胸処は縦に拭くべしといみじくも詠む寺山修司は

いつまでも死語とはすまじ「戦中派」回顧の情も薄まりをれど

海鷲とふ翼つらねてみんなみの空戦ありきそして敗れき

雑踏を外れ寂びたる古書店に入りてひとりの近代に触る

旅立の朝しづかなりうす雲の点点として風ぬるみたり

ゆったりと筑波嶺たたなふ麓なり「万象」同人数多つどへり

ひととせぶり久闊叙して会釈せり変らぬ笑みに心和ます

朝まだき一望展(ひろ)くたなびきて関東平野に黄の稔り見ゆ

をちこちに稔れる早稲(わせ)を思はせてみどりの濃淡うちつづきたり

朝食の新米美味し眺望する地より摂(と)れしかと歌友(とも)と語らふ

はるばると愛媛より来し手弱女二人その熱意こそ結社を支ふ

夕つかた時折に聴くカセットの「カスバの女」、そこは地の果て

命あるうちに訪ひたきアルジェリア、ペペ・ル・モコなど居りはしないが

最果てのカスバ知らねどいしみちにソフト小粋なるギャバン忘れず

短歌

行雲流水(十五)

石黒修身

〔一〕 私的短歌考(2)

―「昭和萬葉集」について―

(1) 昭和萬葉集との出会い

「杳き日に短歌に憧れ購いおきし昭和萬葉集書架に古りたり」、以前詠んだ拙作の短歌である。

昭和五十四年頃、まだ多忙なサラリーマンの身であったが、本集の出版を知り、躊躇うことなく全巻購入の申込みをした。

当時、短歌には漠然とした興味と憧れを持っており、作歌には及ばないが、せめて読むことで欲求を見たそうと考えたのだろう。

しかし、各巻が逐次配本されても殆んど読むこともなく、書架に並べておいたのである。

今から十年ほど前、曲りなりにも短歌を詠みはじめるに至り、近刊の歌集や、関連の本と併せ、書架の埃を払って時折目を通すようになった。

最近、現代短歌につき、聊か思考を巡らすようになり、本集にも更めて興味を覚え、自からの考えを小さくまとめてみようと思った次第である。

(2) 昭和萬葉集の概要と成立過程

① 各巻の配本と収録内容

本集は、全二十巻、別巻一から成り立ち、昭和五十四年二月に講談社から刊行された。

巻一の、昭和時代の開幕(昭和元年―五年)から始まり、巻二十の昭和五十年の回顧(昭和五十年)で終る。別巻は、昭和歌人小評伝、戦争詩歌文献解題と作者総索引他となっている。

配本の時系列的順番と巻番号は一致しない。具体例としては、第一回の配本は巻六であり、第十九回の配本は

巻一である。

収録されている作者数は二千二百人、短歌数は四万五千首にのぼり、昭和元年から五十年までの半世紀にわたり作られた短歌を対象としている。一般投稿歌、依頼出詠歌、各種資料からの発掘歌が選者の選を経て編纂されている。

各巻とも、作品のテーマ、素材により分類されており、下欄には詠まれている用語、事柄についての編集者の解説が付いている。

選出の対象となった歌誌は、総合誌として「短歌研究」、「日本短歌」、他に結社誌九十六、一般誌十九である。他の選出対象については後述する。

② 編集者等について

（顧問）土屋文明、土岐善麿、松村英一、（選者）太田青丘、鹿児島寿蔵、木俣修、窪田章一郎、五島茂、近藤芳美、佐藤佐太郎、前川佐美雄、宮柊二、（編集協力）上田三四二、岡井隆、島田修二、高橋隆治、原田勝正、小中英之、篠弘、菅原峻、田井安曇、（選歌協力）石本隆一ら三十五人、（協力）佐佐木幸綱ら四十二人。

何れもその時代を代表する歌人を網羅しており、当時の歌壇、歌人達が本集に込めた熱意と期待の大きさを示すものと言えよう。

時代の流れとして見ると、顧問、選者の多くは物故しており、当時の若手であった編集協力者は、既に七十才台となり、歌壇を代表する長老格になっている。また最も若かったであろう佐佐木幸綱ら協力者も第一線で活躍している。

③ 成立過程

はじめは一人の発案者があり、数人のスタッフにより企画がスタートしたと言われている。

十数人の顧問、選者、協力者らの尽力のもと、数百人に及ぶ人々が、資料の収集、選歌に協力し、二千人を超える歌人の作品寄稿の他に、短歌大募集に際しては、約五万人、四十八万首が寄せられたと言う。

この事からみても、世に埋もれた庶民の作品の掘り出しに重点を置いた編集者達の意向が汲みとれる。

編集に当って、歌壇の大御所が音頭をとったとか、特定の結社が中心になったとかの事実は見られず、当時の歌壇が、流派や結社を越えて大同団結した一時代を劃する国民的企画であったと言えよう。

(3) 時代的意義

昭和元年から五十年までの半世紀に活字になった短歌数は、五億首以上と推定され、作者はおそらく延一億人を超えていると言われる。

これほど夥い数の人々が、短歌に自分の感懐を託した時代は未曽有であり、少なくとも、数多くの庶民が、その生活や、生活感情を詠み遺したのは「萬葉集」の時代

と、この昭和の時代の二つと言えるかも知れない。

本集が、「昭和萬葉集」と名付けられた所以である。以上月報二十一の〈編纂室から〉の引用。

更にもうひとつ、選者の一人である木俣修が編集月報に寄せた一文を引用する。

かの「萬葉集」の作者の層は、天皇、皇后、はじめ貴族、官僚、僧侶、農民、漁民、遊女、門付け、と言った当時における上下あらゆる階層に及んでいるが、その時代に比し、今日の人間の階層は何十倍の複雑さを呈している。

「萬葉集」には、「防人の歌」があるが、昭和の五十年間は、まさに日本人が史上空前の大動乱の渦中に投げこまれた時期であっただけに、歌もまた史上空前の悲歌、哀歌を生んだのである。編年体に編まれたこの集は序列をたてゝ読めば、正しく短歌によって綴られた昭和哀史であって、萬葉を号する資質を完備した歌集たりうる。

(4) 筆者の体験と感懐

平成十五年頃、筆者が受講したカルチャーの短歌講座で、講師の島田修二は、筆者の出詠した冒頭の短歌の講評の時に、昭和萬葉集の編集に携った際の苦労話をし、関係者が如何に情熱とエネルギーを注いだかを懐かしむ面持ちで語ったことが印象に残っている。

また、筆者が、本誌「まんじ」に評論として掲載した歌人二人の作品が本集に収録されているのを紹介する。

九十五号の「台湾万葉集について」、編者の孤蓬万里（呉建堂）の二首。

○戴きし往診料を仏前にそのまゝ供えて足重く去る
○吾子は今手術受けおり父われは医師にしあれば全身震ふ

記念百号の「韓国の歌人」の主人公孫戸妍の七首中二首。何れも朝鮮動乱に関する。

○もろともに同じ祖先をもちながら銃剣とれりここを境に
○婚約の指輪なれども米となり空爆の日の命を保つ

他に筆者の作品には無関係であるが、本集に収録された唯一の欧米人と目される米国人ルシール・ニクソンの二首。

○日本より来るぜんまいの煮つけしもの夫のみ好みて食しぬ
○あこがれのうるはしき日本法隆寺ひるのみあかしいつまたとはむ

(5) まとめ

ある編集者は述べている。この「昭和萬葉集」はあくまでも昭和時代の先駆的一石であり、別の「昭和萬葉集」を、また眞の「昭和萬葉集」を編むことも可能であろうと。

しかし、平成の今となってもそのような出版物は現われてない。

「昭和萬葉集」に収録されている短歌は、昭和短歌史をまとめ上げたものであり、それは時代の証言としての国民的一大アンソロジーと言って良いだろう。

筆者は今、本集全二十一巻と各巻に付された月報「まんよう」を堆く積み上げ、その中に座り込んで、如何にして本稿をまとめようかと呻吟している。

既に出稿の締め切りも迫っており、とてもスマートな終章は記し得ないだろう。

せめて、将来平成の時代を背景とした「平成萬葉集」が編まれることがあれば、その中に筆者の一首が収められることを夢みつゝ本稿を終りたい。

文中敬称略

〔二〕　近詠二十首

時折は丹頂鶴が舞うはなやぎも釧路湿原茫漠として

オホーツクに注ぐ河口に群なして樺太鱒は健気に遡る

知床の峠に佇ちて「国後」の島影望み「還る日は何時」

白神に入る駅あり「五能線」単線北へ日本海に沿い

晩秋の白神山地に分け入ればブナの樹海は満目黄なり

白神のブナの樹間を抜け出れば翠を湛う隠沼ありぬ

黄金崎「不老ふ死」とう湯宿にて渚に湧ける赤い湯を浴ぶ

さまざまな災いありし故郷はいま「日ハム」の優勝に沸く

竜巻に遭いし「佐呂間」は故郷の涯の町なり冬を控えて

はらからの訃に飛び来たる故郷は雪霏々と降り師走に入れり

「日ハム」の興奮去りし札幌のドームに粉雪逆巻くを見き

靖国の「遊就館」では眞実が陳べられていて胸を搏たれり

展示ある人間魚雷「回天」に搭乗一人とあれば胸衝かる

携帯を離せぬ病と揶揄されてなお握りいる若者ら何故

さまざまな人生詰めし箱のごと始発電車は未明を走る

故郷の名を冠したる交響楽団迎え「マーラー」を聴く晩秋の夕

汝がために作られし曲をゆったりと「館野泉」は左手で弾く

半身の不随に克ちて全身を左手に注ぎ「館野」は弾けり

首長らのモラルの低下限りなし権力の座の重さ知るべし

守るべし眞の弱者をかしましい格差論議の昂る今は

詩集「ろかいゆ」より その四

松下壽男

髪

あの日も
鏡のまえで吐き棄てた言葉は
俺を見つめる俺の目までが悲しくて
一筋
涙が走った俺ではあったが

黒黒と
それがいつの間につくりあげていた
もうひとつの顔に
その下で萎縮しきった眼差しが
耐えきれまいと気付いたときに
純白の泡立ちならば塗りこめて
それを窒息させてくれよう
なおも鋼鉄の冷たさになぎ倒されて
それは渦巻いて精一杯毒づきはしたものの
流れていってしまった

あるいは血が滲もうと

きょうも
鏡のまえで俺を見つめる俺ではあるが
ぎこちないほほえみを
黒く縁取っている
この髭の
伸びた長さを
俺は生きた

返句

ひげのそれるまさかりがほしいものだ啓蟄

ハート・トゥ・ハート

第四話　ア・ラブ・シュプリーム（終編）

松下壽男

♥♡♥♡♥

一九八二年の暮れ、エルヴィンとケイコは、アキハバラにやって来た。黄色を基調にした、原色のロングコートを纏った長身の黒人エルヴィンと、黒光りのする毛皮のコートで身を包んだ小柄なケイコのカップルは、ニューヨークファッションの先端を示していたが、ここでは振り向く者は少なかった。もっとも、彼らのその日の目的も、ソニー社製の最新のウォークマンを手に入れることなのであった。

新人を発掘しては、自らのバンド、ジャズマシーンで鍛え上げ、ジャズ界に独り立ちさせてきたエルヴィンの前には、ぜひとも演奏を聴いてほしいという若者が次々と姿を見せた。そして自分の演奏を録音したカセットテープを手渡して行くのだった。それを、その場で聴いてみせたり、移動や休憩の合間に聴いたりできる携帯型のヘッドホンステレオは、ありがたい道具であった。

しかしその裏には、年々客の入りが少なくなったニューヨークのジャズ・クラブの現実があった。客とジャズメンとでごったがえしていた昔なら、夜明けまで延々と続くジャムセッションに、新人が顔を出すチャンスはいくらでも転がっていた。そこには、客も、新人も、ミュージシャンも、店主も、麻薬密売人も、それを取り締まりにきた警官さえも巻き込んだ、熱いジャズのコミュニティーが確かに存在していたのだった。その熱がいつの間にかどこかへ移って行ってしまったのだ。

それは、一晩のライブコンサートに何万人もの客を集めるマディソン・スクエアガーデンの方面だろうか。それとも、袋のポテトチップスを頬張りながら、ソファーに寝転がってテレビを見ている庶民のアパートの居間の方だろうか。

（恐らくその両方さ）

年に数回、テレビやラジオ、新聞、雑誌、広告のマスメディアに煽られて、目が飛び出るほどの値段でチケットを買い、隣が誰とも知らない大群衆の中でスピーカーから迸る大音量の音楽を浴びると、残りの百日を、金のかからない自宅でマスメディアに囲まれてのんびりと過ごす。それが大衆というものだとエルヴィンは思った。

（奴らには個人か家族か、それでなければ大多数という群衆しかないのさ。身を寄せ合って、ぶつかったり、引きあったりしながら心を通わせていくコミュニティーというものは、もはや奴らの居場所の一つじゃなくなったのさ。人というものはみんな同じで、みんなばらばらだと最初から決めてかかっている奴らには、人と心を通わせたいという欲求は、もはや不必要なのさ。それにしても、みんな同じでなきゃならないと絶えず大多数に身を置くことを選びながら、みんなばらばらでなけりゃ存在を保てないような自分って、そりゃあ一体何者なんだい）

黒人のコミュニティーで腕白に育ち、ジャズのコミュニティーの中で個性を存分に磨いてきたエルヴィンであった。

そんな彼の所へ、如何にも新しいやり方で自分を売り込みにやって来る若いミュージシャンに対して、エルヴィンができることといえば、寂しくなってきたコミュニティーへと招き入れてやることだった。だからエルヴィンは、カセットテープを目の前で喜んで聴いてやりたかったのだ。そのためのウォークマンなのであった。

（それにしても日本人は、妙な物を作り出しては、世の中の意味を変えてしまうもんだぜ）

録音できないテープレコーダーなんてと、アメリカ人は最初は見向きもしなかったのだ。それが、しばらく経つと輸入が追いつかなくなるほど爆発的に売れ出した。そして気づいてみれば、音楽のもつ意味さえも変えられてしまっていたのであった。

かつて、テクノロジーとは五体や五感の延長だと語った学者がいたが、日本人のテクノロジーは、軽く薄く短く小さくすることで、直接耳の奥を揺さぶるのだった。

（でも、それが直接ソウル（魂）を揺さぶると思ったら大間違いさ）

エリック・ドルフィーと語り合って以来、エルヴィンにとって音楽とは、空気のメッセージであった。目に入る光よりも、頭に伝わる言葉よりも、何よりもっと大切な、人々が呼吸をしている空気が運ぶメッセージであった。だからこそソウルを伝えることができるのだった。

しかしヘッドホンを付けて街を歩く若者にとっては、音楽とは、周囲とのコミュニケーションを遮断して、直接耳を刺激するメディアでしかなかった。

最も開かれたバイタルなメッセージを伝えるものが、最も閉じられたバーチャルなメディアへと変わりつつあった。

電気屋のビルが立ち並ぶアキハバラの歩道にも、ヘッドホンを耳につけた若者たちが無表情に闊歩していた。

（もしも奴らがみんな同じ音楽を聴いていたとしたら、何ともこっけいなマンガになるだろうぜ）

と、エルヴィンは思った。しかし、しばらく考えて、笑えなくなってしまった。彼らの耳に響いている音楽は、全く同じではなくても、大同小異に違いなかった。

車体をオリーブドラブに塗り上げて鮮やかな日の丸を付けた大型バスが、スピーカーから勇ましい音楽を大音量で鳴らしながら大通りを走り去って行った。

ケイコは、今でも安い店を探すのが楽しみだった。ニューヨーク流に値切った末に、二人は、最新のソニーを買い込んだ。それはカセットケースと変わらないほど小さかった。

「これは、いいおみやげになるわ」

と、一ダースも買い占めた大きな段ボール箱を、ケイコに持たされるエルヴィンだった。

二人はレコード店に入った。LPと並んで、CDのコーナーが、アメリカのショップよりも広い面積を占めていた。

エルヴィンは、自作の「ヘヴィ・サウンズ」のCDを取り出してケイコに見せた。リチャード・デイヴィスと並んでもくもくと煙草をふかしている、LPのジャケットサイズではふてぶてしかった自分の横顔が、透明のプラスチックケースの中に如何にもコンパクトに収まっているのを見て、二人は苦笑しあった。

店内のスピーカーからは、日本の人気ミュージシャンの新曲が繰り返し流れていた。

雨にも風にも負けないでね
暑さや寒さに勝ちつづけて
一日、すこしのパンとミルクだけで
カヤブキ屋根まで届く
電波を受けながら暮らせるかい？

南に貧しい子供が居る
東に病気の大人が泣く
今すぐそこまで行って夢を与え
未来の事ならなにも
心配するなと言えそうかい？

君の言葉は誰にもワカンナイ
君の静かな願いもワカンナイ
望むかたちが決まればつまんない
君の時代が今ではワカンナイ

日照りの都会を哀れんでも
流れる涙でうるおしても
誰にもほめられもせず、苦にもされず
まわりの人からいつも

デクノボウと呼ばれても笑えるかい？

君の言葉は誰にもワカンナイ
慎み深い願いもワカンナイ
明日の答えがわかればつまんない
君の時代のことまでワカンナイ

君の言葉は誰にもワカンナイ
君の静かな願いもワカンナイ
望むかたちが決まればつまんない
君の時代が今ではワカンナイ

（井上陽水「ワカンナイ」）

「ワカンナイっていう言葉なら俺にもワカルヨ。でも、何がワカンナイって言っているんだい」

「宮沢賢治というファンタジー作家が六〇年も昔に書いた、有名な詩があるのよ。『雨ニモマケズ』っていう詩なんだけれど、その詩の心が今ではワカンナイって歌っているのよ」

「じゃあケイコ、歌を作って歌ってる奴は、ワカッテ歌ってるのかい、それともワカンナイで歌ってるのかい」

「ロマンティストの井上陽水のことだから、ワカッテ歌っているんだと思うわ」

「じゃあ、どうしてワカッテルって歌わないんだい。それとも、聞き手にワカンナイでいいのかいって問題を投げかけてるのかい」

「そうね、でも、もしそうだとしたら、若者たちは投げかけに応えるはずよ。なにしろアルバムがこんなに売れているんですもの。だから陽水はきっと、ワカンナイ世の中の悲しみを歌っているんだと思うわ」

「そうか、現代日本のブルースって訳か」

「でも、現代の若者がブルースを感じるかどうかはワカンナイ……」

かつて反戦を真正面から一生懸命歌っていたフォークソングは、ロックンロールと結びつき、やがてニューミュージックという大きな市場を持つ音楽を形成していた。そして反対を声高に歌っていた若者たちは、いつしか問題提起のメッセージを歌うようになった。ベトナム戦争もアメリカ軍の撤収によって治まるところに治まり、確かに世界から大戦の危機は去ったように思われたが、地球上に戦火の絶えることのない現実を、平和と呼べるかはワカンナイのであった。

（ワカンナイというメッセージを投げかけられたら、どうして語り合わないんだい。音楽は同じ空気を吸っている人々に共通にメッセージを投げかけているんだぜ。音楽は音の届く限りの世界にコミュニティーを生み出すんだ。そこで対話が、コミュニケーションが生まれなくてどうして音楽と言えるんだい）

しかし、歌詞のメッセージが皮肉とも真面目とも受け取られる歌が売れまくる文化が、若者を中心に拡がっていた。世間はそれを「しらけ」と呼んで静観していたが、すでに世間がしらけていたのであった。それは、ヘッドホンステレオを生み出した日本ならではの現象だろうか。いや、ウォークマンはすでにニューヨーカーの日用品にもなっているのだった。

「ケイコ、つまんないとも歌ってるぜ。何がつまんないって言っているんだい」

「望んでいるものがはっきりしてくると、つまんないっていうことかしら。まるで出できたランチを前にして、これよりあっちの方がよかったと言って駄々をこねるレストランの子供のようね。そう言えば、今の日本を飽食の時代って言うそうよ。お腹は一杯なのに、目が欲しがるのよね」

「実に不幸な話だぜ、ケイコ。俺たち黒人仲間にも、見果てぬ夢を見る奴はいるもんだが、大抵、小さい頃に親と別れた奴か、からっきしもてない奴か、でなきゃコミュニティーからつまはじきにあっている奴さ。まさか日本の若者がみんなそんな境遇って訳はないだろうに」

「いいえ、エルヴィン、そうとも限らないわ。境遇っていう言葉を文化っていう言葉に置き換えれば、今の日本の姿もわかるような気がするわ」

「ケイコ、文化なんて言葉はいらないぜ、ソウルで十分さ」

エルヴィンにとってソウルとは、自分自身の中での、生身の人間の欲求と、夢見る人間の欲望とのバランスだった。それは獲物を追って大草原を掛け巡っていた遠い先祖の遺伝情報なのかもしれない。そのうえ欲求も欲望も、大方は人との交わりであった。しかも相手あっての自分であった。

彼には、人と共感したいという強い欲求があったが、それは一人一人のもつ異文化の闇を見据えようとする欲望とバランスをとるもののように思えた。故国を狩り出されて奴隷として生きた祖先の知恵かもしれなかった。そして欲求と欲望のバランスを保つためには、決して広い世界は必要としかった。ソウルは常にコミュニティーと共にあったのだった。

こうして日本にいても、心はアメリカのハンク兄さんや肉親とつながっていたし、ニューヨークのジャズシーンやデトロイトの故郷とつながっていた。ナガサキにはケイコの実家があったし、トーキョーにはピットインを中心に気の置けないジャズ仲間がいた。

彼はグローバルに生きるコスモポリタンでもあった。しかしソウルは常に変わらずコミュニティーと共にあったのだった。そしてコミュニティーに生きる限り、自分を大衆だと感じたことはなかったのだった。

「それにしても、ブルースが感じられないなんて、一体日本人のソウルはどこに行っちまったんだい」

しかし、それは日本だけのことではなかった。アメリカでもソウルミュージックという名の音楽が売れに売れていたが、しかしそれは、リズムアンドブルースとゴスペルとを結びつけた、ダンスミュージックに過ぎない代物だった。

疲れ果てるまで踊ることによって、確かに欲求は満たされるだろう。しかしそれでソウルは本当に満たされるのだろうか。お仕着せのソウルを被って踊らされることで、ソウルを満たした振りをしているだけなのではないか。エルヴィンはそこに、夢を追って満たされない不幸よりももっと深刻な人々の不幸を感じるのだった。

お仕着せの仮面を被って生き、心の通じ合うコミュニティーを失い、欲求と欲望のバランスをとりかねた自らの心の叫びに不感症になり、やがて心のバランスを崩していく……。それは二十年前にエルヴィンが麻薬にのめり込んでいった道筋でもあったのだった。

しかし現代は、麻薬の力を借りなくても、人が依存症に陥ったり、拒食や過食に陥る時代であった。世界中に澄んだ歌声を響かせたカーペンターズの歌姫カレンが、拒食症に陥って、まさに命すら危ぶまれていたのだった。

エルヴィンとケイコは、駅に向かって歩き始めた。店頭では、新作のコンピュータゲームの前に黒山の人だかりができていた。

(仮面を被った若者が仮面を被った若者へ伝えるメッセージとはどんなものだろう)

と、エルヴィンは考え続けていた。

(仮面で受け取って、適当に食い散らかして、再び仮面から仮面へと送り返す代物がメッセージだとしたら……)

真面目に理解しようとすればつまんない、だからワカンナイでいいというものなら、そんなメッセージはもはやメッセージではあるまい。ならば、

(ついにメッセージはメディアになっちまったということか)

と、エルヴィンは思った。

ソウルを失い、コミュニケーションを失い、コミュニティを失った大衆に直接降り注がれるメッセージとは、もはやメディアそのものなのだ。

みんな同じでみんなばらばらな大衆の生き方とは、何と情け無く殺伐とした生き方だろう。足枷の鎖の代わりにお仕着せの仮面を被せられメディアの奴隷と化した群衆の姿を想像して、エルヴィンは背筋が寒くなった。

「ケイコ、俺は、大衆向けの音楽はやらないぜ。どうして売れなきゃならないんだい。売れれば、メディアになっちまって、大衆の市場の中を独り歩きしちまうんだ。そうなると音楽はもう俺の音楽じゃない。どんなにメッセージを送っても……」

「エルヴィン、急にどうしたの。もう、売れる売れないという存在じゃないのよ、あなたは」

エルヴィンは、青信号で一斉に交差点に歩み出した群衆の姿に眩暈を覚えた。あたかも一人一人が仮面を着けているように見えたのだった。しかもその耳にはヘッドホンが光っているのだった。彼は、交差点の真ん中で立ち竦んでしまった。

心配そうに見上げるケイコの目は、額に滲む汗を見逃さなかった。手袋を外したケイコの柔らかい小さな手がそっと額に触れてきた。

「まあひどい熱」

ケイコは、ちょうど信号待ちをしていたタクシーの座席にエルヴィンを押し込んだ。そして隣に座ると、微笑みながら、こう囁くのだった。

「あなたが風邪を引くと、私、何だか浮き浮きするのよ」

一九八五年夏、この年もエルヴィン・ジョーンズはピット・インにやって来た。今度のジャズマシーンは、リチャード・デイヴィスとの双頭コンボであった。そして戦後生まれの日本人ピアニスト、辛島文雄もメンバーの一員に加わっていた。

日本の高度成長の縮図のように、新宿の街も急成長を遂げていた。首都東京の副都心として超高層ビルが建ち並び始め、数年後には都庁の移転が予定されていた。かつての抵抗の街は、権力の街へと変貌を遂げようとしていた。とはいえ、ピット・インの店内は、六〇年代と変わらぬ息吹が漲っていた。

八月一日、彼らは、ケイコ名義の「シンジツ」と「ザンゲ」の二曲を含むライヴ録音を残した。

一九八九年、エルヴィンとケイコは、東京で重苦しい正月を迎えた。日本の国中が、昭和天皇の病状を息を潜めて見守っていた。当然のことのように歌舞音曲は自粛され、二人は、久しぶりにオフ同然の年末年始を、日本国民とともに厳粛な気持ちで過ごすのだった。

一つの時代が、一人の死と共に終わりを告げようとしていた。しかもその時代とは、一つの生涯が背負うには余りにも波乱に満ちていた。日本の、いやアジアの、世界の何億もの人々の夢や嘆きや悲しみや喜び、そして憤りを一身に象徴して、六十余年ものあいだ言葉少なに佇み続けた一生が、静かに幕を閉じたのだった。

二人はホテルから出ることもなく、昭和天皇の追悼番組を見て過ごした。

映像は、太平洋戦争の記録を放映し始めた。白黒の画像が雲海を映し出すと、ケイコは身をこわばらせた。

「エルヴィン！」

と、悲鳴のような声を上げてケイコは彼の手を握りしめた。やがて画面にむくりむくりとキノコ雲が沸き上がった。その様を、まなこを見開いて見つめながら、ケイコは唇を噛みしめていた。小さな手が汗ばんでいた。やがて映像は、軍用機の粗末なタラップを駆け降りるマッカーサー元帥の姿を映し出していた。

やっと手を解きほどいたケイコは、

「原爆投下のフィルムを終いまで見たのは、今日が初めてなの。目を瞑るか、スイッチを切るかして、とても見続けることはできなかった。でも、今日は見届けないといけないと決心したの。昭和の時代が逝ったんですもの」

日本中の一人一人が、自分史に一つのピリオドを打とうとしていた。

やがてテレビを通して新しい元号の発表があった。黒縁の眼鏡をかけた内閣官房長官が恭しく掲げた紙には、「平成」という文字が墨書されていた。

「ケイコ、何て読むんだい」

「ヘイセイ。ヘイは、平和の平、そしてセイは成るということなの。でも何だかしっくりこない気がするわ」

「なあに、ケイコ、じき慣れるさ。お前の名字がジョーンズになった時のようなものだろう？」

この年、中国では天安門事件が起こった。ベルリンの壁が崩壊した。エルヴィンは、アメリカ音楽使節のプロジェクトに乗って東欧諸国と接する町々を旅した頃を思い出した。彼にとっても、一つの時代が終わったのだと思った。

日本の高度経済成長は、昭和の末期にはすでに陰りが見え始めていた。しかし人々の欲望は際限がなかった。大衆の見果てぬ夢が崩れかけた経済を踊らせ、やがて夢が弾けるようにして潰え去ると、泥沼のような不況がやって来た。開闢以来と言われた好景気に乗って滑り出した平成時代は、宿命のように不景気を背負い込み、出口の見えない景気の混迷は年々深刻なものになって行った。

金融危機、政界の離合集散、財政赤字、自衛隊の海外派遣、組織的・非組織的な凶悪犯罪の増加、外国人労働者の就労、産業の空洞化、少子高齢化、過疎と過密等、新聞の見出しをケイコに読んでもらっただけでさえ、戦いの時代・昭和の残した膿がじくじくと吹き出しているようにエルヴィンには思えた。

旅行者に過ぎないエルヴィンとケイコの目にも、日本に来る度に、下町や田舎の、元気を失って行く姿が痛ましかった。

平成の年号にも慣れてきたある年の秋、ジャズマシーンは、三人目の総理大臣を輩出したというある県の、東京から少し離れた地方都市で公演を行った。

演奏会場周辺のアーケードの商店街は軒並みシャッターを閉めているのに、郊外のハイウェイの取り付け道路には大型店が建ち並び、広い駐車場には、ぴかぴかな車がいっぱいに並んでいたのであった。狭い日本の町にアメリカの姿が、一層小奇麗に洗練されコピーされているようにエルヴィンには思えた。

演奏が終わって、次の都市に移動する車から外を眺めていても、すでに深夜といえる時間なのに、ハイウェイにつながる沿道にはこうこうと明かりが点り、真昼のよ

うに車や人が蠢いているのだった。
「ケイコ、日本は本当に不景気なのかい」
「だって、エルヴィン、昼間の街なかの商店街を見たでしょう。あの町には何百年も続く伝統の技術を売り物にしていたお店もあったのよ。でも、シャッターを閉めていた。さすがに今の日本は、不況になっても、衣食住と気晴らしに事欠くことはなくなったわ。だけど、値段の高い本当によいものは売れないのよね。でも、本物は売れずにその代用のような安い物ばかり売れるようになってしまったら、この国の文化はどうなってしまうのでしょう」
「ケイコ、まるでポピュラー音楽のシーンのような話だぜ」
「それに、あのシャッターの奥には、何代も続いた商人の暮らしがあったのよ。その人たちが力を合わせて作ってきた街なのよ。それにお客にとっても、街に買い物に行くというのは、品物を手に入れるだけじゃなくて、街のコミュニティーと触れ合うことだったのよ。街が賑やかだった頃は、街には街の暮らしの臭いがした。巷の会話と情報が溢れていたわ。そしてその街ならではの居心地のよい文化があった。またそこに身を置きたくなるような」
「まったくだ。ニューヨークの五二番街のジャズ・コミュニティーもそうだった。でも潰れはしないぜ。若者や観光客に支えられながら、また息を吹き返してきている。どうして日本人は古いものを大切にしないんだい」
「日本は、アメリカンドリームの国とは違うわ。古くて、狭くて、何の資源もない国なのよ。だから新しくなるためには古いものを崩さなくてはならないの。崩すものを大切にしながら新しくなれるものかしら、エルヴィン」
「ああ、ジャズの世界には、エリック・ドルフィーやジョン・コルトレーンやアルバート・アイラーのような男たちがいて、命がけでソウルを大切にしながらジャズの未来を切り開いてきたんじゃないか。崩してはいけないものがあったからこそ、新しくしてきんたじゃないか。新しくしなければならなかったからこそ、古いものを突き詰めてきたんじゃないか。それが所詮重箱の隅を突くようなちっぽけな出来事で、政治や経済のような大きくて勇ましい世界とはちがうことと思うかい、ケイコ」
「いいえ。それにあなたもよ、エルヴィン。あなたたちこそ本物のイノヴェーターよ」
エルヴィンの横顔の瞳には、現れては消えて行く店の明かりが映っていた。ケイコは、その頬に軽くキスをするのだった。

♥♡♥♡♥♡

二〇世紀も終わりに近づいてきた年の暮れであった。

大みそかを、みちのくのジャズ喫茶「ベイシー」恒例の年越しライヴで過ごすために、エルヴィンらジャズマシーンの一行は岩手県の一関に向かっていた。何度も通る道であったが、初めて通る道のように思えた。昼間見る日本の山あいの風景とは、こんなに幻想的なものなのかと、エルヴィンは飽きることなく眺めるのだった。
延々と雪景色を映し出してゆく車の窓に、見覚えのある山並みが現れた。初めて通る雪山の景色を懐かしいなと感じた瞬間、彼の心の銀幕に一連の写真が甦ってきた。
それは半世紀も昔の、まだ彼が軍楽隊にいた頃の記憶であった。
意識の表面では忘れ去られていても、記憶とは、いつか思い出される日を待って、心の底に沈んでいるものかもしれない。しかも決して眠ってはいないのだ。
(あの日偶然に出会ったことが、心の底で、おれの人生を導いてきたのかもしれない)
と、エルヴィンは思った。
「そう、キンジロウだ。ケイコ、おれはどうしてもキンジロウを見たいんだ」
ケイコは、車を停めては、数少ない、老人ばかりの歩行者に、小学校の場所を尋ねて回った。
一面に雪が積もった田んぼの中の農道を走ると、小高い丘の懐に、石の門柱が立っていた。雪に足を取られながら、エルヴィンとケイコは門をくぐっていった。しかし、そこには、もはや校舎はなかった。
一面に雪の積もった寒々とした空き地を背にして、苔むして黒ずんだキンジロウ像は歩き続けていた。背負った薪にも、手にした書物にも、白く雪が積もっていた。
「まあ、重たそう」
と、ケイコは台座に上がって、像に積もった雪を払いのけた。エルヴィンは像を見つめたままその場を動こうとしなかった。
ベイシーのライヴで、エルヴィンはドラム・ソロを叩いた。打ち終わったあとの店内は静まり返った。雪の降る音さえ聞こえるかと思えた。やがて沸き上がった拍手は、なかなか鳴り止まなかった。司会がエルヴィンに曲名を尋ねた。
「ジャイアント・ステップス・オブ・キンジロウ」
と、彼は答えた。
プログラムが終わったあと、ベイシーのマスターは、思いきって尋ねてみた。
「エルヴィン、あの凄まじい演奏の最中って、一体どんなことを考えているんだい」
彼は、
(ドラマーに当たり前なことを聞くなよ)
というような顔をしてこう言った。
「みんなのことさ」

ハート・トウ・ハート　完

漢詩

潮騒録（四十九）

鯨游海

賀丁亥春　　平成十九年元旦

世人輕侮突猪才
而歎紅顔再不回
大志少年須猛進
蕾枝誰折萬花開

押韻・才回開

〈丁亥（猪）の春を賀す〉

世人軽侮す　突猪の才を
而うして嘆く紅顔　ふたたび回らざるを
大志の少年　須らく猛進すべし
蕾ある枝を誰か折らん　万花開くに

〔注　解〕

世間一般の常識である直情を軽侮する四字熟語「猪突猛進」を逆手にとって作った詩。「大いに突進すべし」と説く。中老年を除く若い人、少年に限っての事だが。

世人＝世の中の人。ここでは俗世間の大衆。つまり「君子の如き士大夫は別として」のニュアンスを含む。
軽侮＝かろんじあなどる。やや馬鹿にする。
突猪＝猪突。平仄の関係で顛倒して用いた。
紅顔＝若者。少年。
須らく＝当然…すべきである。…するのが当然だ。
蕾＝つぼみ。なお雷は平字であるが蕾は仄字。
誰折＝反語。「誰が折るであろうか。誰一人として折ったりはしない」。「折らない」の強調。なお起句の世人に対し、折らないのは「教養ある士大夫ならば」のニュアンス。結句は中唐の女流詩人、杜秋娘の金縷衣「勧君莫惜金縷衣　勧君須惜少年時　花開堪折直須折　莫待無花空折枝」を意識している。

☆少年よ一途に走れ猪のごと
　明日咲く花を誰か折るべき

孔子之一生（十二）仕　官

平成十七年子月

三桓凋落帝威昭
敕命飛來當列朝
一國一城宰如夢
善政忽顯氣彌喬

押韻・昭朝喬

〈孔子の一生（十二）仕　官〉

三桓凋落して　帝威あきらかに
勅命飛び来たる　「当に朝に列すべし」と
一国一城の宰　夢の如し
善政たちまち顕われ　気いよいよ喬し

〔注　解〕

昭＝光り輝く。はっきり表われる。朝＝朝廷。政治。宰＝宰相。ここでは城邑の長官。なお敕は勅の正字。

理想の政治を行なおうと学問や教育に励み世に出る機会を待っていた孔子に終にチャンスが到来した。

大臣や高官の職を専横していた三桓が、クーデターに失敗して一挙に勢力を失遂したからである。このことは逆に定公からみれば、失なった権威を取り戻す絶好のチャンスといえた。定公の勢力拡大には人材が不可欠であり、孔子に白羽の矢が立てられた。

「孔子よ、わしに仕えてくれ」。この定公の言葉こそ長年待ち望んだものであり、遂に夢が叶ったのである。

陽虎や公山弗擾から誘われた時は陪臣に過ぎなかったが、今回は君主定公からの直接の任命であり、いわば直臣で格が違っていた。取敢えず孔子は、中都という城邑の宰（長官）に取り立てられた。

勇躍し赴任した孔子は善政に努め、減税を行なう等財政改革に実効を挙げ好評を博した。更に一年後は中央に呼び戻される。小司空（財務・建設次官）という有力ポストで、従来は孟孫氏が握っていた。期待に違わぬ働きで次に司寇（法務大臣兼警視総監）に大抜擢された。

これは司徒、司馬、司空と並ぶ閣僚ポスト、いわゆる執政に昇格したのである。孔子の政治上の絶好期である。

☆夢に見し理想の政治行なわん
　一国一城いまあるじなり

孔子之一生（十三）夾谷會談

平成十七年子月

齊魯血盟筵坐闌
登場妖艶舞姫團
雖陰看破懐中劒
婉曲糾彈排國難

押韻・闌團難

〈孔子の一生（十三）夾谷の会談〉

斉魯血盟して　筵座たけなわなり
登場す妖艶なる　舞姫団
陰に　懐中の剱を看破すと雖ども
婉曲に糾弾して　国難を排したり

〔注　解〕

血盟＝春秋時代、他の国と盟約を交す場合、生贄の動物の首を刎ねてその血を互に啜り厳守することを誓った。
筵坐＝宴坐＝宴席。筵は竹で編んだ座席。看破＝看破る。糾弾＝罪を問い糺し非難する。
國難＝ここでは君主定公が殺される危機。領土返還を反故にされる危機。更に魯が斉に併呑されかねない危機。
魯の国定公十年（紀元前五百年）魯と斉の間で世に名高い「夾谷の会談」が行なわれたが実は和平に名を借りた恐ろしい陰謀が隠されていた。武威を誇り野心ある斉は予て晋と誼を通じる魯に対して、定公を殺害し更に理由をつけて領土そのものを併呑して了うという策謀であった。この時孔子は定公の介添役という大役を担って参加していた。血を啜る儀式の後、会談が始まる。折から斉の宰領役が「和平会談をお慰めする為、舞踊と音楽をご披露したい」と楽団と舞姫を登場させた。危うい哉！

☆武威おごり国を呑まんと迫れども
　礼有る国は微動だにせず

孔子之一生（十四）三桓征伐

平成十七年丑月

輔君誅佞伐三桓
減税施仁百姓安
路上貨財無掠者
羊頭狗肉莫欺瞞

押韻・桓安瞞

〈孔子の一生（十四）三桓征伐〉

君を輔け佞を誅し　三桓を伐つ
税を減じ仁を施こし　百姓安んず
路上の貨財　掠める者なく
羊頭狗肉の　欺瞞なし

〔注　解〕

佞＝才があって心のよこしまな者。おもねる。へつらう。誅＝罪のためにみせしめに殺す。百姓＝日本語の農民ではなく、万民、大衆を指す。貨財＝金めの財貨。
羊頭狗肉＝店頭に羊の頭をぶら下げておき実際には犬の肉を売る＝看板に偽りあること。無門関「懸羊頭賣狗肉」。ここではそのような商人が居なくなったこと。
地方の宰（長官）として敏腕を揮った孔子は中央に呼ばれ司寇（法務大臣兼警視総監）として、先の夾谷の会談で成功、外交的手腕を発揮、陰謀を看破る等名声を博した。続いて内省の改革に着手した。
先ず三桓の拠点である三城のうち二城の砦を破壊し私兵を禁止することに成功した。更に叔孫氏の郈邑を取壊し次に季孫氏の費邑を攻めた。ここは以前高弟の子路を大臣として送り込んでいたので彼と協力、あの公山弗擾が激しく抵抗したが遂に戦闘に勝ち、公山弗擾は陽虎に続いて斉に亡命した。
残る一城は孟孫氏の成邑城だけとなった。ここには公敛処父という名臣がいた。彼は、斉に対する防衛拠点として取壊しに反対した。確かに正論であったので、孔子もここの取壊しは断念せざるを得なかった。
しかし三城のうち二城の取壊しに成功し、併せて三桓の私兵や権益を放棄させる等の成果を挙げ、孔子の名声は内外に一段と高く響き亘った。魯国一の実力者となった。孔子五十六歳（孔子に喜色あり）と伝えられる程まさに人生の絶頂期にあった。永年の夢が実現した。
三桓が片付くと中央政庁内の粛正にも着手した。
（君主定公を頂点とし、定公が魯の国全体を掌握する）という理想の政治体制の実現には、少正卯という実力者を倒す必要があった。孔子は敢然とこれを死刑にして了う。理由は五悪を挙げ国政を乱した罪であった。遺体は三日間見せしめの為朝廷内に曝した。仁者孔子の強烈な一面である。以後魯は良く治まり民の道徳心も向上した。
なお後掲短歌の「立つ立つ」は万葉集・舒明天皇・國見の歌「大和には　群山あれど　とりよろふ天の香具山　登り立ち國見をすれば　國原は煙立つ立つ　海原は鷗立つ立つ　うまし国ぞ　蜻蛉島　大和の国は」より。この時代、動作の反復、継続は終止符を重ねる事で表現した。現代では「立ち立つ」と連用形、終止形とする。
丑月＝十二月。大呂、臘月ともいう。師走は和語。

☆吠ゆる声曲阜の里にこだまして
　烟立つ立つ春は来にけり

孔子之一生（十五）美女軍團

平成十七年丑月

美女群團歌舞妖
定公惑溺不催朝
是將傾國齊謀略
無奈挂冠廷外消

押韻・妖朝消

〈孔子之一生（十五）美女軍団〉

美女軍団　歌舞妖かし
定公惑溺して　朝を催さず
これ将に　国を傾けんとす斉の謀略（註）
いかんともするなし　冠を掛けて廷外に消ゆ

〔注　解〕

惑溺＝心が迷って悪事に溺れる。

傾國＝①国を傾けつくす。国を危うくする。②世にも稀な美人＝白樂天・長恨歌「漢皇重色思傾國」。ここでは①。また傾城とも同義。無奈＝無何＝どうしようもない。挂冠＝官職を辞す事（後漢書・逢萌伝）。廷＝役所。

(註)この上句は『これ傾国（美人）を将いし』とも詠める。

孔子の善政により魯は繁栄して来た。隣国の斉にとっては面白くない。まして孔子には先の夾谷の会談の際、陰謀を見破られ恥をかかされた恨みがあった。

斉の謀臣黎鉏が景公に提案したのは「女と馬とで定公はじめ魯の高官を骨抜きにして攪乱する」というものであった。古来、美女に溺れ国を滅ぼした王は多い。夏の桀王は妹喜に、殷の紂王は妲己に、更に周の幽王は褒似の色香に迷い国を傾けた。これらから傾国とは「美女」を指す語ともなった。早速見事な馬を贈り舞踊を演じた。

そもそも斉は海に面した所で製塩はじめ経済力があり従って商業活動も盛んで文化水準も高い。舞楽、演劇も盛んで流行をとり入れセンスがあり美女も多い。

一方の魯は田舎で質実剛倹、換言すれば歓楽がなかった。黎鉏の作戦は成功した。定公や高官は斉の爛熟した文化の虜となり政治をおろそかにし始め、緊縮財政を説く孔子が邪魔になる。孔子も定公の堕落に失望辞職する。

☆傾国の罠に掛かりし王数多
戎馬も不如美女の細腰

定公の堕落等改革の道半ばで挫折した孔子は、追われるように遍歴の旅に出た。前四九七年五十六歳の時。以後十四年間、孔子を登用し「仁」の政治を行う君主を探求しての「求道の旅」であった。この時代一門の弟子を連れての大移動は種々の危険や困難を伴なう。それ等を乗り越え、理想を実現するという強い志がなければ出来ない壮挙であった。

同行した弟子は子路、子貢、顔回、公良孺、冉有、子夏、子游等々多士斉々で、皆同志として固い絆に結ばれていた。子路は世慣れた武の人、子貢は才たけた経済に明るい能吏、顔回は精神面のブレーンといえた。

孔子の名は天下に周知されていたので君主に逢う事も不可能ではなく、手厚いもてなしを受ける事もあったが逆に暴漢や無理解な一派によって迫害もされた。しかし彼の理想を認め行政に重用しようとする明君はなかなか見つからなかった。

即ち孔子の政治理念が現実ばなれする程高すぎたからでもある。この事は後世の人類にとって却って仕合せであったかも知れない。為に儒学という思想体系がのちに完成されることになったからである。

☆吾にこそ仁ある政治執らしめよ
名君いずこ今日も旅征く

孔子之一生（十六）遍歴
平成十七年丑月

出國一門求道途
千山萬里轉蓬徒
改知苛政猛於虎
何處明君重用吾

押韻・途徒吾

〈孔子の一生（十六）遍歴〉
国を出でし一門　求道の途
千山万里　転蓬の徒たり
改めて知る「苛政は　虎よりも猛し」と
何処ぞ明君　吾を重用するは

〔注　解〕
轉蓬＝風に吹かれて飛ぶ枯よもぎ。転じて、流浪して居所の定まらない事の喩え。曹植「轉蓬離本根」。李白・送友人「青山横北郭　白水遶東城　此地一為別　孤蓬萬里征」。徒＝ここでは一門の仲間達。生徒。仲間。

苛政猛於虎＝苛酷な政治（重税等）に苦しめられている人民の苦痛は、虎に父や夫が食われた寡婦の苦しみよりも甚しいこと。禮記「孔子が泰山のほとりを通った時一夫人が泣いていたので理由を聞くと、舅と夫と息子までが虎に食われて死んだと答えた。孔子がこんな恐ろしい土地からどうして去らないのか？と問うた所、ここは苛政が無いからと答えた」という故事。丑月＝十二月。

孔子之一生（十七）衛國訪問
平成十七年丑月

一來衛國賴靈公
雖諾登廳志不通
無役祿高臣嫉視
難期大望去忽忽

押韻・公通忽

〈孔子の一生（十七）衛国訪問〉
ひとたび来たる衛国　霊公を頼りて
登庁を諾すと雖も　志は通じず
役あらざるに禄高ければ　臣嫉視す
大望を期し難ければ　去ること忽々たり

〔注　解〕
登庁＝ここでは官職に就くこと。志＝ここは一門の懐いている仁政を実践するという大きな志。祿＝俸祿。
嫉視＝妬み見る。忽忽＝あわただしい様子。

最初に西方の衛に旅装を解いた一行は、子路の縁者の弥子瑕の紹介で霊公に謁見した。魯と衛は開祖が兄弟であり且つどちらも弱少の農業国で共通の悩みを有していた。霊公は高祿で迎えはしたが役を与えなかった。理由は家臣の嫉妬と中傷。こんな志の低い君臣に用無しと去る。

☆民想ふ吾がこころざし解さざる
凡愚の君に用は無きなり

孔子之一生（十八）匡之難

平成十七年丑月

途上匡人襲一門
修羅場裏泰然言
未教吾喪周文化
若有欲誅天盍援

押韻・門言援

〈孔子の一生（十八）匡の難〉

途上匡の人　一門を襲う
修羅場裏　泰然として言う
「未だ吾を教て　周の文化を喪わしめじ
若し誅さんと欲する有らんか　天盍ぞ援けざる」

〔注　解〕

匡＝宋の国に在る地名。修羅場＝騒然としている場所。泰然＝慌てないさま。泰然自若。自若は自然の如し。誅す＝罪によって殺す。ここでは無実なのに人違いによって襲撃され殺されかけた事をいう。教＝使（使役）盍＝何不＝なんぞ…せざる。どうして…しないのか（…しない筈はない＝必らず…する）。

衛の君主に失望した一行は陳に向った。途上宋という小国の匡という所で突然襲われ補縛され殺されかかったのである。原因は孔子の御者である弟子の顔刻の不用意な発言からであった。「昔、陽虎とこの匡を襲った時、私はあの城壁の隙間から押し入った」と懐古談をしたのだがこれを聞いた町の人々が（また陽虎が押し入って来た）と勘違いして大騒ぎとなったのだった。

弟子達は震え上り釈明に努めたが、匡の司馬である桓魋は孔子を誅殺しようとした。これを世に「匡の難」という。

さてこの詩の転、結句は論語より引いている。

巻五子罕篇第五章「子畏於匡」曰、文王既没　文不在茲乎　天之将喪斯文也　後死者不得與於斯文也　天之未喪斯文也　匡人其如予何」および巻四述而篇第二十二章「子曰く　天生徳於予　桓魋其如予何」の両章である。

（文王は既に亡いが、その文化はこの我が身に伝わっているぞ。天がこの文化を滅ぼそうとするなら、後世の人はこの文化に携われない筈だ。天がこの文化を喪ぼさないからには、徳を伝える使者として私を生かすであろう。匡の連中ごとき、桓魋ごとき、わが身をどうしようぞ）。

文化、仁礼の伝導者として、孔子の漲る信念と自信に溢れた言葉ではないか。恐怖におののいていた一門の徒は、泰然自若とした孔子のこの一言に救われた。「天が私に徳を得させ、伝導者として命じたからには、必らず私を援けてくれるに違いない」

やがて誤解が解け、六日目に無事解放された。

☆後の世に周の文化を伝へむか
　天必ずや吾を佑けむ

古い物・遠い夢

忠内正之

第十二章　茶道具三昧

（六）小堀遠州の書跡二幅

—真贋のあわいの中で—

永年に亘って骨董品（茶道具）収集を楽しんで来た。経験も資金も乏しいので小物買いに終始して来た。この結果真贋を心配する様なケースに遭遇する事態は殆ど無かった。

大きな名前のものはケガをし易い。ひとりよがりの欲目は陥穴にはまるもとゝなる。だが予期せぬ成功を収めることもある。試行錯誤の繰返しだが、たまらぬスリルがあって止められない。

少し生意気になった中で、私も到頭贋物にひっ掛ってしまった。かなり大物なので傷手は大きいが相当以前に買った品で悩んでも遅い。この稿ではその失敗談を恥を忍んでお話ししたい。

先ず斯界の先輩の一言を伺って見よう。

◎　小林秀雄の「真贋」より

評論家で美術品の愛好家であった小林秀雄は随筆「真贋」の中で次の様に言っている。

『ニセ物は減らない。ホン物は減る一方だから、ニセ物は増える一方という勘定になる。需要供給の関係だから仕方がない。例えば「雪舟」のホン物は、専門家の説によれば十幾点しかないが、「雪舟」を掛けたい人が一万人ある以上、ニセ物の効用を認めなければ、書画骨董界は危殆に瀕する。商売人は、ニセ物という言葉を使いたがらない。ニセ物と言わないと気の済まぬのは素人で、私なんか、あんたみたいにニセ物というたらどもならん、などとおこられる。相場の方ははっきりし

ているのだから、ニセ物という様な徒に人心を刺戟する言葉は、言わば禁句にして置く方がいいので、例えば「二番手」だという、ちと「若い」と言う。「ショボたれている」と言う、みんなニセ物という概念とは違う言葉だが、「二番手」が何番手までを含むか、「若い」が何処まで若いかは曖昧であり又曖昧である事が必要である。そんな言葉の綾ではいよいよ間にあわなくなって来ても、「イケない」、とか「ワルイ」とか言って置く。まことに世間の実理実情に即し物を言っているところ、専門文士の参考にもなるのである』。

◎　中島誠之助の「やき物鑑定五十年」より

「なんでも鑑定団」の花形鑑定士を勤める中島誠之助は著書の中でこう言っている。

『この世界は、ホンモノが登場するかぎりニセモノがあとを追う。いまいましいが、これは防ぎようがない。そこでひっかからないようにするには、最低でもつぎの条件を心に銘記するべきだろう。

まずホンモノは、そうそうそこいらに転がっているものではないということだ。いいモノはあるべきところにあるのだ。そしていいモノは高いのである。決して安い値段では手に入らないのだ』。

以上の様な理屈は誠に尤もと同感するが、注意している積りが、凡人の浅ましさというか、助平根性と言うべきか、つい旨い話には乗ってしまうのである。それに眼力の乏しさが輪をかけるのだから仕末が悪い。

前置きはこの位にして本題に入ろう。小堀遠州の書跡二幅についてである。偉大な茶人の書であり私の大切な贋品である。

先ず遠州公の事跡から見よう。

◎　小堀遠州について

〈一〉　小堀遠州（一五七九―一六四七）は、江戸時代初期の大名。天正七年、近江国坂田郡小堀村に生まれた。初名を作助、のち政一と称した。

〈二〉　父・正次とともに、豊臣秀吉（一五三六―一五九八）に仕えたのち、徳川家康（一五四二―一六一六）に従った。慶長九年（一六〇四）、父が没し、家督を継いだ。同十三年従五位下・遠江守に叙任、ゆえに以後、遠州の名に呼ばれる。

〈三〉　作事奉行として活躍した。後陽成院御所に始まり、伏見城・大坂城・二条城ほか公武の建築物の造営・修理を担当した。また、作庭にも優れ、仙洞御所・二条城二の丸庭園などの遺構を伝える。

〈四〉　正保四年二月六日、伏見において没した。時に六十九才。

〈五〉　茶の湯を古田織部（一五四三―一六一五）に師事、千利休（一五二二―一五九一）・織部とともに三大茶人と呼ばれる。寛永十三年（一六三六）、品川御殿にて三代将軍徳川家光に献茶、以後、茶道師範をつとめた。遠州流茶道の祖。その茶道は明るく大らかで、古典趣味に基づいた〝きれいさび〟の茶を主張した。

〈六〉　早くから、大徳寺第一一一世住持の春屋宗園（一五二九―一六一一）に参禅。慶長十四年、三十一才の時、「大有宗甫」の号を許された。宗園によって開眼された禅学の素養は、遠州の茶の湯、人生観に色濃く投影されている。なお、大徳寺塔頭の一つである孤蓬庵は、遠州が自らの菩提所として創建した寺である。

〈七〉　和歌を冷泉為満・為頼父子、さらに木下長嘯子に師事してよくした。遠州の定めた中興名物（茶道具の当時の名品の位付け。和物の集成評価）の銘には物語や古歌を出典として命名されたものが多い。

〈八〉　書は、熱狂的な定家流の信奉者で、屈指の名手であった。遠州の歌道の師、為満・為頼父子も定家流の書き手であり、その影響もさることながら、当時代歌壇における定家は、すでに神格化された存在であった。

〈九〉　遠州は定家卿を深く慕ったことは歌銘などによっても知られているが、「定家様」の書体を信奉した遠州の打ち込み方とその能筆振りが窺えるつぎの逸話が有名である。

「逸話」

前田利常公は、定家の軸を買い求め、かねてより大切なものとして愛玩していた。ある日の茶会にそれを床に掛けて遠州を招いた。

一説ではそれは極めて貴重な「小倉色紙」であったとも言われる。ところが遠州はその軸を一瞥したのみで、一向に賞美する気配がない。一座の雰囲気はすっかりしらけてしまった。そこで茶頭（お茶係）の一人が耳うちした。

「実はあの軸は定家卿の歌切でありまして、遠州公に御覧に入れるため、わざわざ利常様が掛けられ、お招き申し上げたのでございます。是非共御覧下さいま

せ」

と言ってきた。それを聞くと遠州は笑いながら「いやあの掛物は定家卿ではありません。まぎれもなく私の筆跡です。それ故に最前から気づいていたのですけれど、利常公は馳走のためにわが筆跡を掛けられたのかと思い、はて一礼を述べるものかどうか思案しておりました。自分の手跡を誉めるのも気はずかしい思いがしますので」といった。茶頭は返事に窮し、たゞ遠州の能筆を驚嘆したという。

察するに定家を追慕してその筆跡に憧がれた遠州が勉強のため定家を臨書したものが、定家書として流れたものであろう。

◎ 中世の茶道を完成した偉人遠州は数々の彼が係った茶道具を遺しており現在も珍重されている。例えば自作の茶杓とか、指導して焼かせた茶碗、茶入、香合等である。

書跡もまた貴重なもので、消息（手紙）や歌切（色紙）は茶掛けとして伝わってきた。

時期を相前後して私は遠州筆の消息と歌切の両方を所有する幸運に恵まれた。

次にこの二幅を紹介する。

一、御茶のこと（松平庄右衛門宛）
小堀遠州　消息（手紙）

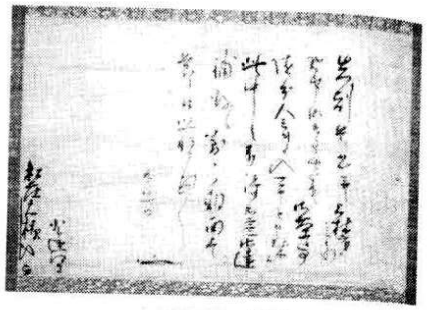
〔釈文〕

先刻尊書并上林方より
返事御もたせ被下候御茶之事
随分念ヲ入可申と申来候
此中は不得御意御遠々
鋪存候万々期面上之
節候恐惶頓首
廿五日　（花押）

小遠江守
松庄右様　政一
貴報

〔本文　解説〕

『先程は、御書状と、上林からの、お茶について充分に心いたしますとの、返書を拝見いたしました。近頃は御無沙汰を致しておりますが、お目にかかれる機会を頂きます。』



小堀遠州　消息

平成十八年一月「小堀遠州の書状」第二巻が遠州流宗家から発刊された。この消息は他の七十六通の手紙と共に編集されている。この本に載せられた本消息の解説は次の通りである。

先ず文中の「上林」は宇治の茶師で頭取の家柄である「峰順」か「竹庵」かと考えられる。

宛名の「松庄右」とは年齢や立場などから勘案して「松平庄右衛門清直」と思われる。

「清直」は徳川家康以前からの〝三河松平〟いわゆる〝十八松平〟の中の〝長沢松平〟の流れを汲む。「家康」の六男「上総介忠輝」に仕えたが、「忠輝」が罪を得て伊勢朝熊に配流されるに及んで改易され流浪の身となった。しかし名家の流れを惜しむ将軍「家光」に召出され、三河国宝飯郡形原にて五千石を賜わり「家光」の側近となった。この地域は〝三河松平〟縁故の地であり、「家光」の「清直」の家柄にたいする心入の配慮であった。

この形原の地は私にとって懐かしい故郷「吉良」と隣接しており、三河湾に面した温暖で明るく物産豊かな地域である。「清直」は「遠州」の五才下で、三十三年この地を領し、六十八才で生涯を終えた。

「遠州」は「家光」の茶道の師であった。側衆である「清直」とも親しい交際があったものと思われる。この消息も家光主催の品川御殿茶会に関する一連の打合せのための手紙の一つと思われる。

この消息は遠州流宗家の確認があり、宛名、内容も史実に基づく裏付けがある。書状集にのっている他の消息文と比べても、流れる様な書体は全く同一で真筆の手紙である事は間違いないところである。

表装も時代があり、大切に扱われたらしく古びて品格が残っている。

私の手許に来たのは十数年以前である。手紙だけに素直さがあって遠州の人柄にふれる思いがする。永年茶掛けとして、楽しんで来た。尚、遠州流宗家に確認して貰い、書状集に採り上げてもらったのは、この二年程以前のことである。

元来茶掛けとは神聖なものであらねばならない。神佛祭りの形式を精神とする。後に多少軟化して、貴人・高僧の禅語の一行等が主流となった。現在では茶道の普及によって一層、茶掛けの需給が逼迫したので、色紙・消息・懐紙迄の使用が一般化されて来た。侘茶の流行によって更に利用価値が高まった。

貴重な一品として今後共大切にするつもりである。

二、小堀遠州〝豆色紙〟

おもい いてよ

前述の〝遠州消息〟を手にいれて有頂天になり遠州の業績や人となりを書物で勉強するにつれてすっかり遠州の魅力にひかれ、おこがましい話だが遠州びいきになった。

その結果、今風にいうと〝遠州グッズ〟の茶道具にはまることとなった。注意して見ると茶道具の世界では遠州物が数多く散見される事に気付いた。しかし数は多くても、確りしたもの、気に入るものを手頃な値段で買うことは極めて難かしい。この頃になると私の目も多少肥えて来ていたのである。良い物を見るとたまらなく欲しくなるが、あるべき金が伴わない、そこが悩みだった。

遠州消息を買って約一年後のことである。旧知の美術商から「遠州」の色紙が入ったとの連絡があった。早速とんで行った。

見ると掛軸の表装は古くてボロボロ、吊紐は切れかゝっている。箱は壊れかゝっており「宗甫公色紙」と微かに認められる程の筆跡が認められる。

中の色紙はと見れば、色紙の字は確かりしており定家様の書体は極めて優美である。かつて私はかの有名な〝小倉色紙〟の本歌を目の当りにする機会があった。それは「在原業平」の〝ちはやぶる〟の一首で、定家の真筆に間違いのない一枚であった。流石定家の筆勢は、ダイナミックで美しく、その迫力に圧倒されたものだ。

遠州の定家様の色紙の書跡はこれに比べて些かも見劣りしない、出藍の誉れとも言うべき独自の雰囲気がした。

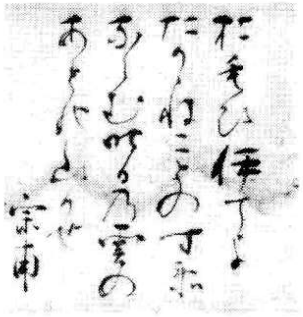
値段はさ程高いとは感じなかった。早速とびついて買った。新しい表装に仕立て、又箱も更新した。購入時に定評ある古筆字研究所の認定書も付けてもらった。

以下認定書より抜粋する。

〔原文〕

おもひいてよ
たかゝねことのする
ならむ昨日の雲の

あとの山かせ
宗甫



小堀遠州　豆色紙

「出典」は『新古今和歌集』巻第十四　恋歌四
「藤原家隆」作である

〔調書〕より抜粋

〈一〉この一幅は一片八センチM弱の四方の極めて小さな色紙に「藤原家隆」の詠歌一首を書き付けたものである。こうした色紙は、小色紙より更に小さいということで、〝豆色紙〟と称している。巻子本や冊子本であったものを一首ごとに切断したものではなく、これはあらかじめ打曇りの紙を小さな色紙の形に切って用意したものである。

〈二〉極小の文字ながら、達者な定家流。偏癖の強い定家の書風の単なる模倣ではなく、これはすでに遠州自家薬籠中のものとなっている。

右により、この豆色紙一幅は
小堀遠州の真筆と認定する。
〔古筆学研究所〕

この茶掛けを手に入れて、遠州の流れる様に優美な書体を惚れ惚れ眺めながら所有欲を満足させた。

色紙に書く歌や、茶道具の箱書きの歌銘に「恋歌」を好んで用いたのは「遠州」が初めてであったという。謹厳な大名茶人の粋な一面を窺い知る様で楽しい。

「遠州」の消息は貴重な資料として認められ、侘び寂びの茶掛けにもってこいである。之に対して遠州の色紙は数少ない存在で華やかな感懐を与えて、本格的な茶会に充分に使用出来る。

過去十数年の間、茶会・茶事に屢々飾って客人の注目を浴びて来た。

〔贋作の疑念発生〕

所有して十数年、名品の豆色紙を所有する〝多幸感〟に浸って打ち過ぎて来た。ところが思いがけない事態が

生じた。

事もあろうに愛玩の豆色紙が贋作ではないかとの疑いが発生したのである。

事の起りは平成十八年春頃のことである。流祖小堀遠州から数えて遠州流十二代小堀宗慶氏は家元こそ十三代宗実氏に譲ったが、大宗家として今も君臨している。裏千家大宗匠「鵬雲斉」と同年で共に現在の茶道界の重鎮である。

前述の〝遠州消息〟を資料として提供した縁で宗慶師と近付きになる事が出来た。遠州公の再来とまで言われる秀れた才人であると共に能筆且つ茶道具の目利きとして定評のある方である。消息の方がパスしたのでこの色紙の方も、箔をつけてもらいたく自信をもって箱書きをお願いしたのである。

流祖の直系である宗慶大宗家に極めをもらえば完璧である。何故もっと早く気付かなかったのか？と気楽な気持ちて、お願いしたのである。

箱書きをしてもらうには、期間がかなり掛る。一つには、流派の指定業者による箱を新調しなければならない。二つには、偉い先生だから極めて多忙なので鑑定を急かす訳にいかない。三つには、物の良否の判断に念を入れるからと思われる。

宗慶師は自らよく調べた上、自分でサインすると言う。第一能筆家である宗慶師の署名を代筆する事は到底不可能であるが。

依頼してかなりの月日が経過するが仲々出来てこない。箱は担当以前に出来上った筈である。矢張り偉い先生の鑑定には時間がかゝるのだなあと思った。催促も出来ないので唯待っていた。

相当遅れて返事が来た。「偽物の疑いがあるので箱書不能につき返却する」。とのご託宣であった。

寝耳に水とはこの場合を言うか？良かろうという取次者の判断もあって、（因みに取次の方もかなりの眼利きである）。遠州流の合せ箱を先行して作ったのに全く不本意である。

憤懣やる方ないが、お願いする立場であれば権威者に抗うことは出来ない。次回別件をお願いする事もあるかも知れない。こゝは大人しくひき下った方が得策だと思った。

間に立った方に、偽物だという理由を尋ねても、気の毒そうな態度はするが、はっきり言わない。強く迫ると、「色紙の歌の文字は及第するのだが、宗甫の署名が弱い」という。更に突込むと、「一番重大な難点は次の通りである。遠州公は抑々自詠の歌でない限り「宗甫」の署名をしない。従って家隆詠の歌に自署するのは不自然である。」なる程自作の歌でなければ自署しないのが当然か？然らば古筆学研究所の認定は出鱈目か？私は驚愕と落胆のため瞬間眼前が暗くなるのを覚えた。

取次いだ方は更に「（宗甫）の署名は歌文字に比して筆勢が頗る弱い。本物にあとで持主が勝手に署名を追加したのではないかとも思われます。墨字を技術的に消すことも出来る様ですが。」と慰め旁々暗に救済措置を教えてくれた。だが私はそのまゝひきとった。

表現は優しいが間接的に伝わる宗家の判断は「これは偽物である」の一言につきると覚ったからである。自己責任で治めるより他ないのだ。だが迷う。

表具業者の技術を頼んで、署名を消してしまえば、宗家の箱書きがもらえる。箱書きがあれば物は良いのだから、売る場合通りが良くなり、かなり上値で処分出来るであろう。しかし歌文字そのものも贋物かもしれないしその様な行為は遠州公への冒涜となる。そう考えた挙句、今後は門外不出として自宅の書庫の筐底深く凍結することに定めた。

◎　反省として

遠州公の豆色紙は極めて貴重な存在である。宗家の茶席以外で目にした事は皆無である。「雪舟」の作品ほどの稀少さは無い迄も茶人にとっては垂涎の一幅である。

かなりレベルの高い能筆家が臨書したものか？またそれを得た人が箔を着ける目的で署名を書入れたものか？表装・箱の古さから見てかなりの時代を経ているのは相違ない。とすれば遠州公当時の側近か関係者の仕業かも知れない。

冒頭の小林秀雄の言によればこの様な場合、「贋物」と言ってはいけない。「二番手」だとか、「若い」とか、「ちと弱い」とか表現するのが妥当だという。

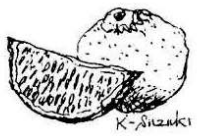
また中島誠之助は「良い物」がそんな安い値段では転がってはいない。在る処に高い値段で存在するのだと言っている。

私は反省する。遠州公の関連品が私の周囲に短期間に次々と表われたため幻惑されたこと。次に豆色紙の文字が大変秀れた出来であったこと。更に古筆学研究所の認定書を頭から信用してしまったこと。また、値段が前述の消息に比してかなり割安であった（本来色紙の方が数段価値は上なのに）等々チェックすべき点があったのだ。何より買いたいとの気持が先行したのが災の原因であった。

しかし一期一会買い取るチャンスを逃せば先ず絶対にその物は再び現われない。逃した魚は大きいのである。失った恋人の様にいつ迄も頭から消えない。

買えなかった後悔は、買った後の失望の悔いと比べても先の方が遥かに辛いものである。だから懲りないでリスクを省みず、挑戦するのである。生きている證の様に。「魯山人」も言っている「途方もない考えを持たなけれ

ば、途方もない結果は得られない。」
私はこれからも懲りずに骨董地獄の中をさ迷うのであろうか？途方もない志を抱いて。



社　告（内規）

☆　同人参加へのお誘い

私達はひろく同志の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆　維持会会員へのお誘い

本誌愛読者の内、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数カ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行ない、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行なっております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

針の穴を通った駱駝（六）

鍋屋次郎

天正十五年（一五八七）六月、秀吉が発したキリシタン禁制により大名の地位も領地も捨てた高山右近は、前田利家の好意により、前田家の客将として、キリシタン信仰と茶道の日々を過ごしていた。とはいうものの、前田家の客将である限り、前田家の出陣に際しては一方の将として従軍していた。

秀吉によるキリシタン弾圧は当初のみで、その後は目立った動きはなく、静かに行われているキリシタン宣教は黙認していた。しかし、四年前の天正十五年（一五八七）六月に破壊された天主堂は跡形もなくなっていた。

そして今、高山右近は、京・大坂にいたバテレンが平戸に追われたまま帰ることができない状況の中で、信仰の指導者を失った信徒のことを思い、京都に隠れているオルガンチーノと連絡を取り合って、彼自身京に来て日本人イルマン（修道士）に、孤独な信仰を守り続けている各地の信徒を訪問し励ますよう依頼していた。

天正十九年の正月は、前年に北条氏を滅ぼし、伊達政宗も、秀吉に主従の誓いをしたことにより、晴れて天下統一の念願が叶った秀吉は、まさに「我が世の春」そのもの、絢爛きわまりない正月を過ごしていた。

引きも切らぬ諸侯の年賀挨拶に加え、歌舞伎一座を招いての宴楽により、聚楽第は不夜城の観を呈していた。

正月八日、聚楽第謁見の広間に、左右に諸侯が並び、上座に秀吉が着座すると、下座の襖が音もなく開き、インド副王使節としてのヴァリニャーノと通訳の日本人イルマン・ミケル大友、昨年三月ローマから漸く日本に戻ってきた天正少年使節四人が平伏していた。

それを見定めた石田三成が

「上様。インド副王使節ヴァリニャーノと遠い南蛮の国ローマから帰りました九州有馬家などの子弟四人でございます」
と紹介した。
一通りの形式的な挨拶が終わって、ヴァリニャーノと通訳イルマン・ミケル大友から、大きな地球儀と畳一畳ほどもある世界地図により少年使節達が辿った行程を示された秀吉は、興味深そうに眺め、彼らがローマで着用した式服を着せ、彼らが持ち帰った楽器の演奏を所望した。
楽器は、クラヴィチェンバロ、アルバ、ラウデ、ラベキーニャ、ヴィオラ、レアレージョなどで、秀吉は勿論、並み居る諸侯も聞いたことのない妙なる音の響きに感嘆した。
演奏が終わって、ヴァリニャーノから、地球儀と世界地図、ギヤマンの壺をはじめ幾多の貢ぎ物を受けた秀吉は、少年使節達の出自の確かさから
「余に仕える気はないか。この世の音色とも思えない響きを時には聴かせて欲しい」
と言いだした。通訳のイルマン・ミケル大友からそれを聞かされたヴァリニャーノは、平伏して
「お気に召して、これ以上の喜びはございません。少年使節達はまだ故郷にも帰っておらず、しばし休息を与えたいと思います。楽器の演奏については、お呼び出しいただければ再度参上いたします」
と通訳を通して答えた。
やがて立ち上がった秀吉は、少年使節達のところまで歩み、平伏している彼らを立たせ、衣服にさわり、楽器をしげしげと眺め、席に戻ってから
「バリニャーノとやら。インドへ帰国したら余の書簡を王に渡せ。また、かねてから希望のあったそちの我が国滞在と移動の自由を許可する。我が国でゆっくりといたせ」
と言って奥へ向かった。

少年使節達は、秀吉の姿が見えなくなるのを確かめて、居並ぶ諸侯達に、茶道具の棗(なつめ)程度の大きさの「ギヤマンの壺」を土産として贈った。諸侯達は立ち上がって、秀吉の謁見が上首尾であったことの祝意をヴァリニャーノに伝え、少年達の衣服や楽器を眺めて立ち去った。

この日の謁見では、バリニャーノが名目上インド副王使節となっていたが、秀吉は彼が日本にいるバテレンのトップであることは承知していた。その彼に、秀吉自ら日本滞在の許可と移動の自由を保証したことについて、出席した諸侯は皆
「秀吉によるキリシタン解禁」

と受け取っていた。
事実、当日出席していた蒲生氏郷が、伏見前田邸別棟にいる右近に対し
「上様はキリシタンを解禁なさった」
という書き出しでその時の模様を伝えている。

正月八日の秀吉による少年使節謁見以来、京都では高級武士の間では一種のキリシタン・ブームとも言える状況にあった。
京都在住のバテレン・オルガンチーノの所には、京極高知、明石掃部などが、蒲生氏郷の紹介を得て、キリシタン教理の教えを請いにきていた。

正月十三日、右近の宿舎になっている伏見前田邸別棟に、ヴァリニャーノとオルガンチーノが集まり、キリシタン禁制下での布教活動について話し合った。
過日の秀吉の謁見が上首尾であったことに気をよくしている二人に対して、右近は
「ヴァリニャーノ師、オルガンチーノ師、過ぎる八日の上様謁見のご成功をお慶び申し上げる。しかし、これには必ず反動があることをご覚悟願いたい」
ここまで右近が言うと、二人は何を言い出すのかと、表情を硬くして右近を見つめた。右近はそれを見て
「今現在、上様によるキリシタン禁制は生きています。問題はそこです。恐らく施薬院全宗から上様に、禁制そのものを名目だけでなく実際に取り締まって欲しい、と言う要請がなされるでしょう。去る八日のことは、特に上様がキリシタンに好意的であったと伝えられ、キリシタンに反対する人達は焦りを感じていることでしょう。イエズス会のように高級武士を対象として静かに宣教を行っていれば問題はないが、フランシスコ会が、禁制を甘く見て、大衆を相手に昼日中から行っているのが困る。目につきすぎる。上様にとっても、仏教界にとっても、イエズス会もフランシスコ会も同じキリシタンなのです。区別せよ、と言っても分からないでしょう」
するとオルガンチーノが
「フランシスコ会の責任者ステファナ師に対して、あまり目立つ行為は自粛して欲しいと、お願いというか忠告というか、話に行きました。ところが、彼らは本国からの指令である、と言って改めようとしません」
頷いているヴァリニャーノ師を横目で見た右近は
「ですから引き続きイエズス会としては、従来通り高級武士に対して個別宣教活動を継続して行くこととしましょう。世間の目につかないように、バーデレの外出には必ず駕籠で行くこととして、日本人イルマンを通訳として駕籠脇につけることとしましょう。駕籠代程度はこの右近が負担しましょう。今、バーデレ師はあまり目につかない方がよい」

ここまで右近が言ったとき、廊下から襖越に
「若殿様のお成りでございます」
と声がした。三人は咄嗟に上座を空け、開く襖に向かって平伏した。
入ってきた前田利長は
「右近殿、バリニャーノ師もオルガンチーノ師も来ておられると聞いてやってきた。お邪魔をすることを許されよ」
と言って、一旦上座に座ったが、直ぐ座布団を除け、右近の隣に座り直した。
「右近殿、バテレン殿、この利長に洗礼を授けて戴きたい。長年右近殿を見てきた。右近殿のお人柄、ものの考え、全てを尊敬する。余も斯くありたいものだと思う。余もキリシタンを信仰して、そのようになりたいと思っている」
言い終わって、利長は三人を見渡した。
しばし、静かな沈黙が続いた。
やがて右近が顔を上げ、利長を見て
「若殿、ただ今のお言葉、右近赤面の至りでございます。キリシタンの神デウスから見れば、取るに足りない罪深き身、どうか身どもをそのようにご覧遊ばすことはおやめください。しかし、お言葉には感謝申し上げます」
利長を見て一息ついた右近は、続けて
「若殿、今の時勢をどのようにお考えでしょうか。そしてその中の前田家のあり方についてどのようにお考えでしょうか。太閤殿下がご安泰の間は前田家は心配に及びません。問題はその後のことです。毛利家などが他の諸侯と連合して豊臣の天下を続けるか、徳川家が単独で天下を取るか、はたまた、伊達・上杉が蠢くか、この間に前田家がどのような位置を保ちつつ家の安泰を図るか、今はもう上様亡き後を考えなければならないときでござりましょう」
利長は右近の言葉が何を言わんとしているのかを真剣に聞いている。
「ですから、若殿がキリシタンとなることによって、前田家のあり方を一方に偏らせてはなりません。今は太閤殿下の御代、キリシタンは禁制下にあります。二十万石や三十万石の大名とは違います。百二十万石の大大名です。天下が荒れて収拾がつかない時がくれば、一方の雄となって収拾につとめなければならないお立場でございます。徳川も毛利も前田家には一目も二目もおいています。しかし、それらが天下を狙うときには、前田家を弱めるか潰すか、どちらかの道を選んでくるでしょう」
更に続けて
「この右近、若殿様がキリシタンになるお覚悟をなさったことについて、これ以上の喜びはございません。時期をお待ちください。その代わりとして、若殿のお時間の許す限りバーデレ殿にお願いしてキリシタンの教理のお話をさせていただきましょう。この右近もお手伝いさせていただきます」
利長は右近の言葉の切れるのを待って
「右近殿、ヴァリニャーノ師は上様からキリシタンの禁制を解かれたのとは違うのか」
と質問した。右近は
「上様との言葉の遣り取りから考えればそのような意味もあり得ますが、上様はヴァリニャーノ師をバーデレと考えず、インド副王使節として、日本での滞在と行動に自由を与えておられるのです。キリシタン・バーデレとしてのヴァリニャーノ師に自由を与えたものではございません」
「右近殿、それは誰の知恵か」
「はい、恐らく石田三成殿のお知恵ではないかと存じます」
しばし沈黙の時が過ぎてから
「では聞くがキリシタン禁制のご沙汰は生きていると言うのだな」
「はい。生きております。従って施薬院全宗はじめ仏教界からの圧力が強まれば、禁制の具体的な動きがでてくるものと思います」
「京極殿、明石殿、蒲生殿は洗礼を受けたと聞くが……」
「はい、若殿、その通りでございます。先ほども申しあげました通り、彼らは若殿と身分やお立場が異なります」
この頃、イエズス会は身分の高い諸侯とその有力家臣・家族を対象として宣教し、その結果、上級武士階級でキリシタンになる者が続出した。
翌天正二十年（一五九二）、秀吉の朝鮮出兵が始まり、先鋒として小西行長が朝鮮に渡った。秀吉が肥前名護屋に城を構え前田利家を話し相手として招いたので、右近も一武将として従っていた。
利家は、何とかして右近に対する秀吉の勘気を解こうと試みていた。
ある夜、右近の陣中に利家から突然の呼び出しがあり、明日、秀吉主催の茶会に、利家共々列席するように、と命ぜられた。茶の道において利休七哲の一人と言われている右近であるだけに断る口実がなかった。
翌日の秀吉主催の茶会では、作法・身の処し方に秀でている右近を、秀吉は終始無言で見つめていた。
茶席で使われた秀吉自慢の茶道具拝見も終わり、席を変えて、秀吉から杯を戴くこととなった。

右近の順番のとき、黙って秀吉の前に進み出て平伏した右近に対し、秀吉は
「利家から聞いている。利家によく仕えよ」
と言葉をかけ杯を渡した。飲み干した杯を秀吉の前に返し、平伏して、秀吉の言葉に礼を述べた。これにより秀吉の勘気は解けたことになった。

帰路、利家の陣に立ち寄り、利家のこれまでの好意に深く謝意を述べたが、右近の心中は
「キリシタン信仰の妨げになる宮仕えはいやだ」
の気持ちが強く、内心あまり感謝していなかった。

この後、文禄四年（一五九五）まではキリシタンにとって平穏な日々が続いた。朝鮮に出兵した大名家は、現地の寒さと飢えと疲労で、人的にも財政的にも極度に疲弊した。秀吉は肥前から戻った後、秀頼の誕生による常軌を逸した興奮状態が続き、内政は空白状態になっていた。

結果として、キリシタンにとっても平穏な日々が続いた。

この間、右近は肥前名護屋から帰って、父ダリヨの住む富山方面に宣教に出掛けた。勿論、利家から預かっている自分の知行地の状況把握もあった。秀吉の内政が空白状態であるだけに、右近はキリシタン信仰と茶道の二つの道に没入できた。それは右近にとって素晴らしい日々であった。しかも行く先々で高級武士を中心に洗礼を受ける者が続出した。

この年文禄四年（一五九五）、右近の父ダリヨが昇天した。生前の希望により、遺体は長崎のキリシタン墓地に埋葬することとしたので、長崎では今迄にない盛大なキリシタン葬が行われた。

長崎から京都に戻った右近は、フランシスコ会の一般大衆への派手な宣教活動を見て、キリシタン禁制の波が見えないところに蠢いている気配を感じた。早速、京都に在住するオルガンチーノを訪ね、
「イエズス会の集会を自粛し、施薬院全宗をはじめとする仏教界の目につくような行動はとらない」
ことを再確認した。

一方、利家は、右近の父ダリヨの葬儀が長崎で盛大にキリシタン葬で行われたことが、どのような形で秀吉の耳に入っているかを心配して、自ら聚楽第に足を運び、秀吉を伏見前田邸に招いての茶会を開くこととした。
利家は右近を招き
「右近殿、お父上のご逝去を心からお悔やみ申し上げる」
平伏している右近の頭越しに、暫く庭を眺めていた利家は
「来月、上様に当屋敷にお成りいただいて、茶会を催すこととした。上方にいる諸大名も二十名程度招くので、右近殿も是非同席するように」
と言って右近を見た。

利家は、秀吉を自分の屋敷に招くことのできる実力を内外に見せるチャンスであり、また、秀吉の勘気が解けた右近をどこかの大名に取り立てるチャンスと考えていた。ところが右近は
「大殿様、おめでとうございます。しかし、この右近、立場が違いますので、折角のお言葉ではございますが辞退させていただきとうございます」
「右近殿、今、施薬院全宗が何をたくらんでいるかご存じか。上様に対してキリシタン禁制を徹底的に行うよう迫っている。野に放っている右近殿も取り締まるべきだ、とも言っていると石田殿からの知らせがあった。この際、上様と同席することが右近殿のお為と考えるが」
利家のこの言葉に、右近は咄嗟に「利家は天下の禁制となっているキリシタンを匿っている。怪しからんことだ。利家も糾弾すべきではないか」の意見が秀吉の耳に入っている、と感じた。そしてそれを三成が利家の耳に入れたことから、秀吉と利家の親密な関係を天下に誇示するための茶会を催すこととなったことを悟り
「大殿様、状況も弁えず勝手を申し上げました。是非ご同席の栄に浴させてください」
と答えた。

その夜、右近はまんじりともせず朝を迎えた。
それは、多くの人々が自分を信じ、自分の生き方を評価し、キリシタンになっている。もしも、キリシタンを捕縛するような事態になったとき、自分の勧めでキリシタンになった人々が捕縛された場合、自分はどうすればよいのか。前田家の傘の下で自分だけ平穏無事でいられるのか。それは自分にとっては死以上の恥辱である。誰よりも真っ先に殉ずるべきである。
それと、自分が捕らえられたとき、前田家はどうなるか。秀吉が生きている限り前田家は安泰と思うが、その後は分からない。右近を受け入れていることそのことが、前田家の命取りになりかねない。
また、秀吉のキリシタン禁制令により、一旦平戸に終結して、再起の機会を待ち望んでいるバテレン達は、自分がいなくなることにより、日本国内宣教の舵取りを失うこととなる。

朝餉のとき、祈り終えて、妻ジュリアと長男ジョアン夫妻にこの思いを伝えた。

翌文禄五年（一五九六）九月、思いもかけないことが発生した。マニラからメキシコへ荷物を運ぶイスパニア貿易船サン・フェリーベ号が、土佐で座礁した。日本へ向かうフランシスコ会宣教師を乗せていた。その船は入江の浅瀬に乗り上げ、豊富な物資を積んでいることが分かった長曽我部元親は、京都の増田長盛と打ち合わせて、

「我が国を侵略する目的をもって、フランシスコ会バテレンを間者として多数送り込むことを企てた」

として、積荷の全てを没収してしまった。

増田長盛から報告を受けた秀吉は、これを了承すると共に、長谷川法眼の子守知に京大阪の切支丹名簿の作成を命じた。

出来上がった名簿の筆頭に高山右近の名前が記載されており、これを知った三成は利家に連絡、結果として「上様公認キリシタン」であることから名前を削除、フランシスコ会キリシタン二十六名が長崎に送られ、西坂で処刑された。イエズス会は一人も入っていなかった。

長谷川守知によりキリシタン名簿が作成されつつある、と聞いた右近は、妻ジュリアと長男ジョアンを自室に招き

「キリシタンを捕らえる動きがある。その時は自分が真っ先に捕らえられ、真っ先に殉じなければならない」

と妻と長男に覚悟の程を語った。

その日利家を訪ねて今までの好意を謝し、右近が大切にしていた茶壺を利家に贈り別れを告げようとした。ところが利家は

「右近殿、今回の弾圧取締は、イスパニア船積荷奪取を正当化する口実に過ぎない。こんな馬鹿げた取締に殉ずることはない。余が上様の所へ言って話してくるから安心するように」

と右近を制した。

その後家中の主立った者が集まったとき利家は「右近の殉教覚悟」を語り、右近の命をかけての信仰と人としてのあるべき品格を賞賛した一幕もあった。

その二年後、慶長三年（一五九八）八月、秀吉が死んだ。家康と利家は秀吉の死を秘して朝鮮出兵諸将の撤兵を図った。

秀吉亡き後の合議制政治体制は最初からギクシャクしており、そのような中で、翌慶長四年（一五九九）三月、利家も秀吉を追いかけるように死亡した。

利家の死後間もなく家康は、前田家を嗣いだ利長を金沢に帰し、直後に、「前田利長謀反の疑いあり」として加賀征討の準備を始めた。これを知った利家の娘豪姫の夫宇喜多秀家が金沢に知らせた。利長は奥の自室に右近を招き意見を求めた。

右近はかねてからこのことは予想していたので

「今は徳川と争うときではありません。近い内に徳川と石田・毛利連合との一戦が起こるでしょう。天下を取って太平な世を作ることのできるのは徳川でしょう。石田・毛利連合では天下を収める力はありません」

ここまで言った右近に

「では、徳川にどのようにすればよいと思うか」

と不安を隠すことなく右近を見つめた。

「はい、横山家老を中心として家老三人程度とこの右近が江戸へ下りましょう。徳川殿の真意を聞いてから判断しましょう。徳川も、石田・毛利連合との戦いの前に、前田家と正面衝突はするつもりはないと思います。衝突して万に一つも石田・毛利が前田を支援することにもなれば、と言う不安はある筈です。前田家を徳川の体制の中に組み込んでしまう、このことが目的と思います。徳川は領土の割譲は求めず、むしろ面子の問題を出してくるのではないかと思います」

「具体的にはどのような条件か」

「はい、人質を求めてくるのではないでしょうか。それと徳川の息のかかった家老職の受け入れなどもあるかもしれません」

話し終えて二人は奥書院に向かった。そこには家老横山長知以下重臣が勢揃いしていた。

利長は着座して

「今日は余の議にあらず。当家存亡のことについて皆の意見を聞きたい」

と切り出すと、座は一旦ざわめいたが、次の瞬間、利長の次の言葉を待った。

「徳川家康がこの前田家に謀反の動きあり、として軍勢を差し向ける動きがあるとのこと。豪姫の夫、宇喜多秀家殿から火急の知らせが入った。秀吉様亡き後、徳川の覇権への動きは万人が知るところ。攻めてくるのを待つか、逆に関東へ攻め下るか、はたまた和睦の使者を送るか、一同、いかが致すか」

利長の言葉に、勇猛さでは並ぶ者のいない家老の藤波丹波が

「殿、前田家が謀反とは何のことか。誰に謀反するのか。今は豊臣家を五大老・五奉行が補佐して政を行っているとき。謀反とは我が前田家が豊臣に対して謀反の疑いがあるということか。殿は五大老のお一人ではないか。同じ大老の徳川が我が前田家に攻めてくるとはどういう理由からか。とんと解せませぬ。筋が通らないものであれば断固戦いましょうぞ」

と声を張り上げた。席のあちこちから

「その通り」

と声が上がっていた。利長は黙っている。利長と横山の視線が右近を見つめている。右近は立ち上がって

「皆さん、ただ今の藤波家老のご説は至極ご尤もでござる。当前田家のみを考えれば異論を挟む余地はない。しかし、今、徳川と前田が争えば、故太閤殿下により統一された天下は再び麻のごとく乱れ、苦しむ者は弱者のみ。ここは大局に目を転じて、徳川に対して話し合いに行き、解決できるものであれば戦は回避しなければならない。徳川殿と刺し違える覚悟と気合いをもって何が謀反なのかを問いただすことこそ第一に為すべきことではなかろうか」

すると家老の横山が

「ただ今高山殿が申されるとおり、先ずは徳川に行き、問いただすことが先決でござろう」

そして、そのまま続けて

「この横山、失敗したら腹を切る覚悟で江戸に使いをいたす」

と声を張り上げた。

家老の藤波は

「横山殿、甘い。家康の素っ首、叩き落とさなければ腹の虫は収まりませぬぞ」

と声を荒げた。

その後も議論百出、とても結論が出る状況ではない。頃合いを見計らって、利長が皆を制して

「皆の者、各自の意見は出し尽くしたか。では余の考えを申す」

と言って全員を見渡し

「前田家謀反の疑いの有無について徳川殿に問いただす。その上で徳川、前田両家の和平について話し合うこととする」

ここで異議の有無を確認するように全員を見渡し

「正使に横山、副使として藤波、脇の両名を指名する。明日にも江戸に向かえ。徳川殿は今は江戸に戻っている。三名の他に高山右近殿にも同道願おう。徳川殿は高山殿を大変高く評価している。正使、副使で意見が異なった場合は高山殿の意見に従って貰う。藤波、これでよいな」

この利長の声に、指名された三名の家老は

「お役に立つべく身命を賭して行って参ります」

と答えた。

会議が終わって、右近と横山は利長に呼ばれた。

「高山殿、宜しくお願いする。横山、そちと高山殿に全権を与える。戦は回避せよ。人質の件になると思うが、前田一族の誰でもよい。先方からも指名があるであろう。いちいち早馬を出すな。前田家主従の固く結ばれた信頼関係を見せてやれ」

と言って右近を見つめ

「高山殿、前田家の運命を貴殿に担っていただきたい。対徳川にはこれしかない。宜しくお願いする」

と頭を下げた。

それから六日後、右近一行は江戸の瑞仙寺についた。着替えた横山はその日の内に江戸城に行き、本多正純に要件を告げ、明日にでも家康に会いたいと申し入れた。本多正純は

「追って連絡する」

としか返事をしない。二日後、本多正純からの使者が瑞仙寺を訪れ、横山に文書を渡した。それには

「明日、未の刻、横山長知家老のみ江戸城に本多正純を訪ねてくること。その時は家康が直々に会おう」

と言う趣旨が書かれている。四人はそれを見て、これを蹴れば話し合いの機会を逸することになる懸念から、この申し出を受けることとした。

昨夜、江戸城内では、高山右近に会うかどうかで夜遅くまで協議が続いていた。家康は

「右近は正論で来るであろう。それではこちらの横槍が苦しくなる。ここで右近を干して、その理由を聞かれれば、高山右近はキリシタンである。今は亡き太閤殿下が発せられたキリシタン禁制のときである。キリシタンを公式の席には座らせることはできない、とでも言っておけ。そしてもう少し泳がせておいて、時期を見てキリシタン禁制をはっきりと打ち出し、その時こそキリシタンを長年庇護してきた前田家の大罪を糾弾することができる。その弾として大切にとっておけ」

と指示を出していた。

翌日、横山は前田家に対する謀反の疑いについて

「徳川殿は何をもって前田家に謀反の疑いあり、とお考えか。疑いを晴らす機会も持たず戦いの準備をなさるとは、無謀きわまりないではないか」

と切り出した。

これに対し家康は

「謀反の疑いを持つのは当方の勝手。疑いをもたれたらそれを自ら晴らすのが世の習い。横山殿にはこのことはお分かりであろう」

と、一方的な勝手な理屈をこねだした。

横山はその相手にならず、天下の争乱は前田家の望むところではない。お互いに理解し合って亡き太閤殿下のご恩に報いていこうではないか、と述べたところ、家康は単刀直入に

「謀反ありの疑いを晴らす意味で、利長候のご母堂芳春院殿を江戸に住まわせていただきたい。屋敷はそれなりの格式あるものを当方で用意する。江戸城に人質に戴くわけではない。ここまで言えば横山殿にはお分かりいただけるであろう」

と切り出した。これを聞いた横山は顔面蒼白となり、直

ぐには口を開くことはできなかった。しばし後
「恐れながら申し上げる。芳春院様はお年を召されている。人の道として、そのお申し出はいかがなものかと考えるが」
と言うことが精一杯であった。
これを聞いた本多正純は
「横山殿、これは我が殿が全てを承知の上でのお言葉でござる。お嫌であればそれまでのこと。話し合いはこれまで」
と話の打ち切りを切り出した。慌てた横山は
「逗留している寺に相談すべき仁を待たせているので、明日返事をいたしたい」
と正純に言うと、家康が間髪を入れず
「貴公単独で結論を出すことは出来なかろう。高山殿ととくとご相談なされよ。明日未の刻にお待ちしていよう」
と言ってさっさと席を立ってしまった。

「まんじ」季刊発行内規

（発行日）　（原稿締切日〔注〕）
春季号……二月一日……十二月三十一日
夏季号……五月一日……三月三十一日
秋季号……八月一日……六月三十日
冬季号……十一月一日……九月三十日

〔注〕円滑な発行を期す為「一週間前編集長宛到着」に努めましょう。

（司馬雑感　一〇）

「オランダ紀行」をゆく

山田嘉久

（一）

ライデンの町にて

「どうもこの町がすきである」

と「オランダ紀行」（街道をゆく三五）に書いた司馬遼太郎はライン川支流の小都市ライデンを三度も訪ねている。

お気に入りの理由はこの町がオランダ最古の大学ライデン大学を擁した落ち着いた学園都市であること、そしてなによりも幕末の日本で「蘭学の父」としてその業績を讃えられたシーボルトと関係の深い町であることであろう。

人口一〇万、運河沿いに開けた静かなこの小さな町には、三つの世界的規模の博物館がある。ライデン国立民族学博物館、ライデン国立自然史博物館そしてライデン大学植物標本館であるが、いずれもシーボルトが日本で収集した重要なコレクションが主体になっている。

シーボルトは生まれはドイツ、バイエルン地方の古都ビュルツブルグ。日本ではオランダ医学の最初の紹介者として著名だが、彼自身は医学よりも博物学（natural history 万有科学）に興味を持っていたようだ。

そのため有名なシーボルト事件（一八二八年（文政一一）オランダ帰国に際して、その所持品の中に当時、国外持ち出しが禁止されていた日本地図などが見つかり、それを贈った幕府天文方高橋景保など十数名が処分された。）により国外追放となった彼はそれまでに日本で集めた膨大なコレクション（美術品や絵画のみならず野生植物、日本人の日常生活用品にいたるまで）をオランダに持ち帰ったのである。

国立博物館を見学した際、これだけのものを個人一人で収集できるものかと感心せざるを得なかった。陳列品は日本ばかりでなく韓国、中国のものまでに及ぶ。研究

のためにはまず徹底したコレクションというのが彼の考え方であったが、肝心の日本幕府や奉行所はシーボルトの収集を単に蘭方医の趣味くらいにしか考えていなかったようだ。

またライデン大学付属植物標本館には彼が持ち帰ったトチの木が大木となって聳え立っていた。彼が持ち帰った植物標本は1万点を越すといわれるが、日本からオランダへの長い航海には熱帯を通過する。その際、日本の植物は枯れてしまわなかっただろうかと素人ながら心配になった。

シーボルトが寂しく日本を去るとき、洋上の漁船から漁夫に変装した門弟の高良斉と二宮敬作が別れを惜しんだが傍らには日本人妻そのぎと3歳に満たない娘イネの姿があったという。イネは父の後を継ぎ、日本で最初の女医となるのである。

植物園の中心にあるシーボルトの胸像をみながら、娘イネと大村益次郎（村田蔵六）との淡い恋物語が重要なモチーフとなっている司馬の傑作「花神」を思い起こしていた。（尤も「ふおん、しいほるとの娘」を書いた吉村昭は両者の関係を頑強に否定しているが。）

一八三〇年に帰国したシーボルトがライデンで住んだ旧居は現在、シーボルトハウスとして此処にも彼が収集した日本の資料が展示されている。この場所で彼は有名な著書「日本」（一八三二―五一年）を執筆するのである。

その著書の中で伊能忠敬（伊能地図）や間宮林蔵（間宮海峡）などを世界に紹介したが、忠敬はともかく林蔵は前記「シーボルト事件」でシーボルト本人を罪に貶めた密告者とされた人物である。その人物をあえて評価したのは私的怨念と学問的功績は別だというシーボルトのフェアーな態度を司馬は高く評価している。（「司馬遼太郎の日本史探訪」）

また忠敬と林蔵は高田屋嘉兵衛を主人公とした長編「菜の花の沖」にも登場している。

ライデン市内には今でもシーボルト通りや出島通りが残っていた。

日本を去って三〇年後の一八五九年（安政六）、日蘭通商条約の締結により追放解除となった六三歳のシーボルトは再び日本を訪れている。しかしその間、日本は大きく変わっていた。鎖国の国是も改められ、彼の門弟の多くは死去したり、隠居の身となっていた。

失意のうち日本を去った彼は旅先のミュンヘンで世を去るが、その最期の言葉は「美しき平和の国にゆかん」だったと伝えられている。「美しき国」とは、はたして彼が青春を送った日本であったのかどうか。

一六世紀半ばのオランダ独立戦争の際、ライデン市民が籠城したという「城壁」にも登ってみた。国土の殆どが海面以下のオランダにあっては珍しく一二メートルほどの丘（マウンテン）の上にあり、ここからのライデン市内の眺めがすばらしかった。

「オランダ人の多くがプロテスタント（とくにカルヴァン派）になった。」のに対して、オランダのネザーランダー（海面より低い国土）を支配していたスペイン国王が弾圧をおこなったのである。オランダ人は反乱に立ち上がる。

「城壁」と聞けば、例えば中国西安のそれを想像したが、なんとも小さな公園なようなもの。ライデン市民数千人が籠城したとは思えないほど小さな城壁だった。しかし飢餓に耐えながら一年間も屈強なスペイン軍に抵抗した歴史的舞台である。そして遂に水門を破壊することによってスペイン軍を退却させ、オランダの独立を獲得する。

この戦法が成功したのは、オランダが「ネザーランド」であったためであり、世上よく言われる「神は地球を創ったが、オランダはオランダ人が作った」ことがよく分かる。

しかも戦勝したライデン市民は、反乱の指導者だったオラニェ公が免税を提案したしたのに対して「それよりも大学をつくってほしい。と申し出て、ライデン大学がつくられた、という。」

ライデン大学の設立は独立戦争の翌年の一五七五年。以来今日まで数多くの著名人やノーベル賞受賞者を輩出した最古の大学で、オランダ唯一の日本語学部があることでも知られている。

「オランダ国土はオランダ人が作った」実例として、ライデンの町で司馬は彼らしい体験を披露している。低地国のオランダは土ばかりで石がない。とろろがライデンの道路はすべて数百年経たと思われる四角の石塊で舗装されていることに司馬は注目した。そこでしゃがみこんで手でその滑らかな石をなでていると、それを店先からみていた老人が近づいてきて「これはブロックだ」と親切に教えてくれたので、「この石はどこから買いましたか」と聞き返すと、老人は驚いて店の中に入ってしまったというのである。この東洋人は少しアタマがおかしいと思ったのであろうとユーモアたっぷりに書いている。

司馬の想像通り、スイスやドイツなど山のある国からブロック一個（キンダーコップ～赤ちゃんの頭の意）を一ギルダーで買って舗道を作ったことになる。

現地ガイドからライデンに「ピリグリム、ファザーズ（巡礼の父祖たち）の家」があると聞いて驚いた。ピリグリム、ファザーズといえば一七世紀半ば、メイフラワー号に乗ってアメリカ大陸に渡り植民地を開拓した人達ではないか。

それがどうして正反対のライデンに家があるのか。実は彼らが英国国教会の迫害を逃れて最初に移住した先はアメリカではなくライデンだったという事実である。彼らはここで一一年ほど暮らしたのちにメイフラワー号を仕立てて、北アメリカに渡ったのである。当時のオランダの自由さと宗教的寛容を示すエピソードだろう。


（ライデンの町）

しかも北アメリカに渡った彼らが早速、ハーバート大学を作る（一六三六年）のだから、ライデン大学はハーバートの兄貴分ということになろうか。

アムステルダムにて

ライデンはまたオランダが生んだ最大の画家レンブラントの生地としても知られているが、現在では彼の生家は残っていない。首都アムステルダムにある有名な「レンブラントの家」は彼の全盛時代の二〇年間、住居兼アトリエとして住んでいた家である。代表作「夜警」もここで描かれた。

そのレンブラントの数々の名画はアムステルダムの「国立博物館」で鑑賞することが出来た。

この国立博物館の近くに一九七三年にオープンした「ゴッホ国立美術館」がある。ゴッホが自殺した一八九〇年以来、遺族の手によって管理されていた作品数百点が展示されている。

若い頃、美術記者の経験もある司馬は「オランダ紀行」では百ページ近くにわたって「ゴッホ論」を展開しているが、ゴッホ美術館で「ゴッホさんは疲れるね」というみどり夫人のことばをうけて、司馬は「ゴッホを観るのは一点だけでいい。多様で多数なその作品群を一堂で観ると、当方のいのちまで重くなってしまうのである。」と記している。

我々はこれ幸いと、一時間ほどの鑑賞に止めた。なお数年前に完成した新館は黒川紀章氏の設計とのことだった。

また我々は「国立オランダ海洋博物館」も見学した。海運大国として栄えたオランダならではの博物館で、大航海時代から現在までの船や海運の歴史が紹介されている。館外には東インド会社の所有船アムステルダム号のレプリカが停泊されており内部を見て回った。

我々の泊まったホテルの目の前にあるアムステルダム中央駅は実に東京駅に似ている。東京駅前にいるような錯覚を抱いたが、この駅の設立は一八八九年だから、当然、東京駅の方が真似たことになる。ルネッサンス様式の赤レンガ造りのこの駅からはベルリンやローマ行きの長距離列車が発車していた。

通勤客や観光客でごったがえすアムステルダム中央駅を見ているうち、急に「ニューアムステルダム」なる地名を思い出した。ニューアムステルダムとは現在のニューヨークのオランダ植民地時代の名称である。一七世紀半ば、英軍の侵攻によってオランダは敗れ、ニューヨークを含むマンハッタン島は新たに英国の領土となるのだが、英国チャールズ二世はこの地を弟のヨーク公に与えたので以後、ニューアムステルダムはニューヨークと改称された。

司馬は中学一年の時、地理の時間に「ニューヨークの由来」を担当の先生に聞いたら「地名に由来なぞあるか、お前は授業を妨害するのか」とこっぴどく叱られたという。仕方なくその日のうちに近くの図書館に行って調べたらすぐに分かったとあるエッセイに書いている。司馬の学校嫌い、図書館好きはこの頃から始るのである。

とんだ所でとんだ話を思い出した。

ホールンとデルフト

一七世紀、東インド会社（VOC）の本拠地であったホールンはアムステルダムの北方にあるアイセル湖に面している。この湖は大堤防を挟んで北海へとつながる。はるかなるアジアの海から帰ってきた船が、「角笛ホールンの中につつみこまれるようにして最後の投錨をする港なのである。」

現在でも当時の建物が残っており、司馬も「ホールンは、一七世紀の町並みがうつくしい。（中略）埠頭にある古い塔もうつくしく、塔の上の雲までが、一七世紀の銅版画なかから抜けてきたようである」と記している。

東インド会社の本社跡は現在、「西フリース博物館」として当時、世界各地から集められた工芸品や調度品などが展示されていた。

オランダ南部の都市デルフトは陶器の町で知られる。白地に深いデルフト、ブルーで有名なデルフト焼。現在も伝統的な製法を守っている工房で絵付け作業などを見学したが、繊細な絵柄は中国陶磁器や有田焼の影響を受けているとの現地ガイドの説明に驚いた。

ここにも東インド会社による交易の影響を感じ取ることができる。

デルフトからベルギーのアントワープへ

当然、オランダとベルギーの国境を越えたわけだが、何処が国境か定かでなかった。司馬も自己の経験から「ソ満国境」を引き合いに出して、国境の概念がいかに変わったかを論じている。そして「国境がこのようにやわらかなものになるには、ヨーロッパでは数世紀、あるいはそれ以上、戦争をかさねてきているのである。」と記している。そして今では「国境は無用のもの」の感が強い。

アントワープは世界有数の港を有し、一五世紀以来のダイヤモンドの研磨と取引で知られているが、我々日本人にとっては児童文学「フランダースの犬」の舞台としての馴染みが深い。

「オランダ紀行」でも司馬は「フランダースの犬」のあとさき」の一章を設けてアントワープとの関係を書いている。それによると、日本では主人公のネロ少年や老犬パトラッシュの名は桃太郎か浦島太郎ほどの知名度があるが、舞台となったアントワープでは殆どこの物語を知らないという。（なお原作はイギリスの女流作家ウイダー）

その理由を司馬はネロ少年と老犬がベルギー人によって疎外されてゆくことによってこの小説が成立している物語だから、おそらくベルギー人にとっては気分のいい話ではないからではないかと分析している。

我々もこの小説の舞台となったノートルダム大聖堂や画家ルーベンスの家などを見て回った。市の中心にあるマルクト広場にも行ったが、その一隅に「フランダースの犬」の碑石が置かれていた。そのスポンサーが「TOYOTA」と刻まれているのに気がついた。商魂たくましいアントワープ市当局が観光客誘致のために日本の代表的企業に頼みこんだものだろう。

ブルージュにて

「橋」（英語のBridge）という意味の都市名の通り、町の周囲を五〇以上の橋が運河に架かる水の都である。一三―一四世紀にハンザ同盟の主要都市として栄えたが、一五世紀末に運河の沈泥で船の出入りができなくなり、町の発展が止まってしまった。そのため中世のままの風韻が残っている。

丁度、我々が訪れた日（五月二五日）は年に一度の「キリスト昇天祭」。（この日に会わせて旅行日程を組んだのだが）ベルギー全土が祭日で、「聖血礼拝堂」のあるブルージュのマルクト広場を中心にして「聖血の行列」が華々しくおこなわれていた。

午後二時頃から夕方まで延々三時間、老若男女数百人の出演者と牛、馬、猿それに駱駝まで動員しての一大イベントが繰り広げられた。門外漢の私などにはよく分からないがアダムとイブの物語に始って、厩小屋でのキリス

トの誕生から昇天まで、いわば新旧約聖書のなかのエピソードや十字軍騎士物語のパレードだった。その昔、第二回十字軍遠征の折、当時の公主フランドル伯爵がエルサレムからキリストの聖血を持ち帰ったことに由来するそうだ。

会場にはベルギー皇太子夫妻も出席していたが、パレードが終わってご夫妻が退場する際には、ご夫妻みずから群集の中にはいって一人ひとりに握手されていた。日本皇室には考えられないことだが我々日本人もその恩恵に与った。

日本人と知った皇太子は「何のために此処にきたのか、日本の何処から」と聞いたようだったが、私は皇太子よりも美しい妃殿下の握手を選んだ。

現地ガイドの話によると皇太子夫妻には三歳になる女のお子さんがいるそうだが、その子の誕生一週間前にベルギー議会は女帝継承権を承認したそうだ。

なお、その現地ガイドは私の実家の近くの出身で、高校も同じと知って奇遇に驚いた。（帰国後、彼と撮った写真を彼の実家に届けた。）

ブリュッセルからワーテルローへ

いよいよ最後の目的地、ブリュッセルに入る。

ブルッセルはベルギーの首都であるばかりでなく、現在はEUやNATOの本部をはじめ各種国際機関が置かれ、ヨーロッパの中心的機能をはたしている国際都市である。

此処での目玉は王宮と王立美術館、それと街の中心にある広場グラン、プラス。王宮はオランダ統治下の一八二〇年に着工されたが、その後ルイ一四世様式に改装されている。また王立美術館にはルーベンスなどのフランドル絵画の傑作が揃っているが、ナポレオンがルーブル美術館から名画の数々を送り込んで有名になったようで、ベルギーがオランダよりもフランスの影響を受けていることがわかる。現にベルギーの主体語はオランダ語とフランス語だが、ブリュッセル以南はフランス語が強いという。（なお平成十八年秋、上野の国立西洋美術館で本邦初の「ベルギー王立美術館展」が開催された。）

「世界で最も美しい」といわれるグラン、プラス（世界遺産）には市庁舎、王の家、その間を埋めるように各ギルド（組合）の絢爛豪華な建物が並び聳えている。我々は人っ子一人いない早朝六時と群集でごったかえす昼時と二回、この広場を訪ねたが全く違った広場の顔を見せていた。

昼時には丁度、市庁舎で結婚式が行われていたが、「オランダ紀行」にも書かれているようにこの地区では結婚式はすべて市庁舎で挙げ、市長が立会人になるそうだ。

我々はブリュッセルから更に南一七キロにあるワーテルローにまで足を延ばした。ご存知、ナポレオンとウ

エリントン将軍が戦った「天下分け目」の古戦場跡である。日本で言えばさしずめ「関が原の戦い」に匹敵しようか。

平原の中央にある「ライオンの丘」を登ると古戦場が一望できた。

歴史的にみれば、ナポレオン失脚後、一八一四年に欧州の秩序を回復するため「ウイーン会議」が開かれたが、ベルギーは司馬流にいえば「逃げ遅れ」、オランダから独立するのはずっと後の一八三〇年である。日本で言えば天保元年にあたり、既にシーボルトは日本を離れている。

司馬も「オランダ紀行」でオランダ製の一口噺を紹介している。

「世界一薄い本が二つあるんです。一つは独逸人のユーモアの本で、一つはベルギーの歴史の本です。」

（二）

平戸の南蛮人とオランダ人

実は我々は今回のオランダ旅行に先立って、その予備知識としてオランダと日本の関係を知るべく平戸、長崎を歩いてきた。

「街道をゆく十一（肥前の諸街道）」の旅である。この旅行はまた丁度、一年前に行った「南蛮のみち」（スペイン、ポルトガルの旅）への復習の意味もあった。

本州最西端にある長崎県平戸市は「平戸瀬戸」という狭い海峡によって隔てられた完全な「離島」となっている。現在は本土（？）とは平戸大橋（昭和五十一年架橋）されているが、司馬一行はそこをフェリーで渡ったようだ。

今でも強風などで、この橋が交通不能となると全く孤立してしまうとの現地ガイドの説明だったので、最寄駅は何処ですかと聞くと佐世保から出ている第三セクター松浦鉄道の「平戸口駅」だという。この駅からも大橋を渡らねば平戸には入られない。

こんな僻地が古代の末羅国時代から大陸との中継地として栄えてきた。

弘法太子空海が八〇四年、遣唐使一行とともに船出したのもこの港である。空海は平戸で風待ちのため暫く滞在したという。このことは司馬の傑作「空海の風景」（昭和五十年度日本芸術院恩賜賞作品）でも触れられている。

また十六世紀半ば、日本で初めて布教活動を始めた南蛮人フランシスコ、ザビエルも鹿児島に上陸した翌年（一五五〇年）には早くも平戸に来ている。

当時の松浦二十五代城主道可隆信は海外貿易に大いなる望みをもっていたため、ザビエルに布教活動を許したのでザビエルは三度、入島しているという。

これを記念して建てられたという「ザビエル記念聖

堂」が平戸港の西の小高い丘の上に薄いモスグリーンの尖塔を突き出して建っていた。このあたり寺院も多く寺院と教会が仲良く同居するという平戸独特の風景を作っていた。

また平戸湾には実物大のカラベル船がテンプル騎士団の十字旗を翻して浮かんでいた。この船が十六世紀、司馬の好きなエンリケ航海王子の命を受けて遥か遠い南蛮の国から波濤を超えて、この平戸の港に入港するさまを想像してみた。

司馬も「南蛮船をみていると、胸がときめいてしまうのは、ひとつにはこの島国の社会が伝承してきた文化的遺伝によるかもしれない」と書いている。

このザビエルやポルトガル商人の来島に力のあったという（蛮）貿易王の王直（？―一五五七）を庇護したのも道可隆信である。平戸の海外貿易の第一歩を築いたのが道可といえる。

司馬も「室町期から戦国期、豊臣期を経て江戸初期にいたるまでこの島の松浦の殿様というのは、武将というよりも貿易業者であった。」と書いている。

一五五〇年に平戸に入港して貿易を始めたポルトガル人だったが、長くは続かなかった。八七年に秀吉のバテレン追放令の発布、そしてこの島では有名な「宮の前の喧嘩」があったためである。ポルトガル船員団と平戸商人の遺恨喧嘩で、これを境に今まで築かれた平戸藩道可隆信とポルトガル人の蜜月時代は終わりを告げる。（なお「宮の前の喧嘩」を主題にして司馬は短編「奇妙な剣客」を書いている。）

松浦道可もその子の鎮信も南蛮貿易には熱心だったが、なぜかキリシタンには入信しなかった。「貿易をしたいのなら、まず入信せよ」とのイエズス会の戦略が一時的には成功して九州の多くの大名が入信したなかにあって、松浦親子は稀有の大名だったろう。

松浦氏と全く反対の立場にあったのが隣国のキリシタン大名大村純忠だった。

以後、ポルトガル商人と宣教師たちは隣国の大村領に移ってゆく。

そのポルトガルに替って平戸に現れたのがオランダだった。

慶長四年（一六〇九年）にオランダ商館を設立するのである。（その四年後、イギリス商館も作られる。）

その後、鎖国が完成して貿易が長崎の出島に制限されるまでの間、オランダとは三十三年間、イギリスとは十一年間にわたり平戸では貿易が続けられた。

オランダと日本の最初の接触は慶長五年（一六〇〇年、関が原の戦いの年）豊後臼杵湾に漂流したオランダ船リーフデ号で、その前々年（一五九八）にオランダ東

インド会社（VOC）の前身ロッテルダム会社が東方に派遣した船団のうちの一隻だった。その航海長が英人ウィリアム、アダムス（後の三浦按針）、機関長が蘭人ヤン、ヨーステン（後に八重洲に住み東インド会社の日本駐在員となる）であることはよく知られている。

「オランダ」という国名を最初に聞いた日本人の一人が、彼らを大坂で謁見した徳川家康だろうと司馬は推論している。この時代、ヨーロッパでは低地国（ネーデルランド）のことを、その一州であるホーランド（Holland）と呼ぶ習慣が出来ていたが、ポルトガル発音ではHがぬけてオランダになる。おそらく臼杵湾でポルトガル語を知っている人がそう発音したに違いないと司馬は書いている。

ともかく家康の貿易顧問となったアダムスはその数年後、九州平戸に来てオランダ商館設立に尽力するのである。そして一六二〇年、この地で病没するのだが今、平戸公園に彼の碑が建っている。その隣に彼より前に来平したザビエルの碑も並んでいるのは皮肉だった。

今、平戸のオランダ商館跡付近にはオランダ塀、オランダ倉庫跡、オランダ井戸、オランダ埠頭など当時の面影を残す数々の遺跡を見ることが出来る。

「倉庫がこわされたのは、一六四〇年である。その翌年、平戸蘭館そのものが幕命によって長崎に移されている。」

横瀬から長崎へ

我々は司馬一行と同様に、平戸を立った後、大村湾を抱え込むように延びる西彼杵半島を南下して、横瀬、福田を経て長崎に向かった。

平戸の松浦氏に替って南蛮人を向かえ入れた大村純忠は永禄六年（一五六三）に入信して、熱心なキリシタンに変身する。そして、なんと新しい貿易港となった横瀬の浦の半分をイエズス会に寄進してしまうのである。これが「キリスト教が日本において多少ともまとまった領地を得た最初の例」となった。

またこの地は「日本史」を書いて有名になったイエズス会士ルイス、フロイスが日本での第一歩を印した地でもある。

横瀬浦を見下ろす高台にある横瀬浦公園には「肥前の諸街道」の次の一節を刻んだ碑が建っていた。

「たちまち横瀬は開港場として栄える一方、大きな会堂が建ち、信者が増え、その信仰の火は、横瀬と水路を結ぶ各地方にひろまった。純忠は、教会をまもるために重臣を横瀬に常駐させる一方、みずからも受洗し、ドン、バルトロメオという霊名をもらい、大名として受洗者となった」

かくて、それまで一寒村に過ぎなかった港が一躍、国際的な貿易港に生まれ変わるが、それも長くは続かなかった。領内の仏教弾圧により藩内で内乱が発生、この港

町に火が放たれたため舞台は福田、長崎に移る。

純忠は横瀬浦ばかりでなく、その後、貿易港として開いた長崎湾をまるごと教会に寄進してしまうのである。（なお、「長崎」の地名は純忠の部下で長崎の領主であった長崎甚左衛門に由来する。彼は純忠の三女を娶り、純忠とともに洗礼を受けたといわれる。）

ポルトガル人から「ドン、バルトロメオ港」（大村純忠の洗礼名）と呼ばれた長崎の教会領時代は七年間続く。しかし歴史は大きく動いた。

秀吉による天下統一が完了して、二十六聖人の殉教に代表されるような凄惨なキリシタン弾圧の時代を経て、江戸時代の長崎は幕府の直轄地になってしまうのである。

歴史にifは禁物だが、もし「カトリックという世界宗教が禁教されることなく日本に居座ってくれていれば」と司馬は小説家らしく大胆な想像を逞しくする。

「世界の普遍的なもの（宗教だけでなく、思想、技術など）が絶えずその部分に注入されつづけるということで、日本社会も日本人も、その後ついつい遂げられてしまった矮小化をすこしはまぬかれただろう。」と。

更に「すくなくとも情報感覚の欠如から太平洋戦争をやってしまうという類のことは、あるいはなかったかもしれない」とまで飛躍している。

我々も長崎ではまず、司馬のいう「日本という閉鎖社会で成立した秀吉という専制者」に「狂犬のような処置」をとらせた「日本二十六聖人殉教地」を見学した。慶長元年（一五九七）秀吉のキリシタン禁止令によりフランシスコ会宣教師など六名と日本人信徒二十名（子供二名を含む）が大坂、京都で捕えられ、長崎に護送されこの地で処刑された。むごいことに彼等の左耳は全員殺がれていた。

その資料などを展示した隣接の記念館は昭和三七年の二十六聖人列聖百年祭に建設されたという。館内には戦国期のキリシタン大名名が列挙されていた。蒲生氏郷、高山右近、織田有楽、小西行長、有馬晴信、大友義鎮、黒田孝高など数えてみると十五名に上った。

またこの殉教地から真西にある大浦天主堂も訪ねた。正式名は「日本二十六聖殉教者天主堂」。一八六四年に建てられた日本最古の木造ゴシック様式教会で国宝に指定されている。

司馬によれば「被害者であるイエズス会にはむろんなんの罪もない。しかし作用を加えれば反作用が戻ってくるということで、多少の配慮を欠いた面もあるのではないか」という。

「一方、新教を奉じる市民社会の上に成立したオランダが、日本にやってきて十字架的なやり方はいっさいせ

ず、信仰はあくまで個人のものであるとし、商売は商売だとして問題を機能的に分離して日本から商業的利益だけをひきだそうとしたのは、やはりモダンだったといえそうである。」と総括している。

寛永一六年（一六三九）、幕府はポルトガルを国外追放するが、二年後の寛永一八年、替って平戸のオランダ商館を出島に移した。時代は三代将軍家光の治世となっていた。これが「出島和蘭商館」であり、鎖国時代、西洋に開かれた唯一の窓口であったことは周知のことである。

出島のことを司馬は「暗箱にあいた針の穴」と表現し、ここからもたらせるほんのわずかの知識や情報が結果として明治維新につながったことは「文明史の奇跡だった。」と説く。

しかし肝心のオランダ本国は一九世紀に入るとフランス革命により、フランス領になってしまう。一説によると出島で掲げるオランダ三色旗がその頃、地球上で唯一のオランダ国旗だったと伝えられる。

その出島も明治以降、付近の埋め立てが進んでため、その姿を消していたが、平成十二年にその一部が復元され、更に我々が訪れた平成十八年春に「カピタン部屋」など五棟が完成されていた。

明治維新とオランダ

「オランダ紀行」の最後は「日蘭交渉史、私記」。通常の紀行文とは異なった文章となっている。

「花神」「胡蝶の夢」など数多くの蘭学ものを主題に幕末小説を書いてきた司馬にとって、歴史小説家としてオランダに対しては一種の忸怩たる思いを抱いていたことを窺い知ることができる。

江戸期の蘭学の流れは

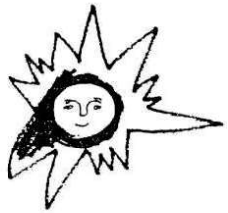
杉田玄白の「蘭学事始」に始まり、蘭学の父ｼｰﾎﾞﾙﾄの来日と影響。そして後をついたポンペによってもたされた近代医学。さては榎本武揚や西周などのオランダ留学と枚挙にいとまがないが、維新が成立すると明治政府は明治二年、早くもこれまでのオランダを見捨てドイツ方式に切り替えるのである。

このあたりの日本の身勝手さを司馬は明治二年（一八六九）、テロのため重傷を負った大村益次郎の治療に当たったオランダ医師ボードイン（一八二二―八五）の言葉を紹介している。

「日本人はあまりに虫がよすぎる。学問ことに医学についてわがオランダから教師を頼み、とくに初期のポンペ氏のごときは俸給も受けずに教授したのである。しかるに今、明治の代になって、大いに医学を興さんとするにあたって、大学に蘭人を聘せずして独逸人を呼ぶというのは何事であるか。」

「一七世紀から一九世紀までの日蘭の交渉は世界史でもまれなほどに充実したものであった。それでもなお、日本を去るボードインの背を想像するとき、無量の感慨を感じる。」

「オランダ紀行」の最後の文章である。（了）



（付）日蘭交渉史年表（山川日本史図鑑より作成）

年代		オランダ	南蛮その他の国
1543	天文11		ポルトガル人、種子島に漂着
1549	18		ザビエル鹿児島に来る
1569	永禄12		信長、フロイスに宣教を許す
1580	天正 8		大村純忠長崎をイエズス会に
1582	10		遣欧少年使節団
1587	15		秀吉、キリスト教を禁ず
1600	慶長 5	蘭船リーフデ号豊後に漂着	英東インド会社設立
1602	7	オランダ東インド会社設立	
1609	14	平戸にオランダ商館設置	1613支倉常長、欧州へ
1639	寛永16		鎖国令、ポルトガル来航を禁
1641	18	オランダ商館、平戸から長崎へ	
1690	元禄 3	ケンペル、蘭商館医として来日	
1746	延享 3	貿易額制限令（清10隻、蘭２）	
1774	安永 3	杉田玄白「解体新書」出版	
1794	寛政 6	大槻玄沢らオランダ正月を祝う	
1796	8	ハルマ和解（最初の蘭日辞典）	
1815	文化12	杉田玄白「蘭学事始」なる	
1823	文政 6	シーボルト蘭商館医として来日	
1826	9	〃　江戸随行	
1828	11	シーボルト事件（出島に幽閉）	
1829	12	シーボルト国外追放	
1838	天保 9	緒方洪庵、蘭学塾を開く	
1839	10	蛮社の獄（最初の蘭学者弾圧）	
1848	嘉永 1	活版印刷機を蘭より購入	
1850	3	蘭商館長、最後の江戸参府	
1855	安政 2	日蘭和親条約	1853ペリー来航
1857	4	長崎奉行所で蘭訳英文典を印刷	1854米、英、露和親条約
1858	5	官医に蘭方兼修を許可	1858安政の５ヶ国条約（修好通称条約）
1858	安政 5	福沢諭吉、蘭学塾を開く（築地）	
1859	6	シーボルト再来日	
1862	文久 2	蘭に始めての留学生派遣	
1869	明治 2	政府、蘭医学から独逸医学に切替	

司馬史観の黒田官兵衛に触れて

平山恵敏

はじめに

「播磨灘物語」を未だ読んでいない方々のために、やくどいがそのダイジエストをご紹介したい。司馬著書が好きで何冊か読んでいるが、この物語は定年になってから読んだものでたっぷり時間があり、記憶にしっかり留めたい、一人でも多くの方に読んでいただきたい、との願いを持った。

学生時代に歴史を学んでいるが、余程歴史好きでない限り、大概は歴史上に起った大事件の年代と関った人物を覚えるのがせいぜいではなかったか。

社会人になって書物を読みだしてから、歴史の物語に興味を持ったが、内容を深く追求するでもなく、只、面白く、漫然と見過ごしていた。

遅まきながら年を取ってから、先人が残していった教訓を少しでも知り得たいと思うようになった。黒田官兵衛の功績は天下を取った信長・秀吉・家康の影に隠れて過小評価されがちなのは否めず、「播磨灘物語」の司馬史観に触れれば、余徳が存分に窺える筈である。

一、黒田家の家系と教養

(一) 曽祖父・高政

黒田家は、古くから琵琶湖北東木之本町に居を構えていたが、官兵衛の曽祖父高政のときから諸国を転々と流浪する。一説よると高政が、軍命に背き先駆けの功名を立てようとしたため、将軍足利義稙の機嫌をそこない出て行かざるをえなかったという説がある。が、真相は冬雪深く農地を持たず、このままあたら貧に埋もれてしまう危機感を持ったのではなかろうか。官兵衛を含め父職隆、その祖父の行蔵にしてこの時代には珍しく室町作法を心得た行儀の良さの気品や優しさのうえに教養があった。教養は人の信頼と信望を得る。黒田家にとって家

系の伝統というべき教養が生活の糧になる。

高政は、人に仕えるのを良しとせず自立心強く、とびきり気の利く才覚と用心深さ、商人のような冒険心を持っていた。この精神こそが流寓の境遇から身をおこし、他人の信用を得る。土着の暮らしの中で、本をよく読み、人の集まる場で、そつのないよう目配りができる大人であった。「どこか身を立てていく豊かな地はないか」と、僧や知人に聞いたりしているうちに「備前の福岡千軒に行かれてはどうか」と親切に言ってくれる言葉に先祖伝来の土地に見切りをつける。

山陽道にある福岡は気候温暖で作物に適し、長船の刀鍛冶が住み、この時代ありふれた村に過ぎない何の縁故もない地に辿り付く。福岡の村に日蓮宗・妙興寺がある。

この寺は播州からこの辺りまで勢力を持ち、住職と親しくなればこの国や近隣一帯の大名・小名の状態が知れた。が、高政は仕官もせず牢人のまま一家を養うのに精一杯の生涯を、この流寓の地に官兵衛が生まれる二十三年前に終える。

(二) 祖父・重隆

高政の子重隆が孫である官兵衛に濃い影響力を持つ。重隆は際立って教養があったらしく、将軍義輝の歌の会に出ているという。近江源氏の門葉のはしくれとして連座し、門地を取り戻したい想いの強い人物であったようだ。備前でも下刻上が日常茶飯事に興り、相手をあざむく人殺しが横行しており、高政が「備前はいやな所だ」とよく言っていたのを重隆は聞いている。重隆は人を憎むより人に憐れみをかける方が身の安全になると絶えず他人に言う。ついに当地に嫌気がさし、離れていく決心をしたことが、黒田氏の行く末に重要な影響を与える。

重隆は親密になった妙興寺上人に相談したり悩んだすえ、播州に縁のある上人から「播州へ行かれてはどうか」との助言を受け、東の播州をめざすことを決意する。

黒田氏にとっては、言葉づかいほど大切なものはなかった。流浪の一家が、幕府の殿中で出来星大名や新興豪族がとても使えるようなものでない言葉を、馴染みの薄い土地で使っていたからこそ、奇妙な信用のされかたをするようになる。

重隆は姫路とよばれる草深いうらびれた小さな村の百姓家に住みつく。この頃、城主は姫路の東約五キロにある御着の小寺氏で、姫路城は捨て城であった。大百姓竹森新右衛門は丹念にみすぼらしい親子を観察する。

暮らしに困っているが朝は必ず子の職隆に漢籍を教えている声が聞こえてくるのを「偉いものだ、よほど、高貴な人だったに違いない」と見込み、援助を申し出る。

世話好きで酔狂な新右衛門は、御師である広峰氏に重

隆のことを吹き込む。重隆は家伝の薬製法を思いつき、秘伝の（目薬）を代々従四位下の高位広峰氏の威を借り、寺の信徒たちの伝手を頼って売ることにより利益を得るようになる。黒田氏が播州でひとかどの勢力を築くに至るのは、この目薬のお陰である。

（三）父・職隆

黒田氏は牢人ながら武家と称してたちまち金穀を積み上げるほどの身代になって行く。担保は不要、利息は五割が一般的なときに、利息を二割にする代わりに、借りている期間中、屋敷に月二日でよいから仕事に来させ、「家来になれ」と言って特に男の子をもつ者を優遇した。

少年を兵士にすべく養成しようとしたのは、この戦国期に黒田氏のみである。重隆が隠居するとき、広峰氏を通じ職隆に「御着へ行け」と指図する。

当時の藤兵衛は近隣の諸豪族から領地を攻め削られて恐怖心を持ち続けていた。評判が高く、頼り甲斐がある智恵者職隆を被官とし、一年後には筆頭家老に登用する。有力豪族広峰氏共々山崎と新宮の中間に位置する香山衆にも手を焼いていたが、重隆・職隆父子の戦略によって香山加賀守を打ち破り、戦功を挙げる。黒田父子に捨て城同然であった姫路城を与え、小寺勢力圏の西方の固めとする。藤兵衛は職隆を益々信頼して小寺姓を与える。職隆としても当主名を名乗るのは、大名の家へ使者に行くときに外交上便利で、双方にとって利があった。

そうした最中の天文十五年（一五四六）に本稿の主人公、官兵衛が生まれる。十歳過ぎても脾弱で臆病な子であったらしい。十四歳で元服、官兵衛孝高と名乗り、十六歳で小寺の近習になり、御着城に起居する。十六歳で初陣、馬術はうまくなく刀剣は戦場の道具と割り切り精を出さなかったが、敵味方の動きや士気を見、状況を洞察する感が生れ付き備わっていた。上士・下士・雑兵問わずに聞き廻り、彼らの能力を知ろうとした。官兵衛は二十二歳のとき筆頭家老を務めることになり、職隆はさっさと隠居してしまう。

二、官兵衛

（一）青春時代

官兵衛は栄達欲に一見恬淡とし、いつでも地位を捨てて無一文になってもいいという凄みを持っていた。永禄八年（一五六五）平穏な暮らしに飽き「京へ遊びに行きたい」父と主君の許可を得て善助伴につれて行く。生来、地理や世間の好みの変化に興味を持つようになる。

堺に十日ほど滞在している内に、コーチン・ルソン・ローマなどとの交易やきらびやかな唐物を見、異質文明が栄えていることを知る。

洛中、織田信長の一団に出会う。信長は生国や身分で

差別せず、他国から流れて来た者でも力量さえあれば抜擢する。一国の経済の仕置きが確かで、尾張に他国の商人が来ることを歓迎し、市を開かせ繁盛させるだけでなく、耕地を開墾して国を富ませる、百姓が居に安んじているという不思議な政治をする男に官兵衛は次第に心を奪われて行く。

官兵衛はしばしばキリシタンのことを耳にする。司祭たちが厳格な戒律と敬虔さとそして他人に対するやさしさ、万里の波涛を冒してやって来た勇敢さに感心する。

キリシタンの礼拝場は武士たちに社交場を提供し、将軍義輝の側近和田惟政のような幕府の高官とも話ができる。その惟政から天下とはどういうものかを教えられる。惟政の配慮で義輝に拝謁するが「こんな男か」と、平凡そうな若者に失望する。官兵衛は物事の理解がすばや過ぎるところがあり、人の世のことがほぼ分かり始め、終生この性癖がつきまとい、唯一欠点となる。

京から帰って二ヵ月後、将軍義輝が松永久秀に殺されたとの、ついこの間に拝謁したばかりの将軍の訃報に衝撃を受け、「この異変は只事ではない。もう一度京へ登りたい」と、主君に願い出て、しぶしぶ許される。

先ず堺の南蛮寺へ立ち寄り、情報通のキリシタンから洛中の情勢を知る。官兵衛はキリスト教に心酔し、洗礼を受ける。官兵衛における京都は青春そのものであったが、このときの見聞と交友がのちの大戦略家の源となる。

一方、官兵衛が帰城してみると、主君・家臣たちから「筆頭家老たるべき者が主家をほったらかして上方で何をしてきたのか」と、非難を受け、理解し難い人物と見られるようになった。

（二）信長天下を予感

新将軍擁立に意欲を燃やす惟政から「将軍家再興に力を貸してくれ」と、手紙をもらう。官兵衛は矢も楯もたまらず「上方へ行きたい」性懲りもせず再三の直訴にもなれば、事情の飲み込めない主君は考え込み、父職隆から「度が過ぎる」と、叱責される始末。

官兵衛は「あと十年で乱が治まり、世の中が変わる。鉄砲の普及で軍仕立てが変わり、合戦の規模も大きくなる。毛利、朝倉、武田、上杉、織田などの戦国大名は力を拡大し逞しくなっており、小さな勢力の小寺氏などは、天下に目を向けなければ滅びてしまう。小寺氏が亡びぬように新将軍の擁立に参加させる」と、父を説得する。

父の口添えもあって主君はまたもしぶしぶ許す。

古典教養が頭抜けていた細川藤孝が官兵衛に「何処の主を頼ればよいか」と、ふいに相談を持ちかけたとき、「織田氏が良い」と、信長を研究し尽くしている官兵衛

は、天才的独裁者が持つ性格の際どさを抱きつつも答えている。信玄は旧体制の価値観を好み、叡山とか将軍家とかの権威を尊び、新しい時代感覚に乏しい。謙信は軍事的天才に拠るのみで、戦いを芸術のように心得、自ら指揮しなければ上杉軍は強くなく、謙信死ねば勢力をなさない。織田家は信長が頓死しても相続できる者が幾人もいる。だから織田家と手を握っておく必要がある、と官兵衛は断言する。

永禄十一年（一五六八）播州に住む官兵衛を歴史の舞台に引き上げる。時代の主役は信長に移り、この男が地方勢力の主に甘んじず、天下を志向する珍奇な人間と見られていた。信長は外交家、政略・戦略家として次元を異にしていた。将も兵も遊ばさず、一ヵ所で遊休させず、東奔西走させ何倍かほどの働きをさせる。やがて新将軍義昭を担ぎ織田勢力は六万の軍勢を従え近江の六角軍を蹴ちらす。義輝を殺した元凶松永久秀はあっさり降伏、真空地帯の京を将軍の手に戻す。天下統一に参戦しなければ上昇気流に乗り遅れる危機感を持つ官兵衛のこころとは裏腹に、播州の地侍たちは上洛しなかった。この機を逸してなるものかと官兵衛は主家を無視し、勝手に近習十人をひきいて合戦に参加する。

（三）地元との軋轢

上洛を成した信長は天下統一に近畿平定へ乗り出すが、反作用となって摂津石山本願寺や叡山の強烈な抵抗に遭う。本願寺の門徒衆は全国人口の約一割に達し、「信長は仏敵」として悪鬼羅刹のように言われる。播州周辺は「信長滅ぼすべし」という熱気に満ちていた。そのような信長にさえ官兵衛の意志は硬く「叡山の一件は神の罰であり、地上の者がうんぬんすべきでない。小さな播州の主が決める事でなく、論議は無用」と、処世の才や感覚もあった。身を処するような物柔らかさを持ちながら、自分が思いこんだ主義と手立てについては頑固譲らなかった。

小寺氏はどの勢力に属すべきか悩む。信長に京から追われたにせよ、四国で勢力を保持している阿波の三好氏につくか、山陽山陰十一ヵ国の大勢力を持ち「中国者の律義」と言われる毛利氏に従属すべきか。官兵衛の織田氏分析の説を理解しつつも、うわべだけは織田に付き、腹の中では大勢力圏を持つ毛利氏に傾いて行く。

三木城主別所氏をはじめ播州の各城主は、信長が門徒衆を殺戮したことに憎悪を持ち続け、毛利氏の援軍を信じて織田氏に反旗を翻し籠城する。播州は織田氏と異なり兵農分離が十分でなく、武士といっても地主か、自ら田を作る農耕者が多い。百姓といっても刀槍、具足を常に備え、村を空にして城に籠った。織田家のおびただしい軍兵が播州の野に満ち、三木周辺は点でしかない。

織田軍の攻城法は、神吉城や志方城の小城は一気呵成に攻め落とし、三木城兵の七千五百は長期攻囲して餓えを待つという方法は竹中半兵衛の独創であった。三木城に籠る播州兵の勇敢さと士気の高さには、秀吉も内心驚き、官兵衛に「中国・播州は皆こうか」と尋ねると「播州のみにて候」と自身播州人だけに、敵の強さが誇りのような気分で応えている。三木城は籠城して二年近く、馬もねずみも食い尽くし、草や木の根まで食って凌いだが、織田の大戦力に立ち朽れの如く落城する。

（四）荒木村重の反乱

村重は合戦に長けているだけでなく、和歌の達者な読み手でもあり茶道にも通じていた。俄か立身ながらも摂津国の国主にまで上り詰め、誰にも親切で温かみが芯から滲み出ているような人柄であった。とある元旦、信長へ新年の賀を述べる儀が、安土城で行われる。信長の主だった武将たちが茶室に招じられた。村重に順番が回ってきたとき、信長はじっと新参の脳天を見つめていたが、俄かに脇差を抜き、かたわらのなますのひと切れを突き刺し「摂津、いかに」と、迫る。

村重は両手をついたまま、ゆっくり噛んで飲み下し、信長が突き出している剣を自分の両袖で挟み込むようにして受け、静かに汚れを拭った。信長は、膝を打ち「まこと、太き肝よ」と褒め、あらためて脇差を与えた。村重は内心の不愉快さはそれで癒えたわけではなく「このような男に生涯を委ねられない」と思ったに違いない。

その後本願寺方に村重手の者が兵糧を売る事件が分かり、暴かれることを危惧し、信長に反乱を起こす。反乱は官兵衛の立場を深刻なものにしてしまう。

小寺氏の煮えきらぬ問題に悩まされ続けていたが、村重同様主君の寝返りが確かだと分かると、姫路の父や重臣の「藤兵衛への律儀立ては無用」という説得を振り切り、単身命懸けで諫めに行く。世を動かしているものは功利主義であり、何が利で何が損しかない。官兵衛の倫理観は、武士たる者は主に背くなという考えを、行動で示そうとする。それも、説得すれば必ず成功してみせる自己への才気に対する過信が動機になっている。

鈍重な主家の重臣たちに嵌められ「村重を翻意させられれば、従前どおり織田に従う」という藤兵衛の陰謀を疑いもせず、伊丹の村重と結託しているのも知らずに説得に行く。案の定村重に捕らえられ、城内のじめじめとした地下牢に幽閉されてしまう。

入牢中、一年有余の間に（人間というものは孤立して生きていけないし、人との関係の中に居て存在する。智恵なんて道具に過ぎない。行動を美しくしなければ人間の世はどうしようもない）と、人一倍考える男になる。

村重の逃走による落城で、官兵衛は昆虫の死骸のような姿で家来の栗山善助らに救い出される。右脚は古釘のように曲がったまま動かず、髪は皮膚病で抜け落ち、背

は丸くなって哀れな姿になってしまう。

不自由な身体になったことは後悔しなかったが、播州のために良からんとした志のために、返って播州の豪族が滅び、「いったい、おれは何をしたのか」考えようによっては、恐るべきことをしてしまったのではないかと胸の中にわだかまる。

（五）本領発揮と能力の限界

秀吉は官兵衛に「四国平定に名代として行ってくれ」と頼む。室町幕府が創設されたころは細川氏が四国全土の守護であったが、のちに代わって家老の三好氏がのし上がる。そこへ土佐から身を興し信長に目をつけ、進んで接触するかんの良い長曾我部元親が入り込む。阿波の土豪たちは淡路島を踏み石として播州などとは比べものにならないほどに京都文化を享けていた。

四国は官兵衛の知略により、織田勢力圏を広げて行く。

天正十年（一五八二）、秀吉とともに官兵衛は備中高松へ向かう。秀吉は前例のない発想で高松城を四キロもの堤を築いて囲む。足守川の水を引っ張り込み、城を水で孤立させるという工事に万余の人夫をかき集め、たった十二日間で完工するという離れ業をやってのける。

信長の天下構想が完成に近づいたかにみえたこの折に信じ難い変報が高松城下の秀吉・官兵衛に届く。六月二日の早暁、光秀の軍勢が信長を襲い、死んだという。

この変報は秀吉・官兵衛の運命のみならず、日本中すべての人々の運命を変える。

官兵衛は「この機に乗ずれば秀吉が天下を取れるのではないか」とも思った。この事態になって官兵衛の役割と存在は秀吉にとっては計り知れないほど大きい。（天の加護を得させ給い、もはや御心のまま儘になりたり）と、謎のような大気を秀吉に吹き込む。

この本能寺ノ変のとき織田家の諸軍団中、数万単位の戦闘組織をもっていたのは秀吉だけである。雑多な衆の集まりである秀吉部隊の中に、信長より四男の実子を譲り受けた秀勝と信長の側近であった堀秀政だけは筋目の正しい宝石のようなものであり、あらゆる面で秀吉は稀有の幸運の条件を利用する。そして、山崎の天王山の戦いで光秀軍を撃ち破り秀吉の天下に移っていく。が、山崎の合戦以降に秀吉は筋目の重臣を登用し出した。官兵衛の情報分析力には秀吉も舌を巻き、打つべき手にそつはなく、ときに意外な発想の奇手を用いるが、よく聞けば意外でなく、冷徹な現実認識から出ている。只、官兵衛は自分の天下構想を秀吉という素材によって一分でも描きえたことに、満足すべきだと思っていたようであり、たとえば領土欲を持つことを自ら禁じていたようで、彼ほど欲を面に見せなかった男もめずらしい。

（六）乾坤一擲の勝負

秀吉は四国を平定し、九州を武力で鎮め、ついで関東の小田原城を攻めて征服した。官兵衛は常に従っていたが、重大なことで秀吉の片腕になることはなかった。

秀吉の九州征伐は、長曾我部軍と毛利軍が選ばれ、官兵衛は毛利軍の軍監となった。

この任務を喜んだが、宍粟郡の三万石程度を食む身でしかなく、たった六、七百人の動員能力であったが、彼は九州で一仕事をするのに異例のことをやってのける。

士卒を公募し、三千人の敗残兵を銭で召抱えた。昔馴染みの毛利輝元、吉川元春、小早川隆景と小倉で落合い、立場をよく汲みとる性格を持っていたため、陣中の人間関係は実にうまく行った。

それに引替え豊後四国軍はうまく行かず長曾我部氏は背走し敗れた。秀吉は政権の威信が消滅するのを恐れ、主力軍を早めた。その軍勢は三十七ヵ国二十五万という大軍であり、馬だけでも二万頭の数である。これだけの食糧準備と輸送を可能にしたのは優秀な官僚団であった。新官僚たちの石田三成、大谷吉継、長束正家いづれも近江出身者で、秀吉自ら掘り出してきた人材である。

官兵衛は力を尽くして作ったはずの政権が、いざできあがってみると三成ら奉行たちの手に握られ失望する。

天正十五年七月、九州ノ役が終わり、秀吉は凱旋して小倉に戻り、論功行賞を行った。このとき、官兵衛は豊前の六郡十二万二千石を与えられ、大名らしい大名に初めてなった。豊臣政権を樹立させた最大功労者は誰もが官兵衛であることを知っており奇異に感じていた。

こんなこともあってか、「世から隠れたい」と言い出す。四十三歳の時である。秀吉は当初許さなかったが、官兵衛が北ノ政所を介して秀吉に説いてくれと頼み込み、やむなく折れた。官兵衛の嫡子長政が家督を継いで身軽になったのを機に、隠居して如水と名を改める。

あるとき、秀吉は殿中の側近たちを集めて夜ばなしに「わしが死んだら、天下を取るものは誰か」と、一同に質問したところ、出てくる名は、徳川家康、前田利家、毛利輝元といった大身代の持ち主ばかりであった。それを聞いても秀吉は驚かず、やがて、「くわん（官兵衛）が」取ると言った。秀吉は、官兵衛の器才が如何に玄妙なものかを語り、のちに官兵衛は、自分を警戒していると察して、隠居願いを出した、とも言われている。

慶長三年（一五九八）秀吉が死んだ。如水の生涯は、関ヶ原の前夜、二ヵ月ほどの間に凝縮されるのではないか。奥底で家康を軽蔑し、三成の器量などにいたっては、評価もしていなかった。

如水は風雲がようやく荒れ気味になっているときに、大坂から豊前中津の城下までの間に、早舟の急使リレー

式通信組織を作る。そして、如水は魔術師まがいのことをやる。隠居の如水の手許には、二、三百人の留守の士卒しかいないのに「わしに百日をかせ」と、言い、豊前・豊後はまたたくうちに席巻してみせる、その兵を駆って筑紫を平定し、大坂方である毛利氏の広島城を攻め取り、山陽道を駆け上り播州に入れば姫路は故郷であり、わしを迎えるであろう、九州・中国の兵をもって、天下に望めばどれほど面白い勝負ができるか、と言った。

如水はこれまで蓄えた莫大な銭を基にして、全九州に触れ周り兵を募集した。皆が金銀のおびただしさに驚き、これなら日本国も買えると士気は上がり、地から湧き挙がるようにその数一万三千になる。ところが彼の予想を覆す事態が起こり「……九月十五日、関ヶ原において」という報に「終ったか」と如水は呟いた。

以上が司馬歴史観の小説である。真実はどうであったか分からないが、今日に伝わる黒田官兵衛像は概ねこのようであり、秀吉の天下取りの決め手となった中国大返しの成功と、これに続く明智光秀の征伐の成功は、秀吉の大参謀であった官兵衛の功績であったのは間違いなさそうである。そして太閤秀吉誕生により、大軍略家官兵衛の存在価値より文官重視になってしまうが、これとて時の流れと言わざるを得ず、人間の運命が織り成す微妙な文でもある。

歴史に（もし）は許されないが、仮に前田利家亡きあと官兵衛が在京していれば、家康の独壇場と化していた伏見城の様相は一変していたに違いない。皮肉な事ではあるが、秀吉が官兵衛に大禄を与えず冷遇し、筑紫に隠遁させたのが、家康天下の横取りを許す原因となった訳で、秀吉はあの世で官兵衛を五大老の一角に入れて置けば良かったと臍を噛んでいたであろう。

おわりに

私は姫路より十五キロ西方に二十二歳まで育ち、現在神戸市に居住しており、勤務を含めて兵庫県には強い想い入れがある。

司馬遼太郎さんの「播磨灘物語」を読み終えて、戦乱の時代に播州の片田舎から黒田官兵衛という歴史に名を刻む世にも稀な才人が、どうして姫路から輩出したのか問い掛けてみた。

別に辺鄙な地から偉人が出たからといって不思議でも何でもないが、他人より官兵衛に興味をかきたれたままでである。

そこで、官兵衛の故地を辿ることにした。

先ず、小寺時代の御着城址を訪ねる。現在の姫路市は、五十三万余の兵庫県神戸市に次ぐ人口と世界遺産の城を持つ大都市として、誰知らぬ者がない発展した地である。身近な姫路城は幾度となく足を運んでいるが、官兵

衛の生まれた頃は、姫路城から数キロ離れた御着の小寺正隆が永正十六年（一五一九）に築城した御着城が本拠地であった。

姫路市内に住む兄を誘い御着城址に初めて訪れる。書物を数多く読み、近畿各地の史跡巡りをしている兄から歴史愛好に感化を受け、興味を持つようになる。兄は三十数年前に当地を訪れていたが、町並みの様相が一変しているのに面食らう。

JR御着駅前の案内表示板を見てのち、昔からの面影が残っている旧山陽道沿いを歩いていると徳證寺や小寺大明神・大歳神社に巡り合う。が、城址を探すが見つからず、土地の人に尋ねたところ、幸いにも史跡保存会の世話役をしているとかで「播磨御着」のパンフレットを戴く。城址は国道2号線に面した低い台地の一角、土塀と一本の大木それに石碑が見える所にあった。

台地には「姫路城主・黒田家の墓所」があり、祖父・重隆と生母（明石）の墓がある。官兵衛は御着城で筆頭家老として居住しており御着とは縁が薄くはないのに、城跡に官兵衛の所在した痕跡はどこにもなかった。

次いで三木城址へと向かう。戦国時代の三木は、播州最大の勢力を誇る名族赤松氏の支流にあたる別所氏の本拠地で、時の当主が若い長治氏であった。頑迷な筆頭家老別所賀相が実権を握り西進してきた秀吉軍と戦う。

包囲されること一年八ヵ月に及び、兵量攻め「三木の干殺し」を受け、別所一族は自刃し開城している。釜山と呼ばれる城址には辛酸を舐めた別所長治ほか一族の辞世碑、稲荷社ぐらいがあるのみで、三木市民は根強く別所一族を誇りにしているに違いないが、祖先たちが無念な顛末に帰した出来事を、時には想い起すのであろうか。

城址より三キロほど北方に秀吉軍が陣取った平井山に足を伸ばす。平井山に着くと今は観光葡萄園になっており、管理する女性に竹中半兵衛の墓所を尋ねる。訪ねた場所のすぐ近く田畑の間に車一台がやっと通れる道を少し走れば、山の麓にこんもりした木立があり、半兵衛が亡くなったという立札後方に墓がひっそりあった。

過日、JR伊丹駅前にある官兵衛が地下牢に幽閉されたとされる有岡城跡を訪れる。城跡は時代の流れに抗し難く都市化が進み、辛うじて石垣で築かれた狭い台地上に井戸と礎石建物跡が歴史の名残をかすかに漂わせていた。謀反ばかりか妻子や家来を置き捨てにした村重に逆鱗した信長はこの地で大量虐殺をしている。その城跡一部にあたる駅南側由来地に荒村寺があり、『古城や茨くろなるきりぎりす』の句碑があった。阪急伊丹駅に向かって歩いていると秋雨が降り出し、薄幸な運命に翻弄された一族の落涙を想いつつ、その冥福を祈るように寺

院が連なっていた。
将来は県内だけでなく、黒田家発祥の地の近江、またの機会に如水時代の地、豊前や豊後の故地を訪れてみたいと思っている。

おわり



後進国が支配する韓国

新井宏

韓国に通いだして六年になるが、その間、個人的に「反日感情」で、不愉快な想いをしたことは一度もない。私が鈍感なことは有り得るが、特に心が寛いというわけではない。この不思議さをどう理解すべきなのか、常に心にかかるテーマであった。

そして得た結論は、もはや韓国の先進国部分は、決して「反日」などでは有り得ないとの認識である。それは韓国の先進国部分が決して「反米」ではないのに、盧武鉉政権が最も「反米的」であることに象徴される。

急成長した韓国は、先進国と後進国で成り立っている。しかも、後進国代表の盧武鉉大統領が先進国部分の上に乗っている構図であるから、外交、政治、経済がうまく行くはずがない。いまや盧武鉉大統領の人気は地に堕ちている。

反日より強い反米

盧武鉉は釜山の商業高校出身で、弁護士を経て、政治家になった人物である。政治的には韓国の先進国化を主導した軍事政権や大企業とは対極にあり、韓国の後進国部分に軸足を置く。

そう思って見ると、後進国部分の反米感情は反日感情よりもむしろ強いように見受ける。大学構内では、反米のポスターは見たことがあるが、反日のポスターは一度も見てない。それなのに、マスコミで反日が強調されるのは、植民地支配とか、従軍慰安婦とか、教科書とか、竹島とか、わかり易い題材が豊富にあるからに違いない。

歴史を逆転する韓国

そもそも、盧武鉉大統領が誕生しなければ、時代に逆行するような反日は起こらなかったであろう。「悪者」

を仕立てて自己を正当化するのを常套手段としてのし上がってきただけに、反日は絶好のカードであった。そのためには日本は悪者でなければならない。

政治力学で言えば、盧武鉉は間違いなく韓国の後進国部分を代表して、先進国部分を攻撃している。韓国はわずか二十年ほどで先進国化を遂げたため、未だ後進国部分を多く抱えているが、後進国部分が攻撃側に回ると、正義を装おい、学生層の人気を獲得する。しかし、この歴史逆転が長続きするはずもない。馬脚を現し学生層はいまや冷め切っている。

十パーセントを割った盧武鉉の支持率

先日、ある講演会で、盧武鉉大統領の支持率は明日にも二十パーセントを割るだろうと断言した。それからまだ二ヶ月にもならないのに、支持率はついに十パーセントを割り込んでしまった。イラク問題で苦境に立つブッシュ大統領でさえ、まだ三十パーセント台を維持している。まさに絶望的な状況である。

もっとも日本でも宇野内閣と森内閣の時に、支持率が十パーセントを割り込んだ例がある。いずれも即刻変えられてしまった。しかし、韓国は異なる。大統領の任期は五年間で、まだ一年余も残っている。しかも、立法、司法、行政の三権の上に立つ強大な権限を持つ世界でも特異な大統領である。大統領が絶望的な状況にあるのである。

なく、韓国が絶望的な状況にあるのである。

反日発言で瞬間的に上がる支持率

そもそも盧武鉉は、先進国部分の腐敗を攻撃し、政権についた人物である。軍事政権以来、先進国化を担った大企業などは、政権との癒着、賄賂、同族支配などの汚い面を抱えていた。したがって、この恩恵に与かれなかった後進国部分は、この汚い部分に批判を集中する。徒手から大統領になった人物だけあって、攻撃や人気取りには長けている。

だから、不人気になると「日本たたき」を行い、瞬間的に十パーセントほど支持率をあげる。しかし、また間もなく支持率が十二パーセント下がるということを繰り返してきた。人気取りをすれば、その反動が大きいのは当然であるが、後進国部分と共鳴する人気取りは、もはや先進国化した韓国の実情には合わず、時代錯誤的なのである。特に、外交問題を国内の人気取りに使えば、国益を損なうのは世界の歴史が示すところである。

オーバーランする韓国

韓国では、日本で祖父母と曾孫の世代間で変化したことを親子の世代間で変化させている。急変貌する姿は、一部で日本の先を行くほどのオーバーランを呼んでいる。例えば、少子化を示す特殊出生率は一・〇九人で、日本の一・二九人を追い抜き世界一位である。伝統的に世界一を誇ってきた日本の自殺率を、韓国がついに追い抜いた。離婚率も二十年前より一桁高くなり、日本を越えている。大学進学率は日本よりもはるかに高く七十パーセントに達する。先進国化は経済分野だけではないのである。

韓国を逃げ出す韓国人

もっとも、大学の質はOECD六十ケ国で最下位なので、誰もが外国に留学したがる。米国の統計によれば、韓国からの留学は家族同伴を含めて十万人にも達し、二、三位の中国やインドの倍近くもいる。もちろん日本からの留学生よりもはるかに多い。この他にも、日本やヨーロッパへの留学も非常に多いのだから、人口比を考えると気違い沙汰である。

留学ばかりでない。遠征出産と称し、米国で子供を生んで市民権をとることが大流行している。カナダへの移民権が商品化されて人気を呼んでいる。だから、韓国の先進国部分は、後進国部分の韓国から逃れたがっているのである。

知り合いの教授たちの家族がみんな米国暮らしをしていて、一人さびしく暮らしをしているのを見れば、韓国の「愛国心」など後進国部分にしか残っていないと思える。先進国部分は民族主義とはまったく次元を異にしているのである。

先進国の大企業と後進国の中小企業

経済ではサムソンやLGグループ、現代グループ、ポスコなどが世界企業入りしている。高速道路は日本よりも快適で、IT環境も良く整備されている。だから、韓国の先進国部分は、間違いなく世界水準を越えている。

ところが、この先進国化について行けない後進国部分が、韓国の影となっている。農業はもちろんであるが、低賃金を武器としてきた中小企業は、中国に対抗できないばかりか、技術的にも日本に追いつけず喘いでいる。サムソンなどの世界的な企業は、良質な部品を日本に求めるので、中小企業はますます苦境に陥る。韓国の貿易収支は、輸出が増えれば増えるほど、日本からの輸入が増え、対日赤字が膨らむ構造である。しかも、そこに、ほとんど全員が大学を卒業する現状がある。大企業に就職できるのはごく一部である。だから、中小企業のホワイトカラーが大企業のブルーカラーになりたがる。

後進国部分を代表する盧武鉉

軍事政権以来、先進国部分を引張ってきた大企業は、政権との癒着、賄賂、財閥支配など汚い面を抱えていた。後進国部分は、この先進国部分に批判を集中する。特に学生たちは、若さによる正義感から先進国部分の汚さを

攻撃する勢力に同調しやすい。これをアジって政権を獲得したのが盧武鉉である。盧武鉉は大学を出ていないし、大統領になるまでに外国を訪問したこともない。いわば後進国部分の代表なのである。

しかし韓国の現実は完全に先進国部分にあり、もはや後進国部分に同調した国政運営などできない。第一、後進国部分が先進国部分の上に立てば、先進化を支える経済が巧く行くはずがない。企業への規制が強化され、ストが必要以上に多発し、資本は海外に逃げ出す。だから今、大学出の若者の職場は、絶望的なほど狭き門である。新聞がそれを書き立てると、若者たちも正義感などとは言っていられない。働き場が増えないのは政府のせいだと確信しはじめている。

権力欲の強い民主化運動者

一般的なことだと思うが、民主化運動を指導する者が民主的だということではない。むしろ、権力に激しく逆らうものは、権力欲が強い。だから、いったん政権を握ると妥協を排し、独善的に権力を行使したがる。

もともと、所得格差を解消しようとする政策は、経済的に豊かな層を抑制し、困窮層に恩恵を与えるはずであった。しかし、狙いとは逆に所得格差がどんどん拡大している。経済成長が止まり、働く場がなくなると真っ先に影響を受けるのは貧困層である。その中で、福祉に手厚くすれば、先進国化する前に、先進国病にかかってしまう。

本来、政治や外交というのは利害の調整の場である。異なる階層、地域、老若、男女、宗教、文化の利害を如何に妥協させて行くかが課題なのに、そこに偏屈な理想や原理を持ち込めば、対立が激化して混乱に至るのは当然のことだ。権力欲が強い理想主義者、原理主義者は、なまじ正義感があるだけに柔軟さに欠ける。幼稚な正義感ほど始末に負えないものはない。汚職は国を滅ぼさないが正義は国を危機に陥れる。

独善のアマチュアリズム

権力志向の原理主義者達は、不動産価格でさえ、権力でコントロールしようとする。机上の理屈で、税制を利用し、規制によって不動産投機を押さえ込もうとするが、それはかえってアパート建設の抑制に繋がり、ソウル江南のアパート価格を暴騰させてしまった。

事態を収拾しないと政権が持たない。不動産特別対策を大小とりまぜ、三十回も発表するが、その右往左往ぶりが、また海千山千の業者につけこまれている。過去の知恵を活用する方法を知らない独善的なアマチュアリズムは、狙いとは逆の結果ばかり出している。

その上、権力の座に就くやいなや、腐敗を攻撃して中枢に登ったスタッフ達が次々に汚職にまみれる。六親等

までが親戚の韓国では、友達の友達は友達である。ツテを頼りに群がる業者に手も無く捻られ汚職に染まっている。

小学唱歌を歌う老人の青春

そもそも、韓国で反日が強烈になったのは、戦後の教育を通じてである。だから、日韓併合期の教育を受けた老人の世代は、いわば当事者として差別の実態を良く知っているが、さほど反日的ではない。

それは、李氏朝鮮、日本併合期、朝鮮戦争と並べてみれば明らかなように、一九七〇年代までは、日本併合期がもっとも豊かであったからである。反日よりも、朝鮮戦争による反共が強烈な世代である。建前は別として、実感は反日ではなく反共の世代なのだ。だから、小学唱歌は彼らの青春であり、時に大合唱をはじめて、私を驚かすことになる。その中には軍歌もあるし、戦後の美空ひばりや都はるみの歌謡曲もある。厳禁されていたはずなのに不思議な話だ。

逆転した日韓の観光収支

一方、若年層は誰もが大学に行く時代である。純粋培養された反日教育を、日常体験として確認できる世代ではない。日本を旅行すれば、オニのはずの日本人が、韓国人よりも遥かに親切に見える。韓国を訪れる日本人は、概して韓国人よりも礼儀正しい。留学や旅行、映画・芸能や職場生活を通じて日本の多様な世界を知れば、もはや単純な反日など恥ずかしくて唱えていられない。

この雰囲気は、明治維新期の日本に似ている。もともと攘夷を建前としていた明治政権が、岩倉具視の欧米使節団により、一気に文明開化に走り出し、鹿鳴館時代を迎えたように、世界に目を開けば、攘夷や反日などの民族主義はもろくも崩壊してしまう。

つい最近のニュースでは、日韓の観光収支が逆転したことを伝えている。経済規模で比較すれば五倍以上の差のある両国間で、収支が逆転したということは、いかに多くの韓国人が日本に向かっているかの証拠である。日本は米国につぐ憧れの対象で、読売ジャイアンツの李承燁は大リーグのイチローや松井なのである。ブッシュの率いる田舎者の米国は嫌いでも、米国人は好きだと言えば、わかり易いだろうか。

いきり立つのは馬鹿にされた時だけ

そんな韓国でも時に反日で沸きあがることがある。それを「いつまでもしつこく過去のことを恨んでいる」と受け取ると間違いである。そうではなく、彼らが、いま現在、日本に馬鹿にされていると感じた時に、いきり立つのである。そもそも、彼らの偏狭な論理で過去の問題を声高に言えば、日本がまともに対応するはずがない

のに、自分で種を撒いておいていきり立つ。これを意識して利用したのが盧武鉉である。

盧武鉉大統領が独立記念日に、はじめて反日の狼煙を挙げた時、小泉首相が「支持率目当ての国内向け発言でしょう」と軽くいなした。これが盧武鉉を激怒させたのをご存知であろうか。ぐさりときたのである。

従軍慰安婦は恥ずかしい

従軍慰安婦問題と言えば、反日の定番である。靖国神社問題でギクシャクする中で、小泉首相が韓国を訪れた日、日本のテレビも、日本大使館の前の慰安婦抗議デモを大々的に流していた。派手にやっているなと思うとこれも大間違いである。韓国の新聞はそっと五十人のデモだったと伝えている。

もうエネルギーが枯渇しているのである。第一、韓国にとっても不名誉な従軍慰安婦問題を、いつまでも騒ぎ立てていることに恥ずかしいと思い、うんざりしているのが先進国部分の韓国なのである。

様子の異なる竹島問題

ただ、ちょっと様子が異なるのは竹島問題である。このことだけは未だ先進国になれないでいる。近代国際法にもとづけば、おそらくハーグ国際司法裁判所で日本が勝訴するだろうと私が言うとびっくりする。領土問題に関しては、どの国の新聞も国粋主義者になるから無理もないが、それにしても何も知らない。テレビ放送の開始時に、国歌や大極旗と共にかならず放映される竹島には、理屈以前の国民感情移入があるのだろう。

しかし、その竹島問題でさえ、若干の変化が見られる。盧武鉉大統領が竹島を基点として、漁業専管水域を設定すると言い出した時のことである。もし、その論理が通るなら、日本が同じく無人島の鳥島を基点に韓国側に専管水域を拡大できる。そんな警戒もせずに、提案を出す盧武鉉政権の愚かさ加減を流石に新聞が咎めた。

第一、竹島は韓国が実効支配している。実効支配している側は、受けて立つことはあっても、自分から仕掛けるなど、外交では常識外の行動である。韓国が騒ぐと、紛争地域であることが国際的に知れ渡るだけ、日本の政府が喜ぶのが現実である。かくして、ポピュリズムとアマチュアリズムが韓国の国益を損なっている。

嘲笑を買う韓国の歴史観

さて、韓国の後進国部分である。はたして、歴史的に見て李氏朝鮮はどんような発展段階にあったのであろうか。日韓併合がなくとも、今日の発展が可能であったと考えたがるのが韓国である。しかし、欧米の学者たちの見方は概して韓国に厳しい。学問の世界では「オレンジ畑でリンゴを探す」行為として嘲笑を買っているのである。

嘲笑と言えば、盧武鉉大統領がライス国務長官に「歴史問題」について日本を「言い付けた」ことがある。外国を歴訪しては「日本のワル」を先生に言い付けまくっていた。本人は得意然としていたが、国際社会では嘲笑を浴びせていた。それにも懲りず、ブッシュ大統領との首脳会談で、懸案はそっちのけで、日本のワルを言いつけ、また嘲笑された。安部首相との首脳会談でも、四十分も時間を空費して、肝心の共同声明が出せなかったという。

実は、韓国が最も嫌うのは、外国から馬鹿にされることである。まともな反論に対しては、ムキになって立ち向かえるが、国際社会からの嘲笑には、先進国部分には堪えがたいものがある。これが、ボデーブローとして、後進国部分までも揺さぶっている。

イスラムと似る原理主義

歴史的な発展段階がどの辺にあったかという難しい問題はさておき、李氏朝鮮が教条主義的な朱子学で凝り固まっていたのは事実である。いわば、儒教本家の中国よりも厳格な原理主義で、今日のイスラム原理主義に通ずる。日本の関与がなければ、韓国は今でもイスラムの段階に留まっていたかも知れないのだ。

その頃、日本は同じ儒教でも修正主義的な陽明学が盛んで、鎖国の中にありながら、ヨーロッパを文明や技術を受け入れていたのと大違いである。

教条主義では、教理に合わせて論理展開する。現在のように、韓国にとって「都合のよい歴史観」を形成するにはもってこいの土壌である。これが韓国の後進国部分を理論的に支えてきた。しかし、これ以上、自国に好都合な歴史を主張し続けるためには、学問的な孤立を選択するしかない。このことは日本の「心地よい歴史観」でも、まったく同様である。これらの「歴史観」は学問ではなく宗教なのである。それが通用するのは局地だけであることを承知しなければならない。

韓国にとって、原理主義的な歴史観をこれからも主張し続けることは、もはやできないであろう。ただ、ひとつの逃げ道は、より遅れた北朝鮮を抱え込み先進国化に背を向けることである。

親日派への報復の悲喜劇

盧武鉉大統領はどこかで先進国化を拒んでいる。

韓国の上層階級は、日本支配下で実効支配を担っていたグループが引き継いだ。だから建前は反日であるが、本音はさほどでもない。それよりも朝鮮戦争の悲惨さによる反共が強烈であった。特に朴正熙大統領以来の軍事政権が、激しい反共意識を持ち、その反動で、決して反日ではなかった。酒席で日本の演歌を歌う朴正熙がどう

して反日で有り得るか。

それが軍事政権に痛めつけられた後進国部分にとっては気に入らない。野党ウリナラ党に朴大統領の娘、朴槿恵がいて、次期大統領を伺う距離にいることもあるが、盧武鉉は本気で歴史を裁き始めたのである。

いわば、日本支配下や軍事政権支配下で甘い汁をすった者の子孫を暴きたて、その権益を抹消しようとしたのである。そして悲喜劇を生む。親日派攻撃の先頭を切っていたヨルリン・ウリ党議長の辛基南が、実は、憲兵の子孫であったとわかり真っ先に失脚してしまった。

ちなみに、韓国では親日派とは極悪人の代名詞である。

北朝鮮への親近感と本音

後進国意識は先進国部分への僻みであり、先進国化を主導した軍事政権に対する恨みである。それは必然的に、敵の敵、すなわち北朝鮮に対する親近感を生む。だから二〇〇〇年の南北首脳会談が韓国を駄目にしたとの意見がある。それは発展途上段階を終えて、やっと先進国化が実現したのに、民族同士の民族主義的を目指し、逆戻りする盧武鉉の路線を決定づけてしまったというのである。

しかし、韓国国民なら誰でも知っている。北に近づくことは、自らの生活水準を引き下げることだと。民族統一や民族同士は建前に過ぎず、本音は先進国部分を如何にして維持し伸ばして行くかにあることを。反日や反米を強めれば、韓国は北朝鮮や中国に近づくしかない。それを先進国部分が好むはずがない。

韓国は中国の属領

韓国が中国の一部だったことを韓国人は誰も認めない。想像さえしたことがないようだ。しかし、中国はチベットや新疆地域を自国領に取り込み、台湾も自国領土だと主張している。チベットや台湾が韓国とまったく同じく清の属領だったことから見れば、清を継承した中国の意識では、チベットと同様に韓国も中国領土である。

いま、中国は東北工程と称して、高句麗や渤海の歴史を中国史に編入している。これに対して韓国は猛反発中である。

そんな中で、盧武鉉大統領が東北アジア均衡者論を持ち出した。ロシア、中国、日本、米国の真ん中に存在する韓国が、地域の調整者として国際政治を取り仕切ろうとの考え方である。当然、韓国の国民には受けの良い発言である。しかし、かってポーランドが同様なことを唱え、ロシアとドイツに分割されてしまった歴史を知らないのであろうか。

中国は甘くない。韓国が北朝鮮に近づけば、中国は韓国を含めて丸ごとその領域に取り込むであろう。だから

自国にしか通じない都合のよい歴史観は国を誤る。

戦時作戦統制権返還問題

戦時作戦統制権を返還しろと盧武鉉大統領は本気で米国に要求した。歴代の大統領もその返還を口にはしてきたが、本気で要求したことなどなかった。これに対し、折から米軍世界戦略再編中のラムズウエルド国防長官が乗ってきた。二〇一二年までに返せと言うなら二〇〇九年までに返しましょうと。

これには韓国側がびっくり仰天した。返還に伴い発生する費用が国防予算の十年分にも相当し、とても現実的とは考えられないからである。「殿ご乱心」とばかりに、歴代の軍部首脳や外交官のOBが集まり、延期を諫言するが、盧武鉉大統領は北朝鮮と仲良くすれば良いと泰然としている。

そこに北朝鮮のミサイルや核の実験が相次いだ。首都ソウルが北朝鮮から百五十キロしかない韓国が、北朝鮮を刺激したくないのは当然であるが、米軍なくしては朝鮮戦争の二の舞である。もう、盧武鉉には任せられない。

先を争って逃げ始めた与党議員

レイムダック化した盧武鉉であるが、韓国大統領の権限は強大である。特に、人事については専決権が与えられている。潘基文外相が国連事務総長に選出されたことに伴う後任人事で、またコードの合う(思想の合う)反米派を起用した。ヤケになって、反米を表に掲げたようなものである。憲法裁判所の長官にもコード人事として全孝淑女史を固執して、野党の猛反対を受けている最中である。

これには与党のヨルリン・ウリ党もあきれ返った。いまや、与党議員が先を争って盧武鉉の舟から逃げ始めている。

米国はいずれ単独行動主義をやめ、世界の憲兵役を降りて、モンロー主義に復帰するであろう。その時、韓国は北朝鮮とともに中国に付かざるを得なくなるのであろうか。そんなことはあるまい。韓国の先進国部分が健全であることを信じたい。そのためには、日韓の確固たる友好関係が絶対に必要である。



法は最低の道徳

伊治　哲

今年、二〇〇六年もいよいよ大詰めを迎えたが、振り返って、今年ほどおぞましくも唾棄すべき事件の多かった年はなかったように思う。

幼児虐待や誘拐、謀殺からはじまって、親殺し、子殺し、金銭詐欺、性犯罪などなど、忌わしいニュースの絶える日はなかった。

昔から泥棒や傷害、殺人などの犯罪はあったが、その背景には貧困や宿怨など、〝盗人にも三分の理〟があった。しかし今や、〝三分の理〟はおろか、犯行の原因さえ掴めない衝動的、発作的、突発的な事件が多い。

ごく僅かなひとにぎりの人間による特殊例外的な犯罪で、これだけをもって社会全体の傾向とみるのは極端かもしれないが、少なくとも人間性崩壊への兆しのように思え、心寒い限りである。

ところが、ほんのひとにぎりの人間が、明らかな作為と欺瞞によって、社会全体の風潮、とりわけ若年層の精神構造を著しく汚染するような経済事犯が明るみに出た。

その最たるものが、ライブドア事件や村上ファンド事件である。

この両事件の主役、ホリエモンこと堀江貴文、村上世彰の両者は、それぞれ最高の学府に学び、若くして経済界の旧弊打破を旗印に、華々しく世に打って出た。ともに株式交換による異業種の買収と株式分割による企業規模の拡大、さらに株式の大量取得による株主の権利行使で、一躍〝モノ言う株主〟〝時代の寵児〟として世間の耳目を集めた。

堀江貴文が逮捕された二〇〇六年一月の直前に日経新聞が行った「新成人の大学生アンケート」によれば、「尊敬する人物」としてイチローや小泉純一郎、緒方貞子などと並んで、第六位に「堀江貴文」の名が挙がっている。（〇六・一・九付け日経新聞）若者にとってはほとんど偶像に近い偉大な人物であったようだ。

その両雄がほぼ時を同じくして司直の手にかかったのだが、〝時代の寵児〟も一皮剥けば単なる金の亡者にすぎなかったのかという大方の見方に対して、それでもなお彼らを支持するという少数意見もあった。それほどに多くの人たちに与えた影響は大きかったといえる。

堀江が率いるライブドアの経営陣は今年二月に起訴、現在公判中であり、村上は六月に起訴されてこのほど公判が開始された。もちろん結論はまだ出ていない。訴因は両者とも証券取引法違反である。前者は「有価証券報告書の虚偽記載」「偽計取引、風説の流布」、後者は「インサイダー取引」の容疑とされている。しかし、堀江も村上ももとを辿れば、ニッポン放送株の買取りを巡るインサイダー情報を交換する仲にあったという。〝同じ穴の狢〟の茶番劇であったのだ。

従ってこの事件に関わる疑惑は、昨年、二〇〇五年初めにさかのぼるニッポン放送株の市場外での一挙大量買占めの時点で、既に明らかにされていなければならなかった。結果論かもしれないが、検察や司法の慧眼と、法に照らした正しい洞察があったならば、一年間の空白は避けられたはずである。

この一年間の空白のために、多くの投資家が惑わされたばかりでなく、時の政治家までもがエールを送り、国政選挙にまで担ぎ上げるような愚行を重ねてしまった。

さらに、「お金で買えないものはない」「人間の心はお金で買える」「企業は金儲けの手段」「大学で学ぶのは時間の無駄」などと放言して、社会全体に拝金思想を蔓延させるという大きな禍根を遺してしまった。

事件摘発の手を一時停滞させたのは、二〇〇五年三月二三日、東京高等裁判所が下した判決にあると考える。

ニッポン放送株の大量買占めに対抗して、同放送が企業防衛のため本体のフジテレビに対する新株予約権発行を発動したが、東京高裁は、ライブドアの申請を受けて発行を差し止めるとした東京地裁の仮処分を支持する決定を下し、ライブドアの全面勝訴に導いた。

東京高裁は次のように決定理由を示している。

1、ライブドアの立会外取引は、証券取引法に違反しない。

2、ライブドアによるニッポン放送の経営支配が、企業価値を損ねるかどうかは、経営判断の問題で、裁判所の判断に適さない。

3、予約権発行は株式の敵対的買収者が会社を食いものにしようとしている場合などに許されるが、今回はその確たる証拠がない。

そして

4、経営支配権の維持、確保を主要な目的とした新株予約権の発行は、差し止めるべき「著しく不公平な発行」に当たる。

と結論づけている。

あとづけにすぎないと言われればそれまでであるが、ここに至るまでのライブドアの手口をより詳細に解明すれば、この判決理由が充分説得力をもったものとは到底考えられない。

第一に、ライブドアの株取得が「正常な市場内取引かどうか」という点である。証取法は「株券の市場外における買付は、公開買付によらなければならない」としている。ところが、東京証券取引所は多量売買取引制度の一つとして、取引所の定めた数量以上の売買のため、立会場内での実行が困難と認められる場合に、取引所の事前承認をえて、立会場外で取引することを認めている。そして、この立会外取引は同取引所の取引システムを使っているという理由で、「市場内取引」と位置づけている。これは、企業が持合い株式の解消や自社株買いのための大量の売買をする場合、株価の大幅な変動を避けるために、例外として取引時間外に買付けるケースを想定していることによる。

ライブドアはこの立会外取引の盲点を衝いた。しかし、敵対的企業買収を意図したことは疑いの余地がなく、実質的に「市場外取引」とみるべきである。従って買付けの目的、価格、予定株数、期間等を公告した証取法上の「公開買付け」としなければならないのは明らかである。通常の市場内株式取引と裁定できる根拠はどこにもない。

〇五年二月八日のライブドアによるニッポン放送株の突如大量買付けに対して、ニッポン放送側の無防備を指摘する声がある一方で、当時高裁の判断に多方面から厳しい批判の声が上がり、立会外取引を規制すべきとする論が出たのもこの点にある。

高裁は、取引所のルールを平面的に解釈したにすぎず、ルールの意図する背景や主旨、さらにルールに優先する法律にまで踏み込んで判断したとは到底考えられない。

〝疑わしきは罰せず〟といわれるが、この場合、仮に疑問が残るのであれば、少なくとも〝疑わしきは断定せず〟とされるべきであろう。

最近往々にして司法の判断が左右にぶれる傾向がみられるが、この場合もライブドアの挑戦を錦の御旗とする世論や風潮におもねる判断であったとみるのは言い過ぎであろうか。

次に「企業価値」に関する論点である。端的には「株主価値」ともされるが、これは静態的に捉えられるべきではなく、株主構成や業界動向等の変動による将来価値

を織り込んで、動態的に評価されるべきだと考える。従って買収側が経営権を握ったとき、被買収企業の内と外でどのような相乗効果と反作用が起きるかは常識的に想定されるし、その結果企業価値が上がるか下がるかはおよそ見当がつくはずである。

しかし高裁はこれらの点に全く触れず、単に司法の判断になじまないとした。

何故なじまないのかは明らかにしていない。これでは肝心の問題点に全くアンタッチャブルで、問題から逃げたとしかいいようがない。はしなくも経済音痴ぶりを露呈したといってもよいだろう。司法としての見解を是非とも示してほしいところであった。

その内容によっては、企業経営者が企業防衛やコーポレートガバナンスについて、新しい視点から経営を見直す契機にもなりえたと思う。いずれにしても、今回の争いの核心に関する論議を逃し、判断、判定以前の段階で思考停止してしまったことは、極めて遺憾であったといわざるをえない。

第三点は敵対的買収者が、「会社を食いものにしようとしているかどうか」についてである。

たしかにライブドアは、メディアと情報技術の融合を目指して本体であるフジテレビとの提携を呼びかけている。しかし融合の具体的な内容、イメージについては明確ではない。おそらく、まずは買収の既成事実を作り上げて、その後に余勢をかって強圧的に具体化を進めようという構えで、先行して行動に出たとみるのが妥当であろう。

しかも、考えてみれば、初めから食いものにするなどと公言して買収に乗り出すようなお人よしはどこにもいるはずがない。さらに、巨額買収資金の調達先であり、ライブドアの大株主でもあるリーマンブラザーズというハゲタカ外資の計算からすれば、ことの成り行きによっては、一転して被買収企業を食い逃げする可能性も全く予想できないわけではない。

高裁の判定は、資本の論理だけで世界を駆け巡る巨大外国資本の動向から目をそらした、稚拙な判断であったとはいえないであろうか。

最後に、ニッポン放送の新株予約権の発行が、経営支配権の維持、確保を目的とした「著しく不公正な発行」に当たるとしていることである。

ライブドアが、三分の一を超える株式を、公開買付けによらず、立会外取引という法の盲点を突いた、卑劣ともいえる手段で取得したことは前に述べたとおりである。この法のウラをかくような不公正な株取得に対して、法に認められた新株予約権の発行が、何故不公正なのであろうか。いわば闇討ちに対するやむをえぬ正当防衛とはいえないだろうか。この争いのなかのどこから考えても、ニッポン放送側の経営支配権への執着という影

を見出すことはできないと考える。

前後の相関関係を無視して、新株予約権発行という対抗措置だけに焦点を置くから、こういう高裁の判断が導き出されるのだ。「ライブドアの立会外取引は法の精神に反していないか」という最初の論点に戻ってしまうのである。

以上総じて、〇五年三月の高裁の判定は、法律やルールの各条項に関する平面的な条文解釈だけにこだわり過ぎている。

たしかに一般論として、時間外取引、株式分割、株式交換、投資事業組合、敵対的買収、時価総額最大化など、個々の経済行動自体は、市場経済原則に照らして違法とはいえない。

しかし、これを具体的な一連の流れに沿って、全体的動態的に捉えた場合には異なった結論が出てきて当然である。まして、法やルールが制定された主旨、背景への考慮を抜きにして、杓子定規な法文解釈だけに固執するのは、法律家としてとるべき道ではないと考える。

この判決の一年後、訴因は異なるとはいえ、はからずも両者の逮捕、起訴、公判という事態にに至ったのも至極当然の帰結であったといえよう。しかし一年前自らが下した決定について、高裁は依然口を閉ざしたままである。たとえ〝一事不再理〟の原則があるにしても、一言の弁明もないのは納得し難い。事件の決着を待って、司法の口からの総括を聞きたいものである。

歴史家によれば、「ユダヤ人は人間の行動の基準を宗教に求め、ギリシア人は哲学に求め、ローマ人は法律に求めた」といわれる。そして、ここでいうローマ人の法は、「法律の制定というより、秩序の確立のことを意味した。つまり、人間であるための礼節を教え、自分の力の限界を知って、それを超える存在への懼れを教えようとした」とされる。(塩野七生著『ローマ人の物語』)また、憲法学者・穂積重遠の言葉であったと思うが、氏は「法律は最低の道徳である」と説いた。そして、渋沢栄一は「経済と道徳の一致」を企業経営の理念とした。(過日、月刊「自由民主」に三戸岡道夫氏が寄稿した『二宮金次郎の教えを永遠に』の論説にも触れられている)

つまり、道徳律に違背する行為は正当な経済行為とはいえないし、法にさえ触れなければなにをやってもよいという、法の網をくぐるような行為は、人間として守らなければならない最低の道徳さえも犯すものだ、というのである。

この事件の結論がどうでるにせよ、堀江、村上はもちろん、司法にあっても、これらの故事や箴言に真摯に耳を傾けてもらいたいと願う。

(2006・12・10・記)

文化勲章に輝く

赤堀四郎博士の一生(五)

松下魏三

六　給仕をしながら夜間中学へ

四郎は大正二年(一九一三年)千濱尋常高等小学校を卒業したが、当時長兄と次兄は進学していたので自分も兄たちと同じように進学したいという思いが日増しに強くなっていた。

父秀雄は四郎が向学心に燃えている様子をみて、四郎の希望をかなえてあげたいと日夜思案していた。

当時、父秀雄の妹しゅんの夫である沖卯太郎が大蔵省長崎専売局から東京専売局に転勤していたので、秀雄は四郎の進路について沖卯太郎に懇願したところ快く了承し、翌年の大正三年(一九一四年)三月に小学校高等科一年を終了した四郎を千濱まで迎えに来て、四郎は生れて初めての東京の地を踏むことになった。

当時は現代のように交通機関が発達していなかったので千濱から隣村の南山村まで歩き、南山から軌道の上を馬に客車を引かせて走る〝馬車鉄道〟で堀之内駅まで行き、東海道線(現在のJR東海)に乗り換え、堀之内駅(現在のJR菊川駅)から東京駅へと向ったのである。

初めて見る東京はただ珍らしく、毎日戸惑うばかりであった。叔父沖卯太郎の家に旅装を解いた翌日、叔父は勤め先から帰宅すると、「お前を大蔵省の給仕に採用してもらったから明日から勤めなさい」と言われた。

当時の大蔵省は大手町にあったから神田美土代町の叔父の家からは歩いて十五分くらいのところを毎日通勤した。勤務場所は大蔵省主税局関税課で筒袖の着物に袴をはいて靴履きという当時の給仕の標準的な服装で通勤し、早く給仕の仕事に慣れたいと一所懸命に努力した。

同僚の給仕の多くは東京の下町育ちの江戸っ子で、遠州の片田舎で育って東京にはじめて出て来た四郎は東京弁は不慣れでよく聞き取れず、また気転を利かすよう

な事務的な才能も思うように発揮できず、大変困惑した。

特に電話の取り次ぎは電話のない田舎で育ち、しかも無口で温厚な四郎には大変苦手で満足に出来ないので、上司から「お前は言葉遣いが悪いぞ」と叱られ、悔しさと情けない思いをする毎日であった。

このようなつらい勤めを我慢して一年間続けたが、ある日叔父に職場の人間関係や勤務の実情を話したところ大変よく理解して、間もなく同じ専売局であるが、煙草・塩・樟脳などの製品の品質管理をする化学分析室の給仕に転勤させて下さった。

その頃になると東京弁にも慣れ、職場の上司で農芸化学や薬学を学んだ役人が親切で温厚な方々であったので今までの関税課とは違い毎日楽しい勤務であった。

四郎は化学分析室で働く化学者の真摯な姿勢や態度に感心し、化学や化学者に対し一層親しみを覚えるようになった。

昼間はこのような給仕として働き夜間は叔父が薦めて下さった神田錦町にある錦城中学校の夜学に通った。当時の夜間中学はすべて私立で公立はなかった。そして有名な中学の夜間部はいくつかあったが、なかでも錦城中学は名門であった。現在の定時制の高校とは異なり昼間の中学校が五年制であるのに夜間の中学校は四年制で昼間の五年間分の授業を終了しなければならなかった。そしてここで学ぶ生徒はいずれも昼間は働いて疲れているので夜間の授業では眠くなり、毎日の授業は睡魔との闘いであった。四郎は何時も教室の前の席に座り、眠気を醒ますのに苦心した生々しい思い出が後年になっても残っていた。昼間の勤めを終り夜学に行くために大急ぎで帰宅すると叔母が優しく出迎え、おにぎりをつくってくれていたので、玄関先で靴を履いたまま食べ、そのまま学校へ出掛ける毎日であった。夜学が終り、夜更けの帰り道で友人と一緒に買って食べた柔かいあんパンの美味しさは忘れられず晩年まで何よりの好物となっていた。と多くの人々に語っている。また休日などの暇な時には叔父が四郎を実の息子のように可愛がって囲碁の手ほどきをしてくれたので、後年四郎は囲碁を通して多くの人々と親しい交際ができたのはこの叔父のお陰であると述懐している。

そして夜間中学の二年の暮れになった頃、叔父が「来春昼間の中学校の四年の編入試験を受けてみないか。合格すれば昼間の中学校の学費はみてやる」と言った。四郎にとって昼間の中学校に通って学業に専念できることは願ってもないことで飛び上がるほど嬉しかった。

しかし、昼間の中学校四年の編入試験は翌年の三月であるから、僅か三か月間で中学校三年の全課程を独学で勉強し、試験に合格しなければならないと考えると余りにも大きな試練であることがわかった。

それから三か月後の編入試験に向って毎日徹夜するくらいの猛勉強を続け勉学に専念した。その努力が実り、三月下旬には編入試験に合格し、正規の中学四年生になることが出来た。

四郎にこの合格の喜びを噛みしめるとともに叔父と叔母の深い恩情と大きな期待に応えることを誓い一心不乱に勉学に励んだ。

叔父は日夜眞剣に学習する四郎の姿勢態度と才能を見込んで「お前をさらに上級学校に進学させてやろう」と言ってくれたので、四郎は天にも昇る嬉しさであった。

当時の錦城中学校は私立であったが、アルバイトで教師をしていた東京帝国大学・大学院の学生が多く、なかでも後に高名な学者や作家となった野上豊一郎や久米正雄がいた。この二人は英語を教えていたが、野上豊一郎は夏目漱石の愛弟子で、当時最も簡潔で短い論文といわれた「能樂源流考」という優れた研究で文学博士の学位を取得し、後に法政大学の学長になった美学と芸能史の大家である。四郎は野上豊一郎先生の英語の授業でボーイを「子供」と訳したところ、先生から「男の子」と訂正されたと懐しく回想している。

また野上豊一郎の夫人は女流作家として高名な野上弥生子で若い時の名作「真知子」や「秀吉と利休」などの大作を書き続けた文学者であった。そして久米正雄も小説家で劇作家として活躍した文士で、東京帝国大学を卒業し、菊地寛や芥川龍之助などと大正時代の新思潮文学運動の先駆者であった。

なお化学の先生は後に四郎が化学者として大成する基盤を育ててくれた四人の恩人の一人である高山義太郎がいた。当時はまだ東京帝国大学理学部化学科の大学院生で後に味の素株式会社の研究課長となり、アミノ酸研究の大家となった。もう一人の化学の先生は、後に東北帝国大学教授となり、四郎の結婚の時には媒酌人となった冨永斉という先生がいた。

このように当時の錦城中学校には後世に名を成すような大学者や作家をはじめ若い大学院生の気鋭の研究者が苦学生を指導していた稀にみる豪華な教師陣の学校であった。

この頃四郎が寄寓していた神田美土代町の叔父の家の近くの猿樂町には隣の土方村出身の松本亀次郎が東亜高等予備学校を開校し、中国人留学生の教育に全身全霊を打ち込んでいた。また同じ神田の飯田町には土方村出身の吉岡弥生が医院を開業し、間もなく東京女医学校（現在の東京女子医科大学）を開校していた。当時は亀次郎も弥生もともに四十代の働き盛りで高い理想に燃え苦闘する毎日であった。

四郎は同郷の大先輩であり、幼い時から折に触れ父秀雄から聞いていた亀次郎と弥生が奇しくも同じ東京の

神田で活躍しており、また自分の住んでいる所も神田であることなど、不思議な縁に驚くとともに同郷の大先輩の頼母しい活躍を見て力強く思い、向学心はますます高まるばかりであった。

七　千葉医学専門学校薬学科へ

錦城中学で夜間と昼間の苦学を続けてきた四郎は卒業する日を間近に控え、将来の進路について真剣に考えていた。

当時次兄が京都の市立医学専門学校（現在の京都府立医科大学）に在学中であったので医学に興味をもつようになり、兄と同じように医学専門学校に進学したいと叔父に相談した。叔父は「医者になるには修学年限が長くしかも学費も多額になるので負担が大変であるから医学と関係の深い薬学を学び薬剤師になったらどうか」と言った。

当時の千濱村では小学校を卒業して中学校に進学する者はほとんどいなかったので中学校より更に上の専門学校に進学できることは素晴しいことであった。

そして大蔵省専売局の化学分析室に勤めていた時、化学者の方々から親切に教えていただいた化学は大変興味深く、実験室で煙草や樟脳などの化学分析に取り組む真剣な態度に魅力を感じ、薬学の分野にも興味や関心をもつようになっていたので、叔父が勧めるように年限も短く学費も安い薬学の専門学校に進み薬剤師になることが最善の道であると考えるようになった。

錦城中学校を卒業した大正七年（一九一八年）の春、千葉医学専門学校薬学科（現千葉大学薬学部）を受験し、見事に合格し、以後三年間薬学について勉強した。この専門学校で学んだ三年間は第一次世界大戦が終った時で戦後の恐慌が始まり物価は高くなり、米騒動が起り、その鎮圧のために軍隊が出動するという激動の時代であったが、千葉は静かであったので、平穏で充実した学生生活を送ることができた。

四郎は叔父の温かい援助と配慮により静岡県人会が経営していた静修寮に入寮することが出来、その後育英会からの資金の給付を受けて平穏な学生生活を送り学業に専念した。

当時の千葉は現在とは違い豊かな自然に囲まれていて新鮮な空気と澄んだ水と青い海があり、休日には海に出てボートを漕いだり、暑い日には海水浴を楽しんだりし、幼少年時代に故郷の遠州灘で遊んだことを想い出し、恵まれた自然環境の中で充実した学生生活を送ることができた。

このような学生生活の中で忘れることの出来ない思い出のひとつに、同級生であった中国人の張徳甫という親しい友人がいた。卒業する時、別れを惜しんで「雪埋梅花　不能埋香」（雪梅花を埋むるも、香を埋むる能わず）という句を色紙に書いて贈ってくれた。この言葉は張さんの誠意を込めた言葉で四郎は自分では一生懸命つとめた積りでも相手はその努力を認めてくれないような時にこの張さんの言葉を思い出すと自分の不満がたちまち解消してしまうので、常に座右の銘として肝に銘じていた。と言っている。

この学生生活ではそのほか多くの盟友と親しく交際し、充実した意義深い生活を送り、大正十年（一九二一年）の春、千葉医学専門学校薬学科を卒業した。



還暦からの考古学（八）

三角縁神獣鏡に対する考え方の変化（その2）

中山喬央

楽浪郡の設置

前漢の初め頃、燕人の衛満が今の平壌のあたりに亡命して自ら朝鮮王と名乗り、漢と君臣関係を結びました。

これが衛氏朝鮮です。

しかし彼の孫である衛右渠のとき漢との関係が悪化し、武帝は紀元前一〇八年武力でこれを滅ぼし、楽浪・玄菟・臨屯・真番の四郡を設置します。

衛氏朝鮮では、青銅短剣や朝鮮式車馬具などの朝鮮青銅器文化が存続していました。楽浪の梧野里遺跡からは朝鮮式車馬具と共に、先に述べた須玖岡本D地点甕棺墓や三雲南小路一号甕棺墓出土の漢鏡2期の大型鏡と同じ時期の、大型蟠螭文鏡（径二一・一㎝）が出土しています。

これらの事から、これは漢王朝から外臣である朝鮮王の衛氏に与えられた鏡の一部が、その滅亡によって北部九州へと渡ってきたものではないかという事が考えられます。

一方、楽浪郡の支配は朝鮮半島の北部に限られたままで、半島南部には韓諸族がおり、そこでは青銅短剣や多鈕鏡などがある朝鮮青銅器文化が早くから展開し、全羅北道の平章里遺跡では細形銅剣や銅矛と共に漢鏡1期（前二世紀前半）の蟠螭文鏡が出土して、衛氏朝鮮との交流をうかがうことができます。

楽浪郡設置後の漢鏡3期の鏡は半島東南部の慶尚道から多く出土しています。

慶尚南道・茶戸里遺跡では一号木棺墓から漢鏡3期の星雲文鏡と共に、五銖銭・青銅帯鉤（おびがね、留金具）・鉄書刀などの前漢文物が、細形銅剣を初めとする多数の在地の遺物と一緒に出土しました。なかでも筆五

本と鉄書刀の出土は、楽浪郡との間で、文字を使った交流が始まっていた事をあらわすものと考えられます。

慶尚北道では、朝陽洞遺跡で三八号木棺墓から青銅飾りつき鉄剣や土器などと共に、漢鏡3期の銘帯鏡Ⅲ式に入る、径が六・四～八・〇㎝の鏡が四面出土しています。また漁隠洞遺跡では漢鏡3期の小型銘帯鏡が二面出土している他、池山洞遺跡出土と伝えられる漢鏡3期Ⅲ式の銘帯鏡も六面あります。このように慶尚北道の三ヵ所で見つかった十二面の鏡は何れも型式的に共通しておりますので、楽浪郡から一括してもたらされ、それぞれの首長に分配されたものと考えられています。

朝鮮半島と日本列島から出土する漢鏡3期の鏡は、殆どが前一世紀第2四半期の銘帯鏡Ⅲ式もしくは、それに並行する型式です。これは朝鮮半島における郡県の再編成の時期と一致しています。

これを地域的に見ますと、楽浪地域は小型鏡ばかり九面、韓地域も小型鏡ばかり十数面であるのに対し、倭地域は北部九州だけで中型鏡と小型鏡を合わせると一〇〇面あまりに達します。更に須玖岡本遺跡や三雲南小路遺跡では伝世の大型鏡やガラス璧という特別な前漢文物がありました。

これは海を隔てた遠方からの朝貢は皇帝の徳の高さを示すものとして、漢王朝が歓迎したことを表しているものです。

漢鏡の編年

漢鏡は鈕座、主文、乳、周縁などの部分から成り立っており、各部分には相互に独立した文様が施されます。これを単位文様と呼びますが、この相関関係によって、同じ種類の鏡の前後関係を判断します。

先ず鈕には三弦鈕、獣鈕、連峰鈕、半球鈕があります。鈕にはそれぞれ鈕座文様があります。例えば半球鈕の鈕座文様は多様で、四葉文は、葉の両端が内側に巻き込むa1、葉の両端が独立して珠文状になったa2、葉の両端が巻き込まないb、葉の間に細線で子葉を入れるc、葉の間に銘文を入れるdに分かれます。

連珠文は鈕座の周囲に十二個の珠文を入れたものです。

輻射文は、幅広い圏帯を持つa、線圏となるbに分かれます。

連弧文は、連弧文圏の内側に弧線や直線を施しています。この弧線や直線は連珠文や輻射文のものと同じで、連峰鈕の鈕座文様に由来するものと考えられます。

乳帯文は、鈕の周りに小さい乳をめぐらして、その間に唐草文や銘文を入れたものです。

十二支文は、十二支の銘文を巡らした方格の内側に子葉のある四葉文を入れたaと、素文になるbとに分かれ

ます。

乳には素文、円座、四弁文、四葉文、輻射文、連弧文などがありますが、これも二～三種類のものに分ける事が出来ます。

次に鏡の銘文ですが、銘文の字句自体について分類が行われています。それは全て陽鋳（鋳金で器物や銅板などの表面に文様や銘文を地よりも高く表す方法。鋳出。）で表現され、字体に次のような変化があります。

最初はやわらかい丸味を帯びた典型的な小篆体から始まり全体が方形に近づいて堅さがあらわれ、それが完全に角張ったものとなります。

それから直線を主体としながらもやや崩れて引っかいたようなものとなり次に滑らかな曲線を多用して少しずつ丸味を帯びるようになります。

そこまで行きますと今度は一変して筆線が鋭く突出し堅さが見られるように変化し、角張って方形に近くなりやがて完璧な正方形となります。

その後、全体は方形ですが、やわらかみを見せる字体に変化します。ここまでは連続して変化したものと考えられています。

その他、細い線で縦長に表現され曲線を多用する小篆体を保った字体とか、同様に細線で表現されますが、筆線の丸味を失いこじんまりとした正方形の隷体のものが現れます。

このように銘文の変化は全体としてみれば篆体から隷体への変化として考える事が出来ます。

次に鏡のⅠ式Ⅱ式等の分類について、異体字銘帯鏡Ⅰ式の例をあげて考えて見たいと思います。

字体は直線を主体としますがやや崩れており、重圏銘帯鏡だけです。内圏に銘文「見日之光　長母相忘」、外圏に銘文「清沮銅華以為鏡　昭察衣服観容貌　糸組雑遝以為信　清光平成宜佳人」という組み合わせとか、この「清沮銅華」で始まる銘文と斜角雷文（渦巻きではなく、斜角状のものを螺旋形にしたような文様。この単一文様を連続して構成するのが普通です）という組み合わせが多く見られます。鈕座は、四葉文a2・b、連珠文などで、稀に連弧文縁になるものがあります。

このように銘文の字句・字体、重圏・単圏、鈕座の文様によって、異体字銘帯鏡はⅠ式からⅥ式まで分ける事ができるとされ、前一世紀全般にわたって用いられたと考えられています。

この分類は全ての漢鏡について応用する事が出来ます。

東夷王の朝貢

倭人の記事が漢書に載せられてから五〇年あまり後、前漢末期の平帝の時、『漢書』王莽伝に「東夷の王、大海を渡りて、国珍を奉ず」と記載されています。

以下その時期に該当する遺物の出土状況と、鏡の変化について説明します。

井原鎖溝遺跡

糸島平野の中ほど、三雲南小路遺跡の南、一五〇mのところにあります。

十八世紀末に井原村の農民が三雲村との境で、古鏡を掘り出しました。三雲南小路遺跡の調査を行った青柳種信は『同郡井原村所掘出古鏡図考』（一八二三年『柳園古器略考』所収）のなかで、一つの壺（甕棺）の中から、数十面の鏡がばらばらに割れた状態で出土し、更に鎧の板のようなものとか、刀剣類もあったと記しています。

鏡は鈕の数から考えますと二一面以上あったと思われますが、梅原末治は青柳種信の残した拓本から十八面の鏡を復元しました。

この十八面は全て方格規矩四神鏡で漢鏡4期（前一世紀第4四半期から一世紀第1四半期）に該当する中型鏡（面径十二・七～十七・六cm）です。そして方格規矩四神鏡は後漢時代にも引き継がれますが、前漢時代だけで、1式からⅣ式までであり、そのうちⅡ式が一面、Ⅲ式が十七面と、まとまっています。

これから、これらの鏡は王莽の新の時代に楽浪郡から一括の状態で贈与された人物の死とともに副葬したもので、その時期は一世紀第1四半期であるとしています。

桜馬場遺跡

玄海灘に面した唐津平野は、『三国志』魏書東夷伝倭人条にいう末盧国の所在地です。この唐津平野の西はずれの砂丘に桜馬場遺跡があります。

一九四四年工事中に発見された合わせ口甕棺から銅鏡二面、巴形銅器三個、有鉤銅釧二六個、鉄刀片一点、ガラス玉一個が出土しました。

この甕棺は弥生後期初頭の指標とされています。

銅鏡の二面はともに漢鏡4期の方格規矩四神鏡です。

一面は径二三・二cmの大型鏡で、鈕座の方格に方位をあらわす十二支銘、内区にTLV形の規矩文があり、その間に青龍・白虎・朱雀・玄武の四神と瑞獣（めでたいしるしとして現れるけもの）を配置しています。銘文には官営工房で作ったとする「尚方」作を記し、外区に流雲文をめぐらせたⅣ式に入る王莽時代の優れた鏡です。

もう一面は径十五・四cmの中型鏡で、鈕座の方格や内区の文様は簡略化されていますが、流麗な篆書体の「上大山見神人」銘と、無文の外区を持っているⅢ式で、紀元前後のものです。

この二面の方格規矩鏡は、井原鎖溝遺跡の鏡群と同じ

王莽時代にもたらされたものと考えられています。

三津永田遺跡

佐賀平野に延びる丘陵の先端にある吉野ヶ里遺跡は弥生時代の遺跡として全国的に有名です。

そこでは弥生中期に、共同墓地と離れて首長一族を埋葬する大型墳丘墓を作り、多くの甕棺墓に銅剣を副葬していました。なかでも朝鮮製と考えられる有柄銅剣とガラス管玉が見つかった甕棺墓は、この地域一帯を支配した首長墓として考えられています。

しかし弥生後期前半のある時期に、首長墓群は北三キロにある三津永田遺跡に移動します。

吉野ヶ里丘陵の山麓近くにあるこの遺跡は、弥生前期から後期までの一〇〇基以上の甕棺墓・箱式石棺墓・土坑墓で構成されています。

弥生後期の甕棺墓からは、これまでに漢鏡4期の鏡三面が出土しています。

成人男性を埋葬した弥生後期前半の三津式の指標とされる一〇四号甕棺墓は、棺外で鉄刀一本が出土しましたが、朱を塗り、墓上に板石の標識を置いた棺内からは、径十四・三cmの王莽時代に作られた獣帯鏡が出土しました。

その鏡は内区に龍・虎・鳥・羽人などの瑞獣を表し、「泰言之紀従鏡始」の七言句ではじまる流麗な篆書体の銘文と流雲文の外区を持っています。

一一五号石蓋甕棺墓からは、径九・二cmの小型の虺龍文鏡が出土しました。破砕のため鈕の部分が見つかりませんが、乳の間に逆S字文の雲気文と小鳥を入れ、厚みのある無文の周縁を持っています。また別の石蓋甕棺墓からは「内清以昭明」ではじまる径九cmの小型銘帯鏡が出土しています。

また三津永田遺跡に隣接する上志波屋遺跡では、箱式石棺墓から径九・六cmの「昭明」銘帯鏡が出土し、志波屋三本松遺跡では甕棺墓から虺龍文鏡が出土しています。

これらの中で全長五〇cmあまりの鉄刀が出土した三津永田一〇四号甕棺墓を含め、井原鏽溝遺跡とか桜馬場遺跡で出土した刀剣とか鉄刀片について考えてみます。

素環頭大刀

漢王朝は外臣の統治を保障するため軍事的な安保条約を結び武器を供与していました。

三津永田遺跡から出土した全長五〇cmの素環頭大刀は、漢王朝が倭人を外臣に冊封（漢代に始まった冊を以って封爵を授けること）したことを、象徴するものでした。

孔子が賞賛した道徳的な東夷、なかでも大海を越えた絶域にある倭の首長を臣属させることは、王莽の補政する漢王朝にとって大きな政治的意義を持つものでした。

北部九州の首長達が、鉄刀を副葬品に選んだ理由は、それが漢王朝から贈られた自分の権威を表す威信財だったからです。

鏡の分割と伝世

三津永田遺跡の東方三キロ南北にのびる丘陵上に、甕棺墓・土坑墓・箱式石棺墓で構成された十二群二五〇基あまりの弥生時代の共同墓地である二塚山遺跡があります。

第一群の十五号甕棺墓は弥生中期の立岩式ですが、棺内に径十五・九cmの漢鏡3期連弧文銘帯鏡を副葬していました。弥生後期前半の壮年女性を埋葬した第八群の七六号甕棺墓からは、径九・二cmの漢鏡4期「昭明」銘帯鏡が出土し、熟年男性を埋葬した第十一群の二九号石蓋土坑墓からは径十三・六cmの漢鏡4期獣帯鏡が、これに隣接する四六号甕棺墓は熟年女性を埋葬していましたが、棺内に小型仿製鏡（漢鏡もしくは唐鏡をモデルとして製作された鏡のことですが、日本考古学では弥生・古墳時代のものを中心に、奈良時代以降唐鏡の仿製品までをこの名で呼び、宋元鏡の影響を受けたものを和鏡と呼んで区別しています）、棺外に鉄矛を副葬していました。

中型の獣帯鏡は男性、小型の銘帯鏡と仿製鏡は女性という区別がありましたが、七六号甕棺墓の銘帯鏡は、甕棺口縁部の目張り粘土内から破砕された状態で、二九号石蓋土坑墓の獣帯鏡も同じように、蓋石の目張り粘土内から破砕された状態で出土しました。

また二塚山遺跡の北にある石動四本松遺跡の三二号甕棺墓でも、銘帯鏡を破砕した後、破片を丁寧に重ねて甕棺の外に副葬していました。

これらは埋葬の最終段階で漢鏡を打ち割り、棺外に副葬した為であると考えられています。

韓鏡の流入

今度は朝鮮半島からの鏡の伝播について考えてみます。

先に述べた二塚山四六号甕棺墓出土の小型仿製鏡は、漢鏡3期の銘帯鏡（日光鏡）を模倣したものですが、これと同じ鋳型で作った同笵鏡が韓国慶尚北道・漁隠洞遺跡遺跡で四面、坪里洞遺跡から一面がそれぞれ出土しています。

漁隠洞遺跡の鏡は、漢鏡3期の銘帯鏡（日光鏡）二面と漢鏡4期の虺龍文鏡一面と共に出土し、坪里洞遺跡の鏡も漢鏡4期の虺龍文鏡と一緒に見つかっていますので、同笵鏡を分有するこれら三遺跡は、共に前一世紀末とすることができます。

このような小型仿製鏡は、漁隠洞遺跡で六種十一面、坪里洞遺跡では四種四面が見つかっていて、何れも韓

地域で作られた鏡と考えることができます。この結果、紀元前後には漢鏡を模倣した鏡が朝鮮半島の東南部で作られ、その一部が日本列島に入ってきたのだと思われます。

その他、漁隠洞遺跡で出土した別の小型仿製鏡との同笵鏡（径五・五㎝）が、大分県竹田市・石井入口遺跡から出土しています。

この遺跡は大野川上流の阿蘇山火山灰台地にある弥生後期後半の集落址ですが、鏡は弥生終末期の八二号住居址から廃棄された状態で出土しました。鏡の製作は前に述べたように紀元前後と考えられますので、鏡の製作から廃棄まで二〇〇年に近い年月が経過しているのは、この集落の住民が韓鏡を宝器として大切に伝世した事が考えられるとしております。

北部九州の甕棺地帯では、鏡は入手した人の死と共に墓に副葬されましたが、それ以外のところでは鏡を墓に副葬する習慣がなく宝器として長く伝世する風習があったことを、これは証明するものだとしております。

須玖遺跡群

福岡平野の東南に位置する春日丘陵一帯は「奴の国」の中心地と思われているところです。

漢鏡3期の鏡を大量に副葬した須玖岡本D地点甕棺墓に続く首長墓はまだ発見されていませんが、これまでに数ヵ所で漢鏡4期の鏡が見つかっています。

その内訳は、D地点の北一〇〇mのB地点で「日有喜」の銘を入れた方格規矩四神鏡Ⅲ式（径十三・九㎝）で内区の半分が欠けたものが、細形銅剣や漢鏡3期の小型銘帯鏡（日光鏡）と共に出土し、一キロあまり南方の、宮の下遺跡十五号甕棺墓では虺龍文鏡が円形銅飾や鉄剣と共に検出され、東南一・五キロの立石遺跡では甕棺墓から獣帯鏡（径十一・九㎝）が見つかっています。

一方、須玖岡本の西北五〇〇mにある須玖唐梨遺跡は平地にある集落址ですが、径約一〇㎝の銘帯鏡の周縁部の破片が出土しています。これは割れ口の二箇所に穿孔した跡があり、割れ口や縁部が磨かれていますので、完全な鏡を意図的に分割し、鏡片として使用した破鏡と考えることができます。これは北部九州の破鏡として一番古い例となります。

その他、東北四キロの福岡市・宝満尾遺跡の四号土坑墓から一世紀初頭の「昭明」銘帯鏡（径十・六㎝）が割れた状態で出土しました。

このように漢鏡3期の鏡は須玖岡本遺跡からしか出土しておりませんでしたが、漢鏡4期の鏡は、ほかの墓地からも出土するようになります。これは「奴の国」の首長から配下の族長に分配された結果だと考えられ、佐賀平野の三津永田遺跡を中心とした動きと同じで、漢鏡

を保有する階層の拡がりを確かめる事ができるものです。

破鏡とそのひろがり

北部九州では、漢鏡3期の鏡は皆完全な形のままで甕棺墓に副葬されていましたが、漢鏡4期の鏡になりますと、その取り扱い方に変化が現れます。

破鏡の習慣もその一つです。須玖唐梨遺跡の銘帯鏡は意図的に割って穿孔したり研磨をしていましたが、佐賀県二塚山遺跡・七六号甕棺墓では、甕棺口縁部の目張り粘土内から銘帯鏡が破砕された状態で出土し、二九号石蓋土坑墓でも蓋石の目張り粘土内に破砕した獣帯鏡が埋め込まれていました。

一方二塚山遺跡の隣にある石動四本松遺跡の三二号甕棺墓や福岡県八女市・茶ノ木ノ本三号甕棺墓では、割った鏡片を甕棺の外に重ねて埋めていました。

これらは埋葬の最後に故意に鏡を打ち割って埋める儀礼が行われていたことを示すものと考えられます。

しかし中国製ガラス璧を分割し再加工した垂飾や有孔円盤が、三雲南小路二号墓や東小田峰一〇号墓から漢鏡3期の鏡と一緒に出土していますので、舶載の貴重な品を分割して分配することは以前から行われていたことは明らかです。この行為は需要が増加したので、その要望を満たす為の手段として考えることもできます。

そして鏡の大きさに階層差が見られるように、完全な鏡と破鏡された鏡との間にも階層的な格差があったのではないかと考えられます。

一方破鏡が見られるようになると共に、出土する場所が、九州では北部九州以外、南は熊本平野や阿蘇地域、東は豊前・豊後地方にまで広がります。そして肥後・豊前・豊後地方は殆ど破鏡だけしか見られず、弥生後期後半の住居址に廃棄された状態で出土することが多いという特徴があります。更に製作から廃棄まで二〇〇年近い年月が経過しているのは、大分県・石井入口遺跡から出土している韓鏡と同じように宝器として大切に伝世されたからです。

鶴尾神社四号墓の鏡

世代をこえて伝えられた鏡のことを伝世鏡といいます。

伝世鏡は最初、前期古墳から三世紀の三角縁神獣鏡と共に、古い時期の漢鏡が出土することによって注意されるようになりました。

特に高松市・石清尾山古墳群出土といわれていた方格規矩四神鏡に長年の使用による著しい摩滅があり、更に破損した後、補修までして使用した事が認められるとして、梅原末治は弥生時代以来日本列島で長く伝世したものとしました。

その鏡は四分の一ほど欠けていましたが、一九八一年石清尾山古墳群のなかにある鶴尾神社四号墓から残りの部分が出土し、ほぼ完全な形となりましたので、出土地がそこであることが判明しました。

この墳墓は尾根上に立地する前方後円形の全長四〇mの積石墓で、弥生終末期のものであると考えられています。

鏡は径十八・二cm、周縁に画像文、方格に十二支の銘文、内区に四神と瑞獣・四葉座乳・TLV形をいれ「漢有善銅出丹陽」で始まる銘文をもつ方格規矩四神鏡Ⅲ式で、福岡県・井原鑓溝遺跡出土のものと同じ一世紀初頭のものです。使用時に二つに割れたようで、それを閉じ合わせる四対の補修孔を開けています。文様は全体が不鮮明で周縁などの角が丸みをもっており、製作から二〇〇年の間、割れたところを直して大切に伝世されたのだとされています。

伝世の証拠

漢鏡4期の伝世鏡は、このほか大阪府茨木市・紫金山古墳出土の「新有善同」銘方格規矩四神鏡や、正始元年銘三角縁神獣鏡と共伴した兵庫県豊岡市・森尾古墳出土の方格規矩四神鏡、山梨県中道町・大丸山古墳出土の八禽鏡が知られていましたが、最近小規模な出現期古墳が見つかるようになり、だんだんとその数が増えてきました。すなわち山口県田布施町・国森古墳、広島県千代田町・中出勝負峠八号墳、高知県宿毛市・高岡山二号墳から銘帯鏡（昭明鏡）が、北九州市・南方浦山古墳、島根県八雲村・小屋谷二号墳、岡山県清音村・鋳物師谷一号墳からそれぞれ虺龍文鏡が、神戸市・天王山四号墳から八禽鏡、岐阜県美濃市・観音寺山古墳から「王氏作」方格規矩四神鏡が見つかっています。

今述べた八つの例は何れも北部九州の甕棺地帯以外の西日本です。何れも十数メートル程度の小さな墳墓で、高岡山二号墳から碧玉製石釧が出土しているのを例外として目立った副葬品は見つかっていません。埋葬施設も土坑に木棺を埋めた簡単なものです。

鏡は観音寺山古墳の方格規矩四神鏡が径二三・六cmと大型であるほかは、すべて径一〇cm以下の小型鏡で摩滅によって文様が不鮮明になっています。更に中出勝負峠八号墳・高岡山二号墳・小屋谷三号墳・鋳物師谷一号墳・観音寺山古墳からは意図的に破砕された状態で鏡が出土しています。

鏡を割って埋める習慣は、弥生後期に北部九州で始まりますが、三角縁神獣鏡や古墳時代の仿製鏡では殆ど例がなく、弥生時代の風習であると考えられているものです。これからは、その被葬者達が倭政権の体制に組み入れられていなかったことが考えられます。

踏み返し鏡

ここで踏み返し鏡について説明します。

中国では戦国鏡以来、いったん銅鏡を作った後、これを原型に多くの同じ形の鏡を作ることが行われました。踏み返しの場合、原型となった鏡よりも文様がにぶく、粘土型を焼き固めたり銅湯が固まる時に収縮する為、原型の鏡より幾分小さくなる特徴があります。

これについては五世紀後半の日本列島にひろがる画文帯神獣鏡や画像鏡が、三〇〇年ほど遡る漢鏡を原型に踏み返したことが、多数の同型鏡や、その大きさの違いによって確かめられています。

このような踏み返し鏡の存在は伝世鏡説を否定し、踏み返し鏡の製作が行われたとの考えを認めることにもなります。しかし鶴尾神社四号墓の鏡のように文様が摩滅し補修してまで使われた鏡の存在であるとか、伝世した破鏡にも著しい摩滅があり、その多くがローカルな墳墓から出土して鏡を破砕して埋める古い風習を持っている事、鉛同位体比の分析値が、中出勝負峠八号墳・南方浦山古墳・小屋谷三号墳・鋳物師谷一号墳の鏡は何れも前漢鏡の数値を示している事等から、紀元前後に作られた漢鏡4期の鏡が日本列島に入ってきた後、北部九州ではまもなく甕棺墓に副葬されましたが、それ以外の地域では宝器として二〇〇年近く伝世されていたことになり、従ってこの時代での踏み返し鏡製作説は成立しないことになります。

舶載文物のひろがり

新王朝を建てた王莽は、紀元十四年、それまでの五銖銭を廃止して新たに貨布と貨泉を鋳造しました。この銅銭は一世紀初頭の短期間に鋳造された事から、漢鏡と同じように年代決定に役立っています。このうち貨泉は対馬・壱岐・北部九州・肥後などで弥生後期の遺跡から出土し、岡山市・高塚遺跡でも、弥生後期初頭の土坑から二五枚、大阪府八尾市・亀井遺跡、東大阪市・巨摩廃寺遺跡・大阪市・瓜破遺跡からも、弥生後期初頭の層から多数出土しています。このようなことから、瀬戸内東部の弥生後期初頭が一世紀第1四半期で、北部九州とほぼ同時期に大量の貨泉が流入していたことがわかります。

一方前一世紀末頃朝鮮半島南部で製作された小型仿製鏡は、九州以東では広島市・真亀遺跡、岡山市・足守川加茂B遺跡、神戸市・表山遺跡から出土しています。表山遺跡では弥生中期末～後期初頭の溝から、真亀遺跡では弥生後期前半の竪穴住居址から出土しましたが、足守川加茂B遺跡では弥生後期後半の竪穴住居に棄てられたような状態で出土し、大分県・石井入口遺跡の小型仿製鏡と同じように二〇〇年近く伝世したものと考えられます。

また北部九州で広まった漢鏡4期の破鏡は、瀬戸内や北陸にも拡散し、和歌山市・滝ヶ峯遺跡と石川県羽咋市・次場遺跡からは虺龍文鏡、鳥取県米子市・青木遺跡からは八禽鏡、大阪府高槻市・芥川遺跡からは方格規矩四神鏡が出土しています。滝ヶ峯遺跡と青木遺跡の破鏡には弥生後期初頭の土器が伴い、貨泉と同じように流入後間もなく廃棄されたものであり、次場遺跡と芥川遺跡の破鏡は弥生終末期まで伝世したものと考えられます。そしてこのような破鏡はおそらく北九州の風習が入ってきた結果だと考えられています。

この他漢鏡4期の銘帯鏡を模倣した、韓鏡とは違う系統の小型仿製鏡が、大阪府八尾市・八尾南遺跡や亀井遺跡、大阪府豊中市・山ノ上遺蹟、岡山市・足守川加茂B遺跡などから出土しています。すべて弥生後期の生活域からの出土で、その特異な文様と分布が畿内中心であることから、畿内での製作が推測できます。これは弥生時代に前漢鏡が畿内まで入ってきた事を示すものであり、このように大陸・半島からの舶載文物が弥生時代から瀬戸内・畿内にかなり伝わっていた事実は、鏡の伝世を考える上での前提条件であります。

漢鏡に先行して弥生前期末から中期初頭に流入していた半島製の多鈕細文鏡は、北部九州では墓に副葬される例が多く見られますが、大阪府柏原市・大県遺跡では山腹から単独で出土し、葛城山麓の奈良県御所市・名柄遺跡では銅鐸と一緒に見つかっています。また長野県佐久市・社宮司遺跡では、周縁の破片に穴を開けた破鏡が出土しています。

これは畿内やそれ以東の地域では鏡を墓に副葬する習慣がなく、漢鏡の流入後もその状況には変化がなかった事を示すものだとされています。

王莽時代の銅銭や破鏡には入手後間もなく廃棄されたものがありますが、このように鏡の多くは弥生時代終末から古墳時代まで伝世いたしました。

また九州でも、韓国漁隠洞遺跡に同笵鏡がある大分県・石井入口遺跡の小型仿製鏡は弥生終末期まで伝世しておりましたし、豊前・豊後・肥後など甕棺が無い地域での漢鏡4期の破鏡も殆ど弥生終末期まで二〇〇年ほど伝世していました。豊前の南方浦山古墳から出土した完形の虺龍文鏡も伝世鏡であり、鏡の伝世は甕棺地帯を除く九州各地でも普遍的な現象でした。

更に漢鏡を墓に埋葬した甕棺地帯でも次第に鏡を意図的に割って副葬したり、破鏡をつくるなどの新たな動きがみられるようになります。

参考文献・資料

岡村秀典「前漢鏡の編年と様式」『史林』六七・五、一九八四年。
岡村秀典『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館、一九九九年。
中山喬央「中国鏡と三角縁神獣鏡」早稲田大学大学院考古学研究室発表レジュメ、二〇〇〇年。



空風（からっかぜ）（四）

太田精一

（十三）

夫の吉雄は、召集を受け中国を転戦中で相談することができない。口やかましいが頼りになる姑のみちは、すでに他界している。厳次郎の彫り物を見たさきは、先行きに不安を抱き、木本家に嫁いだこの三年間を改めて振り返ってみた。

ノモンハンでの闘いが熾烈をきわめ、戦争の暗い影がひたひたと押し寄せる昭和十四年の夏は、さきにとっても人生の岐路に立たされた年であった。

さきが木本家の正式な嫁となったのは昭和十一年五月、伸一が生まれる二日前である。吉雄と見合したのは前年の昭和十年、それから木本家の嫁にふさわしいかどうかを試す「足入れ」期間が数ヶ月あった。この制度は、企業でいう試用期間のようなものだ。嫁に来る娘が、その家の家風に合わなかったり、一緒に暮らしてみて双方に不満がある場合、入籍をしないのである。

伸一を産んだことでさきの立場は安定した。だが、それは二人だけの楽しい新婚生活への晩鐘でもあった。厳次郎夫婦は、息子夫婦と孫との同居を強く希望して中山町にいた吉雄の家族を自分たちの住んでいる大工町の家に引き移させたのである。

厳次郎の妻みちは、杉本家から嫁いで来た。

杉本家は江戸時代から続く大工の棟梁の家系で、徳川家康が浜松の街造りのために岡崎から連れて来たと伝えられている。

みちは裕福な杉本家の次女として育った。派手好みであったが、しっかり者でやかましい。古いしきたりや格式を大切にし、親類縁者、近所への儀礼を欠かさなかった。

さきは、木本家の家風に馴ませようとするみちの厳しい躾に耐えながら次第に嫁としての修業を積んで行った。

吉雄は、三男でありながら木本家の跡取りとなった。

杉本家を継いで大工の棟梁となったみちの兄作五郎に子供がなかった。そのため、妹のみちの産んだ木本家の次男満雄を養子に迎え、杉本家の跡取とした。作五郎は、大工町に住んでいて、木本家とは隣同志である。厳次郎とみちは杉本家に満雄を養子に出したとはいえ、毎日顔を見ることができたのである。

ところが、木本家に突然不幸が起った。長男の英一が風邪をこじらせ肺炎のため急逝したのだ。長男を失くした木本家は、今更養子に出してしまった次男の満雄を跡取として引き戻すことはできない。そこで三男の吉雄に白羽の矢が立ち、図らずも木本家の跡取となったというわけである。

吉雄は、兄の満雄の継いだ杉本組に入り大工の修業をした。だが、棟梁の弟であることをいいことに、大工の修業に身を入れない。兄弟子たちも遠慮がちで厳しく鍛えなかった。

鍛冶町のビリヤードやカフェに足繁く通い、遊廓にも顔馴染の女がいた。芸事も大好きで、祭にはお囃子組の常連として笛を吹いた。絵を描いたり、尺八を吹いたり趣味は多彩である。だが、仕事には出たがらない。

背は普通であるが、骨太のがっしりした体格である。少年の頃から柔道を始め、浜松の養心館道場の三段で、選手として地区大会などによく出場していた。

さきは、吉雄の仕事嫌いで遊び好きの性格が出征中に直るのではないかと密かに期待し復員を待っていた矢先の出来事で、ショックは大きかった。

姑のみちが他界してしまった今、木本家では、厳次郎だけが頼りである。その厳次郎が入墨をしている。さきは裏切られたような気持になった。だが、

（彫り物さえ見なければ、これからもずっと頼りになる良い舅であると思い続けるに違いない）

さきは、これまで持っていた入墨に対する先入観が、揺らいで行く自分をどうすることもできなかった。

さきは、厳次郎が入墨をした理由を確かめたくなった。

体に彫り物を入れるのは「やくざ者」のすることだと信じ込んでいたさきには、日頃優しくしてくれている厳次郎がどうしても「やくざ者」だとは思いたくない。

「おじいちゃ、どうして彫り物を入れる気になったの」

さきは、恐る恐る聞いてみた。

「俺の若い頃、職人の多くは彫り物を入れていた。彫り物のない職人は、粋な腕のいい職人とは思われない。肩身の狭い思いをしたものだ。当時は若かったから意気がってみたい気持もあったのよ。彫り物を仕上げるには忍耐がいる。だから中途半端な職人は、きちんと仕上げ

られず途中で止めちまう。博奕打ちや、遊び人も同じで、ほとんどの奴は、腕に少し彫る程度だ。背中全部に彫り物がある奴なんかあんまりいやあしない」

「でも入墨のある人は、やくざ者だと聞いています。おじいちゃんのようなしっかりした腕のいい職人が入墨をしているだなんて思いもしなかった。おばあちゃもこの家に来た時はびっくりしたんじゃないの」

「みちの実家だって元はと言えば大工の家で、その中には、入墨をした男もたくさんいた。だからそんなことは気にもしなかった。むしろ中途半端な彫り物よりもきちっと仕上った彫り物にしているほうが、辛抱強そうで頼もしいと言っていた」

「それだけの彫り物をするには、ずいぶん痛かったでしょう。いくつの時彫ったの。時間もかかったんじゃない」

「日清戦争が終った次の年の明治二十九年。二十三の時だ。彫る時痛いことは確かだが、それを我慢することができるかどうかによって体に墨を深く入れ、立派に仕上がるかが決まるのだ。彫師がキュッ、キュッと針を刺して行く。そうすると皮膚は熱を持ち、感覚が麻痺して思ったほど痛くなくなる。脇の下や脚のつけ根が腫れて熱が出ることはあった。三日に一回ぐらいずつ通って一ヶ月以上かかったことを覚えている。」

彫り物の話を厳次郎から聞いたさきは、(入墨をしている人が、すべて〝やくざ者〟だと決めつけるわけにはいかない。少なくとも厳次郎の日頃の言動を見る限り道理を曲げて横車を押すようなことはない。けれど普通の人とはどこか違う。やくざ者ではないが義理人情に生きる侠客のような雰囲気がある)と思った。

さきは、畏愛の眼差しを厳次郎に向けた。そしてとりあえず吉雄が中国から帰還するまでは、この家に留まり、その上で身の振り方を決めることにしたのである。

(十四)

戦災からの復興が始まった昭和二十二年、厳次郎は、隣接する鴨江観音通りに面した土地を親戚から借り受け〝かざりや〟の看板を出した。

飾職人であった彼は、かんざし、指輪、煙管などの貴金属類の細工物を得意としていた。社会も少しずつ落着を取戻すにつれ、これまでの鍋、釜などの生活必需品の修理や製造から、金、銀、宝石などの装身具の注文が出始めたのである。

春、夏の彼岸には、鴨江寺への参詣人が近郷、近在から多勢集る。伝馬町と大工町の交差点から鴨江寺まで、一キロ余り続く沿道には、大道商人が軒を並べて瀬戸物、おもちゃ、駄菓子、食べ物などを売っている。鴨江寺の境内には、サーカスや見世物小屋が立ち並び軽業、

唐人形、ろくろく首などの見世物が庶民の人気を呼んでいた。

鴨江寺は、大宝三年僧行基が開創した真言宗の名刹として知られている。本尊は、聖観世音菩薩で、塔中寺院も多く浜松地方きっての大寺である。江戸中期の享保の頃から彼岸に縁日が立つようになり、娯楽の少なかった昭和二十年から三十年代にかけては、特に賑いを見せていた。

お彼岸詣りは浜松近在の庶民の娯楽のひとつとなっていたのだ。

「天然の美」や、「サーカスの唄」などの曲が鴨江寺から流れて来ると、伸一はじっとしていられなかった。

学校から帰るとすぐカバンを放り投げ小使銭を握って家を飛び出す。沿道の綿菓子屋、鯛焼屋、お好み焼屋、ラムネ屋などで買い食いをする。また、水鉄砲、風船、水槽に浮かんでいる舟などの露天の品物を買って来てすぐ壊してしまい、よく叱られていた。

境内に立てられたサーカス小屋や見世物小屋は、特に伸一の興味を引き、春夏の彼岸ごとに小屋を覗き込むのだった。

伸一が強司と共にサーカス小屋に入った。昭和二十三年の春の彼岸の時のことである。伸一が空中ブランコや曲芸を無中で見ているうちに強司を見失なってしまった。見物どころではない。伸一は必死で探した。やっと小屋の片隅で一人で遊んでいる強司を見付けた。彼は、暫く曲芸を見ているうちにあきてしまい、小屋の片隅に行って、破れた筵に手を入れ、土をつかみ出して遊んでいたのだ。

木本家では、このお彼岸の期間中だけ、参詣客を当て込んで、食べ物屋を開いた。汁粉、甘酒、団子、饅頭、などの〝甘味店〟である。店は、さきが切り盛りした。臨時のお手伝いさんを雇ったがそれでも人手が足りない。

さきは、伸一を手伝わせようとした。が、遊び盛りの伸一にとって店の手伝は苦痛で、逃げてばかりいる。

吉雄は、日中、太平洋戦争と二度の召集を受けたが、無事帰還し、この頃には、東洋紡績で働いていた。そのため店を手伝うことは、ほとんどできなかった。

それでも、参詣客を当て込んで、春、夏の彼岸ごとに開くさきの店は繁盛し、年収の半分を稼ぎ出すほどになっていた。

細工物の仕事も増え、彼岸の〝甘味店〟も繁盛したため木本家にも余裕ができた。さきは、すっかり木本家の家風に馴み、幸福な安定した生活を送っていた。

だが、木本家の中で吉雄の立場だけが、不安定であった。吉雄の存在は、いつも影が薄かったのである。

戦時中は、戦場に駆り出され、家を空けることが多かった。伸一は幼い頃、祖父の厳次郎が父親だと思ってい

た。厳次郎は、父親以上に厳しく、伸一には怖い存在で、よく叱られ体罰を受けた。それでも伸一は、厳次郎を嫌いではなかった。悪態をつきながらも、彼の生き方をどこかで肯定し、いつの間にかその感化を受けて育ったのである。

家計の主役を担っていない吉雄には、木本家の大黒柱としての責任感が薄かった。もともと束縛されるのが嫌いな吉雄は、欠勤も多く収入も少ない。欠勤しては、ビリヤードやカフェに通い、朝帰りすることも少なくなかった。

さきは、吉雄のそうした行為を遊びと割切って、これまで見て見ぬ振りをしてきた。

だが、千歳町の女性との関係は、これまでとは違った。単なる遊びではない。相手の女性の家に入り浸り、木本家に帰って来ないことが多くなった。ついには家に寄り付かなくなってしまったのだ。

昭和二十三年九月、台風の前兆を告げる蒸し暑い日であった。

「おじいちゃ。うちの人に女ができたらしい。夕べも帰って来なかった。このところずっと帰って来ていない。世間体も悪いし、私も辛い。何んとか相手の女と別かれさせるわけには、いかないだろうか」

さきは、思い切って厳次郎に相談した。

厳次郎はすでにそのことに気付き再三吉雄を叱りつけていた。

「そうだなあ。お前という女房がありながらとんでもない野郎だ。これじゃ家が目茶苦茶になっちまう。俺がその女の所に行って頼んでみる」

厳次郎は、女性の働いている開店間際のカフェに出掛けた。

名は、きわと言い、年の頃三十前後の色白の女である。

「わしは、吉雄の父親の厳次郎という者ですが、あんたがきわさんですかい。吉雄があんたと理無い仲となって家に波風が立ち、困っています。吉雄には、子供が三人もいて、またこの十月には、もう一人生まれる予定だ。何んとか別れちゃあくれませんか」

「それは吉雄さん次第です。私は、吉雄さんが好きでこんな仲になったんですが、吉雄さんがどうしても別れたいと言うんなら仕方ありません。でも、私の口から別れてくれとは言いたくありません。それは私の本心からではないからです。今ここに吉雄さんはいませんが、そのことは、吉雄さんに直接言ってください」

「吉雄とは、すでに話した。だが、はっきりしたことは言わないのだ。いろいろなことを考えて気持が揺れているのではないかと思う。そこであんたが別れると言ってくれれば、その気になるかも知れないと思ってこうして来たわけだ」

「お父さんのお話は、分かりましたが私が吉雄さんを好きだという気持は変わりません。別れたくないのです。どうぞお引取ください」

きわは、哀願するような目で厳次郎を見て、悲痛な声で訴えた。

厳次郎は、カフェを出た。ネオンが夕闇迫る街にぼんやりと点っている。戦後の苦しい時期をくぐり抜け、やっと生活も安定し、楽隠居をしようと思っていた矢先の出来事に、厳次郎の心は暗く沈んでいた。七十五歳の老境を迎えた彼の頭上に、雨雲が低く垂れ込めていた。

(十五)

家に帰った厳次郎は、さきを呼んだ。

「おきさ、このままでは、吉雄を女と別れさせることは無理だ」

厳次郎は、息子の不行跡を嘆き、育てた自分を責めてさきに謝った。

「ごめんよ、おさき。お前はこの家に来て嫁として尽くしてくれた。吉雄の留守を守り、焼け出された時もお前の実家に長い間居候させてもらった。にもかかわらず、お前には、何もしてやれない。この上は、不肖の息子と相手の女を殺して俺も死ぬ。それがせめてもの俺の償いだ」

「おじいちゃ。それはいけません。私は、もうあの人のことはあきらめる。お腹の子を入れて子供が四人になり私一人では育てていけない。伸一は、もう六年生。世の中のことが分かる年頃です。もう少し辛抱すれば、働いてくれる。それまでおじいちゃと私が働けば何んとかやって行ける。おじいちゃが私や実家のことを大切に思ってくれることは感謝している。でも、決して短気を起さないでください。もし、おじいちゃが刑務所にでも入ったら、残された子供たちはもっと不幸になるんだから」

さきは、必死になって厳次郎の行動を止めようとした。そして、心の中では、厳次郎のさきへの思いやりの深さにじっと手を合わせるのであった。

厳次郎は、義侠心に富む明治の男である。義理と人情を重んじ、伸一や強司にいつもその大切さを説いて聞かせていた。彼にしてみれば、浜松大空襲によって家が焼失して以来、世話になった嫁の実家に恩義がある。その嫁を不幸にすることは、義理を欠くことになるのだ。

また、十年余り一つ屋根の下で暮らしたさきへの情は実の娘以上のものを感じていたのかも知れない。いずれにしても、厳次郎には、吉雄の不行跡を許すことはできなかった。

厳次郎は、その夜家族が寝静まった頃、着物の裾をからげまき割りを腰に差して家をそっと抜け出した。外は

激しい雨が降っている。
飲食店の立並ぶ鍛冶町辺りの店も暖簾を下ろし、街はひっそりとしている。厳次郎は千歳町の裏通りにあるきわの家に入った。二人の寝込みを襲うつもりだ。だが、家の中はもぬけの殻で、誰もいなかった。家財道具も片付けられている。
彼は、二人の帰って来るのを待った。
夜が明けても帰って来ない。雨は、降り続いている。
厳次郎はあきらめて、濡れながら大工町の家に帰った。
「どうしたの、おじいちゃ。一晩帰らなかったね。どこへ行ってたの」
「なにね、吉雄の奴を女と一緒に叩き殺そうと思って出掛けたのだが、いなかった。吉雄は柔道三段で、こっちゃあ年を取っているから、まともにぶつかっちゃかなわない。寝込みを襲うしかないと思って出掛けたのさ。一晩待ってみたが帰って来ないところをみるとどこかに夜逃げでもしたのかもしれない。そういえば、家財道具が片付いていて、暮らしの臭いが感ぜられなかったなあ」
「あの人も、おじいちゃの気性を知っているからどこかに身を隠したかもしれないね。親子で刀物沙汰にでもなったら大変だと思ったのじゃないの」
吉雄は、すでに浜松にいなかった。きわの生れ故郷の秋田の角館に、手を手を取って逃避してしまったのだ。
吉雄はきわの魅力に取り付かれ、分別を失なっていた。色白のキメ細かな肌、しなやかな肢体、ねばりつくようなあえぎ声、女のすべてをさらけ出し、官能の世界に身を置くきわが愛しくて、手離すことができない。
美人ではない。少なくとも妻のさきのほうが美人である。だが、妻にはない崩れた色香が、むせかえるように鼻孔をくすぐり吉雄は、きわの身体を抱き締めずにはいられなかった。
(妻子を捨て、父親に背いてまで一緒になる価値はあるのか)
吉雄は絶えず自問した。しかし答は見付からない。三十六歳の吉雄にとって分別や社会の規範よりも肉体の欲望ときわへの思いが優っていたのだ。
きわも同じ気持であった。義務教育を終えるとすぐに浜松の織布工場に働きに来て五年ほど務めたが、工場が焼夷弾で焼失し、担ぎ家などをして糊口を凌いできた。だが、世の中が落着くにつれ、担ぎ家では生計を立てられなくなり、カフェの女給となった。そこでいろいろな男を知った。その中で、何故か酒の飲めない吉雄が誠実そうに見え、すがってみたい気持になったのである。
きわのこれまでの人生は幸せではなかった。妻子ある男を好きになったが先は見えない。

「もし吉雄さんが家族を捨ててまで自分を愛してくれるならば、一緒に暮らすことで人生を変えられるかもしれない」
きわは、やっと摑みかけた幸せを手離したくなかった。故郷の角館で、吉雄と一緒に人生をやり直そうと思った。
二人は、厳次郎の襲来を察知してか前日の夜行列車に乗って、秋田に旅立ってしまっていたのだ。
浜松駅のプラットホームが、闇の中に消えて行くにつれ、吉雄は、逡巡する気持と新しい生活への不安が胸を締めつけ、思わず目頭を押さえた。

(十六)

吉雄が家出してから三ヶ月が経った。
空風の吹く寒い日の夕闇迫る頃である。ジングルベルの唄が街に鳴り響いていた。
玄関の戸口に人が立っている。厚手のオーバーに顔を隠し、中を覗き込むようにしている。
伸一は、大谷友衛門主演の映画「佐々木小次郎」を見て感動し、家の戸口を開けようとした時である。
「あれっお父さん。お父さんじゃないの。どうして家に入らないの」
吉雄は、木本家の敷居が高くて家に入ることができなかったのだ。
「お父さんが帰って来たよ」
伸一の声に驚いて、厳次郎とさきが家の中から出て来た。
厳次郎は、厳しい視線で吉雄を睨みつけて言った。
「どの面下げて今頃戻って来た。お前は、もう息子でもなければ、家族でもない。死んだものとあきらめているのだ」
吉雄は、目を伏せて恥じ入るような声で、涙ながらに秋田での生活を語った。
「秋田の角館できわと暮していたが仕事がない。しばらく日雇い仕事をしてその日暮しをしていた。だが、だんだん寒くなって、十一月も半ば過ぎたら雪が降り出して来た。土地の言葉にも、なかなか馴染めなくて、心細くなるばかりだった。そうしたら無精に浜松の街や家族が恋しくなって、きわと別れて帰って来た。本当に申し訳けない。これからは、真面目に働いておじいちゃやさきを安心させるから、もう一度家に居させてくれ」
「おじいちゃ、私はうちの人が憎かった。恨んでいた。それ以上に私からうちの人を奪った相手の女を憎んでいた。秋田で二人が楽しく暮していると思うと胸が張り裂けそうだった。ずっと幸福である筈がない。必らず不幸が訪れる。そうでなければ、あまりにも私は、惨め過ぎる。そう思って暮らして来た。でも、今、ここにうちの人の哀れな姿を見て、私の願っていた通りになったと

思った途端、可愛想になって来た。もともとこの家はうちの人のものだし、もう一度一緒に暮らすことができるよう許してあげて」

さきは、厳次郎に懇願した。

厳次郎にとっては、たった一人残った息子で、心の底から憎んでいたわけではない。嫁のさきの心情を汲んで吉雄には、厳しく当たらざるを得なかったのだ。

厳次郎は年を取り少し弱気になっていた。頼りにならない息子でも家にいるほうが家族が落着くと思うのだった。

「さきがそう言うならしょうがない。子供たちにとってもそのほうがいいだろう。ただ、二度とこんな過ちを犯したら、勘当どころでは済まないことをよく覚えておくんだな」

伸一と強司は、父親が帰って来たことを喜んだ。伸一は、小学六年生で、多感な年を迎え、父親の必要な時期でもあった。

「お父さん、よかったね。これからはずっと家にいてくれるよね。ぼく、学校では、お父さんがいないとつい馬鹿にされそうで、皆んなの前では、強がって見せるためすぐ喧嘩をしてしまう。先生にも怒られて、この前も教壇の前で、何回もびんたを喰っちまった」

伸一は父親のいない淋しさを学校で発散させていたのだ。

五歳の強司は、父親の帰った喜びで、にこにこして吉雄に抱きついた。

木本家にもやっと平和な生活が戻って来たのである。

（十七）

伸一は、中学生になった。昭和二十四年の春、浜松市立中部中学校に入学したのである。伸一の住む大工町は、この中学の学区となっている。街の中心部にあり、比較的学力レベルが高いとされている。そのため学区外からの越境入学も少なくない。

当時は生徒数も多く。一クラス五十二、三人の編成で八クラスもあった。中部中学は高校進学率も高く、伸一の卒業した昭和二十七年でも七〇パーセントほどの生徒が進学した。

伸一は、国語、歴史、地理は得意であったが、理数系はそれほどではなかった。成績はクラスで十番前後で、学力では、目立つほどの存在ではない。だが、力は強かった。当時はやっていたソフトボールでは、四番を打ち、ホームランをよく飛ばしていた。

教育に関心の薄かった吉雄は、教科書などは近所の子供の使い古しで良いとして伸一には新しい教科書を買い与えない。

「英語の授業が始まったのだけど、辞書がないから買ってよ」

伸一は、吉雄に辞書を買うよう頼んだ。

「駄目だ。英語なんか勉強して何になる。進駐軍の手先にでもなるつもりか。勉強なんか出来ても出来なくてもいいからまず家の仕事を手伝え」

この頃には、木本家の家業も隆盛期を迎えていた。厳次郎の飾職人としての技術を生かしたコール天を剪毛する機械の部品製造が軌道に乗り、数人の職人を抱えるほどになっていたのだ。

吉雄は、厳次郎の跡を継ぐべく、その技術の修得に励んでいた。

コール天は、別珍と並んで浜松地方の特産品である。昭和の初期には、ビロード類の一種である別珍やコール天を剪毛するため、ピンと張った布の織目にナイフを入れ、そのナイフを持った工員が歩いて剪毛していた。

ところが、ドイツでコール天を剪毛する機械（カッティング）が発明され、昭和の初期に日本に輸入された。別珍は、織目がきわめて細かいため、機械的な剪毛はできないので、従来通りの手作業で剪っていた。

コール天を剪毛する機械は、すでに戦前に国産化されたが、その消耗品である針と称する松葉型の部品が日本ではできなかった。この部品は、一台のカッティング機に、三百本以上必要とされる。

その松葉型の針の製造依頼をカッティング機メーカーから受けた厳次郎は、苦心の末、国産化することに成功した。針には、一定の硬度と靭性が必要である。材料はスェーデン鋼の線材が最も適している。線材を一定の長さに切って、金床の上に乗せ、金槌で叩いて平たく伸ばす。こうして伸ばした二本の線材を組み合わせ、針金を巻き付け固定する。その先端に真鍮蝋を塗り、バーナーで焼付け、二本の線材が先端部分で張り付くようにする。その張り付いた板状の線材に焼入れ、焼戻しをして硬さと弾力性を与え、まわりの針金（バリ）を取る。そして蝋付けされた頭の部分にヤスリをかけて細くし、尻の部分にハンダ付けをして松葉型にする。最後に紙ヤスリで磨いて仕上げるのである。

焼入れには、味噌に青酸カリを交ぜたものを塗り、焼戻しにはチリ硝石を使った。

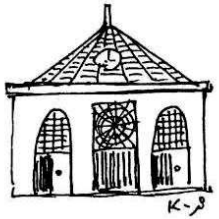
江戸から明治にかけて伝えられた飾職人の技術を利用することによって、厳次郎は、ドイツから輸入された機械の部品である松葉型の針を一挙に国産化することに成功したのである。

松葉型の針は、国内需要の高まりと輸出の再開によって、注文が殺到し、カッティングの機械を持っている大阪の業者からもわざわざ買付けに来るほど繁盛した。

木本家では、数人の従業員と家族総出で夜遅くまで仕

事をしたがそれでも間に合わないほどであった。
ところが、その景気も三、四年しか続かなかった。
木本家の生産だけでは、増大する需要を満たすことができない。そのためカッティング機を製造する安本鉄工所が、この針を機械生産するようになったのである。
機械生産の針は、均質性が高く剪毛が均等に行われる。ただ、手造りのものよりも弾力性に欠け、柔かく消耗度は激しかった。
しかし、何よりも廉価で生産されることが強みであった。
木本家の家運にも衰退の兆しが見え始め、吉雄は、何んとか劣勢をとり戻そうとあせった。針を機械生産すべくあらゆる手づるを頼って、機械の製造を試み、資金を投じては、失敗した。
母親のみちの持参した土地も少こしずつ切り売りして残りわずかとなった。
そんな時、厳次郎は脳溢血で倒れ、半身不随となってしまったのである。その上に、三才になる末のますよが腸捻転で、日赤病院に入院した。手術したが術後の経過が芳しくなく危険な状態が長く続いている。
吉雄とさきは、仕事もほとんど手につかず、病院につき切りとなった。
伸一は、中学三年で高等学校の受験期を迎え、強司は、小学校三年の遊び盛りである。
昭和二十六年十二月、街を吹き抜ける空風が、木元家にはひときわ冷たく感じられた。

（つづく）



編集後記

皆様明けましておめでとうございます。
三戸岡さんの発案で「まんじ」は今年猪突猛進するようにとの祈りを込めてこの表紙になります。
田寺さんからは、絵の意味として「平常心」としていただきたいとの便りが届いております。
何れにいたしましても激動の時代を背景に、平常心を保つ為には、激しい変化に対応できる優れた感性が必要だと考えます。
これには子供のように何事にも好奇心を持ち、従来のしがらみにとらわれず、権威の呪縛を超越し、必須の情報のみを収集することができ、自分の主張を貫く為には戦う事を辞さない心構えが必要だと思います。
話は変りますが、中国華東二宮尊徳研究センターが三月、上海華東理工大学内に開設されます。一方で三戸岡さんの論語の本は売れ行きが極めて好調です。既に鯨さんの漢詩も日中親善に寄与しており、この様な同人を通じての日中文化交流に加え、新井さんの韓国情勢の見事な解説が本号に寄せられております。
これらの事柄は「まんじ」による同人各位の自国文化理解度向上があったからこそ、成し遂げられているものと思料します。
新加入の平山さんからは早速ご寄稿をいただきました。黒田官兵衛についてです。文章後半には御着城址をはじめ、現地訪問された関係遺跡の情景を生き生きと描写しておられます。引き続きの御投稿を期待いたします。
同人各位の一段の飛躍と、それにより貢献できる「まんじ」となることを祈念して文を閉じます。

（T・N）

まんじ 第103号

平成19年2月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道夫（みとおか　みちお）
編集長　中山　喬央（なかやま　たかひろ）
事務局長　鍋屋　次郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX　045（544）5947

（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　まんじ

（印刷製本）　大和印刷株式会社
〒332-0031　川口市青木1－12－20
TEL 048（254）3311　FAX 048（254）3313

表紙の絵について
「平常心」

田寺（たでら）怜葦（れい）　画

まんじ

No. 104

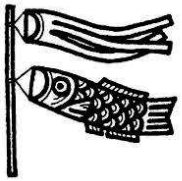
2007.5.1

まんじ第百四号　目次

奇蹟の生還……新井　宏…4
漢詩潮騒録（五十）……鯨　游海…10
彼岸への道―過ぎ去った日の思い出から……伊治　哲…17
あばれ天竜（四）―金原明善の一生―……三戸岡道夫…22
たまごの殻（二）……千坂精一…31
「峠」「濃尾参州記」を歩く（司馬雑感十一）……山田嘉久…46
鏡の中の革命児―昭和史の一ページとして―……大和禎人…56
掌編小説2　新しき友……亜木陽一…65
伊豆の歯科医業の祖（最終回）……堀内永代…68
わが愛誦歌（三）―戦後の歌壇逍遥……曽根竣作…75
韃靼海峡（短歌三十首）……曽根竣作…78



短歌　行雲流水（十六）……石黒修身…82
針の穴を通った駱駝（七）……鍋屋次郎…89
文化勲章に輝く赤堀四郎博士の一生……松下魏三…99
ホメラレモセズ　クニモサレズ（一～三）……松下壽男…104
泉（創作神話）……松下壽男…117
還暦からの考古学（九）……中山喬央…120
鏡（その1）……中山喬央…129
空　風（五）……太田精一…136
『残夢消えつくして』―ストーカーの果て―……忠内正之…148
編集後記……編集子…156



表紙……田寺怜葦
カット……宮城正彦
……鈴木國男
……清水トム

奇蹟の生還

新井　宏

「宏と美枝子が病気さえしなかったら隣の五十坪も買っていたのに」と母から聞いていた。本当だとも思っていなかったが、昭和二十四年の晩夏、ペニシリンがそれほど高価であったことも確かであった。

まさに我が人生の分れ目であった。とにかくペニシリンによって、奇蹟としか言いようのない人生を拾った。私が小学校六年生、妹の美枝子が二年生、そしてその下の妹の玲子が四歳で、末弟の繁はまだ影もなかった。流行性脳脊髄膜炎という法定伝染病からの生還であった。

私は長い間、そのペリシリンは英国から輸入されたものと思っていた。英国のフロリーがペニシリンの発明者であることを聞いていたからである。第二次大戦中、原爆やレーダーと共に、最高級の軍事機密であったペニシリンが、いくら終戦後とは言え、日本で生産されていたなどとは、思ってもみなかった。だからこそ、戦後の超インフレ進行の最中、輸入品がどれほど高価であったか考えれば、五十坪の話も大げさとも思わなかった。

ところが、そのペニシリンは、戦後まもなく日本でも量産化されていたのである。しかも、その頃、世界中でペニシリンを作れたのは米国と英国と日本だけだったというのだから驚きである。

その秘密は、旧陸軍が進めていたペニシリンの研究にあった。その研究成果を基盤にして、終戦の翌年には早くもペニシリンが市場に現れていた。そう聞くと、私の命は陸軍の研究によって助けられたことになる。陸軍の悪口は言うまい。

もっとも、この国産化はＧＨＱの突然の発売禁止命令によって一頓挫してしまう。理由が良くわからなかったのは当時の特徴であるが、やがて中止命令はまた理由も

分らず解除される。ただし、販売先は自由ではなく、米軍向け、それも米軍兵士の梅毒治療用であった。

昭和二十四年。

「青い山脈」がヒットし、日当二百四十円のニコヨンと言う言葉が生まれ、戦後社会もそれなりに安定に向かっていた。戦前は勤め人をしていた父が、大陸から復員後、若い頃の大工に戻り、なんとか生活の目途をつけて、一家もやっと疎開先の新潟の長岡市から引揚げてきたばかりであった。品川区の戸越公園に十二坪のあばら家をつくってから半年。夏休みも終わり、残暑きびしい頃、町内の秋祭りが行われていた記憶がある。

ゆとりなどあるはずが無かった。入院先の都立駒込病院でさえ、冷蔵庫もなく貴重品のペニシリンを井戸で保冷していた時代であった。高価な輸入品のペニシリンを、よくぞ保管していてくれたと言うのが私の認識であった。

それが国産品だったとは……。しかも、戦後の日本経済復興の一翼を担って、朝鮮戦争の頃には、外貨稼ぎに大活躍していたとは……。

まさに奇蹟の連鎖であった。

幸運のスタートはまず英国のチャーチル首相が肺炎に罹ったことである。

昭和十八年の十一月末、チャーチルは、大戦後の日本領土問題やビルマ方面作戦について、米国ルーズベルト大統領や中国の蒋介石総統と話合うためカイロ会談に臨んでいた。しかし老齢七十歳のチャーチルは、体調をくずし肺炎に冒されてしまう。老人の肺炎は今でも致命傷であるが、それがペリシリンによってわずか二日で快癒してしまったというのである。

そして十二月一日には、「第一次大戦以降に日本が占拠した太平洋諸島、中国領土の回復と朝鮮の独立」という極めて重要なカイロ宣言が発表された。この時、蒋介石が「朝鮮の独立」を認めなければ、韓国は今頃、チベットのように中国領土の一部であったはずだ。

もちろん、このカイロ会談の内容は、ただちに世界中に打電され、各国の新聞ニュースのトップを飾った。それと共に、チャーチルがペニシリンによって救われたとのニュースも世界を駆け巡った。

その時、中立国アルゼンチンにいた朝日新聞の今井義一がニューヨークタイムスの記事などを参照して、これを長文の記事に仕立てあげ日本に打電中であった。

突然、空襲警報のようなサイレンが鳴り響く。アルゼンチンも大戦への参戦を決め、日独と国交断絶した知らせであった。これが今井の最後の打電となった。

しかし、実はこのニュース、世界的な誤報であった。チャーチルはペニシリンではなく、ズルホン剤によって救われていたのであるが、もう訂正電は送れない。その結果、朝日新聞の誤報が、日本におけるペニシリン開発の起爆剤となり、私の命を救った。

それはカイロ会談からちょうど一年前のことであった。

陸軍軍医少佐の稲垣克彦は独文誌「臨床週報」の記事にペニシリンに関する最新情報を偶然に見つけ出した。同盟国ドイツに向けて秘密裡に出航した多くの潜水艦の中で、唯一帰港をはたした「伊八号」が、もたらした機密技術資料の一部であった。伊八号は敵のレーダーに捉えられ集中攻撃を受け満身創痍となり沈没寸前の姿で帰港した。それ自体が奇蹟の生還であった。

稲垣はその頃、自らが率いることになった陸軍軍医学校の研究部のテーマ選定に腐心していた。後に、いずれも著名な学者となる、スタッフの梅沢浜夫、佐藤弘一、鳥居敏雄、増山元三郎などが彼のそばにいた。ちなみに、梅沢はカナマイシンの発明者、増山は我が国の推計学のパイオニアである。若き陸軍医学の頭脳たちであった。

当時の戦争では、銃弾を受けて戦死するよりも、傷口からばい菌が入り、破傷風、壊疽、敗血病、肺炎などで死ぬものが多かった。稲垣はスタッフと計らい、陸軍医学の方向をペニシリンの研究に決めた。

しかし当時の陸軍省上層部は、ペニシリン情報を敵の謀略と疑るのがむしろ大勢であった。そのため、稲垣の研究推進具申はなかなか認められなかった。

そこにもたらされたのが、チャーチルの肺炎に関する誤報記事である。急転直下、誤報の五日後には、第一回ペニシリン委員会が開催され、総動員体制が整うことになった。委員会には人体実験で有名な七三一部隊長の石井少将も参加、ペニシリン研究に強い意欲を示した。

ペニシリンは抗生物質の代表格である。青カビから作るので、生物的な薬かと思っていたが、化学式で見れば亀の甲構造が連鎖した純粋な物質である。抗生物質にはその他にストレプトマイシン、オーレオマイシン、カナマイシンなどマイシンと付く薬が多く知られていて、戦後まもなくの段階でさえ百種以上あったというから、今では千種類を越えているのではなかろうか。いずれも細菌の一番外側の膜、すなわち細胞壁をつくるのを妨害することによって、細菌が溶けて死んでしまうことを原理としている。

化学物質であるが、当時は青カビが作り出す物質を抽出する方法に頼っていた。だから、ペニシリンを効率よく作りだす青カビを見つけ出すことが最重要テーマであった。しかもカビの種類によって、数百倍、数千倍も

効率が異なった。醸造文化に秀でた日本は、明治以来、北里柴三郎、志賀潔、秦佐八郎、鈴木梅太郎、野口英雄など世界的な細菌学者を輩出していたが、その素地が研究を大きく助けた。

ただし、効率の良い青カビを見つけるだけでは、ペニシリンの量産は不可能であった。試験管内で培養するレベルでは、二十日鼠で薬効を試験することは出来ても、体重が一万倍の人間相手ではどうにもならない。大きなタンクに空気を吹き込みながらカビを大量に発生させる生産技術が重要であった。表面培養法とか深部培養法という技術であるが、この点でも日本は恵まれていた。

チャーチル誤報事件から一年にもならない昭和十九年末には国産ペニシリン「碧素一号」が森永食品の三島工場で量産化され始める。稲垣は戦後のことを考えて、これを特許に登録した。かれら陸軍医学エリートにとって日本の敗戦は既に視程内にあったということだ。

伊八号が帰港した確率、独文誌「臨床週報」が搭載されていて稲垣がそれを手にした確率、チャーチル誤報事件の確率、そしてアルゼンチンが参戦して誤報を取り消せなくなった確率、日本の伝統的な細菌学や醸造技術、いずれをとっても、戦中の日本が独自にペニシリンを開発できたのは、奇蹟としか言いようがなかった。

しかし、私が流行性脳脊髄膜炎から生還できたのは、それよりも何よりも母のお陰であった。高熱にうなされる我が子を見て、近所の町医者の診たてを全く信用しなかった。電話も自由に使えなかった時期に、とにかく救急を訴えていた。

その時、すぐ近所の中学生が高熱症状のまま死亡する事件が起きた。日本脳炎と疑われたようであるが、これが私を救う決定的な出来事となった。ただちに都立駒込病院に運ばれる。かすかにサイレンの音を覚えているが、そこで記憶が完全に途絶える。

晩年、母は衰えから極度の心配性になり、私の妻を悩ませ続けた。「おもらし」恐怖症のため「もしパンツが無くなったらどうしよう」といい続けていた。ベッドの下に山ほどパンツを準備しておいても、なかなか安心してくれなかった。

入院すれば治療費を気にしてか「もしお金がなくなったらどうしよう」とか「宏が先に死んだらどうしよう」と「もし」ばかりを繰り返していた。若い頃は、家族を取り仕切っていて、そんな心配性なところなど全く見せなかった母も、本質的には心配性なタイプだったのだと、その時にはじめて悟った。しかしその心配性が我が命を救ってくれたのだった。

都立駒込病院に救急入院して、直ちにペニシリンが脊髄に直接注射された。母は言っていた。その直後から、もう助かるとの徴候が現れたと。劇的な薬効であった。一日後に私を追いかけるように妹の美枝子が入院してきた時には、私の生還はもう確実となっていた。

ここで心配性の母はむしろ苦しみ悩む。二人とも馬鹿になっていたら、どうやって死のうかと考えていたという。三十四歳の母。それは我が娘の現在の歳であった。

生還の瞬間を良く覚えている。無性に暑かった。夢の中でジャンプをしては宙を泳いでいた。掛け具を蹴飛ばしていたらしい。大きな天井の扇風機がゆっくりまわっていた。担当の医師は女医さんで、美しい方だったと母はいっていた。細面の髪の長い方だったように思う。

退院の日、生を味わう私にとって、澄み切った青空が、とてもまぶしかった。駒込病院から田端の駅に向かう一キロ余りの坂道には、まだ野原が残っていて、黄色い花が咲きみだれていた。すすきもあったように思うが確かではない。

母はその時に何を考えていたのだろうか。病院に手鏡を忘れてきたことを悔やんでいた。何かの思い出の品であろうが、私もその鏡のことを良く覚えている。つまらぬことを良く覚えているものだ。

戦後すぐに、ペニシリンが国産化されたとは言っても、青カビの性能では、米国の水準に遠く及ばなかった。米国では広く国民が参加して青カビ探しを行った結果、偶然にも、ペニシリン研究センターのあったペオニア市の主婦が届けたメロンの青カビが抜群の性能を持つことを見つけ出していた。これに放射線や紫外線を当てて改良した青カビ株がその後の主流になる。GHQが日本のペニシリン製造を禁止したのは、性能の良い青カビ株を提供する意向を持っていたことにあった。

したがって、日本で見つけた青カビ株は戦後のペニシリンに使われることはなかったが、大量生産の技術であるタンク培養法は、ここで大きな役割をはたす。森永薬品に続いて、東洋レーヨン、万有製薬が相次ぎ深部培養を始めた。昭和二十一年には月産四億五千万ユニットであったが、二十二年には六十五億ユニット、二十三年には二百五十億ユニットの生産となり、価格も昭和二十三年には十万ユニットあたり五百円と、実質的に五十分の一まで急落した。

安くなっていたとは言え、それでも妹と二人ではおそらく一千万ユニットくらいは投与されたであろう。五万円くらいにはなったであろうか。ニコヨンの基準で計算したら年収である。やはり土地五十坪くらいに相当する勘定になる。母の言っていたことも、まんざら嘘でもなかったようだ。

母に救われたという思いは、私にとって深いところでずっと確かな存在であった。別に親孝行をしようと言う意識ではなかったが、母の老後は私が看るものだと無意識に、いや無条件に考えていた。妹である娘達のところの方が気軽かも知れないと思っていたが、結局、最晩年は妻が看てくれた。

母は亡くなる直前、音にならない感謝のことばを一生懸命に口を動かして、妻に伝えていた。息子の宏への心遣いであったかも知れない。いや、本心だったように思う。それがうれしかった。

病気との関連では、父のことを何も覚えていない。病院で会った記憶もない。しかし今はよく判る。ペニシリンの支払いのために、とにかく働くしかなかったのだ。私たちが入院している最中にも、金策に飛び回っていたに違いない。

その父は、私が生れた時に「博」と名付けるつもりだったらしい。しかし、赴任先から「宏」とするように連絡してきたのだと言う。もしも博士になったら困ると言うのが理由であった。

父の亡くなる寸前に、私は博士号をとった。時代が異なり、私にとってはどうと言うことではなかったが、父が喜んでくれた。それがうれしかった。

駒込病院から家に帰ると、親戚に預けられていた四歳の玲子も戻ってきた。幼い心にも傷つくことがあったと後で聞いた。法定伝染病のせいもあったのであろう。病気から生還したからと言って、周囲の伝染病への恐怖感は強烈なものがあったのではなかろうか。兄として、美枝子や玲子をいとおしいと感じたのは、その時が初めてであった。

馬鹿になるはずだったふたりは、どうもその頃から逆に学校の成績が向上し始めたようである。

「病気のお陰で頭が良くなったのでしょう」としばしば言われた。そんな気もした。高熱で脳中の不必要な部分がきれいに掃除されたように思うと妙に納得できる。

しかし、それよりも拾った人生という意識が、我が人生に余裕をもたらした。もうけ物の人生と思えば、母のように心配性に陥る心配もない。拾った人生、それが全て好回転に繋ながった。

奇蹟の生還。それはまさしく偶然の連鎖であった。しかし、ただひとつ偶然とは思いたくないことがある。それは母の心配性が私を救ったと言うことだ。

まもなく桜と共に逝った母の十三回忌を迎える。

漢詩

潮騒錄（五十）

鯨游海

孔安國（孔子十二代目の子孫。漢の武帝の時文章博士）・孔安國伝古文尚書「研精覃思　博考經書」さらに簡野道明「字源編纂の縁起」に「天下の讀書子をして徧く字義訓古に通ぜしめんには、別に正確にして且つ解り易き字典の刊行なかるべからずと、乃ち自ら揣らず、其の編述に従事し、研精覃思、夙夜拮据、十数年の久しきに彌ると雖も……」とある。儒＝儒者＝学者をいう。

字統、字通＝字訓と併せ博士の著わした辞典三部作。

許愼＝後漢の大学者で「説文解字」を著し九三五三字について形、音、意味を解説した。なお白川博士は自からの甲骨文字の研究により「説文解字」の学説の多くを否定して新説を発表したが「許愼の時代は甲骨文字の発見が無かった」と許愼を庇った。蒼頡＝漢字の創始者。

☆誤てる説文解字糺し了へ
研精覃思白寿まへ逝く

哀悼白川靜文學博士

平成十八年十一月

欽仰研精覃思徒
天招字統字通儒
説文許愼無顔色
曲解幾年蒼頡愉

押韻・徒儒愉

〈白川靜文学博士を哀悼す〉

欽仰す　研精覃思の徒
天は招けり　字統字通の儒
説文の許愼　顔色なく
曲解いく年ぞ　蒼頡よろこぶ

〔注　解〕

欽仰＝たっとびうやまう。仰ぎ慕う。欽はおそれつつしむ。また天子に冠する語。欽定、欽命など。徒＝使徒。研精＝くわしく研究する。覃思＝深く思う。考究する。

讃荒川靜香選手五輪金杯

丙戌酉月

白鳥仰天冰上奔
婉然微笑羽衣翻
萬人豈但醉仙舞
忍雪堪傷不屈魂

押韻・奔翻魂

〈荒川靜香選手の五輪金杯を賛う〉

白鳥天を仰ぎて　氷上を奔り
婉然微笑すれば　羽衣ひるがえる
万人豈に但　仙舞に酔いしのみならんや
雪を忍び傷に堪えし　不屈の魂に於てをや

〔注　解〕

前回トリノで開催された冬季オリンピックに於ける、荒川靜香選手の金メダルの舞は、世界中の人々を魅了して止まなかった。日本勢は不振で唯一のメダル、それも金を獲得したのは記憶に新らしい。

華麗、優雅、婉麗で、特に本競技は欧米人の常勝するところであったのに、彼女が東洋人にもこんな美を表現し得ることを世界中に知らしめた。後掲短歌の拮据は厳しい環境の下で精一杯手足を動かし働く事。血指は血豆。

☆イナバウァ蝴蝶の舞に秘められし
拮据の血指知る人ぞ知る

孔子之一生（十九）南子誘惑

平成十七年五月

再來衞國脱窮禽
君魅妖童妃亦淫
伺候空閨迷媚態
生涯唯一惑心琴

押韻・禽淫琴

〈孔子の一生（十九）南子の誘惑〉

再び来たる衛国　窮禽を脱して
君は妖童に魅せられ　妃も亦淫なり
空閨に伺候し　媚態に迷えり
生涯唯一　心琴を惑わさる

〔注　解〕

窮禽＝窮鳥＝猟師に追いつめられた鳥。一門が匡の難に遭い捕えられ殺されかかった事。妖童＝美少年。ここでは霊公の寵愛した側近弥子瑕を指す。妃＝皇后。正夫人。なお后も第一夫人をいう。伺候＝貴人のご氣嫌伺がいに行くこと。

衛に戻った孔子一行は朝廷の乱れに驚ろく。霊公は妖童を寵愛し正夫人の南子も愛人を作っていた。ある日孔子は南子に招かれる。拝謁すると玲瓏と佩玉が鳴った。

☆腰ゆらぎ玲瓏と鳴る佩玉に
生涯一度こころ迷へり

孔子之一生（廿）桓魋之難

平成十七年五月

明君孰處幾山河
巨木到來逃刹那
正是桓魋邪惡計
天生德我彼無何

押韻・河那何

〈孔子の一生（廿）桓魋の難〉

明君孰処　幾山河
巨木倒れ来たり　刹那に逃ぐ
正に是れ桓魋　邪悪の計
「天は我に徳を生せり　彼何ともする無し」

〔注　解〕

刹那＝瞬間。束の間（仏教用語）。

結句は論語より。巻四述而篇第二十二章「子曰　天生徳於予　桓魋其如予何」（天がわが身に徳をさずけられた。桓魋ごときがわが身をどうしようぞ）。

淫乱に愛想をつかした孔子は衛の国を出て曹に向かうが受入れられず次で陳に向って南行、宋の国を通過しようとした時であった。世に「桓魋の難」といわれる災難に遭遇したのである。桓魋は宋国の軍政長官であった。

☆天徳を我に生さしむこの我に
　桓魋ごとき如何にかもせむ

孔子之一生（廿一）陳蔡之難

平成十七年五月

幾年遍歴喪家狗
何里探求救國人
師弟絶糧陳蔡餓
雖窮不濫是云倫

押韻・人倫

〈孔子の一生（廿一）陳蔡の難〉

幾年の遍歴ぞ　喪家の狗は
何里の探求ぞ　救国の人は
師弟糧を絶たれ　陳蔡に餓う
窮すと雖も濫れざる　是れ倫と云う

〔注　解〕

起承句は対句。よって踏み落としとなっている（起句に押韻していない）。また起句の「喪家狗」、転句の「絶糧陳」、結句の「窮、濫」は何れも論語巻八衛靈公篇第二章より引用している。

喪家狗＝喪中の家では悲しみの為飼い犬をかまっていられないので、自然にやせ衰える意。ここから人がやつれて見る影もなく貧相な様子。孔子は鄭の国に滞在中弟子とはぐれ迷子になって了った。探していると老人が「その人なら東門に居ましたよ。喪家の犬のようにやつれ果てていましたが」と云った。孔子もこの時は疲れやつれていてこのように喩えられて了ったのである。

転結句に引用した論語では次のようになっている。

「在陳絶糧　從者病莫能興　子路慍見曰　君子亦有窮乎　子曰　君子固窮　小人窮斯濫矣」

倫＝すじ道。人として為すべき道。

桓魋の難を逃れた孔子らは鄭の国を訪ね「喪家の犬」に喩えられ苦笑して弟子達に云った。「その老人はたいした眼力だ。まさにそのものずばりではないか。よく見れば君達も同じようなものじゃ。ハッハッハ」と磊落に笑いとばした。しかし孔子は単に仕官だけが目的ではない。

鄭の国で仕官出来ず六十三歳になった孔子は、南の大国楚を目指して出発した。途中、陳と蔡の国を通らねばならない。何れの国も魯と同様の弱小国である。

楚を目指した理由は、楚の昭王から招聘があったからである。一行はここでも思わざる災難に逢う。

楚は中原から遠く離れた長江の中流にあり、未開の後進国といわれていた。しかし実際は独自の文化を持ち開明的な君主に恵まれ大発展を続けていた。近年発見された三星堆文明の巴蜀の地にも近い。

さて陳蔡両国は孔子が楚に行き仕官すると、孔子の力によって更に強大になるのを怖れた。為に軍団を以って孔子一行を包囲し食糧を断つ。孔子一行は窮地に陥いる。

☆救国の君子求めてなほ征かむ
　たとひ喪家の狗に見ゆとも

孔子之一生（廿二）葉公謁見

平成十八年寅月

父盜羊而子訴之
葉公誇示直如斯
父爲子隱子爲父
直在其中矣笑辭

押韻・之斯辭

〈孔子の一生（廿二）葉公謁見〉

「父羊を盗まば　子これを訴う」
葉公誇示したり　「直きこと斯くの如し」と
「父は子の為　子は父の為に隠せり
直ば其の中に在らむ」と　笑って辞す

〔注　解〕

寅月＝一月。この詩も論語より。巻七子路篇第十八章「葉公語孔子曰　吾黨有直躬者　其父攘羊　而子證之　孔子曰　吾黨之直者異於是　父爲子隱　子爲父　直在其中矣。」なお転句は珍らしい回文。句中同字が対称する。

起承句で葉公が自領の法治主義（民が法律を厳守する）を自慢したのに対し、転結句で孔子が反論したのは徳治主義であった。親子で庇い合うのが眞の正直だと。かく孔子は楚の長官と謁見したが彼に失望し一笑して辞す。

☆盜む父庇ひし子らを直といふ
　直なる者に法は似合はじ

孔子之一生（廿三）隱　者

平成十八年寅月

楚王親迎宰無情
豪語政非仁可兵
沮溺忠言何不隱
人與鳥獸詎群生

押韻・情兵生

〈孔子の一生（廿三）隱　者〉

楚王親しく迎うるも　宰は無情なり
豪語す「政は　仁に非ず兵たるべし」と
沮溺忠言す　「何ぞ隱れざるや」と
人鳥獸と　詎ぞ群れて生くるべけんや

〔注　解〕

前章では楚の一地方長官に過ぎない葉を公と呼んだ。これは蔡国の地を奪掠した事からくる統治上の事由であり公式には可笑しいが、論語でも葉公と記している。

さて楚は中原とは文明を異にする事を前述したが、やはり周の正統な血縁はないので公と呼ばず王とした。この時の王は昭王である。通称昭公とも呼ぶ。

兵＝武力。政治外交は凡そ力＝軍事力で決まると豪語する。現代のパワーポリティックスであろう。

沮溺＝隱者の長沮と桀溺。沮も溺も農作業で足が泥だらけという意。長も桀も身体が大きいことで、本名が不明の時にその身体の特徴を掴んで仮の名とする手法。

詎＝なんぞ…や。反語。「どうして生きることが出来ようか。出来ない」。

論語巻九微子篇第六章「…夫子憮然曰、鳥獸不可與同群也、吾非斯人之徒與而誰與、天下有道、丘不與易也」を結句に援用した。「人は人。鳥獣と群れを共にして生きることは不可能である。よって私は隱遁をはばかる」と心情を吐露したのであった。

☆政治とは仁より兵よと説く宰の
　眼険しく皺深かりき

孔子之一生（廿四）歸　國

平成十八年寅月

東西南北數千里
春夏秋冬十有年
不夢周公我衰也
歸與歸復所裁傳

押韻・年傳

〈孔子の一生（廿四）帰　国〉

東西南北　数千里
春夏秋冬　十有年
周公を夢みず　我れ衰えたるかな

帰らんか帰りてまた　裁する所を伝えん

〔注　解〕

起承句が対句なので起句の押韻は踏み落とし。また転句の平仄は「転句の五六言に限り顚倒可」の規則を援用。

東西南北＝住所が定まらず各所をさすらい歩く人即ち孔子のことを指す。禮記「今丘也　東西南北之人也」。また唐の高適の詩にも現われる。人日寄杜二拾遺「愧爾東西南北之人」。官位に縛られた我が身を歎き、自由に遍歴する杜甫の身を羨やんで詠んだ。有＝又、その上に。

転結句は論語の下記章を参照引用している。巻四述而篇第五章「子曰、甚矣　吾衰也　久矣　吾不復夢見周公也」。巻三公治長篇第二二章「子在陳曰　歸與歸與　吾黨之小子狂簡　斐然成章　不知所以裁之也」（帰ろうよ、帰ろうよ。うちの村の若者たちは志が大きく、美しい模様を織り成す事は出来るが、どのように布を裁断したら良いか判らないでいる＝帰って私が伝授しよう）。

さて楚国に入って先ず葉公と謁見、次で招待してくれ且つ陳蔡の難の際に軍隊を出して救ってくれた楚の昭王に拝謁した。昭王は歓迎してくれたがここでも宰相子西が孔子の登用に反対した。即ち「礼の文化や仁の政治は理想論ではあるがこの厳しい弱肉強食の時代には全く現実的では無い。天下泰平の書生論こそが、国家の存続を危うくする。周王朝を理想とする孔子を容れる訳にはいかない。礼や義ではなく今こそ軍備の充実である」と説いた。「若し孔子を登用するならこの子西の首を斬ってからにして欲しい」と昭王に強く訴えた。

この明確な現実論には昭王も返す言葉なく孔子の登用を断念した。これは孔子の学問が理論的、原理原則的に批判され、机上の空論と断定された事に等しく、孔子にとっては痛かった。孔子の顔は次第に憂色を深めた。

また楚の地では多くの隠者にも出会った。隠者とは本来なら世に出て活躍出来る知識や能力を持ちながら敢えて世に隠れて暮らす人々である。俗世を見切り、山野に親しみ乍ら超然と生きる人達で（人間とは何故に、何の為に生きるのか）という深い問いを投げかけ、孔子の思想や行き方に影響を与えたと思われる。

先ず接輿と会う。彼は「鳳よ鳳よ、徳の廃れたこの世に迷い出て政治に手を染めてるのはどうしてか。これ迄の過ぎたことは諫めようとは思わないが、これからは未だどうにでもなるよ。政治などはもうお止めなさい」とからかわれた。

更に泥まみれの長沮と桀溺とに出逢う。彼らは「世の中は、滔々と流れ去る。君主を選り好みしているような孔子に仕えるよりも我々のような世捨人に仕えた方がましだよ」と子路に悟す。孔子は益々魯に帰りたくなった。

☆帰らんかいざ帰らんか魯の国に
　周公の夢しばし見ざれば

《漢詩の流れ39》南宋の巨星たち④范成大(二)・楊萬里(一)

催租行（さいそこう）

輸租得鈔官更催　租を輸して鈔を得たるに官は更に催す
踉蹌里正敲門來　踉蹌として里正　門を敲いて来たる
手持文書雜嗔喜　手に文書を持して　嗔喜を雑え
我亦來營醉歸耳　「我も亦来り営み酔うて帰るのみ」と
牀頭慳囊大如拳　床頭の慳嚢　大いさ拳の如し
撲破正有三百錢　撲破すれば正に　三百銭有り
不堪與君成一醉　「君が与に　一酔を成すに堪えざるも
聊復償君草鞋費　聊か復た　君が草鞋の費を償わん」

（年貢催促の行）

鈔＝書き写した紙。受取証。踉蹌＝よたよたと。里正＝庄屋。村長。嗔喜＝怒ったり喜んだり。脅したりすかしたりする。慳囊＝貯金壺。一杯になると叩き割って取り出すから、俗に「撲滿」という。草鞋＝わらじ。

州　橋（しゅうきょう）

州橋南北是天街　州橋の南北　是れ天街
父老年年等駕廻　父老は年々　駕の回るを等つ
忍淚失聲詢使者　涙を忍び声を失って　使者に詢ぬ
幾時眞有六軍來　「幾時か眞に六軍の来たる事有りや」

天街＝天子さまの御成り道。駕＝馬に乗る意。ここでは天子の乗った鳳輦。六軍＝天子の近衛軍。

楊萬里（一一二七～一二〇六）字は廷秀、号は誠斎野客。吉水（江西省吉水県）の人。進士に合格、長く地方官を務めた後、中央に呼ばれ東宮侍読、宝謨閣学士に至るも余りにも実直な性格の為地方に出され終った。

詩人としては陸游、范成大、尤袤と共に南宋の四大家と称された。若い頃は江西派を学んだが、後にこれを棄て独自の詩境を拓いた。特に白居易を敬愛し、描写は緻密で新鮮。そのうえ白居易の如く俗語も多用し親しまれた。

閒居初夏午睡起（閑居の初夏、午睡より起く）

梅子留酸軟齒牙　梅子　酸を留めて歯牙を軟かにし
芭蕉分綠與窗紗　芭蕉　緑を分って窓紗に与う
日長睡起無情思　日長く睡より起きて　情思なし
閒看兒童捉柳花　間に看る　児童の柳花を捉うるを

歯牙を軟かにす、とは酸っぱくて歯が浮くさま。
窓紗とは、窓に掛けた白絹のカーテン。
情思なし、とは何となく物憂くぼんやりしているさま。
柳花は、柳の綿。

彼岸への道

――過ぎ去った日の思い出から

伊治　哲

田舎の村の山あいにその水車小屋はありました。山から湧き出る小さな水の流れがいくつも集まって、水車に注ぎます。それほど多くもない水の流れですが、それでもその水車はゆっくりゆっくり、ゴットン、ゴットンと回ります。

村の家々には一か月に一度、持ち回りで水車当番が回ってきます。その日は朝からあくる朝まで水車で自家用の米を搗きます。家の土間にも足で杵を踏み上げる踏み臼がありましたが、これはかなりの時間と労力が要ります。水車は水の力で米を搗いてくれますから、村の人たちは水車当番がくるのを心待ちにしていました。

当番の日は、玄米を四～五升米袋に入れて肩にかつぎ、十二、三分歩いて水車小屋に行きます。小屋の中は昼間でも薄暗く提灯の火で照らさないとよく見えません。手探りでは危ないので、昼日なかでも提灯をもっていきました。

二つの搗き臼の中へ玄米と少量の水を入れ縄でつるした杵を外すと、二つの杵が交互に米を搗きはじめます。ゴットン・ゴットン、ゴットン・ゴットン。まるで杵が自分で調子をとるように動きはじめます。それに合わせるかのように、小屋の外では水車の水が受け口からザーッ、ザーッと流れ落ちます。杵と水とが呼吸を合わせて協奏曲を奏でているように聞こえました。

杵が落ちるたびに、臼のなかの米が少しづつ上下入れ替わります。一升の米を搗き終えるのに二、三時間はかかったでしょうか。いやもっとかかったかもしれません。その度に米を取替えにいくのですが、子供も少し大きくなると手伝いをします。雨の降ったあとは水の量が多く流れも速くなるので、搗き終える時間も早まります。米の取替えに何度も水車への道を往き来しました。

真冬の寒いときなど、臼から米をさらえ出すのに手がかじかんで動きません。小屋の中は深々と冷えこんで思わず身震いをするほどです。それに真夜中の二時、三時にも水車小屋へ通わなければなりません。提灯の明りをたよりに、兄弟手をとり合って米袋を肩に一目散に駈けて行くのですが、夜の水車は真っ暗闇のなかで不気味な音を響かせています。提灯の影に怯えたり、ギーッという水車の音に驚いたり、寒くて怖くて辛い思いをしたことがよみがえります。

話が横道にそれますが、まだ小学校にあがるまえ、四、五歳の頃だったでしょうか。父母の勤めの都合で、ダダッ広い田舎家に祖母と二人で住んでいたことがあります。ひとつ布団に祖母に抱かれるようにして寝ていました。

あるとき夜中にふと目を醒ますと、隣に寝ていたはずの祖母がいないのです。しばらく目をこらし耳をすましていましたが、家のなかはシーンと静まり返って物音ひとつ聞こえません。どうしたんだろう。どこかへ行ってしまったんだろうか。いつもは薄暗くて昼間でも近寄ることのできなかった土蔵や裏庭の辺りを探し回りましたが、祖母はいません。

ひょっとして水車へ……?、と思うともう矢も盾もたまらず、寝巻きのまま一目散に水車小屋に向かって走り出していました。灯りもなにもない真っ暗闇のなかの山道です。この時ばかりは怖さも恐ろしさも忘れていました。ただ〝オバアチャン〟のことだけで頭がいっぱいだったのです。

水車小屋にほのかな明かりが見えたときは、ホッとして急に体から力が抜けていきました。そして小屋の中で提灯の光に背を丸めて米を取り替えている祖母の影が目に映ったときには、「オバアチャーン――」と叫んでそのまま祖母に抱きついてしまいました。祖母は「ごめん、ごめん、あんたがあんまりよう眠っとったもんやで……」とわたしをぐっと抱きしめてくれました。張りつめた気持からいっぺんに解き放たれて、「ワーッ」と大声で泣き出してしまったことを思い出します。その頃の幼いわたしにとって、祖母はかけがえのない大黒柱でした。

なぜか鮮明に残っている遠い昔の思い出ですが、陽春の水車の風景は誠にのどかなものでした。太陽の光を浴びて、水車からこぼれる水の流れがキラキラと光ります。小屋の周囲には冬の眠りから醒めた草花が競い合うように咲き乱れます。小鳥たちも囀りながらこぼれた米粒を求めて集まってきます。水車はいつものようにゴットン、ゴットンと音を響かせて回っています。

水車小屋の近くの山道に沿って、これもまた小さな古びた地蔵小屋がありました。木戸を開けるとたたきを隔てて十畳ほどの擦り切れた畳の部屋があり、その奥にお地蔵さんが祀ってあります。真中に囲炉裏が掘ってあり、お地蔵さんも天井も真っ黒に煤けています。おそらく百年近くも続いてきた地蔵小屋であったのではないでしょうか。

春の彼岸のころになると、年をとった村のおばあさんたちが申し合わせたように地蔵小屋に集まってきます。地蔵講なのです。祖母に手を引かれて、わたしもその中に加わっていました。日ごろの農作業で腰が曲がり、顔も手も日焼けして皺だらけのおばあさんたちが、お地蔵さんを囲んで念仏をあげ、鈴の音にあわせてご詠歌を唱え、ひとしきり手を合わせてモゴモゴと口ごもります。今から思うと、「南無大師遍照金剛」「南無大師遍照金剛」と弘法大師の御宝号をなんどもなんども繰り返していたように思えます。

そのあとはそれぞれ家から持ち寄ったご馳走を広げてお互いに食べくらべるのです。おはぎや煮しめ、それに煮野菜やおひたしなど、すべて自分の畑で育てたものばかりです。野菜の味付けやおはぎのでき具合、世間話や嫁の話にまで花が咲き、笑い声が絶えません。

ご馳走を目当てに幼い子供たちも集まってきます。おばあさんたちにすすめられて口いっぱいにご馳走をほお張る子もいます。「あの子はどこの子や」「よい子やなあ」「農作業の手伝いができるし、よう勉強もできるそうや」とまた孫たちの話で盛り上がります。

ひとしきり食べ終えると再びご詠歌を繰り返します。鈴の音に合わせて詠う年寄りの哀調を帯びた声は、亡き人を野辺に送る悲しみを思わせて、子供心にもこの辺りがこの世とあの世のはざまであるかのように感じたものです。事実この近くには村のお寺も墓場もありますから、年寄りたちはあの世へ向かう心づもりをしながら、自分たちが守ってきた古いしきたりを後々の世代に伝えていきたいと願っていたのではないでしょうか。

地蔵小屋からほんの十分も歩くと、曲がりくねった山道が急に開けて、ひっそりと静まり返ったお寺の屋根が目に飛び込んできます。楞厳寺（りょうごんじ）です。

かなりの古刹といわれ、本堂の柱は木目が白く毛羽立っていました。真言宗の末寺で、村の家々はみなこのお寺の檀家になっています。寺の襖絵に描かれた鴉の墨絵が長井一禾（ながいいっか）（円山派の流れを汲み、カラスの絵の技法に妙を得る。一八六九～一九四〇）の筆によるもので、俗に「カラス寺」ともいわれます。住職はそれが唯一最大の自慢で、人が集まると必ずその話をなんども繰り返します。別名「応挙寺」ともいわれる城崎の大乗寺に対して、その向こうを張るとでもいいたげな口振りでした。

四月の半ば頃には、ミツバツツジが全山を薄紅色に染め上げ、関西の「花の寺」の一つとして、参詣人で賑わいます。

お盆が近くなると、住職が小坊主を従えて、檀家の家々を一軒一軒訪ね、お経をあげて回ります。なぜか住職は、家の正面玄関から入らず、いつも庭に面した縁側に白い鼻緒の草履を脱いで、奥の間の仏壇の前ににじり寄っていくのが不思議でした。

家族は当主を中心に打ち揃って〝おじゅっさん〟（住職の敬称）をお迎えし、般若心経を唱和したあと短いお説教を聴いてうやうやしく送り出します。

そのあと、〝おじゅっさん〟の後を追いかけるように、今度は家人がお寺にお礼に参上します。といっても、わずかなお布施に米一升と自作の野菜を添えたものでした。たいていは、最年長の祖母が孫に重い米や野菜を持たせてお参りするのが常でした。

庫裏の奥にある仏間にとおされて、先祖代々の位牌を前に、再び心経をあげてもらうのですが、お経の意味がなんとも不可解で、足のしびれをがまんするのに困ったことを覚えています。

このお寺には、四国八十八箇所に見立てた霊場があります。寺の前の蓮池を隔ててこんもりとした小山があますが、その小山の斜面につづら折りの小道を開いて、二、三間おきに屋根のついた小さな地蔵尊が八十八体祀ってあるのです。一番札所霊山寺から始まって、二番極楽寺、三番金泉寺と続き、八十八番大窪寺まで、四国八十八箇所になぞらえて祀ったものです。おそらく、四国まで足を延ばせない年寄りのために、この山で四国霊場を巡礼したと同じ功徳を与えようとしたものでしょう。

お寺を辞したあと、祖母の先導で山の小道の巡礼に挑むのですが、足元も覚束ない祖母は、二十番くらいまでくると〝ペタッ〟と座り込んで、「お大師さんもわしらの気持を汲んでくれはるやろう。今度またこの続きを回ることにしよ」と、さっさと山を下りはじめるのです。その後、祖母が本当にこのミニ・八十八箇所巡礼を結願成就したのか、今ではもう確かめようもありません。けっこうひょうきんなところのある祖母でした。

この霊場の中腹まで上ると、お寺の前の「蓮池」を見下ろすことができます。水面には大きな蓮の葉の間に、真っ白な睡蓮の花が無数に浮かんでいて、子供心にも静謐の世界に沈んでいくような気持に浸ったものです。祖母もこの美しい眺めを楽しみにしていたのかもしれません。この蓮池は今でも大きな蓮の花を開かせているそうです。

静かで平和な昔の山里のたたずまいが今になって懐かしく、なぜか鮮やかによみがえってきます。

去年の春、暫くぶりに墓参をかねて古里を訪ねました。タンポポやレンゲの花に早春の息吹を感じながら山道をそぞろ歩きしました。昔の古びたお寺の本堂は真新しい建物に建て替えられていましたが、いちばん記憶に残る水車小屋や地蔵小屋はもうどこにも見当りません。それどころか、こんなところにまでと驚くほど、細い山道がアスファルトで塗り潰されていました。もちろん牛馬が挽く大八車も、赤ん坊を乗せた乳母車も目に入りません。幼児たちの賑やかな遊び声もすっかりひそんでしまい、替わって自動車やバイクがわがもの顔に音を立てて駈け抜けていきました。

水車にかよったり地蔵講に集まったり、山の八十八箇所を伝い歩きしたおばあさんたちは、もうとっくにあの淋しい墓地に眠っています。その辺りの草花や小鳥は昔と同じように春を謳っていますが、行きずりに出会った幼い日の面影が残る老女は、間違いなく小学校で机を並べた昔の少女でした。

〝年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず〟、そんな思いに駆られた墓参りでした。

（２００７．３．１０．記）



あばれ天龍（四）

―金原明善の一生―

三戸岡道夫

第八章　治河協力社の設立

（四）明治天皇の臨幸

明治十一年の九月から十月にかけて、明治天皇の北陸道、東海道の巡幸が行われたが、その時、明善は明治天皇に拝謁するという破格の光栄に浴した。

もともと明善の名前はこの拝謁以前から、すでに宮中に知られていた。それは宮内侍補の土方久元の尽力によるものであった。

明善が明治十年十二月に政府へ家産提供を直訴するため上京したとき、大久保利通に会うことが出来たのは、この土方久元の尽力によるものだった。その時土方久元は明善の篤行をいちはやく宮中に伝えていたのであろう、その月（明治十年十二月）には、皇后陛下から、

浅しとてせけば溢るる川水の
心や民の心なるらん

という御歌を下賜されている。

同時に土方久元も『治民如治水』という額面を明善に贈っている。

また明治十一年一月になると、太政大臣三条実美も『協同資力』という額面を、明善へ贈っている。

したがって今回の明治天皇の巡幸に当って、静岡県下の拝謁者の人選の中に、大迫静岡県令が明善の名前を入れたのは、当然のことであった。

今回の明治天皇巡幸の目的は、明治十年九月の西南戦争の政府軍の勝利の示威と、庶民の宣撫とをかねたもので、北陸道と東海道の二道の巡幸であった。

この巡幸は明治十一年八月三十日午前八時に東京を出発して、十一月九日まで、北陸道を巡幸し、京都を経て、東海道へ入るという二カ月余にわたるものだった。

明治天皇は東京を発って以来、道々の山陵や神社に参り、諸官庁を巡視する一方、殉国者を祀り、篤行者を表彰し、また庶民にたいしても温かい言葉をかけられた。

まず、浦和、高崎、長野を通過すると、関川、新井、高田、柿崎、青海川、柏崎、石地から新潟に入り、新発田、加茂、三条、長岡から、ふたたび柏崎、柿崎を経て直江津、糸魚川を通過、十月一日には富士を出発、金澤、福井、敦賀を経て、十月十四日には大津に入り、十月十六日から十九日まで京都に滞在された。十月二十日に京都を出発して、草津より大垣、岐阜を経て、名古屋に入った。十月二十八日に名古屋を出発して、岡崎から豊橋へ。そして十月三十一日に豊橋を出発して、同日浜松に着き、国立第二十八銀行を行在所とした。

そして翌日、すなわち明治十一年十一月一日に、明善の治河協力社へ行幸されたのである。

巡幸日誌中の十一月一日の記録を見ると、次のようであった。

午前八時（浜松行在所）発輦、九時七分中野町村ニ至ル。天龍川アリ。源ヲ信濃諏訪湖ニ発シ、流域六十五里、橋長六百四十六間、幅二間二尺、無隻ノ長橋ナリ。明治七年、治河協力社ノ架スル所社ハ、遠江国長上郡安間村ノ民金原明善有志ヲ結合シ、設立スルに係ル。コノ日該社ニ就テ御小憩アリ。殊ニ明善夫妻ニ謁を賜ヒ、右大臣ヲシテ褒詞ヲ伝ヘ、紅白縮緬各一匹ヲ賜フ。マタ右大臣更ニ明善の宅ニ就テ夫妻ヲ慰諭セラル。十時、輿ニ御シ、天龍橋ヲ過ギ、再ビ馬車ニ御シ、見付駅ニ着セラル方ニ、十一時（以下略）

とある。

明善にとってまさに、皇恩の無辺に感泣する至上の栄誉であった。

右の文中にある右大臣とは岩倉具視で、かねてから明善の志を知る一人であった。この時の行幸の供の者を摘記すると、

右大臣	岩倉具視
参議	大隈重信
参議	井上　馨
内務大書記官	品川弥二郎
大警視	川路利良
陸軍少輔	大山　巌
宮内大輔	杉孫七郎
議官兼一等侍補	佐々木高行
一等侍補	土方久元
宮内大書記官	山岡鉄太郎

宮内大書記官　香川敬三
宮内少書記官　桜井能監
などの人々であり、明善が面識を持っている人々も多かった。
なお、民間側としては、
金原明善　熊谷三郎馬　中村熊蔵
鈴木忠四郎　鈴木五郎平　大箸藤次郎
引馬保蔵　横井伝平　安田英太郎
川島滝蔵　秋鹿邦三郎　渡辺清一
金原幸平　高柳弥平　神谷安次郎
小杉源八　金原豊蔵　鈴木治三郎　山下長蔵
などの人々が、門前に整列して奉迎した。

以上のようにして明善は明治天皇の拝謁の栄に浴したのであるが、それに至る準備段階において、次のような若干の問題があった。

明治天皇巡幸が八月三十日に東京を出発するに先だって、内務少輔の林友幸がその先発の大任を拝して、一カ月前の七月二十五日に東京を先発した。天皇巡幸に当って、事前に道路の検閲や宿舎の選定などに当るためであった。

林友幸と明善とはかねて面識もあり、したがって林友幸は治水事業に理解があった。ある日その林友幸が書記官をつれ、静岡県の役人の案内で治河協力社を訪れて、

（明治天皇は御巡幸の道すがら、治河協力社へ行幸され、明善夫婦に拝謁を許される）
という沙汰を伝えたのである。

明善は林友幸を治河協力社の奥の部屋に通すと、感激と恐懼のあまり涙を流した。

しかし治河協力社といっても、明善は全家産を献納したときに、本拠である金家邸は明け渡し、天龍川の堤の上に、わずか十畳と六畳の二部屋に台所をつけた、通称『川納屋』と呼ばれた小屋を建て、そこを治河協力社の事務所に使い、堤防工事に専念しているのだった。そして明善夫妻の住居もこの事務所の裏に小さい小屋を建てて、そこで寝起きしていた。

はじめてこの治河協力社を訪れた書記官たちは、この見すぼらしい建物を見ると、

「こんなところへ天皇が行幸されるとあっては、あまりにも恐れ多い」

とたじろいだ。その言葉を聞くと明善もどうしてよいかわからず、心中深く恐れおののいて、じっと黙っている外はなかった。すると林友幸は、

「いや、これでいいではないか。恐れ多いことはたしかだが、ここへの行幸はすでに決定していることであると、お上の思召しも民情をありのままご覧あることと拝察している。要は誠心誠意で陛下をお迎え申し上げることである。建物で仕事をしている金原さんではない。あ

りのままにこの建物の中に玉座を作らせていただこう。今更新しく修復したり、この建物以外の所へ行幸を願う必要はない」

きっぱりとそう言った。そして明善夫妻の拝謁が決まるのには、次のようないきさつがあったのだと、林友幸は語った。

「実は明善夫妻の拝謁の話が出たとき、太政官の記録官が『無位無官の平民が拝謁を許された記録はかつてありません』と言い出した。記録先例は重い意味があるから、無視できない発言であった。一同は一瞬静かになった。すると誰かが『では無官の平民が全私財を献じたという先例がありましたでしょうか』と聞いた。『いや、それはない』。『前例のない誠忠に、先前のない拝謁を賜わる、それでよいではないか』ということで、評議は決ったのです」

と林友幸はほほえみながら話し終わり、

「だから金原さん、前例のないこの手狭な治河協力社の建物で、わたしは結構だと思います。千載一遇の拝謁です。つつしんでお受けなさるといい」

そう明善をはげますと、林友幸は次の行幸予定地の検分に向って立ち去って行った。

行幸は北陸道を廻って京都へ入り、東海道へ廻ってくるのだが、浜松へ着くのは十月末の予定であった。

その日が次第に近づいてきた。金原家の一門縁者はもちろんのこと、村民はあげて奉迎の準備に忙殺された。

明善もその日に備えて精進潔斎をつづけたが、しかし天龍川治水の仕事は一日たりともゆるがせにしなかった。行幸のよき日までに、一尺一寸でも多く、天龍川の堤を繕い、測量をしようと思ったのである。

ついに行幸は十月二十八日に名古屋を出発した。しかしこの日は午後から大雨になり、二十九日の夜半には豊川が増水し、豊橋の橋が三十間ほど押し流されてしまった。そのため二十九日の巡幸は取り止めとなり、岡崎に滞在した。その間官民が協力して豊橋の橋の修理につとめ、ようやく三十日の午後に仮橋が出来上った。そこで十月三十日に岡崎を出発して、豊橋に着いた。

十月三十一日に豊橋を出発すると、同日浜松に着き、国立第二十八銀行の中に作られた行在所に入られた。

そして翌日、十一月一日に浜松を発って、治河協力社へ行幸されたのである。

明善はいつものように早く起きて、天龍川の川原に出て東天を拝んだ。

明善はすでに家の財産一切を売却して献納してしまっていたから、晴れの衣裳など何ひとつ残っていなかった。着ているのは、洗いざらしの縞木綿の着物だった。明善がそのままの恰好で治河協力社の前へ行くと、詰めている県の役人が渋い顔をして、

「金原さん、なぜお召し更えをしないのか」
「わたしにはこの着物しかありません。だからこの着物の上に袴を着用します」
「それはひどい。何とかなりませぬか。誰か紋付でも用意する者はいないのか」
と役人は一段と声を荒げた。しかし明善は、
（形の誠心よりも、心の誠心だ。心の誠心でお迎えしよう）
と心は決していたから、動揺しなかった。明善はだまったまま裏手の自分の家に戻ると、妻の玉城が膝の上に何かを拡げていた。明善が、
「それは何なのか」
「はい、せめてもと思って探しましたら、白羽二重が少しありましたから、これを襟につけようと思います」
「うむ、それはよかろう」
明善は、縞木綿の着物の上に縮の単衣を重ね着し、小倉の袴に小倉の帯をしめた晴れ姿で、妻といっしょに治河協力社の前に立った。
午前九時七分に行幸は近衛兵を先導に治河協力社に着いた。
明善は平伏して行幸を迎えた。こうして明善は妻といっしょに、天皇拝謁の光栄に浴したのである。
治河協力社の十畳の奥の間は玉座と定められて、二重の幕が張りめぐらされていた。
参議たちのお供の者は屋外に立ち、玉座の幕内には右大臣の岩倉具視一人が控えていた。
明善夫婦は大迫静岡県令に導かれ、幕内に入ると岩倉右大臣に導かれ、明治天皇の拝謁を賜わった。この時明治天皇は二十七歳、明善は四十七歳であった。
この時岩倉右大臣からお褒めの言葉が伝えられ、表彰状と、紅白縮緬それぞれ一疋、そして五十円の下賜金を賜った。
さらに岩倉右大臣は拝謁の後、治河協力社に明善をたずねて今日の光栄を祝福し、同時に、さらにいっそうの忠節をはげむようにと言葉をかけた。
このようにして拝謁はつつがなく終了した。
明善はあふれる涙を拭おうともせず、平伏して聖恩を謝した。
やがて午前十時、行幸は粛然と天龍川の堤上を去っていった。明善はその後をいつまでも拝しつづけていた。
行幸は天龍川にかかる天龍橋を渡って、東へ去られた。天皇が渡ったその天龍橋も、
（この橋もわたしの努力の一つだ）
と思うと、明善はまた新しい感激の涙にひたるのだった。
当時、平民夫婦が揃って、天皇に拝謁できるということは、破格の光栄であった。
明善のこの光栄は、全財産献納という献身的活動がもたらしたのは勿論であるが、並んで、宮中や政府内の土方久元などの高官たち推薦によるところも、また大であったことは言うまでもない。
ともあれ、明治元年の天龍川の大洪水によって、『安間村の明善』という名前が遠州一円に鳴りひびいたが、今回の天皇拝謁は、
（天龍川の義人　金原明善）
の名をいよいよ高くし、いまや遠州の明善ではなく、天下の明善になったといってよかった。
ちなみに後年、明治三十一年五月に、治河協力社の跡に行幸記念碑が建てられ、明治天皇玉座跡を記し、明善一代の光栄を止めている。その文は左の如くである。

明治十一年十一月一日　天皇陛下忝被駐蹕于治河協力社其後社廃明善特寄附之同二十五年十月七日不幸燒失乃欲永存　玉座迹茲以水利土功會之決議建焉

（五）明治十三年の改正

明善の家産献納を機会に、治河協力社は県庁の監督下で、毎年、目論見帳、仕様帳、図面などの提出によって工事を行うことになった。
そして、明善の献金や、他の社中資金の積立増殖も認められるとともに、年間工事費に残額がある場合は、これを資金に加入させてもよいということにもなった。
このように事業が軌道に乗った治河協力社は、工事費の節約と、明善が献納した五万六千円の基本財産を有利に運用することによって、明治十三年一月には、その資産は十万三千六百四十五円に達した。
差配人は熊谷三郎馬に代って横田隆平が任命され、それに寺田彦八郎、金原幸平、中村晋平、戸川深見、川島滝蔵、小野田松一郎などが、陰に陽に協力し、全力を傾注した。明善の計画した直流石畳式築堤のためには莫大な資金が必要であるので、全員が協同一致して誠意を尽くしたのであった。
しかし、このような状態は二年間ばかりで、明治十三年（一八八〇）になると、はやくも変調が到来した。それは毎年下げ渡される三万三千円の補助金が突然、とり止めになってしまったのだった。明善が四十九歳のときである。
それは明治十三年から着手した、いわゆる松方幣制改革によって、政府が財政緊縮政策を採ったからだった。
そのいきさつは次のようであった。
明治政府はその草創期に財政難の切り抜け策として、明治元年に太政官札を発行して以来、民部省札など、多くの不換紙幣を濫発した。更にこの政府紙幣に、国立銀

行発行の巨額な銀行紙幣が加わったので、インフレーションに拍車がかかった。そのため投機が流行し、金利が高くなり、国民経済が非常に不健全化してきた。

そこで明治十三年十月に松方正義が大蔵卿に就任すると、不換紙幣を整理してインフレを克服し、近代的兌換制度を確立するとともに、経済の健全化を図ったのである。

そのためには国庫支出を節約して健全財政を確立し、紙幣償却の資としようとしたのである。明治十三年四月の太政官布告第十六号と、同年十一月の太政官布告第四十九号によって、地方税制が改正されたのは、この緊縮政策の重要な一部であった。この中に河川堤防修繕費が入っていたのである。

これまで明治政府は、明治六年に全国の河川に等級をつけて、その堤防費については、一、二等河川は官費、三等以下は民間の費用で賄うように決めた。しかし明治九年にはこの等級を廃止した。

天龍川の堤防工事は、江戸時代には幕府の直轄であった。したがって明治維新後も政府が工事費を支出し、明治九年の等級廃止後も工事費は政府負担であった(すなわち明善の治河協力社が受けている二万三千円の補助金は、静岡県からの補助金ではなく、政府からの補助金が、県を通して交付されていたのである)。

しかし明治十三年十一月の太政官布告第四十八号による地方税制改正によって、

(今後、河川改修費は地方税によって行うこととする。したがって官費の下げ渡し金は明治十四年度より廃止する)

ということになってしまったのである。すなわちこれまで政府負担であった天龍川堤防工事費も、政府負担ではなく、地方税による(すなわち静岡県負担)ことになったのである。したがって明善の治河協力社の受けていた毎年の二万三千円の政府からの補助金も、明治十三年をもって打ち切りとなってしまったのである。

(わずか三年でまたこんな目に会うのか)

と明善はがっくりと肩を落した。

かくして明善が全財産を供出までして獲得した政府からの補助金も、不運にもわずか三年間受けただけで打ち切られ、治河協力社の運営はまたまた大きな支障を来すことになってしまったのだった。

しかし天龍川治水の明善の決意は固く、

(政府がどうであれ、わたしは一人でもやりとげるぞ。他を頼まずだ。何も考えまい。これは天命だ。わたしは人事はつくした。今となってはこの天命は受け入れざるをえない。天がわたしに『明善よ、お前は一人で遂行しろ』と命じているのだ)

と明善はますますその決意を固めるのだった。

政府はこの明善の心中を察したのか、最後の明治十三年分の補助金を支給するときには、二万三千円に二万七千円を加えて、合計五万円を一時金という名目で、県を通じて下げ渡した。

なおこの五万円が下げ渡されたので、明治十四年十月末では、治河協力社に積み立てられた資金は、十五万六千八十五円に達した。

なお、この河川改修費負担が政府から静岡県へ移行するにともない、天龍川の堤防工事自体も、政府から静岡県に移り、静岡県が直轄することになった。

その結果、堤防修築事業は静岡県の事業となり、県庁自らがこれを直営することになった。

したがって治河協力社は堤防修築事業から手を引き、河身改修のみに限定して治河協力社が請負うことになったのである。

明善は補助金も失った上に、その事業も縮小されてしまったのである。明善は五十歳になっていた。

このように明治十三年は補助金の打切りなどをはじめ、治河協力社にとっては危機ともいうべき年であった。

しかし、明善は挫けなかった。危機が迫れば迫るほど、明善の闘志は燃え上った。

明善はいっそうの治河協力社の同志的団結を強化するために、治河協力社の組織を立て直し、河身改修に邁

進する決意を固めた。

そこで明治十四年十月三十一日に、従来の諸規程を改正して、新たに、

治河協力社緒言

治河協力社規則二十八条

職制並びに事務章程六款

を作成し、組織、人事などを刷新した。

この中では治河協力社の目的を、

(天龍川の二俣村から掛塚村までの河身を改修することを将来の目的とする)

と明確にした。

そして人事面においても刷新をはかるため、いったん全職員を解雇し、すぐまた新たな職員を任命して、新陣容によって再出発した。

社長はもちろん明善であるが、幹事には熊谷三郎馬、修築係長に川村矯一郎、会計係長に寺田彦八郎などが任命された。

(六) 巳三郎を養子にする

明治十三年六月に明善は、浜崎巳三郎という少年を養子として迎えた。

浜崎巳三郎は、二条家の公家侍である浜崎光節の三男であり、明治二年生れであった。したがって明善の養子

となったときは、まだ十二歳の少年であった。

この頃明善は上京すれば、牛込筑土八幡前町の二条家の邸内に住む、川村正平のところへよく泊っていた。川村正平が、広い二条家の邸内にある家の一棟を、借りて住んでいたのである。

そこで明善は自然と、二条家の使用人である浜崎光節とも親しくなった。そしてその三男の巳三郎が眼にとまり、十二歳の少年ながらその利発さが気に入って、巳三郎を養子にする話が成立したのである。

明善には、すでに、明徳、喜一、有慶という、三人の子供があった。それなのに、巳三郎を養子としたのには、ある理由があった。

それは、長男の明徳にみよしという女の子が生れていたが、その孫娘のみよしの婿に、巳三郎をしようと思ったのである。

孫娘のみよしは明治十年生れなので、この時まだ四歳という少女であったが、明善はその孫娘のみよしと、巳三郎とを、将来結婚させようと考えてのことであった。

これから明善の事業はますます進み、多方面にわたるであろう。そのためには人材が必要である。その人材集団の核は血縁関係の人材で固める必要があるという、明善らしい先見性のある深望遠慮から発想されたものであった。

そのため明善は明治十三年六月に遠州へ帰るに当り、巳三郎を連れて帰り、安間村の金原家で養育した。

明善の次男の喜一と巳三郎は一つちがいという、同じ年頃であったので（喜一は明治三年生れ、巳三郎は明治二年生れ）、二人は金原家内では兄弟のようにして育てられた。そして明善は自分の志を継ぐ者として、巳三郎を育て上げるのをたのしみにしていた。

後日のことであるが巳三郎は明善が期待しただけあって、成長するにしたがって、よく明善の事業を援けた。巳三郎は明治二十六年までは金原事務所で金原林の植林に当っていたが、明治二十六年に金原林事務所を下りて東京に行き、東里為替店に勤務した。そして明治二十七年十月十四日に、予定されていた明善の孫娘のみよしと結婚した。そして以後、金原系事業の中心人物として活躍するのであった。

（つづく）

たまごの殻（二）

千坂精一

八

祝宴を終えると、治憲はさっそく改革に着手した。

まず、竹俣美作と荏戸九郎兵衛のほかに菁莪館出身の若い下士たちを選んで、その執行役に命じた。

もちろん、文四郎も木村もそのなかに入っていた。

治憲は、執行役全員を大広間に集めると、

「改革に当たり、わたしの基本理念を述べておく。抑々藩は、藩主のためにあるものではなく、領民の合意を実行するための機関である。従って、わたしはその執行機関の責任者であり、そのほうたちは執行者に過ぎぬのじゃ。じゃによって、これから改革をすすめてゆくにあたり、たとえ僅かでも私する不埒者が出たときは、容赦なく処断する。わたし自身も含めてのことじゃ。よいか、判ったな。このことしかと肝に銘じておくように」

とまず厳しく申し渡した。

文四郎は、これまでこんな強硬な治憲の態度に接したことはなかったので、思わず緊張した。

治憲は、まず執行役たちの心を引き締めておいてから、改革の要点を説いた。

「改革は、藩を富ませるのではなく、領民を富ませることを主眼にせねばならぬ。人は誰しも張り合いがなくては働かぬものじゃ。ただ締めつけるだけでは改革はできぬ。よいな。ここが肝腎と心得よ」

文四郎は、若年の治憲が人情の機微を弁えていることに感服した。

治憲は、執行役たちにこの二つの要点を充分理解させておいてから、熟慮してつくり上げた改革の腹案を披瀝した。

まず、藩士たちについては、

佳日祝日の行事、役人たちのあいだの形式的な挨拶や仕来りなどはすべて廃止させる。

つまり、虚礼の全廃である。

総登城総下城の慣習を取り止めて、執務の必要ある者だけを部署に適した刻限に登城させ、執務を終えたらただちに下城させて、余暇を生産的な仕事に従事させる。

当時としては、画期的な勤務制度の導入である。

文書を取扱う部署の者たちには、文章は意味が判ればよいとして、修飾語はいっさい使わず、簡潔にするよう指示して、美辞麗句を思案する無駄な時間を省かせる。

これは、現在の物書きにとっても耳が痛い教訓である。

組頭が配下の者を指導する方法は、理屈を言うだけではなく、よくその趣旨を説明してみずからやって見せて手本を示し、充分に判らせたうえでやらせるようにする。

自分にできないことは考えても無駄なことを認めて、面子に拘泥わらずできる者に協力を求めるようにする。というように改めさせる。

また、農業政策については、

領内はあまり米作に適さないから、開墾地には自然条件に適合した漆、楮、桑、青苧、紅花などを植える。

勤労意欲を高めるために、あらかじめ苗の数量を割り当てておいて、それ以上植樹した者には報奨金を出す。

その財源は、植え残した者から罰金をとって充当する。

そして、産業政策については、

これまでの原料輸出を止め、加工して製品にすることで地場産業を発展させ、収益を上げるようにする。

青苧は越後小千谷では縮織物になり、大和奈良では晒や蚊帳になっている。紅花は京、大坂で口紅や友禅の染料になっているし、楮は水に溶かして漉くと紙になる。

加工技術者たちを家族ぐるみ高額の報酬で迎え、藩士の家族も手伝って製品化し、米澤の特産品として売り出せば、諸経費を上回る付加価値を得ることができる。

また、老人や子供を動員して、水田で食用の真鯉を飼育させれば、池とちがい撒き餌の必要がなく手がかからないし、鯉の糞は稲の肥料になるので一挙両得になる。

養殖した鯉は売り捌いて利益配分してやれば、窮乏生活で肩身の狭い老人や子供たちの立場もよくなる。

小野川温泉は塩分が多いから、湯を乾かして塩を採る。

さらに、生産品を他国へ販売するについては、これまで取引していた江戸や大坂の豪商を利用しないで領内の中小商人たちに取扱わせ、生産から販売にいたる全収益を領内で分配するという共同体をつくろうと考えた。

それらは、可能な限り貪欲に改革して徹底的に利益を追求し、他国に吸い奪られるのを最小限に食い止めようとする、合理的な計画であった。

治憲は、天性の事業家といえよう。

文四郎は、敬聴してその卓抜した経営感覚に驚嘆した。

こうした治憲の発想の原点にあるものは、米澤藩に属する士農工商すべての者たちへの深い愛情であることを感じ取った文四郎は、この計画を忠実に実行してゆけば、改革はかならず成功すると確信した。

話は逸れるが、ちょうどこの頃幕府では、田沼意次が側用人に抜擢され、やがてその才覚をかわれて老中にまで伸し上がってゆく過程で、これまでつづいてきた農本政策を商本政策に変えることによって高度経済成長をつづけるいわゆる《田沼時代》に入ってゆくのであるが、その田沼意次ものちの天明三年の大飢饉によって破局を迎え、政敵松平定信に足許を掬われて失脚してしまう。

華やかな《田沼時代》のあとを受けて、老中に登場した八代将軍吉宗の孫の磐城白河藩主松平定信は、さっそくのちにいわれる江戸三大改革のひとつ《寛政の改革》で幕藩体制の危機を乗り切る粛清の緊縮政策に着手するのだが、功を焦るあまり目的のためには手段を選ばぬその施策は冷酷無比で、非情に徹した容赦ないものであったために、世間の顰蹙を買って支持が得られず、結局みずから失政を認めて退陣してしまったのである。

治憲の改革が、愛情と希望を与えることを基本にしたものであるのに対して、松平定信のそれは暗く陰湿で、用捨ないものであったことが失敗の原因であった。

話をもどす。

こうして、米澤藩の藩政改革ははじまったが、しかしとんとん拍子にはすすまなかった。たとえ貧しくとも、それなりの現状に甘んじて変化を好まぬ者の多いのは、いつの世もおなじである。

守旧派の重臣を支持する藩士たちは慣習や対面に拘泥わって執行役のまえに立ち塞がり、文四郎たちを狙う闇討ちが横行して、一触即発の危機もたびたびあった。

文四郎たちは、改革に反駁してその実施を妨害する守旧派の首領千坂對馬と色部修理に嫌悪と遺恨を深めていったが、しかし前途に希望を抱いて挫けぬ彼らは、いかに反駁され妨害されようとも隠忍自重して、牛歩ながらも辛抱強く改革をすすめていったので、その成果は徐々に現われはじめた。

文四郎は、改革を実施してゆく過程で困難なことに遭遇すると、いつもしずのことを想い出して気力をとり戻した。といってもしずと再会できる希みはなかったが、しかし、しずもこのおなじ空の下のどこかにいるのだと思うだけで、生きる張り合いになっていた。

そうは思いながらも、ときには未練がましくしずが離されていってしまったことの寂しさに滅入ることもあったが、そんなとき文四郎は、

(お屋形様のご心労に較べれば、しずと逢えぬ寂しさなどは些細なことだ)

と打ち消すことによって、己れ自身を奮い立たせた。

九

執行役たちの倦まず、弛まぬ地道な努力がついに堅固な旧弊を突き破って浸透し、藩士や領民たちに漸く理解され協力も得られて改革が順調に軌道に乗りはじめた頃になって、米澤藩の屋台骨を揺るがす大事件が起こった。

十一月に〔安永〕と改元される明和九年（一七七二）二月二十九日、目黒村行人坂の出火がその前兆であった。

この火事は折からの烈風に煽られてまる二日間燃えつづけ、目黒、芝、麻布から神田、浅草、千住にいたるまでの広範囲を紅蓮の炎で舐め尽くした。

米澤藩は、桜田藩邸と麻布中屋敷を同時に焼失した。

治憲はすぐに国家老色部修理と中之間年寄北澤五郎兵衛を江戸へ送り、自身は三月下旬に遠山村で〔籍田の礼〕を行ったあと、五月中旬に参観出府して白金三葉坂の下屋敷に入ると、桜田、麻布両屋敷の再築を指図した。

翌安永二年四月に参観を終えて屋敷の普請完成まで交代を留め置いた江戸家老須田伊豆と、色部、北澤の両名を伴って帰国した治憲は、さっそく五十騎組に中断していた小野川村と吹屋敷村の荒地開発手伝いを命じた。

この頃はもう改革思想が浸透していて、藩士とその家族が農業や産業の手伝いに従事するのは当然であった。

そして、六月二十七日――。その大事件は起こった。

この日、治憲は竹俣と荏戸から改革進捗状況の報告を受けることになっていたので、定刻より早目に表書院へ出て、書類に眼を通しながら二人の出仕を待っていた。

だが、定刻を過ぎても二人は現われなかった。

「文四郎。美作と九郎兵衛はいかがいたしたか」

「遅参は解せませぬ。只今執務部屋を見て参りまする」

文四郎は、執務部屋へ通ずる長い廊下を急ぎながら、

（奇態なことがあるものだ）

と思った。それが悪い予感であった。

執務部屋の周辺は、様子が違っていた。いつもは若い執行役たちの活気に満ちた意見交換の声が廊下まで筒抜けのはずなのに、今朝はひっそりと静まり返っていた。

（誰もおらぬのか）

文四郎は、板戸を開けて内部を覗き、ぎょっとした。

そこには、千坂對馬、色部修理、須田伊豆、芋川縫殿、清野内膳、平林藏人、長尾兵庫らの重臣たちが揃っていた。

「文四郎か。よいところへ参った。われら七人火急にお屋形様にお目通りいたしたい。即刻取り次ぎいたせ」

千坂が、そう低い声でいった。

「只今、竹俣様と荏戸様をお呼びでござりまする」

「お屋形様と内々の談合があるゆえ、竹俣、荏戸の両名と近習たちは出仕を差し止めた。早々に取り次ぎいたせ」

赭ら顔の須田が、いつもの大声で怒鳴り散らした。

「只今」

文四郎は、反射的に踵を返して治憲の許へ急ぎながら、

（これは徒事ではない）

と察した。そして、

（面会を強要している重臣たちが近習たちの出仕を差し止めたということは、丸腰のお屋形様と対決する企みなのだ。何事かは判らぬがお屋形様に万一のことがあっては取り返しがつかぬ。昨晩は宿直のために出仕差し止めを免れたのをさいわい、同志たちの分も一身に背負い一命に代えてもお屋形様をお守りいたさねばならぬ）

咄嗟にそう決意した。

表書院にもどった文四郎に、治憲は、

「竹俣と荏戸はいかがいたした」

と性急に尋いた。

「おふたかたと近習たちは出仕を差し止められましたそうにて、執務部屋には千坂様をはじめ七家のご重臣がたがお揃いでござりました。火急のご用向きとかでお屋形様にお目通りを願い出ておられまする」

「對馬らが改革執行役たちの出仕を差し止めておいて、わたしに会いたいと申しておるのか」

「なにやら徒事ならぬ様子でござりまする」

「うむ」

「いかがいたしましょう」

「是非にも会いたいと申しておるのじゃな」

「はい」

治憲も、徒ならぬ気配を感じ取ったようであった。

「お会いにならぬほうがよろしいかと存じまする」

「いや、避けてはなるまい」

「なれど、お屋形様――」

「このままではいずれ対決せねばならぬときが参る。わたしが改革を推し進めるからには避けて通れぬことじゃ。所望されたが天の時と心得て会うといたそう」

「はっ」

「ここへ通せ」

「畏まりました」

文四郎は、執務部屋の重臣たちに治憲の意を伝えた。

重臣たちの緊張した表情を文四郎は見逃さなかった。

（ひょっとして、竹俣様と荏戸様は暗殺されたのではないだろうか。とすると、お屋形様の御身も危ない）

文四郎の胸に不吉な予感が兆した。

文四郎は、七人の重臣を治憲の待つ表書院に案内すると、不測の事態に備えていつでも飛び出せる距離を素早く目測して治憲の斜め背後に控えた。

千坂對馬が、文四郎を眼に止めて治憲に、

「おそれながら、お人払いを願わしゅう存じまする」

と申し出た。
（事と次第によっては不測の事態が起こるやも知れぬ）
文四郎はますます危険を感じた。
「文四郎、退がっておれ」
振り向いた治憲に動揺の様子は窺えなかった。
文四郎は、やむなく次の間に退がったが、いつでも襖を蹴破って飛び出せるよう緊張して待機した。
複数の者が、治憲の前に膝行する擦り音が聴こえた。
「さっそくながら、これをご披見願わしゅう存じまする」
須田伊豆の声であった。治憲に書状を手渡したらしい。
「分厚いものじゃな。後刻ゆるりと目通しいたす」
「いいや。この場でただちにお読み下されませ」
治憲を促しているのは芋川縫殿であった。
このとき、治憲が重臣たちから突き付けられた書状はのちに『七家訴状』とよばれるもので、七重臣が連判した四十五箇条からなる長文の訴状であった。
その内容は、治憲を非難することからはじめている。
あらましを記すと、
治憲は学問を好み、武術を大切にし、藩政にも熱意があって初めのうちはよろしかったが、正系でなく他家から養子にきたことと若年であることから、側近の者たちに振り廻されてだんだん筋違いなことをするようになり、賞罰なども判然りしなくなってきている状態である。
初入部後これまでに三回帰国されているが、そのたびに慣習を変えられるので、藩士たちは戸惑っている。
食膳は一汁一菜、衣服は木綿などはまことに小さなことに過ぎないし、〔籍田の礼〕以後は却って旱魃や長雨になり穀物も菜も大根も高価になってしまっている。
改革した種々の新法は上杉家の家風にまったく合わないし、大倹はなんの成果も挙げ得なかったではないか。
開墾に多数の藩士を協力させ、小野川新田開発には商人吉兵衛指揮のもと数百人の五十騎組をはじめとする藩士たちを動員して耕作に当たらせたが、これからは鹿を馬としてお使いになるおつもりかどうか伺いたい。
また、教育にしても態々江戸から細井平洲を招いているが費用がかかるばかりではないか。藩士の俸禄借り上げ（減給）がつづき譜代の家臣への支払いもできないというときに、原方屋敷二百軒分の半知借り上げ（二分の一減給）に相当する額よりも多い費用をなぜ細井平洲のために遣わなければならないのか。細井平洲を招いたからといって風俗が改まるというものでもないし、結局祖先を祀り敬うという精神に戻るだけのことではないか。
などといって批判している。
そして、つぎに鉾先を補佐役竹俣美作に向けている。
政治の形態は三家老制（千坂、色部、竹俣）を採っている。

いるが、改革政治は竹俣美作を中心とする小姓頭や近習の者たちによってなされ、家老制は無視されている。
竹俣美作は、幼少の頃より悪智慧にすぐれ、口先ばかりでその執行も真似事に過ぎず、まったく誠意がない。
彼が著書『富国談』で述べている古人は下への追従がなくてはならぬ、という思想は理を曲げた文談である。
そういう竹俣美作の思想に共鳴している荘戸九郎兵衛、木村丈八、志賀八右衛門、佐藤文四郎など竹俣一党の下級武士たちだけが認められて出世をし、藩政に参加するということは賞罰の偏向であり、片落ちも甚だしい。
また、竹俣美作の執行は彼が誅殺した森平右衛門の政策に似ている。安永元年から始めた藩士たちの開墾や普請の手伝いは森平右衛門の政策とそっくりだし、美作と細井平洲や最上領の開発商人吉兵衛らとの関係も当時の森平右衛門と京の佐々木右京の関係に酷似している。
さらに美作は、森平右衛門とおなじ下情を知るための『沙汰聞』を城下に置いているが、極めて人気が悪い。
竹俣美作は、森平右衛門以上の出頭人で悪人だ、という評判が高い。
などと並べ立てて、竹俣美作を弾劾している。
そして、
治憲と竹俣の改革政治は百年の藩政を混乱に陥れてしまっている。罪人や凶事が続出し、城下に狼が現われたりして領民に不安を抱かせているのがその証拠である。
治憲以前の藩政は十のうち八つは国柄に合っていたが、改革政治は一つはよくてもあとの九つは害になっている。綱憲時代は政治も風俗もよく、吉憲時代は厳格を好んで取締りがよく、宗房時代は物が豊かで概ね平穏であった。そして、重定の代になって前期は家風の崩れもなかったが、森平右衛門が出頭人になってからは大いに乱れてしまった。今日はそれ以上に藩政が判然りしない状態にある。
仙台藩や會津藩も出頭人政治によって失敗したことがあるが、いずれも古法の復帰によって立ち直っている。
といって、改革政治を縷々批判し、攻撃したあとで、最後にこれに対して即刻採るべき手段を挙げている。
それは、改革政治執行の中心人物である竹俣美作をただちに隠居させると同時に、美作一党の側近たちをもすべて退役させて、藩政を本来の質素で律儀な越後以来の国風に戻せ、ということであった。

十

長文の『訴状』を読み終えた治憲は、落胆して嘆息した。苟も藩政を与る重臣たちが差し出すからには『建白書』であるべきはずなのに、これは建言ではなく、改革

政治に対する七重臣の単なる憎悪の羅列に過ぎなかった。

治憲の不快感は、蒸し暑さのせいではなく、眼の前に連坐している頑迷固陋な七人への生理的嫌悪であった。

だが、次の間で耳を欹てて様子を窺っている文四郎には、書状の内容が判ろうはずはなかった。

「そのほうたちの申す趣はあい判った。しかしこれは藩にとって大事のことゆえ、熟慮したうえで追って沙汰いたそう」

「それはなりませぬ」

須田伊豆が、即座に否定した。

「この場でお屋形様のご存念を承りとうございまする」

「そのためにわれらは連座いたしておりまする。お答えあるまではこの場を動きませぬぞ」

芋川縫殿が凄んだ。

「さればとて、美作のことなどは吟味いたさねばならぬ」

「竹俣一党とわれらとは相容れぬ関係にありますことはご存知でございましょう。藩政に与る重臣のあいだで意見を異にいたしましては藩の統制がとれませぬ。このさい竹俣一党を退けるか、はたまたわれら七人を辞職させるか、お屋形様のご存念をお漏らし下さりませ」

そう須田伊豆に詰め寄られて、治憲はやむなく、

「そのような大事は大殿様のご決断を仰がねばならぬ」

「大殿様は、すでにご隠居の御身であらせられまする」

須田伊豆が反駁した。

「われらは、お屋形様のご存念をお伺いいたしておるのでございまする。是非にもお漏らし下さりませ」

芋川縫殿が追い討ちをかけた。

「そうは参らぬ」

「なにゆえわれらにご意中をお漏らしなさらぬのか」

須田伊豆が激しく詰め寄った。

「大殿様にお伺いいたす」

「なりませぬ。われらはお屋形様に伺っておりまする」

芋川縫殿が開き直った。

煮え切らぬ治憲の態度に、須田と芋川はいきり立った。

君臣間の葛藤は、すでに二刻あまりもつづいていた。

文四郎は、いつでも飛び出せるように襖を細目に開けたが、激昂している重臣たちには気付かれなかった。

「このうえの堂々巡りはもはや無益でございまする。さきほどそれがしがお質ししたわれらか竹俣一党かどちらをお採りなされまするか。しかとご返答を承りまする」

七重臣の強訴の目的はそこにあった。彼らは小藩育ちの治憲を見縊り、養子の身で上杉家累代の門閥を退けることなどできるはずがないと高を括っているのだった。

「美作らの所業をよく吟味したうえで、返答をいたす」

「なりませぬ。ご即答下され」

「即答はできぬ」

「ならば、われらはことの次第を公儀へ訴えまするぞ」

「なにを申す」

一瞬、治憲の貌が蒼白に変わった。

「公儀のお裁きを受けると申しておるのです」

須田伊豆の高飛車な態度に、治憲は狼狽した。

訴え出れば、幕府はことの理非を糺すより先に《お家騒動》と極め付けて、上杉家を取り潰すであろう。

外様大名は常に不安定な存在だったから、聊かでも幕府に付け入られる問題を起こしてはならなかった。

治憲は、須田伊豆から外様大名の弱点を衝かれたのだ。

そうまで言い切る須田伊豆の脅迫行為に、治憲は逆上し、怒り心頭に発して思わず立ち上がった。

「お屋形様。いずれへ参られまするか」

芋川縫殿が咎めた。

「大殿様のお指図を受けて参る」

「なりませぬ」

須田伊豆が物凄い形相で睨みつけた。

「お逃げ遊ばすとは、卑怯でござる」

芋川縫殿が、そう言うなり治憲の着物の裾を掴んだ。

「離せ。離さぬか、縫殿」

文四郎は、その声を聴くなり襖を蹴って飛び込んだ。

そして、素早く芋川縫殿の手首を手刀で打ち据えた。

「無礼でござろう」

そう叫ぶなり文四郎は、治憲の裾を離し痺れた掌を庇って見上げる芋川縫殿の前に立ち開った。

重臣たちが、文四郎の突然の出現に愕いて総立ちになったときには、もう治憲に従って廊下へ逃れ出ていた。

「お屋形様。お急ぎなされませ」

二の丸の重定の許へ急ぎ去る治憲の足音を背に聴きながら、文四郎は仁王立ちになってその場に踏み留まった。

それから重臣たちとの無言の睨み合いが四半刻もつづいただろうか。文四郎が、背後に人の気配を感じて振り向くと、なんと治憲が引き返してきていた。

(お屋形様。なぜお戻りなされました)

ふたたび表書院に入った治憲を、文四郎は訝った。

重臣たちは治憲の姿を認めると一斉に立ち上がった。

文四郎は殺気を感じて素早く治憲を庇った。真逆のときは脇差しを抜いて重臣たちと刺し違える覚悟であった。

「お逃げになるとは卑怯でござりまするぞ」

須田伊豆が烈しい口調で詰った。

「逃げたのではない。わたしの一存では計らえぬゆえ、大殿様にご出座をお願いして参ったのじゃ」

重臣たちは治憲の言葉に一瞬怯んだが、芋川縫殿が気を取り直してなおもなにか言おうと治憲に詰め寄った。

そのとき、近侍を従えた重定が部屋へ入ってきた。

「この有様はなにごとじゃ」
事情を知った重定の一喝に、重臣たちは平伏した。
「對馬。屋形は若年と雖も上杉家の当主じゃぞ。屋形を軽視する態度は赦さぬ。不服の儀があらばこの儂に申せ」
重定の語気は激しかった。
叱責を受けた千坂對馬は、黙したまま重定に頭を下げて立ち上がり、重臣たちを促して表書院を出て行った。
他の六人も、硬い表情で千坂に倣って立ち去った。

十一

翌日、文四郎は治憲に命ぜられて、『七家訴状』の実否を糺すため告訴されている竹俣美作と荏戸九郎兵衛の出仕を差し止めて、七人の重臣たちを聴問に呼び出す手配をしたが、重臣たちは全員出仕しなかった。
治憲は、一人一人に使者を出して出仕を促したが、七人とも申し合わせたように病気と称して辞退した。そのため米澤藩は、この日一日政務が停滞した。
やむなく治憲は、翌二十九日『訴状』の真偽を質すために証人を喚問した。
まず、監察職大目付、中之間年寄、使番の面々を呼び出して真相を究明したが、彼らは異口同音に竹俣美作の行状を否定した。
つづいて、三手宰配頭、三十人頭を呼び出して尋問したが、結果はおなじであった。
こうなると、『訴状』は竹俣美作を失脚させて治憲の身辺から改革派一党を除こうとする七重臣の陰謀であることが明白になった。
治憲は裁決に苦慮した。讒言と愚弄で迫り受け入れぬときは公儀へ訴える。と脅迫するにいたっては明らかに謀叛であった。謀叛人は重罪に処さなければ示しがつかぬし、藩主の威光にも関わる。養父重定からは、
「屋形の思うままに裁くがよい」
と一任されてはいたが、しかし、七家はいずれも累代功労のあった門閥の子孫たちであるから、処罰すれば重定が傷心するに違いなかった。
(だからといって、このまま捨て置くわけにはゆかぬ)
治憲は懊悩し、輾転反側した。誰も援けてはくれない孤独の暗い洞窟の中を長いあいだ模索しつづけ、彷徨い歩いたすえに、ふと前方に微かな明かりを見出だした。
それは、養子入りのときに生家の家老三好善太夫が、
「決して恥辱を遺すようなことがあってはなりませぬぞ」
と諭してくれたのを、思い出したことであった。
治憲は、この三好善太夫の言葉に奮起して思わず、
「断乎として処罰する」
と叫んだ声は、迷いを振っ切り、自信に満ちていた。
文四郎は、治憲の側を片時も離れずに身辺警護していたので、その苦悩の様子は手に取るように判っていた。
(お屋形様を苦しめる悪臣どもめ)
文四郎は、七人の重臣たちを憎みつづけた。
なかでも、主謀者とみられる長身痩躯の筆頭家老千坂對馬のあの能面のような冷たい貌を思い浮かべるたびに、新たな怒りに全身が震えた。
だから、治憲の決断の声を聴いたときは、
(お屋形様。よくぞご決意なされました)
と縋り付きたい衝動に駆られた。
文四郎は、凛々しい治憲の貌を見詰めた。
そして、
(禍根を遺さずご存分にご処分なされませ。元凶の千坂對馬と寝返った色部修理は言語同断、極刑になされませ)
そう心の中で叫んだ。

十二

七月朔日払暁。治憲は竹俣美作、荏戸九郎兵衛ら出仕を差し止めておいた改革執行役をはじめ、高家、六老、城代、侍組仲人、中之間、大小姓、三手宰配頭、三十人頭、伏襲頭、勘定頭、江戸納戸頭、隅御藏役頭、武具藏役頭、小納戸頭、台所頭、厩頭、金山奉行、猪苗代三組、本手明、新手明、奉行付同心、江戸家老同心、段母衣、百挺鉄砲組、弓組、大筒組など千人に垂んとする家臣に急登城を命じて、国境にいたる要所の警備に就かせた。
本丸三門は大小姓、中之間、手明を四人一組にして配置し、二の丸四門は三手物頭に組中を総動員させて出入りを厳重に点検させた。
城下は三手物頭二人に奉行同心二十人を与えて巡回、逃亡者を防ぐ国境の固めは新宿、最庭、中山、小瀧、板谷、監地平、綱木の各口にそれぞれ三手五人、伏襲一人、町奉行同心一人の計七人、また大瀬口には三手四人、伏襲一人、町奉行同心一人の計六人、玉川口には三手三人、伏襲一人、町奉行同心一人の計五人が配置された。
このほか、近国へこのたびの訴状事件の風評を探索するための密偵が放たれ、重臣七家へは物見として三手組から三人ずつ計二十一人が差し向けられた。
異変を感じた城下の商人や農民たちは、一斉に門戸を固く鎖したので、表通りはいうに及ばず、路地裏にいたるまでまったく人影がなくなって静まり返った。
じりじりと照りつける灼熱の陽射しに晒された戒厳令下の米澤領内は、不気味な雰囲気に包まれた。
文四郎は、この日仏暁から治憲の指示で広い城内を彼方此方奔走しつづけた。強いられた迅速な行動と緊張の連続は伝えきいた往時戦乱の世の合戦場を彷彿させた。
警戒態勢完了を待って治憲は、国家老竹俣美作、小姓頭荏戸九郎兵衛、それに高家、六老、城代、宰配頭などを表書院に集め、今宵訴状事件を裁決する旨を告げた。

七家へ召喚の使者が向かったのは、申下刻であった。

千坂對馬へは上使二人、附副八人、与力十七人の二十七人。色部修理以下六名にはそれぞれ二十六人である。

厳戒の警備態勢といい、使者の人数といい、それはもはや訴人召喚というより謀叛人逮捕の構えであった。

七人の重臣たちは、上使の二十数人に護送されて城に到着すると、本丸の門を固めている大小姓、中之間、手明たちに迎えられて冠木門の潜りから通され、そこで従者たちは留められて許された小者一人が従い、三手組平番四人ずつに付き添われて玄関に入った。

そこには町奉行が二人出迎えていて、両刀と懐中物を取り上げられ、小者を残して単身で式台三之間に案内されると、屏風囲いの中に一人ずつ隔離されて付き添ってきた四人に左右から警固され、裁決のときを待った。

治憲は、戌刻に表書院へ出座すると七重臣を一人ずつ呼び出した。

治憲の背後に文四郎ら近習たち、左手前に荘戸九郎兵衛ともう一人の小姓頭、一段下がった右側に国家老竹俣美作、支藩家老、宰配頭、左側には城代、郷村次頭取、奥取次、その後ろに三十人頭がずらりと並んだ。

初めに呼び出されたのは筆頭家老千坂對馬であった。

正面に町奉行二人、右側に中之間、左側に大小姓がそれぞれ八人ずつ、後方に捕手が三人控えて取り囲むそのなかに、千坂は附副四人に両脇を固められて着座した。

その千坂に、治憲は裁決を下した。

「国家老千坂對馬高敦。そのほうこのたび申し出た趣について横目どもを召し出して相尋ねたるところ、政事を蔑ろにしていることもなく、美作姦佞の儀もこれなく民の帰服も相違なきよし、然れば己が非念をもって政事を謗り讒を構え、従党を結んで君を要する仕形不届きのいたりにつき、重き罪科にも申し付くべきところなれどその段差し免じ、隠居閉門知行のうち半知を召し上げる」

治憲の声は、部屋の隅々にまで凛々しく響いた。

文四郎は、治憲の意外な裁決に愕き、

(お屋形様。そのご裁決はあまりにも軽過ぎまする。謀叛の首謀者なるゆえ、切腹をお申し付けなされませ)

そう心の中で叫んだ。

千坂の口が一瞬綻んだのを文四郎は見逃さなかった。

(お屋形様を嘲笑う不謹慎は許せぬ。なにゆえに切腹をお申し付けなさらぬのか)

文四郎は、逆上した。

つぎに呼び出されたのは、江戸家老須田伊豆満主であった。

治憲は、千坂と同様の不届きを申し渡し、

「ことに徒党の本人も同然たる者にて、国家の騒動を企て不届き至極、不忠の者につき、賓蔵において切腹、苗字断絶」

と裁決した。

次席家老色部修理照長は、千坂と同様、

——隠居閉門、半知召し上げ。

侍頭芋川縫殿延親は、須田と同様、

——賓蔵において切腹、苗字断絶。

あとの侍頭長尾兵庫景明、清野内膳邦秀、平林藏人正在の三人は、いずれも、

——隠居閉門、三百石公収。

であった。

この裁決に準じて、須田の嫡男圖書、二男富彌、三男八十馬の三人は《押込》、芋川の父九兵衛正令と平林の父爰涼正村はともに隠居の身ではあったが、罪人の父親ということで《囲入》を仰せ付けられ、五人はもとの芋川長屋の中に建てられた囲みのなかに押し込められた。

十三

治憲の思い悩んだあとの英断によって米澤藩を震撼させたこの事件はともかく大事にいたらずに終結したが、文四郎には治憲の裁決がどうしても納得いかなかった。

謀叛人の首領と目される千坂對馬とその補佐役だったであろう色部修理が隠居閉門半知召し上げで、たとえ治憲に訴状を突きつけたときに過激な挙動があったとはいえ須田伊豆と芋川縫殿が賓蔵において切腹苗字断絶とは、治憲らしからぬ片落ち裁きに思われてならなかった。

しかし、まさか近習の身で主君に詰問するわけにはゆかず、考え倦ねたすえに事情を知悉しているに違いない気さくな荘戸九郎兵衛に思いのたけを打ち明けてみた。

荘戸は、

「お屋形様のご裁決は、間違ってはおらぬ」

そう言って、明かしてくれた話はこうであった。

千坂對馬は、養家を継承した治憲がいち早く窮乏に喘ぐ米澤藩を再建させるため改革を提唱したその積極果敢な行動力を頼もしく思った。自分も藩政に与る者としてこれまでたびたび先代重定に改革の必要性を説いてきたのだが、森平右衛門誅殺事件以来無気力になった重定に躱されて無念遣る方ない思いを抱きつづけてきていたので、若き英才を藩主に迎えた欣びはひとしおであった。

また、對馬自身も門閥の廣居家から千坂家へ養子に入っていたので、おなじ立場の治憲に親近感を抱いた。

だから對馬は、治憲の藩政改革を援けてかならず成就させようと心に決めたのだが、新政策が発令された途端に、改革を阻止して飽くまでも故習を守ろうとする一味が現われて出鼻を挫かれた。その頑迷固陋の集団が、須田伊豆や芋川縫殿をはじめとする重臣たちであった。

彼らの強硬な抵抗から背後にかなりの同調者がいると察せられた。その勢力は計り知れず、不気味だった。

された縁故から須田に説得されてやむなく改革反対派に引き摺り込まれた江戸家老色部典膳と会談し、その協力を得て、同調者を探し出し結集させることに成功した。

対馬は、それからは人目を惹くよう派手に振る舞って治憲の感性を刺激し処断を急ぐように仕向けた、という。

竹俣美作から千坂と色部についての一部始終を聴いていた荏戸九郎兵衛の、訥々と語る長い話は終わった。

「千坂様と色部様は反対派首謀を装って、野放しになっている過激派たちを束ね、懐深く抱き込んで離さず、対立抗争を未然に防いで下されたのじゃ。言って見れば、玉子の殻の役目を買って出て下されたのじゃよ」

「玉子の殻、でござりまするか」

「そうじゃ。胚子が孵化して飛び出さぬよう押さえ込んで下された。厚くて固い殻になって下されのじゃ」

「ならばなにゆえご処断なされたのでござりまするか」

「文四郎。おぬしは玉子の殻と中身を別々に申すか」

「いいえ。ひとつの玉子でござりまする」

「そうであろう。中身と殻は異質であっても玉子というであろう。千坂様と色部様のご心中を忖度できぬ他人の眼には、一味同心と見えるのはいたしかたあるまい」

「それで、お屋形様は――」

文四郎は唖然とした。これまでずっと抱きつづけてきた千坂と色部への遺恨はいつか消え去り、現在は長いあいだ主家を守るため意に反した行動をつづけて処断さ

対馬は、このまま対立を深めてゆけば、やがては藩を二分する騒動に発展してゆく危険を感じた。

水面下の不穏分子たちをひと纏めに括って、過激な行動を起こさせないように監視しなければならなかった。

それには、対馬自身が改革反対の首謀者を装って、火中の栗を拾うのがもっとも確実な方法であった。

しかし、そこまでして改革に協力しても、報われるどころか抵抗勢力首謀者の汚名を蒙ることは免れない。

対馬は、仏間で祖先の位牌と対座して終日懊悩した。

対馬は、戦乱のむかし修羅場へ身を挺し一命を擲って主家を守り抜いてきた祖先の教示をひたすら待った。

長い刻が過ぎたあと、対馬はついに、

「身を捨て、家を捨てて顧みぬのが臣下のつとめじゃ」

と諭す祖先の声を聴いた。

はっとわれに返った対馬は、漆黒の闇に包まれている仏壇の奥に、一瞬きらりと光るものを視た。

意を決した対馬は、森平右衛門を誅殺した同志竹俣美作に会ってその意中を告げると、須田伊豆ら反対派の重臣たちの諫言役を買ってて出てさっそく江戸へ向かった。

桜田藩邸に着いた対馬は、治憲との対面をまえにして独り部屋に籠もり、まだ微かに揺れている逡巡の思いを断ち切って悪役に徹する覚悟を固めた。

翌朝、家督を相続したときに七手隊須田伊豆組に配属された二人の重臣の苦衷が思い遣られて、目頭が熱くなった。

「お屋形様のご厚情、恐れ入りました」

文四郎は、そう言って荏戸に深々と頭を下げると、泪を覚られまいとして急ぎ御用部屋を出たが、居た堪まれずそのあしで城を飛び出した。

いつか陽は西に傾き、俯瞰する城下町は翳っていた。

文四郎は、倒木に腰を下ろして、瞑想に耽っていた。

「そうか。あのおふたかたは、玉子の殻だったのか」

荏戸の言葉が文四郎の頭の中をなんども駆け巡った。

主君のために身命を抛つ臣下の道にもいろいろあるが、千坂対馬と色部修理の選んだ道は、武士には堪え難い恥辱と汚名を子々孫々にまで遺すことになることを覚悟しなければ踏み出せぬ、辛く険しい道であった。

(身を捨て家を捨ててお家騒動の芽を摘みとり、公儀からお家を守った千坂様と色部様はなみのお人ではない)

文四郎は、裁決のとき苦笑した千坂の顔を思い出した。

(不貞腐れているとばかり思っていたあの態度は、身を捨てて事を成し遂げた快哉の微笑みだったのだ)

漸くそこに気付いて、千坂対馬の忠義心を諒解した。

(あのおふたかたは、不逞の輩たちを閉じ込めた玉子の殻だったのか)

涼しい風が、頬を撫でていった。

(所詮、われら未熟者にはご重臣がたのご心底など忖度できるはずはないのじゃ)

文四郎はそう結論づけると、それですべてが吹っ切れたように徐に腰を上げた。

二年後の安永四年七月、治憲は処断した七家を累代功労のあった名家ということで特赦し、五家の閉門を解いて嫡子に相続を許すと、もとの座並びに復活させた。

また、切腹を命ぜられて断絶した須田、芋川の両家には、末家の大小姓須田平九郎満清と芋川磯右衛門親生に知行二百石を与えて本家を相続させ、侍組に加えた。

（司馬雑感　十一）

「峠」「濃尾参州記」を歩く

山田嘉久

（一）「峠」を歩く

北越戊辰戦争最大の激戦地、大黒古戦場跡は予想に反して、越後平野の真っ只中にあった。

ここは慶応四年（一八六八年）の夏、長岡、会津、米沢藩兵らの奥羽越同盟軍と薩摩、長州藩兵らの新政府軍との間で幾度も激闘がかわされた地だが、周りは全くの田園風景。遠くに会津に通じる山並みが残雪を被って、春霞に煙っていた。

「峠」とはどの峠をいうのですか。」

数十年前、司馬遼太郎の名作「峠」を読んでから、土地カンの全くない私にとって長年の疑問だったことを、この旅の説明役であるW先生に聞いてみた。

「多分、榎峠でしょう。それよりも司馬さんは人間の運命の分かれ道を「峠」という題名に托したのではないのでしょうか。」

このことは、小千谷の「越の大橋」のたもとにある「峠」文学碑の碑陰文によって一層、はっきりした。

平成五年、司馬自身が書いた碑文の最後にこうあったからである。

「武士の世の終焉にあたって、長岡藩ほどその最期をみごとに表現しきった集団はない。運命の負を甘受し、そのことによって歴史にむかって語りつづける道を選んだのだ。「峠」という表題は、そのことを、小千谷の峠という地形によって象徴したつもりである。書き終えたとき、悲しみがなお昇華せず、虚空に小さな金属音になって鳴るのを聞いた。」

司馬は藩主の嘆願書を持った長岡藩家老河井継之助が小千谷に本陣を構える官軍の軍監岩村高俊（精一郎）との戦いを避けるため講和談判を行った慈眼寺にも色紙を残している。

「河井継之助の風姿を知らんがため慈眼寺に来る。山内の蝉音を聞きつつ
昭和四十年八月　司馬遼太郎」

因みに「峠」は翌四一年一一月から一年半にわたって執筆された。

歴史にイフは禁物だが、もしこの時、継之助の談判相手が二三歳の若造でなく、山県狂介か黒田了介だったら、長岡藩の悲劇は起きなかったであろうなどと思いつつ、二百年間変らぬたたずまいを残す上段の間を眺めた。

あくまで長岡藩の中立を認めてほしいと必死に嘆願する継之助を頭から相手にしない岩村は三〇分で席を蹴った。それでも継之助は岩村の陣羽織の裾を捉えてなお訴えたが空しかった。

この部屋の床の間に「恩怨氷消」と書いた額が掲げられている。岩村の子孫が書いたものらしいが、現在にいたるまで河井、岩村の恩怨は氷消されそうもない。

なお岩村は維新後、佐賀、石川等の県令や知事を歴任して男爵にまでなったが、後世の評価は低い。

司馬作品でも江藤新平を主人公とした「歳月」や西南の役を描いた「翔ぶが如く」に登場するが、大久保利通が彼を佐賀県権令にしたのは、不平士族を挑発して佐賀の乱を起こさせるためだったともいわれている。

長岡市はかっての牧野家七万四千余石の城下町だが、その長岡城跡は寸分も面影を残していない。現在の「JR長岡駅が本丸跡だという。

「長岡城は、平野のなかの平城であり、攻撃を受けるとなればこれほど守りづらい城はないであろう」と司馬は書く。落城後、発見できたのは「大手口」の標識と本丸跡の石碑だけというのが、この戦争のすさまじさを物語っている。

その JR 長岡駅からさほど遠くない継之助の住居跡（「史跡河井継之助邸跡」と記した石柱が建っていた。）を見た後、近くの栄涼寺に眠る継之助の墓にも詣でた。

その貧弱な墓はところどころ欠けていた。長岡を焦土と化した張本人として、犠牲者の妻子から何度も足蹴にされたからだという。生き残った継之助の父母、妻も官軍から重罪人扱いされ唐丸籠に乗せられて牢に入れられた。

私は継之助の遺族がその後どうなったのか気になったので、職場の後輩で長岡の出身であるM君に聞いてみた。遺族は明治二年に釈放されたが、その後も世間の冷たい目にさらされた。しかし妻すがは明治半ばに家名再興を願い出て、許可されその罪名も明治憲法の発布と共に消滅した。そして明治二七年に六一歳で亡くなるまで、継之助の墓を守ったという。

司馬は「峠」の執筆に先立つこと二年前、同じ継之助

を取り扱った短編「英雄児」を書いている。その最後の文章はこうなっている。

「無隠は晩年までしばしば栄涼寺を訪れ、墓碑が砕かれているのを見つけては修理し「あの男の罪ではない。あの男にしては藩が小さすぎたのだ」といっていたという。英雄というのは、時と置きどころを天が誤ると、天災のような害をすることがあるらしい。」

またこの男が、薩摩、長州、土佐に生まれていれば、あるいは西郷、桂、坂本以上の回天の立役者になったかもしれないとも書いている。

なお無隠とは「峠」にも登場する鈴木佐吉少年の晩年の号である。彼は若い頃、江戸の古賀茶渓塾で継之助と同室だった。そして継之助青年の人間形成ぶりを目の前で見ている。

熱烈な陽明学信奉者だった継之助は陽明学の本だけを読むなど型破りな塾生活を送ったのち、江戸を離れて遠く備中松山藩の山田方谷の門を叩く。（司馬によると現在「伯備線方谷駅」として名を残しているがJR駅名としては唯一、人名を付けた珍しい駅名なそうな。）

此処で三年、彼は先進的な開明論者として育ってゆく。そして師の方谷の「経国有用の学」を長岡藩に応用して、藩の財政改革をおこない、軍制、軍備を洋式へと変じようと決意する。

わずか百二十石の小身の出である継之助だが、慶応元年七月に外様吟味役以来、郡奉行、町奉行、御奉行、御家老、そして御家老上席と破格の昇進を続けてゆく。当然ここに門閥の反感、同僚の猜疑心も働いていただろうが、藩主牧野忠恭にとっては最も頼りになる側近だった。京都所司代に就任した忠恭にその職を辞するよう継之助は献言する。これを聞き入れて辞任した忠恭だが、今度は老中に推される。これも継之助の献言で辞する。

幕府の行く末を案じていた継之助は幕臣福地源一郎（桜痴）を介してスイス人フアブルブラントを知り、長岡藩をスイスの如く永世武装中立国たらしむべくその思考を固めていったのである。

そんな彼がどうして結果としては破滅の道を選んでしまったのか。司馬は勢力的な取材を続けながら「峠」で結論を出そうとしている。

そして継之助の心情を次のように語っている。

「封建武士道というのは、人間はどのように生き、どう行動すれば美しいか、ということを究明するもので、美意識でしょう。社会科学的頭脳を持った河井継之助の場合も、最後にはこの美しさを究明する道に殉じてゆく。彼のような社会思想家が、そうなっていく。それがわからないと、やはり幕末の時代ということはなかなかつかめない」（手掘り日本史）

近くの長興寺には継之助の盟友だった家老山本帯刀の墓がある。帯刀は継之助亡き後も長岡軍の先頭に立って政府軍と戦い、会津の飯寺で捕えられ斬首された。その帯刀の墓の隣に、山本五十六元帥の墓もあった。山本五十六は帯刀家に養子に入ったためこの寺に眠っている。

地元では継之助も五十六も長岡を焼いた責任者だという。継之助はともかく五十六には直接の責任はなかろうと思うが、太平洋戦争で米軍がこんな田舎の小都市を焼いたのはいつに五十六の故郷だったからと信じている市民が多いとは微苦笑ものだった。

長岡郊外の悠久山公園にある郷土史料館も覗いたが、やはり継之助と五十六の史料が多かった。

有名な五十六の「常在戦場」の額の近くに、ガットリング砲の模型が陳列してあった。「峠」では継之助が長岡藩を日本一の近代化藩にするべくわざわざ横浜まで買い付けにゆくことが描かれている。たった七万四千石の越後の小藩が当時、日本に三門しかなかった最新式機関砲（この砲は北越戦争のわずか数年前の一八六二年に起きたアメリカ南北戦争で発明されたばかりだった）を二門までを計一万両の大金で買い付けるのである。

「剣銃千兵破堅陣」との自作の詩句の通り、継之助は小藩の長岡藩を一大武装国家に仕上げていったわけである。

しかし地元では継之助の評価は真っ二つに分かれる。そのため地元を訪れた司馬は最初書く意欲をうしなったと「あとがき」に記している。

また最近では、小泉首相（当時）の演説で有名になった「米百俵」の小林虎三郎の方が評価が高いのかも知れない。（歴史家松本健一は「理性の人」小林虎三郎と「気概の人」河井継之助と対比したが）それでも私は最期まで「男の美学」を貫き通した継之助の生きざまに共感を覚えないわけにはいかない。

「峠」の最後は悲壮感さえ漂う司馬の文章である。

「「松蔵、火を熾にせよ」と継之助は一度だけ声をもらした。そのあと目を据え、やがては自分を焼くであろう闇の中の火を見つめつづけた。」

従僕の松蔵は灰の中から丹念に継之助の骨を拾い集める。松蔵は骨の拾い方が悪くて、お前のそこつで、あの世で骨が一本足りぬと叱られては立つ瀬がないと泣きながら言う。

司馬はあとがきで「筆者もまた松蔵の怖れを自分の怖れと多少感じている。いくらかの骨を灰の中にわすれてきてしまっているかもしれないのである」。

不思議なことに司馬は彼後半生のライフワークになった「街道をゆく」では長岡をついに訪れなかった。そして継之助のことも書かなかった。

碑文に見られるように「悲しみがなお昇華」しなかっ

たためかもしれないとも思った。

（二）「濃尾参州記」を歩く

言うまでもなく「濃尾参州記」は昭和四六年から二五年続いた「街道をゆく」シリーズの最終巻で、平成八年二月、司馬の急死によって未完に終わった。

熱田神宮にて

毎年、数百万人の初詣で賑わう熱田神宮も早春のウイークデーでは人出もまばらだった。司馬が詣でた平成七年秋も境内はそうだったようで、「静謐であるためには、たとえば社殿の前で写生することも、憚るべきことらしい」と書いて同行の安野画伯が携帯の小さな床机をすえ写生していると警衛の人に制止された話を披露している。

そのあとに「なぜ写生がいけないのか。私にはわからない。」と日頃、温和な司馬にしては皮肉っぽく書いている。

この話をツアーの誰もが知っているので、社殿のどの辺だったのかと話し合いながら本宮の参拝を済ませた。

本宮から南正門までの間、左右の名所跡を若いバスガイドが説明する。

弘法太子のお手植えとされる樹齢千年余の楠の巨木、佐久間大膳が海上で台風に遭った際に当神宮に守護を祈ったお陰で難を逃れたのを謝して寄進したという「佐久間灯篭」の次は有名な「信長塀」。信長が桶狭間の合戦での戦勝記念として奉納したといわれるもので瓦葺の築地塀が続いている。

「信長は清洲から桶狭間に走っている。途中、熱田神宮に立ち寄るつもりだった。」

時に永禄三年（一五六〇年）五月一八日。ここで戦勝を祈願する一方、後続する者を待つ。ほどなく二百騎、祈願が終わる頃には千騎に達したという。

「社殿の奥に金革の音がしたと信長は他のものに告げた。―神明の加護を得たと信長はいうのである。」

日頃、神仏を一切信じない信長にしては珍しいことだが、これが彼一流の部下掌握術であろう。この時、義元の総兵力は二万五千に対して信長勢は僅か四千に過ぎない。

このあと司馬得意の「余談ながら」が続く。

信長がやろうとしていたことは近代戦術でいえば騎兵の集団運用による奇襲であり、ここに唐突に「坂の上の雲」の秋山好古が登場する。

また信長の偉さは、奇跡ともいうべき桶狭間の勝利を生涯二度と模倣しなかったことだと書いている。この後どんな戦いでも敵に倍する兵力と火力が集まるまで兵を動かさなかったというのである。信長自身、桶狭間の勝利はあくまで奇跡だったと終生思っていた。

更に特筆すべきは戦後の報償に当たっても義元の首を取った者よりも義元の在り処の情報をもたらした者を最大限に賞したことであった。若くして情報の大切さを知っていたのが信長だったというのである。

（奇跡といい情報といい、後世において信長と全く逆を行ったのが昭和の日本軍人だったと司馬は多くのエッセイで書いている。）

桶狭間古戦場跡にて

熱田神宮を後にした我々は名古屋市の東南の端にある市立緑高校に向かった。「濃尾参州記」では此処で司馬はこの高校の出身で近くの藤田医科大学を出た若い医師を案内役に頼んでいる。かかりつけの漢方医らしい。

我々もこの高校の女子職員に迎えられたが、多分知らされていない生徒たちはこの異様な年寄り集団を怪訝そうな顔で教室のなかから眺めていた。

校庭の南隅が五〇メーターほどの崖になっていてその前方に桶狭間古戦場跡が広がっている。この場所に立った司馬はなにやらノートに記しているスナップ写真が残っている。

しかしこの本に書いているようにこの若い医師がこの高校に通っている頃には雉が出るような土地だったが、その後すっかり市街化が進んでしまい、今ではどの方向か判別できなかった。

右前方の一群の竹やぶの向こうが桶狭間のように見えたが、誰かがあれは多分、大高城（当時、今川勢だった家康の居城）の方向だからもう少し左の方でしょうといったので左側に目をやったがそれらしいものも見えなかった。それより更に左方に現在の藤田医科大学があるはずだが、これさえも識別できなかった。

それでも皆が司馬と同じところに立てたという満足感だけで十分のようだった。此処では冷たい北風も校舎に遮られてぽかぽか陽気。年寄りにとっては格好の日向ぼっこの場所ともなっていたので皆が長い間立ち尽くしていた。

松平郷にて

我々を乗せたバスは名古屋市内から豊田市に入り郊外の松平郷に向かう。

「松平郷」といえば松平（徳川）家の発祥の地として知られているが、ガイドの話ではかっては（多分、山岡壮八のベストセラー「徳川家康」がＮＨＫ大河ドラマとなった昭和五十年代後半であろうか）此処を訪れる観光客は多かったが、最近では訪れる人も少ないので、路線バスも廃止されたという。

豊田市街地から一〇キロほど北上してようやく松平郷にはいると入り口に東照宮がある。全国に百あまたあ

る東照宮のなかで三大東照宮とのこと。

東照宮の境内の一隅に戦前の作曲家で徳川家の末裔であるという松平信博が作曲した「侍ニッポン」の作詞の刻み込まれた碑が建っていた。若いガイドは「人を斬るのが侍ならば～」と歌い出したが後が続かない。そのあとを全員が引き続いたので思わぬ合唱になってしまった。年の功で皆、知っていた。

その後、境内で同行の「司馬遼太郎記念館」の学芸部長から「司馬さんの家康」について短いレクチャーあり。「忘れられた徳川家のふるさと」（「歴史を紀行する」）「家康と宗教」「家系の周辺」（いずれも「歴史と風土」）「徳川家康」「家康について」「蓮如と三河」（いずれも「司馬遼太郎が考えたこと」）「家康以前」（「この国のかたち」）などを取り上げていた。

「濃尾参州記」では家康の先祖について語っている。出典は大久保彦左衛門の「三河物語」からのようだ。

徳川家の祖は「徳」と呼ばれた時宗の僧だった。

当時、遊行僧は漢字一字の下に阿弥を付けていたから正しくは徳阿弥という。この徳阿弥はすぐに松平郷にはいったわけではなく、まず吉良町の酒井与右衛門宅に逗留した。そしてその家の娘と通じて男の子を得た。この子が後に徳川家筆頭となる酒井家の祖だという。

その後、徳阿弥は松平郷の松平太郎左衛門の家に逗留してここでも娘と通じて男の子を産ませた。そのうち徳阿弥自身、この家の養子となり松平太郎左衛門親氏と名乗った。その九代あとの子孫が家康だというのである。

その親氏の大きな像が高月院に向かうだらだら坂の右手に建っていた。いかにも野性味溢れる風貌をしている。

司馬は「濃尾参州記」を書く三〇年前にもこの地を訪れている。

「街道をゆく」の前駆となった「歴史を紀行する」（昭和四四年）取材のためである。そのときの印象は「山も渓も家々もじつに清らかだった。―その一段上が尾根でそこに浄土宗高月院があり―まわりは谷で、谷のほかにはなにもなかった。」

しかし三〇年後再び「高月院までのぼってみて仰天した。清らかどころではなかった。高月院へ近づく道路の両側には映画セットのような練塀が建てられているのである。」と失望している。

「私の脳裏にある清らかな日本がまた一つ消えた。山を早々に降りつつ、こんな日本にこれから住んでゆかなければならない若い人たちに同情した」と。

絶筆となったこの本の悲痛な終わり方である。

しかしそれから一〇年近く経った今では司馬を嘆かせた白い練塀も適当に黒ずんでさほど気にはならなくなっていたが、反対側にあるなんとか建築の看板はやはり目障りだった。

松平家の菩提寺である高月院の山門や本堂は三代将軍家光の建てたものと伝えられているが、境内には現在の当主（一八代）が手植えした松が育っている。しかしこの一八代目とはどんな人物か私は知らない。

下山して松平郷の入り口に帰るとそこに大きく松平家の家系図が描かれていた。それによると前記親氏から三代目の信光の子孫が徳川家、信光の兄信広の子孫が松平太郎左衛門家と分かれている。松平家は現在二二代目となっているが、この方は更に知らない。

「濃尾参州記」でも三代目信光の代になって（松平郷から下りて）いまの安城市に居を構え四代目の居城とした。さらに七代目が西三河の中心地岡崎に進出、居城としたと書かれているが、信光の兄のことは全く触れていない。

なお、司馬は松平郷について、彼の作品の中で唯一、家康を主人公とした小説「覇王の家」（昭和五五年刊）でも冒頭にこう書いている。「奥三河の山のなかの坂をのぼって、松平郷という。これ以上は山経もないという行きどまりの小天地に行ったときの夏の陽ざかりの印象は、筆者にとってわすれがたい思い出となっている。」

美濃にて

「濃尾参州記」は司馬の急逝によって未完に終わったので、当然のことながら「濃」すなわち美濃については全く書かれていない。司馬が存命ならば美濃の岐阜あたりは欠かせないこの本の最終コースであったであろう。

そんな思いで翌年、この地方を旅してきた。

まず「国盗り物語」の舞台となった岐阜城に向かう。

「落ち着いている。声が、である。（略）「国主になりたいものだ」と乞食はつぶやいた。」

他の司馬作品と同様、なんとも魅力的な書き出しでこの小説は始っている。

岐阜に向かう途中、可児市を通った。此処が司馬の短編「おれは権現」の主人公可児才蔵の出身地か。「濃尾参州記」が未完で終わらなければ、多分この戦国の豪族才蔵のことも書いたであろうと想いながら通過すると、美濃加茂の近くに「明智」という地名もあった。此処から「国盗り物語」後半の主人公の明智光秀が出た。その縁で可児郷士の殆どが明智家に召し抱えられた（才蔵もその一人）と司馬も書いている。

岐阜に近づくにつれて濃尾平野の北端に聳える金華山がくっきりと見えてきた。標高わずか三二九メーターの山ながら「屹立」という表現がよく似合う。

南と北に木曽川、長良川という天然の堀をもち、三方を急峻な断崖で守られたこの地は昔から天然の要害だ

ったのだろう。

岐阜公園内に車を留め、ロープウエイで金華山に登る。

その公園の一角内に信長居館跡の石垣や土塁などが発掘されている。信長は平時の生活は山麓の居館を使い、山腹から山頂に築かれた城郭は敵が攻めてきたときだけ使用したようだ。

ロープウエイ山麓駅からわずか五分足らずで頂上に着く。天守閣に達するまでの小道に、この城の歴史を記した案内板が方々に見られる。それを順次読んでゆくと自然と頂上に達する仕組みになっている。

この城が古くは井ノ口城、稲葉城とよばれたこと、一三世紀の鎌倉時代に築城され、室町時代には美濃の守護土岐の守護代が居城としたこと、そして有名になったのはご存知、戦国の梟雄斉藤道三によってであることなどを知ることが出来る。

「国盗り物語」によれば道三はもともとは日蓮宗の修行僧で、京都大山崎の油問屋の婿に収まり、財力を生かして美濃の守護大名に接近して、ついに美濃一国を手に入れる訳だが、最近の定説では油売りから美濃に入ったのは道三の父親であり、息子の道三が覇権を完成させたという親子二代説が有力なようだ。

天守閣から眺めた岐阜市内や長良川の眺めもすばらしかったが、多分、その昔、道三も信長もこの天守閣から濃尾平野を見下ろしたことだろう。

城内には道三や信長の肖像画も飾られている。そして道三を討った長男の義龍やその子の龍興の画も。龍興からこの城を奪った信長にとってこの城は以後「天下布武」の拠点となった。

またポルトガルの宣教師ルイス、フロイスがこの城を訪れている。山麓の居館部分だけでも、当時、東洋におけるポルトガルの本拠地だったゴア総督府の一、五倍の規模だったという。また彼は岐阜の賑わいは「バビロンの混雑」を思わせたと云ったそうだ。

ついで濃尾平野を北上、郡上八幡へ向かう。八幡山の頂上に郡上八幡城があるが、歴代の城主も名だたる人物はいない。ただ江戸期初代城主遠藤盛数の娘（二代城主慶隆の妹）があの山内一豊の妻お千代であるらしいとは始めて知った。来年（平成十八年）のＮＨＫ大河ドラマ「功名が辻」の主人公でもあるので「お千代の故郷」の幟が町中に見られた。

お城よりも此処では「郡上おどり」の行われる古き町並みの方が有名だろう。その一角にある「そばの平甚」で名物の天女魚そばを食べたが食オンチの私にはあまり旨いものとは感じなかった。近くの名水「宗祇水」で水を汲む。

ところで城主の娘が一介の貧乏侍一豊に嫁入りするのも不自然なので、帰ってから「功名が辻」を読み直すと、司馬はお千代も北近江浅井氏の平凡な家来の娘としている。お千代の郡上八幡説は司馬が「功名が辻」を書き終えてから（昭和四十年代後半）有力になった説のようだ。

その後、高山に入ったが、此処は既に「飛騨紀行」の世界である。

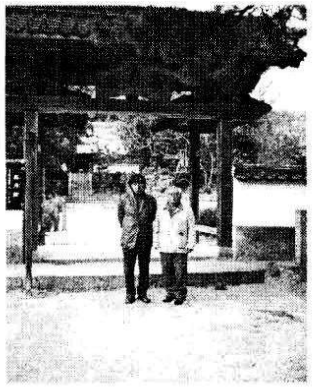
（了）

（追記）

司馬は昭和四七年に「街道をゆく（郡上、白川街道と越中諸道）」で郡上八幡城を取り上げている。「日本の山城の典型のひとつは、長良川上流の郡上八幡城である。」と書きながら「興醒めるようなことをいうと」その天守閣が昭和の始めの復元になることを明かして、司馬はこの城には立ち寄っていない。そのかわりに室町期にこの城を作った歌人東常縁について多くを物語っている。東常縁は房総の千葉一族の出である。頼朝の鎌倉幕府成立に功あった千葉氏は地元房総のみならず遠く九州、東北のほか美濃のこの地もその領地とした。もし前述のお千代の郡上八幡説が史実とすればお千代も千葉氏と何らかの関係があったことが推察できて興味深い。

また司馬は短編「美濃浪人」の中で「美濃の系図だおれ」について触れている。

京の着だおれ、江戸の履きだおれ、大阪の食いだおれと並んで東海地方では、「美濃の系図だおれ」というのだそうだ。元来、この地方は信長の美濃攻略以来、六〇余州の風雲の中心地となったためこの地からは数え切れぬほどの大名、小名を輩出した。従って徳川期にはいって美濃二一郡の殆どが幕府直轄地になってからも、この国の住民たちは往時の栄光が忘れられずに、水呑み百姓にいたるまで「何某の大名とは縁戚」との風習が色濃く残ったというのである。



司馬遼太郎記念館上村館長と
（松平郷高月院前で）

鏡の中の革命児

—昭和史の一ページとして—

大和禎人



革命児天龍三郎と大の里萬助の二人が理髪店「二等軒」の鏡の中にいた。

彼らはついに覚悟の断髪をして、整髪のため店内の鏡の中に姿を見せているのであった。

往還に時ならぬ人群れが固唾を呑む光景を作っていた。市電が本郷の上富士前交差点を通過、神明町に向う電車通りの急カーブ、駒込伝中に通じる道との角店で歩道のない場所がらをあえて厭わぬ群衆であった。

鏡の中の人物天龍三郎について、ここで少し紹介が必要であろう。彼は一九〇三年（明治三十六年）十一月一日、静岡県浜名郡三方原村（現在浜松市）出身、出羽ノ海部屋所属の幕内力士である。大常陸と仰がれた常陸山の先代出羽ノ海晩年の門下である。大正九年初土俵を踏み、昭和三年新入幕、同部屋で六歳年下の武蔵山武と激しく出世を争いを続けていた。武蔵山は先代に変わった両国の出羽ノ海の直弟子という関係が二力士のライバル関係に拍車をかける塩梅を濃くしていたようであった。

昭和六年七月の満州巡業は出羽一門単独勧進の花相撲であったため、同門対決の番組の割りを避けられずに、天龍、武蔵山という一行中の花形の組み合わせを避けられず、両者の対決がやんやの拍手に迎えられた。互いに譲れぬ勝負だ。勝たねば、負けられぬの角逐であった。

武蔵山はこの六年三月京都では玉錦に破れた一敗のみ五月夏場所は清水川に敗れた同じく一敗のみ、いずれも、小結での成績であった。これに対し天龍は関脇五場所、京都六勝五敗、東京六勝五敗と冴えない状態で、勝ち味の遅さを言われていた。最近の場所では大関能代潟との一戦がある。能代は老練、相撲を楽しむタイプで左四つ、天龍とは喧嘩四つであったが、天龍は右が入りながら両者共動きが止まり、水入り後も全く動かず、進行上勝負預かりになり、異例の翌日決戦を本割り外に組む勝負持ち越しを経験しているのだ。結果はまたも決着せず、協会勝負預かりという異例の結果を見ている。大関昇進を望むには満州巡業を終えて、十月の大阪準場所に照準をおき、その星如何が運命を分けるはずだった。

だが、この日は違う。一門の人気を背負う二力士の対決である。天龍にとっては花相撲とはいえ、鼎の軽重を問われる取組、兄弟子の面目にかけての攻防に死力を尽くして勝敗決せず、興業を一日延長するという措置がとられたという。異郷の花相撲故に勝敗結果までは明らかでないが、兄弟子天龍の苦境が思いが泛かぶ。

名行司「松翁」の二十代木村之助が記憶に残る一番を問われてこの相撲をあげたという逸話が残される。

昭和七年春場所をひかえて、番付発表の一月六日、突如、出羽ノ海部屋力士が関脇天龍以下こぞって協会に運営上十ヵ条の粛正を要望して反旗をひるがえし、大井町春秋園に結集した。角界未曾有の騒擾勃発であった。西方の方屋を一門で占める全盛期の出羽ノ海一門に加えて後を追い東方錦洋与三郎ら十七名も同調脱退、両国尾張屋に終結、こちらは伊勢神宮に詣で結盟という趨勢に、幕内十両の力士六十二名中四十八名を欠く不穏に発展、協会は致命的な打撃をうけた。ファンの私は中学四年生の時で、騒動の成り行きに大いに関心を寄せたのであった。

当の春場所では出羽ノ海部屋のともに人気の好力士である小結武蔵山が五場所関脇の地位にある天龍を越えて大阪準場所を八勝二敗の成績で（天龍は三敗）、結果大関に推挙をすでに決定していて、そうした番付が公然明らかにされる日を迎えての暴発なのであった。

同部屋の兄弟子天龍の立場を思いやるとき「何の顔容あって」という苦境を思いやられていたのであった。造反の真相、要因として消し去りがたい印象をうけたのであった。

ここで大関大の里が天龍と行動を同じくしていることに注目をおかねばならない。大関という地位からは自重が必要であったはず、しかも年齢三十九歳、年内に不惑に達するはずであった。若いものに同調した心理を思いやられるのである。首謀の天龍から言えばこの先輩力

士が行動を共にしていることはこの際、彼らの正義に盤石の重りを与える結果を見ていた。

同じ大関に玉錦、能代潟がいたが、自重して行動を共にしていない。「紙くずを拾っても私は師匠を守る」という言葉をもって能代潟は美談を残している。

大の里は名人大関、昔日、平凡社「十銭文庫」の「相撲読本」の著書があり、中学一、二年生の頃、相撲技の四十八手を教えてもらった人である。二等軒理髪店の鏡の中の映像は悲壮で生な歴史の日を私は脳裏に刻み、あの日、目撃をした群衆の一人として、力士団の首魁二人の悲壮を察し、先途の多難を思わざるを得なかった。

一門をあげての造反に武蔵山の立場は苦しい。

脱退組の結束に呑み込まれていた武蔵山はまず脱走して協会復帰、まもなく拳闘界への転身を決意表明しながら、悶々の心境揺れに揺れ、日をおかず、あらためて取り消す動揺に、

「武蔵山行くほうも無指し山」

とマスコミは遠慮がなかった。

もう一人の脱走復帰力士があった。出羽ヶ嶽文治郎である。上京して青山病院長斉藤紀一氏のところにいて、養子縁組み、歌人斉藤茂吉とは義兄弟という話題の主、常陸山に口説かれて入門、衰退した角界の救世主と期待された巨人力士である。関脇を最高位として一時は大関大刀光を寄り倒しで再起不能の負傷を負わせ、横綱西ノ海の双差しを浴びせ倒した全盛期をもつ巨人力士だが、脱退組の断髪の際はその巨人故に一人蓄髪を認められていたもの、脱走復帰後は七年五月番付外幕内格として八勝三敗と気を吐いたが、次第に巨体をもてあまし、三段目まで落ち、幕下へ返り咲いたのを期に引退している。

巨人力士として人気を呼んだが、その彼は身長二〇三Sm、今日の現役琴欧州と身長では変らず、体重は一九五Kgとあって琴欧州は一四七Kgで及ばない。

その出羽ヶ嶽は文ちゃんと呼ばれ愛敬者でもあった。巨体に似合わぬ小鳥を飼う趣味があり、騒動の最中のある日、そうした彼をスナップした写真が新聞紙上に紹介されている。その人間味は同情を呼ぶものであった。

協会はついに春場所興業を断念、翌二月に遷延し急遽残留力士による番付を編成している。東西幕内を各十一名とする寂しいもので、十両、幕下から八名をくりあげて幕内とする変則のもと、辛うじて場所の蓋明けにこぎ着けている。この時後年、六十九連勝の記録を樹立し無敵を誇った大横綱双葉山は西十両十枚目からの抜擢、さらに後に協会理事長を年寄武蔵川として勤めた出羽ノ花は幕下筆頭から出羽ノ海部屋所属だったが、脱退不参加で繰上げ入幕、国会の協会のありかたを問題にされた

時堂々の答弁をし、やがて理事長として多く寄与した。

瓊ノ浦は幕下三枚目から繰上入幕、やぐら投げの特技から、四股名伝統の両国梶之助を襲名している。両国は三代あり、初代が現の出羽ノ海、二代両国は勇治郎、横綱大錦も勝てない実力があり二十一連勝の記録をもち、女流作家田村俊子とのロマンスで知られた。三代を襲った当の瓊ノ浦はうっちゃりで双葉山の連勝をあわや止める働きを物言いで逸したが、安芸ノ海の連勝ストップの翌五日目、うっちゃりで連敗の黒星を呈上している。最高位は関脇、繰上入幕後を順調で、ついに十両を経験しない珍記録を作っている。

月遅れの春場所興業八日間はガラ空きの不入りで、盛況時の一日分の収入にも満たなかった。

関脇清水川元吉が八戦全勝を飾っている。

協会はこの時期二月二十三日力士四十八名及び行司四名を除名処分としている。

脱退組は天龍らの一派は新興力士団と称し、初め下谷根岸に旗揚げ興業を六日間開催、飛行機2機をチャーターし、天龍みずから乗り込んで宣伝ビラ数万枚を空から撒く派手な宣伝をしている。内1機が上野公園に不時着する騒ぎを起こしている。力士をA、B、C三クラスをきめる新しい方法を採用、番外として臨時挑戦試合を組むなどで人気を呼んだ。次いで革新力士団と合併、蔵前に進出、連日天龍は苦衷の獅子吼をもって訴え、歓声、拍手をうけ、頭領天龍の姿が観客に印象を強く刻んだ。しかし、採用のトーナメント方式や何回戦かのショー的番組は新興側の散切り頭に伍して、革新側の本来の髷力士の混成の番組もあって違和感を免れなかった。

東京の協会は幹部総辞職の上、常ノ花の藤島が推薦をうけ取締役に就任していた。現役引退は五年五月であったから万事戸惑いを避けられず、天龍は現役時代の付け人という関係にあったが、物別れにおわっていた。協会再建にはなにより士俵に活気をよぶことであった。

常ノ花の引退後、すでに二年も横綱不在のところ大関玉錦が過去準場所を含め優勝五回、小部屋二所ノ関所属のところ、出羽ノ海の方屋に組み込まれていた時期もあって、天衣無縫の性格は藤島もよく理解していた。その点の難を言う人があったが、もはや優勝実績申し分なく、推挙を憚るべきでない、と推挙を決定していた。

この趨勢を察知したのが天龍三郎であった。彼は熊本へ飛んで吉田司家を訪ね、当人の人格上の難点をあげつらい、允許阻止の献言をしている。この事実は驚くの外なく、革命児の心情を忖度に苦しまねばならない。吉田家はこれを無視している。天龍はさらに協会にも同様の

申し入れをして、当然拒否にあっている。

昭和八年一月新横綱玉錦は登場した。「動く錦絵」と呼ばれ、その登場は拍手で迎えられた。双葉山の抬頭までさらに四回の優勝を遂げている。

今日の六場所時代と異なり九回の優勝は栃木山に匹敵し、双葉山の破竹の連勝記録とあいまって東京協会に復興の機運をもたらした。

新興力士団はその後、本部を本郷区駒込神明町に移しています。木戸坂にその頃できた秩父館と呼ばれる旅館でした。どうした手づるか大井町の春秋園から移っています。神明三業地に近いところです。力士と花街、色里の微妙なかかわりを想像されても仕方ないのかも知れません。

秩父館には連日地域の人だかりが見られました。

物好きにとって格好の見世物化しました。新聞の報道写真で三業地帯の姐さんたちの一群が押し寄せてしどけない姿で、たまたま天龍さんの巨躯が囲まれている一枚もあり、花柳界と力士の関係は知る由もありませんが、秩父館の提供にあたっては神明町三業界の肝入れがあったものかも知れません。

私が覗いた日には十両の綾昇が稽古に励んでいました。新興力士団ではCクラスの力士でした。若手ですが後の帰参後は最高位関脇に昇る巧者で、童顔の好力士でした。

この裏手に見られる旅館の建物には部屋割りの力士名がはためく様子が見られました。

奥手にはかなり広い傾斜地が見え、木戸坂というゆかりで呼ばれるこの敷地は小学生時代忍んで友人と小魚をすくいに冒険を決行した場所に相違ないのでした。

やがて新興、革新の両力士団は合併して大日本相撲連盟が結成されましたが、本拠地を大阪に移す議が起こると、新海ら七名が同調せず脱走、後に協会へ帰参。これを契機として革新派の鏡岩、男女ノ川らの復帰の意志が強く、革新派の主だったメンバーでしたから、統領の立場にある錦洋ら七名が憤激して新興力士団側に合流、翌八年一月にいたり大日本関西相撲協会を発足させます。

八年一月綾桜、鏡岩らは東京方へ復帰、一月春場所を十三名の別格番付で登場、朝潮改め男女ノ川が全勝優勝を、十両も綾昇が優勝。帰参組が気を吐きました。朝潮供治郎は由緒ある朝潮の四股名を返上、男女ノ川に戻しています。関西方の痛手は大きく以後の衰退を招きます。

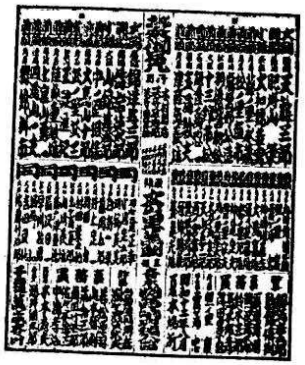
関西協会の興業は昭和十二年の八月の阪急梅田で十回開催の方針を固めていました。

初回、二回は七日間、次いで八日間が三回、やがて十日間を五回まで開き、片番付でした。

これを期に改革し屋別制を創設、天龍、大の里、錦洋山錦の四部屋を創設し、同部屋対決はさせないなどの改革を行っている。どうやら旧套を懐かしむ傾向に見えました。番付まで旧形式にやがて戻す方向をたどるのでありました。

苦節五年、ようやくスター不足、資金難、入門者難に経営は喘ぐ一方であり、そしてついに解体、解散に至ったのでありました。

関西方最後の十二年八月番付はそれまでの片番付から一転、東西制で幕内は次のような東西各十一枚でした。



十年一月四十三歳を最後に引退していた大の里を取締役として大書している。私財を投じてまで天龍に殉じた大先輩への申し訳であったろうか。

これほど珍奇な番付は相撲史始まって以来、絶後のものかも知れない。東西幕内各十一枚の下に目を移すと各十六枚の力士が四股名が見られるがその頭に同と記す書体が東方に異なり、西方は数名を括る略大字になっている。つまり東方は関西方ランクのBクラス、西方はCクラスの格付なのである。いずれにせよ力士五十四名が若者を入れた総数ということになる。

他に行司数名の名があり、力士に殉じ加盟し来たったのであろう。ほかに事務員とあるものも東西に分けて数名ずつ見られる。角界番付としては異様に思われるものであります。昭和十二年八月の文字通り夏場所、大日本関西相撲協会という名のりも侘しく、東京方の作法をなぞり媚びるフシが伺われる落莫感を免れないものに見受けられた。

十一月にいたり、ついに解散、離別の時を迎える。

天龍三郎はこの間、東京方協会に力士らの帰参を交渉していて、肥州山、倭岩、大和錦らの受け入れに了承を取っていた。革新派の錦洋と出羽の部屋の同門の先輩でよく天龍を助けた重鎮山錦はこれに加わらず、節操固く角界を去っている。

宿老の立場にあった大の里はすでに去って、大連にあり、病苦の運命にあった。師と仰いだ力士に松の里、武の里があり、武の里が大連までつき従い師の臨終を見取ってから帰参復帰している。別に大の里の病頭に付添う婦人があったと伝えられ、小説に書かれたりだが、大連に客死した悲劇の名大関として同情される。一六四Cm、一〇〇Kgの小躯、「相撲の神様」と呼ばれた。天龍に義

理立て、復帰したい気持ちはあっても帰るわけにもいかず、苦悩の連続であった。番付上の処遇も関脇から前頭五枚目、三枚、九枚と下降している。彼の薫陶を受け成功した力士は数多く、遺徳を偲ばれ、なんと昭和三十五年八月四半世紀後におよび、大の里の出身地青森県南津軽郡藤崎町の鹿島神社境内に顕彰碑が建立されている。

関西協会解散後東京方へ帰参力士の処遇は厳しかった。

力士名	関西番付	脱退前（昭七）	帰参後処遇（昭十三・一）
肥州山	東関脇	西前頭十枚	→西十両十二枚格付
倭　岩	西関脇	西十両八枚	→幕下八枚格付
大和錦	東小結	西前頭六枚	→西十両七枚格付
山　錦	西小結	西前頭四枚	→　廃業

役力士の場合のみ写した。いずれも出羽ノ海部屋力士で解体離散時まで残っていた力士の多くが出羽ノ海系だった。彼らは紛争の経緯上、窮鼠の身分であった。

ここで雷ノ峰伊助のことを書き留めておきたい。二代梅ケ谷の雷部屋の力士であったが雷の没後立波部屋預かりとなり、革新系に属し苦労をなめた一人である。三代西の海、宮城山ら横綱を破り、大関大の里を四度、大関豊国を三度倒すなど、さらに二年五月には初日と千秋楽に負けたのみで優勝旗手となっている。だが、革新力士団に属してからは精彩を次第に欠き、前頭四枚目の位置づけから下降、十一年八月にはついに二段目十三枚目とすこぶる惨めであった。十一年八月場所まではその名を連ねたが、解体、離散時にはすでに行く方不明であった。私が街頭で彼と擦れ違ったのは十二年であったろうか、銀座に木枯らし吹く寒い冬場であった。チラと視線を彼は私に投げたが、通りすぎた。

（あっ、雷ノ峰）と直感できた。

人目を恐れるかに前かがみに巨躯を運ぶ姿、力士髷の遅れ毛、二重廻しの身をかがめ人目を避ける様子に、落魄を察せられた。彼は帰属すべき部屋がなかった上、解体離散の際の関西協会の斡旋にも漏れたとしか考えられないのである。

彼は昭和十五年五月十日。三十六歳のあまりにも短い生涯を閉じている。角界争擾の犠牲者と言えよう。

復帰組の男女ノ川は十一年五月横綱に、鏡岩は双葉山と十二年一月同時大関に昇進している。双葉山の六十九連勝は十一年一月場所七日目前頭三枚目の対玉ノ浦戦から始まり、奇麗に白星を並べ、番付上も累進を遂げ、十二年一月大関、十三年一月横綱になり、連勝ついに古稀に達するかの勢いだったが、十四年一月場所四日目出羽一門にあって対戦したことのない秘密兵器と目された安芸ノ海に敗れるまで無敵の大記録を樹立している。

終焉を迎えた関西相撲協会にかかわる三枚の写真がある。一枚は解散に当たって酒杯をあげる力士たちのもの

のだ。中心に天龍三郎がいる。なんの顔容あってという感を免れない光景である。彼はひれ伏して謝して当然ではなかったか。次の一枚は東京駅に着いた最後の帰参力士たちが駅階段を降りてくるスナップである。大きな荷物を担ぐ若い力士たちは関西で入門した若者たちである。東京方に伍してこれから苦労積まねばならぬ。大和錦の姿が見える。残る一枚は天龍その人が満州へ旅立つ姿である。彼はにこやかな微笑さえ浮かべていて微塵も悔悟の気配もない様子に見受けられる。残留力士の受け入れを交渉した上の亡命である。

彼はかねて昵懇だった満州国総務長官星野直樹の招きに応じ、張景恵国務総理秘書として迎えられ、政府体育連盟嘱託に就任、満州国神武殿の建設に尽力、昭和十五年七月にはなんと東京方相撲協会満州準本場所の開催に貢献した。同国はすでに斜陽、やがて崩壊の時を迎えねばならなかった。



相撲碑のメッカ、江戸勧進相撲由緒の深川富岡八幡宮の碑群に比較的に新たに加わった二基がある。その一は「超五十連勝力士碑」であり、さらに「出羽一門友愛之碑」の二基である。

ここで今は「出羽ノ海友愛之碑」をとりあげねばならない。昭和三十一年の一月浜松町の料亭に集いをもった巨漢たちがあり、同門の友好をあたためる趣旨の集まりであった。五ツ島、綾昇、九州山といった顔ぶれであった。第二回はその年の五月、この時に至って天龍、大邱山などの新顔が加わり、会長に天龍、副会長に五ツ島が選ばれ、世話人には力士上りの評論家小島貞二が選ばれた。いつか満州から帰り、民放の相撲解説を勤める天龍三郎が推されて会長とは、ただ単に時代の推移と見なすべきであったろうか、しかもさらには碑石建立の議にのぞみ揮毫を臆面なくひきうけているのだから唖然とさせられる。彼の書は冒頭に掲げた春秋園事件の発端に掲げている檄文にも見られる通りの雄渾の筆勢であった推す方も推す方、推戴にまかせて会長の立場におさまった、ことがなにより問題であろう。協会側もやがて藤島の出席があり、堅い握手が交わされたとあり、世話人の小島氏は劇的な一コマと伝えている。「恩讐の彼方へ」と見過ごす寛容を許されるのであろうか。

一度は改革の夢破れた相撲道改革の夢であったが、関西相撲協会解散後二十年を経て昭和三十二年三月二日衆議院予算委員会において社会党の委員によって財団法人である大日本相撲協会が営利団体化していると監督官庁文部省を追求、四月三日の文教委員会において協会の公益法人としてのありかたを説明を求め、参考人として協会の理事武蔵川、現役力士の若瀬川、もと阿久津

川の永井高一郎らを招いた。加えてもと天龍の和久田三郎も出席、所信を述べる機会を与えられた。

出羽ノ海、時津風両理事にかわる堂々の答弁を行った出羽ノ花の武蔵川の評判は先に触れたとおりである。

同年五月四日、常ノ花の藤島が引責切腹未遂の事件を起します。TBSの解説者だった天龍の和久田三郎が実況番組を降ろされるということもありました。みな国会の諮問という厳しい出来事に因をおいた出来事でした。協会は出羽ノ花の革新方針にしたがい次々新たな運営実現に決断、実行の手を染めました。茶屋制度を止め、番号制とる。相撲教習所の設置、力士給与を月給制とし、持ち給金(星勘定による一種の能率給)と併用するなど。大改革と言えましょう。

床静さんの奥さんの述懐に角界の下積の苦労話があります。写しおきましょう。

昭和三十二年給料制度が実施された。それまで場所ごとの歩方金三万五千円は一か月にならすと一万七千五百円だったが、これを境に二万円のサラリーマンになったのであった。歩方金から給料制度になったものの袋の中身はわずかに聖徳太子二枚、亭主顔している手前困って少しでも多く見せようと、わざわざ千円札に崩して家に持ち帰った。というもの。

呼び出しと床山は一万から二万円だった。床山は経験年数などで一等から五等までの等級があり、関取の大銀杏を結えるのは十年以上この道で喰ってきた一、二等の床山であった。

ありし日、理髪店「二等軒」の鏡の中に見た革命児のあれからの闘争五年の歳月はついに世情国民総決起を促される趨勢、酷烈の度合い日に増す際、もはや角界の力士が軍事教練にかりだされて、例外を許されてはいない。彼の挙は「邯鄲の枕」の夢見に終わったようだ。革命児は不世出のナルシストとしてその名を止めるのであろう。統率者兼ねて大関の称を一貫して保持し、他に譲ることがなかった。偉大なる自己陶酔者であった。

改めて力士名鑑に彼の名を探ると、最高位関脇とのみ記されている。

たまたま角界評論家K氏と取材上、言葉を交わすうち、大関常陸岩が天龍を大関にと推薦しています。という一言があった。K氏はそれを何気なく口にされたようであったが、常陸岩英太郎は江戸っ子大関として人気があり、日本橋の天ぷら屋「なかや」の息子、大常陸の直弟子であった点、天龍と同様で、三つほど年上であった。あり得る秘話に思える。K氏は口を濁されたが、確信に近いものが私の心を過ぎった。ナルシストの画策としてあり得る、自己陶酔型人間が覚えず窮余、算段を踏みはずしたなりゆきではなかったか、と思う。

(H一九・三・二四)

掌編小説2

新しき友

亜木陽一

年が明けた。
大相撲初場所。
テレビ中継は午後3時。
昼から風呂をわかして入った。
早く相撲を見たい。
十両の取り組み。
相撲協会の新年の挨拶。
東西幕内力士がしめた色鮮やかな新春の化粧まわしの土俵入り。
二十回目の優勝を目指す横綱朝青龍の気力溢れる土俵入り。
風呂から上り、準備万端。

そこへ婆さんがあわてて来た。
「おじいさん、正月そうそう、送電線の故障で、2、3時間電気が止まるんだって」
さて困った。
きょうは初日なので、相撲は見たい。
坂上にある次男の家でテレビを見せてもらおう。
婆さんが次男に電話を掛けると、次男と嫁さんは犬を連れて外出中。
孫はいるよ。
急いで出掛けた。

こんにちは、おじいちゃんだよ。
家に入り、二階の孫の部屋へ。
おや、テレビがついている。
相撲放送ではないか。
大相撲を見ているのか?
二人でテレビを見ながら相撲談義に花を咲かせられるかな?
喜んで声を掛けると、

「琴奨菊が出るわ。
私、お相撲が好きなの。
琴奨菊のファンよ」
「琴奨菊？
わしは昔後援会の人からいただいた長谷川関の引退記念の写真を大事にしている。
琴奨菊はその部屋の弟子ではないか」
「パパ（次男）が言っていたわ。
おじいちゃんがその写真を大切に持っているって」
「だから、琴奨菊はわしも応援している」
「あのねェー。
がぶり寄りがお得意で先場所十番勝って技能賞を取って強いのよォ。
私、強い人大好き」
「あの力士は前に出る圧力がすごいからな」
名古屋人のわしは、同じ愛知県出身の関脇琴光喜やブルガリア出身の大関琴欧州の弟弟子である琴奨菊を注目していた。
孫娘はよく知っている。
「一緒にテレビ見ようよ」
ｏｈ！
わしはやっと相撲放送をテレビで見ることができた。
しばらくすると取り組みが佳境に入って来た。
琴奨菊は大関栃東を右上手を取ってがぶり寄りで一

「ああ、おじいちゃん、ゴメン。
テレビ消すの忘れてた」
「あれ！
相撲見てたんじゃないの？」
「相撲、見てないよ。
今ねぇー、中学の先生に言われてＮＨＫのテレビニュースのあと、新聞の社説を読んでいたの」
「へぇー。
社説。
どうだった？」
「ちょっと面白かった。
これからコラムを読むんだよ」
わしは急いでテレビを消した。
まいった！
まいった！

階下の孫娘が大きな声で呼んでいる。
「おじいちゃーん。
おじいちゃーん」
「どうした？
どうした？」
「おじいちゃん。
早く、早く」
声は居間の方らしい。

方的に寄り切った。
勝ち名乗りを受けると、孫娘は立ち上がって「おじいちゃん」「ｏｈ」一緒に立ち上がり、わしの大きな掌と孫娘のやさしい掌を合わせて、やった、やった、パンパンパン！
まずはめでたい。
孫息子と相撲観戦もいいなと思っていたわしは、小学生の孫娘とすっかり気が合ってしまった。

「まんじ」季刊発行内規

	（発行日）	（原稿締切日〔注〕）
春季号……	二月一日	……十二月三十一日
夏季号……	五月一日	……三月三十一日
秋季号……	八月一日	……六月　三十日
冬季号……	十一月一日	……九月　三十日

〔注〕円滑な発行を期す為「一週間前編集長宛到着」に努めましょう。

伊豆の歯科医業の祖（最終回）

堀内永代

諸井歯科診療所の治療時間は、朝八時から夕方の七時までであったが、建司の評判を聞いて泊りがけでくる患者があり、残業する日も度々であった。建司は、助手や書生のために自ら学んだ高山紀斎著の『高山歯科医学院講義録』や『保歯新論』『歯牙解剖図』『歯科手術論』『歯科薬物論』などを提供して、彼らの勉学を助けた。

また、入所間もない書生には、次のような本を詠み聞かせて初歩から指導した。

東京師範学校中里亮著『小學人體問答』
東京書林明治九年

問：口ハ何ノ作用アルヤ
答：思想ヲ言語シ、及ビ呼吸ヲ助クルノ作用アリ
問：歯ハ何ノ作用アルヤ
答：食類ヲ咀嚼スルノ作用アリ
問：前面ニ在ル上下各四枚ノ歯ヲ何ト云ヤ
答：門歯ト云ウ
問：門歯ノ左右ニ在ル上下各二枚ノ歯ヲ何ト云ヤ
答：牙歯ト云ウ
問：牙歯ノ左右ニ在ル上下各四枚ノ歯ヲ何ト云ヤ
答：二峯歯ト云ウ
問：其ノ奥ノ左右ニ在ル上下各六枚ノ大歯ヲ何ト云ヤ
答：臼歯ト云ウ
問：歯ノ総数計幾枚アルヤ
答：上下合ワセテ三十二枚アリ
問：歯ノ列ナリタル肉ヲ何ト云ヤ
答：歯茎ト云ウ
問：……
答：……

八

明治二十七年には、第一回の歯科医師国家試験が行なわれたが、伊豆には何の影響もなかった。諸井歯科診療所は、建司の求道者にも似た克己心の強い生活態度と、困窮者に対する慈愛の心が村人に通じ、治療を受けに来る患者は日増しに多くなってきた。

諸井建司が開業してから二年が経過した。診療所の陣容も、患者の数に比例して少しずつ増員し、今までの会津屋の人たちとは別に、新たに助手二人と書生三人が加わり、その世話をする女性と共に六人の世帯となった。

有資格者の代診の給料は、月額十円前後であったため、歯科医師の志望者が建司の所にやってきた。助手も書生も歯科医師になる夢を抱き、学びながら診療所で働いた。しかし、現実はなかなか勉強する時間がなく、助手たちは苦労の毎日であった。

その後も引続き患者が増加し、北は安良里、宇久須、土肥方面から、南は子浦、妻良、賀茂の各村々から、東は婆娑羅峠を越えた下田、河津方面から治療を受けに来た。これら遠方の患者は松崎の湯治場に泊りがけであった。

このように、奥伊豆の人たちは、歯科医師の開設を渇望していたので、多くの村々から、分院開設の要請があった。特に子浦とその隣村妻良の村長は、分院誘致に熱心だった。

両村長は、諸井所長を始め、歯科医師、代診、助手、書生などスタッフの宿泊所及び食事一切を負担するなど、好条件を提示して度々誘致交渉に診療所を訪れた。

あまりの熱心さにほだされた建司は、一月の内三日間を限って出張治療することを約束した。これが、諸井歯科診療所分院第一号である。

常に歯科的苦痛に悩まされていた村人は、歯科開業を待ち焦がれていたので、建司が子浦に臨時の診療所を開設するという話は、たちまち奥伊豆に広まった。

建司は松崎の本院を一時休診し、総勢五名の歯科治療団を組んで、松崎港から汽船を利用して子浦に出張した。汽船が船着場に着いたときは、子浦、妻良の村長始め、村の主だった者が大勢出迎えていた。

代診や書生たちは、持参した木製の治療椅子、足踏みエンジン、抜歯器具、薬品など治療機材一式を陸揚げし、

政府は西欧諸国にならって、医師だけでなく、歯科医師も資格試験を合格した者でなければ、歯科医業の営業を認めない方針とした。そのため諸井歯科診療所も、歯科医業資格者を置くことになった。

建司は、かねてより親密な取引をしていた日本橋の薬種問屋「大阪屋医薬材料店」の主人長谷川泰造を通じて、東京本郷の周旋屋から有資格者を一名雇い入れた。

しかし、村人たちは、建司の歯科治療技術を高く評価し、建司が治療しなければ患者は納得しなかった。それほど建司の信頼は厚く、技術も確かであった。

農家の別棟を改造した分院へ向った。

分院の玄関前には、二、三十人の老若男女が茣蓙を敷き、歯科治療団一行の到着を今や遅しと待っていた。

建司は技術人格ともに優れ、代診たちを指揮するその姿は、歯科医療に恵まれない人々にとって、神にも仏にも見えたことであろう。

患者は途切れることがなく、約束の三日では治療が終わらず、一日延期せざるを得なかった。

虫歯と歯槽膿漏（歯周病）が歯の二大疾病で、衛生知識と歯科医師が不足のこの時代には、歯の治療といえば抜歯が一般的であった。また、注射器による局所麻酔は日露戦争以後のことであったので、建司が開業した当時は麻酔なしの抜歯がほとんどであった（患者は高価な麻酔代の負担を嫌ったこともあった）。

抜歯するときは、患者を治療用木製椅子に腰掛けさせ、助手や書生が数人で手足を押さえ、先生が歯を抜歯用鉗子で挟んで引き抜いた。患者は激痛に耐えきれず、椅子の上で大暴れした。

このため、患者に苦痛を与えないように、電光石火の早業で抜歯するのが、腕のいい歯科医師といわれた。

幸い建司は、柔道で運動神経と腕力を鍛えていたので、手際よく抜歯できた。また、大阪屋医薬材料店より購入した粉末コカインを、蒸留水で溶いて患部に点滴する浸潤麻酔をして抜歯したので痛みが少なく、そのため評判がよく、建司の施術を望む患者が多かった。

歯痛に苦しむ患者の中で、軽い症状の者には抜髄したのち、石炭酸を塗布して消毒し、アマルガムを充填して治療を終えた。

虫歯治療で歯を削るときは、書生が踏む「足踏みエンジン」の動力を利用したハンドピースで手早く治療をした。

建司は、常に「医は仁術」の精神を心におき、患者の歯痛を如何にして軽減させるかを第一に考えて治療したため、益々評価が高まった。

九

子浦に分院を開設した翌年の明治三十三年には、養母ふじの生家から要請があって、下田に分院を開設した。

その後も建司の評判を聞いて伊豆の各地から、診療所開設の要請があり、伊豆半島東海岸の稲取、西海岸の仁科、田子、安良里、宇久津、土肥、南伊豆の波勝などへ次々と分院や出張所を開設した。

明治三十四年、松崎村は周辺各村を合併して町制を施行し、松崎町となった。

そんなある日の夕暮れ時、会津屋に出入する大工の鈴木為蔵が、半月も歯痛に悩まされ、もう我慢できないといって諸井歯科診療所にやってきた。診察し、抜歯することになった。

具合の悪いことに、大酒飲みの為蔵には麻酔が思ったように効かなかった。建司はその旨を為蔵によく言い聞かせ、本人も納得して、抜歯にかかったが、歯はなかなか抜けず、為蔵はあまりの痛さに椅子の上で暴れた。

「為蔵、男だ、我慢しろ……」

建司は叱咤し、助手たちにしっかり押さえように命じ、梃子を使って無事抜歯した。

翌朝、再び為蔵が診療所を訪れた。痛みが一向に取れないという。明るいところでよく診察すると痛んだ歯はそのままで、隣なりの歯がなくなっている。昨日は暗かったため、抜歯する歯を間違えてしまったのだ。治療室が暗いために起きた唯一の失敗である。

建司は治療費を返して真摯に詫び、改めて悪い歯を抜歯した。それから、直ちに日当たりのよい明るい二階に治療室を変更し、分院も出張所もすべて治療室を二階に移すことにした。

この頃は、古稀を過ぎた会津屋の女主人ふじは、店を番頭松吉に任せて余生を静かに送っていた。松吉は女中のよねと世帯を持ち、子供も三人になっていた。そんなある日、建司はふじの部屋に松吉とよねを呼んだ。

「松吉さん、およねさん、皆さんのお蔭で診療所も忙しくなり、私も松崎の本院にいることが殆んどない状態です。そんな訳で会津屋の経営までは手が廻りかねています。ですから私が会津屋をやるよりも、松吉さんとおよねさんにやってもらう方が、一番よいのではと考えています」

「……」

「私は、お二人に会津屋を譲りたいのです。店も暖簾も従業員もすべて引き受けてもらいたいのです。勿論、店の譲渡代金を貰おうなどとは思っていません。これは母さまと、何度も話し合って決めたことです」

「奥様、先生、そりゃァもったいないような有難いお話でございますが、私ども夫婦には荷が重過ぎてとても自信がございません。どうか今まで通りにやらせて下さい。お願いいたします」

「なるほどこれは私が悪かった。このような大事な話を突然に切り出したのではお二人も途惑うでしょう。それでは順を追ってお話しましょう。私はこれからも歯科医業を続け、歯痛で苦しむ伊豆の人たちを救ってやりたいのです。今はそれが私の天職だと思っています。それに私には、歯科医業と会津屋の両方をやるだけの力がないのです。そうなりますと、何代も続いた会津屋が、私の代で潰れてしまいます。それではご先祖様に申し訳ありません」

「……」

「そうかといって、素人の私には商売のことは全く分かりません。今、会津屋のことを一番よく分かっている

のは、松吉さんあなた方夫婦です。松吉さんを措いてこの店をやっていける人はありません。まげてご承知いただけないでしょうか」

「松吉、およね、お前たちも四十を過ぎた分別盛り、私からもお頼みします。どうか引き受けておくれ」

「それほどまでに私ども夫婦をご信用なさって下さるとは、使用人冥利につきます……それでは精一杯やって奥様や先生にご恩返しをさせていただきます」

「承知していただけますか、ありがとうございます」

「ところで先生はどうなさいますか」

「最近は子浦の分院が大変忙しいので、思い切って本院を子浦に移し、松崎の町の中ほどに家を建てて、会津屋の診療所をそちらに移します。そこを分院にして代診の松浦君に任せることにします」

「さようでございますか。よく判りました」

十

こうして建司は、会津屋を松吉・よねの夫婦に委ね、子浦に本院を移して転居した。その後も、建司は多忙であった。

依然として伊豆半島には、歯科医院を開業する歯科医師はいなかった。歯科医師不足は伊豆地方だけではなく、日本全国同じような状態であった。

その後も伊豆の各地から要請があり、網代、伊東、熱海、さらに神奈川県の真鶴に、また、西の方面は富士郡大宮町（現静岡県富士宮市）まで分院や臨時の出張所を設けるほどの多忙さであった。

建司が巡回診療に出かける時は、本院を一時休診し、代診、技工士、書生から、スタッフの身の周りを世話する女中まで連れて出かけた。短い滞在期間で二、三日、長いときは二ヶ月位滞在して診療した。

移動は船を利用することが多かった。陸路、天城越えをするときは、道路事情が悪かったので、馬車を利用して仁科川沿いの道を登り、標高千メートルの猫越峠を通って天城越えをした。なにしろ足踏みエンジンや治療椅子、各種医療機器、薬品から、着替えなど生活用品まで持参したから大変だった。馬車数台に分乗し、石ころ道をがたがた揺られての天城越えであった。

この頃には、建司は東京から派遣された歯科開業資格者や、自らが指導し育てた資格者に治療を任せて、もっぱらスタッフの指揮監督に当った。

指揮監督する建司は、長火鉢の前に端然と座り、歯科材料の手配や陶歯の選別を行なったり、ある時は患者の話し相手になって、歯の磨き方、義歯の手入れ方法などを患者に教え、四方山話に時を過すことが多かった。その姿は求道者の如く、聖者高僧のような威厳と権威に満ちていた。

患者は建司の姿を見ることによって、安心して治療を受けたということであった。

建司は、歯痛に苦しむ患者に対しては誰彼の区別なく、常に真心を込めて早朝から日没後まで一心に治療に当った。

また、生活は華美を戒め、質素倹約を旨とし、決して分を超えることなく、金銭に余裕ができたときは、世のため人のために惜しみなくこれを拠出する仁者の姿は、佛者の再来を思わせた。

これらのことは、彼が少年時代に両親から受けた報徳の訓えの賜物であった。

長身の彼は鼻下に美髭を蓄え、柔和な眼差しと、伊豆の歯科医業開祖の誇りと自信は、人を惹きつけずには措かなかった。

生来の器用さと、豊富な知識を持った建司が、その気になれば取れたであろう歯科医師の資格を、なぜ取得しなかったのか今も謎である。

彼は資格を取るために費やす時間を惜んで、歯科的苦痛に悩む伊豆の人々を救うことに全精力を傾けている間に、資格取得のタイミングを失ってしまったのか。それとも、歯科医師の資格を取得することよりも、彼には人を使って、歯科治療の事業を経営し、一人でも多くの村人を、歯痛から救済することに生き甲斐を感じていたのか。そのことに関して建司の口から聞いた人は誰もいない。謎である。

多忙の日々を送っているうちに、建司は不惑を過ぎたが妻帯はしなかった。苦しくて命を落とした許嫁佳代を忘れかねていたのだろうか。その後彼は、三人の女子を養子とし、歯科医師にするべく養育した。

養女となった三人のうち、長女は、上京して歯科医学校に学んで資格を取り、次女は、東京から派遣された歯科医師と結婚して独立した。

養母ふじは喜寿を過ぎた明治四十一年に死亡した。

建司も五十歳を過ぎ、子浦本院の二階から、駿河湾を隔てたはるか西方を眺め、遠い遠州西郷村の郷里を偲ぶ日々が多くなった。

功成り名遂げた建司は、亡き両親を思い、ある時は、東京帝国大学に学びし頃の講道館館長嘉納治五郎先生や、後年姿三四郎のモデルになった西郷四郎を偲ぶことが多くなった。兄弟子の四郎から伝授された山嵐の豪快な投げ技で、何度も窮地を脱したことなど、思い出は尽きなかった。

最近は会津屋の松吉・よね夫婦と会うこともなかった。

大正八年二月、松崎に新しく歯科医師が開業した。続いて十二月には下田に歯科医院が開設された。

伊豆における諸井建司の歯科医業も、ようやく役目を終える日が近づいてきた。さらに大正十年と十一年に、

下賀茂の日野と稲取に歯科医師が開業した。

大正十五年、六十歳になった建司は、伊豆の各地にあった諸井歯科診療所を閉鎖し、あるいは弟子たちに譲り、故郷の遠州小笠郡西郷村美人ヶ谷に葬られている両親の墓参に旅立った。

伊豆の人たちは、建司の人徳を慕い、無資格ではあったが、資格者以上に優れた歯科技術を持つ彼の隠棲を心から惜んだ。

末娘を伴って墓参に向った建司は、二度と伊豆に姿を見せることはなかった。

両親の眠る故郷で幸せな生涯を終えたのだろうか。伝説的人物になった伊豆の歯科医業開祖の消息は、今は知るすべもない。しかし、彼の残した偉大な業績は今も燦として輝き、伊豆の地に開業する歯科医師の心の中に生き続けている。

番頭松吉・よね夫婦に譲った会津屋も今は定かでない。

了

この小説を書くに当り、「伊豆の歯科医業の祖」に関する史実、及び歯科医療について、静岡県駿東郡清水町・太田歯科医院院長太田昭二先生及び松本医院松本光彦先生（実兄）から、ご懇篤なるご指導をいただき、かつ、貴重な参考文献のご提供をいただいた。また、松崎町教育委員会学校教育係長新田徳彦氏、松崎町観光協会事務局藤井祥治氏と南伊豆町産業観光課・白井係長の三氏から資料並びにご指導をいただいた。この場を借りて深く謝意を表します。

参考文献

一、青島攻著『これだけは知ってほしい歯科のあゆみ』ＡＢＣ企画、一九七三年。

二、掛川市史編纂委員会編『掛川市史』上中下巻、掛川市、一九九四年。

三、坂本豊美編、戸塚孝一郎著『静岡県歯科医事沿革史』静岡県歯科医師会、一九六六年。

四、松崎町教育委員会編『松崎町史・通史編』松崎町教育委員会、二〇〇五年。

五、牧野登著『史伝・西郷四郎』島津書房、一九八三年。

わが愛誦歌（三）

――戦後の歌壇逍遥

曽根竣作

○ちる花はかずかぎりなしことごとく光をひきて谷にゆくかも　上田三四二

『湧井』（昭和50）の四十四年作「花信」の中の一首。花と言えば「新古今和歌集」辺りまでは梅のことを指していたが、いつ頃からか花と言えば桜を意味することが定説になって来ている。掲出歌は、作者が吉野山の山麓温泉泉ヶ谷の元湯に逗留した折の作品。無尽数の桜の花びらがことごとく光をひいて谷に舞い下ってゆくと言う歌意、少しの無駄もなく実に簡潔な表現である。そして落花の艶と寂しさとをたたえながらこの世ならぬ花の浄土を現出する趣がある。「ちる花はかずかぎりなし」と嘆声をこめ、「ことごとく光をひきて谷にゆくかも」と簡浄的に詠みくだす。そこには華麗な花吹雪に魂を浄化されているような作者の姿があり、桜の叙景歌としては正に絶唱と言うべきであろう。三年前の重患から辛うじて回生を得た作者ならではの澄明な心境がここにある。また同時期に「さびしさに耐へつつわれの来しゆゑに満山明るこの花ふぶき」の秀詠がある。

○ただ一度生れ来しなり「さくらさくら」歌ふベラフォンテも我も悲しき　島田修二

『花火の星』（昭38）の「一市民」の中の一首。ハリイ・ベラフォンテは、渋い喉を聞かせ人種差別と闘ってきたアメリカの黒人ボーカリスト。六十年安保闘争の直後に来日し、初日公演のアンコールで彼が歌った日本民謡「さくらさくら」は、決して流暢なものでなく、むしろそのぎごちない調べに、黒人の背負う深い悲しみが滲んでいた。「ただ一度生れ来しなり」とする感慨は、彼はアメリカの黒人として、自分はアメリカに追従する日本人として、ともに同時代の重苦しい現実の翳を背負っている。たった一度だけの人生であるが、はからずも相通ずる悲しみに浸っていると言う歌意である。作者は、旧海軍兵学校の生徒であった頃終戦を迎え、静高より東大に進学しているが、或は戦時中の屈曲した想いがこの一首の裏にかくされているかも知れない。そしてその当

時の安保闘争に破れた知識人の心の痛みも重層されていると見られる。〈サラリーの語源を塩と知りしより幾程かすがしく過ぎし日日はや〉。

○サンチョ・パンサ思ひつつ来て何かかなしサンチョ・パンサは降る花見上ぐ　成瀬　有

『游べ、桜の園へ』（昭51）所収の一首。結句の降る花は勿論さくらの落花のことである。サンチョ・パンサは、セルバンテスの小説「ドン・キホーテ」の従者である。騎士道物語に憧れて痩せ馬ロシナンテを駆り、現実を見ずに猛進する主人の正義感の滑稽さ。それでも、従者サンチョ・パンサはついて行く……。そんな滑稽にして物悲しいサンチョ・パンサを思いながら、満開のさくら吹雪の降ってくるのを見上げる作者は、いつのまにかそのまなざしは、サンチョ・パンサのまなざしと重なってくると言う歌意である。

ここでこの一首の面白さは、上句の主語……作者に対し下句の主語……サンチョ・パンサと上下句で主語が異なっていることである。一人称の詩型と言われる短歌に於ては珍らしい文体の捩れであるが、これが逆にこの一首を著名作にした。作者の詠風は、一貫して反時代的な精神に貫かれているが、この一首にも高度成長期を必死で走った人々に対するアイロニーが潜んでいる。〈夕雲のにほへる窓は空ふかし滅びむとするもよきかにっぽん〉の近作もある。

○冬の鏃よせゐる海よ今少し生きて己れの無惨を見むか　中城ふみ子

『乳房喪失』（昭29）所収の一首。渡辺淳一の小説「冬の花火」は、中城ふみ子の乳癌と闘った壮絶な生涯をドキュメンタリー風に綴った名作であるが、その序文にこのうたは載っている。飽くことなく波が浜辺へ打ち寄せる光景である。その波涛を「冬の鏃」と比喩するとき、どこか苦渋に歪む人の顔が彷彿とさせられ、冬の海の寒々しさが押し寄せて来る。左右の乳癌手術を受けた作者が、小樽から札幌医大病院に放射線科に通院する際、車窓から石狩湾を見て詠んだ一首である。昭和二十八年秋、作者はまだ三十一歳の若さで、癒えることのない病苦への底暗い怯えと、女の性を司る乳房の欠損感が下句の「己れの無惨」に集約されているが、生きられる間は自分の悲運や苦悩を正面きって見極めてやろうと云う自虐的な覚悟の姿勢がここにある。普通の人なら、ここまで思い切った心境は吐露できないであろう。〈葉ざくらの記憶かなしむうつ伏せのわれの背中はまだ無瑕なり〉。作者は、戦後の歌壇に彗星のごとく登場し、一瞬の閃光を放つや三十一歳の若さで急逝されたが、今も中城ファンが居ると聞く。

○白百合の花びら蒼み昏れゆげばひろひ残しし骨あるごとし　五島美代子

『風』（昭25）の中の一首。祭壇の供養の白百合の花が、蒼みをおびて暮れゆくのに対っていると、ふと拾い残した娘の骨があるような気がしたと言う。東大の学生であった長女ひとみの急逝に、痛恨、悲傷の多くの歌を詠んだが、この歌も愛の執念が歌われている。掌中の珠とも愛でていた長女ひとみの死は、父五島茂の詠む「コミンフォルムの日共批判は当然とわれに思へき吾娘にむごかりし」（「短歌」昭40・2）というようにコミンフォルム批判の状況の中での自殺であったらしい。

教育者の父母を持つ名門の出の作者は、少女時代から和歌に親しんでいた。結婚後の一時期、社会的視野に立ちその想念を口語破調の短歌で表わそうとしたが敗北し、作歌を断念しようとした。しかし短歌への思いは捨て切れず、その後はひとすぢにわが子への愛執を歌いつづけたのである。掲出歌の蒼みをおびた白百合の花に触発されて、愛娘のこの世に残している唯一の骨を浮び上らせることは、愛の凄まじい形象化であろう。〈いのちありてまた見る空も大つちもすみれの水の色にたゆたひて暮る〉。作者は、昭和三十四年には現皇后美智子様が皇太子妃の頃、その作歌指導を拝命している。

○黒松の防風林をふちとして一湾は銀の氷を充たしたり　四賀　光子

『白き湾』（昭32）の「白き湾」所収の一首。昭和三十一年の作品。鎌倉の杏々山荘からの眺望を詠んだものであるが、鬱蒼とした木立に囲まれた山荘からは、はるかに相模湾を望むことができる。周辺を黒松の防風林によって縁どられた湾内は、日によってある瞬間銀色に輝き、あたかも氷を湛えたかのように見える。大きく骨太の叙景歌できりっと引き緊まっている。「銀の氷を充たしたり」という表現には、直観に拠る手法に基づきながら、対象把握の的確さと、それを詩的に昇華させる才気を窺うことができる。同じ景を詠んだ作品に「遠き岬も黒き翳もてる正午にて海のみ白しこの国の冬」の佳詠が見られる。凛然とした風格をもって、遠く湖水の如くに望む湾の光景を詠みあげたところには、信州出身の作者らしい沈潜した気魄さえ認められる。作者は太田水穂の良き伴侶として、永年結社「潮音」の運営に挺身してきたが、その人間としての芯の強さや温かさは、掲出歌に見られるように対象への厳格で温籍な対し方にも息づいていると言えよう。〈ひぐらしの一つが啼けば二つ啼き山みや声となりて明けゆく〉。

参考文献
現代歌人二五〇人（牧羊社）
現代名歌鑑賞事典（桜楓社）
現代百人一首（朝日文芸文庫）
現代短歌の鑑賞事典（東京堂出版）

レ 韃靼海峡

曽根竣作

冬空を圧して黒き雲の塊(くわい)夕べ微光をいただきに描(か)く

うつろひて量なす落葉掃く作務(さむ)の日日(にちにち)にして春は来向ふ

枝から枝ふくら雀のわたりゆき立春の風頬に冷たし

うすづける仙石原の花すすき白狐(びゃっこ)いくひゃく出で来ぬものか

レ 世に阿(おも)ねすぎ来し性(さが)をにれがみて川の澱みに石投げてみる

風はらむ高圧鉄塔凍て空に獄舎のごとくびんびんと立つ

歌作(な)せず夜を黙(もだ)せばはるかなる記憶の中に相思樹の咲く

煌煌とライト明るみ昂りて太極つるぎの演武はじめつ

最年長を自認しをれど表演にかそかに震ふわが足もとは

いっぷくの抹茶啜りて報国寺かそけき風に竹の声聴く

何気なく歯ぶらしをとり口に当つこの倖せに朝冷いたる

地下鉄の窓を覆へるま闇過ぎたちまちにして電飾のなか

ただよへる海星(ひとで)の生死(しやうじ)分かぬまま春の水際(みぎは)は白波かへす

眼下(まな)を模型のごとき列車行き高階ゆ見る朱儒(しゅじゅ)のいとなみ

存ふることの不確か、てっせんは紫濃ゆく返り花咲く

いつまでも埒のあかざるらち問題日朝の間絶壁をなす

さねさし相模の海のあさ凪ぎて崇き富岳の一望扶く

さくら貝蝶貝帆立散りぼひて冬の白砂に流離のこころ

尾を曳きていくさ日の恨み消えやらず大寒の朝海に真対ふ

霜おける朝の橋上さきがけて法被すがたのにひ年がゆく

河岸の葭の秀先をゆらしつつ上げ潮は冬の夕陽をはこぶ

薄日さす一樹に凭りて藍ふかき時空たゆたふ雲をまかげす

松籟のかそかひびける丘の上の小さきみ社に掌を合したり

千両の傍へピンクのシクラメンわが陋屋に灯を点したり

新刊書の匂ひむせくる書肆に入り今年はじめの良書を漁る

翅破れて韃靼の海越ゆる蝶ゆく手いかなる楽土あるらむ

いくたびも立ち上り書く白板の添削の文字けふは歪めり

見はるかす丘の傾への集落の点点として氷雨にけぶる

人命のあな軽きかな結審後四日まり経てフセイン縊らる

つづまりは内乱のさま招きたりイラク介入は大国のエゴ

短歌

行雲流水（十六）

石黒修身

〔一〕 私的短歌考(3)

藤沢周平と長塚節
―小説「白き瓶」を巡って―

(1) はじめに

藤沢周平は、その歿後も高い人気を保っているが、最近その作品が、次々と映画化されたことにより、一層その度合を増し、各出版社からの文庫本、新聞社の週シリーズの刊行など、さながらラッシュの様相を呈している。

また、映画も封切りの都度多くの観客を集めているようである。

本稿で採り上げる「白き瓶」は言うまでもなく歌人長塚節を描いた伝記的小説である。

周平の作品を素材的に分類すると、武家物（髷物）、市井物、芸道物となるが、「白き瓶」は強いていえば、芸道物のうちに入るのであろうが、その特異性として、小説の舞台設定に江戸期を主としてきた周平には珍らしく近代に舞台を据えている。その点で彼の作品系列上の一転機と言って良い。

本稿は、長塚節の評伝ではない。歌人長塚節を周平が、どのように捉え、どのような動機と背景から、この異色の伝記小説が出来たかを、節の歌人として側面を覗き乍ら小論にまとめて見たい。

(2) 長塚節と「白き瓶」

長塚節（一八七九―一九一五）は、茨城県生れの歌人、小説家で、正岡子規門下でアララギ派（根岸派）の重鎮であった。

短歌では、歌集「鍼はりの如く」が代表作であり、他方小説「土」により農民文学の一角を占めた。

昨今長塚節は、近代文学としては、“古典”の部類に入ると言っても過言ではなく、その著作の新規刊行はあまり無いようである。

然し、節に関する資料は多く、単行本から各種雑記、研究誌上の論文やエッセイは多くあり、明治以来の文人、作家についての文献数としては上位に位置したとの事である。

周平が「白き瓶」を書くに到った動機や背景については後述するが、伝記的小説であるからには当然としても、節の生涯につき多くの文献や資料を渉猟し、可成り突込んだ調査を重ねたものと見られる。周平は参考文献を六十三部使ったと自から記しているが、周平は節のすべてをこの作品の中に盛りこもうとしたのだろうか。

作家井上靖は「長塚節について知りたいことはすべてこの作品の中にある」と記している（文学全集の解説）。

なお、「白き瓶」は、昭和五十七年から五十九年にかけて、「別冊文芸春秋」の連載され、第二十回（昭和六十一年度）吉川英治文学賞を受けている。

(3) 周平と節の短歌

周平は、かつて俳句に親しんだ経験があり、自然詠を愛好していたというが、短歌については素人と見られている。

しかし、「白き瓶」の中で節の短歌を採り上げる際の味解、鑑賞の行き届いているさまから、歌人についての観察力の深さが窺われる。

周平は、「白き瓶」の中で、節の歌集「鍼の如く」の冒頭の有名な二首を掲げている。

「白埴の瓶こそ良けれ霧ながら朝はつめたき水くみにけり」

「曳き入れて栗毛繋げどわかぬまで櫟林はいろずけにけり」

第一首は、次の二首と共にこの小説の題名となった由縁であろう。

「白埴の瓶に桔梗を活けしかば冴えたる秋は既にふふめり」

「しらはにの瓶にさやけき水吸いて桔梗の花は引き締りみゆ」

申すまでもないが、埴は質の緻密な黄白色の粘土である。

「白埴の瓶」とは、素焼の瓶で、白は白いという意味と「素」という意味もある。それを題にしたことからも、周平の節に対する思い入れがあった。歌人清水房雄は、ある講演の中でこう語っている。

また周平は、「白き瓶」の結びで「三十七歳で世を去った歌人は、童貞であったという説がある。聖憎の面影があったと言われた清潔な風貌と、こわれやすい身体を持っていたという意味で、この歌人はみずから好んでう

たった白埴の瓶に似ていたのかも知れないのである」と記している。これも題名の由来とみる根拠であろう。

× × × × ×

周平は、短歌の世界には極く暗く、自分では一首の短歌も作ったことがなく、短歌との付き合いは極めて淡白であると述懐している。

その彼に、ただひとつの例外があり、思い出せばたちまち十数首の作品が口をついて出る歌人が節であるという。

周平が難なく理解し、親しみを持ったという二首を挙げている。

「小夜深にさきて散るという稗草のひそやかにして秋さりぬらむ」

「馬追虫の髭のそよろに来る秋はまなこを閉じて思ひ見るべし」

そこになじみ深い自然が、正確にかつすぐれた感覚で掬い上げられているのを見た。と述べている。

× × × × ×

「白き瓶」の中で周平は、恰も節に成り代る如く、短歌についての意見や感想を多く述べている。これは生半可な知識ではなし得ないことで、彼には短歌についての深い識見があったものと思われる。

作中には、当時の歌壇の実情が生々しく書かれており、従来の短歌史では記述されなかったであろう事柄が記されていて興味をそそられる。

例えば、アララギ派の結社根岸庵（根岸短歌会）を舞台とした、正岡子規と門下生、特に伊藤左千夫との議論や、周囲の歌人らの動静が、小説の中で生々しく描かれている。

(4) 「白き瓶」執筆の動機と背景

周平が、この小説により節を描こうとした背景を探ってみる。彼は、発端は自から忘れ得ない名著と称する平輪光三著の「長塚節の生活と作品」（昭和十八年一月刊）にあるという。その中に引用されている「初秋の歌」「乗鞍岳を憶う」などの短歌作品が、当時十六か十七才の文学好きの農村青年であった彼に訴えかけるリリシズムと理解しやすい親近感を備えていた。〔小説「白き瓶」の周囲〕と言うエッセイ（文春文庫）の中で述べている。

× × × × ×

歌人島木赤彦は、「アララギ」の後記に、「長塚さんは逝かれました。三十七才の短かい生涯に妻子も無くして逝かれました」と書いている。

また作家の佐高信は、「司馬遼太郎と藤沢周平」（光文社刊）の中で次の様に記している。「長塚節は、その力量と注目度に比して、やはり地味な歌人であった。周平は、その人間性に強く惹かれたのではないか」。また「周平は節を書くことで自分を書いた」と。

この様な周平自身のそして他の評者の論述を見るに、周平は、節の生涯から見える人間性や生き方に共感し、強く惹かれて、この作品を書いたと言い切って良いだろう。

(5) 周平と節の精神的共通性

節は、茨城の農村の人であり、周平もまた山形の農村の出である。その根底にある共通点が、周平の節に対する理解と愛着となって心の中に甦えらせただろう。周平にも農民の血が流れていて、節を書くことは周平にとり紛うことなく自分を描いたことなのであろうか。

周平は、自著「小説の周辺」で次のように述懐している。

「節の短歌には、私の見た少年の頃の田園風景、畑道や田や畦、目だかの群れる小川、表の街道を行く荷馬車など、そこにはまだ明治、大正という時代が影を落としていた。そういう風景を、いまも私の中に甦らせる力があるようである」。

また、文学者としての同質性については、前掲の歌人清水房雄は、文春文庫の解説の中で次の様に記している。

「周平の諸作品において見られる筋に入る直前の情景描写の姿や働きが、節の作品におけるそれと似ており、それは周平が節の作品から摂取したなどというものではなく、両者の同質性に由来するに違いない」。

「作品中、節の短歌をとり上げる際の味読、鑑賞の行き届いているさまも、同様に両者の同一性に行き当らざるを得ない」と。

(6) 石川啄木への思い

周平は、最後の作品となった「漆の実のみのる国」を書き終えた後（終盤で肝炎のため入院し、連載を中断し、最後に末尾六枚を書き、それが彼の絶筆となった）、回復したら生涯はじめての書きおろし小説として「石川啄木」を書く構想を持っていたという。（関川夏生、文春文庫「漆の実のみのる国」解説）

その想念の根底にあるものは何だろう。

彼が、「白き瓶」で節の一生を描いたことと、啄木を書く構想との共通点は、共に不運の歌人である点、そして彼の歌人に対する理解度において、両者に同一性を認めたことではなかろうか。

(7) むすび

昨今の周平作品のブームは、所謂〝腦物〟が中心であり、「白き瓶」はあまり知られていないとの認識で、周平の畢生の作品としての特異性と、遠ざかりつつある長塚節とその作品を胸中に甦えらせて、この小文をまとめた。

筆者の知識不足のため他者の論述からの引用が多くなったことを反省しつつ自作の一首を添えて本稿を終りたい。

「周平は節を描き余すなき「白き瓶」にて自(し)を重ねおり」　文中敬称略

〔二〕近詠二十首

軒先を「鬼平」が行く気配する本所「かど家」で軍鶏鍋を食む

香煙をふふめる風が心地良く師走の「回向院」江戸は杳かに

坪庭の如きあわいに名残留め本所松坂吉良邸の跡

届きたる「石狩獲れの鮭」一尾俎板に載せ故郷を嗅ぐ

流氷が押し寄せて来るギシギシと北方領土に繋がる如く

アムールゆサハリンを経し流氷に郷愁寄せる人もあるらん

ばんえいの競馬残りて道産子はホッとしており馬ともどもに

故郷にその名因みしビール飲む酔いほろ苦く外資を怪(あや)しむ

サラリーマン描きし川柳面白しされど哀歓切なくもあり

団塊の男(ひと)ら金の卵なら贈るエールは「ああ好景気」

三万余雨の東京駆け抜けし市民ランナーのパワーを称えん

失言をあげつらうのみに終始して国政の議は虚しく過ぎぬ

無党派という怪物の正体は良識派はた日和見か

六カ国夫々の利害まとめ得ず無法の国の好計に陥つ

宗教が対立を生むは宿命か中東にみる歴史のめぐり

パソコンのデータ視つつ医師告げり検査再び念の為にと

再検の「骨シンチ台」に一時間空白の刻を身じろぎもせず

ローマ史を書き終えて今淡淡と祖国を語る塩野七生は

逝きし人・歌壇率いる人もあり「昭和萬葉集」編みし歌人ら

遺されし人の心を癒す詩(うた)「千の風に」は詠み人知らず

針の穴を通った駱駝（七）

鍋屋次郎

慶長三年（一五九八）秋、家康から「前田家謀反」の難癖をつけられた前田利長は、高山右近に全権を託して、横山・藤波・脇の家老三名と共に家康のもとに派遣した。対外的には、正使が横山家老、副使を藤波・脇両家老とし、高山右近の立場は「家老間に意見の対立があった場合は右近の意見に従う」という調整役的な形を取っていた。

江戸瑞泉寺の一室で、江戸城に行った横山家老の帰りを待っていた三人は、悄然とした姿で部屋に入ってきた横山を見て、藤波が

「横山殿、いかが致した」

と声を掛けた。横山は高山右近の前に座り

「高山殿、不甲斐ない返事を持ち帰りました。家康は……」

後は言葉にならなかった。

部屋には、重苦しい静けさが漂った。右近が

「横山殿、冷静にあれ、というのは無理かもしれないが、徳川殿が何を言ったのか」

と声を掛けた。藤波・脇両家老は横山を凝視している。深く息を吸い込んで、自分を落ち着かせた横山が

「これから、順序立てて逐一申し上げる」

と言って三人を見渡し

「先ず最初に、徳川殿は何をもって前田家謀反と言われるのか。前田家は豊臣家に大恩ある身。秀頼様を擁した五大老・五奉行の現体制を命に代えても支える立場、徳川殿のご返答を承りたい」

横山は続けて

「ここまで言うと、家康は、『疑いを持つのは当方の考え。疑いを掛けられたらそれを晴らすのが世の習い』と勝手な言い草。煮えくりかえる腹の虫を押さえて、常々高山殿が仰っていた『天下の争乱をなくすことこそ諸侯

の務めであり、今は五大老・五奉行が小異を捨てて協力しあうとき』と申し述べましたが、聞いていないやら、聞いていないのやら」

ため息をついた横山は

「身どもの話に対して何一つ返答をせず、突然『芳春院殿を江戸に住まいさせろ。それなりの屋敷を徳川方で用意する』という言い草。簡単な話『人質に芳春院様を差し出せ』と言いだした」

この時、藤波家老は堅く握った拳で自分の膝頭を叩きながら

「それで貴殿はなんと答えたのか」

と血相を変えて横山に詰め寄った。右近は

「藤波殿、横山殿の話を最後まで聞こうでないか」

と藤波を諭した。横山は続けて

「そこで話を蹴飛ばして立ち上がりたかった。芳春院様はご高齢であり、人質に取ることは人の道に反する、などいろいろと反論したが、傍らに座っている本多正純が『このことは我が殿が考えに考えた結果であり、貴殿が断るならばこの話はそれまで』と話し合いの打ち切りを言い出した。これに対し、家康は『貴殿も相談する御仁がおられようから、明日羊の刻にまた会おう』と言ってさっさと席を立ってしまった」

話終わって、横山は

「高山殿、藤波殿、脇殿、子どもの使いに終わって申し訳ない。お許しあれ」

と両手をついて頭を下げた。

右近が

「横山殿、よく堪えてくださった。さぞかし無念であったと思います。家康はこの右近から回答を引き出したい魂胆であろう」

そして藤波・脇両家老に

「この状態をどのように乗り切るか、一刻ほど皆で考えよう。身どもに少し時を与えていただきたい」

と言って、自室に宛われている奥庭に面した部屋に戻った。

血気盛んな藤波もさすがに声が出ない。脇は慰めるかのように横山に寄り添っている。

夕食が終わって、右近が家老三名を自室に呼び集めた。

「各々方、ここに来ていただいたことは話が極めて内密なことでもあり、万一のことを考えてのことであります。

また、本来、横山殿が正使として皆さんを集めるのが筋ではありますが、横山殿からのたっての依頼によりこの右近が横山殿に替わって皆さんにお集まりいただいたことをご了承いただきたい。

ところで先程の横山殿のお話を聞いて、我らはどのようになすべきか、ご意見を賜りたい。先ずは藤波殿」

と藤波に発言を促した。

「当初は、横山殿は弱気すぎる、そこで啖呵の一つも切れなかったのか、とも思ったが、それでは全てをぶち壊すことになってしまう。とはいうものの、このまま、おめおめ引き下がるわけには行かない。芳春院様人質の条件を撤回させない限り帰国するわけには行かない」

続いて脇が

「家康は、我らに無理難題を押しつけてどうするつもりなのか。長期戦覚悟で本当に戦をする気があるのか。雪の北国の戦の厳しさは知っている筈。何か他に目的があるように思える」

ここで右近は横山に発言を求めたが、右近を見つめ首を振った。

藤波と脇が同時に

「高山殿の御存念を承りたい」

と言って右近に発言を促した。右近は

「各々方、少し長くなるが聞いて欲しい。今回前田家謀反の噂を立てたのは、石田・毛利側の策略と思う。徳川と前田家で争いを起こさせ、もし本当に争いになれば長期戦になって双方の力は大幅に減退する。そこで天下を掌握できる力のある徳川・前田両家を疲弊させ、漁夫の利を占めようとする陰謀と思う。家康は石田・毛利側から言い出した前田家謀反の噂を使って、戦わずして前田家を徳川陣営に取り込み、例え取り込めなかった場合でも前田家を敵側陣営に組み入れたくない、と言う深慮遠謀から来ていると考える」

三人の家老は、じっと右近を見つめている。右近は続けて

「今の五大老・五奉行体制は早晩崩壊する。次に天下を治めるのは家康しかいない。家老をはじめ家来衆に人材が豊富だ。そこで、我々はここで一挙に前田家将来の安泰を確保することを考えたい。謀反だの人質だの、という目先の問題ではない。

家康が芳春院様の江戸下向を取り下げなければ、反対条件として、今六歳になられる利常様（注1）のご正室を徳川宗家から申し受けることとしたい。言葉をかえていえば人質の交換となる」

ここまで言うと、藤波は

「高山殿、天下の情勢は確かに仰せの通りと存ずる。利常様のご正室と言ってもまだ先のことではないか。反故にされたときは如何なさるおつもりか」

と尋ねた。

「藤波殿、徳川と石田・毛利の争い、これは天下を二分するものだ。短時日に終わるとお思いか。徳川は一挙に豊臣を壊滅させることはできない。現在は徳川も石田も毛利も豊臣家の家臣である。先ずは、豊臣政権下の家

臣団の争いが始まって、その次に天下取りの争いに移ってゆくであろう。そこで、初めて政権が豊臣から徳川に移ることになる。徳川が天下に号令を掛けるまでに、短くて五年、長ければ十年はかかろう。従って、利常様のご正室のことは、家康の直筆を貰っておく程度でよかろうと考えるが」

横山が初めて顔を上げた。

「高山殿、流石のご見識。ところで今のお考えをどのようにして家康に伝えるのであろうか。この横山では高山殿のように話すことはできない。と言って、家康はこの横山にしか会わないと言っている。身どもが正使であるだけにそれも筋が通っている」

「横山殿、そのことは、各々方が異存がなければ、高山から家康宛書状を認める」

「高山殿、殿（前田利長）に事前にお伺いをたてる必要があると思うが」

と脇が言い出した。

「通常であればお説の通りである。しかし、今は前田家存亡の危機にあると考えられよ。逆に考えれば百年の安泰を確保する絶好の機会とも言えるのだ」

三人を見渡した右近は

「殿と芳春院様には、この右近がご説明申し上げる。万一お聞き届けがない場合は、この右近が責任をお取り申そう」

と言うと、横山は

「高山度殿、ご貴殿のみに責任を取らすわけには行かない。我ら三名も腹を切る。のう、藤波殿、脇殿、お覚悟は如何」

と言うと、藤波と脇は

「当然のことよ、念を押すには及ばない。高山殿にお従い申す」

とはっきり言い切った。

翌日、羊の刻。江戸城内では昨日同様正面に家康、やや左斜め前に本多正純が座っている。横山が差し出した右近から家康宛の書状を読み終えた家康は、黙って本多正純に

「そちも読め」

と渡した。本多正純が読み終えるまで沈黙が続いた。

家康は、その書状を正純から受け取ると

「前田家はよい客人を抱え、利長殿も果報者よ。また、これほどの書状を一夜で認めることができる主従の信頼関係は見事と言ってよい。この家康、羨ましく存ずる。横山殿、暫く待たれよ。利常殿のご縁組み、お約束致そう。書状を持ち帰られよ」

と言って立ち上がって奥へ行った。

暫くして現れた家康は、持ってきた書状を開き、横山

に渡した。

そこには、将来にわたって徳川・前田両家が共に手を携えて行くために、利常の正室は徳川宗家筋からお出しよう、と言う内容であった。

その後、しばしの時間、本多正純と歓談した横山は、芳春院の江戸下向日程などについては、利長の裁可を待って、改めて協議することを約束して下城した。

それから五日後、ようやく金沢に戻った右近一行は、利長に報告した。利長は

「高山殿、前田家存亡の危機を、むしろ将来的な安泰を得ると言う、考えてもいなかった方向で解決いただいたことは、亡き父も泉下でお喜びのことと存ずる。利長、礼を言います。芳春院様も必ずご納得の上江戸に下向してくださいましょう。これは利長から話をします」

と言って、この解決を了承した。

横山達家老が利長の前を下がってから、右近は利長に

「殿、天下の目には、前田家が全面的に徳川の軍門に下った、と映るでしょう。石田・毛利連合が徳川と対戦するときには、我が前田家に攻め寄せて来ることを考えなければなりません。そのために、この金沢城を一段と攻め難い城に改修する必要があります。この修築工事を右近にご用命ください」

と言って、右近はそれから二百日で城改修工事を完成させた。

翌慶長五年（一六〇〇）七月、石田三成が挙兵し、関ヶ原の戦いが始まった。前田家は近隣の大聖寺城攻略と浅井畷の戦いのみで、関ヶ原には弟利政の出兵拒否があって、徳川陣営への参加が間に合わなかった。

ところが、戦後の論功行賞では、利政の領地能登二十一万石が利長に給され、ここに右近のとった対徳川姿勢が評価されていた。

更にその直後、利長の養子利常に、徳川秀忠の次女珠姫を正室として迎えた。右近が家康からとってきた「証文」が実現した。

利長は喜ぶと同時に、家康が一目も二目も置いている右近を重用し、前田家加判の列に加え、その序列も、前田家一門と筆頭家老の間に位置し、家臣とは別格の扱いであった。

戦から開放された右近は、ようやく、自分自身がかくありたいと願っていたキリシタンとして、茶人として、平安な日々を過ごしていた。

関ヶ原の翌年、慶長六年（一六〇一）には金沢にバー

デレを招き、利長が家臣達に「たまにはキリシタンの話を聞くのも為になろう」と言った薦めもあって、利長の家臣達数名が洗礼を受けた。

また、右近の高槻・明石以来の家臣が住んでいる能登に二つの天主堂を建設したことから、その地域は天主堂を中心としたキリスト教社会が出現したような状況になっていた。

慶長八年（一六〇三）には、小西行長の元家臣で丹波八木城主であった内藤飛騨守如安が右近を頼って金沢に来た。右近は如安をキリシタンとして、人格者として尊敬していたので、利長に話して、少禄ではあるが前田家の客将として迎えた。バテレンを招き、更に如安が加わったことにより、金沢でのキリシタンは益々活発になっていった。

翌年の正月、城内での年賀儀式が一通り終わった頃、家老横山長知が城内書院にいた右近を見つけて

「高山殿、少しお話しさせていただきたいが宜しいか」

と改まった口調で話しかけてきた。

右近は、何事であろう、と思いながら

「どうぞ」

と座布団を指し示した。そこに座った横山は

「高山殿。実は愚息康玄（やすはる）のことでお宅へお伺いしたい」

と言いだした。右近は娘ルチアのことと察して

「康玄殿は素晴らしい若者ですな。ご家老の来宅をお待ち申し上げる」

と言って、この場では話を深入りさせなかった。

右近の屋敷内の小さな天主堂で行われるミサに、横山家老の長男康玄は欠かさず出席して、バテレンや右近の話を聞き、半年ほど前に洗礼を受けていた。

妻のジュリアから、康玄が娘ルチアに思いを寄せていること、ルチアも同じ思いでいることを聞かされていた。

しかし、横山家老が二人の結婚を許すかどうか、家老が右近を尊敬していることは分かっていても、今は表向きキリシタン禁制が残っている時代。いつ、突発的にキリシタン弾圧が起こるか分からない。しかも、横山家は前田家の筆頭家老の家柄。そのように考えると右近からは言い出せなかった。

横山家老が右近宅を訪問した後は、話は順調に進み、二人が利長に報告したとき、利長は

「キリシタンの結婚式には余も出てみたい。祝いの一つも考えよう」

と大変喜び、殿様直々出席の結婚式となった。

殿様が帰られた後の披露宴は、屋敷の庭に菓子を乗せた椅子を沢山並べ、誰でも自由に参加できる形式で行ったので、多くの人達が二人を祝った。

この頃の天下の形勢は、徐々に徳川体制が強まってきていたが、南蛮交易の独占を狙っていた家康は、キリシタンを黙許していた。と言うよりも見てみない振りをしていたので、京・大坂はじめ各地の天主堂は復活し、バテレン達も日中堂々と歩いていた。

ここ金沢でも慶長十年（一六〇五）には、利長のお声掛かりで、金沢城近くの紺屋坂に天主堂（以下南蛮寺という）を建設した。利長のお声掛かり、ということもあって、上流武士階級で洗礼を受ける者が続出した。

それから二年後の慶長十二年（一六〇七）には利長の妹豪姫が金沢に戻ってきた。豪姫は宇喜多家に嫁いでいたが、宇喜多家が関ヶ原で破れた後、豪姫は北の政所に仕え、京で洗礼を受けていた。

その直後、キリシタンで浪々の身であった宇喜多久閑も金沢にやって来た。

そのような人々が集まった前田家領内でのキリシタン信仰は、新たに建設された南蛮寺でのクリスマスミサと、その後のクリスマス祝会には多くの信者が参加し、信仰による霊的祝福を得た人々は「仰ぎ見るパライソ（天国）の如し」と喜びにあふれ、その様子を見た人々の中から洗礼を受ける者が続出していた。

しかし、右近の心中は複雑であった。

「家康は徳川体制にとって邪魔になるものは、全て切り捨ててゆくであろう。既に南蛮交易を一手に手中に収めたからには、やがて強烈なキリシタン弾圧にでて来るに違いない。

その時自分はどうすればいいのか。自分が殉教することは、キリシタンになった人々を裏切ることになるのであろうか。

いや、そうではない。バテレン達は、気の遠くなるような遠い国から、万里の波濤を乗り越えてやって来ているではないか。なぜ命をかけてやってくるのか。

右近の自問自答は同じところを繰り返していた。自分を振り返ってみると、ゼウスの教えに忠実に生きてきた、と言うよりも、そうすることが何よりも自分の心が落ち着き、喜びを味わい、そのようにせざるを得ない自分であった。明石で大名を捨てたことも、悲しみではなく、そうすることが自分の良心……信仰……に最も忠実な生き方で、それ以外の選択肢はなかった。人が何を言おうとそれしかなかった。

キリシタンの教えは、今の時代では為政者からは受け入れられないだろう。しかし、一人でも多くの人が、ゼウスを信じ、その教えに忠実に生きることにより、その人の魂に平安と喜びが与えられることを知って欲しい。自分はそのために生かされているのであって、例え自分が真っ先に殉教しても、キリシタンになった人達は自分を恨むことはないだろう」

右近は内心悩みながらも、利長のキリシタン庇護政策により平穏な日々が続いていることを感謝していた。

しかし、利長は二年前に家督を利常に譲り富山城に隠居していた。利常は、表向きは利長のキリシタン庇護政策を踏襲していたが、将軍秀忠の婿として江戸への傾倒が強まっていった。

その頃江戸では、仏教界の大物、金地院崇伝が家康に「キリシタン大名やキリシタン浪人に対して、大阪方が高禄で抱えると誘いの手を伸ばしている。高山右近をはじめとしてキリシタンが侮れない敵対勢力になる危険がある。キリシタン禁制を建前に、これらの者を一挙に取り締まるべきである」

と、高山右近を名指しで、家康に迫っていた。

慶長十六年（一六一一）十二月初め、利長から右近宛に早馬で書状が届いた。内容は

「気分が優れぬ。右近の顔を見て語り合いたい」

としか書いてない。右近は、利長が江戸幕府のキリシタン政策について何かをキャッチしたのではないかと考えた。

明日にでも登城して、利常の許可を得て富山へ行くことを考えていたところへ、突然に豪姫が訪ねてきた。

奥座敷へ案内すると、

「右近殿と二人だけで話をしたい」

と言い、袱紗の中から、ロザリオ、メダイ、十字架などを取り出して座卓の上に並べた。いずれも高価な作りのものである。

「右近殿、兄（利長）から連絡があって、これを右近殿に預けるように、とのことです。恐らく富山に持ってくるように、と言う指示ではないかと思います」

と言って右近を見つめた。

右近は

「分かりました。ご事情は推測することしかできませんが、姫様がお持ちになっておられるより、先代様のところにお預けになる方が安全でしょう」

と言って預かった。

三日後、馬で駆けつけた右近は富山城内奥書院で利長と

と二人だけになっていた。利長は

「右近殿のことだから用向きは分かっていると思うが」

と言って立ち上がり、隣室に控える小姓も遠ざけて

「江戸と長崎でキリシタンが大きな事件を引き起こしたらしい。江戸城内でもキリシタン摘発があったそうだ。そこで、キリシタン摘発の火の手は、京・大阪のみならず全国に飛び火するであろう。中でもこの加賀と右近殿は最も厳しい詮議が行われると覚悟する必要があると思う」

これを聞いた右近は、黙って利長を見つめていた。

「右近殿、驚かないのか」

の声に、右近は

「大殿、覚悟はできております。お世話になっている前田家にはご迷惑をおかけしないように、我が身の処理を致します」

「この前田家も今は利常の治世。余ができることは、江戸の動きを誰よりも早く察知して右近殿に伝えることのみ。江戸城内に幕閣情報を入手できる情報網は持っている」

ここまで言って、豪姫が右近に託したロザリオなどを広げ

「豪姫を頼む」

と一言ポツリと言った。右近は

「承知致しております。豪姫様には天主堂へのお越しをご遠慮していただきましょう」

その夜利長は右近に対し、前田家としてキリシタン隠匿などの詮議をかわすため、そして前田家が更に一層徳川と密接な関係を結ぶために、利常の家老として、江戸幕閣に近い人物を加賀に招聘する意向も漏らした。

金沢に帰った右近は、登城しない日は、身辺整理をした。右近の屋敷からは、数日の間書類を燃す煙が立ち上った。南蛮寺をはじめ能登の二つの天主堂にも指示を出し、信徒名簿をはじめ関係書類は全て燃やし、摘発されたときに信徒に一切迷惑が及ばないようにした。バテレンとイルマンにもいつでも退去できるように身辺整理を依頼した。

江戸で発生した事件はこうであった。

慶長十三年（一六〇八）、有馬晴信の朱印船乗組員がマカオでポルトガル人と争い、六十人が殺害された。翌年、これに関与したポルトガル船が長崎に寄港したので、有馬晴信はこれを襲い、船長はじめ乗組員全員を船共々海中に沈めた。

有馬晴信は、これの恩賞として今は鍋島領になっている晴信の旧領肥前三郡を返して欲しいと、本多正純の与

力岡本大八に賄賂を送り依頼していた。この贈賄事件が発覚し、調べてゆくと、有馬晴信も岡本大八も共にキリシタンであり、旧領返還運動は「公儀決定事項へのキリシタンによる反逆」と烙印が 押された。

そして キリシタン摘発を行った結果、幕府膝元の江戸城内奥女中に数名のキリシタンが発見された。しかしどのように諭しても脅しても棄教せず、ついに伊豆大島への島流しとなった。有馬晴信と岡本大八は配流先で死罪を申しつけられた。

江戸幕府は、大阪城との戦いが避けられないと判断している時期であるだけに、膝元の江戸城内からキリシタンが発見されたことに驚き、キリシタンが大阪方へつくことを恐れ、キリシタン大名は勿論のこと、キリシタンの一掃に着手した。

注1　前田利常は、前田利家の七男であったが、利長に男子がなく、利常を嗣子として養子に迎えていた。

社　告（内規）

☆　同人参加へのお誘い

私達はひろく同志の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆　維持会会員へのお誘い

本誌愛読者の内、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数カ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行ない、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行なっております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

文化勲章に輝く

赤堀四郎博士の一生（六）

松下魏三

八　化学探究への道

千葉医学専門学校薬学科を卒業した四郎は大阪に本社のある製薬会社「桃谷順天館」に就職した。会社での仕事は東京で、当時東京帝国大学理学部化学科の講師で桃谷順天館の嘱託（のちに東大・工学部助教授・三共顧問）をしていた西沢勇志智先生の研究助手をつとめることであった。四郎の仕事は西沢先生のトリモチの研究の手助けをすることで、研究室は東京の本郷にある東京帝国大学理学部化学科の地下室であった。

トリモチはモチノキの樹皮を水に漬けて腐らせてから臼に入れ搗いた後水でよく洗ってから何回かよく練るとできる粘着力の強い物質で当時の子供たちは竹の枝先につけて目白などの小鳥を捕ったものである。

四郎は西沢先生の研究の手助けをしている研究室が東京帝国大学というわが国最高の学問の場であるから何か将来有益な講義を聞きたいと思い西沢先生にお願いしたところ、先生は快く承諾して、池田菊苗博士の化学通論の聴講が出来るようにして下さった。

池田菊苗博士は一九〇八年に昆布のうま味がグルタミン酸ナトリウムであることを発見し、その後鈴木三郎助という実業家と協力し大量生産に成功し「味の素」という商品名で売り出したのである。この味の素は次第に普及し、大きな食品産業となり海外にも輸出された。

このように池田菊苗先生の「化学通論」の講義は狭い意味の化学ではなく広く実業的な感覚をもつような講義で学問の深さをしみじみ感じ、化学について更に深く探究したい意欲と憧れを持つようになった。

特にこの「化学通論」は千葉医学専門学校の薬学科では聞くことが出来なかった本格的な内容で、物質の神秘を探る化学の本質を追究し、自然科学と哲学との関係について学ぶ魅力的な講義であった。

後に四郎が知ったことは、池田先生はヨーロッパに留学中ロンドンで夏目漱石と交流があり、漱石のほうが池田先生の人間性の豊かさや見識の深さを知り、その影響を受けたと言われている。四郎はこのようなエピソードを聞き、池田先生の深い洞察力と人間味豊かな名講義に耳を傾けるチャンスに恵まれたことを終生忘れることが出来ず、池田先生の名講義とともに西沢先生の心づかいに感謝したのである。

またこの時代には日本の化学界では三つの大発見があった。一つは高峰譲吉博士のタカジアスターゼという消化酵素もう一つは鈴木梅太郎博士のビタミンB1を含む脚気の特効薬といわれたオリザニンである。他の一つは池田菊苗博士のグルタミン酸ナトリウムの発見である。これら三つの発見はその後大量生産に成功し、三人の発見者はともに象牙の塔にこもることなく発見したものを更に企業化し、広く社会に送り出し、産業経済の発展や国民生活の向上に貢献したのである。

当時東京帝国大学の理学部化学科は伝統的に物理化学が中核となっていたが、有機化学の分野では東北帝国大学の理学部化学科の真島利行教授の研究室がわが国の有機化学の原点ともいわれていた。

四郎が東京帝国大学の理学部化学科の地下室で西沢勇志智先生の研究を手伝っていた頃トリモチの研究は真島利行教授の指導によるものであったので、その年の夏二か月西沢先生とともに有機化学の研究方法について東北帝大理学部の真島研究室に内地留学することになり、これが真島利行先生との出会いであった。この時の真島研究室の雰囲気は化学を本格的に学びたいと思うような大変魅力的なところであった。

その後、真島利行先生を生涯の師として化学を学び、知遇を戴くようになったことを誰かが〝これこそトリモチがトリモツ縁である〟とからかわれたことがあった。

大正十年（一九二一年）の夏東北帝国大学理学部の真島研究室での内地留学が終り、東京へ帰ってきたが、真島研究室の雰囲気の素晴しさに大きな衝撃を受け、まるで恋のとりこになったようであった。

日本の有機化学のメッカと呼ばれていた東北帝大の真島研究室は真島利行教授が心血を注いで築いた城であったので、僅か二か月の内地留学にもかかわらず四郎の真島研究室に対するあこがれは強くなるばかりであった。

このような四郎の心情を察知した西沢勇志智先生は、「君、ここで今の仕事を続けても仕方がないだろう。東北帝大は専門学校の卒業生でも正規入学ができるから、この大学に入学して化学を勉強したらどうか」と言われた。

当時わが国の帝国大学は五校あったが、その中で理学部があるのは東京・京都・東北の三大学だけで、東京帝

大と京都帝大は旧制高校の卒業生で定員が満員になるので、傍系の専門学校の出身者が入学できるのは東北帝大だけであった。

九　東北帝国大学理学部化学科へ

日頃から親切で義侠心のある西沢勇志智先生は機会あるごとに四郎に東北帝大の理学部化学科を受験することを勧めていたが、四郎が決断しかねていたのは大学三年間の学資のめどがつかなかったことである。しかし憧れの東北帝大で化学を学びたい熱望はますます燃え上がるばかりで、多くの悩みを抱きながらも初一念を貫き通すことが自分を生かす道であると考え、奮起して受験勉強に専念することにした。

これまでの千葉医学専門学校薬学科では学ぶことができなかった物理学と物理を理解するために必要な微分学や積分学は牛込にある物理学校（現東京理科大学）の夜間部に通って勉強した。この学校は理数系ではわが国唯一の夜間部の専門学校で苦学生が多く、誰でも入学することができるが、授業は厳しく試験に合格しなければ進級することも卒業することも出来ない厳格な教育で有名であった。そして他の学校より学費が安いので、貧しいが真面目で優秀な学生が多かった。卒業生は旧制の中等学校の数学や物理の教師になる人が多かった。

大正十年の秋から翌年の始めまで、毎日、この学校の夜学で、すし詰めの狭い教室で、堅い木の椅子に座り、薄暗い電灯の下で、眠気と闘いながら学んだが、熱い希望に燃える四郎には苦にはならなかった。

この奮闘努力のかいあって翌年の春東北帝国大学理学部化学科に入学許可の通知を受け取ることができた。後に四郎は〝わが青春〟の中で「入学許可の通知を受け取った時には、込み上げてくるうれしさで大声で叫びたいのを抑えるのがやっとだった。」と述べている。

いよいよ憧れの大学へ入学となったが、会社は退職しなければならず、学費のめどを立てなければならなかった。

学費については都合がつかなければ独学で化学を勉強しようと考えたが、自然科学としての化学は正規の学校で理論と実験技術などの正規の学習と訓練が必要であり、独学でと考えたのは余りにも浅はかであった。また、理科系特に化学を学ぶ者にとって徹夜の実験は当然のことでアルバイトなどをしている暇はなく、不況の時代であったから働くこともできなかった。

当初から学費の援助については父親を頼ることは考えていなかった。そしてこの時父秀雄は小学校長を退職しており、定期の収入はなく、僅かな田畑の収穫では日常生活を維持する程度で、学費を親に負担させることは出来なかった。

その後このことについて悩んだ結果、進学を断念し、西沢先生に事情を話し、再び助手として勤めさせていただきたいと懇願し、郷里の父には「東北帝大の入学試験には合格したが、学費の算段がつかないので入学は断念する」と報告したところ、直ちに返事があって、「大学の入学試験に合格しながら入学をあきらめるなど、そんな意気地のないことでどうするか、学費は借金をしてでも工面してやるから、取りあえず入学の手続きをしなさい」と、入学金と最初の授業料を送ってくれた。（「わが青春」より）

しかし、四郎にとって、父の温かい親心は涙が出るほどありがたかったが、母や四人の弟妹の将来を考えると一家を犠牲にすることは出来ないので、進学をあきらめると再度父に断わりの手紙を書いた。

学資についてめあてのないまま困惑していた四郎に思わぬところから援助の手が差し伸べられた。それは四郎が大蔵省で給仕をしながら錦城中学で学んでいたとき、化学を教えてもらった高山義太郎という先生であった。この人は東京帝国大学理学部化学科の大学院生で池田菊苗博士の研究室でアミノ酸の研究をしていて、時々西沢先生の研究室にも顔を出し、四郎にも声をかけてくれた方であった。

高山先生は株式会社味の素本舗を創立した鈴木三郎助の親戚で、後に味の素会社の研究課長になった方であった。

西沢先生は四郎が東北帝大に入学する学資に困っていることを心配して、高山先生に懇願し味の素会社に四郎の学資を援助してほしいと打診した。当時味の素会社の専務であった鈴木忠治氏は平素から優秀な化学者の養成を心掛けていたので、四郎の大学在学中の学費を援助することを承知して下さった。

当時は第一次大戦後の不況の最中であったが、四郎の大学在学中の学資の援助を承知して、学問の世界に送り出したのである。

大正十一年（一九二二年）四郎は東北帝国大学理学部化学科に入学した。この時代の東北帝大理学部は創立後十年で若い優秀な人材が集っていた。

特に教授陣には後に文化勲章を受章されたKS磁石鋼の本多光太郎博士やアインシュタインの相対性理論の紹介者である石原純博士という高名な物理学者もいた。

また学生には女性として最初に帝国大学に入学した大正初年の化学科には東京女子高等師範学校から黒田チカと丹下ムメの才媛が入学し、ともにわが国では最初の女性の理学博士が誕生し、黒田博士は天然色素の研究、丹下博士は日本の古代染料のムラサキグサの成分であるシニコンの研究で有名である。

傍系の薬学科出身である四郎は学閥臭の薄い森の都

仙台にある東北帝大の自由な雰囲気と、優れた教授陣の下で勉学に専念することができた。

東北帝大理学部化学科では一年と二年では主として理論化学、無機化学、有機化学、分析化学等の基礎を学び、三年では真島利行教授の指導で有機化学の研究実験を行い、生物化学を学んだ。卒業年度はあこがれの真島研究室で生物化学を勉強したが、真島教授は実験を重視し、理論には慎重で冷淡に思えるほどで容易に結論的なことをいわない先生であった。そして難しいことや創造的なことでなければ関心を示さないし、また人の真似でない新しい考えがあれば評価し、そのような内容がなければ成功しても関心がなかった。このような学風が四郎に染み込んで後年の弟子たちにも伝わっていった。

四郎は余暇をみては仙台市の郊外にある高山樗牛の瞑想の松を友人とともに訪れ、樗牛が旧制第二高等学校の教師であった頃思索に耽けった松の名所に出掛けて、小学校時代に清水の竜華寺に参詣した遠足を思い出し、感慨にふけっていた。



ホメラレモセズ　クニモサレズ（一～三）

松下壽男

一　宮沢先生

「ら・らら・良知　り・りり・陸一です。よ・よろしくお願いします」

陸一には、そこまで言うのがやっとだった。生来の吃音は、村の小学校から、この花巻の農学校まで優等生として過ごしてきた余裕の中で、なんとか目立たなくなっていた。しかし今、町の名士の子息で、盛岡高等農林の研究科を終え、助教授にという推薦を蹴って故郷の農学校に奉職なさった、宮沢先生と対面しているのだった。

（どもっちゃなんめえ、どもっちゃあ）

と、自分の番が来るまで言い聞かせ続けた揚げ句に、自己紹介で自分の氏名を吃ってしまうなんて。陸一は頭のてっぺんまで赤くなって、うな垂れた。すぐに教室中にどっと嘲りの笑いがこだますることになるのだ。

しかし、響いたのは、宮沢先生の明るい歌うような声であった。

「おお、なんて美しく響くアールの発音でしょう。ドイツでは劇場や晴れの舞台で朗読する時には、アールは思いっ切り舌を振るわせて発音するのです。丁度今の君のように。君には、きっと語学の才能がありますよ。良知陸一君ありがとう。」

陸一は、嬉しかった。何となくただの吃りではないような気がした。その証拠に誰も彼を笑うものは居ないではないか。彼は生まれ変わったような気がした。そして宮沢賢治先生の顔が眩しく見えるのだ。

一通り自己紹介が終わると、先生は、黒板に白墨で、腕をコンパスのように一気に回して、美しい円を描いた。木目が浮き出て波打ち始めていた黒板までが凛と張りつめた感じがした。そして、円に外接する正方形と、内接する正六角形をサラサラと澱みのない音を響かせながら描いていった。

「さあ、皆さん、この図からどんなことがわかりますか。」

陸一には、描かれた図がまず美しかった。そして、円を囲む四本の直線が直径に等しく、円に囲まれた六本の直線が半径に等しいことに気付いたとき、これまで闇雲に覚えてきた数字の羅列の円周率というものを、目で見ることができたのであった。学問というものの形をとらえることができたような気がするのだった。

陸一が一人でうなずいているうちに、先生の話は、ライプニッツの数列に及んでいた。先生の腕が上下に次第に小刻みに揺れながら黒板の上を滑っていった。白墨が残した軌跡から陸一は無限の一点に向かって進んで行く一途な歩みを感じた。宮沢先生の話は陸一には解らないことだらけだったが、解らないことは苦痛ではなかった。むしろ学び続けていけば少しずつ解っていくに違いないという楽しみを授けてくれるように、陸一には感じられるのだった。

化学実験室で、白衣を着た宮沢先生の授業は、まるで魔法のようであった。試験管が、フラスコが、窓ガラスから光の差し込む実験室が、陸一の心をわくわくさせた。真鍮の蛇口から流れ出る水までが、伝説の聖水のように感じられるのだった。

宮沢先生の授業では、実験の結果がどんな現象を引き起こすかはあらかじめ知らされていなかった。

「アラビアンナイトの時代、ジャービル・イブン・ハイヤーンは、水銀には鉛を金に変える力があると語っていました。ひょっとすると今日の実験で、皆さんの目の前の鉛と水銀が金に変わるかも知れません」

そんな話を聞いたあとは、灰をまぶしたような鉛の球の鈍い重みが、ただの重さではない気がしてきた陸一であった。そしてシャーレの中で転がるように動き回る水銀が、その度に角度を変えて周囲の森羅万象を映し出す様を飽かず眺めてしまうのだった。

宮沢先生は、二つの物体について感じたことをすべてノートに記録するように指示した。

生徒の発表の一つ一つに感激したように頷いて聞き入っていた先生は、最後にこう語った。

「みなさんの目の前の鉛と水銀は、みなさんの中で見事に金に変わりました。金とは古来値打ちを意味します。値打ちは人が引き出すものです。現象に出会い、現象の法則を明らかにし、現象を自由に扱えるようになれば、現象の値打ちが高まります。そして自然の値打ちも、人の値打ちも高まるのです。実験室とは、自然と人とが現象を通して出会い、値打ちを引き出す場所なのです」

三年生になって化学の知識と実験技術の基礎が身に付いてくると、先生は、一班に五本ずつ、透明な液体の入った試験管を配り、

「この五つの水溶液に化学式を与えてください」

と、指示を出した。

中には、臭いを嗅いだだけで、アンモニアだと判るも

のもあった。仲間の一人がこの臭いは塩酸だと言い張る溶液もあったが、ほかの者には嗅ぎ分けることはできなかった。そこで水溶液同士の反応を繰り返して色の変化や沈殿物を見て根気強く特定していくほかはなかった。班で議論をし、仮説を立てて、食い入るように反応を見つめ、一喜一憂した。ある者が表を作り始めると、その表を手がかりにして実験が計画的に進められていくのだった。

試験管のあるものは、他の水溶液が流れ込むと同時に、どんよりと渦を巻くようにして白い不透明な物質が沈殿していった。原子同士が結びつき、重く水に溶けない分子を新たに形成する様が想像できた。陸一の頭の中に化学式がひらめいた。またあるものは、別の水溶液が滴った瞬間に薄い菜の花色に染まり、下に下がるにつれて淡く濃度を変えていった。ガラス棒で撹拌すると濃度が一定に定まった。光にかざしても粒子は見えず一層薄い菜の花色に澄んでいた。原子の結合は分子の色という属性だけを残してすぐに水に溶けたのだろう。陸一は浮遊する分子同士がいっぺんに結合したり、合成を済ませた分子をかき分けるようにして結合していく様を想像した。化学式だけでは表せないドラマを感じるのだった。

中に他のどの水溶液とも反応を示さないものがあって謎として残った。試験管や器具を洗い、窓際に干してから、宮沢先生が正解を発表しながら実験のまとめをした。

「みなさんの目にしたものは現象です。しかし現象を繰り返し起こしているうちに、分子や原子の存在を確かに感じることができたことでしょう。大切なことは、みなさんが感じられるように、自然界にも感じさせる物があるということなのです。みなさんの想像力が見えない物を見ていたということです。さて、この最後の一本の正解は、H2Oです」

「せ・先生、それは狡いです。先生は配る時に水溶液だとおっしゃったじゃないですか」

「いいえ、そこらの狐のように、ぼくは人を騙したりいたしません。これは確かに水溶液です。私は今朝、北上川の『イギリス海岸』の、特別に澄んだ流れから一すくい汲んできて、他の薬品と同量を純水に混ぜたのです。ですから水の水溶液です」

(なるほど)

と、陸一は納得した。

「みなさんが水を特定できなかったのは、ひとえに想像力の限界の所為なのです。もはやおわかりの通り、今日の実験のすべての現象に水が関わっているのです。水に溶かされて初めて物体は水溶液になるのです。水溶液になって初めて現象を起こす反応もあるのです。そして、生命現象の多くは、なかんずく農業に関わる現象を

左右するのは、水が関わる働きなのです。ですから、この故郷の北上川の澄んだ真水にまで想像力が働かなかったみなさんは、全員農学校の生徒として不合格です」

先生は狐のように口を尖らせた。

最後の一言は、陸一らの心に応えた。そして科学の実験を通して水が自分たちの命の源だということを思い知ったのであった。

「なにも、みなさんがそんなにしょげかえることはありません。罰として、明日の土壌学の時間には、北上川の観察に行きましょう」

翌日、宮沢先生は、イギリス海岸と呼んでいる、露な岩盤が角の取れた洗濯板のようになって幻想的な景観を醸し出している、近くの浅瀬に陸一らを引き連れてきた。なぜイギリスなんですか、ましてなんで海岸なんですかなどと質問する生徒は、もはやいなかった。宮沢先生とはそういう人物なのだという理解だけで十分だった。まして彼らは、たとえ遠足気分とはいえ、罰としてやって来たのだった。

「みなさん、これはなんでしょう。」

宮沢先生がポケットからとり出した塊は、異様に黒く細長かったが、明らかに胡桃の形をしていた。

「そう、胡桃です。正確に申せば、百万年昔は胡桃という生命体だったものが鉱物に形を変えた化石です。私は先日、今みなさんが立っているイギリス海岸で、この胡桃の化石を見つけて掘り出しました。探せばまだまだ見つかるはずです。みなさんも見つけてご覧なさい」

陸一らは、さっそく靴を脱ぎ、ズボンの裾を捲り上げて、川に向かっていった。岸辺の木々で蝉が鳴き、浅瀬からは豊かな水音が響いていた。陸一らは少年時代に返って歓声を上げていた。中には褌一つになって泳ぎ始める猛者もいた。宮沢先生は生徒等を笑顔で見守っていた。

「あったぞ！みつけたぞ！」

という声が上がり、皆がそこへ集まった。水できれいに洗われた岩肌に、あばたのような窪みができていて、よく見るとその窪みの中の凹凸の模様は胡桃の肌理そのものだった。色も炭のように黒ずんでいた。

「よく見つけましたね、これから先は私と発見者の仕事です。みなさんは第二第三の胡桃を発見してください」

先生はズボンのベルトに挟んできたハンマーを引きぬくとリズミカルに化石の周りを砕き始めた。

小一時間も活動をした後、宮沢先生は、広々とした岩盤の上に生徒を集めて講義を始めた。

「みなさんの座っている、この岩盤の中に胡桃の化石があるということは一体どういうことでしょう。そう、この岩もかつては豊かな土壌だったのです。地表は草木に覆われ、花が咲き、獣が駆け回り、鳥が木々で囀って

いたことでしょう。そして地表には枯れ葉や動物の死骸が積もります。すると光は遮られ、光を嫌う細菌が活躍し、生物の死骸を腐らせます。それが次の世代への養分になるのです。こうして豊かになっていった土壌の上を雨や川の水が流れます。水は土壌の上に新しい土壌を積もらせます。こうして幾重にも厚く重なるようになってくると、空気が全くさえぎられます。すると土壌の生命活動は途絶えます。生物の死骸の有機物は腐ることなく炭化して、黒く炭素だけが残ります。それがこの胡桃の化石です。この化石も、もし、ずっと地中に埋もれていれば、鉱物質を含んだ水分が炭の穴の中に染み込んで、姿をそっくり石に変えてしまうことでしょう」

陸一は、この遠足がとびきりの土壌学の演習であることがわかってきた。土とは生物と鉱物の間をつなぐ存在なんだと独り合点をした。

「ではみなさん、この化石を三億倍の大きさに拡大した物体を想像してご覧なさい。何を想像しましたか。そう、地球です。地球の内部は溶岩がうごめいています。そして溶岩が冷えて固まった地殻が胡桃の殻のように外部を覆っています。その殻の表面に当たる、地層をなしている部分はそっくり土壌の化石なのです。そしてわずかに空気とふれる部分が農業を営む生きた土壌です。土壌は一つの生命なのです。みなさんは農耕のことを『地球の皮むき』といって卑下することがありますが、地球の皮むきとはなんと素晴らしい仕事でしょう」

陸一は、地球が一つの生命体に思えてきた。そして大地で営まれる昔ながらの百姓という仕事が、素晴らしい仕事のように思えてきた。

「みなさん、私は、このイギリス海岸の歌を作りました。今からみんなで歌いましょう。まず、私が歌ってみます。

Tertiary the younger Tertiary the younger
Tertiary the younger Mud-stone……」

陸一らも歌うほかはなかった。

「グッド、グッド！みなさんの岩手弁のイングリッシュがいいですね」

妙な褒め方があったものだが、宮沢先生は大真面目だった。陸一は、宮沢先生の最初の英語の時間のことを思い出した。

「みなさん、私は、英語は専門ではございません。でも、英語の発音に関しては、東京の学士さんには負けない自身がございます。というのも私の英語は岩手弁のイングリッシュだからであります」

生徒は、笑った。彼らは、英語に自信がある訳がなかったし、日本語にしても標準語に対する拭いがたい劣等感を持っていた。その上、陸一は、吃音のために、会話そのものに気が引けるのだった。だから、宮沢先生の話を自嘲を込めて笑ったのだった。

しかし先生は、一行に気に留めることなく話し続けた。

「一体に英語という言葉は、口を大きく開けて歯切れよくしゃべる言葉ではございません。それは、ぜんたいイギリスという国がヨーロッパでも北の外れの寒さの厳しい島国だったからでありましょう。試しにみなさん、たばこを一本口にくわえたつもりで、テキストを読んでみましょうか」

陸一は、先生得意の実習が始まったと苦笑いした。そしてどんなとっぴな思いつきでも、やらせずにはすまないのが先生の授業だった。しかも、しぶしぶでもやり始めてみると、そこには大きな発見があるのだった。

「どうですか、一段と英語のように聞こえましょう。そして、すでにお気づきの通り、その口の開け方は、我々東北人の、なかんずく岩手人の特徴なのです。すなわち結論として、岩手弁は日本の標準語からは掛け離れておりますが、英語の発音に似ておるのです。ローカルこそグローバルだといえましょう。もっとも、岩手弁のイングリッシュがイギリス人に通じるかは、私も試したことはございませんが」

生徒らはどっと笑い出した。今度は宮沢先生も、少しつり上がった狐のような切れ長の細い目をさらに細くして、笑い出した。

授業がいつもこんな風だったので、陸一は、宮沢先生が突然やってきた大正一一年、一九二二年の二年生の三学期からというもの、勉強が楽しくて仕方がなくなった。これまでの人に見下されたくない一心の勉強が、如何に了見が狭いものだったかを悟るのだった。宮沢先生を通して、科学の懐の広さを知り、大地というものに歴史が有り、命があり、詩があるということを陸一は教えられた。そして成績も上がっていった。

運動会も終わったある秋の日の放課後、廊下で宮沢先生と出会った陸一は、

「丁度よかった。少しお話をしませんか」

と、教員室へ招き入れられた。

「良知さん、君は、発言を聞いていても、試験の答案を読んでみても、自然や科学や農業のことを広く豊かにとらえる力があるので、私は、将来を楽しみに感じます。君たち三年生は、いよいよ来年の三月には卒業ですが、どうですか、私の母校の盛岡高等農林を受験してみませんか」

「せ・先生、こ・光栄です。でも、お・おら、いえ、ぼ・ぼ……」

「どうぞ、どもっても、なまってもかまいませんよ。私はあなたの心を知りたいのですから」

「おら、はやくかえって、むらで、ひゃくしょうやらねばなんねえす」

二　陸一の心

陸一は擦れ違う友人や先生方とあいさつを交わしながら、足早に放課後の校門を出た。郡立の稗貫農学校は花巻の町の南の外れに位置していた。校門を出ると、しばらくは郊外風景が広がっていた。陸一は北上川の支流の豊沢川に沿った街道を腕を振りながら歩いた。腰の胴乱が軽快に跳ねていた。その速さなら村についてまだ一仕事手伝うことができるだろうと考えた。厳しい冬の到来は間近であった。

道には砂利が敷かれ、電信柱が立ち並んでいた。脇には瀟洒な町家風の建物が建っていたりした。玄関先の庭の造作を見て、そこが勤め人の住まいらしいとわかった。高い木々に囲まれた広い庭を構えた屋敷もあった。洋館作りの窓ガラスが光っていたりした。それは町の商人らの別宅らしいと思った。道行く人には洋服姿もあって、時折自転車が通り過ぎて行った。荷馬車のほかにも、通りかかる自動車に道を空けなければならないこともあった。

花巻の川口町を起点にした電車軌道の最初の駅を過ぎたころから、風景はよほど落ち着いてきた。彼を見下ろし寄り添ってきた電柱の並びが、電車の線路に沿って離れていってしまうと、目の前には平らな田んぼが広がっていた。遠い山並みを際立たせる黄金色の空に、籾殻を焼く煙が幾筋も立ち上り、香ばしい空気が漂ってきた。これが田園風景というものだろうと、陸一は立ち止まってしばらく眺めていた。

ほっ被りをした野良着の農婦が、擦れ違い様に

「おげれんせ」

と声を掛けてきて、懐かしさを感じるのだった。

陸一は、宮沢先生とのやり取りを思い出した。陸一の固い決心を聞いた賢治は、深く頷き、暫く黙っていたが、感激したような口調でこう言ったのだった。

「良知さん、その通りです。あなたは全く私の先生です」

「み、宮沢先生、生徒に向かって先生はおかしいす」

「いいえ、良知さん、先を生きる人こそ先生なのです」

陸一は、賢治に学びながら、地球は鉱物と生物の折り成す生命体であると思えてきた。いや、地球を越えて無限の宇宙すらも一つの命であるような気がしてきた。しかしその命とおのれの人生とのつながりが、まだつかめないでいた。

賢治は、森羅万象の生命と人生とが一体化する農業の素晴らしさを語るのだった。しかし陸一にとって農業は、百姓は、義務であり宿命だった。好むと好まざるとにかかわらず運命と諦めてその道を歩むしかない陸一であった。

（おれには、宮沢先生のように感じる力はないのだ）

と、陸一はまた歩き出した。

豊沢川の支流の一つに沿って小道に入ると、風景は急に寂しさを増した。道は狭く上り勾配になって、脇の草が高く生い茂り、田んぼの風景は一変した。不揃いな田は、畦の高さを少しずつ増して、棚田の景観を呈し始めた。田の多くが萱や薄などの宿根性の雑草で覆われ、灰色の穂が北風に揺れていた。その風景は農地というより荒れ地であった。そしてそこが陸一の村の入り口だった。

東北地方の、なかんずく岩手県の凶作と飢饉は猖獗を極めた。

二〇世紀を迎えた一九〇一年は凶作であった。一九〇三年には飢饉がやって来た。陸一が生まれた一九〇六年、明治三九年も東北地方は凶作で、村は貧窮した。大正時代に入っても翌年の一九一三年には岩手県は大凶作に見舞われた。

陸一も袷を着て過ごした小学二年生の夏休みを憶えていた。秋になっても多くの田の稲は稔らなかった。田のなかには、稔らぬ稲が立ち枯れたまま放置され翌年も雑草が茂るがままになったものもあった。農民のある者は村から姿を消し、またある者は働く力を失っていた。村は困窮していた。

陸一の家は、没落地主であった。三代前までは、村でも有力な家だった。しかし祖父が放蕩の末病死し、父親が何とか自作農として踏ん張っていた。

陸一には、分家筋で父の従弟に当たる貞三という親戚がいた。陸一は、家に帰ると、貞三の家に出向き、彼を手伝うのが日課だった。

貞三は、子供の頃、伯父に当たる陸一の祖父に可愛がられたという。悪名高かった祖父も、貞三の目からは違って見えたのだろう。貞三は、当時は陸一の家の小作の小伜だったが、本家には誠を尽くした。その誠は、貞三が自作地をもち、やがて土地を人に貸すようになっても変わることはなかった。

今日、陸一が農学校に通えるのも貞三の援助があってのことだった。陸一の学費の一切は、貞三から出ていたのだった。陸一が小学六年の秋に、貞三から父親に、学費は自分が出すから、陸一を農学校へやらせてほしいと頭を下げてきたときには、陸一も父親も涙を流して頭を下げたのだった。それ以来、父親は、まず貞三を手伝えと、陸一に言うのであった。

陸一の父は、陸一の祖父の放蕩三昧の暮らしぶりを子供の頃から見て育った。祖父は花巻の町に繰り出しては、飲む、打つ、買うの悪所通いを続けるうちに、悪友たちにすっかり取り憑かれてしまった。子煩悩で、子供の前でもいつも愉快なその男は、町から訪ねてくる素性のわからない友達に、いつでも気前よく金を貸していた。両親が早死にした後は、意見をする者も居なくなっ

た。妻も黙って従うしかなかった。そしてある朝、陸一の祖父は杯をどうやっても口に運ぶことができなかった。酒がぼたぼたと膝にこぼれた。中風であった。先祖代々の土地はすでに大方人手に渡っていた。妻と息子が耕してやっと食べていける土地が残っていたことがむしろ幸せだった。陸一の父親と祖母は、寝たきりになった祖父の世話をしながら、どうにかこうにか生きてきた。そして父親は、祖父が逝った後に嫁を娶った。晩婚であった。やがて陸一が一人産まれたが、若い頃の苦労がたたってか、父親は病気がちであった。

貞三は陸一の父親より三つばかり年下だった。祖父が釣りやら狩りやらの遊び事によく同行させたので、父親の子供の頃の記憶には残っていた。しかしその後村から姿を消した時期があったという。もっとも凶作の度に多くの村人が出稼ぎに行くのが常であった。日清戦役からというもの旅に出れば食っていけないことはなかった。貞三は、良知の遠縁を頼って遠州に行ったとも、関東にいたとも言っていた。村に帰ってきた時は、自作地を買うだけの資金を持っていたのである。

飢民として村を出て行く者はあっても、一旗揚げて村に戻って来る者はなかった。物好きだと呆れる者がいた。何か下心があるのだろうと貞三の陰口を言う者もいた。貞三は、親が耕作していた土地と家を、地主から買い取った。兄の一家は村を去っていて、農地も建物も荒れ果てていた。

貞三は、陸一の父親の元にあいさつにやって来た。先代にはとても世話になった。昔通りこちらを本家として出入りさせて欲しいと頭を下げた。祖母は、爺さんが死んでからこんな嬉しいことはないと涙を流して喜んだ。

つきましては、と貞三は切り出した。こちらのご母堂様にどなたか嫁を世話していただけまいか。こうして、陸一の両親が形の上の仲人となって、稀に見る晩婚同士の祝言が執り行われた。そのとき三三九度の杯に酒を注いだことを陸一はぼんやりと憶えているのだった。

貞三は、よく働いた。しかし自分で耕作することはしなかった。自分の土地は小作に貸して、ひたすら荒地の開墾に取り組んだ。彼が買い求めた荒地が昔の姿に戻ると、今度は、別の荒地を地主から買い求めた。彼は度重なる凶作の前に見た、故郷の原風景を取り戻そうとするかのようだった。しかも水路や畔を新たに整備するのだった。彼はそれなりに新しい技術を身につけていたのであった。土木作業にはわずかな日当でも小作農が喜んで力を貸した。貞三の土木作業は自分の土地だけで終わりにはしなかったし、作業の後は、より条件が整った土地を借りることができるかもしれなかったのだ。

貞三は、棚田の荒地を買って、そこで牛を飼った。荒地の草を牛に食わせた。牛舎の糞を積んで堆肥にし、開墾した田畑に撒いた。牛は開墾の鋤を引いた。町の屠牛

場に連れて行けば高く売れた。

地鶏も飼った。ここの卵は特別に味が濃いと、花巻温泉の卵屋の小僧が毎日買い取りに来た。狐が出没すると稲荷神社を建てて狐の好物を供えた。

貞三の仕事ぶりは、旧来の地主のそれとは違っていた。毎日泥だらけになって働く貞三を、古くからの地主はただの百姓と考えていた。また小作人達は、共に働き、自分たちに耕地や稼ぎ口を産み出してくれる貞三を、地主とは感じなかった。彼らは貞三を様付けでは呼ばなかった。親しみを込めて貞三さんと呼んだ。何より貞三の元で働く仕事には夢があった。まだ農業経営者という言葉が使われない時代であった。

そんな貞三にも失敗はあったし、限界を感じることもあった。それは大抵、町からやって来る肥料屋や機械屋、土木技師等が絡んでいた。彼らを信じて一度大損をしてから、貞三は彼らを拒み続けてきたが、それでは時代について行けない不安を感じるのだった。貞三には最新の農業知識が足りなかった。彼はそれを陸一に求めたのだった。

しかし陸一は、自分のことをさん付けで呼ぶ貞三を親しみ難く感じて大きくなった。吃音のせいで引っ込み思案の彼でもあった。

体も大きくなく、足も速くなく、力も無く、吃りの自分が馬鹿にされずにやっていくために、陸一は一生懸命勉強をした。学校に籍を置く限り存在を認められると彼は考えた。高等科二年の秋に彼は農学校への進学を願った。しかし村で進学をする同級生は、地主の伜と酒屋の娘とだけであった。彼らよりよくできた陸一ではあっても、とても親には切り出せなかった。そんなときに祖父の命日に仏壇を拝みにやって来た貞三に尋ねられて、希望を打ち明けたことがあったのだった。

農学校に入学してから、毎日のように貞三の手伝いを続けるなかで、貞三から学ぶことは多かった。そして貞三も陸一から新しい知識を学び取ろうとしていることがわかった。時には、陸一さん、今日は農学校でどんなお勉強をなさったんでと催促することさえあった。しかしやがて自分が貞三に教えることで、かえって半可通の知識を学び直していることに気付く陸一であった。陸一は貞三を師匠のように感じ始めていた。

陸一は、宮沢先生から盛岡高等農林への進学を勧められたことは、貞三に伝える訳にはいかないと思った。貞三に話せば彼は進学を支援してくれるかも知れないが、花巻から十里も離れた盛岡への進学は、都会で暮らすことを意味した。だからこそこれ以上甘える訳にはいかないと考えた。

科学も技術も芸術も、西洋からやって来て、東京に落ち着き、やがて都会へ広がって、郊外で立ち止まるのだった。その周りには美しい田園風景が広がるが、そこか

ら先は狐や狸の棲む田舎という異界であった。
地主も小金を貯めると都会に家を建てていた。田舎は、食料と年貢とそれなりの戦力を担う兵とを供給できればそれでよかった。田舎はその意味で大自然と同格だった。人々の心のふるさとでもある農村に生きる農民には、自らの文化を主体的に表現する道は閉ざされていた。文化を求める農村の若者は都会を望むほかはなかった。田舎に文化が息づく前に、有望な若者が田舎を出て行った。
そして都会の思想が農村に流れ込んできた。社会科学の思想によって農村は文化を持たないままに分断されかけていた。農村が階級意識を持ち始めた。まだ農学校の学生であった陸一にも農村社会の危うさが、天候や景気の不安とともにひたひたと感じられるのだった。
しかしそれはむしろ田舎の問題ではなかった。東京と都会と郊外で、政治も経済も文化も不安を孕んで目まぐるしく動いていた。列強と伍するまでは感じることのなかった不安だと語る識者もいた。だから動きの遅い分、田舎には安寧があったのだ。しかも田舎が日本の富国強兵を支えているという自負もあった。田舎に生きる百姓が日本の魂を担って自分を発揮する道もあるだろうと陸一は考えた。
陸一は、まだ周囲に荒地の目立つ村の小道を歩きながら、宮沢先生のように感じる力はなくても、この村で貞三さんと百姓をやるのも悪くないと思った。言葉では言い表わせないが、貞三のように生きてみたいとも思った。
（農学校で学んだ後は、おれは村で生き方を学ぶのだ。その先生は貞三さんで決まりだ）
陸一は、早く貞三に会いたくなって、駆け出していた。

三　荒地の力

大正一二年、一九二三年三月、一七才の陸一たちは稗貫農学校の最後の卒業生になった。賢治は、陸一に、
「四月から花巻農学校に名前が替りますが、気軽に訪ねてきてください。もっとも私も良知さんのように百姓になってしまうかもしれませんが」
と、話すのだった。
一一月に最愛の妹を失って以来、賢治の言動は、一層謎めいて感じられるのだった。花巻高等女学校で同じく教師をしていたその人は、学生や町の青年の憧れの的だったのだ。それは陸一にとっても、悲しい出来事だった。
父親に代わって、朝から一日農業に従事してみて、陸一は、農学校で身につけた学問の、歯が立たないことを思い知った。そして、限られた環境と資源の中で、昔ながらの百姓仕事が、むしろ科学的にも理に適っていることを悟るのだった。陸一は、そのことを、口数の少ない貞三の働きぶりから思い知るのだった。

苗箱は軒下入れておいたがよいと教えに来ると、翌朝は真っ白に遅霜が降りていた。長年の農業を通して研ぎ澄まされた貞三の感性の働きに、陸一は驚くほかはなかった。
自作地の耕作を終えると、陸一は貞三の開墾を手伝った。
一段落して、山の岩肌から滴る清水を汲んで口を濯ぎ、鉢巻きを解いて顔や体の汗を拭きながら、風通しのよい木陰に腰を下ろすと、二人は、まだこれから拓かなければならない荒れ野を眺めた。
「陸一さんはよ、『荒れ地の力を以て荒れ地を耕す』という言葉を知ってなさるべ？」
陸一には初めて耳にするその言葉を、なんという力強い響きを持つ言葉だろうと思った。
荒地には、荒地の力がある。もし力がなかったら、どうしてわしらは開墾などするだろうか。開墾とは、荒れ地の力を引きだすことなのだ。百姓は、引き出した荒地の力で豊かになるのだ。豊かになったその力で、さらに荒地を耕すのだ。
陸一は、なるほどと思った。
「確かによ、陸一さんの身につけた科学とかいう学問の力は、人に力を授けてくれるべ。百姓の支えになるべ。だども、それに頼りすぎちゃなんめえ」
陸一はその通りだと思った。農学校の実習農場で学んだやり方が、この開墾には歯が立たなかった。農場は荒地ではなかったのだ。
「土地にはよ、土地の分というもんがあんべよ、陸一さん」…そしてその土地を耕す百姓にも土地に応じた分というものがあるのだ。肥えた土地の百姓がそのやり方で痩せた土地を耕しても思うように作物は育たない。また、痩せた土地の百姓がそのやり方で肥えた土地を耕してもうまくいくとは限らないのだ。
それを聞いて、それこそ森羅万象の命と共に生きるやり方だと感心する陸一であった。
「貞三さん、『荒地の力を以て荒地を耕す』って、誰の言葉だべ」
「二宮尊徳先生の言葉だんべ」
陸一は、小学校の読本に出てきた、親孝行で働き者の金次郎少年のことを思い出した。しかし大人になってそんな凄い言葉を残した人物とは知らなかった。陸一の関心が一気に高まった。
「貞三さん、ほかに金次郎さんは、どんなことを言ってるべ」
「陸一さん、悲しいだども、わしはよ、読み書きはからっきしだべ…」
陸一は、貞三がルビを頼りに新聞が読める程度だと聞いて驚いた。そして農作業で見せる彼の広い知識と深い教養が目学問耳学問で培われたものだと考えると、一層

尊敬の念を深くするのであった。

「だども、報徳訓だけは、忘れることはなかんべ。ほら、

報徳訓
父母の根源は天地の令名に在り
身体の根源は父母の成育に在り
子孫の相続は夫婦の丹精に在り
父母の富貴は祖先の勤功に在り
吾身の富貴は父母の積善に在り
身命の長養は衣食住の三つに在り
衣食住の三つは田畠山林に在り
田畠山林は人民の勤耕に在り
今年の衣食住は昨年の産業に在り
来年の衣食は今年の艱難に在り
年々歳々報徳を忘する可から不
」

陸一は、貞三がスラスラと唱える漢文の読み下しを聞きながら何とも言えないよい気持ちになった。理解できたといえば嘘になるが、すべてがわからない訳ではなかった。むしろ当たり前のことを言っているようでもあった。その当たり前のことが、年々歳々という永遠の尺度の中で語られると、得も言われずありがたく感じるのだった。

「わしや、この報徳訓を毎朝朝日に向かって唱えてきただべ。かれこれ三十年になんべえか」

「へええ、三十年。貞三さん、もっと詳しく、教えてけろ」

貞三は、手ぬぐいで顔を拭いながら、照れ臭そうに笑った。が、緩やかな谷間の向こうに霞んで見える北上山地を見やりながら、ぽつりぽつりと語り始めた。

「わしがこの村さ出たのは、そう、陸一さんと同じ年ごろのことだったべか……」

泉（創作神話）
―詩集「ろかいゆ」より―

松下壽男

十一頭の羊が先ず水を飲んだ。若い羊飼いは死んでしまった若い女を初めて背から下ろすと泉のほとりに素手で穴を掘り始めた。人ひとりの埋まる大きさの穴を掘り終わった若い羊飼いは汗も拭かず懐から橡の実と胡桃を一つずつ取り出し涙も拭わず死んでしまった若い女の衣を解いて臍に胡桃を押し込み若い羊飼いは嗚咽もこらえず死んでしまった若い女の裳を開いて陰所に橡の実を詰め込み穴に埋め土を被せた。若い羊飼いが泉の水で手を洗うと泉は真っ赤に染まった。夜が来て若い羊飼いの泣き叫ぶ声は夜一夜続いた。若い羊飼いの目から流れる涙は辺り一面の乾いた土を濡らし若い羊飼いの搾り出す涙は死んでしまった若い女の体を十分に濡らした。水をたらふく飲んだ十一頭の羊は泉のほとりで静かに眠った。若い羊飼いと十一頭の羊は朝日と共に西へ向かった。

※

顎に髭が生えた逞しい羊飼いと羊飼いによく似た赤子を抱いた腕の太い女は三十三頭の羊を追って胡桃の繁みが影を落とす泉のほとりに差しかかった。顎に髭が生えた逞しい羊飼いは三十三頭の羊に泉の水を飲ませた。黒い髪を長く垂らした胸と尻の大きい女は羊飼いによく似た赤子を抱いたまま胡桃の木の影に腰を下ろし衣を解いて白い乳房を赤子の口に含ませた。

とちのきとちのみくるみのき
くるみのみるくたんとのめ

とちのみくるみおまえのみ
このみのきのみたんとのめ

ははのめちちのめたんとのめ
くるみのぼうやねっこのめ
くるみのぼうやねっこのめ

穏やかな声の女は歌い顎に髭が生えた逞しい羊飼いは懐から笛を取り出すと乾いた口に当てた。笛は透き通った音を奏で顎に髭が生えた逞しい羊飼いは胡桃の木を見上げることもなく木陰に入るとゆっくり腰を下ろし三十三頭の羊と光る泉の水だけを眺めていた。羊飼いによく似た赤子は女の歌を聞きながらたらふく乳を飲むとやがて眠った。三十三頭の羊は羊飼いの笛を聞きながらたらふく水を飲みやがて泉の水は三十三頭の羊にすっかり飲まれた。男と女と三十四頭の羊は胡桃の木の影に促されて東へ向かった。

※

二十二頭の羊は足を速めた。髪と髭を白く延ばした羊飼いは二十二頭の羊を走らせると右足を庇ってびっこを引き引き歩き続けた。泉のほとりで二十二頭の羊に追い付くと髪と髭を白く延ばした羊飼いは落ち葉を引き摺りながら胡桃の幹を仰いで回ると深く呟いた。

つえにはふとくなりすぎた

二十二頭の羊は十分に泉の水を飲んではいなかったが髪と髭を白く延ばした羊飼いは黄金に染まった西の空を見やっては二十二頭の羊の尻を突いて回った。二十二頭の羊を追い立てながら髪と髭を白く延ばした羊飼いは胡桃の木を顧みたが立ち止ることはできなかった。

※

仔羊を連れた年老いた羊飼いは胡桃の木の下で初めて顔を上げると仔羊に泉の水を飲ませることもなく懐から剣を取り出し仔羊を殺し皮を剥ぎ肉を分けた。年老いた羊飼いは枯れ枝を集めて火を焚き火に手をかざしながら年老いた羊飼いは歩いてきた方角に落ちて行く夕陽を見詰めていた。赤赤と燃える火に剣を突いては肉を炙っては年老いた羊飼いは仔羊を食らい続けた。一頭の仔羊を食らい尽くすと年老いた羊飼いは剣を胡桃の幹に突き立てて罵った。

ころしたものよころされてころされたものをいかせ
ころしたおれをころしころされるおれをいかせ

年老いた羊飼いは突き立てた剣に足を掛けて胡桃の幹をよじ登った。羊飼いの足が切れ赤い血が流れ胡桃の幹は裂け白い樹液が流れた。枝に届くと年老いた羊飼いは衣を解いて帯で枝を通して輪を作り首に掛けて足を延ばした。星空は俄かに曇り月もなかった。虎や狐や兎の群れが大群をなしつつ唸りをあげて燃え盛る火の回

りを回った。溢れ出した泉の水は白く流れて地平線で消えた。火が消えると胡桃の木は音もなく倒れ羊飼いは枝ごと泉の流れに落ちた。稲妻が走り胡桃の木は粉粉に砕け白い雨が降り頻った。虎や狐や羊の群れは逃げ惑い流れに飛び込み胡桃の木っ端によじ登って流れて地平線に消えた。雨を集めた白い流れは大河となってやがて海に注いだ。雨は春まで降り続いた。春には泉のほとりに橡の木が芽生えた。



還暦からの考古学（九）

三角縁神獣鏡に対する考え方の変化（その3）

中山喬央

その理由は、先ず「滇王之印」の存在が、『史記』の前一〇九年に滇王が漢に帰順し前漢の武帝から金印を下賜されたとの記載により裏付けられ、時代は百五十年ほど異なりますが、金の材質、蛇鈕、一辺の長さが当時の一寸である二・三cmと同じである他、紙に押印する時に字の部分が白くなる白文である点でも奴国金印と一致しているからです。

更に光武帝の子、劉荊を広陵王に封じた後五八年につくられた「広陵王爾」の金印も、鈕の形は異なりますが、一辺が二・三cmという大きさ、タガネでほどこした鈕の魚子文（彫金の技法で、金属面に粟粒を並べたように細粒を凸起させた文様）、印文の字形が共通しており、奴国金印と同じ洛陽の工房で作成された可能性があります。

ところが最近この奴国金印に捏造論が出ました。

「漢委奴国王」金印の時代

『後漢書』東夷伝に「建武中元二年（五七）、倭の奴国、貢を奉じて朝賀す。使人自ら大夫と称す。倭国の極南界なり。光武、賜うに印綬を以ってす」と記載されており、同書の光武帝本紀には、建武中元二年春正月に「東夷の倭の奴国王、使いを遣り奉献す」と掲載されております。

一方一七八四年玄海灘を臨む志賀島から「漢委奴国王」の金印が偶然発見されました。

とぐろを巻く蛇の形をした鈕は、漢代の印では例がありませんでしたので、偽印ではないかと疑われましたが、まず一九五六年に雲南省石寨山六号墓から「滇王之印」と刻まれた蛇鈕金印が見つかり、次いで一九八一年に江蘇甘泉二号墓から「広陵王爾」と記された亀鈕金印が出土して、これは本物であると考えられるようになりました。

その論旨の概要は、同じ蛇鈕でも「滇王之印」と比べると造りがあまりにも稚拙で、江戸時代でも古代の印を集めた文献を利用すれば、漢代の印を作ることは可能だとし、江戸時代の儒学者で藩校甘棠館館長が売名のために偽造させたというものです。

しかしこの説は肝心の蛇鈕が、先に述べました漢代の印制に全く無かったことには触れておらず、成立しないと考えます。

一方この金印の「漢委奴国王」の読み方につき、伊都国のイトと読むのではないかとの説がありますが、『隋書』巻八一列伝第四六東夷・倭国条にも「～漢光武の時使いを遣り入朝す、自ら大夫と称す。安帝の時又使いを遣り朝貢す。之を倭の奴国という」旨の記載があり、冒頭の『後漢書』東夷伝の記事と併せ考えますと、奴国で間違いないと思います。

寄道をしましたが、この金印が本物であるということは、それを記載している中国の歴史書の信憑性もたかめることになります。といってそこに記載してある記事すべてが正しいということにはなりません。

例えば奴国が倭国の最南端にあるという記事はよく調べてみる必要があると思っています。と言いますのは同じ中国の歴史書である『三国志』魏書東夷伝倭人条には「伊都国の東南百里にある奴国と、女王国のさらにむこうにある斯馬国……つづいて烏奴国があり、つづいて奴国がある。ここで女王の領域は終わる」と二つの奴国が掲載されているからです。

倭国の極南界なりという後漢書の記事に基づけば、ここで女王の領域の終わる奴国になるのでしょうが、これでは金印の出土地点とは全く異なる場所に奴国があったことになってしまいます。一方伊都国の東南百里にある奴国を指すということになれば、出土地点は概ね合いますが、今度は倭国の南のはずれという後漢書の記載内容とは異なる事となります。

しかしこれとは違った見方も成立します。すなわち後漢の時代、倭国の最南端は奴国でしたが、魏の時代には倭国の範囲が広がったのだということです。

いずれにいたしましても、これらの事柄のうち何が一番妥当性があるかということを良く検証してみる必要があるという事がお分かりと思います。

この事を含めまして中国の歴史書に記載されている事柄につきましては実情と合わなかったり、整合性を欠くものが多数見受けられますので、すべて検証が必要です。

其の他、今まで述べてきた様々な事柄のなかにも検証必要事項がありますので、以後其の都度理由を挙げて説

明させていただきます。

平原遺跡

三雲南小路遺跡（前一世紀）の西北一キロあまりの、瑞梅寺川と雷山川に挟まれた丘陵上にある遺跡です。一九六五年農作業中に多数の鏡が発見されました。この時発掘された一号墓は、周囲に十八×十四メートルの溝を巡らせた方形周溝墓と思われる墓で、長辺四・五メートルの墓坑のなかに、長さ三メートルの割竹形木棺が検出され、棺内の頭部と右腕の付近から、ガラス勾玉・管玉・小玉、メノウ管玉・小玉、コハク管玉・丸玉が多量に出土しました。

棺外の頭側には中国製の素環頭大刀が、墓坑の四隅には埋葬時に破砕したと思われる鏡が三九面も見つかりました。

この墓は武器が少ないことから被葬者は女性と考えられていますが、周溝内にはガラス玉を入れてあった土坑がありました。

出土した三九面の鏡の内、三四面が中国で作った鏡と考えられていますが、漢鏡4期の虺龍文鏡と方格規矩四神鏡が一面ずつで、残る三二面が漢鏡5期（後一世紀第2四半期から一世紀後半）の鏡であり、内行花文鏡一面と方格規矩四神鏡三一面の構成となります。

この方格規矩四神鏡は定型化した型式のものから、方格の十二支銘が無く、四神と瑞獣の組み合わせや配置が崩れた型式のものまで含まれています。銘文の第一句は宮廷の御用品を作成する官営工房を意味する「尚方作」と、そうでない「陶氏作」がありますが、「尚方作」鏡の多くが優品でない事から民間での詐称が考えられます。一方「陶氏作」の方は図像文様が「尚方作」鏡と類似し、内区主文に魚を付け加える特徴が共通していますので、作鏡者の陶姓は例がありませんが、両者が近い関係にあったことがうかがわれます。

更に「尚方作」鏡三種八面と、「陶氏作」鏡三種六面は同一の原型から作られた同型鏡ですので、この一群の方格規矩四神鏡は中国の鏡工房から一括に近い状況でもたらされたもの、すなわち三雲南小路や井原鑓溝の首長と同じように、この「伊都」の首長に対して漢王朝から政治的に贈与された可能性があることを物語っていると判断することもできます。

鉄製の素環頭大刀も同様です。

一方『後漢書』には五七年と一〇七年の二回、倭人朝貢の記事が掲載されており、平原遺跡はちょうどその時期にあたりますので、大陸・半島との活発な交流により、様々な品物が入ってきた事が考えられます。

またこの遺跡からは日本列島で製作されたと考えられている二種五面の内行花文鏡も出土しています。

その中の四面は同型鏡で、弥生時代の仿製鏡として最

大の、径四六・五cm、重さ七九五〇gの内行花文八葉鏡です。これらは金属の原型から複数の粘土型をつくる技術を使って、漢鏡を忠実に模倣しながら大型に改造したものだと考えられ、当時の列島における鏡の製造技術の高さを示すものだと判断することが出来ます。

この事は大変重要で本論の根幹に触れる事柄と考えていますので、あらためて検討したいと考えます。

近年この平原一号墓の西隣を発掘いたしましたところ、同じような方形の周溝を持つ五号墓が見つかりました。周溝の規模は七・五×八・〇mとやや小規模ですが、一号墓と同じ東西方向の墓坑が見つかっています。

周溝を破壊した甕棺墓や周溝の内部から出土した土器は何れも弥生中期末から後期初頭のものですから、ここでかって見つかった漢鏡4期の銘帯鏡の鈕2点を考えあわせ、この五号墓は弥生後期初頭にはあったものと判断し、隣接する一号墓の年代も見つかった漢鏡の年代である後一世紀後半から二世紀初頭までとする考えがあります。

しかしその一方で、北九州の方形周溝墓は古墳時代に入らないと出現しないという説があり、当地方が大型台風の通過地点であること等を考え合わせますと、弥生後期の文化層からの遺物の流入も考慮しなければならず、この件につきましても項を改めて検討することといたします。

平原遺跡以外の糸島平野出土、漢鏡5期の鏡

平野の東北部の福岡市・飯氏馬場七号甕棺墓から、内行花文鏡が二面、三雲南小路に隣接する、三雲イフ四号石棺墓と三雲番上遺跡、及び玄海灘に面した海岸に位置する志摩町・御床松原遺跡からは内行花文鏡の破片が、糸島平野の西端の二丈町・一貴山銚子塚（前方後円墳）古墳からは、鍍金を施した素晴らしい方格規矩四神鏡と内行花文鏡が出土し、このうち三雲イフ・御床松原・一貴山銚子塚から出土した漢鏡は、何れも弥生後期から古墳前期まで二〇〇年あまり伝世したものと考えられてきました。

破砕と伝世

有明海の沿岸部では、漢鏡4期の鏡が流入した頃から、甕棺棺外に漢鏡を破砕して副葬するようになります。漢鏡5期の鏡を含む三九面の鏡を破砕して墓坑の四隅にばらばらに置いていた平原一号墓の風習は、その流れにそったものと考えられます。これ以後漢鏡を大量に副葬する習慣は古墳時代迄二〇〇年近く途絶えます。

一方、一貴山銚子塚古墳の二面の伝世鏡は八面の仿製

三角縁神獣鏡とは区別されて、被葬者の頭部付近から出土したため、特別扱いをされていたものとする考えがあります。また弥生終末期の佐賀県小城町・寄居一号墓では、漢鏡5期の方格規矩四神鏡が破砕の後、木棺内に重ねて置かれた状態で出土しました。

鏡の伝世は、畿内では朝鮮製の多鈕細文鏡の時代から、瀬戸内・東部九州・有明海沿岸では漢鏡4期の時代から認められるとしておりますが、この伝世鏡問題につきましても再検証が必要です。

その理由の第一は鏡の出土状況にあります。

すなわち弥生時代の終りから古墳時代の始まるまでの間、九州・中部瀬戸内・近畿・関東の集落址から出てくる完形の鏡は、直径六～七cmから一〇cm未満ぐらいのブリキのように薄い鏡だけなのです。

そして鏡片につきましても、方格規矩四神鏡や内行花文鏡のような本格的な大型鏡の破片は例外的に見られるだけで、大半が鳥や獣の文様の描いてあるだけのものなのです。

このように極限られたものを除きますと、完形の鏡とか鏡の破片は何れも墓から出土します。そして墓の鏡以外の副葬品で伝世が認められているものが無いのです。

第二は同じ鏡を何時まで作っていたのかということが明らかになっておりません。土器のように次から次へと新しいものに移り、古いものの製作を止めたのかどうかがはっきりしていないのです。要は作り始めた時は研究の結果明らかにされつつあるのですが、何時止めたのかが定かでないのです。

又、仿製鏡につきましても、中国国内の鏡が日本列島での仿製鏡への変化と同様の動きを見せておりますので、未だ結論がでている状態ではないと思っています。

これらの検証の為には考古学、文献史学、理化学的分析等各方面から検討した上で、何が現段階で最も整合性があるのか慎重に考えてみなければなりません。

畿内出土の鏡

奈良盆地東南の三輪山山麓一帯は最古の前方後円墳といわれる箸墓古墳をはじめ、初期の大型前方後円墳が密集している所ですが、そこにある天理市・天神山古墳で、後円部の竪穴式石室から二三面の鏡が出土しました。

そのうち一〇面が漢鏡5期、七面が漢鏡7期、六面が古墳時代の仿製鏡といわれているものです。

畿内の前期古墳から出土する鏡は漢鏡5期のものが最も多く、雲雷文帯の内行花文鏡が中心です。

初期の前方後円墳である京都府山城町・椿井大塚山古

墳、奈良県桜井市・メスリ山古墳、大和郡山市・小泉大塚古墳からは、この内行花文鏡が二面ずつ出土しています。

瀬戸内の播磨灘に臨む地域からも、漢鏡5期の内行花文鏡が多数出土しています。

特筆すべきは弥生後期後半の墓から出土しているものがある事です。加古川市・西条五二号墓の天井石のない竪穴状の石室から鉄剣と共に破砕された状態で、御津町・岩見北山一号墓の竪穴式石室からも破砕された内行花文鏡がそれぞれ検出されました。

それ以外は前期古墳からの出土です。

破鏡や、北九州で作られたと考えられている弥生小型仿製鏡が播磨灘から大阪湾一帯で多く見つかっています。

神戸市・吉田南遺跡五号住居址と播磨町・大中遺跡七号住居址から出土した内行花文鏡の破鏡は、弥生後期後半から終末期、大阪府瓜破北遺跡や東大阪市・池島福万寺遺跡から出土した内行花文鏡の破鏡は、古墳時代前期まで伝世したとする考えがあります。

漢鏡5期とほぼ同時期の小型仿製鏡が出土した揖保川町・半田山一号墓は弥生後期後半、竜野市・白鷺山二号石棺墓は弥生終末期、神戸市・玉津田中遺跡一号住居址は弥生後期に位置づけられています。

これらの破鏡や仿製鏡は何れも祭器として、世代をこえて伝世したものであるとする考えがあります。

濃尾平野以東

岐阜市・瑞龍寺山山頂墳丘墓からは、破砕された内行花文鏡が、高坏の下から出土しました。この墓は弥生後期初頭と考えられています。また古墳時代前期の美濃市・観音寺山古墳では、木棺頭部両側に方格規矩四神鏡が破砕されておりました。

弥生後期後半には西日本の各地で墳丘墓が共同墓地から独立し、集落からも離れた丘陵や山頂に作られるようになります。そして埋葬時に破砕したと思われる鏡がしばしば出土します。

これらの鏡は畿内出土のものを含め、岐阜市・瑞龍寺山山頂墳丘墓出土のものを除いては、何れも伝世鏡であるという説があります。

それ以外の中部地方はどうでしょうか。

漢鏡5期の内行花文鏡が山梨県中道町・銚子塚古墳や、静岡県磐田市・松林山古墳など前期の前方後円墳から、山梨県櫛形町・長田口遺跡からは、内行花文鏡の破鏡が出土しています。

北陸では漢鏡5期の方格規矩四神鏡が、石川県押水町・宿東山一号墳と加賀市・分校カン山一号墳の木棺内

から出土しています。この二つは何れも前方部が短い前方後円形墳丘墓です。時期は古墳時代初頭であると考えられています。分校カン山一号墳には鉄器と玉類も副葬されていました。

漢王朝との交渉が始まった前一世紀以降、九州以東にも漢鏡をはじめとする舶載遺物が多数出土するようになります。

漢鏡5期の鏡は九州百面、それ以外の地で百面が出土しています。ここでこれらの鏡が北部九州から中部地方にかけほぼ同時期に中国から入ってきて、それぞれの地方で伝世したことにすれば、その範囲が倭国であるとする考えを支援することになります。そしてそれは倭国の中心が、この時代に北部九州から畿内に移りつつあったのだとする考えを認める事にもつながります。

一方伝世鏡説を認めなければ、大型古墳の成立時期になって初めて倭国の中心が畿内に移ったのだという考えが優勢になります。

このように伝世鏡を認めるかどうかで、全く違った倭国の状況を考える事になります。

漢鏡6期の時代

二世紀前半、後漢中期のこの時代は『後漢書』東夷伝の序文に「永初（一〇七～一一四年）におよんで難多く、始めて入りて寇鈔（集団をなして他国や他地方に攻め入って物を奪い取る）す。桓・霊、政を失いて、漸くますますそぞろなり」とあり、『三国志』魏書東夷伝韓条には「桓・霊の末、韓・濊は彊盛にして、郡県は制するあたわず、民は多く流れて韓国に入る」と書かれています。

この魏書東夷伝韓条を参考にして五世紀に書かれた『後漢書』東夷伝倭条は「桓・霊の間（一四七～一八九年）、倭国大いに乱れ、こもごも相攻伐し、歴年主なし」と伝え、七世紀に書かれた『梁書』東夷伝・倭条では、「漢霊帝の光和（一七八～一八三年）」という期間に倭国乱があったと記載しています。

このように大陸・半島・列島共に、混沌とした情勢下にあったと思われる時代でした。

この時期、華北では鏡の鋳造が衰退に向かい鏡そのものが簡略化していきます。

一方華中・華南では新たに神獣鏡や、大型画像鏡が作られ、鏡作りは依然として盛んです。このように中国国内で北と南の鏡に違いが現れます。

楽浪郡には主に華北系統の鏡がもたらされます。

石巌里九号墳や王根墓など木材で墓室を構築した囲郭墓が紀元前後から一世紀代に見られ、その後中国東北

地区や華北一帯の影響を受けたものと思われる塼室墓が出現盛行するまでの時代に対する田村晃一の研究からも、該期の鏡出土数減少の背景をうかがう事ができます。それは漢鏡出土数推移、及び史書の内容と一致しています。

日本列島における漢鏡の出土数も、概ね楽浪の出土数推移と同じ傾向を見せます。

漢鏡6期は簡略化した径一〇cm前後の小型鏡である方格規矩四神鏡、蝙蝠座内行花文鏡、盤龍鏡、双頭龍文鏡が流行した時代です。

列島では多数の鏡が一括出土することが無くなり、九州、九州以東で同じように減少しますが、分布域は大半が北部九州から瀬戸内にかけてのみとなり、漢鏡5期の鏡がかなり存在した肥後・豊後・大和で希薄になるのが目に付きます。更に漢鏡6期の鏡を前半と後半に分けた場合、後半の鏡は北部九州からしか出土しなくなります。

先ず方格規矩鏡ですが、大阪府高槻市・弁天山B二号墳から出土した漢鏡6期前半に位置付けられるものは、四神が八匹の鳥に交替し、TLV形がT形のみに簡略化したもので、楽浪地域からも同型鏡が出土しています。

一方漢鏡6期後半のものと思われる、更に簡略化されたものが、福岡市・藤崎遺跡の方形周溝墓や、福岡県宮田町・汐井掛石棺墓から出土しています。

次に蝙蝠座内行花文鏡です。

漢鏡6期前半の破鏡が、福岡県宗像市・久原四号墳、福山市・石鎚山二号墓、兵庫県竜野市・白鷺山一号墓、大阪市加美二号墓などから出土しています。

福岡県大牟田市・潜塚古墳の破鏡は古墳時代前期まで伝世した例だといわれています。

漢鏡6期後半のものは、六世紀まで下る松江市・岡田山一号墳や愛媛県川之江市・東宮山古墳以外では、福岡市・野方中原三号石棺墓や福岡県行橋市・前田山九号石棺墓などで見つかっています。このうち岡田山鏡と前田山鏡は鏡縁の一部が鉤形に欠けていて、観察者は小さい穿孔を数箇所にほどこして人為的に割ったものであるという説を唱えています。其の上で、岡田山鏡は六世紀まで四〇〇年近く伝世したのだと述べています。

双頭龍文鏡は漢鏡6期前半のものが、出現期の前方後円墳である京都府園部町・黒田古墳から副葬に先立って鏡を破砕して木棺の内外に分置する弥生的な風習で出土しました。これは完形に復元できましたが、その他破鏡が、弥生終末期の北九州市・馬場山四一号土坑墓、金沢市・無量寺B遺跡から出土しています。

北部九州で作られたという考えがある弥生小型仿製

鏡も、二世紀に入りますと分布域が縮小し今の福岡県内にだけ見られるようになります。

漢鏡6期の鏡の衰退は大陸・半島に起因する倭国大乱の影響だと考えるのが自然です。このような時期を経て、卑弥呼の時代を迎えることとなります。

参考文献・資料

岡村秀典「前漢鏡の編年と様式」『史林』六七・五、一九八四年。

岡村秀典『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館、一九九九年。

萩生茂卿『梁書』列伝第四八・東夷、汲古書院、一九七〇年。

川村佳男「滇王之印」『悠久の美』東京国立博物館、二〇〇七年。

小林三郎「鏡からみた大和王権と武蔵」『楽未央』明治大学文学部考古学研究室、二〇〇七年。

田村晃一『楽浪と高句麗の考古学』同成社、二〇〇一年。

陳壽『三国志』魏書三十東夷・倭、中華書局出版、一九七三年。

長澤規矩也『後漢書』第一巻下・光武下、第七五巻・東夷、汲古書院、一九七二年。

長澤規矩也『隋書』巻八一列伝第四六東夷・倭国条、汲古書院、一九七一年。

中山喬央「中国鏡と三角縁神獣鏡」早稲田大学大学院考古学研究室発表レジュメ、二〇〇〇年。

梁上椿『巌窟蔵鏡』同朋舎出版、一九八九年。



鏡（その1）

中山喬央（たかひろ）

まえおき

三戸岡さんから電話があり三角縁神獣鏡と並行して「鏡」に関する古今東西の話も書いてみたらどうだとのお話がありました。

日本の考古学はこと鏡、特に三角縁神獣鏡となりますと、熱くなってしまって冷静さに欠けるきらいがあります。

頭を冷やすのに丁度良いし、更に鏡に対して昔から人々がどんな気持ちを抱いていたかということは、鏡を勉強していく上でとても大切な事だと気が付き、浅学非才をもかえりみず書いてみることにいたしました。

お読みになられた方々からのお叱りをお待ち申し上げております。

はじめに

世界中で鏡がどこで何時頃使われるようになったかといいますと、大きく二つに分ける事ができます。

一つは中国で、今一つはトルコ・エジプト・ギリシャ等の地中海沿岸です。

中国では青海省で新石器時代晩期の銅鏡が出土しており、戦国時代を経て秦漢の時代に発達しました。

一方トルコで新石器時代の黒曜石製の鏡が見つかっておりますが、エジプト・ギリシャでは青銅鏡が流行しました。

それぞれの特徴は、中国鏡の多くが円形又はこれに似た形で、鏡背に鈕があるのに対し、地中海沿岸のものは、鈕がなく多くが柄鏡であるという違いがあります。更に中国鏡は殆どが凸レンズ系であるのに対し、地中海系は凹凸両レンズのものがあります。

日本での鏡の利用は、中国鏡を輸入して始まりますがやがて模倣して作るようになりました。始まりは今から二一五〇～二一〇〇年前頃の事だと考えられています。

ところが何故か本家本元の中国や、日本より早く使っていた朝鮮よりも、ずっと大切に取り扱うようになります。

このことにつきましては当時の日本列島での鏡出土数が、大陸、半島と比べますと非常に目立つことや、誰もが知っている神宝として伝世している八咫鏡があることからも、皆様お分かりの事と思います。

ただ一般的に言われている『三国志』魏書東夷伝倭人条の「汝の好物である銅鏡百枚」の記事は、全体の文章から見れば誤訳です。

確かに最後の文章は「故鄭重賜汝好物也」となっていますが、その一小節の内容は「加えて特に汝に紺地句文の錦三匹、細班華の罽（羅・薄絹、綾絹のことか？）五張、白絹五十匹、金八両、五尺の刀二振り、銅鏡百枚、真珠と鉛丹おのおの五十斤ずつを下賜し、みな箱に入れ封印して難升米と牛利に託し、持ち帰って目録と共に汝に授けさせる。これらの全ては、それを汝の国のうちの者達に示して、朝廷が汝らに深く心を注いでいる事を知らせるためのものであるから、特別に鄭重に汝に良き品々を下賜するのである。」と訳すのが正しいと思います。

そしてこの訳文で明らかなように、決して鏡を特別視しているものではありません。

古事記のなかの鏡

古事記では冒頭の序第一段、稽古照今（昔の事柄を考えて今を知る）の中に早くも鏡の事が出て参ります。

寔に知る、鏡を懸け珠を吐きて、百王相続し、剣を喫ひ蛇を切りて、萬神蕃息せしことを。

そこで神々が、天岩屋戸の前で、榊の枝に鏡を掛け、うけい（神に祈って、成否や吉凶を占う事）の勝負にあたってスサノヲノ命が玉を噛んで吐いたところから、歴代の天皇が続き、天照大神が剣を噛み、スサノヲノ命が八俣の大蛇を斬ったところから、多くの神々が相継いで起ったことが分ります。

次が天照大神と須佐之男命の4、天石屋戸のところです。

天の安の河の河上の天の堅石を取り、天の金山の鉄を取りて、鍛人天津麻羅を求ぎて、伊斯許理度売命に科せて鏡を作らしめ、玉祖命に科せて、八尺の勾璁の五百箇の御統の珠を作らしめて、～天香山の五百箇眞賢木を根こじにこじて、上枝に八尺の勾璁の五百箇の御統の玉を取り著け、中枝に八尺鏡（書紀には八咫鏡（巨大な鏡）とかいてあります）を取り繋け、下枝に白和幣、青和幣

を取り垂でて～

天安之河の河原にある堅い岩を取り、天金山にある鉄を取り、鍛冶を業とするアマツマラを呼び寄せて、矛を作らせた。次にイシコリドメノミコトの仕事として、鏡を作らせた。次にタマノヤノミコトの仕事として、五百箇の勾玉を糸に貫いた長い玉飾を作らせた。～天香山に生える、青々と葉の茂った榊の木を、根こそぎ掘り起こして、その上枝には、五百箇の勾玉を糸に貫いた玉櫛を取ってつけ、その中枝には、八咫鏡を取りあげて懸け、その下枝には、白い木綿の和幣、青い麻の和幣を取りつけて垂らした。

ここには鏡を作って、榊の枝に勾玉、布類と一緒につけ、神を迎える支度をする有様が描かれています。

この木の枝に色々なものをぶら下げてという記事が、『三国志』魏書東夷伝韓条に次のように掲載されています。

「またそれぞれの国にはおのおのもう一つの邑があって蘇塗という名で呼ばれる。そこには大きな木が立てられ、それに鈴と太鼓とをぶら下げて、鬼神の祭祀を行なう。逃亡者たちもその場所に逃げ込むと、つれもどされることがないため、そこを隠れ家として盛んに悪事をはたらく。蘇塗を立てることの意味は、仏教徒の浮屠（仏塔）と似たところがあるが、そこで行なわれることは、一方は善事、一方は悪事と全然異なっている。」

従来我国で行なわれてきた、木に銅鐸や鏡や玉等をぶら下げる祭祀が、この韓条の蘇塗の流れを汲むものであるという説が流布されて参りました。

しかし韓条に書かれているように蘇塗が悪事と関係することを考慮すれば、神と結びつけるものとして行なっている当時の我国の木に鏡を結びつける行事は、仏教徒の浮屠と同じく善事にかかわるものと考えられますので、蘇塗とは全く似て非なるものということになります。

次が有名な天照大神が天岩屋戸から出てくる場面の鏡です。ここでは鏡が大神を映し出します。

～ここに高天の原動みて、八百万の神共に咲ひき。ここに天照大神、怪しと以為ほして、天の石屋戸を細めに開きて、内より告りたまひしく、～かく言す間に、天児屋命、布刀玉命、その鏡を指し出して、天照大神に示せ奉る時、天照大神、いよよ奇しと思ほして、稍戸より出でて臨みます時に、その隠り立てりし天手力男神、

その御手を取りて引き出す～

高天原が揺れ動くまでに、集まった八百万の神々が声を合わせて笑った。

一方天照大神は岩屋の奥深く閉じこもっていたが、神々の愉しげに笑い興じる声が波音のようにここまで聞こえてくるので、不審の気持をとどめることが出来なかった。そこで厳重に閉め切った石屋戸を細めに開き、中から次のように尋ねた。～こう答えている間に、アメノコヤネノミコトとフトダマノミコトとが、かねての鏡を差し出して、天照大神にお見せした。見ればなるほど、そこには一柱の尊い神様のお姿が、明るく照り輝いて映っていたので天照大神はいよいよ不思議な事だと考えて、少しばかり戸の中から出て様子を見ようとした。この時を待ちかねて今まで隠れていたアメノタジカラヲノカミは、さっそく日の神の手を取って、岩屋戸の前へと引き出した。～

次に邇邇芸命3、天孫降臨の場面ですが、ここでは天照大神が鏡として伊勢神宮について祭られるようになった経緯が説明されています。

ここに天児屋命、布刀玉命、天宇受売命、伊斯許理度売命、玉祖命、あわせて五伴緒を支ち加えて、天降した

まひき。ここにその招きし八尺の勾璁、鏡、また草薙剣、また常世思金神、手力男神、天石門別神を副へ賜ひて、詔りたまひしく、「これの鏡は、専ら我が御魂として、吾が前を拝くが如拝き奉れ。次に思金神は、前の事を取り持ちて、政せよ。」とのりたまひき。この二柱の神は、さくくしろ、五十鈴の宮に拝き祭る。

そこでアメノコヤネノミコト、フトダマノミコト、アメノウズメノミコト、イシコリドメノミコト、タマノヤノミコト、合せて五柱の、部の族の長をなす神々に、それぞれ役目を定め配って、下界に降させた。

また、かって天石屋戸に篭った天照大神を招き出した、八尺の勾玉、鏡、草薙剣、それに天石屋戸の時に功績のあったトコヨノオモヒカネノカミ、タジカラヲノカミ、および御門の守護神であるアメノイワトワケノカミの三柱の神は、その現身は高天原にとどめて、霊代のみを、御孫に添えて下界に降させた。

この時天照大神が言うには、

「この鏡は、とりもなおさず我が魂であると思って、私自身に仕え祭るように、この鏡に仕え祭れ、次にオモヒカネノカミは、政治のことを受け持ってこれを執り行え。」とこのようにみことのりした。

よって大神の魂である鏡と、オモイカネノカミの霊代との二柱は、のちの五十鈴である、伊須受能宮（伊勢神宮）に祭ってある。

ここでは鏡は、魂すなわち霊魂として考えられています。

最後に允恭天皇3、軽の兄妹（軽太子と衣通王）の、皇位を捨て若くして亡くなった、人倫の道にもとる悲しい恋の物語についてについて紹介します。

この物語の最後に、鏡の別な利用法とか考え方をあらわす歌が詠まれています。

允恭天皇が亡くなられた直ぐ後で、日継の御子として天下を治めることに決まっていたキナシノカルノミコは、位に即くまでの物忌みの間に、身体が白く輝いて、衣の外まで光って見えたので衣通王という名前がつけられていた絶世の美女である同腹の妹に恋い心を打ち明け、妻としてしまいます。

その結果、皇位継承権を奪われ伊予の道後温泉に流されて、若くして妹共々自殺することになります。

その時に詠んだ歌を幾つか紹介します。

あしひきの　山田をつくり
山高み　下樋を走しせ
下問ひに　わが問ふ妹を
下泣きに　わが泣く妻を
こそこそは　やすく肌触れ

樹々の繁った山の中に、田を作った。
山が高いので、下樋を土に埋めて水を流した。
我が心とても同じこと、深く埋めて、忍び忍びに言い寄らねばならぬ私の妹、
心の底に深く秘めて、忍び泣きに泣いている私の妻、
今宵こそはその妻に、心も安らかに肌を触れることが出来たとは。

小竹葉に　うつや霰の
たしだしに　ゐ寝てむ後は
人は離ゆとも

笹の葉に打ちつける霰の音が、耳にたしかに聞こえて来る。
こうして確かに、思う人と一緒に寝ることが出来た上は、
その人がたとえ心を移して、私から離れて行ったところで、もう何も怨むことはないのだ。

うるはしと　さ寝しさ寝てば

刈薦の　乱れば乱れ
さ寝しさ寝てば

可愛ゆいと思って一緒に寝た上は、
刈り取った薦草の乱れに乱れるように、人がなんといって騒ごうともままよ。
こうして一緒に寝た上は。

しかしこのことが知れわたりますと、宮中の役人を初め天下の人々の気持がカルノミコから離れ弟君のアナホノミコに移ります。

そこでキナシノカルノミコは人心の帰趨を恐れて、大臣のオホマヘヲマヘノスクネの家に逃げ込み、戦に備えて銅で作った鏃の軽箭を用意します。

アナホノミコの方は鉄の鏃で穴穂箭を作り軍隊を率いてオホマヘヲマヘノスクネの家を取り囲みます。

スクネはアナホノミコの前に歌を歌いながら現れ「大君となられますミコよ、ご兄弟の仲ではありませんか、どうか兄君に対して武器をお使いになりませんように。そのようなことをすれば、必ず世の中のものが嗤うでしょう。私が兄君を捕らえて差し出します。」といってキナシノカルノミコは捕らえられてしまいます。

そして流罪になって伊予の国に流されてしまうのですが、今度は兄君のことを恋い慕ってソトホシノミコが

君がゆき　け長くなりぬ
山たづの　迎へを行かむ
待つには待たじ

あなたがお出かけになりましてから、もう随分と日が経ちました。山たずの木（にわとこの木）に葉が向かい合うように、あなたをお迎えに参ります。とうていじっとしてお待ちしてなんかいられません。

と伊予の国まで追っていくのです。

そしてキナシノカルノミコの方も妻の来るのを待つのですが、結局は次の歌を残して二人一緒に自ら死んでしまいます。

こもりくの　泊瀬の川の
上つ瀬に　斎杙を打ち
下つ瀬に　真杙を打ち
斎杙には　鏡をかけ
真杙には　真玉をかけ
鏡なす　わが思う妻
ありと　言はばこそよ
家にも行かめ　国をも偲ばめ

山深く篭り隠れた、泊瀬（初瀬。奈良県磯城郡、三輪山の東方）の川の、
上の瀬には忌み清めた斎杙を打ち、
下つ瀬には真新しい真杙を打ち、
斎杙には鏡を掛け、
真杙には真玉を掛けて、死者の穢を清める行事を行なうそうだが、
その真玉のように、私の懐かしく思う妹、
その鏡のように、私の懐かしく思う妻が、
もはやこの世にいない者になるのだとすれば、
私の家がなんになろう。
私は家に帰ろうとは思わない。
私の故郷の国がなんになろう。
私は国に帰ろうとは思わないのだ。

二人にとって故郷である初瀬の奥深い山は、二人が葬られるところでもある。

二人が亡くなったら、渓谷を流れる初瀬川の早い流れの上流には、清めた杭を打って鏡を掛け、下流には切ったばかりの自然な杭を打って、加工をしていない玉を掛け、死者の穢れを取り除く葬礼が行なわれるだろう。

その加工していない玉のように私がしのんでいる妹、その光り輝く鏡のように私が深く思っている妻が最早この世にいないということになるのならば、私が住み慣れた家、親しんだ故郷の山河は私にとって何の値打ちがあるのだろう。私は国に帰ろうとは思わない。ここ伊予で自ら死を選ぶしかないのだ。

参考文献
大野晋・家永三郎・青木和夫『日本書紀』（一）岩波文庫、一九九四年。
倉野憲司『古事記』岩波文庫、二〇〇六年。
後藤守一『漢式鏡』雄山閣、一九二六年。
陳壽『三国志』魏書東夷伝韓条・倭人条、中華書局出版、一九七三年。
陳壽『三国志』魏書東夷伝韓条・倭人条、ちくま学芸文庫、二〇〇五年。
樋口隆康『三角線神獣鏡新鑑』学生社、二〇〇〇年。
福永武彦「日本国民文学全集　第一巻」『古事記』河出書房、一九五六年。

空風（からっかぜ）（五）

太田精一

（十八）

美子が、日赤病院に入院したのは、近くの病院で盲腸の手術を受けた後である。

三歳まで病気らしい病気をしたことがない丈夫な子であった美子が遊びから帰ると、何時になくぐったりとし、腹痛を訴えた。

「お腹が痛いよう」

単なる腹痛ではないらしい。

さきは、盲腸ではないかと疑った。そこで、近くの比較的大きな島崎外科病院に美子を連れて行った。

「ああ、これは盲腸ですね。すぐ手術したほうがいいでしょう」

さきは、吉雄に電話し、病院の意向を伝えた。

医学的知識の乏しい木本夫婦にとって、医師の言葉は神の啓示にも等しい。島崎院長の勧められるままに夫婦は、美子の手術を承諾した。

手術後一週間して美子は退院した。

しかし、退院後も苦痛を訴え続け、食べ物は喉を通らない。四、五日その状態が続いた。美子は、痩せ細り声もほとんど出ない。

衰弱して行く美子を見て吉雄もさきも、仕事が手につかなかった。か細い声でしきりに痛みを訴えている。だが、痛みを軽減してやることもできず、ただおろおろするばかりである。そんな時、佐藤町のさきの姉の夫、藤野俊男が、大工町の近くで用事を済まし、帰りしなに木本家に立ち寄った。彼は、美子の病状を見るなり、眉をひそめて言った。

「こりゃ、重大な病気だぜ。盲腸を手術したと聞いたが一週間以上経って、まだこんな痛がるのはおかしいぜ。このままじゃあ危ない。別のもっと大きな病院で診て貰わなくちゃあだめだ」

「でも、今まで島崎先生が親切に診てくれているのに、

病院を変えるちゅうことは、そりゃあ言いにくいだに」

吉雄とさきは、島崎医師の医療技術と人柄に信頼を置いていただけに、手術後の経過に疑問を持ちながら言い出せないでいた。

「そんなこと言ってる場合じゃあないだら。このままほっといたら、二、三日で死ぬかもしれないぜ。島崎先生には悪いが、誤診と言うこともあるから、ここは、きちっと先生に日赤病院で診て貰うようにしたいと言ったほうがいいぜ」

「そうだな。佐藤の兄貴の言う通りだ。どんな名医だって間違いはある。やっぱり日赤あたりで診てもらうことにしよう。手遅れになったら大変だ」

吉雄とさきは、美子を日赤に転院させたいと島崎院長に話した。

「お話は、よく分かりました。私も手を尽くしてはいるのですが、良くなっていないことは確かです。日赤病院で診てもらうこともいいでしょう。私も一緒に行って担当の先生にこれまでの治療経過を説明し、お願いしてあげましょう」

島崎院長は、すぐに日赤に電話をかけ、病室を確保し、入院の手続きをした。

日赤では腸捻転と診断され、緊急手術ということになった。盲腸手術後、回復の過程で腸捻転を起こしてしまったらしい。再手術となったが、美子に耐えられる体力が残っているかどうか吉雄とさきには心配だった。

だが、他に助かる見込みはないのだ。そのまま放置すれば、死は確実にやって来る。

吉雄とさきは、神仏に祈る思いで手術室の前の椅子に座り、結果を待った。

手術は成功した。だが、回復には時間がかかった。手術室を出た美子の顔色は、土色で血の気がない。麻酔から醒めても目は空ろで声も出ない。

二週間余りそうした状態が続いた。吉雄とさきは病院に付ききりとなって看病に当たった。

秋葉山から吹き降ろす空風が、病院の窓を打ち、隙間から冷たい空気が流れ込んで来る。カタコトとガラス窓を揺する音が、黄泉の国からの使者の声のように聞こえる。吉雄は、まどろみの中から思わず美子を抱き抱えようと手を差し伸べた。

暮れも押し迫った二十日の夜厳次郎が倒れた。

ジングルベルの曲が流れ、千歳町、鍛冶町あたりの繁華街は、賑わっている。

その街の賑わいをよそに木本家は、暗く沈んでいた。生死の境をさ迷っている美子の看病のため、吉雄とさきは、病院に付ききりとなっている。厳次郎とその孫だけでしばらく過ごすことになってしまったのである。

カッティング針製造の仕事は、厳次郎が続けていたの

で、生活に困ることはなかった。が、両親のいない家の中は、寒々としている。伸一が用意した夕食を食べ終わると、厳次郎と孫たちはすぐ床に付いた。

床に入ってから厳次郎は、饅頭が食いたいと言って、伸一を買いに行かせた。厳次郎は、厳つい顔はしているが甘党である。

「おじいちゃ、饅頭買って来たよ。ほら」

伸一は、寝ている厳次郎に饅頭を手渡そうとした。

厳次郎の手は、空中を泳ぐような仕草を見せ、饅頭を掴むことができない。

「ほら。ここだよ。ここにあるじゃん」

伸一は、厳次郎の手を取って饅頭を握らせた。

厳次郎は、震える手でその饅頭を握り、口の中に押し込んだ。

「そんな慌てて食べなくてもいいじゃん」

伸一はいつもと様子が違うと思いながら、残った饅頭を一つずつ強司と恒三とで分けた。

翌朝、伸一は、眠い目を擦りながら、朝食の支度に取りかかった。吉雄とさきのいない間は、食事の支度は、伸一の仕事である。

米を研いで水の分量を加減して釜に入れる。竈に釜を掛け、薪に火をつける。この水加減と火加減が大切で、ときどき〝おこげ〟を出して厳次郎に叱られた。味噌汁に生卵、浜納豆、（大豆に麹菌を手作業で付け発酵させた納豆で京都の大徳寺納豆に似ている）ちり緬雑魚に漬物を添えた。

食事の支度を終え、伸一は厳次郎を起こした。

「おじいちゃ、ご飯できたよ」

厳次郎は、伸一の声に目を覚まし、起きようとするが立ち上がれない。左の手足が麻痺している。

「伸一、どうもおかしい。ちょっと手を貸してくれ」

伸一の手を借りやっと立ち上がった。厠まで歩いて行こうとするが、思うように足を運ぶことができない。伸一に抱えられ何とか用を足した。

テーブルに付いて箸を取り、味噌汁の椀に手をかけたが、持つことができない。

「どうも、中気になっちまったらしい。左の手足が思うように動きゃあしない。俺ももう終わりかもしれないなあ。吉雄とさきが、美子の病院に行き切りだし、困ったことになった」

伸一は、厳次郎の憔悴した顔を初めてみた。厳次郎は、伸一にとって、不死身の男に見え、病気なぞ考えられもしなかったからである。

「大丈夫だよ。すぐに良くなるよ。もうすぐ藤作さと佐平さが来るから手を借りるようにしたら。じゃあ学校に行って来るからね」

伸一は、鞄を肩に掛け中部中学に向かった。

（十九）

浜松市立中部中学校は、昭和二十六年当時でも進学率は高かった。浜松地方では、名門校とされている県立浜松北高等学校への合格者が多い。そのため、学区外から寄留してまで、同中学に通学する者も少なくなかった。

伸一は、当初商業高等学校への進学を希望していた。厳次郎のかねてからの勧めに従って商人になろうとしていたからである。

「お前は、手先があまり器用ではないから職人には向かない。商人になったほうがいいぞ。商人は、職人と違ってうまく行けば大金持ちにもなれる。菅原の利右衛門の店で修行して商人になったらどうだ」

菅原町の建材屋藤本利右衛門商店は、さきの妹みずえの嫁ぎ先である。厳次郎は、伸一の将来を見据え、商人として生きてゆく道を選択させようとしたのだ。伸一は、小学校高学年の頃、近所の算盤塾に通い、全国珠算連盟の検定二級を取得している。

計算能力は高い。だが、彼は自分では、商人に適しているとは思っていなかった。感情をすぐ剥き出しにし、愛想がなく、お世辞がいえない。それに加えて、人に頭を下げることが嫌いであった。

子供の頃から本が好きで、貸本屋から本を借りてきては、つぎつぎと読んだ。特に、戦国時代の英雄、豪傑の登場する講談本を始め、岩窟王、三銃士、アラビアンナイトなどの外国の小説の少年向けダイジェスト版を好んで読んだ。

小学校の高学年から中学生になるにつれ、江戸川乱歩、横溝正史などの探偵、推理小説から夏目漱石、島崎藤村、森鴎外、芥川龍之介、山本有三などの文学作品にも興味を持ち、読むようになった。

また、伸一は、戦後体制の方向が固まった昭和二十五、六年当時の政治、経済問題にも深い関心を持っていた。朝鮮戦争の勃発、警察予備隊の設置、サンフランシスコ平和条約の締結など、日本を取り巻く国際情勢は昭和二十五年から二十六年にかけて大きく変化した。終戦直後の混乱期から脱し、再武装論を中心に独立国としての新生日本へと大きく舵を切ったこの時代は、中学生といえども政治や社会から目を背けることはできなかったのである。

戦時中、爆弾や焼夷弾の落下する中を逃げ回り、家を焼かれた伸一は、二度と戦争をしてはならないという思いが強く、再軍備には生理的な嫌悪感を持っていた。

（政治にしろ、経済にしろ、社会の仕組みをもっと知りたい。それには、義務教育だけで終わりたくない。藤本利右衛門商店で働くにしても商業高等学校を出てからにしたい）

伸一は、厳次郎と吉雄を説得して、中学三年の初めに

進学クラスに入り、受験勉強を始めた。
その年の夏休みが終わった頃、担任の山脇先生が伸一を職員室に呼んだ。
「木本、お前は将来何になりたい。志望校は、浜松商業高等学校となっているが、家業を継ぐのか」
「初めはそのつもりでした。でも、ここ数年で世の中がどんどん変わっていくような気がして、もう少し広い世界を知りたい、それには、都会に出てもっと勉強したいと思うようになりました。家で作っているカッティングの針も機械で作るところができて、これからは相当厳しくなると思います。父は、その仕事を継いで欲しいと言っているのですが、祖父は、親戚の建材屋で働いて商人になることを願っているようです。本当は新聞記者になりたいと思っています。普通高校に入って大学に行きたいと考えていますが許してくれません」
「そうか、木本も大変だな。普通高校に志望を変えるなら、今でも間に合う。うちのクラスの多くが北校を希望している。お前もそこにするか。今の成績なら合格するだろう。どうしても北高に行きたいなら、親父さんに話してやろうか。商人になるには、浜商の方がいいかもしれないが、北校を出てからでも立派な商人になれないわけではない。また、北校を出てから大学に行かないで、すぐに新聞記者や銀行員になる人もいる。いずれにしても、先生はお前の希望するように動いてやるよ」
「有難うございます。父に話してみます」
伸一は家に帰り早速そのことを話した。
「お父さん。ぼくは、北校に行きたい。家の仕事をするにせよ菅原の藤本建材店で働くにせよ、高校は北校にしたいんだ。北校を出てすぐ就職したっていい。時計屋の健ちゃんも、前の家の良ちゃんも北校に行っている。八百屋の文雄さんは、北校を卒業してすぐ中日新聞の記者になった。隣の杉本さんの信ちゃんは、北校を出てから今大学に行っている。この近所の人は皆北校だよ」
信ちゃんは、大工の棟梁杉本満雄の嫡男で、杉本信一郎と言い厳次郎の孫である。吉雄の甥で、伸一の従兄弟に当たる。将来は、浜松に帰って杉本組を再建することを母親から期待されている。
「先生が北校への進学のことで、お父さんと話をしたいと言っている。もし来て貰うなら何時ごろがいい」
吉雄は、先生に伸一の志望を妨げていると思われたくなかった。北校でも浜商でも、家業を継いでくれればそれで良いのだ。この頃はまだ本木家でも伸一を高等学校にやれるだけの余裕は十分にあった。
「そんなことしなくてもいい。分かった。同じ県立で月謝も変わらないだろうから、北校に行きたければ行け。ただ、家の仕事は手伝えよ勉強はできたほうができないよりいいに決まっているが、仕事もしないで勉強ばかりしていては困る」

伸一は、やっと吉雄の同意を得ることができた。
学校では、補修授業が始まり、生徒たちは夜食持参で夜八時頃まで勉強がある。伸一は、二食弁当箱にご飯をいっぱい詰めて二回に分けて食べるつもりであったが昼食時に一回で食べてしまい、夜は近所の駄菓子屋で、コッペパンを買って空腹を凌いでいた。

(二十)

静岡県立浜松北高等学校に伸一が入学したのは、昭和二十七年四月である。校庭には、新入生の入学を祝うかのように桜が満開であった。
新学期の最初のクラスルームの時間に、担任の竹内先生が、一人一人に進学の意思と志望校を聞いた。大学進学希望者が圧倒的に多く、そのうちの半数以上が東大を志望している。
それが、二年、三年と進むうちに東大志望は、全体の一割に減少し、入学できるのは、例年その三分の一程度となる。
当時、県立高等学校の入学試験には英語はなかった。県単位で、アチーブメントテストが実施されていて、数、国、社、理の他に音楽、保健体育、図画工作も受験科目となっていたのだ。
入学後すぐ英語の実力テストが行われた。
伸一は辞書もなく、英語の勉強は、ほとんどしなかったので、惨憺たる成績であった。英語に対する苦手意識は、その後大学に進学しても就職しても、伸一の脳裏から消えることはなかった。
美子は、二月初めに退院し、吉雄もさきも家に戻って来た。
だが、厳次郎の容態は悪くなるばかりである。初めの頃は不自由な体を引きずり、歩いて三、四分程度の距離にある町内の銭湯に行っていたがそのうちに一人では、歩けなくなった。そのため、吉雄と伸一が交替で、昼間の空いている時間に連れて行くことになった。
壁に描かれた富士山の絵を眺めながら、浴槽に肩までとっぷりと浸かって、時間を過ごすのが厳次郎の唯一の楽しみである。
浴槽から出て伸一が、厳次郎の肩を流していると、入浴客のひそひそ話が聞こえて来る。
「刺青も若いうちは良いが、年を取ると皮膚がたるんでみっともないね。竜が生気を失って泣いているようだ」
厳次郎は、聞こえているのかいないのかじっと目を閉じて、泰然と洗い場に腰を下ろし、伸一に体を洗わせている。
伸一は、陰口が聞こえないような振りをして、厳次郎の体を洗い流し、再び肩を抱え浴槽に入れる。たっぷり

と湯に浸かった後、タオルで丁寧に体を拭き脱衣所で着物を着せ、背負って家に帰るのである。

その厳次郎も伸一の受験が終わった三月頃から寝たきりとなり、体を起こすことが困難となった。厠に行くこともできない。

下の世話を伸一がすることが多くなった。厳次郎は、その扱い方が気に入らないと言って、自由の利く右手で、愛用の〝孫の手〟を持ち、伸一をしばしば叩いた。

「俺は、もう長いことはない。八十年も生きてきた。浜松に生まれ育ち、名古屋、東京と暮らしたが最後は、浜松で終わることになる。振り出しに戻るようなものだ。思えばいろいろなことがあって面白い人生だった。伸一もこれからどんな人生が待っているか知れないが、人間、義理と人情を失くしたらお仕舞いだ。それだけは、忘れんでくれ」

呂律も十分回らない中で、伸一に言い残した厳次郎の最後の言葉だった。それから二、三日して意識が混濁し、昏睡状態となった。

だが、心臓が丈夫であるため、なかなか呼吸が止まらない。罹りつけの医者が駆けつけてきた。一時間ほど荒々しい息使いが続いた後、家族に看取られながら息を引き取った。

享年八十歳。桜の舞散る風の強い日であった。

最後まで木本家の大黒柱であった厳次郎の死は、残された家族に、大きな試練を与えることになるのである。

厳次郎の他界する二年前に、木本家では鴨江観音通りに面した〝かざりや〟の店を取り壊している。親戚から借りていた土地を返して、戦前と同じ元の場所で、針の製造に専念することにしたからである。吉雄は、それを機会に、厳次郎から技術を学び、家業を継ぐことになった。

吉雄は、厳次郎が他界した後、これまでの親不孝を反省し、大きな仏壇を買って、朝夕欠かさず位牌に手を合わせ、冥福を祈っていた。

仕事にも打ち込み懸命に働いた。藤作さ、佐平さの二人の職人も引き続き木本家で働いている。ただ、二人ともすでに七十歳を越していて無理はできない。

さきも家事は手を抜き、真っ黒くなって職人たちと一緒に働いた。それでも人手が足りなかった。そのため、男女一人ずつ二人を新しく雇った。

機械による針の製造が始まったものの、増大する需要に追いつけない。厳次郎の他界する前後三、四年が、木本家にとって、経済的に最も恵まれた時であった。

伸一が、高等学校を卒業できたのも、この恵まれた期間であったからだ。

（二十一）

しばらく仕事に専念していた吉雄が、金回りが良くな

るにつれ、冬眠状態にあった生来の遊び癖がまた鎌首をもたげ始めた。

今度は、寺島町に住む子供二人を持つ未亡人である。名前は、川村睦子。彼女も東北生まれだ。浜松の紡績工場で働いているうちに、好きな男ができ、結婚した。ところが、子供二人を残して、夫が亡くなってしまった。そのためやむなく織布工場で働いていた。

睦子は、二人の子供を生んで女としての爛熟期を迎えている。三十八歳で未亡人となってしまった彼女は、心も体もぽっかりと穴の開いたような空しさと淋しさに耐えかねる日々を送っていた。

そんな時、吉雄と知り合ったのである。

織布工場で働いていた睦子が、その工場のカッティング部に針を納入に来た吉雄と会話を交わしたのがきっかけとなった。

半年ほど食事をしたり、一緒に映画を見たりするだけの仲であった。ところが、それだけでは済まなかった。

秋のある晴れた日、吉雄は、家の中で仕事をしているのが嫌になり外出した。外は爽やかな風が吹いている。吉雄は、ふと睦子の家に立ち寄ってみる気になった。

家には睦子だけしかいなかった。

身の上話を聞いているうちに、気がつくと吉雄は、睦子を抱いていた。睦子は、吉雄の強い力を体に感じ、その腕を振り解くことができない。吉雄の熱い吐息が、顔にかかり、目、耳、鼻、唇を刺激する。顔が火照って激しく燃え、思わず唇を開いた。

睦子は、吉雄の腕の中で、吉雄の愛撫に応える自分をどうすることもできないでいる。陶酔が全身を襲い、満ち足りた気怠さがいつまでも残っている。忘れかけていた女の感触が、蘇って来ているのだ。

「吉雄さん。こうなった以上、私を見捨てないでください。奥さんと離婚して私と結婚して欲しいなどとは言いません。でも、子供二人を抱えて食べていかなければなりません。せめて生活費くらいは、面倒を見てください」

「わかった。できるだけのことはしよう。何とか生活できるようにしてやるよ」

睦子を自分のものにしておきたい吉雄は、家族の面倒を看る約束をしてしまったのである。睦子は、工場を辞め、吉雄の囲いものとなってしばらく過ごしていた。

夜遅く帰る日が度重なるにつれ、さきも吉雄の浮気に気づき始めた。また始まったかと半分諦めている。

だが、真黒くなって働いている自分に引き換え、相手の女がお化粧をして、のんびり暮らしているのがどうしても許せない。

「私ばかり働かせて相手の女を遊ばせておくのは、あんまりじゃない。遊ばせていないで、家に働きに来させたらどうなの」

さすがに吉雄も悪いと思ったのか、睦子を説得し、木本家で働かせることにした。

好景気に恵まれ、好調だった針の生産も長続きはしなかった。特需景気に沸いた朝鮮戦争も休戦協定が調印され、日本経済は、デフレが進行しつつあったのだ。

需要の低迷と輸出の停滞により、別珍、コール天業界も不況の風が吹き荒れ、そのあおりで、カッティング業者も仕事が減り、針の注文もめっきり少なくなった。

それに追い討ちを掛けるように機械生産による針が、市場での評価を得て、手作りの針のシェアーは次第に圧迫されて行った。

「伸一、お前がこの仕事を継いで盛り返してくれ。機械生産にするため、中山町の土地を売って機械を作らせてみたがうまく行かない。東京の徒町に、針金を削って納入してくれるところを見つけた。そこで半製品を作らせ、家で蝋付けや焼入れをして完成品を作る。それでやってみようと思う」

吉雄は徒町の金物問屋から半製品を仕入れそれに加工を施して販売することを考えた。針金を機械で削るため、形状が一定している点では手作りに勝っている。

ところが、技術的に解決しなければならない問題が多かった。針のくびれの部分が弱い。焼入れを強くすればその部分が折れやすく、弱くすれば曲がりやすい。一定の品質を保つことが難しいのだ。

それだけではない。一度奪われてしまった市場は、取り戻すことが困難である。得意先は、徐々に減って行った。

吉雄は商圏が失われ注文が減って行く状況に耐えられなかった。長男の伸一に、事業の退勢を立て直すことを期待した。

だが、伸一は、まだ高校生だ。将来にも夢があった。大学進学を希望し家業を引き継ぐ意思を示さないのだ。

吉雄は、次第に仕事への意欲を失って行った。寂寥感と敗北感に打ちひしがれ、現実からの逃避を求めて、睦子に溺れて行く。

伸一は、学校が終わると、帳付け、集金はもとより、東京の問屋に出掛け、仕入れ価格の交渉を行うまでになった。だが、事業は、ジリ貧となるばかりである。

吉雄は、時間の合間を縫って伸一が勉強する姿が、目障りでならない。

「伸一、家がこんなにまでなっても、まだ大学に行くつもりか」

そう言って、教科書、ノート、参考書の類いを家の外に放り出し怒りを顕にするのである。

「お前が大学に入ったとしても学資は出せない。むしろ送金して貰いたいくらいだ。家まで売らなければならないほど事態は、切迫してきているのだからなあ」

伸一にしてみれば、父の反対を押し切って大学に行こうとするわけだから、学資を出して貰おうなどとは始めから思ってはいない。自分一人だけなら、何とかなるという自信はあった。

そこに、一人の理解者が現れた。菅原の親戚、建材店の主人藤本利右衛門である。利右衛門は、伸一にとって義理の叔父に当たる。母さきの妹みずえの主人である。

それだけではない。利右衛門とみずえは、従兄妹同士の結婚であるので、みずえの姉のさきとも従兄妹の関係になる。そのためその子の伸一とも薄い血の繋がりがあるのだ。

「社長」

利右衛門は、吉雄を揶揄していつもそう呼んでいる。

「伸ちゃんが、大学に行きたいと言うんなら行かせてやったらいいじゃん。わしも上の学校を出なかったためにずいぶん損をした。十七年も海軍勤めしたが、下士官止まりだった。この世の中はなんと言っても学校がものをいう。学校を出たというだけで、年が若く、たいした実力がなくても、上の階級に座ってしまうのだ」

利右衛門は、長い海軍生活を通して、義務教育しか受けていない悲哀を嫌というほど味わっていた。せめて、子供たちだけでも大学に進学させたいといつも願っている。その気持ちが、義理の甥である伸一に向かった。

吉雄も、伸一の将来のことを考えると、大学に行かせてやりたい。だが、それを許すことは、木本家の事業の崩壊に繋がるのだ。

もともと仕事の好きでなかった吉雄にとって、汗水流して働くことは苦痛である。また、家族と従業員の生活を守らなければならない責任にも耐えかねられなかった。

(二十二)

吉雄は、自分の思う通りに行かない息子の伸一に苛立ち、妻のさちや強司、恒三に八つ当たりをした。

酒の呑めない吉雄は、心の癒しや慰めを睦子に求め、ほとんど家に寄り付かなくなってしまった。職場は大工町、寝所は寺島町という異常事態がしばらく続いた。その頃になると、睦子の木本家での働く場所もなくなっていた。

初めのうちは、嫉妬に駆られて吉雄の不行跡をなじっていたさきも、吉雄が家に寄り付かなくなるに連れ、次第に愛情も薄れ、諦めの気持ちが強くなって行った。

さきは、夫のいない淋しさと空しさを埋めるため、ただひたすらに働き続けた。だが、心の傷は癒えない。

(心の拠りどころが欲しい。この悔しさ、悲しさを誰かに語り分かって貰いたい)

さきは、浜松市内の小学校の校長をしている小松勇五郎先生に手紙を書いた。小松は、高等小学校時代の担任

で、さきがひそかに憧れていた先生である。
時候の挨拶と安否を尋ねる程度の手紙であったが、すぐ返事が来た。さきは、嬉しかった。その手紙には、甘酸っぱい香りがする。暗く憂鬱な日々に、薄日が差し込んで、回りの空気も明るく感じられる。手紙を箪笥の奥にそっと仕舞い込み、時々出しては読み返した。
小松は、さきの手紙を受け取った時、顔が思い浮かばなかった。しばらくして、二十代の初め白脇小学校で教鞭をとっていた頃の生徒の中に、瓜実顔の可愛くて勉強の良くできた生徒のいたことを思い出した。
（あれからすでに二十年は経っている。どんな大人に成長しているのか。幸せな家庭を築いていることだろう）
手紙を受け取った当初はそう思っていた。
だが、そうした思惑とは全く違い、文通を重ねるうちに小松は、さきが深刻な悩みを抱えている事に気づくのである。
さきは、小松の手紙に心の拠りどころを見出した。小松に会って胸の悩みを聞いて貰いたいと思うようにいつしかなっていた。
鍛治町の喫茶店で二人は会った。
店内は二、三組の客がいるだけで空いている。シャンソン〝ラ・ビアン・ローズ〟の曲が流れている。愛を失くし、暗い気持ちに打ちひしがれているさきには、遠い夢の世界に思える。
小松が店内に入って来た。
「やあ。久し振りだね。どうその後、結婚して主人とはどうなの。手紙では、あまりうまく行っていないようだけど」
「はい。主人は、たまにしか家に帰ってきません。もう諦めています」
「先生も君の手紙を読んでなんとかしてやりたいと思う。だが、私から直接ご主人に言えば、意地になって逆効果になるような気がする。残念だが、今は何もしてあげられない。ただ、君の悩みは聞いてあげられる。誰にも打ち明けることができない時には、いつでも話を聞いてあげるよ」
「先生に特別何かして貰いたいとは、思っていません。ただ、親身になって話を聞いて貰える人が近くにいるだけで幸せです。先生の優しい励ましの声を聞くと生きる希望が湧いて来るような気がします」
さきは、誰かに苦渋を打ち明けたかった。しかもそれが女性ではなく、何故か男性であった。小松に会って話すことによって、まだ自分が、女を捨て切っていないことを実感したかったのだ。
だが、それがすぐに男女の関係に結びつくとは、さきには思えない。小松には妻子があり、浮気しているとはいえ、さきにも夫や子供がいる。

（先生との語らいを胸の奥の引き出しにそっと仕舞っておいて辛い悲しい時に開けてみることにしよう）
小松は、さきと話をしているうちに、生徒の一人としてより、成熟した一人の女を感じた。
（抱きしめて少しでもさきの苦しみを軽くしてやりたい。いや、本当は、そうすることによってさきを女として感じたい）
胸の奥から湧き上がる激情に小松は、危険なものを感ずるのである。
（このまま、さきと会い続けると先生と生徒の仲を越えてしまう）
小松は、教育者で善良な家庭人である立場を忘れかけている自分に気づき愕然とした。
（これからは、やはり会わないでおこう。手紙の遣り取りだけにしよう）
小松は、それを言おうとして言葉を呑んだ。
さきは、彼の心の動きを覚った。〝会わないようにしよう〟という言葉が彼の口をついて出ることを怖れた。惨めな気持ちになることもなく、彼も傷つかずに済むためには、思い切って自分から、切り出すしかない。
「先生とこうして会っているとほっとします。これからもずっと先生の優しさに触れ、悩みを聞いて貰いたい。でも、先生は、きっとご迷惑だろうと思います。私も先生のお顔を見て、声を聞くだけでは、済まなくなりそうです。だからこれからは、手紙だけにします」
「分かりました。私も本当は、さきさんと会って直接悩みを聞いてあげたいのですが、こうして会っているとそれだけでは済まなくなるような気がします。あなたからの手紙には必ず返事を書きます。どうぞこれからも、自分の気持ちを偽らず遠慮しないで書いてください」
二人は、席を立った。
さきは、別れ際に、おずおずと手を差し出した。小松は、その手を優しく包み込むように握り返した。その手の温みからさきは、小松の思いを強く感じるのだった。
さきは、その温みを体の中に閉じ込めるように、手をそっと胸に当てた。
夕闇が迫って来た。閑散としていた店内も、勤め帰りの客で賑わっている。音楽もいつしか、シャンソンから、歌謡曲に変わっている。
美空ひばりの歌う越後獅子の唄が[redacted]、さきの胸に響いた。切々とした歌声が、店を出てからもさきの耳に残って離れなかった。

（つづく）

『残夢消えつくして』

――ストーカーの果て――

忠内正之

（一）

熱燗や　討入は見ぬ　吉良育ち

過日、ＮＨＫテレビの俳句番組を覗いていたら、「熱燗」のテーマで右の句が選ばれていた。忠臣蔵は見ても討入の場面、つまり上野介が死ぬところは見たくないと言うのである。「心情を共有する人物も居るものだ」と嬉しく思った。

私はこの句の作者と同じ「吉良育ち」なのだ。吉良は気候も温暖だが、義理人情の厚い土地柄でもある。

「三州吉良」この地名を聞く度、胸が震える程の懐旧の情が去来する、思い出が蘇る。

その故郷を離れて六十年になる。歌の文句ではないが、「志を遂げて何時の日にか帰らむ」と意気込んで上京して来たが、知らぬ間に中途半端なまま人生の終盤にさしかかってしまった。

ここで偽わらざる告白をしたい。

（二）

三州吉良とは正確に言うと愛知県幡豆郡吉良町である。言うまでもない、あの悪名高い吉良上野介の領地である。

大正十二年発刊の愛知県幡豆郡誌に吉良上野介義央の記述がある。

吉良義央　東條吉良氏の後裔、寛永十八年江戸鍛治橋の邸に生る。年十七、従四位に叙し上野介に任ず。寛文三年靈元天皇踐祚の賀使として上京し従四位上叙す。長子三之助上杉家の嗣子となる。夫人富子は上杉弾正大弼綱信の妹なるが故なり。元禄元年夫人富子

病を得身延山七面天女に祈り病癒ゆ。乃ち富好新田を築き七面堂を建立す。元禄十四年三月浅野内匠頭の為に殿中に傷けられ諸役を免ぜられる。同十五年十二月十四日赤穂浪士の為に討たる。（以下略）

吉良氏は先祖が足利将軍に繋る家柄で徳川家と密接な関係があり、何度か揺籃期の徳川家（松平家）を援けている。故あって絶家同様であったが、家康・秀忠の時期、恩義に報いて高家として復活させた。

三代吉良義央は父義冬の跡を襲って高家筆頭にあげられた。殿中では「雁の間」詰めであったと言うから中堅大名以上の格式があったらしい。

四千弐百石と万石にも満たない旗本が権勢を振るったので、赤穂浪士への判官贔屓もあって事件後は極悪人呼ばわりされたが、地元では名君で通っている。

即ち領地の治山、治水に取組み、産業振興を図った。農水産の他、塩業、養蚕、海苔、茶、等の殖産促進にも力を入れた。

新田開発を行ない、元禄元年富好新田千石の干拓を手掛け、度々の災害に妨げられ10年余りの歳月を要した後完成した。四千弐百石の吉良氏にとってはかなりの負担であったが、一千石の収穫が見込める新田が開発されたのであるから快挙であった。

私はこの富好新田の一隅で七代続く農家の次男として生れ育った。

父は篤農家で、上野介が治水した「吉良用水」の役員をしたり、「吉良顕彰会」の会長等も勤めていたので私は当然の如く吉良贔屓である。だが地区全体が永年に亘る世評の流れを気にして負い目を感じ、村民の性格を控え目にした事は事実である。

さて、私は昭和十二年国民学校に入学する。同年七月支那事変が勃発する。十六年十二月八日太平洋戦争に拡大する。平和な村も戦時一色に染まっていった。十八年県立中学に進む。十九年二月近郊の軍需工場に動員された。

空襲に逢ったり、二度に亘る地震災害も経験したが軍国精神で鍛えられた少年の精神性は揺ぐことは無かった。

やがて終戦、まさか敗けるとは思わなかった。「国破れて山河あり」と言う。上野介の築いた富好新田の稲田は、何事も無かった様にびっしり実って豊年を告げていた。

（三）

終戦は中学三年の夏であった。極端に激しい価値観の変化と教師達の変節振りに戸惑ったものの、復学したその年の暮頃にはかなり落ち着いた。だが何を為すべきか

目標を見出せず、小説本を求めては乱読にふける怠惰な毎日であった。

その頃読んだ吉良出身の作家尾崎士郎の「人生劇場」にいたく感動した。（思えば吉良出身の有名人は古くは「吉良上野介」、近くは任侠の「吉良仁吉」、そして「尾崎士郎」の三者のみである）。そして自分も願わくば東京へ進学して将来新聞記者から尾崎士郎の様に作家になりたいと大それた夢を抱く様になっていた。

当時この近在では東京へ進学する者など殆んど皆無であった。周囲との兼合いの他、我家の財政逼迫の事情もあって上京は反対された。農地改革の結果貧乏となり、先年の三河地震の被害を受けて、嘉永時代からの母屋が倒壊したため先づ再建が急務だったからである。農家にとって母屋は住居のみならず養蚕等の農作業場として不可欠だったのである。

小説に出てくる東京は憧れの都であった。戦後の情報過多が少年の夢を躍らせた。頑固に反対した父もやっと許してくれた。これには自らは進学を諦め農家を守る決意をした兄の協力が大きく物を言った。

中学を卒業して、幸い志望校に合格、上京することが出来た。親しい親戚知人も東京に無かったので、兄が応援していた、地元出身の代議士の自宅にとりあえず泊めてもらった。

時に昭和二十三年の春三月であった。

（四）

上京願望のもう一つの理由、いやむしろ本当の理由は他にあった。

初恋のしかも失恋の傷手と噂から逃れるため恰好良く故郷から遠く離れてしまいたかったのである。

終戦の翌年の正月頃であったろうか、電車通学の往還で時たま一緒になる、セーラー服のよく似合う美しい女学生を発見した。中学と同じ市にある女学校の生徒である。上品な中に明るさと淑やかさを兼ね備えた頗るつきの美形であった。「鄙にはまれ」と思ったが矢張り名古屋からの疎開者だった。

胸の名札で名前は解ったが、男女共学前の時代で、働きかけも、言葉をかける事も出来ず、唯々じっと見詰めるだけであった。一時間に2本の電車、そして約三十分の乗車時間が逢瀬であった。

毎日の様に朝夕顔を合わす度毎にこちらの気持ちは益々昂揚し、完全に彼女の虜となってしまった。

今省みると全く無茶な話で、当時彼女は中学二年生であった。その稚さも察せず想を寄せたのだから至極迷惑な事であったろう。だが私は夢中であった。当時読んだ小説「天の夕顔」の主人公気取りでのぼせ上ったのだ。我慢が出来なくなり友人の妹さんを通じて熱烈な恋文を送り始めたのである。

彼女から返信は全く無かったが、電車の中で垣間見る彼女の表情の変化から多少の好意を持ってくれたものと一人合点し有頂天になっていた。

然るに程なく、私が熱心に書き送った幾通かの手紙は、友人に握り潰され彼女の手許に全く届かず、且つ友人達の間で回し読みされ物笑いの種になっていた事が判明した。

大ショックを受けたが誰を責める事が出来よう。当時学校では付け文などが表沙汰などになれば処分ものであった。私に頼まれた友人にしても、彼女の同級生である妹を介しての橋渡しなど到底可能な話ではなかったのだ。

事態が変っても改める余裕などなく益々カッカと燃えた私は、遂に彼女の住所を突き止めて幾度となく想を込めた手紙を直接送り続けた。だが彼女からの返信は一切無かった。

かくて一方、迫り来る受験に備えて勉強しなければならないが、彼女の事が気になって中々手がつかない。半分腑抜け状態の私を諫めてくれる別の友人達も居たが聴く耳をもたなかった。

遂に彼女とは一度も言葉を交わすことが出来ないまま、また返事も無いまま、時間は経過し、幸い受験に合格、無事上京することとなった。尤も中学四年の受験では二次で落第、五年生でやっと合格したのであった。

思えば封建色のまだ濃い時代であったから彼女への付け文などを学校に届けられなかっただけでも良しとしなければならない。

（五）

代議士の家は神楽坂の上にあった。一面焼野原で家から歩いて通う学校の建物が聳えて見える程であった。それでも裏通りからは三味線の音が聞こえたのには驚いた。流石東京である。しばらくその家に寄寓していたが、家も狭く来客が多いので気兼ねであった。先輩の下宿先に無理を言って闖入させてもらった。その下宿は中野にあって数人が厄介になっていた。結果的にその下宿が後に私の養家となった。

東京の学生生活は戦後間もないこととて食糧事情だけでも大変であった。ひもじい思いもした。食べ盛りなのに昼食を抜いたことも再三あった。中農程度の実家では充分な仕送りは期待出来なかった。当時、実家の家計もかなりきつかった様である。父は町会議員の歳費を前借りして送金してくれた事もあった。

東京生活が如何に苦しくとも、自ら求めた途であり決して辛いとは思わなかった。同級生たちも皆同じ様な生活であった。

東京で受けたカルチャーショックは大きかった。見る

物、聞く物すべて貧欲に吸収して廻った。ポット出の田舎者には刺激が強すぎたかも知れない。どこへでも出掛けて行った。

小説の勉強を求めて学内のサークル「文学研究会」に入会した。下働きではあったが、先輩達や教授の議論を聞くのが面白かった。この会はご多分に洩れず左翼系であった。元来反逆精神の強い方であったから、その傾向に染まっていった。

その年の冬休みに帰省し、帰京してから、悪性の風邪に罹り治りが悪く難渋した。結核の疑いもあって結局数ヵ月休養するの止むなきに至った。学部へ進む大切な時期であった。

病床で色々考えた。頑健でなくては新聞記者はつとまらない。夜討ち朝駆けの仕事である。

万巻の書物を読了したところで簡単に作家になれるものでもない。要は才能の有無である。文科志望の同級生の中には素晴らしい才能の片鱗を見せている何人かの人物が居た。彼等に比べ自分は到底適わない事に気付き始めていた。(後年彼等の中から著名人が出ている)。思えば自分は「井の中の蛙」であった。

折しも父から「左翼運動の仲間に入っているとの噂だが、真実ならば学資金は一切ストップする」との通知が来た。誰かが告口したらしい。兵糧攻めには弱かった。転向せざるを得なかった。「文学と左翼思想」は殆んど同義語に考えていた身として、転進には決意が要った。

結局学部に進む時、思い切って文科から商科への転部を認めてもらった。後めたい気持は残ったが、結果は正解だったと思う。

学部進学後は、病み上りのリハビリの積りで真面目に授業を受けた。当初違和感があった動態経済学も勉強すれば面白くなった。つれて成績も上った。

一方で左翼思想や暴動化する学生運動に対しては批判的となった。(ノンポリ化か?)

現体制のまゝで、経済政策や社会政策を効率的に運用すれば、世の中の不公平や富の偏在は充分調整可能である。専門課目を勉強して実力をつけることが先ず肝心であると考えた。

ロマンへの憧れは断ち難かったが、文学を業とするよりは、趣味と考へ楽しんだり批評をしている方が気楽であった。

やがて就職期となった。世の中の経済は朝鮮動乱によってかなり活性化していたが、当時は既に沈静化して就職難であった。

自分の様な田舎者でも、何とか都会に根を下ろす一端のサラリーマンになって両親や家族を安心させたかった。

幸い銀行に就職出来て嬉しかった。爾来、人並みの苦労はあったが四十数年の勤め人生活を送る事が出来た。

(六)

上京後も彼女への思慕は薄れる事は無かった。孤独生活から寧ろ思いは増幅した。

「不在に抵抗する恋はない」と「石川淳」は言っているが、それは大人の恋であって私の場合忘れる事は無かった。

その後も幾度となく東京から手紙を送ったが全く返事はない。また帰省した際、何度も彼女の通学の帰り途等で待ち伏せした。今なら立派なストーカーの行為である。彼女はその都度泣いたり、また蒼白な顔になって私の眼前を小走りに抜けて行った。それでも、どうしても私は諦める事は出来なかった。「嫌われている」のだと認めたく無かったのである。

そんな私も一大決心する日が来た。所詮は諦めなければならない、温和しくひき下がらねばならない時期と観念したのである。

「その人を愛するとは、その人の幸福を願いその実現に努力することである」と私は定義づけた。願うことしか出来ない、片想いの悲しさこう考え諦めるより他なかったのである。

「今迄の非を詫び、これからはつき纏わないと誓った。そして確たる自信は無いが、幸い私が一人前になれた時、貴女が独身だったならば、その時は正式に求婚します」と未練がましく書き送った。

その時の私の真の心境は、条件の整った彼女なので高校を卒業すれば、直ぐに良い縁談があって結婚してしまうに違いない。私は当時まだ大学四年になる年の正月であった。一人前になって求婚出来る時の目途など全く立たなかったのである。

苦しい決断であったが、それ以降は追っかけも止め、手紙も一切断念した。

R・ローラン作「ジャンクリストフ」の中に次の一節がある。

「世の中は悪く出来てるものだと彼等は考えた。愛する者は愛されない。愛される者は少しも愛さない。愛し愛される者は、いつかは早晩愛から引き離される」。

私はこう思った。たとへ運命の神によって引き離されようと双思双愛の仲になってみたいものだと。

(七)

それから渺茫として四十年の歳月は流れた。或る日、お節介にも彼女の消息を伝えてくれた人があった。

何故か彼女は未だ独身だと言う。家庭の事情か?彼女の健康に支障があったのか?全く不可解であった。まさ

か私の申出を当てにして待ちくたびれた故ではあるまい。

早速、思い切って彼女に電話を入れた。彼女と初めて言葉を交わすことが出来た。私の事は良く覚えていた。昔のストーカー行為を詫びると「済んだ事ですもの」と明るい声で許してくれた。更に「思い出にしたいので貴女の写真を一枚下さい」とねだったが、「私はもう還暦に近いおばあさんですよ。良い思い出だけに留めておいて下さい」とやんわり断わられてしまった。かくては瞼に焼きついている面影を偲ぶ以外によすがは無い。彼女の方が一枚上手であった。

以降私はこりもせず毎年年賀状だけは送っているが返信が来た例(ためし)は無い。妻は結婚当初から彼女の存在を知っており、よく理解してくれて居ると思うが、私が心情を今にひきずっていることは快く思っていないかも知れない。

後日談がある

彼女を私同様熱愛した後輩が居た事を後に知った。私が卒業した中学、現在高校の同窓会が東京で毎年開催されている。数年前その会合で一級下の後輩に逢った。彼は某革新政党の大幹部になっていた。卒業来久方ぶりに逢ったのだが私に親しそうに語りかけて来た。聞けば高校時代彼も彼女を猛烈に愛したらしい。彼は私よりずっと積極的で、彼女の自宅迄押しかけて、母親に彼女との交際を懇願したと言う。結果は「若すぎるから」と断わられた由であるが、彼もまた諦めるどころか益々熱を上げた様である。結局失恋したのであるが、失意をバネにして数年浪人して上京、本郷の大学院迄進んで、今日の大成を果した様である。当時彼女の母親から私の事を聞いていたらしく懐かしく思った由。

彼とは会合で逢う度毎に、互いのイデオロギーは違っても同病相憐れむ仲で昔話に花を咲かせている。彼女の幸せを祈りながら。

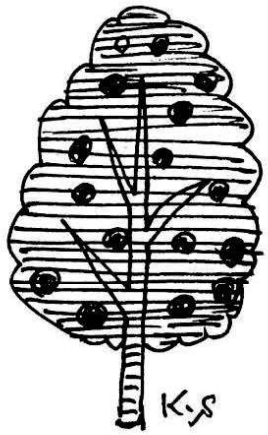
(八)

省みると軍国時代に教育された少年期は、国家のため死ぬ事は覚悟の上であり天皇や国家が信仰であった。敗戦によって〝身捨つる〟程の祖国が亡くなった学生時代は恋愛が至上のものであった。そして左翼思想に溺れそうになった。

就職してからは勤め先が神の様な存在となった。高度成長期を働き抜いて来て、人知れぬ苦労もあったがやり甲斐もあった。まわりの人達に迷惑をかけながら協力を得て今日迄大過なく生きて来る事が出来た。唯々感謝あるのみである。余生は少しなりとも恩返しに捧げて行きたい。結びに尾崎士郎が愛息に遺した言葉を共感をもって引用させて貰います。

「残夢消えつくして、一抹ののこるところなし、人生の紅葉ここに悉く終る。人情を知ってこれに及ばず。ただむくゆる能わざるを悲しむのみ」。

終



編集後記

三戸岡さんから『江戸の遺伝子』を送っていただきました。四月八日付朝日新聞読書欄でも取り上げられましたこの本には、日本人が江戸時代に持っていた基本的真面目さとか、階級性のなかの平等性などの遺伝子に自信を持ち、それを認識することによって、我国を経済大国だけである現況から、世界の人々の為に役立つ国へ変えて行こうとする考えが述べられています。

『まんじ』の会は、様々な分野の方々からのご投稿により、多くのことを博く見聞したうえで、それらを理性的に判断し、疑問の残るものを排除したうえで確実と思われるものを自分のものとして摂取していく為の会合であると思っておりますが、この度、新井さんから最近七年間にわたる『まんじ』に関係する様々なリストが寄せられました。この間二九回発行されておりますが、休まずに寄稿されました方は、三戸岡・新井・鯨の三氏であり、総執筆量の上位三人は、三戸岡・島津・千坂のお三方となります。この方々に対しましては深甚なる敬意を表しますと共に、それ以外のご投稿いただきました大勢の方々のお陰もあって、今日の『まんじ』があることが良く分りました。

話は変りますが文武両道の教育を建学の精神としてこられた「報徳学園」で、今春「報徳教育部」が学内で発足いたしました。若い生徒諸君がどのように報徳精神を学んで身につけて行くのか楽しみです。

ハート・トウ・ハートと詩集「ろかいゆ」で好評を博してこられた松下壽男さんの新連載「ホメラレモセズ・クニモサレズ」と泉(創作神話)が装いも新たに始まりました。今後の展開が大いに期待されます。

(T・N)

まんじ 第104号

平成19年5月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道夫（みとおか　みちお）
編集長　中山　喬央（なかやま　たかひろ）
事務局長　鍋屋　次郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX　045（544）5947

（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　まんじ

（印刷製本）　大和印刷株式会社
〒332-0031　川口市青木1－12－20
TEL 048（254）3311　FAX 048（254）3313

表紙の絵について
「平常心」

田寺怜葦（たでられい）　画

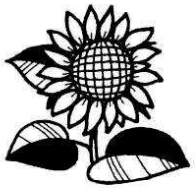
まんじ

No. 105

2007.8.1

まんじ第百五号　目次

ダンスにはまった私……島津隆子…4
漢詩潮騒録（五十一）……鯨游海…9
古い物　遠い夢　随想「信楽の蹲」……忠内正之…14
あばれ天竜（五）―金原明善の一生―……三戸岡道夫…20
同胞の御楯となりてわれら逝く（二の一）……千坂精一…35
木戸屋敷の冒険……大和禎人…49
葛飾柴又と老婦人……伊治哲…51
米沢紀行　―遠き従兄弟との再会―……平山恵敏…57
空風（六）……太田精一…62
薬草園「天城杏仁の里」（前）……堀内永代…75
青の漂流（一）……宅見勝弘…86
古代大和朝廷の謎解き……隆恵…91
まんじ語録（その二）……新井宏…103
短歌行雲流水（十七）……石黒修身…114
秋の小片　―詩集「ろかいゆ」より―……松下壽男…117
ホメラレモセズ　クニモサレズ（四～六）……松下壽男…118
司馬遼太郎と京都（司馬雑感十二）……山田嘉久…130
文化勲章に輝く赤堀四郎博士の一生……松下魏三…142
還暦からの考古学（十）……中山喬央…146
鏡（その2）……中山喬央…157
針の穴を通った駱駝（八）……鍋屋次郎…165
編集後記……編集子…176
表紙……田寺怜葦
カット……宮城正彦
……鈴木國男
……清水トム



ダンスにはまった私

一

旅に誘われて

島津隆子

それまでの私は旅好きなグループの圏外にいたのだが、平成十一年の春、そのグループから韓国への旅に誘われた。それから四年つづけて、春、四月になると、私はその韓国旅行のメンバーに加わっていた。

「どうして韓国なの？」

「そんなにあの国が好きなの？　どこにはまったの？」

私の韓国行きを知った、たいていの人は笑って、不思議そうに尋ねてきたものだ。咄嗟に、記紀伝承上の皇后を思い浮かべた私は言い返す。

「神功皇后の時代から、日本と朝鮮半島は因縁浅からぬ間柄だったのよ。機会があったらどんな国か、見てやろうと思うのは、そんなにおかしいことかしら」

ちなみに、信頼性の薄い世界の話しになるが、神霊に憑かれた神功皇后は、神託の命じるままに、朝鮮半島の新羅征服の決意を固めた。

筑紫に大軍船が勢揃いし、海を越えて、西方の国々に攻め入る時がきたのだ。

出港して海原を行く軍船に不思議なことが起った。海中の魚という魚が軍船を背負い、新羅をめざして泳ぎ始めたのである。

スピードを増す船の舳先（へさき）で波飛沫（しぶき）を浴びる男装の皇后は、このとき臨月だったが、腹痛を鎮め、出産を抑えるため、腰に石のおもりをつけての出陣であった。

ところが驚くことに、皇后を乗せた軍船は次第に勢

を増し、陸上に乗り上げて、大地を滑走し、新羅国の半ばにまで達したのだ。そして、進駐した軍船から、次々に兵士たちが飛び降りた。

この有様を見守っていた新羅は、一戦も交えることなく、あっさり降伏してしまった。

皇后は手にする指揮棒を新羅王家の門前に突き立て、この国の占領を誇示したのだ。

男まさりの皇后の威厳に恐れをなした隣国の百済、高句麗も相次いで軍門にくだった。

勝利して意気揚々と筑紫に凱旋した皇后は、こらえにこらえていた臨月のおなかから、皇子を産み落とした。後の応神天皇の誕生である。

話しを元に戻すと、口うるさい姑を抱え、少しだがものを書く仕事もしていた私には、取材以外、旅の機会もあまりなかった。面白い神功皇后の逸話につられて、私は重い腰を上げ、韓国旅行に参加する気になった。

それに、この旅は韓国通のT画伯の肝いりの旅程なのだ。画伯は韓国の弘益大学美術大学院の陶芸科出身、碩士の学位をもつ陶芸作家である。まさに独立独歩の苦労人だが、それを感じさせない優しい紳士（ジェントルマン）なのだ。私と画伯は史遊会で出会った、かなり昔からの仲間である。

そして、メンバーの一人に世話役氏がいる。

この人は、陸軍主計少尉としてインパール作戦に参戦しているという戦争体験者である。それから企業戦士として活躍されたらしいが、その生きざまからの荒々しさは微塵も感じさせない、天性のユーモアで周りの人を楽しくさせることが上手い、世慣れた男性である。

あと、二、三人の男性と、四、五人の気の合った女性仲間とのやりとりも、旅ならではの楽しみのひとつだ。

そして、旅が終ったその都度、手許には、まめな世話役氏の骨折りの成果ともいえる、全員で綴った小さな文集が残されている。その表紙を飾るのはいわずと知れた画伯の描く、折々に訪ねた懐かしい処の風景画である。

私にとって最後の韓国の旅になったのは、今から四年前に行った『済州島ボンゴの旅』だ。

私は何冊目かの旅行記がマンネリに陥るのを避けたくて、この記はある友人に宛てた手紙文にした。もちろん宛先のない書簡である。

その最後の件（くだり）に、こんな場面が記されている。

さて、旅の最後の夜はカラオケに行きました。

あなたのご自慢の歌は「酒は涙か溜息か」でしたけれど、私は面白がって聞かせていただくだけの無芸ぶりでした。それは今もそのまま変っていないのですが、その夜は画伯に誘われて、ダンスを踊りました。踊ったというよりも上手なリードに乗って、ただ足踏みをしていた

ダンスにはまった私

一

旅に誘われて

島津隆子

それまでの私は旅好きなグループの圏外にいたのだが、平成十一年の春、そのグループから韓国への旅に誘われた。それから四年つづけて、春、四月になると、私はその韓国旅行のメンバーに加わっていた。

「どうして韓国なの？」

「そんなにあの国が好きなの？　どこにはまったの？」

私の韓国行きを知った、たいていの人は笑って、不思議そうに尋ねてきたものだ。咄嗟に、記紀伝承上の皇后を思い浮かべた私は言い返す。

「神功皇后の時代から、日本と朝鮮半島は因縁浅からぬ間柄だったのよ。機会があったらどんな国か、見てやろうと思うのは、そんなにおかしいことかしら」

ちなみに、信頼性の薄い世界の話しになるが、神霊に憑かれた神功皇后は、神託の命じるままに、朝鮮半島の新羅征服の決意を固めた。

筑紫に大軍船が勢揃いし、海を越えて、西方の国々に攻め入る時がきたのだ。

出港して海原を行く軍船に不思議なことが起った。海中の魚という魚が軍船を背負い、新羅をめざして泳ぎ始めたのである。

スピードを増す船の舳先（へさき）で波飛沫（しぶき）を浴びる男装の皇后は、このとき臨月だったが、腹痛を鎮め、出産を抑えるため、腰に石のおもりをつけての出陣であった。

ところが驚くことに、皇后を乗せた軍船は次第に勢いを増し、陸上に乗り上げて、大地を滑走し、新羅国の半ばにまで達したのだ。そして、進駐した軍船から、次々に兵士たちが飛び降りた。

この有様を見守っていた新羅は、一戦も交えることなく、あっさり降伏してしまった。

皇后は手にする指揮棒を新羅王家の門前に突き立て、この国の占領を誇示したのだ。

男まさりの皇后の威厳に恐れをなした隣国の百済、高句麗も相次いで軍門にくだった。

勝利して意気揚々と筑紫に凱旋した皇后は、こらえにこらえていた臨月のおなかから、皇子を産み落とした。後の応神天皇の誕生である。

話しを元に戻すと、口うるさい姑を抱え、少しだがものを書く仕事もしていた私には、取材以外、旅の機会もあまりなかった。面白い神功皇后の逸話につられて、私は重い腰を上げ、韓国旅行に参加する気になった。

それに、この旅は韓国通のT画伯の肝いりの旅程なのだ。画伯は韓国の弘益大学美術大学院の陶芸科出身、碩士の学位をもつ陶芸作家である。まさに独立独歩の苦労人だが、それを感じさせない優しい紳士（ジェントルマン）なのだ。私と画伯は史遊会で出会った、かなり昔からの仲間である。

そして、メンバーの一人に世話役氏がいる。

この人は、陸軍主計少尉としてインパール作戦に参戦しているという戦争体験者である。それから企業戦士として活躍されたらしいが、その生きざまからの荒々しさは微塵も感じさせない、天性のユーモアで周りの人を楽しくさせることが上手い、世慣れた男性である。

あと、二、三人の男性と、四、五人の気の合った女性仲間とのやりとりも、旅ならではの楽しみのひとつだ。

そして、旅が終ったその都度、手許には、まめな世話役氏の骨折りの成果ともいえる、全員で綴った小さな文集が残されている。その表紙を飾るのはいわずと知れた画伯の描く、折々に訪ねた懐かしい処の風景画である。

私にとって最後の韓国の旅になったのは、今から四年前に行った『済州島ボンゴの旅』だ。

私は何冊目かの旅行記がマンネリに陥るのを避けたくて、この記はある友人に宛てた手紙文にした。もちろん宛先のない書簡である。

その最後の件（くだり）に、こんな場面が記されている。

さて、旅の最後の夜はカラオケに行きました。

あなたのご自慢の歌は「酒は涙か溜息か」でしたけれど、私は面白がって聞かせていただくだけの無芸ぶりでした。それは今もそのまま変っていないのですが、その夜は画伯に誘われて、ダンスを踊りました。踊ったというよりも上手なリードに乗って、ただ足踏みをしていた

だけなのですが……。次には世話役氏が相手でした。
「君は歳とって、だいぶさばけてきたようだね。それとも厚顔になったのかな」
と皮肉屋のあなたに辛辣に言われてしまいそうです。
画伯に誘われて、私の腰はたしかに引けたのですが、少しお酒も入り、旅先の気安さも手伝って、
「えい、ままよ」
とばかり、立ち上がりました。
それにしても、なぜか、一瞬、私の脳裏にダンスが全盛だった遠い昔の青春の頃が甦りました。その頃の私は、暗がりで映画や演劇ばかり観ていたようです。
今にして悔まれるのは、あれだけ巷に流行っていたダンスなのに、どうして踊ろうとしなかったのか、ということです。
「リズムにのって体が揺れるだけで、何と心地よいことだろう」
突然、私は目眩を覚えました。遅い目覚めです。
帰宅した私は、呆れ顔の家人に言い放ちました。
「ぜったいダンスを習うわ」
しかし、今日に至るも、私は煩雑な日常に流されています。
こんな風に、相変わらずの私ですが、気心の知れた仲間と、それなりに楽しく旅などしていることを、突然思い出したあなたにお知らせしたくなり、手紙を書いたというわけです。気まぐれな約束
この韓国旅行から帰って間もなく、九十八歳まで生きた姑を見送り、私は長年肩にかかっていた重い責任から解放された。
そして、瞬く間に一年余りが経った。
その間、旅の仲間たちとは、たまに食事などしながら冗談口や毒舌をたたいて楽しむ機会を何度か持った。
「みんなで集まって、こんなふうに楽しい時を過ごせるのも、いつまで続くのかな」
誰彼の胸を、ふと、よぎった思いだったろう。
ところで、自由の身になった私は、独り悶々と焦りを感じていた。
思えば一人娘の中学入学を機に、少女の頃夢みた、もの書きを模索し始め、遅まきながら、書いたものが活字になり、本にもなった。その喜びは大きかった。それは思うようにならない家庭生活からの逃避だったが、家にいながらできる仕事なので、家事の手抜きも上手くなり、バカのつく持ち前の一途さで、没頭してきた。
だが、この仕事の辛さも嫌というほど味わい、年を重ねるにつれ、もう一つ違う自分はないものかと、思い始めたのだ。いわば、格好よく言えば、自分の可能性を試

してみたい欲望に駆られたのかもしれない。
所属する会でも二、三人の陶芸作家を身近にみた。何度か作品展を訪れ、気に入った作品が幾つも私の周辺を飾っている。絵描きの友達とも仲良くなった。私を書いてくれた絵は、リビングに掛けられ、面映ゆい対面を繰り返している。
生き生きと自分を表現している創作者たちに、私はつい、嫉妬に似た羨望を感じるのである。
私の中にも、ようやく家庭の呪縛から解放され、何かをしたくなっている自分がいる。気がつくと、
〃取り過ぎた年も考える、けど、こればかりはどうしようもないことだ。しかし、人間は幾つになっても、自己開発ができるのではないか。老いたなどと考えない方がいい。いや、気力だけはあるつもりだが、持ち時間も体力も持久力も、なくなりつつあるのが現実だ。何かに熱中したところで、先が知れている〃
また、座った机の前で漠然と、
〃いつの間にか、だんだんと手足の筋肉が衰え、パソコンを叩く指先も震え、思考も止まって、なれの果ては痴呆老女かな〃
などと自問自答を繰り返していた。
しかし、私だってここまで手をこまねいて、ただ怠惰の年月を送ってきたわけではない。時間をやり繰りしながら、一つ、二つと挑戦し、それぞれ二、三年ずつはつづけた経験を持っている。
五十代のリズム体操にも行った。太極拳もかじった。スポーツクラブに入り、ストレッチを習い、プールの中を歩いた。そして、ベルトコンベアーの上を四、五十分黙々と歩いたが、風景のない単調さに、泣きたいぐらいの退屈を味わって、とうとう挫折した。
そして、何故か、韓国でのダンスのことがフウーッと頭に浮んだ折も折り、久し振りに皆と落ち合うことになった、その日のことである。
「ところでこの頃、膝の具合はどう？　少し足を引きづっているように見えるけど」
開口一番、目敏い世話役氏に私は痛い処を衝かれた。
実は私は四十代半ばから、慢性的な右膝痛を抱えている。中年の頃、姑についていった整形外科医院で撮ったレントゲンに、症状が出なかったので、長年、膝をさすりながら、我慢して過してきたのだ。
だが、歳をとるにつれて痛みが増し、少しビッコを引くようになっていた。
さすがに最近は、
「次は私の番よ」とばかり二、三の整形医や鍼灸院に通ってみたが、はかばかしくなかった。
「そんなことをしていると、今に車椅子ですよ」
世話役氏に脅かされ、私は背中を丸めて車椅子に乗る

自分の姿を想像し、愕然とした。
「坐ってばかりいるから、運動不足ではありませんか」
女友達の助け舟に、私は答える。
「そうなの、私、散歩はバカらしくて大嫌いなの。だけど、運動しなければいけないと、ストレスになるほど痛感しているのよ」
「あなた確か、韓国で、私、ダンスが踊れるようになりたい！　とか言ったでしょう。ダンスは体によいと聞きますよ。僕は五十代にやりましたけどね。その後は止めたままですが……」
世話役氏の言葉に、女性三人が満更でもない表情を浮かべた。すかさず私は応酬する。
「あら、不思議ね。私ここの処、ずっとダンスのこと考えていたの。そうよ、こうして会ってお喋りだけというのも、能がないわ、生産的でもないし。健康のためにダンスを踊る方が、ずっとメリットがあるわね」
「共通の趣味を持って、一週間に一度、顔を合わせるのも、有意義だわ」
と友人も共感を示した。
「善は急げといいますから、どうでしょう、この際、皆でダンスを習うというのは……」
世話役氏はいつものように話をまとめた。
「どの位したら、ダンスで画伯のお相手ができるようになるのかしら」
「それは、ずーっとずーっと、遠い話だと思いますよ」
「大体、踊れるようになるかどうかも、未知数ですから。なにしろ五十代ならぬ、〇十代の手習いですもの」
口々に言いながら、一瞬にもせよ、三人の脳裏には一寸良質なワンピースの裾を優雅にゆらせ、リズムにのって蝶のように舞い踊る、自分の姿が浮んでいたにちがいない。
とんでもない妄想か、はたまた幻影の虜になったのだ。そして、その場で、驚くほどすんなりとダンス教室に通うことが決まった。
私独りでは決断できなかったかもしれない。
〝みんなで渡れば恐くない〟式の、気まぐれな人たちの気まぐれな約束事の成立であった。

つづく



漢詩

潮騒録（五十一）

鯨游海

國寶漢委奴國王之金印独白　　平成十九年三月

誰破安眠崇國寶
一朝贋説激論深
世人豹變猜疑眼
吾輩古來無垢金

押韻・深　金

〈国宝「漢委奴国王」の金印独白す〉
誰か安眠を破り　国宝に崇めたるか
一朝の贋説　激論深まる
世人豹変して　猜疑の眼
吾が輩古来　無垢の金なるに

〔注　解〕

福岡市立美術館に鎮座する超一級の国宝。後漢の皇帝から、朝貢して来た倭の奴国王に贈られたと「後漢書」に記されている金印。これが模造の贋物だとは！

金印は天明四年（一七八四）博多湾志賀島の水田の側溝近辺で甚兵衛なる百姓が偶然発見し土中より堀り出された。直ちに亀井南冥という地元の漢学者により鑑定され黒田藩に収められた。南冥はこの功により一躍全国区の儒者となる。当時開校したばかりの藩校甘棠館々長として名を馳せ、ライバルの藩校修猷館を凌ぐ地位を確立した。その後中国でも金印「廣陵王璽」が出土し字体や寸法、形や質感がほぼ同じであったこと等から本物であると認定され定説となったが、当時から贋作説が修猷館等より提起されてはいた。では仮に偽物だとすれば一体誰が何の為に？、昨年千葉大学三浦佑之教授（古代文学）が贋作説を発表し、再び真贋論争が沸騰している。
この詩は擬人法による諷刺句で人間俗界を皮肉る。

☆太古より黄金の光り失せざるに
　何ぞかく険し吾を観る眼の

孔子之一生（廿五）經書篇纂

丙戌寅月

目睫古希還故郷
奉迎國老案政綱
齊侯弑逆魯無力
沒入經書萬巻章

押韻・郷綱章

〈孔子の一生（廿五）経書編纂〉

古稀を目睫に　故郷に還る
国老に奉迎され　政綱を案ず
斉侯弑逆さるるも　魯に力なく
没入す経書　万巻の章に

〔注　解〕

目睫＝目と睫。お互が真近かな事から空間的、時間的に近いこと。孔子が魯に帰国したのは六十九歳であった。

奉迎＝貴人をお迎えする。ここでは国老として遇すること。政綱＝政治を行う大原則。大本の方針。弑逆＝臣下が君主を殺害する。下剋上の最たるもの。

経書＝詩経と書経。更に易経、禮記、春秋を五経という。何れも孔子が編纂した。聖人の教えが書かれている。

十四年にも亘る理想の君主を求めての遍歴の旅から祖国に帰った孔子は既に六十九歳となっていた。君主哀公は敬意を払って国老として待遇し、いわば政治顧問となった。そんな時隣国斉では内乱が起こり簡侯が家臣に弑されて了う。正義を糺せば魯は軍を出して君主を助けねばならない。孔子は哀公や三桓にそれを説くが、哀公には力なく、また三桓にしてみれば、国こそ違え君主をないがしろにしている点では同じような立場にいる訳で承知する筈はなかった。

孔子としては残念乍ら引き下がらざるを得なかった。これ以上討伐に固執すれば又魯の国を去らねばならない。この無念さが（魯に伝わっている周の文化を整理して後世に伝え、同時に弟子の教育に専念するのが、これからの自分の使命なのだ）という思いに結晶した。

かくして孔子は古典の整備、史書の記述に専念する。

☆風雅頌せめて残さむ三百篇
　生き来し人の喜怒哀楽を

孔子之一生（廿六）弟子群

丙戌寅月

史書明記三千輩
論語留名卅六人
沐浴吹風談笑唄
至今文質尚彬彬

押韻・人　彬

〈孔子の一生（廿六）弟子群〉

史書に明記さる　三千の輩
論語に名を留む　卅六人
沐浴して風に吹かれ　談笑して唄う
今に至るも文質　なお彬々たり

〔注　解〕

沐浴＝ここでは沂水（川の名）の畔の温泉に入浴して遊ぶこと。本来は身体と髪を洗い清める意＝斎戒沐浴。

文質＝外形と内容。外観の美と実質。彬彬＝盛ん。はっきりしている。文質彬彬＝中味と外観が整っていて立派なさま。弟子達がそれぞれ立派なこと。

論語では次のように記す。巻六先進篇第二六章「…莫春者春服既成　得冠者五六人童子六七人　浴乎沂　風乎舞雩　詠而歸…」。孔子が四人の弟子に対し「若し君達の真価を知ってくれている上司に仕えたとしたら何をしたいか」と質問したのに対する曾晳の答である。

帰国し国老という称号で遇された晩年の孔子は、古典の集大成と弟子の教育に専念した。「弟子の数蓋し三千人。六芸に通ずる者七十余人」と史記に記されている。

また論語に名前が残る者は三十六人。多出するのは順に子路、子貢、冉有、子張、子夏、顔回、曾子、樊遅……。

☆論語なる書に名を残す男子らは
　何故生き生きと眼輝やく

孔子之一生（廿七）別　離

丙戌寅月

坐忘高弟別離虚
子路顔回更伯魚
或病或軍應慟哭
噫天亡彼未亡予

押韻・虚魚予

〈孔子の一生（廿七）別　離〉

坐忘の高弟　別離むなし
子路顔回　更に伯魚も
或は病に或は軍に　応に慟哭すべし
ああ天彼を亡ぼせり　未だ予を亡ぼさざるに

〔注　解〕

坐忘＝無我の心境になること。雑念を去って無差別の境地に入ること。伯魚＝孔子の長男で本名鯉。

論語巻六先進篇第九章「顔淵死　子曰　噫天喪予　天喪予」第十章「…非夫人之為慟　而誰為慟」

故郷に帰り七十歳を越え平穏に見えた孔子を突然の不幸が相次いで襲った。即ち一人息子の孔鯉（字は伯魚）が五十歳で病死、翌年には後を託すべき最高の人格者の顔回も病に斃れた。更に最も頼りにした子路も戦死。

☆何為ぞ亡ぼし給ふ彼の人を
　ああ天未だ予を召さざるに

孔子之一生（廿八）私生活　　丙戌寅月

好裘毛厚貉邪狐
鶴髪銀鬚偉丈夫
愛酒無過愉美食
不拘貧富問方途

押韻・狐夫途

〈孔子の一生（廿八）私生活〉

裘は毛厚く　貉が狐を好む
鶴髪銀鬚の　偉丈夫
酒を愛するも過ぐる事なく　美食を愉しむ
貧富にこだわらず　方途を問う

〔注　解〕

裘＝かわごろも。毛皮の外套で狐、貉、貂などが最高級とされる。孔子は衣服の色に合せ裘の色を選んだという。このように晩年の生活はかなり贅沢であった。即ち沽酒（市販の酒）は用いず自家製を愛飲、肉類は干し肉や臭いが悪いのは避け「主食は幾ら精白してもいい」という。膾（生肉の辛子和え）は細分したものを好んだ。

人間が富貴を求めるのは当然として容認した。但しその方途（方法）富貴を如何に入手したか、を問題とした。

☆身を捧げ仁為す人の晩年の
　衣食足る知り精神安らぐ

孔子之一生（完）終　章　　丙戌寅月

君不見天地玄黄滿險難
君不聞文明衝突脅平安
不忘仁義禮信智
宇宙洪荒歡喜完

押韻・難安完

〈孔子の一生（完）エピローグ〉

君見ずや　天地玄黄にして険難に満ちたるを
君聞かずや　文明衝突して平安を脅やかすを
仁義礼信智を　忘れずんば
宇宙洪荒に　歓喜完からん

〔注　解〕

魏の鍾繇、梁の周興嗣・千字文の冒頭の二句「天地玄黄宇宙洪荒」を引用した。即ち「天の色は幽く、地の色は黄色であり、空間や時間は広大で、茫漠としている」。玄は幽遠で黒色。宇は四方空間、宙は現在、過去、未来の時間。洪は大きい。荒は蕪れて茫漠。原典は易経。「文明の衝突」はハーバード大学教授S・ハンチントンの名著より。険難＝危険と困難。仁義禮信智＝儒教の五常。人が常に踏み行うべき道。結句は「第九合唱」を意識。

☆天地の遥けさに堪へ独り聴く
　仁の奏づる歓喜の合唱

孔子之一生（廿九）永　眠　　丙戌寅月

論語言朝聞道兮
此身夕死可無迷
一晨夢謁周公旦
感極忘醒天下啼

押韻・兮迷啼

〈孔子の一生（廿九）永　眠〉

論語に言う　「朝に道を聞かば
此の身夕に死すとも　迷うこと無かるべし」
一晨夢に謁ゆ　周公旦に
感極まり醒むるを忘れたれば　天下啼けり

〔注　解〕

論語巻二里仁篇第八章「子曰、朝聞道　夕死可矣」この道とは、聖人の説く道であろう。即ちそれは周公旦の声である。夢に迄あこがれた謦咳であった。

暫らく見なかった周公旦の夢。漸やくある晨、その周公旦に夢の中で拝謁する事が出来た。孔子の歓喜は如何ばかりであったろうか。もう何時死んでも本望であった。

感極まり眼醒めるのを忘れ永久の睡に就いた。この為天下＝世界中が啼いた。兮は語勢を強める接続助辞。

☆夢うつつ周公の謦旦の咳
　道説く声に永久に眼醒めじ

《漢詩の流れ40》南宋の巨星たち⑤文天祥

南宋の詩を語って文天祥を欠く訳にはいかない。壮烈な「正気の歌」を詠み死を以って祖国に殉じた。

文天祥（一二三六～一二八三）、字は履善、号は文山。盧陵吉水（江西省吉水県）の人。弱冠にして進士第一席に及第、累進し丞相に至る。折から元軍の進攻に抗戦したが滅び、捕らえられ大都（北京）に送られ土牢に閉じ込められた。三年間屈せず、終に刑死した愛国者。

過零丁洋　（零丁洋を過る）

辛苦遭逢起一經　辛苦　遭逢　一経より起ち
干戈落落四周星　干戈落々　四周星
山河破碎風飄絮　山河破砕し　風は絮を飄えし
身世浮沈雨打萍　身世浮沈し　雨は萍を打つ
惶恐灘頭説惶恐　惶恐灘頭　惶恐を説き
零丁洋裏歎零丁　零丁洋裏　零丁を嘆ず
人生自古誰無死　人生古より　誰か死無からん
留取丹心照汗青　丹心を留取して　汗青を照らさん

(注)起一經＝聖人の書、四書五経を学んで立身出世した意。四周星＝四年間。一年を一周星という。絮＝柳の綿。萍＝浮草。惶恐灘、零丁洋＝何れも地名。零丁は一人ぼっちのさま。丹心＝赤誠の心。留取＝留めおく。汗青＝歴史書。竹簡（竹の札）は、青竹を火にあぶって水分を除いてから用いた。

古い物・遠い夢

随筆「信楽の蹲」

忠内正之

「茶道具三昧」と併行して、骨董随筆を適宜「古い物・遠い夢」の中に加えていきたい。

結婚式

昭和五十三年春のこと。銀行の支店長であった私は、女子行員のA子から次の様な申出を受けた。「秋に結婚すると言う。相手は大学時代クラブで知り合った先輩で現在A生保の係長をしている。結婚は秋なので秋までに退職したい。彼氏は現在甲府支社に勤務中である。ついては甲府での挙式には支店長に是非出席願いたいので宜しく」との由であった。

当時の銀行では手計算が主であり、繁忙な事務の殆んどを女子が支えていた。なかでもこの支店は都内でも五指に入る程多忙な店である。ベテランの女子行員が退職するのは痛手であったが、新入行の女子も入っており、秋までには彼女等の能力もアップする。それを考えに入れての半年あとの「寿退職」を申出たA子の配意がよく解ったので「おめでとう。喜んで結婚式に出席させてもらうよ」とOKした。

当時優秀な女子行員は貴重な戦力で、定着、安定させる事が大切。管理者が最も頭を悩ますのが女子行員の人事管理であった。

一人の女子への対応を他の多くの女子が目を見張っているのだから誤ると悪影響が出るのは明白であった。

秋、結婚式と披露宴は甲府市内のホテルで行われた。担当の支店長代理と二人で出席した。新郎はなかなかの好男子で長身、似合いのカップルであった。新郎の上司が仲人で、同僚が多数出席する和やかな宴であった。恋愛結婚は出席する側も気楽である。この結婚はきっとうまくいくに違いないと確信して、心より祝福した。

「蹲」との出合い

披露宴を早目に辞退した。若い人達の二次会になったからである。帰りの列車の時刻迄時間があったので街中を散策した。実は骨董店を探すのが目的だった。

甲府へは出張を含め過去数回来た事はあるが、いずれも街を眺める余裕など無かった。これだけ歴史があり富裕な市なのできっと掘出物が隠れているに違いないと思った。

大分歩いたが骨董店は中心街に無かった。宝石加工等で経済はかなり潤っている筈なのに矢張り甲州人は実利中心の人達が多いのであろうか。

盆地の故か甲府の日暮れは早い。もう薄暗くなって少し寒くなって来た頃、漸やく一軒の骨董店を見付けた。街のやや外れ、「もう一度改めて行って見ろ」と言われても難かしい立地条件の小さな店であった。しかしこぢんまりとまとまった構えであって品物はキチンと整理してあった。

一応店内を見廻わしても何等心惹かれる物とて無かった。と言うよりはその頃の私は全くの素人で殆んど物がよく解らなかったと言うべきであろう。今も未熟ではあるが年期を経ただけ少しはましと思う。

目につく物が無い上に帰りの列車の時刻も切迫して来るので急ぎ店を出ようとした途端、違い棚の中程にちょこなんと鎮座した壷が目に入った。手にとるとずっしりと重い。赤黒い地肌に自然釉がかかっている小壷である。信楽か伊賀であろう。時代がある感じ。(古い物を時代があると表現する)これが骨董の世界で言うところの「蹲」か?

値段を聞くと何とか持合せで足りる額である。「生まれた時代は?」と聞くと答えない。更に突込んで「幕末位か?」と控え目に糾すと、真面目な顔で「そんなところでしょう」と答える。あまり詳しくはない様だ。これはしめたとばかり飛びついた。江戸初期は無理としても、もしかしたら中期はあるかも知れない、そこそこの地代色がある。大きさも手頃である。「これは掘出物だ」と早料簡して早速買うことに定め合せ箱に入れて包んでもらった。

重くなるのも厭わず、「良い買物が出来た」と結婚式の引出物と壷の両方を抱えて意気洋々と帰路についた。

とんだ迷惑を蒙ったのが連れ廻したK代理であった。お茶の一杯もご馳走すれば良かったのにと後で申訳なく思った。

信楽の蹲

「蹲」とは小型の壷で、ちょうど人間がしゃがみこんだ姿に見えるところからこう呼ぶ。花入として特に信楽焼を茶人が珍重する。（平凡社・やきもの事典より）

右の様な潜在知識が私の記憶に残っていたのだ。どう見てもこの壷は希少な信楽の蹲だ。室町、桃山の出来ならば、数百万円以上はする。江戸の中期でも五十万円から百万円は下らないであろう。その様な思いに頭の中は一杯で帰りの列車の中でも興奮して眠れなかった。帰宅はかなり遅くなったが、先輩の故事に倣って壷と一緒に風呂に入って、丁寧に洗った。少し若返りして、きれいになった。自然釉が目立ち地肌は赤黒さを増したが全体として更に風格が出た感がした。床の間に飾ってその夜は休んだ。

「蹲」はなぜ珍重されるのか？

「蹲」の評価が高い理由は、鑑賞陶器としての面白味にもあるが、何と言っても茶陶としての用の美にある。即ち小型の花入に見立てられ（転用され）茶道具として使用されるからである。ここで花入について考えて見よう。

茶道の花入は主として焼物と竹製に分けることが出来るが、古くは両方共相当大きな花入もみな、床の中央に（壁に）掛けたもので床の畳、板床に置いた物ではない。焼物花入の王者である古伊賀花入にしても古備前花入にしても、それを掛ける環付（かけぐち）は始めから穴が開けられている。ただし墨蹟であるとか歌物であるとか大切な床の掛物を強調するために、花入は「置く」ことがある。殊に位の高い花入は決して掛ける様には出来ていない。

床に掛ける花入のほかに、床柱に掛ける花入がある。一様に小さく柱掛けなのでそれらはごく侘びたものが多く古信楽、古備前、古丹波等六古窯の作で壷形のものが使用されることが多い。利休以降の茶道大衆化に伴う変遷と思うが、日常雑器だった古い小壷がその味を評価され「掛花入」に見立てられ重用されることになったものである。殊に、信楽と伊賀の小壷がもてはやされた。

信楽と伊賀は山の嶺続きで同一の土が使用された。従って殊に古陶の場合は識別し難いところがある。

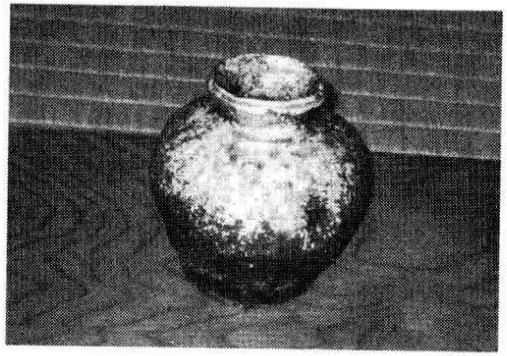
伊賀は江戸初期の領主「藤堂高虎」以降幕末迄安定した政治が行われ、陶業も保護されたので花入、水差し等格式の高い品が伝世している。世に「藤堂伊賀」といわれる。

一方信楽は大衆的で茶陶は茶碗、水指、茶入、花入等で小ぶりが多い。また食器、壷、瓶、からはては狸の置物等、多岐に亘って焼かれている。

そして「蹲」を含め古信楽の茶陶は古くより茶人が渇望するところとなっている。

古陶の世界では「日本人は李朝と信楽で死ねる」と言う諺さえある。

一週間程たって改めてゆっくりこの壷と対峙した。縦十五センチ径十二センチと理想的な大きさである。（写真参照）



総体の感じは私の好きな寂びた風合いである。焼結温度が高いらしく焼締っている。口作りは端反りとなり山道（五岳とも言う）と言われる飾り溝がついている。口から肩、胴にかけて灰釉が流れて景色となっている。底は板起しで篦で切り取ってある。所謂ベタ底である。

難点はと言えば桧垣紋が無い。桧垣紋とは斜状に交差した紋様の飾りである。信楽の壷の古い手、優品には時たま見られる飾り意匠である。だがこの壷は雑器の生れなのでそこ迄は望めない。また直ちに掛花入に使うためには柱又は壁にひっ掛ける環付きが無い。追々自費で作成しよう。とも角古びて風格もある信楽の愛すべき壷と改めて惚れ直した。いずれ一人前の花入に仕立てあげ茶会等に使いたいと思った。

刻印を発見する

またまた失敗をしてしまった。失敗は何度も繰返すので慣れっこの筈だが、妻等に自慢していただけに恥ずかしい。今もあまり喋べりたくないのだが致し方ない。

嬉しさの続きで小壷をなめる様に楽しんでいたが、畳付き即ちベタ底の部分に信楽特有の石はぜ（小粒の石を噛んでいること）があり見所となっているが、いかにもまだ黒く汚れが残っている。過日風呂でかなり洗ったが余程長く放置されていたらしい。洗剤をかけて底をたわしで強くこすった。ところできれいにはなったが、明るいところで良く見ると驚くことに作者と思われる刻印が現われたのである。拡大鏡でやっと発見した。

中世の陶工たちは自らの名前を残すことなく作陶に専念したものだ。有名な「楽吉左エ門」も四代迄は殆ん

ど無印である。当時有印であったのは「仁清」ぐらいである。刻印なり共箱の花押がはっきり一般化したのは明治以降と言われている。

従ってこの壷は最高に古くても明治以降の作であると判定せざるを得ない。とすれば新物でまるっきり駄物になり下ってしまう。私の自己満足の鼻はぺチャンコとなる。

刻印は微かに「仁斉」と読める。「仁清」と一字違いなのも憎らしい。尤も仁清は京都で、信楽の土で茶陶を焼いた実績があり伝世品も残っている。「仁清信楽」がそれである。私はなお未練がましく資料を求め作者を調べたが「仁斉」なる著名作家は発見出来なかった。江戸中期に有来新兵衛、幕末には小川得斉、立涙紋右衛門等の名工が出ているが、彼等は窯印は残しても刻印は使わなかった様である。彼等名工たちは虚名など問題にしなかったのであろう。

現在でも信楽窯業地では著名な個人作家は少ない。上田直方、高橋楽斉の二人は伝統の無釉陶に力を注ぐ貴重な作家だが地味である。

私は執拗に「仁斉」なる陶工を探したくて信楽の現代作家たちに質問して廻ったが確たる返事が得られない。大体彼等は自分の窯場の歴史や文化に疎い様だ。古典を勉強しないと進歩は望めない。「温故知新」と言うではないかと僻みたくなる。

何時しか歳月は流れた。私の骨董遍歴は浮沈みはあっても永続きしているが、指向するジャンルは変っていった。この壷に対する執着も何時しか薄れていった。今では飾り戸棚の片隅に他の諸々のガラクタと共に埋もれている。（蹲っている？）

一時は失望と無念のあまり庭の敷石に叩きつけて割ってしまおうとさえ思ったが、これほど硬く焼き上った焼物では敷石の方が割れてしまう懼れがあるとやめたのだった。

この失敗は以後の骨董あさりの上で参考となった。

一、出張先、出先で簡単に物を買わないこと。多少懐が暖かいため気が大きくなる。

二、早呑込みは危険である。時間に余裕をもって検討する。場合によっては出直す。

三、地方の店に優品は少い。矢張り都会に品物は集中している。

四、生兵法はケガの因。多少解る様になると自信過剰になる。良い先達に相談すべき。

五、掘出物は簡単に転がっていない。

これらの点を反省したのだが凡夫のあさましさ、その後も同じ様な失敗を何度も繰り返している。

結び

三十年も前のことなのにこの失敗は昨日の事の様に思い出す。甲府の地名が出ると胸にチクリと来る。殊にＮＨＫの大河ドラマ「風林火山」が佳境に入りつつある現在は屡々ほろ苦く思い出し勝ちである。

結婚式に出席したＡ子嬢はその後どの様に暮らしているだろうか？小壷と共に時々思い出す。

式後翌年の年賀状には「春になったら甲府に遊びに来て下さい。素敵なドライバーが車でご案内します」とあり、末尾に「素敵なドライバーとは私のことです」とユーモアに結んであった。訪ねる機会はついぞ無かったが、利発な彼女であったからご主人を旨くコントロールしてきっと幸せな家庭を営んでいるだろう。年賀状はその後二・三年で来なくなった。

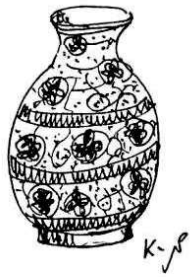
多勢の部下だった人達とのお付き合いは漸次減っていくのは止むを得ない。

一方骨董あさりは、益々深まりつつある。

退職後私の勤めていた銀行は二度に亘って名称を変える事態に至った。Ａ子のご主人の生保会社も色々変遷があった様である。三十年の歳月の経過は如何ともし難い。

失敗した「蹲」を見る度、諸々の感慨が去来する。懐かしさは残るが、後悔の念はもう薄くなった。

終



あばれ天龍（五）

―金原明善の一生―

三戸岡道夫

まず基礎調査であるが、明善は徹底した合理主義者であったから、事業を起すには、準備として基礎調査を徹底的に行ったのである。

天龍川の治水は、明善が生涯を捧げた事業であるから、調査には明善自身がいつも内務省や県庁の技術者と同行して、綿密な調査を行っていた。

二俣より下流はいうまでもなく、それより上流も信州方面まで調査の手をのばし、天龍川の水源地である諏訪湖にいたるまで、実地に調査していた。

しかし明善はこの程度の調査では満足せずに、当時の権威者ともいうべき人々に、調査を依頼している。

たとえば、治河協力社が設立された明治七年には、はやくも内務省お雇い工師で治水技術の最高顧問であるリンドウに、調査を依頼している。リンドウはオランダ人で、明治五年四月に来日し、三年半ほど日本に滞在して、明治八年十月に帰国した人である。すなわち、帰国の前年に遠州に来たのであるが、それはわざわざ来たのではなく、淀川を調査するために関西へ行く途中、明善の依頼で遠州の調査に立ち寄ってくれたのである。この時、鹿島に量水標を設置している。

第九章　治河協力社の事業

（一）基礎調査

さて、明治七年に治河協力社が設立されてから、いかなる事業が行われたであろうか。それは、

天龍川治水に関する基礎調査
測量
堤防工事
河身改修
量水標の設置
天龍橋の架設
水利学校の設置

と多岐にわたっていた。

また明治十六年には、オランダ人の工師レーケが調査のため、遠州に来た。レーケは明治六年九月に来日し、明治三十六年に帰国するまで三十年間も、日本の治水に貢献した人で、明治治水史上、忘れることのできない人である。

そのレーケが明治十六年に大井川の調査に来て、それが終ると明治十六年十二月八日に治河協力社を訪れ、十二月二十一日まで二週間、調査に当ってくれたのである。

そしてその間に、二俣より南の調査を行い、さらに福田、新居の二つの港も視察した。

このように明善が天龍川の調査に、リンドウやレーケなどの人物を呼ぶことが出来たのは、明善の内務省への熱心な運動が、功を奏したからであった。

（二）測量

明善は調査とともに、測量も重視した。が、主な測量は次の三点であった。

一、天龍川の全測量
二、鹿島村から諏訪湖にいたる高低測量
三、天龍川河口から二俣村にいたる実測測量

これは明善が内務省や県庁に技術者の派遣を依頼し、給与その他の費用を治河協力社が負担して、精密な測量を行ったのである。

治河協力社の事務所には、特別に十二坪ばかりの製図室があり、その中には、製図台や図面置場、機械置場などの設備があった。

明治十五年七月十四日には、内務省から土木局の飯塚義光が出張してきた。そして、欧州から帰国した小林八郎や、その他の水利学校卒業の技術員たちといっしょに、天龍川測量の総仕上げを行った。

なお明治十五年八月十一日には、明善と測量員の安田英太郎が、飯塚義光といっしょに諏訪湖まで一カ月も測量の旅をつづけ、九月十一日に帰ってきた。

（三）堤防工事

当初の治河協力社の設立目的は、天龍川の『岩積直流』にあった。すなわち曲って流れる天龍川をまっすぐに直して、その両側に岩の頑丈な堤を築くという、堤の新築工事であった。

ところが資金難のために、このような壮大な工事はと

ても不可能であり、やむなく計画はたびたび変更された。

したがって治河協力社の行った堤防工事は、新しい堤防の構築ではなく、残念ながら従来の堤防の補修工事にとどまらざるをえなかった。

そしてその方法も、江戸時代からの技術による水制工に重点が置かれていた。その水制工の中には一部分に「ケレープ」水制が試験的に行われたが、大部分は旧技術による水制工が施行され、蛇籠、沈枠、楯枠、菱牛などが使用された。

なお堤防工事は、明治七年から明治十年までの四年間と、明治十一年から明治十三年までの三年間と、二期に区別される。前期の工事は、出水による破損個所を補修する応急工事を、その都度、個々に請け負ったものである。そして丈夫築のような定期工事が行われたときは、治河協力社は主として水制工を請け負った。

後期の工事は、二俣から掛塚までの間の工事を、個々でなく、全般的に請負った。が、請負いといっても、治河協力社が直接工事を行う場合もあり、また村々の水防組合に下請けさせる場合もあった。

(四) 河身改修

治河協力社の事業は、明治十四年からは前述したように河身改修に限定されてしまったが、その河身改修の実績を工事費の面から見てみると、

明治十四年　一九六円
明治十五年　一五四九円
明治十六年　二四一六円
明治十七年　七七三円

となっており、四年間の合計で約五千円程度の費用であるから、それほど大した工事は行われなかった。

それはこの期間に天龍川の大洪水がなかったということもあったであろうが、明善が河身改修という仕事だけでは、あまり乗り気でなかった、からではなかろうか。天龍川の治水に対する明善の構想は『岩積直流』という規模雄大なものであった。すなわち、蛇行している天龍川をまっすぐに作り直して、そこに岩石による頑丈な堤防を築くという悲願であった。しかし明治十三年の法令改正によって、それは明善の治河協力社からは除かれて県の仕事となり、明善のところには河身改修の仕事しか残らなかったのである。

ただ一つ注目すべき工事は、明治十五、十六年における、二俣と時又の間に行われた、岩石破砕工事である。この工事には、明善の長男の明徳などが現場監督の任に当っており、工事の計画を立てるには、海軍省の専門家にも協力を求めている。この工事は、信州諏訪、飯田方面と、遠州掛塚港との間の水運の便に、大いに役立った。

(五) 量水標の設置

量水標は、天龍川河口にある駒場村をはじめとして、二十二カ所に設置した。

その量水標は必要の都度、漸次、設置していったが、明治十七年四月頃からは、二俣より上流の信州伊那谷方面にかけても、要所要所に増設した。その時には川村矯一郎が出張して場所の選定に当り、これに長野県の役人が協力した。

量水標の設置された場所は、治河協力社に備え付けられた『天龍川高低一覧表』にのっているのが、次の十七カ所である。

静岡県豊田郡駒場村
〃　藤木村
〃　中野町村
〃　末島村
〃　三家村
〃　上野部村
〃　西鹿島村
〃　西雲名村
〃　大井村
長上郡掛塚村
周智郡奥領家村
長野県下伊那郡平円村
〃　時又村
〃　生田村
上伊那郡宮田村
〃　中箕輪村
諏訪郡平野村

これに、平野、中善地、匂坂、西之島、上神増の五ケ村が加わって、二十二カ所であった。

(六) 天龍川橋の架設

天龍川を渡るには、明治六年に、中野町村に住む浅野茂平と鈴木謙一郎の二人が、天龍川に橋をかけて、通行人の便をはかろうとした。そして架橋工事の許可を、静岡県庁に願い出た。

しかし静岡県庁では技術的に難工事であることを理由に、なかなか許可しなかった。

すると沿岸の村民も、橋が出来ると出水のときには水嵩が増して、流れが激しくなるおそれがあるといって、架橋に反対しはじめた。さらにこれに加えて、池田村の渡船の船頭が失業を心配して、猛烈な反対運動を起した。

そこで明善は、浅野茂平と鈴木謙一郎の架橋申請を側面から応援し、県庁や村民の説得に当たると、ついに県庁も、その熱意に動かされて、明治六年六月に工事を許

可した。

浅野茂平と鈴木謙一郎は鋭意工事にはげんで、明治七年二月十七日に、天龍橋は竣工された。

橋は、天龍川西岸の中野町村と、東岸の源平新田を結ぶものであったが、川の中の洲をクッションにして架けられた船橋であった。天龍川はそこでは洲をはさんで、本流と支流に分れているのであるが、本流は舟を二十九艘、横に並べた百間の舟橋だった。支流の方は、六十間と、五十間の二本の橋を架けた。橋の幅は二間だった。

二つの橋を介している中洲には、板を敷いて、通行人が歩きやすいようにしてあった。

そして橋を渡る人からは橋賃を取って、橋の維持費に当てた。

しかし、橋は舟橋であったから、少しの出水でも流失することがたびたびあった。

そこで明善は、舟橋でなく、両岸の堤防の間に橋脚を立てて、その上に橋を架けることをすすめた。そうすれば流失のおそれがなくなる。

しかし浅野茂平たちは、それには莫大な架設費がかかるので、応じなかった。

しかし明治十年には、この橋の三年の請負期限が切れた。そこで明治十年三月二十九日に、浅野茂平と鈴木謙一郎は、橋を明善の治河協力社に譲渡することに決めた。代金は千五百円であった。千円は即金で渡し、残額五百円については、明治十年から毎年百円ずつ年賦で支払うことにした。

そこで治河協力社はさっそく架橋工事にとりかかり、工事費は一万二千二百二十四円であった。

そして名前を『天龍橋』とつけた。

明治十一年十一月一日に、明治天皇が北陸道、東海道巡幸のとき、明善が天皇拝謁の光栄に浴し、明治天皇が渡ったのが、この天龍橋であった。

橋を渡るには橋賃が必要であったが、それは次のように決められていた。

歩行人　九厘
長棒駕籠　一挺　三銭五厘
引戸駕籠　一挺　三銭
山垂駕籠　一挺　二銭
両掛分持　一荷　九厘
大長持　一棹　二銭六厘
小長持　一棹　一銭六厘
差持　一荷　一戦六厘
人力車　一輌　二銭一厘
牛・馬　一匹　三銭

馬車　一輌　八銭五厘

一日の収入は、日により季節により差があったが、一日平均十円内外であり、一カ月平均で三百円から四百円くらいの収入があった。

ちなみに、明治十年四月一日から明治十七年十二月三十一日までの約八年間の通行量は次のようになっており、社会的に大きな貢献をしていることがわかる。

人間　一、九九六、二五六人
人力車　二二〇、五〇四挺
馬車　九、〇八七輌
荷車　一四四、九〇七挺
牛馬　六九、六五〇匹

また明善は、明治十年、浜名湖の入口にある新居と舞坂の間に、浜名橋の架橋を計画し、内務省や静岡県庁に工事の許可を運動した。が、途中でこれを熊谷三郎馬や辻徳十郎たちに譲り、明善は側面から援助するにとどめた。

(七) 水利学校の設置

明善は人物育成にも熱心であった。かねがね堤防工事の技術者の重要さを痛感していた明善は、治河協力社で専属で使える技術員の養成を考えていた。

そこで明治十一年三月に、治河協力社付属水利学校を開校した。

明善は全財産を治河協力社へ提供したが、その財産の中の旧金原邸の建物の二階を学校の宿舎にあて、道をへだてた南側に校舎を建てた。

教師には岡山県出身の儒者の戸川深見を傭った。治河協力社の幹事の鈴木忠次郎を、幹事兼俗事係に使命して、事務を担当させた。

学科としては、予科二年と本科二年とがあり、

予科では、歴史、漢籍、文章などの一般教養

本科では、測量、図面、実地修築などの専門知識

などを教科とした。予科は治河協力社の校舎で教育したが、本科はもっぱら実地研修を主とし、社費によって東京へ留学させ、内務省の委託生とした。そして内務省土木局の利根川や荒川の工事現場において、実地研修を中心に学習させた。

予科の授業時間は原則として午前七時から午前十一時までで、日旺日、祭日は休みであった。

生徒の年令は、十五歳から、二十歳までで、定員は八名であった。治河協力社専属の技術員を養成するのであるから、それほど大勢は必要ないからであった。

したがって最終的にこの学校を卒業したのは次の十三名で、すべて地元の遠州出身者であった。

秋鹿邦三郎　安田英太郎　金原豊蔵
鈴木治三郎　佐藤小平田　川島滝蔵
木呂子直次郎　山下長作　中村長九
金原長三郎　安田直次郎　高石辰吉
大石種吉

学校を卒業した者は、治河協力社に勤務し、測量や改修工事に従事した。

なお後述するように、治河協力社は明治十八年に解散するのであるが、したがってこの水利学校も、その時点において閉鎖された。

治河協力社が解散した後は、多くの者は内務省直轄の天龍川第一次改修工事に従事したり、また他の者は利根川の内務省土木局出張所に勤務したり、地元の社山疎水事務所に勤務したりした。が、すべて明善がその就職先の斡旋に、奔走したのである。

さらに注目すべきことは、明善は水利学校で養成する技術者だけでは満足せずに、工部大学校（東京大学工学部の前身）の卒業生である小林八郎という技術者を、治河協力社の社費によってヨーロッパに留学させた。

それは明善が明治十三年五月に上京したとき、工部省の工部少輔である吉井友実に、そのような人間の推薦を頼んでおいたところ、小林八郎が選ばれたのであった。

明治十三年九月に明善のところに通知があり、小林八郎は明善の支援を受けて、明治十三年十一月にヨーロッパ留学に出発した。

当時、日本の治水工事を指導したのは、オランダの技術者たちで、前述したリンドウやデ・レーケなどは、その中の代表的な人間であった。それはオランダの国土が海面より低いために「治水技術が非常に発達している」と当時の政府の要人たちが考えたことと、江戸時代以来の外交関係によるものであった。

しかしオランダの治水技術は、水運の開発を目的とした低水工事が中心であったので、日本のように、山からの急流が多い国土には、不適当であるという反省が起きつつあった。そしてオランダの工事技術よりも、『堤防による溢水の防禦』を主とするフランスの高水工事の技術の方が、日本の河川には適切な工法ではないかと考えられるようになってきていた。

そのため小林八郎はヨーロッパ留学に当っては、オランダの治水技術よりも、フランスの治水技術を学んで帰ってきた。

もちろん、せっかくヨーロッパに行ったのであるから、フランスだけで勉強したのではなく、ヨーロッパ各国の河川を視察し、治水工事を見学して、三年間の留学を終えると、明治十六年九月三十日に日本に帰国した。

そして約一カ月休養の後、十月二十八日から治河協力社へ出勤した。

明治十六年十二月にはオランダ人の工師レーケが治河協力社を訪れてくれたので、小林八郎も、レーケ、明善、前述の内務省技官の飯塚義光たちといっしょに、二俣方面へ調査に出掛けた。

その後明善はつねに小林八郎を伴って、天龍川沿岸の村々や、県庁や東京などへも出張した。また種々の測量も、小林八郎と内務省技官の飯塚義光の協力によって、完成できたのであった。

しかし、こうしてヨーロッパで新知識を仕入れてきた小林八郎も、治河協力社のために働けた期間は短かった。というのは、小林八郎が帰国した二年後、すなわち明治十八年には、治河協力社は解散してしまったからである。しかし小林八郎は解散前には治河協力社をやめて、内務省官吏に就任した。もちろん明善の配慮によるものであった。

（八）貸付事業

明善は治河協力社経営の拡りの一環として、人々への資金援助の意味で、種々の貸付金を行った。その貸付を大別すると、

学資金の貸付
資本金の貸付
恩借金の貸付
通常貸付金

の四種類に分類される。

第一の学資金の貸付は、主として治河協力社付属水利学校の生徒への貸付である。若い者の学業奨励援助のためであるので、無利息、無期限の貸付であった。

金額は三十円を限度とした。しかし、全額を返済した後は、また三十円を限度にして貸出してもいい内規になっていた。そこで学生の中には、返済が終っていないのに、さらに金が必要になって、臨時入用ということで重ねて借用する者もあり、借用金が累積して九十円になってしまったり、多い者は三百円にもなった者もいた。しかし明善は、青年育成のために、あえてそのような貸付にも応じていた。

第二の資本金貸付とは、事業の独立を志す人を援助するための貸付で、その内容は、家業資本、産業資本、商業資本、農業資本の四種類であった。利息は無利息であり、返済方法には、月賦返済、年賦返済の二方法があった。

年賦返済の期間については貸付金額には関係なく、本人の申出によって、だいたい一年から二十年までとなっていた。月賦返済の方は、百五十カ月払いを標準としたが、本人の申出によっては三百カ月以内のものも稀にはあった。明善は常に『人間は自分の力で食っていかなけ

ればならない』と説き、独立自営を信条とした。したがって、

（祖先の残した財産や親の威光で暮している人が、いくら立派なことを説いても、聞く人の耳には入らないが、痩せても枯れても自分の力で暮している人の説は、必ず聞く人の耳に入るものである。人は自分の力で立たなくてはならない）

と常に説いていたから、以上の学生や、独立事業者への無利息の貸付けは、彼等の自立を援けるためのものだったのである。

第三の恩借金は、貧窮者を援けるための貸付であった。貧窮者救助のためであるから、これも無利息貸付であった。

しかし、その貸付には条件が一つあって、

（治河協力社で必要なときは、いつでも、通知のあり次第、相場の日当で、人夫として働きます）

という条件であった。すなわち、金が返せない時には、明善の治河協力社で働いて、その賃金で返済するということであって、これも人助けの発想から出たものであった。

第四の通常貸付金は、一般に行われている貸付と同じで、担保を入れ、利息を取って、期限を切って、貸出すものであった。

しかし世間一般の貸付とちがうのは、借りる人の人物評価や、借り入れ事情などによって、利息が、個人別に、年八パーセントから二十パーセントまでの範囲で決められたことであった。すなわち人間がまじめで、同情すべき点のある人間へは低い利息で、返済期限なども本人の申出通り認めた。しかし、怠け者で酒色にふける素行の悪い者への貸付は、利息は高く、また返済の延滞は、まったく許さないという、きびしいものであった。

（九）治河協力社の解散

明善の志は、天龍川流域の永遠の水防態勢を確立することであった。したがって補助金が打切られた後も、その態勢作りのために、倹約に倹約を重ね、また空地に楮を栽培するなど苦労努力して、治河協力社の資金の充実に努めた。また補助金の打切り後は、事業内容も河身改修事業だけになったので、危険性が少くなったこともあり、治河協力社の足取りはかえって順調になり、ようやく実効の現われる時期になってきた。

すると、それに伴って新しい動きが出てきたのであった。それは、これまで形勢眺めときめこんでいた人々が、治河協力社に資金が蓄積され、基礎がいよいよ堅実になってきたと見て、治河協力社への加盟を申し出てきたのである。

すなわち、明治十二年頃から、天龍川の川下の二百三

十六カ村の村民が、

「天龍川の治水のように公共性を持つ事業を目的とする治河協力社へは、当然、流域の村々も加入すべきである。天龍川の治水を志す我々の真情が、金原明善より劣っているとは思わない。我々の希望を入れるのは当然である。天龍川も、川下があっての川である。だから明善一人で独占する理由はない。ぜひ川下の我々も仲間に入れてくれ」

と主張して、治河協力社への参加を要求してきたのである。

すなわち、治河協力社は、明善が独裁する私的結社であるべきではない。天龍川の治水というような公共事業を目的とする団体は、公共性を付与するべきであると、村々の有力者たちが主張しはじめたのである。

彼等は、当時急速に整備されつつある近代的な地方行政組織を基盤として、新たに水防組合を結成しつつあった。したがって明治十三年の改正によって、県が堤防工事を直轄し、治河協力社の事業を河身改修の請負いに限定したのも、水防組合を作る地元の諸村に、堤防工事を請け負わせるためのものであったのかもしれなかった。

しかし明善の目的は、はやく治河協力社の財政的独立を達成し、明善独自の計画のもとに天龍川の治水事業を遂行することにあった。要は、官からも、地方公共団体からも、財政的にも技術的にも独立して、独自の治水事業を遂行できる団体を一日も早く確立しようとするのが明善の狙いであった。だから明善は

（最初に出資を拒んだ者が、治河協力社に資金が蓄積され、うまくいくようになったからといって、仲間に入る権利はない）

とこれを拒絶した。最初から彼等が加入していてくれれば、明善が全財産を供出するようなことをしなくても、済んだ筈である。その時は知らぬ顔をしていて、今となって参加したいとは、虫がよすぎる。治河協力社は明善にとっては、全財産、人生を捧げている事業である。うまくいっている、いっていないで右顧左眄（うこさべん）している人間とは、覚悟のほどが違うのである。だから、

（そのような者が参加して組織が拡大されれば、せっかく苦心して蓄積した資金も、場合によってはほかの事業に流用されたり、うやむやのうちに浪費されたりして、治河協力社本来の目的に使われない危険がある。それでは自分が全財産を供出した意味がない。最近は、協同事業の目的や方向は、多数決によって決まるのが時勢である。そうなれば、治河協力社の資金の使途も、多数決によらねばならないことになる。いま参加を望む人々を参加させれば、当然この人達の賛否が方向を決定することになる。しかし、この人達がみな誠心誠意、堤防の永久保全を考えているとは思われない。せっかくこれまで苦心して今日に至った治河協力社の資金が、たんに多

るだけでなく、ぜひ、この天龍川の分流による遠州の水運の便を開発したいのが、明善の遠大な夢であった。だが、この遠大な夢は、遠大すぎて、なかなか誰もわかってくれない。そんなところへ、たんに最近の治河協力社はうまくいっている、時流に乗っている、というだけの理由で二百三十六カ村の者たちが入ってくれば、組織の拡大にはなっても、明善のこのような遠大な夢は理解されず、踏みつぶされて、消えてしまう危険があった。それは絶対、明善には許せなかった。明善は天龍川の治水だけでなく、天龍川の分流による水運開発という大きな夢を抱いているから、全財産を投げうち、堤防の上の仮小屋に長年住みつづけて、理想を実現しようとしているのであった。

その理想実現が出来なくなる組織拡大など、明善には絶対許せないのだった。

（そんなことなら、いっそ治河協力社を解散してしまった方がいい）

と、明善の意思は次第に固っていくのであった。

（このように治河協力社が争いの種になるのは、言ってみれば治河協力社に蓄えた資金があるからである。その金を目あてに人々は寄ってくるのである。だから治河協力社を解散して、その資金を全部政府へ献上してしまい、誰も手がつけられないようにしてしまえばいい。そして河川工事も政府直轄にしてもらうのだ。それまでわ

数決という名目によって思わぬ方向へ流用される心配があるので、それは絶対に許すことはできない）

と、明善は彼等の加入を絶対認めようとせず、両者の間の対立がはげしくなった。

そこで二百三十六カ村は、治河協力社への参加を県知事に願い出たり、また内務省へも請願した。そこで県庁や内務省が仲裁に入り、川下の村々も、

「応分の金を出そう」

ということになったが、明善は首を横に振って、

「彼等が金を出すというのは当てになりません。怪しいものですから、ご免をこうむります。天龍川の測量もすでに終り、人材も教育し終って、治河協力社の屋台骨はもう出来上りましたから、もうお金の必要はありません」

と拒絶して、仲裁に応じようとしなかった。

加えて治河協力社の経営には、明善の夢が隠されているのだった。夢というよりも、深慮遠望計画というべきかもしれなかった。

すなわち明善の治河協力社経営の理念には、天龍川の治水と同時に、天龍川を途中から分流して浜名湖へ注ぎ、遠州一帯の水運の便をよくすることによって遠州一帯を開発するという、遠大な計画があるのであった。治河協力社の目的は、天龍川を直流にしたり堤防を構築すれわれの努力によってすでに基礎は出来ている工事なのだから、政府にあと何年かやってもらえば、必ず竣工するであろう。また政府直轄でやってもらえば、これまでのように補助金の増減を心配したり、また政府の方針の変更を恐れたりする必要もない。）

こうして明善は、まず自分が治河協力社から退任することを考え、明治十七年三月十一日に、

（治河協力社から退身することを許してほしい）

という退身願いを、奈良原県令に提出した。

しかし県令はこれを認めず、再三再四にわたり明善に再考を求めたが、しかし明善はどうしても川下の二百三十六カ村の参加を認めようとしなかった。

明治十七年九月になると、奈良原県令に代って、関口隆吉が県令として赴任し、引きつづき仲裁につとめたが、明善は依然として応じようとしなかった。そしてふたたび明治十八年一月に、退身願いを提出した。

こうして何度か、「明善の退身」か、「希望者の参加」か、県知事と話しあったが、解決がつかず、ついに県は仲裁の望をすてて、治河協力社の解散に踏み切ったのである。

こうして明治十八年三月三十一日をもって、治河協力社は解散したのである。そして、天龍川川下の諸村との対立は解消した。

なお解散に当って、明善は、これまで治河協力社が行ってきた工事全体を政府直轄の下に経営することと、この時点において治河協力社が蓄積していた資金の十七万円を、県庁へ上納することを申し出たのである。

ここで、治河協力社がいかにして十七万円もの資金を八年間に蓄積することが出来たのか、その辺の事情を説明するのも、明善の計画の壮大さを物語るものとして、有効であろうと思われる。

治河協力社の運営資金は、設立の当初の金原家財産の献納金五万六千十六円と、県からの毎年の補助金二万三千円が中心になっていた。しかしその資金運用に特色があった。それは治河協力社の資金は、事業の性格上、一時に全額を使用するものではなく、余った金は翌年以後へ繰越されていく、『基本金』ともいうべき資産なのであった。それは将来に実施を計画している天龍川の大工事への準備金として積み立てておくというべきものでもあった。したがって、毎年の工事代金を支払った後は、極力これを後年に繰越し、その過程においてこれを利殖して、基本金を大きくしていくことに努力したのであった。

そのために明善は、銀行預金や債券購入による金利増殖や、また、築堤用竹木材の廉価払下げや、恩借金による人夫賃金の抑制などによる年次経費の軽減、また沿岸住民の寄付、勤労奉仕の要望など、あらゆる努力をした。

その結果が十七万円余にも増加したのである。
すなわち、当初明善が計画したように、
（天龍川の直流）
（堤防の岩積法による構築）
という、天龍川の流れをまっすぐにして、堤防を岩積みの頑丈なものにするという二大目標を達成するために、当初の数年間は堤防の応急補強工事を行うていどにとどめて、その間に資金の蓄積をはかり、後世へ不朽の『直流石畳式築堤』を残さんとする、明善一流の一貫した計画実行であったのである。
治河協力社の解散に当って、この十七万円を明善は県庁へ上納することを申し出たのであるが、これに対して県は、工事直轄の件は聞き届けたけれども、社金の十七万円の上納の件については、適用すべき法律がないことを理由にして、これを許可しなかった。
したがって社金十七万円は明善に下げ渡されることになったのである。しかしこれを受取るのは明善の本意ではなかった。明善はこれを拒絶した。
県庁からは「受け取れ」と言ってくる。明善はこれを拒否する。そんな交渉が十カ月にも及んだので、ついに県令は、命令を発して、なにがなんでも明善に受取らせるようにしたのである。
明善は進退きわまった。
明善はどうしようかと考えに考えた。すると明善の頭の中に、
（そんなにかたくなに拒絶しなくても、いったん金は受取って、その金を他の公共事業に使えば、金は生きてくるのではないか）
という、新しい考えが浮かんできたのであった。
（では、その別の公共事業とは？）
思い悩む明善の頭に、治水治山のことが浮かんできた。
（治水、治水というけれども、川の水は山奥から流れてくるのである。だから山が禿げ山では、いくら川ばかりを工事をしても、洪水を止めることはできない。洪水を防ぐのに一番大切なのは、山を禿山にしないことだ。山を緑にすることだ。山に木を植えることだ。治水は治山と一体となっているのだ。そうだ植林だ。植林こそ治水の根本政策なのである）
明善は憑かれたような眼を宙に据えて、じっと考えつづけた。
そう決心がつくと、明善は晴れ晴れとした顔になって、さっそく県庁に出頭した。そして関口県令に会うと、
「よくよく考えまして、お金を頂くことにいたします。だが、一つ条件があります。わたしが供出しました財産や、有志の寄付による額については受領いたします。しかし、創立以来いただいております政府からの補助金の部分については受領いたすことはできませんので、これはお上にお返しすることをお許し下さい」
と願い出て、これは認められた。
そこで政府からの補助金の累計の九万六千円に、年五分の利息をつけて、十万円を返納した。そして残額七万円を明善は受取ったのである。

治水のことから解き放たれ、ふたたび七万円の財産を手にした明善はこれから何をするのかと、村の人々が注視する中を、やがて明善は旅装をととのえて、一人天龍川をさか上り、瀬尻の山奥へ深く分け入っていくのであった。
（治水から植林へ）
と、明善の息もつがぬ公共事業への奉仕はつづくのであった。明善五十四歳の夏であった。
この時明善が受取った七万円という金の大部分は、言ってみればかつて治河協力社へ献納した金原家の全財産に相当するものであった。ということは、供出した金原家の全財産が、元のまま戻ってきたことになるわけであった。明善にとっては不本意なことであり、心苦しいことであった。明善は、
（一度献納した財産を、事の成りゆきとはいえ、ふたたび受領したことは、世をまどわし、後世の人を誤まらせるもとになる。したがってこの金は必ず次の社会事業、すなわち植林に投入して、この金を生かさなくてはならない）
と、次の植林事業へと、われとわが身をはげましていくのであった。

なお、治河協力社の解散後、社員はどうなったのであろうか。治河協力社の解散後は、明治十八年四月から、天龍川の治水は、内務省土木局の直轄工事となった。そして局の出張所が、治河協力社の旧事務所に設けられたので、社員の多くはここに就職することになった。そしてまた測量器機なども、県の方で買い上げることになった。

こうして明善が心血を注いだ治河協力社は明治十八年三月に解散してしまったのである。
明善が五十四歳のときであった。
ふり返ってみれば明治元年以来、明善が天龍川の治水のために尽した歳月は、長い忍辱の歳月ということが出来、その思いを明善は次のように述べている。
よく忍ぶということがあるが、
それは第一に衣食住が不完全で人が堪えがたきこと
起居動作に苦しんで人が堪えがたきこと
寃枉凌辱にあって人が堪えがたきこと
罵詈讒謗にあって人が堪えがたきこと

艱難痛楚で人の堪えがたきこと
など、どのような情の刺戟にあっても、目をつむって一心にこの忍の字を守り、相手にならぬときは、適は自然に退散し、後には世の中に忍びがたきことはないようになるものである。
切々たる明善の胸中が伝わってくる。

こうして治河協力社は、明善が理想とする「岩積直流」を実現することなく、解散してしまい、その事業は明治十八年四月から内務省土木局の直轄工事として引きつがれたのである。そして沖野忠雄技師の計画設計によって、国費による工事費が三十八万三千円、静岡県の護岸工事費が十四万二千円、合計五十二万五千円が投入されて、九年後の明治二十七年（一八九四）九月に、第一期改修工事が竣工したのであった。

なお工事はその後も引きつづき行われ、明治三十二年には全工事が完了し、その全工事費は実に六十六万円の巨額にのぼった。

しかし天龍川の治水工事がこのように政府直轄で大規模に実現されたのは、それまでに明善の血のにじむ献身的な努力があったればこそであった。

（つづく）

「まんじ」季刊発行内規

（発行日）　（原稿締切日[注]）
春季号……二月一日……十二月三十一日
夏季号……五月一日……三月三十一日
秋季号……八月一日……六月　三十日
冬季号……十一月一日……九月　三十日
[注]円滑な発行を期す為「一週間前編集長宛到着」に努めましょう。

同胞の御楯となりて われら逝く（二の一）

千坂精一

一

昭和二十年一月九日、米軍ルソン島に上陸開始。
太平洋戦争敗色濃厚となる。

一月十日。
久坂圭一は、同期の松本健太と関東からの長旅を終えて、ようやく南九州の任地の町の駅に降り立った。
だが、あいにくの曇天で、南国の強い陽射しを浴びて勇躍着任するはずの期待は裏切られてしまった。
改札口にぽつんと立っている老年の駅員に教えられた道を、官給品と私物を全部詰め込んだ衣嚢という大きな麻袋を担いで、七福神の大黒天よろしく海軍の倶楽部に指定されている料亭開花楼まで歩いた。
南国とはいえ、頬を打つ真冬の風は冷たかった。
開花楼はすぐにわかった。久坂と松本は玄関に立って大声で案内を請うたが、夜は飛行兵たちで賑わうはずの料亭も昼日中は深閑としていて人影がなかった。
やっと通じて、奥から和服姿の女性があらわれた。年配と風格から推してここの女将らしかった。
着任を告げると、すぐに奥の部屋へ招じ入れられた。そこは床の間つきの小部屋で、粋な造りだった。
久坂は落着かなかったが、松本もおなじらしく、物珍らしそうに周囲をきょろきょろ見回していた。
やがて足音がきこえたので、二人は正座し直した。
こんどは若い女性だったので、久坂はほっとした。
その女性は二人の前に蓋つきの茶碗をおきながら、
「まあお若い。学校出立ての坊やは純粋で素敵だわ」
そう頬笑みかけられて、久坂は思わずたじろいだ。
「海軍飛行兵長久坂圭一であります」
「おなじく、松本健太であります」

松本は、調子に乗って戯けてみせた。
「そう。わたしは森田菊江。ここではお菊です。これからはお座敷で会うでしょうから、よろしくね」
「お菊さんか。いい名だなあ」
松本は、相変わらず順応が早い。
「まあ馴れ馴れしい。まだ童貞のくせに生意気よ」
磊落そうな菊江がそう言ってちょっと睨んだ艶めかしい姿態に、久坂はなんとも言えぬ親しみを感じた。
「さあさあ、坊やたち、お茶をお上がりなさい」
そう言われて茶碗の蓋をあけると、芳香が漂った。
熱い茶はうまかった。久坂は久しく忘れていた娑婆の匂いを嗅いで、ふと家族との団欒を想いうかべた。
菊江が気さくに相手になってくれたので、すっかり打ち解けて、問わず語りに身上話などをしているところへ、便乗する公用トラックがやってきた。
別れぎわに、菊江が、
「二人とも、頑張るのよ」
と言って、また先刻のようにちょっと睨んでみせた。
久坂と松本は、トラックの荷台に乗り込んだ。
二人は、容赦なく吹きつける冷たい風に首を竦めて耐えていたが、やがてトラックが町中を通り抜けると、とつぜん眼のまえに大きな山が全容を現わした。
久坂と松本は、思わず背筋をのばして、
「おお、桜島だ」
と同時に感嘆の声を挙げて見惚れた。錦江湾を塞ぐようにして聳える桜島は雄大で、迫力があった。
その山容を飽くことなく凝視めているうちに、久坂は、いつか座学のときに班長が士気を鼓舞する意図で教えてくれた、維新の志士平野國臣が詠んだという、
わが胸の燃ゆる想いにくらぶれば
煙はうすし桜島山
を思い出して、低声で口誦んでみた。すると、間もなく任地へ到着するにさいして、平野國臣の熱い血潮が乗り移り、意気まさに天を衝く心境になった。
(今日からは、あの桜島と一緒に暮らすのだ)
そう親しみを籠めて眺めつづけていると、とつぜん山頂に菊江の艶めいた姿態がぽっかりと浮かんだ。
まもなくトラックが横道に逸れたので、桜島も菊江の幻影も視野から消えて、田野がつづくはるか彼方に低い山脈が横たわっているのが見えてきた。
(基地はあの山の上あたりかも知れない)
久坂はそう思って眼を凝らした。
トラックは、小刻みに車体を揺すって土埃を捲き上げながら、その山脈に向かって疾駆していった。

二

久坂と松本が着任した航空隊は、ナンバー航空隊といって隊名は三桁の数字で呼称される甲航空隊で、塒さだめぬ渡り鳥のように展開される作戦の任務にしたがって基地を転々とし、ついさきごろ南方基地から転進してきたばかりだという実戦部隊であった。
いっぽう、地名を冠した基地のほうは所属する飛行隊を持たぬ基地管理専門の乙航空隊であった。
つまり、基地と航空隊は家主と借家人の関係である。
衛兵に案内されて、松林のなかにある集会所に着くと、そこにはすでに六人の先着者が待機していた。
たがいに自己紹介して、今日から生死をともにすることになった縁を大切にしよう、と堅く誓い合った。
先着者は操縦の豊田、川村、中西、前川、偵察の星野、松下で、いずれもおなじ艦爆隊の予備員であった。
「同期が八人とは、末広がりで縁起がいい。俺たちは生まれは別々だが死ぬときは一緒だぞ。いいな」
年長の豊田が、そうみんなに念を押した。
「よし。それが俺たち同期の固い契りだ。それじゃ門出を祝ってひとつ誓いの歌を唄おうじゃないか」
松本が、すかさず調子を合わせた。
全員円陣になって肩を組み、『同期の桜』を唄った。
「おお、元気がいいな」
入口に飛行服姿の下士官が微笑して立っていた。
「敬礼ッ」
いち早く松本が叫んだ。いつも素早く要領がいい。
みんな弾かれたように直立して、挙手の礼をした。
「俺は竹田一飛曹だ。着任者は八名ときいているが全員揃っているな。よし、それではこれから隊長のところへ報告にゆく。各自荷物を持って俺についてこい」
竹田兵曹の先導で久坂たちは衣嚢を担ぎ松林のなかを縫うようにして二列縦隊で歩いていった。日蔭で寒くはあったが土の湿りが心地よかった。
道すがら搭乗員宿舎が散見された。いずれも入口には〈戦闘〇〇〇飛行隊〉とか、あるいは〈偵察〇〇〇飛行隊〉と筆太に書かれた縦長の大きな木製看板が掲げられていて、実戦基地の雰囲気を醸し出していた。
基地司令部の建物は十分ほど歩いたところにあった。
竹田兵曹は、廊下の中程の部屋の前で立ち止まった。
「竹田兵曹、参りました」
「よし、はいれ」
久坂たちは、竹田兵曹のあとにつづいて入った。
そこには三人の士官がいてなにか打合わせしていた。
久坂たちが二列横隊に整列すると、三人のなかの小柄でふくよかな体形の士官がこちらへ近づいてきた。
「おお、きたか。儂が飛行隊長の藤井大尉だ」
「豊田飛長ほか七名、只今着任いたしました」
最年長の豊田が、当然のようにリーダー役を務めた。
「よし。しっかり励んで一日も早く戦力になれよ」
藤井隊長はにっこり笑い、温厚な人柄を垣間見せた。
あと二人は分隊長二村大尉と分隊士篠田中尉だった。

精悍な面魂の二村分隊長は、陰険そうに見えた。
久坂は、直感的に、
(俺たちを実戦訓練で扱くのは、この人だろう)
そう思うと、練習生時代の鬼教官の顔がダブった。
篠田分隊士は、長身痩軀の書生っぽい人だった。
久坂は、篠田分隊士になぜか親近感を抱いた。
司令部を出て宿舎へゆくと、途端に生臭くなった。
先輩搭乗員たちの着ているガソリンやオイルの染みついた飛行服からは、戦場の匂いが漂っていて、実戦部隊らしい殺伐とした雰囲気が充満していた。
紹介された先任下士官山村上飛曹が、歴戦の強者を表わす向こう疵も生々しい顔でぎょろりと睨む仕種は、さながら大見得を切る歌舞伎役者の凄味があった。
飛行服、飛行帽、マフラー、半長靴、救命胴衣ほか細々とした新品の搭乗用品一式を受領し、身の回りの整理をしたところで、ようやく着任第一日目は暮れた。
久坂は、床に就いたが、遠い南国の基地へ赴任してきて、いよいよ生命を賭ける実戦部隊の一員になったと思うと、神経が昂ってなかなか寝つけなかった。

三

翌日は雪になった。久坂は南九州に雪が降るとは思ってもいなかったので、その風景に眼を瞠った。
大きな雪片が霏々と降りつづいていたが、それは水分を多く含んでいて、衣服に付着してもすぐ融けたから終日降りつづいたところで積りそうもなかった。
その日藤井隊長に引率されて司令、副長、飛行長に着任の申告をして回ったあと、午後は篠田分隊士と山村先任下士官から飛行作業についての説明を受けた。
久坂たちが配属になった飛行隊の搭乗機は〈彗星〉という降下角度六〇度以上の急降下爆撃が可能な高性能をもつ艦上爆撃機で、中翼単葉引込脚の二人乗り、上昇時間三千メートルまで四分三五秒、最高速度時速五六〇キロ、航続力時速三七〇キロで一、三二〇キロ、急降下はエアブレーキを出さないと時速七四〇キロという固定脚の九九式艦上爆撃機にかわる新鋭機であった。
久坂は満足したが、そのあとがたいへんだった。
攻撃目標の敵機動部隊各艦の特長と、五十番(五百キロ爆弾)を叩き込む急所を繰り返し数えられた。
巡洋艦や駆逐艦は速力本位で甲鉄板が薄いからどこを狙って投下してもいいが、戦艦や航空母艦は防御を目的として設計されているから、速度はおそいが甲鉄板が厚くてとても撃沈することはできない。
弱点はただひとつ、戦艦は煙突、航空母艦は前後にある飛行機運搬用の昇降口だからそこを狙えという。
小さな標的に照準を合わせる精度におどろいた。
座学のあと、二村分隊長から気合いを入れられた。
「貴様たちが配属になったこの艦爆隊は、緩降下なんていう生易しいものじゃなく、急降下を得意とする猛者ぞろいで、地獄の底まで突っ込む心意気が伝統なんだ。いいか、このことはよく肝に銘じておけ。いっておくが、海軍航空隊では隊長や俺たち兵学校出身者だけが本物の軍人で、分隊士はおなじ士官でも娑婆の大学出身者だから雇兵、そして貴様たち予科練出身者は消耗品というんだ。よく憶えておけ。しかもだ、その消耗品のなかでも伎倆未熟な粗悪品の貴様たちスペアもこの飛行隊に配属になったおかげでとくに彗星への搭乗が許されるのだから有難く思え。一日も早く新鋭機の搭乗員に相応しい伎倆を身に着けてその恩情に報いるよう努力しろ。いいな、わかったな」
久坂は、二村分隊長の発言に反発を感じた。
松本などは、宿舎に帰っても怒りを抑え切れずに、
「スペアだなんて言いやがって、畜生、いまに見ていろ、一人前の搭乗員になって鼻を明かしてやるからな」
そう口角沫を飛ばして悲憤慷慨していた。
久坂たち偵察員の実戦訓練は、先輩と交代してもらってその機の操縦員から指導を受けることになった。
搭乗割は久坂が篠田機、松本は二村機にきまった。
久坂は兄のような篠田分隊士の彗星に同乗できることをひそかに欣んだが、松本はあれほど嫌っていた二村機に同乗することになってしまい気の毒だった。

四

初搭乗の日は快晴になって、門出を祝福してくれた。
松本は二村分隊長機搭乗についてはなにも触れず、
「おい、久坂、頑張ろうぜ」
初搭乗に昂奮して手を握り、なんども肩を敲いた。
飛行作業は午後からはじまった。
藤井隊長から訓示を受けたあと、二村分隊長の、
「かかれッ」
の合図で四散し、各自搭乗機目がけて早駆けした。
久坂が主翼に駆け上がって後部座席につくと、プロペラが回り篠田機は列線を離れて滑走路へ向かった。
松本搭乗の二村機につづいて発進地点に入ると、
「久坂、天蓋を閉めて遮光眼鏡をかけろ」
篠田の声が、伝声管を伝ってながれてきた。
車輛止めをはずした整備兵の合図で発進した機は滑走路を全速で走り、大地を蹴ってふわりと離陸した。
久坂は、緊張のあまり思わず両足を踏ん張った。
篠田機は、基地の上空をなんども旋回しながら、徐々に高度を上げると、機首を南に向けた。
錦江湾に出ると、白い煙を噴く桜島が俯瞰された。
久坂は桜島が見えた途端に開花楼の森田菊江を思い出して、あの艶めかしい姿態を瞼に浮かべてみた。
(いまごろはなにをしているんだろう)
そんなことに現を抜かしていると、咎めるように篠田

の声が割り込んできた。はっとわれにかえって、
「なんでありますか」
慌てて応答した。
「どうしたんだ。気分でも悪いのか」
「いいえ。悪くはありません」
「そうか。どうだ南の海上を翔ぶ初飛行の感想は」
「はい。爽快であります」
「それはいい。だがもうすぐ標的の島の上空に到達する。訓練をはじめたら爽快じゃなくなるぞ。いまからいっきに上昇するから酒保で買ったキャラメルを舐めろ。口を開けていれば鼓膜にかかる圧力がやわらぐ」
久坂は、親切な篠田の指示にしたがった。
篠田機は、高度を五千メートルに上げて、敵艦に仮想した名もない小島の上空に到達した。
「久坂、はじめるぞ。いいか」
「はい」
あの標的にする小島に向かって急降下するのだ。
二村分隊長のいう地獄まで突っ込む急降下である。
目標に向かって攻撃するときの久坂たち偵察員の任務は、急降下でまえのめりになったままの姿勢で手早く航法計算をつづけ、操縦員に高度の変化を矢継早に伝声管で伝えて、六〇〇メートルまで降下したところで「テーツ」と爆弾投下の合図を送ることであった。
「いくぞッ」

篠田の怒鳴り声と同時に、機は逆落としに入った。
四五度の角度がまるで真っ逆さまに墜落するような錯覚に囚われ、胃と腸が口からとび出ると思うほどの強い締めつけがきて、猛烈な吐き気におそわれた。
咄嗟に排泄物を容れる牛の膀胱を取り出す暇もなく、反射的に半長靴を脱いでそこへ顔を突っ込んだ。
吐瀉物が胃液だけになっても吐き気はつづいた。
久坂は朦朧としてしまい、意識を喪いかけていた。
どのくらいの時間が経過しただろうか。
「頑張るのよ」
菊江の励ましの叫び声がきこえて久坂が正気をとりもどしたとき、機はすでに水平飛行に入っていた。
「どうだ、久坂。気合いが入ったか」
篠田が揶揄うように問いかけてきたが、久坂は精魂尽きてしまっていて、返事をする気力がなかった。
「これが艦爆乗りの実態だ。娑婆じゃ俺たちのことを粋な搭乗員と持て囃すが、じつのところはこのざまだ。このありさまを見たらさだめし興醒めだろうよ」
久坂は情けなかった。殉職するかも知れないと思った。
ふと、母や弟の顔がうかび、なにがなんでもこの猛訓練に耐えねばならぬと自分で自分を叱咤した。
鼻血が出た。急激な気圧の変化で血管が切れたのだ。
「久坂、大丈夫か」

「はい。申し訳ありませんでした」
「気にするな。誰でもそうなんだ。今日は一回だけにして時間潰しに南の海をゆっくり眺めさせてやろう」
久坂は、篠田の温情に思わず涙ぐんだ。
篠田は失速高度ぎりぎりの低空で飛んでくれた。南国のエメラルドグリーンの海が美しかった。
「さあ、そろそろ帰投するぞ」
篠田機は、機首を北に向けて高度を上げた。遠くでまだ急降下訓練をつづけている機影が見えた。
やがて、前方に桜島が見えてくると、錦江湾を挟んだ左手のほうにもうひとつ美しい山があった。
「久坂。右が桜島、左が開聞岳だ。あの二つの山の真んなかを直進すれば、間違いなく基地に帰投できる」
篠田はさりげなく不測の事態の航法を教えてくれたのだ。久坂は篠田のそういう気遣いを有難く思った。
桜島と開聞岳が近づいてきた。
(あれが、開聞岳というのか)
久坂は夕陽に映える美しい山容を眺めつづけた。
久坂が篠田と酒保へまわり、羊羹をもらって宿舎へもどると、もうみんな帰ってきていて誰も彼も飛行服のまま長々とのびていたが、松本だけがいなかった。
「松本はどうしたんだ」
久坂は心配になって誰にともなく訊いてみた。
「まだ帰ってこんのだ」
入口近くに寝そべっていた中西が、そう答えた。
「二村分隊長にこってりと絞られているんだろう」
豊田がそう同情した。
「実戦部隊はきびしにまさる猛訓練だ。まいった、まいった。このぶんではさきが思い遣られるな」
その声をきいた途端に、久坂は張り詰めていたものがいちどに弛緩してその場に頽れてしまった。松本のことが気掛かりだったが、飛行場へ引き返してみる気力はもうどこにも残ってはいなかった。
帰ってきた松本は亡霊のようで、久坂はぞっとした。顔面蒼白で口許は鮮血に塗れ、瞳は宙をさまよっていた。立っているように思ったのは一瞬の錯覚で、松本は転がるように室内に倒れ込んできたのである。
そんな松本を真っ先に認めた久坂は、
「松本が帰ってきたぞ。みんな手を貸せ」
そう叫ぶなり、駆け寄って抱き起こした。
あとで松本から聴いた話によると、二村は基地からの視線が届かぬ地点に達すると、途端に機体を左右に激しく振るバンクをしたり、上昇下降を繰り返したりして松本の体力をすっかり消耗させておいてから、止めの急降下をかけて失神させたという。
そして、帰投するとこんどは、意識朦朧としている松本を後部座席から引き摺り降ろして、神聖な愛機を反吐で汚したことを怒り、体罰の追い打ちをかけた。

「畜生。俺を嬲り物にしやがって、あの野郎いまに見ていろ。きっと一人前になって見返してやるからな」

口惜しがる松本を見て久坂は、実戦訓練に事寄せて陰湿な体罰を加えて恐怖に戦かせる江田島健児にあるまじき二村の卑劣な遣り方に真底から腹を立てた。

五

一月二十日、大本営、本土決戦大綱を決定する。

二月三日、米軍、マニラ市内に突入する。

同四日、米・英・ソ三国の最高指揮官ルーズベルト、チャーチル、スターリンの三者がソ連クリミヤ半島南部のヤルタに集まり、ドイツ降伏後の管理と国際連合の召集などについて会談し、協定する。

二月十日、聯合艦隊に第五航空艦隊が新編成されて、南九州に散在している各基地の零戦、紫電、彩雲偵察、一式陸攻、二式飛行艇夜間偵察、彗星艦爆、銀河、天山、爆撃戦闘、桜花の八航空隊が麾下に入った。

司令長官に宇垣纏中将が親補され、司令部は大隈半島の鹿屋基地におかれた。

宇垣中将は開戦時の聯合艦隊参謀長だった人で、山本五十六長官を補佐して全艦隊を指揮してきた。

緒戦のハワイオアフ島真珠湾攻撃から僅か半年後のミッドウェー海戦に敗れてからは、押し捲られて守勢に立った戦況を立て直すべく海戦から航空戦に切り替えて攻撃に転じようと司令部を最前線のトラック島ラバウル基地に移して南方諸島の各航空隊を督励した。

そして、昭和十八年四月十八日、宇垣参謀長は山本長官の前線基地視察に随行して一式陸攻二機に分乗しショートランドへ向かったが、途中ブイン上空で待ち伏せていた米軍P38戦闘機十八機に襲撃されて、長官機も参謀長機も撃墜されてしまった。

山本長官は機上で戦死したが、宇垣参謀長は重傷を負いながら、奇跡的にも一命をとりとめて救出された。

再起した宇垣中将は、第二艦隊司令長官栗田健男中将の第一戦隊司令に任ぜられて捷一号作戦のレイテ湾攻撃に戦艦大和、武蔵、長門を率いて出動したが、武蔵を喪う敗北に終わり軍令部付になっていた。

その宇垣中将がみたび戦闘部隊に復帰して、聯合艦隊麾下の新設航空艦隊を率いる指揮官として勇躍鹿屋基地におかれた司令部に着任したのである。

太平洋戦争はすでに敗色が濃厚になり、戦意喪失の海軍中枢にあって、宇垣中将は第一航空艦隊司令長官大西瀧治郎中将とともに徹底抗戦派の急先鋒であった。

その宇垣中将が指揮をとる第五航空艦隊は、当然特攻が主体になってゆくにちがいなかった。

久坂たちの彗星艦爆隊も、その宇垣長官の第五航空艦隊に編入されたが、むろん搭乗員たちはそんな上層部の

事情を知るよしもなかった。

外出も許されず実戦訓練に励んできた久坂たちは、ようやく一人前の搭乗員らしくなってきていた。

南九州に春の兆しが訪れはじめた三月一日付で久坂たち同期の八人は正式に実施部隊に加えられた。それは一人前の戦闘要員として認められた証しであった。

ある朝、山村先任下士官が宿舎にやってきて、

「飛行作業中止。一〇〇〇司令部まえに集合せよ」

そういつになく沈痛な面持ちで指示していった。

久坂たちは、

「なんだろう」

とたがいに顔を見合わせた。

山村先任下士官の神妙な態度が気になった。

松本が、相変わらずの茶目っ気を出して、

「みなさまがたよ。これはひょっとして前線基地への転進命令かも知れんぞよ。いよいよ敵さんと存分に渡り合うことになるか。腕が鳴ります、腕が鳴るだ」

そう燥いだが、誰も乗らないので引っ込みがつかず、

「なあに、あれこれ臆測しても詮無いことよ。下手の考え休むに似たり。いずれはつきりいたしますわ」

そうけじめをつけて、独り芝居の幕を閉じた。

定刻十時、搭乗員全員が司令部前に整列した。

司令が壇上に立って、おもむろに話しはじめた。

「敵機動部隊沖縄本島に迫りつつある国家存亡の危機にあたり、わが第五航空艦隊は敵艦船の殲滅を期してここに特攻をかけることに決した。一機をもって一艦を屠る体当たり攻撃である。国家あってのわが身であれば、おまえたちは死しても死するにあらず、身命を困難に代えて悠久の大義に生きるのだ。出撃の日までは寸暇を惜しんで奮励努力し、必中の成功を祈る」

久坂は、司令の悲壮な訓示を聴いて全身が震えた。

まだ時局を正確に把握する情報も能力も持たない久坂らの年代は、指導者たちのいうことを素直に聴いて受け入れ、筋金入りの軍国少年に育てられていった。

そして、国民あっての国家だから身近な家族や親戚、友人、知人たちを外敵から守るために、自分の生命を捧げる決意をもって航空兵を志願したのだった。

飛行機乗りになったからには、いずれ南の空で果てることは覚悟していたが、その最期のときは出撃を繰り返しているうちにいつかやってくるに違いない、という漠然としたものであった。

これまで猛訓練に耐えて伎倆を磨いてきたのは、敵の攻撃からなるべく長くわが身を守り一艦でも多くの敵艦を撃沈する戦果を挙げるためだったのである。

特別攻撃とは、一死をもって任務を達成せよという生命と戦果を引き換えにする必中必死の攻撃である。

この特攻の発令によって、以後生還を期す出撃はなく

なり、搭乗員は生きながらにして彗星艦爆という軽合金の柩に入って死出の旅に発つことになるのだ。

久坂は、自分で自分の生命を絶つとは思ってもみなかった。

久坂たちの飛行隊は、果敢な急降下爆撃隊に相応しく、『神風特別攻撃隊流星隊』と命名された。

司令部からの帰り道は、誰も彼もが無言であった。

宿舎近くの松林が切れて空地になっているところで藤井隊長が立ち止まり、円陣を組むように指示した。

「昨日、司令と飛行長が鹿屋の司令部で宇垣長官から特攻を命じられたとき、志願制度の意見も出たそうだが、選択はむしろ搭乗員を迷わせ士気にも影響するということで、全員特攻に決まったのだ。おまえたちを道連れにするのはしのびないが一緒に死んでくれ」

隊員たちは、無言でいっせいに不動の姿勢をとると、藤井隊長に挙手の礼をした。

「隊長ッ」

篠田分隊士が、重苦しい沈黙を破った。

「爆撃行なら偵察員が必要ですが、特攻は操縦員だけで足ります。偵察員は特攻機から降ろして下さい」

「分隊士、それは違います」

偵察員の長谷川一飛曹が血相を変えた。

「われわれは今日までペアで生死をともにしてきました。この期に及んでおめおめと生き恥は晒せません。そんな酷いことはどうか仰言らないで下さい」

「長谷川のいうとおりだ。俺たちは縁あって今日までペアを組んできた同志なんだ。地獄の底まで道連れだぞと誓い合った固い絆で結ばれた仲だということを忘れるな。そんな甘っちょろい情けは娑婆では美談かも知らんが軍隊では通用しないんだ。肝に銘じておけ」

二村分隊長が声を荒げて篠田分隊士に噛みついた。

「二人ともやめんか。篠田、おまえの言い分もわからんではないが全員特攻に決まったんだ。命令なんだ」

藤井隊長が、そう釘を刺した。

藤井隊長らが士官宿舎に帰っていったあと、竹田一飛曹の発案で山村先任下士官を囲んでふたたび円陣を組むと、神風特別攻撃隊流星隊の結束を誓い、たがいに肩を組み合って声高らかに『同期の桜』を唄った。

六

その日の昼食は、赤飯と尾頭つきが振る舞われたが、誰もが大空を自由自在に翔び回る勇姿をえがきつづけてきていただけに、口をきく者もなく、落胆の暗い顔を俯けてただ黙々と食べるだけだった。

久坂は、司令から特攻ときかされたとき、咄嗟に小学校の教科書にあった肉弾三勇士の話を連想した。

零戦は二十五番（二五〇キロ爆弾）を、彗星は五十番（五〇〇キロ爆弾）を抱いて敵艦目がけて体当たりしてゆく。そこには軍用機本来の機能も搭乗員の練度も要求されず、ただプロペラと翼をつけた大きな爆弾に乗って翔んでゆくだけのことでしかなかった。

その思いは誰もおなじらしく、星野が抑え切れずに、

「苦しい訓練に耐えてきたのはなんだったんだ」

そう残念がると、みな一斉に憤懣を叩きつけた。

その喧騒のさなかに山村先任下士官がやってきた。

「なにを騒いでいるんだ。特攻がそんなに怖いのか」

「ちがいます」

松本が代表して答えた。

「じゃあ、いったいなんなんだ」

「はい。生還のない攻撃は伎倆を活かせません」

「莫迦もの。半人前のくせにえらそうな口をきくんじゃない。貴様ら特攻を甘く見るなよ。実戦は訓練のようにはいかんのだぞ。いいか。五十番を抱いて翔んでゆく途中で敵さんに遭遇したらどうなる。相手は身軽な戦闘機、こっちは重い爆弾を抱えて動きが鈍い。子供を背負った肥満男が生きのいい鰡背な若者と喧嘩するようなものなんだ。その敵機の群れをどう躱して目的地まで行くか。そこが伎倆の見せどころなんだ。また、さいわいにして敵機動部隊の屯ろしている海域まで辿り着けたとしてもだ、敵さんだって生命が惜しいからそう易々と成功させてはくれんぞ。死に物狂いの対空砲火をどう潜り抜けて体当たりするか。これもまた伎倆次第だ。特攻は並の攻撃よりずっと難しいんだ。高度の技術を必要とするんだ。わかったか松本」

「はい。わかりました。申し訳ありません」

「いいか。これからの特攻訓練はきついぞ。みんな褌を締めてかかれよ。いいな」

「はい」

久坂たちは山村の発破で気力をとりもどした。

山村は、凄んでいた顔ににやりと微笑をうかべて、

「こんどは、おまえたちにいいことをきかせてやろう。流星隊員はこれから半舷入湯上陸する。名前を呼ばれた者は一五〇〇衛兵所前に集合しろ。わかったな」

みな一瞬しんとした。外出なんて思ってもみなかった。半信半疑で山村の次の言葉に神経を集中させた。

呼ばれたのは、久坂、松本、豊田、川村であった。

山村が去ると、松本が喜びを隠し切れずに燥いだ。

「中西、前川、星野、松下、俺たちは悠くり娑婆の空気を吸ってくるから、貴様たちは甲板掃除でもしておとなしく留守番していろよ。すまねえな」

「この野郎、巫山戯やがって。おい松本、貴様は娑婆へ先に行くんだから、冥土へも先に行けよな」

星野が、口惜し紛れにそう雑ぜ返した。

久坂たち四人は手早く外出仕度をして衛兵所へ急いだ。初めて味わう解放感で身も心も浮き立っていた。

軍医長から慰安婦たちの検診結果の説明があって予

防具を渡されたあと、週番士官から細々とした注意事項があり、明朝八時帰隊を告げられて許可された。

各飛行隊ごとにトラックの荷台に分乗して山を下り、町の入口でおろされた。路傍の地蔵が目印だった。

山村先任下士官が、

「今日は初上陸の者がいるから団体行動をとる。まず倶楽部へ行って入浴してから流星隊の結成を祝って酒盛りだ。そのあとは各自自由行動とする。それぞれ馴染みと慰安所泊まりだろうが、不案内の四名は俺が連れて登楼する。貴様たちはまだ童貞だろうから今夜はめでたい筆下ろしだ。明朝は〇七〇〇にここに集合。遅れた者は基地まで早駆けだ。いいな。よし行くぞ」

流星隊員たちは三々五々町なかへ入って行った。

目当ての倶楽部というのは開花楼だった。

久坂と松本は、懐かしい思いで入って行ったが、迎えの仲居たちのなかに森田菊江のすがたはなかった。

開花楼の大浴場に全員一緒に入浴したので、当番兵のいない飛行隊では飛長が最下位だったから久坂たち四人は先輩たちの背中を流すのに大童わだった。

それでも、先輩たちがあがったあとで思い切り手足をのばして湯に漬かれたのがなんとしても嬉しかった。

四人が広間へもどると、先輩たちはすでに用意された膳をまえにして落着かぬ素振りをみせていた。

竹田一飛曹が苛立って、

「おそいぞ。なにを愚図愚図していたんだ」

と発破をかけた。

上座にどっかり腰を据えていた山村先任下士官が、

「竹田、急くからって八つ当たりするな」

そう釘を刺して鉾先を躱してくれた。

「おーい、揃ったぞ。早く酒を持ってこい」

竹田がそう呶鳴ると、

「はーい、只今」

三人の仲居たちが盆に徳利を林立させて現れた。

(あっ、お菊さん)

久坂が三人のなかに菊江を見つけると、菊江のほうでも久坂をみとめて微笑しながら近づいてきた。

「あーら坊やたち、お久し振り。元気でいたのね」

「ええ、このとおり元気で頑張っています」

「俺も元気だよ、お菊さん」

隣りにいる松本が、菊江の気を惹いた。

「この野郎たち、青い尻した半人前のくせに色気づきやがって。明日から容赦しねえから覚悟しておけ」

栗山一飛曹が、血相を変えて息巻いた。

竹田が、

「栗山。妬くな、妬くな。半人前でも色気は別さ」

そう茶化すと、

「なんだと」

栗山は竹田に当てつけますますむきになった。

「いい加減にしておけ。酒が冷める。これが最後の酒盛りになるかも知れんのだぞ。さあ乾盃だ、乾盃だ」

山村先任下士官のひと声でようやく酒宴になった。

座が乱れ、栗山が両手に徳利を下げてやってきた。

「おい、色男たち、さあ飲め」

久坂と松本は、やむなく注がれた酒を飲み干した。

「よし、もう一杯いけ」

松本はいける口だが、久坂は下戸なので躊躇った。

「貴様、俺の注ぐ酒は飲めねえというのか」

「そうではありません。自分はもともとだめなのです」

「なにッ、酒も飲めねえ屁も放らねえ。お嬢さんじゃあるめえし、それでも飛行機乗りか。巫山戯るな。俺が酒の飲みかたを教えてやる。さあ、飲め、飲め」

久坂は仕方なく盃を出した。眼を瞑って無理に喉へ流し込むとまた注がれた。なんども繰り返されたあとで、こんどは栗山が自分で飲んだ盃を突きつけて、

「久坂、俺の盃も受けろ」

そう凄んだ。眼が据わっていた。始末が悪かった。

久坂はしまいに眼が眩み、意識が朦朧となった。

酒席の喧騒が遠退き、闇の中へ引き込まれていった。

気がつくと、薄暗い部屋に褌だけで毛布に包まれて布団に寝かされていた。頭が割れるように痛かった。

あたりはしんと静まり返っていて、自分だけがどうしてここにいるのか判断がつかず、不安になった。

喉が灼けつくように渇いていて、水が欲しかった。

襖の隙間から明かりが漏れて、隣りの部屋で人の動く気配がしたと思うと、そっと襖が開けられた。

明かりを背にしているので、誰かわからなかった。

「眼がさめた」

圧し殺したその声は、菊江だった。

豆電球を点けて枕許に立った寝巻き姿の菊江が、

「喉が渇いたでしょう。水を持ってきてあげるわ」

そういって出ていった。

やがて、隣室の明かりを消してもどってきた菊江の手から茶碗を受け取ると久坂はいっきに飲み干した。冷水が喉をとおるといくらか頭がすっきりしてきた。

「みんなはどうしました」

「可哀相に、一人いじめで酔い潰しておいてさっさと慰安所へ繰り込んでいったわ。いい気なものよ」

「そうか。それじゃ自分もいかなくちゃ」

「いまごろ行ってもみんな爆撃を終えて高鼾だわよ」

「松本たちも一緒ですか」

「そうよ。無理矢理筆おろしさせられたでしょうよ」

久坂は、慰安所へ行くべきかどうか迷った。

「あんたの軍服は反吐で汚れたんで洗っちゃったから行けないわよ。ここで温和しく寝てゆきなさい」

久坂は、酒席での事情がのみこめて、沈黙した。

「わたしと一緒に寝よう」

とつぜん、菊江に体当たりされて久坂は押し倒された。抱き竦める成熟した女性の匂いで息が詰まった。
「こんな坊やを特攻機に乗せるなんて非道いじゃない。死んじゃだめよ。ねえ、死なないのよ。約束よ」
菊江は嗚咽しながら久坂の全身を激しく揺すった。
「あたしの田舎じゃ冬は真っ裸で寝るの。そうするととってもあたたかいの。ね、二人でそうして寝よう」
耳許で囁く菊江の息が擽ったかった。
菊江は、久坂の毛布を剥ぎとると自分も腰紐を解いた。浴衣の下にはなにもつけていなかった。
ふたたび菊江に抱き竦められたとき、久坂は自分が嬰児になって母親に抱かれているような心地になった。
豊満な二つの隆起が眼のまえにあった。
久坂は菊江が突き出した隆起を夢中で掴んだ。両掌で包むと柔らかくて弾力があった。
久坂は隆起のひとつに激しくむしゃぶりついた。吸いつづけていると、先端の突起物がせり出してきて固くなった。
菊江は喘ぎながら、さらに強く久坂を抱き締めた。
それからさきは菊江のなすがままになっていたが、いつか、深い眠りに落ちていった。
菊江がそっと起き出す気配で、久坂は眼を覚ました。
夜が明けるらしく部屋のなかが白んできていた。
立ち上がって浴衣を着ようとする菊江の裸身が影絵のように障子に映り、形のいい胸の隆起が大きく息衝いていた。
やがて、菊江は身仕舞いをすませると、久坂に、
「昨夜のことは、二人だけの、ひ、み、つ、よ」
そう耳許で囁いて、そっと部屋を出ていった。
久坂はまだ夢を見ているようで信じられなかった。

（以下次号）

きどさん

木戸屋敷の冒険



大和禎人

木島くんは私を誘ってこう言った。
「明日の日曜は木戸さんへ行かないか、悪魔が出るって言うけど、平気さ、クチボソやメダカが取れるんだ、面白いぞ、木戸さんをお前知らないのか、駒込駅の田畑に向かう踏切のところで待ってろ、なに裏手だから、気づかれない、ご飯粒を餌にするんだ、面白いぞ」
彼の誘いはざっと右のようであった。
小学五年生の時、当時あった男女組を解いて、別学再編成された折、彼は私と机を並べることになって、そうした誘いをうけることになった。
彼の言う木戸さんすら初耳の私だったが、メダカと聞いては誘いに乗らないわけにはいかない、小学生仲間のこの誘いに術もなく私は乗せられたものだ。
「クチボソってどんな魚だ?」
「なんだ知らないのか」
私は他愛なく誘いにのって、待ち合わせの場所に出かけた。指定の駒込駅は山手台地切り通しの底にあり、指定の踏切は田畑に向い、切り通しの末端にあった。
駅のホームとは相向かいの台地の裾をめぐる道路の一角に、私たちを待つ目的の金網の破れがあり、そこが私たち二人の企てた冒険の侵入口になるのであった。
彼の口から囁かれた「木戸さん」を私は全く知識に持ち合わせていなかった。ただならぬ明治の元勲の一人、桂小五郎の木戸孝允を指すもので、明治新政府の要路に立った人々が意のままに占めた、もとは旧大名屋敷に相違ないのだが、今日に時を経てはわずかに木戸坂の名称を地図上に見いだせるのみで確たる地積を調べようがない。江戸切絵図などに旧大名屋敷をあたってみたが、お江戸の中枢ではないから判明は困難であった。
誰かあって明治に権勢を誇ったこの人々の構えた邸宅の今昔を調べることがあっても良さそうである。
ともあれ遊びに長けた木島君の導きに従って木戸屋

敷の一角に二人は忍び込んだ。傾斜地の裾に流れがあってその澱みに小魚の泳ぐ姿があった。飯粒を餌に彼はたちまち釣果あげるのだが、私の方はそうはいかない。

「おい、このへんで止めて冒険をしよう」

「悪魔が出るというじゃないか」

「ほんとうに出るか、出ないか確かめるのさ」

彼は頼もしい勇者であった。

傾斜を登りつめると築庭の景観がひらけ、石組みとともに、泉水もあって数奇屋風の建物があった。

二人がウロウロするうち、建物右端に手水屋があって人影が動くと見えた途端、

「こらあー」

咎める大声が飛んできた。

二人は跳ね上がるように飛びすさり、一目散に傾斜を駆け降り、逃げ走った。

噂の悪魔が出た。しかしそれは人間であった。

瀟洒な数奇屋の建物はほとんど無人であったようだ。たまたま手水に立った人物はこの家の留守を預かる家令かなにかであったろう。

木戸氏は後裔に恵まれず、たとえ姻族があったとしても、全く表面だった立場に立つことは無にひとしいのである。明治政府の顕官の列に中葉以後「木戸」姓はついに発見し得ない。

維新惣忙の間の長州の桂として功績にかかわらず、大久保よりつねに開明的であった彼はソリが合わぬフシも多く、やがて健康がすぐれず閑職にうつり、西南戦争中わずか四十四歳で病没しているのである。

悪魔が出るって言うけど平気さ、と言ってさそいをかけた木島少年は木戸屋敷をどう知識にしていたものか、その後も彼はつねに遊びにかけて逞しさに長けていた。この日裏庭に足を踏み入れる勇気は誘いに乗った私を頼みにした勇気であったかも知れない。だが、その彼が屋敷の持ち主の木戸氏についてどの程度に知ってか、あるいは知らずかまでは不明であった。

芒々の歳月を経た今日となっては地図上に按じようとしても困難なことは前記の通りで、パソコンで知り得る現地は現実に添って、確かめをしようとしても実のところ判明しない。わずかに木戸坂の名称を冠するマンションが二棟あり、その奥に駒二と表示するかなり広い空き地を発見できるのだが、それ以上は不明である。駒二は豊島区駒込二丁目を指すものであり、文京区とは入会地にあたり、はぐらかされるというのが実情である。木戸坂の称が名残りをとどめ、その一角に往年秩父館と称する旅館があり、昭和七年という茫々の昔、相撲界の騒擾の際、新興力士団の本部が置かれた事実なぞは夢のまた夢、もはや今日の語りぐさにもあたらない。

（H一九・一・一九）

葛飾柴又と老婦人

伊治　哲

ここは、葛飾柴又である。

いうまでもなく、渥美清演じる映画「男はつらいよ」シリーズの「寅さん」の故郷である。

私たち夫婦は「寅さん」が大好きだ。桜開花の便りに誘われて、三月の終わり近く二人で柴又を訪ねた。

柴又駅の目の前、早くも「寅さん」が私たちの目に飛び込んできた。黄土色に格子縞のダブルの背広を肩に引っかけた例のスタイルで、「おにいちゃーん」と呼びかける「さくら」の声に後ろを振り返りながら、フラッと旅に出る「フーテンの寅」の像が、私たちをいっぺんに昭和半ばの古き良き時代に招き入れてくれる。

駅前から幅六間にも満たない狭い通りが、柴又帝釈天に通じる参道だ。道の両側には、駄菓子屋あり、団子屋あり、煎餅屋あり、蕎麦屋、鰻屋、佃煮屋、果てはレトロな日用雑貨の店など、ありとあらゆる店が所狭しと軒を連ねる。

威勢の良い客呼びの声が飛び交うなかを、肩を触れ合うようにしてぞろぞろと人が往き来する。味見をして品定めをする人、〈あのお店の方が安かったよ〉と言って引き返す人、袋いっぱいにお土産を包み込む人……遠慮も飾りっ気もない猥雑と喧騒の中に心地よく吸い込まれていく。

草だんご屋に目がとまった。「あっ、これだよ！　だんごの『くるま屋』だよ！」と思わず声が出そうになったが、看板は「くるま屋」ではなかった。

それでも、中から「おいちゃん」や「おばちゃん」、「さくら」と「博」夫婦が、ひょっこりと顔を出しそうで、しばし立ち止まってみた。しかしもちろん顔は出てこなかった。

人の群れに押し流されるようにしばらく足を運ぶと、もうそこは柴又帝釈天の山門である。正式には「経栄山

題経寺」といい、厄除け、延寿、商売繁盛に霊験あらたかといわれる。

僧衣に身をまとった「御前様」が、今にも本堂から悟りきった顔をして、飄々と歩み寄って来るような気がした。「寅さん」が唯一尊敬し頭が上がらなかった帝釈天の住職だ。「寅さん」の男気と熱い義理人情を最も深く理解したのもこの「御前様」である。いや、この下町に住む人々みんなの心の支えであったのであろう。

帝釈天にお参りした後、参道を少し引き返して、天丼を食べることにする。店口で天麩羅を揚げるにおいに引き寄せられた、というより、この天丼屋がいちばん古びていて素朴であったし、そのうえ値段も少しは安そうだったからである。

店口で天麩羅を揚げている主人の、「はい！　いらっしゃい！」という大きな声に迎えいれられてテーブルにつく。テーブルといってもそれはもう何十年も使い古してきたものだろう。黒光りして、角は磨り減って丸みを帯びている。それでも凹凸の土間のたたきの上にしっくりと収まりきっている。

メニューは天丼だけ。上天が一六五〇円、並が九九八円。あとは酒の肴が二、三種類。実にサッパリしている。

「思い切って〝上〟にするか」と、妻に囁いたとき、割烹着姿の女主人が側に寄ってきた。

「お客さん、高い方にしていただくのは有り難いのですが……、失礼ですが、お客さんのお年頃では並で充分ですよ。味は全く同じです。おいしいですよ」

思わず顔を見上げた。高いものを売りつけるのが商売だと思っていたら、柴又の商売はちょっと違う。お客に合わせて商売するのだ。いや、驚いた。これが本当の〝あきない〟ということか。

勧めに従って〝並天〟を注文する。大振りの車海老ときす、ししとうの天ぷらも、たっぷりとかかったタレの味も美味であった。妻はご飯を少し残すくらいで、女主人の言った通り充分すぎる量であった。

お勘定に二千円を出したら、お釣りが四円でなく五円かえってきた。怪訝な顔をしたら、「〝ご縁〟がありますように」といって主人が笑った。こちらも笑顔を返して、もうすっかり馴染み客になったような気分で店を出た。

再び帝釈天の土塀に沿って裏門にまわり「寅さん記念館」を一覧したが。映画のスタジオをそのまま再現した精巧な模造に感心したものの、きれいに整い過ぎていて、喧騒と人いきれが入り交じった現場の雰囲気には遠く及ばなかった。

記念館の屋上から江戸川の堤防にかけて柴又公園が広がる。記念館が公園の地下に潜った恰好になっている。その一角に立つと三六〇度視界が開けて、目の前の

悠々とした江戸川の流れに矢切の渡し舟が浮かび、その遠く向こうには対岸の家並みや小高い丘陵が一望できる。帝釈天参道の賑わいから一転して、そこは広々とした水と緑の世界であった。

芽吹き始めた新緑の芝生が川岸にまで広がり、子供たちがボールを追って喚声を上げている。旅から帰ってきた「寅さん」が茶色の革カバンを片手に「くるま屋」へ急いだ堤防の小道を、今は歳をとった夫婦連れが三々五々散策している。ここにも時代を隔てた春風駘蕩の風景があった。

しばらく佇んで景色に見入っている私たちに、

「ここに腰掛けてはいかが？」

と手招きする人影が目にとまった。もちろん見知らぬ人である。

それは、淡い色合いの絣の和服に身をまとった、見るからに端正な老婦人であった。この場所にしては、いささか不似合いともいえる装いである。

誘いに甘んじて席を譲ってもらい、妻を真中に三人で腰を下ろした。豊かな白髪からすると八十歳をすこし超えているであろうか。白い面長な顔に銀縁のメガネをかけて、にっこりとほほ笑んだ。

「どちらから……？」

と老婦人が話し掛けた。

「ええ、横浜から参りましたの。今日はお天気がよくて、つい春の暖かさに誘われて……」

妻との間で、どちらからともなく話の糸口が開けた。

「あら、そうですか。鶴見の総持寺にわたしの主人が眠っていますのよ。月命日には必ず墓参にまいりますの」

「あ、私たちその鶴見から来ました。映画の『寅さん』が好きで、一度柴又へ行ってみたいと思っていたものですから……」

老婦人はスーッと背筋を伸ばし川の流れの方に目を移しながら、遥かかなたに思いを馳せるように訥々と話し始めた。

「わたしの主人は十年ほど前に病気で亡くなりました。八十歳でした」

「それはそれは。お気の毒でございました。お淋しうございますねえ」

「こんなことを申し上げてもご興味はないと思いますが……」

と、老婦人はひと息ついて

「私たちの結婚は、戦争に始まって戦争に終わりました……。

主人は生粋の職業軍人でした。士官学校を卒業して任官後すぐに中支へ出征したのです。聯隊旗手でした。

南京や宜昌を転戦して、ずいぶん激しい戦闘に加わったそうです。ある激戦で腹部貫通銃創の重傷を負いました。野戦病院の処置がよくて九死に一生を得ましたが、余病を併発して内地の病院に後送されました。

病が癒えてから、どうしても中支の原隊に復帰したいと申し出たのですが許されませんでした。意に沿わないまま、予備士官学校や教導学校の区隊長として幹部候補生の教育に従事しているうちに、終戦をむかえたのです」

老婦人は一気にそこまで話して、しばらく黙りこくった。そっと私たちの顔を窺がったが、熱心に聞き入っている二人を見て、安心したように話を続けた。

「わたしたちが結婚したのは、主人が内地に帰還後、教官をしている頃です。陸軍中尉の軍服姿は本当に凛々しくて、どんなことがあっても終生この人を守っていこうと誓ったものです。

前線で命をかけて戦っている兵隊さんには申し訳なかったのですが、わたしにとってはこの頃が夢のように幸せな毎日でした。

それも束の間、二年後には日本が戦争に負けました。そのときの主人の悲痛な叫びといったら例えようもありませんでした。中支に残った聯隊の上官や兵隊に申し訳ないと、来る日も来る日もそのことばかりです。あの凛としていた主人が、人が変ったように気力をなくし、口を閉ざしてしまったのです」

老婦人の目には微かに涙が滲んでいるように見えた。余程誰かに話を聞いてもらいたかったに違いない。

「どうかお話をお続けください」

妻は元気づけるように老婦人に促した。

しばらく沈黙が続いたあと、老婦人はようやく口を開いた。

「戦後しばらくは東京の山手にあったわたしの実家に、といっても焼け跡のバラックでしたが、そこに身を寄せていました。

しかし、どうしても顔見知りに会うのが嫌だと言って、ここ柴又に移ってきたのです。全く知らない土地でしたが、その頃の柴又はまだ本当の田舎で、わずかな土地に野菜でも植えれば、子供と夫婦の一家三人、売り食いしながらでもどうにか食べていけました。

近くの工場に職を見つけて、ほそぼそと暮らしをたてていましたが、そのうちになんとしても昔の戦友を探し出したいと、暇さえあれば人のツテを頼りに消息探しに出かけるようになりました」

「そうでしたか……。戦場で生死を共にした方々は、親兄弟にもまして強い絆で結ばれていたのかもしれませんね」

今の時代には考えられない、人と人との一期一会に、

妻は感嘆の声をあげた。

「でもね、殆どの方が戦死や戦病死されていて、内地に復員されたのは僅かの方々であることが判ってきました。しばらく後にかつてお仕えした〝部隊長さまがお隠れになった〟折にも、弔問にこられたのはほんの数えるくらいの方々でした。そんなことに出くわす毎に、ここまで生き長らえてきた自責の念が深まり、戦争中のことはほとんど話してくれなくなりました」

「慰めるにも慰めようのないご苦心をなさいましたのですね」

妻は、夫婦の心情を思いやって一瞬声を詰まらせた。

老婦人は、

「そんな主人の苦しみを少しでも和らげようとわたしが連れ出したのが、江戸川を見渡せるこの川べりでした。今ここに座っているこの辺りに二人並んで腰をおろし、日がな一日、江戸川の流れに見入っていたものです」

この川べりが老婦人にとって忘れ難い場所であることが、ようやく分かってきた。老婦人はさらに続けた。そして最後にこんな言葉を洩らした。

「主人が亡くなるときに洩らしたのは、『あゝ、これでやっと戦友に会える』というひと言でした。主人が亡くなったことで、わたしの永い戦争もやっと終ったと実感したものです。

でも、わたしの胸のなかの主人への思いは終るどころか、一層募ってきます。お天気さえ良ければ、いつもこうして、この場所で、江戸川の流れに目をやりながら、主人と言葉を交し合っています」

「ご主人さまはお幸せです。とても胸を打つお話を聞かせていただきました」

妻が丁寧に頭を下げた。

「あら、お恥かしいことを申し上げましたのねえ。わたしの思い出ばかりをお話してご免なさい。お疲れになったでしょう」

「いいえ、ちっとも……。お話を聞いてとても感動しました」

と、妻も目を潤ませながら小さく答えた。

私はその間じっと話に聞き入っていたが、最後に口をはさんだ。

「ご主人のお話をもう少し詳しくお聞きしたいですね。実は私も戦争中、年少ながら、陸軍の軍人を志した者の一人ですので……」

「あら、そうでしたか。どこかで主人とご縁がつながったかもしれませんね。こんな昔風なお話でよければ、またお耳を貸してください。今も申し上げましたように、お天気の良い日のお昼過ぎには、ほとんどここに来ています。お気が向いたらまたおいでください」

と言って、老婦人はゆっくりと腰を上げた。

「今日は心に残るうるわしいお話を聞かせていただ

き、どうも有難うございました。ぜひ、またお目にかかれるよう楽しみにしています。どうかお体をおいといくださいい」

川風が冷たく頬を撫でた。少し名残惜しい気がしたが、私たちも立ち上がり挨拶を交わして手を振った。

堤防の小道を遠ざかっていく老婦人の背が、心なしか淋しげに目に映った。

住まいも名前も互いに明かそうとはしなかったが、川辺の芝生が鮮やかな緑に萌える頃、再びこの柴又で顔を合わせることもあるだろう。

いつのまにか昭和の半ばに舞い戻って、下町の気取らない素朴な風情と、温もりのある夫婦の情愛に心を洗われた葛飾柴又の一日が終った。

—2007．4．15．記



社　告（内規）

☆　同人参加へのお誘い

私達はひろく同志の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆　維持会会員へのお誘い

本誌愛読者の内、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数カ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行ない、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行なっております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇一〇一六四五九二

加入者名　まんじ

米沢紀行
—遠き従兄弟との再会—

平山恵敏

一

兄弟の交流は、社会に出て働くようになる頃から少なくなってゆく。歳を重ねるに連れ、顔を合わす機会といえば、冠婚葬祭だけというのが普通のようである。

九歳年上の兄たちは昭和七年満州生まれの双生児で、七十才代半ばに差し掛かる。

ひとりは重量運搬会社に勤務していた健兄、もうひとりの兄實は町内の世話役をしていた折に神社石段から転げ落ち、頚椎損傷の大怪我をしてから動作が思うに任せず、気弱になったのが気になっていた。

實兄の災難が癒えた昨年末、姫路二階町の寿司屋で兄弟三人が集まった。話題は、我らを鉄拳で叱責、スパルタ教育した長崎県五島市生まれの親父の思い出話から始まって、首相就任当初こそ中国外交で点数を稼いだが、大臣の政治資金問題・失言スキャンダル対応の決断鈍く、世評芳しくない前途多難な安倍政権のこき下ろし、IT時代の寵児として巨万の富を得て囃されたが、法を犯して欺き時価株を吊り上げ金儲けに走ったホリエモンや村上世彰の無節操さ、特に話が盛り上がったのは歴史上の英傑や人物の品定め等、取り留めのない話で尽きない。

会えば聞き慣れた口調や仕草が懐かしく、少年の頃に時間が逆戻りして色々の事柄が甦る。

そうしているうちに、健兄より「米沢の従兄弟・亨のところに行ってみないか」と、問い掛けられる。

その伏線は、亨が大阪でのいとこ会に米沢からの負担を省みず出席してくれたのを意気に感じていたので、もとより異存なく誘いに即決する。

スケジュールの段取りは、昨年米沢を訪れたばかりの私が担当することになった。

父は五人兄弟、大阪在住の唯一生存していた叔父が十数年前に亡くなった。その通夜の席で、一度も顔を会わ

せたことがなかった従兄妹たちに出会う。

奈良の智子から「身内では叔父さんが最後になってしまい、このように従兄妹が会うなんて、もう、なくなるわね。一度でもいいから、いとこ会でも出来たらいいのにね！」と呟く。雑談している場での空気はその気があっても気軽な願望だけに終わってしまいそうだった。

いつもなら何も言わず聞き流すところだが、そのときだけ何故か（血縁をないがしろにするな）、と亡き親たちの声無き声が聞こえたように感じた。

一瞬（いとこ会もいいかも）という衝動に駆られた私は「その役、引き受けます」と不意に口走ってしまう。

宣言した翌年に、大阪北梅田で「いとこ会」を開催した。近畿界隈、愛知、千葉、長崎、山形から十四名が参集した。それぞれが親の想い出や家族の境遇など、順次身の上話をする。

初顔会わせで聞く話は、新鮮な中にも表現し難い親しみが込み上げる。会えた喜びで心が和み、ほとんど生前に会い話せなかった叔父・叔母と面影ある面々が、血の繋がっていると思うだけで親近感を演出し、場は弾んだ。

二度目の開催ともなれば、各人の温度差があって参加者は減り、初めて会ったような感激も薄れるものだが、皆を喜ばせたのは、入退院を繰り返していたという奥さんを思いがけず亨が伴い、参加してくれたことであった。

その後の開催をどうしたものかと躊躇している内に、早や五年の年月が経ってしまった。

二

関西人は、北海道には旅するが東北に魅力ある観光地はあっても二の足を踏む人が多い。鉄道は目的地まで時間が掛かり、空の便数も少ないのに起因しているようだ。

未だ見ぬ東北を、退職後はいつか訪れたいと考えていた矢先の昨年五月、隆恵さんの企画・案内でマイカーに便乗させてもらう幸運に恵まれた。

東京を出発、途中茨城でゴルフをしてから、福島の磐梯・会津若松、山形の米沢・山寺・最上川舟下り、秋田の角館・田沢湖と乳頭温泉、岩手の雫石でのゴルフ・花巻志戸平温泉に至る一週間の東北ツアーを満喫する。

あれから約一年後に、まさか米沢を再訪できるとは思いもよらなかった。縁があったのである。

気候の良くなる四月十九日から二泊三日の兄弟旅が実現する。

伊丹空港から小型飛行機で発ち、サクランボ畑の隣接する山形空港まで一時間半、空港からタクシーでＪＲ神

町駅に到着。奥羽本線の車窓から見える、丁度見ごろの桜が彼方此方に咲いている景観は、昨年の景色とは違って東北の春の良さが感じられ、まもなく五年ぶりの亨との再会の楽しみが、車窓からの眺めをより感傷的にしていたのかもしれない。

米沢駅で亨の二歳上の兄・博がわざわざ千葉から駆けつけてくれていて、ふたりが一緒に駅舎に迎えてくれる。

最上川沿いの亨宅に招かれ、健気に世話してくれる奥さん心尽くしの珍しい山菜料理を馳走になりつつ、再会を互いに喜び合う。實兄の体調も心配するほどでもなく、持ち前の軽妙に話をする穏やかな表情に戻っていた。

今年の米沢は雪が少なかったとか、それでも月山、蔵王山の頂きには真っ白な残雪が美しい。聳え立つ山並みに囲まれた盆地、長閑な異郷の見慣れぬ風景に目をやり、少しひんやりした微風が頬を撫でて心地よい。

早速に案内されたのは上杉神社で、私は謙信と鷹山の銅像には昨年お目にかかっているが、兄たちは無論はじめて。折しも神社横の米沢市上杉博物館では、直江兼続特別展が開かれていて、運よく開催日程に出くわして得した気分になる。

秀吉・家康が一目も二目も置いたと云われる兼続の業績の数々を展示してあり、藩主景勝のブレーンとして豊臣政権と親密な関係を裏付ける書簡、また文人として才能を発揮した宋版史記・漢書、関が原の直江状や、家康の懐刀と言われた本多正純との書状などがあるかと思えば、戦上手の謙信を恐れ、信長が懐柔策に贈ったと伝えられる国宝「紙本金地著色洛中洛外図」狩野永徳の豪華な大屏風ありと、正に当時の政治状況と安土桃山文化の粋を見られたのは望外の幸せであった。

歴史を、嬉しそうに語る講釈好きの兄たちも満足げのようである。五人一緒に館内能舞台前で記念写真を撮る。

すぐ隣の上杉家十四代茂憲公の伯爵邸として建てられた料亭に案内される。豪華な料理とうま酒に陶酔しながら、旅の目的「ミニ従兄弟会」の宴が始まった。

従兄弟たちは太平洋戦争の始まった年に、幼くして母（亡父の妹）と死別する。教鞭を執る父に連れ立って県を跨ぎ転々とした由。持参した形見の叔母の写真を見せてもらい、はるか彼方の面影を偲びつつ苦労した様を時に涙ぐみ、しんみり聞く傍ら、兄たちは交互に気短で怖かった父の逸話を、ユーモアを交え回顧する。

米沢での再会に皆が得心し、これまで疎遠であった空間を埋めるには充分過ぎるほどの一日となった。

翌朝、従兄・博は一足先に帰途に着いた。亨が宿泊ホ

テルまで来てくれ、米沢市役所に勤務していたので、地元史跡に詳しい恩恵に浴することとなる。上杉家廟所で、社務所の管理人が「歴代藩主を祀り誇りとする名跡も地元学生にさえ見向きされない、郷土史教育を軽視する風潮が嘆かわしい」と洩らす。我々とて全く同感の残念な思いを抱くが、どうにもならない空しさだけが残る。

こよなく鷹山公を尊崇する實兄の希望で関根の普門院を訪れる。鷹山公十四歳から十七歳までの多感な頃に学問の教えを乞うた学者・細井平洲を、時は流れ三十年後思い出のこの寺で師の平洲を歓待したと云われる。

昭和の初め、師を敬い心根を広めるべく敬師の郷として国の指定史跡にするが、呼応する人が少ないようで、観光客はちらほらとか。境内には接待に感激した平洲の手紙の一節『一字一涙の碑』が刻まれていた。

次に林泉寺を訪れる。長尾景虎（のちの謙信）の先祖である菩提所として創建、境内は上杉家代々の奥方・子女らの灯篭に碁盤目のような穴の開いた墓石が林立し、直江兼続夫婦の墓、名家老竹俣当綱ゆかりの山門が安置されていた。

見栄えのする古庭園に人気が集まるのとは違い杉木立にひっそり苔むす墓地は、年間通して関係者以外訪れる人も少なく、歴史に名を為した人も忘れ去られ、風化していく運命にあるのだろうか。

亭の薦めで「鷹の一刀彫り」実演を見に行くが、生憎主人の彫物師が不在で奥さんから説明を聞く。鷹は立身出世の縁起物として政治家・俳優・タレントらがわざわざ買いに来、店内壁面に主人と撮影した写真がずらりと懸けられていた。

世話になった亨夫婦に米沢駅まで見送りを受け、二日目宿泊先の上の山温泉に向かう。

三

斎藤茂吉の実弟が昔経営していたという山城屋旅館に投宿する。館内に茂吉の資料室があることをガイド誌で知り、電話で予約しておいた。

気さくな女将に二階へ案内され、きしむガラス戸を引けば、右に上山城が直ぐ目の前、左彼方に蔵王が迫ってくる。明治時代に開業した老舗は、城周辺に桜が満開で絶好のシーズンというのに、客は私らを含めたった三組だけだった。蔵王スキー場に近く、寧ろ冬場が稼ぎ時とみえる。お蔭で、この静寂が何より有り難く、旅の疲れを癒すにはもってこいの宿であった。

ふるめかしい温泉にゆったり浸かり、和室で鯉の甘煮にウコギごはんの郷土料理を舌鼓しながら、旅の風情をのんびり寛ぐ。

一部屋で兄弟一緒に寝るのは、初回いとこ会に出席してくれた最年長の従姉・満規子の葬儀に長崎を訪れて以

来となる。

私が生まれた直後に戦争に突入し毎日食うに困った苦難の日々、家族が何処かへ一緒に出かけるなんて考えられもしなかった。外食は云うに及ばず、就職した十年後の大阪万国博に、やっと両親を連れ立って一緒に出かけたのが唯一旅の想い出になる。その二カ月後、父は六十七歳に黄泉の世界に旅立った。

暗黒の大東亜戦争時代の波を乗り越えて、親たちが生前したくとも果たせなかった身内間の親交は、大阪の叔父の死によりかろうじて途切れる寸前に微かな細い糸で繋ぎ止められ、いとこ会が実現した。

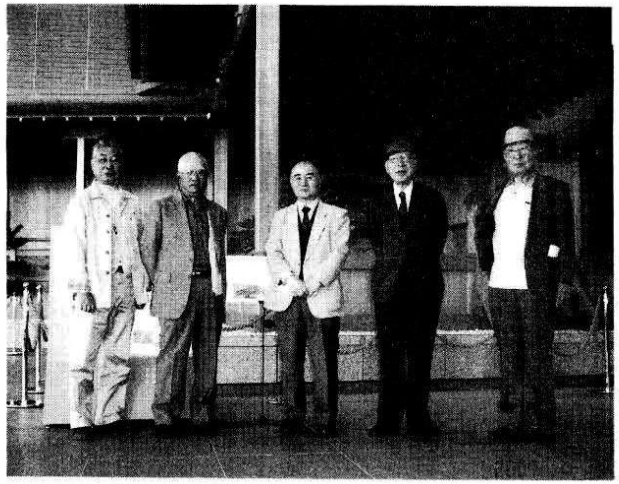
その縁が兄弟、さらに米沢で従兄弟との絆を深める旅になった。

後日、斎藤茂吉が最高境地に達していた時とされる歌集『白き山』からこの一節を知った。

けふ一日雪のはれたるしづかさに
　小さくなりて日が山に入る
最上川の流れのうへに浮かびゆけ
　行方（ゆくえ）なきわれこころの貧困（ひんこん）
最上川逆白波（さかしらなみ）のたつまでに
　ふぶくゆふべとなりにけるかも

終

【上杉博物館内、能舞台前にて】



健兄
實兄
従兄・亨
従兄・博
筆者・恵敏

空風（からっかぜ）（六）

太田精一

（二十三）

将来への展望を見出せないまま伸一は、高校三年の夏を迎えた。

カッティング針製造事業の先行きは暗い。大学への進学を希望しているが受験できるかどうかさえ分からない。伸一は、悩んだ末就職しようと考え、国家公務員四級職の税務職員試験を受けることにした。

合格はした。だが、大学進学の夢は、捨てきれないでいる。

「税務職員試験には受かったけれど、やっぱり大学に行きたい」

吉雄は、息子の固い意志にとうとう根負けした。

「お前がどうしても大学に行くと言い張るのなら、いくら止めても無駄だろう。だが、学費は出せない。何とかアルバイトでやって行くしかない。それができるとすれば国立以外にはないな。それも就職のしやすい有名大学に入ることだ。お前が大学を出て就職するまで今の仕事が持つかどうか分からないが、何とかやってみよう」

「お父さん。有難う。機械生産に押されて針の仕事も三、四年持てばよいほうだと思う。朝鮮戦争も終わったし、カッティング業界も、そんなに発展するとは思えない。ぼくは、大学を出てもっと広い世界で活躍したい。でも受験に金はかけられないから、受ける大学は国立で一校だけにするよ」

国立にすると決めたものの、伸一は受験科目が八科目の大学は無理だと思った。受験までに四ヶ月しかない。それに家の手伝いに追われて満足に受験勉強もできなかった。英語は、何とか入学時に比べれば成績を上げることができたが、得意科目とまではならなかった。

七科目で受験できる学校を探し、神戸大学の経済学部を受けた。結果は、失敗に終わった。

伸一の夢は、打ち砕かれた。空ろな心の隙間に、空風が吹き抜けている。四月の桜の季節になっても、その冷たい風は、収まらなかった。希望の年になるはずだった昭和三十年の春は、失意のうちに過ぎて行った。

戦災の激しかった浜松の街もこの頃には、ほぼ完全に復興し、新たな発展の時期を迎えている。

税務職員の面接試験も放棄してしまった彼は、家業を継ぐしかなかった。カッティング針の競争は、ますます激しくなり、仕事は減るばかりである。

木本家では、古くからいる職人の藤作さと佐平さを残し、他の従業員には辞めてもらうことにした。寺島町の睦子も例外ではなかった。それでも、吉雄との関係は相変わらず続いている。吉雄は、睦子の家に泊まることが多くなった。

注文が減ったため針の製造は、さきと二人の老職人だけでこと足りた。吉雄は、源次郎から教えられた秘伝の焼入れ焼き戻しの作業をするだけである。

伸一は営業の苦手な吉雄に代わって売掛金の回収や得意先回りを行った。

突然睦子の中学二年生になる娘から伸一に電話があった。

「あの木本伸一さんですか。私、寺島町の川村睦子の娘でつや子と言います。お母さんのことでお話をしたいと思いますので、家に来ていただけませんか」

睦子には、二人の娘がいる。上の娘は、つや子と言って中学二年生、下の娘は、順子で小学校五年生になる。その上の娘からの電話である。伸一は、嫌な予感がした。だが、父親との関係についての話であるというので、つや子の家に行くことにした。六畳と三畳の二間に台所の付いた二軒長屋の一軒で、粗末な造りの家であった。戸を開けて中に入ると、入口の三畳の部屋に火の消えた火鉢がぽつんと置いてある。六畳間の隅には、箪笥が一棹、長持が一本あった。

花冷えのする日で、部屋の中は、寒々としていた。

順子は、部屋の隅に敷かれた夜具の中に足を入れ、母の睦子とつや子の話に聞き耳を立てている。

吉雄は、いなかった。

「伸一さん。これが私たちの暮らしです。大工町のお宅での仕事がなくなってから、私も家政婦のような仕事をして何とか食べています。お父さんから月々の手当ても貰えず困っています。学校の給食費も払えません。何とかならないでしょうか」

「ぼくに言われても、どうすることもできません。倒産しそうで、家まで売らなければならない処まで来ているのです」

「吉雄さんは、このところ逃げてばかりで話も聞いてくれません。あの人が面倒をみてくれると言うんで、こんな関係になってしまったのです。お宅がそんなひどい

状態になっているとは知りませんでした。なんだか吉雄さんに騙されてしまったような気がします」

吉雄は、睦子を繋ぎ止めておきたかった。睦子が自分の手から離れて行くことが怖しく、木本家の苦境を話せないでいたのだ。

伸一は、吉雄が話しそびれていた木本家の内情を率直に語った。

（この問題は、当事者同士で解決して貰いたい。家運が傾き、財産を失った責任の一端は、彼女にもあるのだ。恨み言の一つも言ってやろう）

電話を受けた時、伸一はそう思った。だが、睦子の家族の窮状を目の当たりにし、自身も家政婦として働いていると聞いて、非難の言葉を浴びせる気持ちが次第に萎えて行った。

その時長女のつや子が、口を開いた。

「伸一さん。お母さんに赤ちゃんができているんです。木本の小父さんの子供です。私は、大人の男と女の関係のことは分かりません。でも、お父さんがいないのに産まれて来る子が可哀想です。これからどうやって育てて行ったらいいか、お母さんも私も困っています」

「お父さんは、なんと言っているのですか。責任を持って育てると言っているのですか」

「小父さんは、産まないほうがいいと言ったのです。でも、お母さんは、折角出来た子供だから産むと言って

いつも喧嘩しています。木本の小父さんの子供たちは、勉強ができて頭がいいとお母さんが言っていました。お母さんは、きっと勉強ができる子が産まれるに違いないと思っているようです。そうでしょう母さん・・・」

「ええ、そうよ。折角授かった子だものやっぱり産みたいわ。養育費が頂けるなら吉雄さんと別れてもいい」

「ぼくにはお父さんが養育費を出せるとはとても思えない。ぼくたち家族も大工町の家を売らなければならないほど切羽詰まっているんです。だから、お父さんに代わって養育費を出せるような状況じゃあないんです」

「そう、木本の小父さんの家がそんなにひどくなっているとは知らなかった。お母さんどうする。小父さんの助けなしでもやって行けるかしら」

つや子が母の睦子の顔を覗き込んだ。

「もうお腹も大きいし、今から産まないというわけには行かないの。吉雄さんの口車に乗せられて、子供まで作る仲になってしまったのは口惜しいけど仕方がない。何とか育てて行くようにする」

睦子は、涙を浮かべじっと天井を眺め、吐き捨てるように言った

「でも、産まれて来る子は、木本小父さんの子ですから伸一さんにとっても弟か妹になるわけです。将来大きくなってその子が困った時には助けてあげて、お願いします」

中学二年生の子供とは思えないほどしっかりした口調でつや子は伸一を見た。現実を冷静に受け止め、やがて吹きつける世間の冷たい風に母親とともに立ち向かおうとする健気な気持ちが漲っていた。

伸一は、睦子の家を出てからも衝撃が収まらなかった。弟か妹が大工町の家の外にできるなどとは、夢にも思わなかったのである。

どんな子が産まれるのだろう。男なのか女なのか。混乱した頭で寺島から平田の踏切に出た。遮断機が下り東海道線を客車が通る。窓に乗客の顔が映っている。どれも幸福そうな顔に見えた。

伸一は、強司の産まれた時のことを思い出した。あんなに弟のできることを喜んだのに今は違う。肩にずっしりと重い荷物を背負わされたような気持ちになるのだった。

列車の遠ざかる音は、旅へと誘うプレリュードのように伸一には聞こえた。

（二十四）

カッティング針製造の事業もいよいよ行き詰まった。税金も滞納を重ね、木本家の目ぼしい家財道具は、赤紙で埋まっている。仕入先の東京の問屋からも売掛金の督促を迫られた。が、支払いできない。土地だけではなく、とうとう住んでいる家まで売らなければならなくなったのだ。

木本家が、取り壊した鴨江観音通りに面した跡地に洋品店が店を出した。ところが、その敷地は狭く、かねてからその洋品店は、店舗と住居の拡張を希望していた。洋品店の裏隣にある木本家では、その洋品店に家の売却話を持ちかけ、前途金を受け取った。だが、引越し先を見つけることができないため、そのまま居座ってほそぼそと仕事を続けているのだ。

吉雄は、とうとう睦子の生活の面倒をみることができなくなった。仕事も財産も失った吉雄は、睦子の家族の生活には重荷でしかない。

貧しい生活は二人の愛情にも亀裂を生み、口論が絶えない。吉雄は、睦子のお腹が大きくなるにつれ、彼女の子供たちの詰るような冷たい視線に耐えられなくなった。

とうとう二人に破局が来た。吉雄は、睦子と別れた。木本家にも再び平穏な家庭の暮らしが戻るはずだった。だが、カッティング針の注文は、わずかばかりで二人の老職人の給与さえ滞りがちとなる状態が続き、吉雄とさきは家計のやりくりをめぐって口論が耐えなかった。

一年が過ぎた。

吉雄は、跡継ぎとしての期待を裏切った上にまだ進学を諦めかねている伸一を許すことができなかった。

「お前がどうしても大学に行くというのであればそれはしょうがない。ただ、今の状態で家にいても収入が少ないから共倒れになる。どこにでも好きな所に行って自活する道を考えろ。その上で大学に行くんなら勝手に行け」

それを聞いて伸一は、藤本利右衛門の言葉を思い出した。

「お父さんにそう言われてはしょうがない。菅原の叔父さんに頼み、住み込みで働かせて貰うことにする」

伸一は、家を出て菅原町の藤本建材店に住み込み店員として働かせて欲しいと頼み込んだ。店には、二人の店員がいた。が、折り良くそのうちの一人は辞めることが決まっていた。利右衛門は、店員を補充しようとしていたところであったのだ。

「叔父さん。お父さんから家業を継がないような奴は、家に置いとけないって言われちゃった。この前叔父さんが言っていたように大学に行くまで叔父さんの処で働かせて貰えますか」

「ああいいよ。ちょうど人手が足りないところだ。昼間働いて、夜勉強すればいい。ただ、家は建材屋だからセメント、石灰、壁材など重いものが多い。だから、仕事はきついよ。店は、朝七時から夕方五時まで、休日は、一ヶ月二回、第一、第三日曜日だ。住み込み食事つきで月給は三千円。夕食後は自由に勉強しなさい。もし、大学に行かないようであれば、ずっと家の店で働いて、嫁さんを貰うような年になったら一軒店を持たせてやる」

「有難うございます。とにかく食べて寝る処があって給金が頂け、勉強もさせて貰えれば結構です。よろしくお願いします」

伸一は、翌日から藤本建材店で働き始めた。昭和三十一年四月も半ばを過ぎ桜も散った新緑の季節であった。

建材店の朝は早い。六時起床。六時半に食事を終え七時の開店に備える。客は、土木、左官の請負業者や職人がほとんどである。

客は、朝七時にその日に使うセメント、石灰、煉瓦、壁材などの材料を仕入れるために来店するか電話で注文する。そのため七時から八時までの一時間は、店内がまるで戦場のようだ。

店員たちは、注文を受けたセメントや石灰を指定する建築工事現場に配達するのが主な仕事である。配達には、オート三輪を使った。

先輩店員の良ちゃんこと松本良太の運転する三輪の助手席に座って浜松市街はもとより入野、舞阪、弁天島から時には潮見坂を越えて豊橋まで配達した。

一袋五十キロのセメントを一日に百袋担ぐこともある。真夏の炎天下では、砂とセメントの埃が汗にまみれたランニングシャツにへばりつく。伸一も良太もがっちりした体格で、体力も膂力もあったが、夕方になると疲労のためお互いに口数も少なくなる。

良太は、歌が好きで三輪を運転しながら三橋美智也、春日八郎の歌をよく歌っていた。

十八番の歌は「別れの一本杉」だ。浜松女子商業高等学校に通う石野さんに憧れている。彼女は、伊場の自宅から通学のため藤本建材店の前を通る。そのたびごとに「別れの一本杉」の歌詞の一節「石の地蔵さんのよ～」と声を張り上げて歌うのである。

「伸ちゃんあの可愛い女子商の子の名前知っている」

「ううん、知らない」

「石野さんって言うんだ。伸ちゃんになんだか気がありそうだぜ。この前、店の前で伸ちゃんの顔を見たら、ちょっと赤くなったに。伸ちゃんにお辞儀して慌てて通り過ぎて行っただら」

挨拶を交わすようになってから、伸一も彼女を意識するようになっていた。客の来店がない限り彼女の帰宅時間に合わせて店の前に立つのが日課となったのである。ただ挨拶を交わすだけで、ほのぼのとした思いに包まれ、伸一は、密かに言葉を交わしたいと願っていた。

だが、その機会が訪れることはなかった。

伸一は、夜七時から週二回苦手な英語を克服するため、眠い目を擦りながら平田町の塾に通った。伸一のクラスの塾生は、四人で個人授業に近い。先生は、サマセット・モームの小説「雨」をテキストに使って、塾生が英語に対する興味を持つよう工夫を凝らした教え方をしていた。それによって、伸一の英語嫌いも次第に解消して行ったのである。

十二月末まで藤本建材店で働いた伸一は、友人の紹介で入野の寺の庫裏を借り二ヶ月間受験勉強に専念することにした。この年の受験に失敗すれば大学進学を諦めなければならない。彼にとっては、背水の陣であったのだ。

伸一は、藤本建材店からの給与をほとんど貯金し、受験費用と当面の学費を確保していた。

日本も国連加盟が認められ、国際社会への復帰を果たした。「もはや戦後ではない」という言葉が生まれ、神武景気を迎えていた頃である。

お寺での生活が始まった。

炊事は庫裏の外でする。空風の吹く中をかじかんだ手でマッチに火をつける。その火がゴンド（枯れた松葉でたきつけに使う）に燃え移り七輪の中で炎となった時、伸一は、手をかざしながら炭をそっと乗せるのである。

鍋でご飯を炊き、味噌汁、煮物すべてこの七輪の炭火を使う。火災を起こさないため細心の注意を払った。

住職から戴いたお寺の鏡餅が、二月半ばまであり、伸一は、ほとんど毎日雑煮を食べていた。そのためスタミ

ナを消耗せず受験に備えることができたのだ。

（二十五）

二月末日で寺を辞去した伸一は、大工町の家で荷物をまとめ、その日の夜行列車に乗り仙台へと向かった。

東北大学に受験するためである。

深夜十二時、家族が寝静まる中を伸一は、そっと玄関の戸を開け外に出た。さきが目を覚まし、伸一の肩に手を掛け見送った。

「受かるといいね。お金はあるのかい。仙台は寒いだろうから風邪を引かないようにね」

さきの吐く息が玄関の明かりに照らされ白く立ち上っている。

「うん。明日の朝上野に着いてそれから東北本線に乗り換えて仙台に行く。受験の三日間は、友達の下宿に泊めてもらうことにした。これが最後のチャンスだと思うから全力を尽くして頑張ってみる」

伸一は、さきの温かい視線を背中に感じ大工町の家を出た。

（もうこの家で暮らすこともないだろう。隣の洋品店への売却も決まって、売却代金の半分以上、前途金として受け取ってしまったから、早晩家を明け渡さなければならない）

伸一は、振り向いた。玄関から漏れる薄明かりの中でさきは、いつまでも手を振っていた。

三月一日夕刻、伸一は仙台駅に着いた。駅には浜松北校の同級生中山勇作が出迎えに来ていた。彼は、昨年工学部に入学している。

「久し振りだな。どう仙台の印象は、寒いだろう」

下宿は、駅から歩いて二十分くらいの処にあった。

「散らかしたままで悪いけど、遠慮なく何でも使ってくれ」

中山は、その日の夜行で帰省した。

一夜明けて伸一は、翌日から始まる試験に備えて、会場の下見に出掛けた。会場は、中山の下宿から徒歩二十分くらい離れた仙台第一高等学校である。

雪が降ってきた。仙台の春は、まだ遠い。

（明日も雪かもしれない）

伸一は、下宿前のぬかるんだ道を歩きながら不案内の土地で、電車やバスを利用するより自分の足で歩くほうが確実であると考え、試験場には歩いて行くことにした。

三日の試験当日には、下見しただけあって迷わず時間通りに会場に着いた。雪は止んでいる。

試験場には、石炭ストーブが置いてある。受験票と机の番号を照合し席に着いた。ストーブに近い席だ。温暖な土地から来た伸一には有難い。

試験は二日目まで順調で、合格には自信があった。ところが、三日目の数学でつまずき、その自信も崩れた。

（不合格かもしれない。今年は、二期校も受けることにしているから、もし駄目でも何処か受かるだろう）

そう思い直して伸一は、中山の下宿に戻り荷物をまとめて仙台を後にした。

（再びこの街に来ることはないかもしれない）

車窓から流れる街は、ひっそりとし、解けかかった雪が瓦屋根にしがみつき、春の訪れを拒むように点在している。風が裸木の枝を揺らしている。松の緑がこの薄墨色の世界にわずかばかりの色彩を添えていた。

上野に着いた。手筈どおり藤山が迎えに来ていた。藤山は、伸一の中学、高校を通した友人で、日大の芸術学部に在籍している。吉祥寺のラーメン屋の二階に下宿している彼に二週間ほどの宿泊を頼んでいたのだ。

「出迎え有難う。迷惑をかけて悪いが二週間ほど同居させてくれ」

伸一は、その間に私立大学を受験することにしていた。

「分かっている、家主の了解も取り付けてあるから心配ない。ところで、東北大はどうだった。どうせそこに受かったら行くのだろう。私立を受ける必要があるの」

「そうだな、最後の数学が問題だ。もう少しできると思っていたのだが失敗した。多分駄目だと思うが、もし受かっていたら大工町の家に電報が入ることになっている。発表は十九日だ。これから受験すると私立の発表もそれくらいになると思うから、それまでいさせてくれ。下宿代は、どれくらい払えばいいかな」

「部屋代は、一人でも二人でも同じで食事代だけ払ってくれればいい、と親父さんは言っていた。布団は貸布団屋から借りることにしよう」

藤山は、父親が医者で裕福な家庭に育ったため経済的には余裕がある。伸一は藤山の厚意に甘え、吉祥寺で二週間ほど過ごすことにした。

東北大学合格の通知が大工町の家に届いた。東京にいた伸一は、吉雄から電話でその知らせを受けた。その声は弾んでいる。反対していたはずの吉雄の声が受話器を通して明るく響いているのだ。合格を密かに願っていたに違いない。

伸一は、たとえ意見は違っても、肉親の情愛は断ち切れないものであることを改めて感じた。

知らせを受けた伸一は、快哉を叫びながら友人の下宿を飛び出し井の頭公園に出た。暖かい日差しの中で桜が咲き始めている。

（これで自分の思い描く世界へ第一歩を踏み出すことができる）

池に目を移した。水が潤んで見える。ボートに乗って

いる若い男女の姿が、幸福に満ちているようであった。
藤山と下宿の主人に礼を述べ伸一は、翌日浜松に帰った。大工町の家族に仙台での受験の顛末を話すとすぐに菅原の藤本建材店へ出向き礼を述べた。
「お世話になりましたが、何とか大学に合格しました。これも叔父さんが、ぼくをこの店で働かせてくれたおかげです。有難うございました」
「伸ちゃんが大学に入ったら、ある程度の援助をしてやると言ったことを忘れてはいないに。たくさんはできんが、一年間に二万五千円、四年間で十万円位なら貸してやれる。ある時払いの催促なしで利息はいらんに」
利右衛門は、かねてから伸一が大学に入ればある程度の資金援助をすると明言していた。昭和三十二年当時の十万円は、平成十九年の今日では、二百万円程度に相当する。その後、伸一は卒業後四年間でその金はすべて完済した。
「叔父さん有難うございます。助かります。当面の入学金や授業料が払えます」
伸一は、手持ちの貯金とこの一年分の二万五千円があれば何とかなると思った。

仙台へ発つ間際になって、吉雄が伸一を呼んで仏壇の前に座らせた。
「伸一、お前の望み通り合格してよかったな。前にも言ったように仕送りはできない。だが、ここに俺の軍人恩給の証書と印鑑がある。これをもって行け。その金は、お前が受け取るように手続きをしろ。年額一万円にも満たないが、少しは、学費の足しになるだろう」
と言って仏壇の引き出しから恩給証書と印鑑を取り出し伸一に渡した。
「いいよ、お父さん。家も苦しいのは分かっている。菅原の叔父さんも貸してくれたし、一年分の月謝を払う位の貯金はある」
「まあいい、持って行け。あとは何とかするから」
伸一は嬉しかった。わずかな金額であっても、父が大学に行くことをやっと認めてくれた証であると思った。
「有難う、お父さん。折角だからこの証書を借りて行く。多分お金は使わなくて済むと思うけれども万一必要だったら使わせて貰う。生活の目途がついたらこの証書は返すよ」
伸一は、吉雄から渡された証書を懐にして浜松を後にした。昭和三十二年の四月、桜が満開であった。

(二十六)

仙台に着いた伸一は、すぐ長町にある有朋寮に向かった。まず落ち着く先を確保しなければならない。
東北大学の寮は、どれも完全自治寮である。先輩の寮生が、新入寮生を選び入寮を許可する。選考基準は、困

窮度の高いほうから優先される。伸一の優先順位は高くすぐ入寮が決まった。
入寮した翌日から伸一は、アルバイトをした。東一番町でのチラシ配りやサンドイッチマン。ダイレクトメールの宛名書き。時には売血も行った。
教養課程の授業は三神峰の旧陸軍幼年学校の敷地内の校舎で行われた。校舎は、貧弱であったが、回りの環境は素晴らしい。
四月も半ばを過ぎると仙台にも遅い春が訪れる。三神峰の丘には、桜の木がたくさん植えられていて、その桜が四月二十日頃から一斉に花開く。
ところが、伸一にはそんな素晴らしい環境を満喫する余裕はない。アルバイトに追われてほとんど学校に行く時間が取れないのだ。授業は、欠席が続いた。
出席を取る教授の授業は友人に代返を頼む。試験には、ノートを友人から借り、それを書き写して臨んだ。
だが、外国語はそうは行かない。授業に出てコツコツと勉強しない限り取り残されてしまう。特に大学で始めて学ぶフランス語やドイツ語などは、生半可な勉強ではついていけない。
伸一は、英語の他に、フランス語、ドイツ語、ロシア語の履修届けを出した。多くの言葉を学ぶことによって外国語への苦手意識を克服しようとしたのである。
だが、それは幻想にしか過ぎなかった。授業にも出席せず、寮にいても勉強しないでついて行けるはずがない。
伸一は、まずドイツ語を、後期になってロシア語もあきらめなければならなかった。フランス語も履修を断念したかった。だが、最低二ヶ国の外国語の単位を取得しなければ、学部に進級することができない規則がある。そのためには、残った英語とフランス語はいずれも落とすわけには行かないのだ。
英語は、受験科目であり、読解力に主眼が置かれていたので、ほとんど授業に出なくても、何とか人並みの成績を残すことができた。ところが、フランス語は、そうは行かない。履修人員も少なく、たまに授業に出ると必ず当てられた。
「ほう、今日はまた珍しい人が出席していますね。木本君ここの箇所を訳してくれませんか」
購読の時間である。三ヶ月間の文法履修の後、後期から文学書を原文で読み始める。その最初のテキストが、モーパッサンの「初雪」であった。
伸一は授業に出れば当てられることが分かっていたので、訳本を机の下に隠し原文と照合していた。
「はい」
当てられた箇所を目で追い、訳本をわざとたどたどしく読んだ。
「ほう、名訳ですね。ところで、この単語の意味は、

それからこの箇所は、何故複合過去ではなく半過去を使っているのでしょう」

伸一は答に窮した。額に脂汗を流しながらしどろもどろの状態である。

「木本君は、語学の天才ですね。単語も文法も分かっていなくて、よくそれだけの名訳ができますね。きっと勘がいいのでしょう。でも、勘に頼るだけでは、正確な意味をとらえることはできません」

フランス語担任の助教授は、皮肉を込めて伸一の学習態度を諭したのである。

入学後、半年経つと、伸一の学生生活は経済的に安定してきた。東北大学進学指導学生会のアルバイトを定期的に行うようになったことが生活の安定に大きく寄与したのである。

進学指導学生会は、東北大学の学生たちで組織された大学および高校入試の模擬試験を実施する機関である。

大学入試の模擬試験は、主に東北地方の高等学校を対象として、受験を希望する生徒を学校ごとに募る。受験参加者には、統一した問題で試験を行い、その結果を各学校に知らせ、進路選択の参考に供していた。

一方、高校入試の模擬試験は、宮城県下の中学校を対象としたもので、県内の中学校に参加を呼びかけていた。

伸一は、算盤による計算能力を生かして、平均点、偏差値の計算、度数分布表の作成などを請負うことになったのである。彼にとっては、効率のよい仕事であった。

また、特別奨学生として奨学金も月額三千円支給されるようになり、授業料も減免制度の適用を受けて半額の年四千五百円で済むようになった。

寮費は、一ヶ月百円。大学当局に支払うだけで済む。食費は、総会を開いて寮生の総意で決める。朝食と夕食の二食で一日百円足らずだ。

寮は完全自治制で、寮生全員の選挙によって寮長を選出し、その選ばれた寮長が運営委員を決めるのである。

ちなみに、運営委員は寮長である委員長の他、副委員長一名、会計、炊事、庶務、文化一、文化二、風紀、生活、記録の各幹事が二名ずつ総計十八名で構成されていた。運営委員の任期は半年間である。

その他、懲罰委員会が、運営委員会とは別にあり寮生が不祥事を起こした場合、この懲罰委員会にかけられる仕組みになっていた。

伸一は、十月から寮の会計幹事となった。会計幹事は、委員長、副委員長、炊事幹事とともに三役と言われ、食費が免除される。三役は、それぞれ相当な時間を寮の運営のために費やす代償として食費免除の優遇措置が講じられていたのである。

月額百円の寮費。授業料の減免による平均月額三百七十五円の授業料。合計一ヶ月当たり四百七十五円大学当局に支払えば学籍を除去されることはない。食費は二食分無料で確保されている。奨学金は、月額三千円支給される。その上、叔父さんからの支援が月平均二千円強ある。

伸一は、進学指導会のアルバイトで月二千円程度稼げば、普通の学生と同程度の生活を送ることができるまでになった。

生活の基盤の安定してきた伸一は、相当程度の時間を勉学に費やすことができるようになった。社会科学への関心が強まり、学友とともにマルクスの「資本論」、レーニンの「帝国主義論」を初めシュンペーターの「資本主義・社会主義・民主主義」などの著作を読んで夜遅くまで議論をした。

ソ連が打ち上げた人口衛星スプートニックは、学生たちに大きな刺激を与え、社会主義の優位性を強調する有力な論拠となっていた。

(二十七)

雪雲が重く垂れ込める日が多くなった。東北とはいえ太平洋岸の仙台は、豪雪に見舞われ雪に閉ざされることはまずない。だが、寒々とした雲が上空を覆う日の街は、ひっそりと息を凝らしているように見える。

滅多に雪を見ることのなかった伸一は、天空から舞い落ちる風花が不思議な世界の贈り物のような気がした。その花びらを両手で受け、冷たい感触を確かめてみた。手のひらのなかで消えて行くその花は、伸一にみちのくの地に生きる思いを改めて感じさせてくれた。

伸一は、冬休み期間中仙台にいたかった。だが、浜松の実家も気になり帰省することにした。

昭和三十三年も正月を過ぎていた。

冬の浜松は、仙台に比べ気温は高く晴れた日が多い。しかし、秋葉颪の空風が吹く日は、思ったよりずっと寒く感じられる。

伸一のいないわずか一年足らずの間に、浜松は大きく変貌していた。市街地が整備され、町村合併により市域も拡大している。第十二回国民体育大会が開催され、高度経済成長の訪れを予感させる活気に溢れていた。

その発展ぶりとは裏腹に、大工町の家はひどく痛んでいた。雨漏りが激しく、天井は雨滴の跡で汚れ、床は腐りかけて畳がところどころ波打っている。

「この家も一年とは持たないだろう。隣の洋品店からも立ち退きを迫られている。何処か安い借家はないかと探しているところだ」

焦燥した顔で吉雄は、伸一に言った。

木本家から明るさが消え、重苦しい空気が家の中を流れている。カッティングの針製造の仕事は、ほんの片手間程度で、得意先も三、四軒しか残っていない。

「いよいよ廃業しなければならない。強司を高等学校に入れるかどうか迷っているところだ。勉強はよくできるからどこの学校でも入れると先生は言っていたそうだ。だが、大学まではとても行かせることはできない。高等学校を卒業したら働いて貰いたいのだ。であれば浜商がいいと思う。強司もそれでいいな」

吉雄は、さき、伸一、強司の前で言った。

強司は、伸一ほど大学に行くことを固執していなかった。窮迫した家族と共に過ごしている強司には、とても大学に行きたいなどと言い出せなかったのだ。高等学校を出たら一日も早く家計の手助けをしなければならないと考えていた。

伸一も、少しでも家計の助けになればと思って吉雄から預かった恩給証書を返すことにした。

「お父さん。ぼくは何とか仙台で学業を続けていける目途が立った。だから、恩給証書は返すよ。この冬休みは家にいて、お父さんの知っている朝倉土木で働くことにする。親方の朝倉さんに頼み込んだ。力と体力だけは、その辺りの職人には負けない自信があるからね」

朝倉土木は、藤本建材店の取引先でもあり、吉雄が大工の杉本組にいた頃の取引先でもあった。

二月半ばから三月初めにかけての寒い時期に伸一は、脚半を巻き、半纏を纏い、鉢巻をして朝倉土木の工事現場で働いた。モッコを担ぐには、コツがいる。伸一は、先棒を担いで腰がふらつき本職の土工からの罵声をしばしば浴びた。

建築物の基礎工事には、穴を掘ってその穴に拳大の石を敷き詰め突き固める。その時には、よいとまけの唄を歌って全員の呼吸を合わせるのである。卑猥な内容の唄の中に哀歓が込められていて、その唄を歌うと不思議と労働の辛さを忘れさせてくれる。

朝倉親方は、伸一を一人前の土工並みに扱い、一人だけで仕事をさせることもあった。この朝倉土木での労働は、伸一のその後の人生の豊かな糧となったのである。

強司は、県立浜松商業高等学校に合格した。

伸一は、自分のことのように嬉しかった。背もすでに伸一より高く、精神的にも成長している。初めて弟が頼もしく感じられ輝いて見えた。

三月末、伸一は、仙台に戻った。

寮では、二月に独立したアラブ連合共和国が、今後の中東情勢にどのような変化をもたらすか。また、アジア、アフリカなどの植民地の独立にどのような影響を及ぼすかについての熱い議論が戦わされていた。

その一方で、寮生の口ずさむフランク永井の大ヒット曲「有楽町で逢いましょう」の歌声が風呂場や食堂など寮内の各所から聞こえていた。

（つづく）

薬草園「天城杏仁の里」（前）

堀内永代

（一）

「オーウ　涼しい…」

駕籠を降りて鳥居家の表玄関前に立った伊豆韮山の代官江川太郎左衛門は、思わず声に出して長身の襟元に涼風を送り込んだ。

鳥居家の屋敷は二四七〇坪。自然を生かした邸内には、欅や赤樫の大木が鬱蒼と繁り、木陰を吹き抜ける風が汗ばんだ身体にひやりと心地よかった。

太郎左衛門は、表門からずいーと邸内を見渡し、

「ウーム、関が原合戦の折りに伏見城を死守して、神君家康公から賞賛された鳥居彦右衛門殿につながる名家、立派なお屋敷だ」

と感嘆の声を上げた。

江川太郎左衛門は天保八年（1837）七月二十九日に、江戸城西の丸の目付鳥居耀蔵から、

「久しくお目にかからず　ご無沙汰まことに申し訳なく御座候。ついては過ぎし日の事件に付き御礼方々粗餐を差し上げたく、八月二日と三日はいずれも在宅しおり候。何とぞご来駕賜り度御待ち申し上げ候」

と丁重な招待状を受け取り、今日の鳥居邸訪問となったのである。

この日はことのほか暑さが厳しく、昼過ぎに江戸本所の韮山代官江戸役所を出発して、下谷の鳥居家に着いたのは昼八つ（午後二時頃）、真夏の太陽が容赦なく照りつけていた。

鳥居家の玄関の前に立った江川太郎左衛門は、奥に向かって、

「お頼み申す…」

と案内を乞うた。その声に応じて、五十年配の侍が小走りに玄関に姿を現し、

「これはこれは江川様、お暑いところをよくお越し下さ

いました。私は鳥居家用人の跡部吉蔵でございます。主人鳥居がお待ち申しております。ささ、こちらへどうぞ…」

と挨拶もそこそこに、先に立って太郎左衛門を奥に案内した。

庭園に面した奥書院に通された太郎左衛門は、出迎えた耀蔵に、

「本日はご丁重なお招きをいただき恐縮に存じます」

と挨拶の言葉を述べた。すると耀蔵は、

「いえいえ、こちらこそ、この度は重ね重ね大変お世話になりました。この恩義は、鳥居生涯忘れはいたしません」

威儀を正し、深々と頭を下げて太郎左衛門に感謝の意を表わした。

「とんでもございません。いずれのことも職務でいたしたことで、鳥居殿からそのように丁重なご挨拶をいただきましてかえって恐縮に存じます」

そもそも江川家は、千年続いた伊豆韮山の世襲代官で、支配地の石高は八万石、太郎左衛門はその三十六代に当っており、この時三十七歳。

江川太郎左衛門は、西洋文化の長所を認めて意欲的に洋学を学び、わが国の海防の重要性を主張する進歩主義者であった。

これに対する目付の鳥居耀蔵は、江川太郎左衛門より五つ年上で、幕府の学問所「昌平黌」大学頭林述斎の次男。儒学を修めて頭脳明晰、その才能は若い頃から世に知られた秀才であった。

そして二十五歳の時に、旗本の中でも名家の一つである鳥居家二五〇〇石の養子となった。

さて、先ほど鳥居耀蔵は、挨拶の中で、(重ね重ねお世話になりました)とお礼を言ったが、鳥居家は、江川太郎左衛門に二つの借りがあるのだった。

その一つは、鳥居家の知行地の一つが伊豆太平柿木村にあったが、先般の天保の飢饉(1833—1836)で、二十人の餓死者が出てしまい、それを江川太郎左衛門が救済したのである。

人口二百七十余人の大平柿木村で、二十人の餓死者は多過ぎた。この不祥事が老中に知れたら、鳥居耀蔵の責任はまぬがれない。幸い大平柿木村は旧友江川太郎左衛門の韮山から近い。窮地に立った耀蔵は、太郎左衛門に救援を頼んだ。

太郎左衛門は直ちに大平柿木村を訪れて実情を調査し、病人には薬を調合して飲ませ、名主には食料購入費用として小判十両余を与えるなどして、危急を救ったのだった。

二つ目は、鳥居耀蔵の実父の林述斎が書いた借用証文の盗難事件である。林述斎がこともあろうに、大阪で起きた「大塩平八郎の乱」の首謀者大塩平八郎から多額の借金をしていた。その借用証文と手紙が箱根峠の登り口で盗まれたのである。

このことが公表されれば、林述斎は大塩と共に反逆罪に問われかねない。困った耀蔵と林述斎は、これも箱根に近い韮山の江川太郎左衛門に助けを求め、借用証文と手紙を無事回収することができたのであった。

そうしたお礼の言葉がすむと耀蔵は、

「そういえば、昔若い頃、私が伊豆の知行地を視察した時に江川殿をお誘いし、法泉寺の枝垂れ桜の下で大いに花見の宴を催したことが懐かしく思い出されますな」

と遠い昔を思い、眼をしばたいた。

「そうですな、あれは今から十五年前のこと、私が二十一の時でした」

「私も鳥居家の家督を継いで間もない頃ですから二十六歳、薬草園『天城杏仁の里』を造園した頃でした」

「あの日、花見を終えた後、その薬草園を見学してあれこれ薬草を摘みました」

「その時、ほら、あれ、あの薬…　そうです思い出しました。ほらあの『ヨヒン…』なんとかいった妙薬を煎じてね…」

「あ、あの惚れ薬、韮山の温泉薬草園で栽培していたアツフリカ原産の南蛮薬『ヨヒンビン』のことですね。あの惚れ薬を用いますと、妙齢なご婦人でも、どんな堅物の石部金吉でも官能に悶え、メロメロになるという代物でしてね。残念ながら、あれは熱帯植物のために栽培方法が難しくて、今はまぼろしの媚薬となりました。いろいろな方からご要望がありましたが今は暖かい伊豆でも採れなくなりました」

「そう、そのヨヒンビン…　羽目を外して遊びましたが、あの薬が幻の媚薬になったとは残念至極…」

「ハハハ…　ところで鳥居殿にお尋ねしますが、伊豆のご領地大平柿木村の薬草園『天城杏仁の里』では、現在どのような薬草を栽培しておりますか」

「あの薬草園では、しゃくなげ、天城つつじ、山百合、万年青(おもと)、福寿草(とりかぶと)、葛根、杏仁、芍薬、桔梗、菖蒲、竜胆(りんどう)、牡丹、紫蘇(しそ)、枸杞(くこ)、甘茶、欝金(うこん)などの薬草を栽培しております」

「さすが鳥居殿でございます。いい薬草を栽培されておりますね。その中に『三島柴胡(サイコ)』はございませんか」

「ミシマサイコ？　それはどんな薬草ですか」

「サイコ(柴胡)は解熱や鎮痛の特効薬で、特に三島で取れるサイコが良質であるところから『三島サイコ』と呼ばれています。代官所の温泉薬草園でも僅かに栽培していますが、最近三島サイコが評判になったために乱獲され、絶滅寸前です。鳥居殿の薬草園でも、ぜひ保護を

兼ねて栽培していただきたいと思いますが、如何なものでしょうか」

「それは良いことを教えていただきました。我が薬草園『天城杏仁の里』の有力薬草の一つになるように栽培してみましょう」

「お願いいたします。ところで鳥居殿、『淫羊藿（かく）』なる薬草をご存知ですか」

「インヨウカク？　いや知りません。ナニに効く薬草ですか」

「そうですな…　ナニに効くんです」

「ナニにですか…？　ことによるとアレですか」

「そうです、アレです。ほらあのヨヒンビンと同じようなものですよ。むかし中国四川省に、一日に百回も交合する精力絶倫の山羊がいましてね、いったい何を食べているのかと調べましたところ、その山羊は『いかり草』を食べていたのです。それでこのいかり草を『淫羊かく』と呼ぶようになりました。高価ですから、誰でもというわけには参りませんが、お世継ぎに恵まれない大名家では、愛用されている方もおられるようで…」

「では、ご側室やお子様の多い上様もご愛用で…」

「滅多なことは申し上げられません。お察しくだされ、アハハハ…」

「ところで江川殿、近頃の旗本は、質実剛健の気風を失い、華美を好む輩が多くなりました。どうやら徳川幕府も再構築しなければならない時が来たようです」

「左様、だいぶタガがゆるんできました。鳥居殿は儒学を学ぶ立場から、仁義を第一とした政治を進めるおつもりで…」

「いかにも、儒学は官学でござれば、これを守っていかねばなりません」

「それはそれとして、この地球には、わが国の何十倍、何百倍の広い世界がありますので、儒学は儒学として学び、さらに洋学も学んで大いに知識を世界に求めることも必要ではないかと思います」

二人の国を思う気持は同じであったが、ただ、その立場上、国を守ろうとする方法が違っていた。

太郎左衛門は開国交易で国を守り、耀蔵は鎖国攘夷で国を守ろうとしていた。

二人は回顧談と時局談議に花が咲き、時の過ぎるのを忘れた。

（二）

その年の十一月末、伊豆韮山代官江川太郎左衛門は、急遽予定を変更し、本所の江戸役所を十日早く出立して伊豆韮山に向かった。

その途中、真鶴、湯河原、熱海を過ぎ、峻険な熱海峠を越えて軽井沢を下り、ようやく平坦な丹那盆地に入った。韮山まであと二里半（十キロ）である。韮山代官所

が近くなってほっとした馬上の太郎左衛門は、

「えいくそ…目付の奸物！　今に見ておれ…」

と鳥居耀蔵の露骨な洋学弾圧に、太郎左衛門は激しく対抗心を燃え上がらせた。

日頃、誰にでも気さくに声をかける太郎左衛門が、江戸から韮山に帰る二日間の道中、殆んど口をきかず、僅かに食事に注文をつけたのみであった。

その沈黙は韮山に着くまで続き、江川邸の玄関で出迎えたやす夫人に、大きな目玉をぎょろりと剝いてひと言、

「いま帰った」

と言ったのみで、随行の家臣へのねぎらいの言葉もなく、そのまま書院の自室に入ってしまった。

韮山代官所の留守を預かっていた用人前田良己は、所管事項の報告をするために書院の前まで来たが、太郎左衛門ただならぬ様子に遠慮して入室をためらっていた。

さらに家族や副代官斉藤弥九郎、近習の紫桃数馬など身近に仕える家臣たちも、太郎左衛門の機嫌を損じないように大変な気遣いを見せていた。

太郎左衛門は今年三十八歳。二十歳の時に神道無念流の免許皆伝を許された偉丈夫で、豪放磊落、家族や家臣の前で不安げな様子を見せることは決してなかった。

しかしここ数週間はいつになく苛立ち、太郎左衛門の人間臭くて弱い一面をさらけ出していた。

独り悩む太郎左衛門の顔は、無精ひげが伸び、睡眠不足で血走った大きな目玉がぎょろりと光り、凄みを帯びていた。

そんな状態のため、日頃太郎左衛門が力を入れていた温泉薬草園も、すっかり家臣任せになっていた。それでもやはり薬草園が気になるのか、時々責任者を呼んで、

「三島サイコの品種改良はどうなっているか」

と尋ねていた。

それから数日後、太郎左衛門は用人前田良己を自室に呼んで、自らの気分転換を兼ねて山猟を行なうことを命じた。

「前田、明日、実弾射撃の教練を兼ねて山猟を行なう。家臣数名と塾生を連れて行く。明け六ツ半（午前八時）には出発したい。手配を頼む…」

「かしこまりました。して得物と日数は…」

「得物は、先般長崎から買入れた最新式の元込め雷管式ドントル銃と銃剣だけでよい。山猟はドントル銃の威力を試すことと、農兵隊の洋式教練のためである。山猟は明日一日だけ。暮七ツ（午後五時）には代官所に帰着する。食糧は握り飯と試作した携行食の乾パンだ。飲み水と実弾を十分に用意せよ…」

「承知いたしました」

用人前田が退出すると、太郎左衛門は再び机に向かって手紙を書き始めたが、思うような文章が浮かばなかった。書いては破り、破っては書き、やがてそれも諦め、

「フー…」

と大きな溜息を吐いて寝室に入った。

翌朝六ツ半（午前八時）、寒気はことのほか厳しかったが、塾生十名は白い息を吐きながら、元気に正門脇の「枡形」（練兵場）に勢揃いしていた。

枡形は五万坪の代官屋敷の一角にある。

塾生の服装は、黒いラシャ地の韮山帽に黒色小倉織の野戦服、足元は白い脚絆で固め、背嚢には食糧と飲み水、スコップ・麻布・ロープなどの野戦用品を入れ、一人五十発宛ての小銃弾を詰めた皮ケースをベルトに通して腰に下げていた。

獲物を追い出す勢子は韮山金谷村の江川家農兵隊二十四人が、それぞれ猟犬を連れて待機している。昂奮した猟犬は、大きな鳴き声をあげ、そのやかましさはひとどおりではなかった。

定刻の少し前、太郎左衛門は塾生と同じ野戦服の上に、金糸で縫い取りした黒ラシャの陣羽織を羽織り、副代官斉藤弥九郎以下屈強な家臣五名を従えて枡形に現れた。

斉藤弥九郎は、桃井春蔵、千葉周作と共に幕末三剣豪と謳われた神道無念流の達人で、撃剣館の弟子、太郎左衛門の後見役を務めていた。弥九郎は、砲術にも熟練し、今日も塾生の教官として参加した。

塾生は、いずれも太郎左衛門の厳しい訓練に耐え抜いた旗本の子弟と有力譜代大名の若い家臣たちである。

太郎左衛門は、閲兵台の上に立った。一列横隊に並んだ塾生の右端に立った分隊長が号令を掛けた。

「分隊、キオッケー」

「代官殿ニタイシテ、カシラーナカ」

「ナオレ…」

この号令は、太郎左衛門がオランダ陸軍の号令を翻訳して命名したものである。

分隊長の号令のもと一糸乱れぬ塾生たちの栄誉礼を受けた後、太郎左衛門は実弾射撃の心得を訓示した。

「本日の実弾射撃は、最新の元込め雷管式ドンドル銃を使って行なう。ドンドル銃の性能は、今までの火縄銃より格段と優れている。命中率が高く、威力もある。よって十分注意をするようにされたい。すでに諸君は、代官所の射撃場で実射しているであろうが、御猟場は険しい山中であり、鹿や猪を追って駆け回れば疲労が溜まり、小銃の命中率も落ちてくる。時には、人を獲物と間違えて撃ってしまうこともある。ゆめゆめ注意を怠るでない。現地での指揮は斉藤弥九郎先生にお願いしてある。万事、斉藤先生のご指示に従い、事故のないようにされたい。それでは一同、出発！」

今日の武器はドンドル銃と腰に下げた銃剣だけである。太郎左衛門は、昨年の暮、ドンドル銃を一挺五両（約五十万円）で二十四挺、全部で百二十両を投じて、オランダ商人から長崎経由で購入していた。

総勢三十余名、分隊長を先頭に代官所を出発、標高八百メートルの玄岳を目指して、

「ハップン　スリーフォー…」

「ハップン　スリーフォー…」

と掛け声勇ましく行軍を開始した。

目指す猟場は、玄岳山麓の江川家私有林とそれに続く天領林。いずれも千古斧を知らぬ深山で、獲物の宝庫である。

太郎左衛門以下全員が到着したのは、玄岳の中腹にある行者洞と呼ばれる洞穴前の台地である。

この台地は、千三百年の昔、役行者が政争に敗れて奈良から伊豆に流され、この洞穴で修業したといわれている。洞穴の前に百坪ほどの平坦地があり、富士山と駿河湾の両方が眺望できる絶景地である。

隊長斉藤弥九郎は、全員をこの台地に整列させ、

「諸君、恒例によりこの行者洞を本陣とする。用人の前田殿に待機していただくので、事故が発生した時は直ちに前田殿に連絡されたい。それでは第一班から戦闘開始」

と号令した。塾生は二人が一組となり、これを勢子四人がサポートして、それぞれ持ち場に向かった。

太郎左衛門は、弥九郎と組んで行者洞の近くの獣道に陣取った。

やがて勢子の打ち鳴らす鉦の音と、吠え立てる猟犬の鳴き声に追い立てられて、猪や鹿が木々の間から飛び出してきた。

あちこちの山中から銃声が轟く。その時、

「ドドド…」

と地響きがして、太郎左衛門の近くの叢から、小牛ほどの大猪が、もの凄い勢いで飛び出してきた。

「殿さま、危ない」

と近習紫桃数馬の悲鳴が上がった。

突進してきた猪を寸でのところで躱した太郎左衛門は、すぐさま銃を構え直して、再び獲物の出てくるのを待ち構えた。

しばし静寂が流れた。

太郎左衛門は、小銃を構えながら、

「なぜだ…　なにが悪いのだ」

と突然あの目付のことが頭の中をよぎった。

一瞬集中力が途切れ、銃口が少し下がった。その時、

「殿、出ました」

という弥九郎の叫び声で、

（ハッ…）

と我に返った太郎左衛門は、弥九郎の指差す方向の、その先の黒影に銃口を向けて引金を引いた。
「ダーン…」
銃声が山々にこだました。と同時に、
「ワーッ…」
と着弾点の方向から、人の悲鳴が上がった。
「しまった… しくじったか」
太郎左衛門は、銃を構えたまま、顔面を引きつらせて呆然と立ち竦んだ。
「紫桃、見に行け… 殿、いかがなされましたか…」
弥九郎は、太郎左衛門に駆け寄った。
「斉藤先生、面目ない」
「なんのなんの… 殿、気を確かにお持ち下さい」
「いや、なんとも情けないオレだ… 今朝、塾生たちに十分注意するように訓示しておきながら、オレが間違いを犯してしまった。緊張感が一瞬途切れ、あのことが頭をよぎった、その瞬間獲物が飛び出した。オレは人と獲物を間違えてしまった… すまぬ」
「今、誰が撃たれたか紫桃が見に行きました。仔細がすぐ判ります」
弥九郎の励ましにも拘わらず、太郎左衛門は陣羽織を脱いでその場にへたり込んでしまった。
弥九郎も悲鳴の聞こえた方へ走った。
やがて血だらけになった農兵隊の渡辺が、数馬の肩に背負われるようにしてこちらにやってきた。
「おう、渡辺… 大丈夫か」
「お殿様、申し訳ありません。オレがドヂをしたばっかりに、お殿様にご心配をお掛けしました。日頃、お殿様から、勢子は身体を低くして、獲物を追い立てるのだ。背を高くしていると、獲物と間違われて標的になる。いつもそのように仰せられておりましたが、犬の後を追うことに夢中になって、勢子の心得を忘れてしまいました。傷はたいしたことはありません。大丈夫です」
「いやいや、済まぬことをした。オレとしたことが、つい集中力を欠いてしまった。渡辺、許してくれ」
「渡辺… 殿もこうおしゃっている。これは事故ではない。不可抗力だ。渡辺こらえてくれよ」
「渡辺、許せ」
「お殿様、斉藤先生… お二方に頭を下げられては、オレたちはもったいなくて、明日からお屋敷にあがれません。斉藤先生、オレは大丈夫です。すぐ持ち場に戻ります」
「いや、渡辺、今日はここで休んでおれ」
「…」
「殿、渡辺は右肩を弾がかすめただけのようです。ご懸念には及びません。渡辺は一人で歩けるようですから、この件はこれで終わりにいたしましょう」
「かたじけない」

「渡辺、紫桃、それでよいな」
「かしこまりました」
渡辺と紫桃は即座に了承した。
それから一刻ほど激しい銃声が、山々にこだました。
やがて山猟も終り、暮八ツ（午後三時）頃、
「ブォー ブォー」
と引上げの法螺貝が山谷に響き渡った。
この日は、最新式のドントル銃が威力を発揮し、猪が二頭、鹿が三頭、そのほか兎などが多数獲れ、大いに実弾射撃の効果を挙げることができた。塾生たちもドンドル銃の威力を堪能し、
「エイエイオー!」
「エイエイオー!」
と一斉に勝ち鬨を挙げた。
塾生の勝ち鬨の声を聞いた太郎左衛門は、久し振りに洋学弾圧の不安を払拭できたと思ったが、その夜、自室に戻った太郎左衛門は、今日の出来事を反芻した。
「今日のオレのざまは何だ。渡辺は自分が勢子のすべきことをしなかったからだと弁解したが、あれは斉藤先生が、塾生の手前、そのように渡辺に言い含めたに違いない…」
太郎左衛門の苦しみは倍加し、火の気のない寒々とした書院で一人悶々と悩みに悩んだ。
その翌日、江戸から一通の飛脚便が太郎左衛門のところに届いた。それは勘定吟味役川路聖謨からの密書であった。
密書には、幕府の目付・鳥居耀蔵の動静が詳しく書いてあった。
「目付の奴らめ、オレのところにも探索の手をのばすのか。昨日のドントル銃を用いた仮想実戦訓練が目付の耳へでも入れば、オレの命取りにもなりかねない。危ない、あぶない… やがて洋学者サークル『尚歯会』のメンバーにも、鳥居殿の配下の手が及ぶかも知れない。なんとか対策を立てなければ…」
太郎左衛門は、不安が一瞬、頭の中をよぎった。
尚歯会の「歯」とは年齢のことで、中国思想では敬老のことを「尚歯」という。
尚歯会とは、資金量と政治力のない小藩の天保飢饉の対策を検討する目的で出来た勉強会で、太郎左衛門の洋学の師である田原藩の家老渡辺崋山も途中から尚歯会に参加した。
尚歯会は次第に国防問題が論ぜられるようになり、それに蘭学に興味を持つ者が参加するようになって、何時の間にか崋山が中心となっていた。
尚歯会は、洋学を学んで得た新しい知識や情報を交換する場であって、決して政治的な集団ではなかった。
しかし、目付の鳥居耀蔵は、密偵を使って洋学の勉強会「尚歯会」のメンバーを調べ、幕府勘定吟味役川路聖

謨、寄合松下内記、使番松平伊勢守、韮山代官江川太郎左衛門、幕府儒官古賀侗庵、田原藩家老渡辺崋山、蘭方医高野長英、小関三英などの名を老中首座水野忠邦に報告した。

忠邦はメンバーの中に、江川と川路の名があるのに驚いた。洋学を学ぶ者は、得てして新しい知識を鼓舞するあまり、幕府が唯一認めた官学・儒学を軽んずる傾向があり、日頃からこれを苦々しく思っていた。

世間では、儒家の出である鳥居耀蔵は、水野忠邦以上に洋学者を嫌っていると見ていた。

(二)

目付になる前の鳥居耀蔵は、家業である学問所において身に付けた学問を、政治の場で生かしたいという気持が強かった。そのために、同僚と無駄な世間話で時間を潰す毎日に堪え切れず、二十八歳から九年間勤めた江戸城本丸の「中奥番」を辞任し、働き甲斐のある職場につくチャンスを狙っていた。

当時の旗本・御家人は、少ないポストを狙って醜い猟官運動が盛んであったので、熾烈な出世競争の中で実力を発揮できる役職は、そう簡単には見つからなかった。

徳川幕府の本拠地江戸城大奥で、たった一人の男性十一代将軍徳川家斉は、頑健な肉体と桁外れに旺盛な精力を持ち、歴代将軍の中でもダントツの贅沢と色好みであった。家斉は六十九歳で死ぬまでに、妻妾三十余人、それから生れた子は五十七人を数えた(うち三十二人は五歳までに死亡)。

家斉と妻妾、その子女、御殿女中が大奥で乱費した金銀は、幕府の台所を崩壊寸前にまで追い込んだ。このままでは徳川政権は危ない。どうしても享保、寛政を上回る大改革が必要だ。幕閣の中からそんな声が出始めた時に登場したのが、出世城といわれた遠州浜松城の城主水野越前守忠邦であった。

本丸老中の水野忠邦は、幕府の財政改革を実行するためには、自分が信頼でき、かつ、自分の政策を的確に実行してくれる部下が必要だった。

武芸に秀でたクールなインテリー鳥居耀蔵は、まさにピッタリの逸材だ。忠邦は、耀蔵と二人三脚で「天保の大改革」をやって行こうと決意し、耀蔵を私邸に呼んだ。

水野忠邦に呼ばれ、ピンチとなった幕府財政や腐敗した行政機構の現状、改革ビジョン、改革断行の決意などを聞かされた耀蔵は、

「越前様の国を思うお気持がよく解りました… 今の世の中は、武士が堕落し、商人が物資を独占して巨額の利益を上げることに血眼となっています。越前様の改革への固いご決意に敬服いたします。私でお役に立つならば、幕府のためにわが一身を捧げます」

と義を重んずる儒家出身の耀蔵は、忠邦に協力を約束した。

こんな経緯があって、退屈な江戸城中奥番を辞任して三年余無役でいた耀蔵が、水野忠邦の引きで、西の丸目付に就任することができたのであった。天保七年九月、耀蔵四十一歳、スロー出世である。

また耀蔵は、冷静に物事を分析して、人が二の足を踏むような答を平然と出すため、或る日忠邦が、

「鳥居殿、君は恥ずかしいと思ったことはないのか」

と耀蔵に尋ねた。

「わたしには、恥ずかしい心がありません。恥じる心を母の胎内に置いてきました…」

と苦笑いしながら耀蔵は答えた。

耀蔵が西の丸目付になった翌天保八年二月、すでに述べたように、陽明学者の大阪町奉行所寄力大塩平八郎が反乱を起こした。

この当時、大阪商人は町奉行所役人と結託して米麦を買い占め、私利私欲を図った。そのため米価は高騰、餓死者が出るなど庶民は大いに苦しんだ。大塩はその対策を何度も上申したが、幕府は救済の手を打たなかった。

(こんな幕府は駄目だ)

と怒って決起したのが「大塩平八郎の乱」である。

反乱は大罪であるがその原因は町奉行所にある。その上、大塩平八郎は民衆から、『大塩様』『世直し大明神様』などと崇拝、盲信されているので、幕府評定所の役人は、大塩断罪の判決文に苦慮していた。

そうした時、忠邦の指示で大塩罪状書作成の仕事が、目付の鳥居耀蔵に廻ってきた。耀蔵は、大学頭林述斎の次男で学識があるから、大塩の罪状を上手にまとめるだろうということであった。

耀蔵は、水野忠邦の思惑どおりの罪状書を作り上げて幕閣で評価を得た。

大塩の事件が一段落したある日、耀蔵は忠邦の私邸に呼ばれて礼を言われた。

「鳥居殿、貴殿のお力で大塩の件は片付いた。ご苦労でした」

「お褒めのお言葉をいただき、恐縮いたします…」

幕閣の実力者から礼を言われれば、耀蔵でなくても悪い気はしない。

(よし、オレはこの人のために尽くそう… それが将軍家のためにもなる)

耀蔵の体内に、突き上げるような感激が走った。

つづく

青の漂流（一）

宅見勝弘

序　碧い眼

一七九二年十月（寛永四年九月）、ロシア船エカチェリーナ号が根室に到着した。

四十二名の乗員の中に、ニコライという青年が船員として乗船していた。

来航の目的は、大黒屋光太夫ら三人の漂流民を日本に引き渡すためであった。光太夫が女帝エカチェリーナ二世に拝謁して、帰国の勅許を得たものである。

ニコライはアイヌとの交易の船での経験があり、アイヌの言葉が少し分かるので、船長のラクスマンから選ばれたのであった。

江戸幕府は一五〇年の鎖国政策を布いており、外国から帰ったものは死罪にするということで、容易に引き取らなかった。

幕府の回答を十ケ月間待たされて、根室に碇泊しており、その間に日本人漂流民とロシア人の二人が栄養不足により病死した。

エカチェリーナ号は厚岸経由で箱館に着き、さらに松前に入港した。ラクスマンが光太夫を松前で幕府の役人に引き渡した。

ロシア船は松前を出港し、箱館に寄港したが、その後すぐに事件が興った。

今回の来訪は、日本との交易も目的として、商人も乗船していた。しかし、長崎の入船許可を与えられただけで、鎖国中の日本との交易が実現せず、商人達の不満は募っていた。

ニコライはアイヌや日本を擁護したので、商人達の不満を一身に受けることになり、深く恨まれた。

ニコライは、商人達から喧嘩を仕掛けられ、激しく殴打された後、船から海中に放棄された。

ニコライは流木に捕まったまま、漂流した。数日間、

漂流した後にエリモン（襟裳）に漂着した。

襟裳から海岸沿いに、箱館に向って、彷徨した。箱館に着けば何とか生きていけそうに感じていた。

数日かけて、シラウオイ（白老）に着いたところで、疲労のため力尽きた。

白老には、アイヌの三大コタン（集落）の一つが有り、四百名のアイヌが生活していた。ニコライはアイヌの人達に助けられた。

一緒に生活する間にコタンのアイヌ達からも仲間として認められた。

ニコライは元々、ロシアに親類も無く、自分を殺そうとしたロシア人の居る町に戻る気にはならなかった。

ニコライはアイヌ名で「シウニンシク」と呼ばれるようになった。アイヌ語で碧眼という意味である。

アイヌはロシアを「赤い国」、ロシア人を「赤い人」と呼んでいた。ニコライは「赤い国の碧い眼」と呼ばれて、アイヌの生活に溶け込んでいった。

年月を経て、献身的に世話をしていたアイヌの娘と親しくなって、その娘と結婚した。

ニコライとアイヌの娘の間に八人の子供にも恵まれた。子供達は全員が黒い眼をしていた。

ニコライは自分と同じ碧眼の子供が生れることを期待していた。遺伝の理由で、碧眼の子供が生れるのは不可能だったが、ニコライには知る筈が無かったのである。

やがて、子供達も成人し、結婚して、何人も孫が生れた。ニコライは孫達に碧眼の子が生れることを期待していたが、全員が黒眼であった。

茶色かった髪も総白髪になり、胸まで伸びた顎鬚も真っ白になり、風貌も他のアイヌと変わらなかった。しかし、碧眼だけが他のアイヌとは異なっていた。

ニコライは村でも一番の長老になった。この地に漂着した時は、二十代半ばを過ぎた歳であったが、七十年以上が過ぎた。

アイヌでは年齢を数えることや誕生日を祝う習慣が無いが、ニコライ自身は百歳を迎えることを覚えていた。

その百歳の年に、曾孫も誕生するようになった。ニコライの孫同士が結婚し、その間に女の子が産まれたのである。

その子はニコライと全く同じ透き通った碧い眼をしていた。

ニコライは、碧い眼を見て、その子が自分と同じような異郷の地で漂流する運命ではないかという予感がした。

女の子の碧い眼を見届けると、ニコライは息を引き取った。

ニコライの予感は、その後、的中することになる。

碧い眼が原因で、彼女は殺人の現場に巻き込まれることになる。その後も、碧い眼が生死を分ける運命を決めるのであった。

第一章　五稜郭の残兵

一八六八年（慶應四年）七月、蝦夷地シラウオイ（白老）のコタン（集落）で事件は興った。

慶應四年が明治元年になるのが、一八六九年九月であるから、その二ケ月前である。

アイヌ人のサクサイヌは猟をしながら、碧い眼の自分の娘を思い続けていた。

娘は一年前に産まれたが、サクサイヌにとって初めての子供であった。

アイヌでは子供の個性が現われてから、性格に合う名前を付ける風習のため、娘には名前が未だ無い。

（綺麗な瞳のために、不幸な運命にならなければ良いが）

娘の碧い眼の印象が強いため、サクサイヌの頭から離れなかった。

アイヌの伝承では、子供が美しかったりすると、かえって、邪魔な神に命を狙われるとされている。

そのため、子供をあえて汚い物の様に「糞の塊」と呼んでいる程である。

（この子は祖父の様に長生きして欲しい）

サクサイヌの祖父シウニンシク「赤い国の碧い眼」は、長生きした。アイヌでは年齢を数えることは無いが、百歳まで生きたとされる。

シウニンシクは妻のノンノにとっても共通の祖父であり、夫婦は又従兄妹の関係になる。

アイヌでは、子供の長寿や健康を願うとかえって叶わなくなる、という伝承がある。サクサイヌは娘の長寿を考えないように努めていたが、碧い眼が気になり願わずにはいられなかった。

アイヌの伝承通り、子供の不運を招かないか、気に病んでいたのであった。

サクサイヌのもう一つの別の心配事があった。

（和人達が争っているが、アイヌが巻き込まれなければよいが）

アイヌは徹底して争いごとを避ける文化を持つ民族である。アイヌの人にとって、和人が仲間同士で殺し合いをすることが、理解できなかった。

蘆には和人達が住んでいるが、アイヌ達にも危険な地兆候を感じていた。

サクサイヌは白老川に沿って下りていくと、人が倒れているのを見つけた。

（あれは和人ではないか）

サクサイヌは駆け寄って、倒れていた和人を抱き起こして、和人の体を確認した。和人の胸から腹にかけて、無数の切傷があり、傷口が化膿していた。

和人が、少しだけ意識を取り戻したようで、薄く目を開けた。

サクサイヌは和人に蘆の方向を指して、手振りで蘆から来たのかと尋ねた。

「箱館…五稜郭…」

和人は弱々しく首を振って、呻いた。

サクサイヌは和人の言葉が理解できなかったが、蘆から来たのではないことだけは分った。

白老のアイヌは、和人の不穏な空気は感じていたが、和人達の争いを知らなかった。

時代は、江戸幕府が瓦解し、明治維新があり、日本史の転換期であった。

この時の前年の一八六七年十一月（慶應三年十月）に徳川慶喜が大政奉還を行い、一九六八年一月（慶應三年十二月）に王政復古の大号令が発布されていた。

同六八年一月（慶應四年一月）旧幕府軍と新政府軍との間に戊辰戦争が勃発していた。戊辰戦争は、京都の鳥羽伏見の戦いから、江戸の上野、会津を経て、戦場は蝦夷地（後の北海道）へと向っていった。

一八六九年一月（明治元年十二月）に、榎本武揚が率いる旧幕府軍は、箱館の五稜郭に渡り、蝦夷共和国を樹立していた。この年の五月十八日に旧幕府軍が五稜郭で降伏し、一連の戊辰戦争が終結したところであった。

降伏に先立ち、二百名余りの幕府軍が蝦夷地に敗走していた。困窮した敗残兵の中にはアイヌの集落を襲う者も居た。

また、戦いに勝った新政府軍も蝦夷地の奥深く進軍していた。

アイヌ人達には、このような状況を全く知らなかった。

（災いの種だ。あまり関わりたくない）

サクサイヌは暫くの間、どうすべきか悩んでいた。

彼は薬草で傷口を消毒すると、自らの服を破って、傷口を包帯のように巻きつけた。

傷の具合から見ても、和人同士の戦争で被ったものと考えた。

（仕方が無い。和人の里まで連れて行こう。後は、和人の問題だ）

サクサイヌは自分より大きい和人を背負うと、蘆に向って歩き出した。

蘆には、仙台藩が蝦夷地の警備のために、「陣屋」と呼ばれる簡素な城の様な建物が建てられていた。

陣屋の建物にはサクサイヌらアイヌ達も労働力として手伝っていた。

この時の十五年前の一八五四年に日露和親条約が締結され、箱館が開港になったことから、ロシア船が蝦夷地に来航していた。

蝦夷地をロシア等の外国から警護するため、松前藩から江戸幕府の直轄となっていた。

仙台藩を代表に奥州列藩が警護することになっていた。

仙台藩は白老の地に「元陣屋」という防衛拠点を置き、広尾・厚岸・根室・国後・択捉の地にそれぞれ「出張陣

屋」として置いていた。元陣屋には百二十名が出張陣屋には二十名程度が派遣されていた。

サクサイヌが白老元陣屋に到着すると、城壁の中へ向って声を掛けた。しかし、陣屋の中からは誰も応えるものが居なかった。

彼が到着する以前に、新政府軍が箱館まで攻めてきているという伝令が有り、ほとんどの武士が新政府軍の進軍を恐れ、撤退していたのであった。

一部の武士が陣屋に残っていたのであったが、サクサイヌとは行き違いとなっていた。

彼は百二十名程居たはずの和人が元陣屋から消えうせているので、嫌な予感がした。

（この場所に和人を残して、早く避難した方が良い）

サクサイヌは再び迷った。

（和人だからと、傷付いている者を見捨てるわけにいかない）

和人を背負うと、自分のチセ（家）へ向って山を登り始めた。

白老はアイヌの集落でも大きいものであったが、その中で三四世帯くらいの小さな集落に分かれていた。彼の家は三世帯の集落にあり、和人の住む場所に最も近い場所にあった。

（第一章続く）



<参考年表>

1792年（寛永４年）	ラクスマン・大黒屋光太夫根室来航
1854年（安政元年）	日露和親条約　箱館開港
1858年（安政３年）	仙台藩白老元陣屋建設
1867年11月（慶應３年12月）	大政奉還
1868年１月（慶應３年12月）	王政復古の大号令
1868年１月（慶應４年１月）	鳥羽・伏見の戦い
1868年９月（明治元年９月）	明治改元
1869年１月（明治元年12月）	蝦夷共和国成立
1869年５月（明治２年５月）	五稜郭の戦い（箱館戦争）旧幕府軍降伏
1869年８月（明治２年８月）	蝦夷地を北海道と改称

<参考文献>

『アイヌ文化の基礎知識』
『よくわかる最新ヒトの遺伝の基本と仕組み』

古代大和朝廷の謎解き

隆　恵

一　まえおき

わが国の古代史、分けても三世紀から七世紀の約四〇〇年間は、わが国建国の歴史という重要な時期であり、数多くの古今の研究家が取り組んできているが、その真相は基本的なところで余り解明できてはいない。

戦後の考古学は、科学技術の発展と広範な遺跡発掘調査の進展で、新発見が相次ぎ、謎が逐次解明されつつあるも、全容の判明にはまだ程遠いのが現実である。

従って学校の教科書では、次のような概要を記している。

《中国の歴史書によれば、一世紀には北九州に奴国が存在して漢の皇帝から「漢倭奴国王」の印綬を授けられ、二世紀には倭国に大乱があり、三世紀には邪馬台国の女王卑弥呼が三〇余か国の女王となり、魏から「親魏倭王」を授けられた。

三世紀以降になると大和に古代大和朝廷が成立して、大和と河内に大型前方後円墳が造られ、五世紀後半の雄略天皇の時代に関東から九州までの統治を行うようになり、六世紀になると仏教が伝来し聖徳太子と蘇我馬子の活躍する飛鳥時代を迎え、七世紀末には都を飛鳥から平城京に移して、唐の律令制度を見習った政治制度が定着した。》と。

四世紀以降の歴史の真相の解明の決め手の文献は、古事記と日本書紀（以下書紀と簡記）にほぼ限られ、この文献がどの程度史実を伝えているのかで研究家の見解が分かれている。

大半の研究家のアプローチ方法は、最新の遺跡発掘の成果を踏まえつつ、文献の一級資料を書紀におき、それを補足・検証する文献として古事記をはじめとして、海外の文献や当時の社寺の縁起及び遥か後世に書かれた国内の書物を駆使して、解明に努力している。

ところが肝心の書紀が、編纂者の藤原不比等らの恣意的創作が混入している上に、編纂の約五〇年後に時の最高権力者の藤原仲麻呂がこの創作書紀を改ざんしている事が近年の研究で論証され、我々が目にする書紀の信憑性に甚だ疑問が多いことが分かってきた。そうなると、書紀のどの部分が史実で、どの部分が虚偽かを、色んな角度から推測する事となるわけだが、残念ながらこの峻別の決め手が少ない。

本稿では、次に述べる「記紀の解読の前提条件」の下、主たる資料を古事記におきつつ、補足資料を書紀とするというやや異端のアプローチ方法から、古代史の謎解きにチャレンジしてみようと思う。

わが国の有史は、三世紀の邪馬台国の卑弥呼の時代、王朝交替説に従えば四世紀の崇神王朝（三輪王朝）、五世紀には応神王朝（河内王朝）となり、六世紀に入ると蘇我氏の活躍する飛鳥時代を迎え、七世紀後半から天智・天武王朝となって八世紀の奈良時代を迎える。

本稿では、そのうちの崇神王朝及び応神王朝の実態解明、更には蘇我氏の謎の解明にもチャレンジしたいと思う。

二　序論

わが国の古代史は先ず、三世紀半ばの邪馬台国の卑弥呼の時代をどう解釈するのかという難問にぶつかる。この邪馬台国の存在は、ご承知の通り中国の魏志倭人伝に記録されているだけで、記紀では神話の世界か崇神王朝の時代と推定される。この邪馬台国が、大和朝廷の前身かどうかが最大の関心事なのであるが、肝心の邪馬台国の所在地を巡って大和説と九州説とが相変わらず拮抗しており、未だに決着を見ていない。大和説に立てば、この邪馬台国こそ大和朝廷の前身あるいは大和朝廷そのものとなり、九州説に立つとその後の大和朝廷とは無関係とする考え方や、もしくは邪馬台国が東遷して大和朝廷が成立したとする考え方等々、色んな仮説が生じて来る。

この所在地については、魏志倭人伝の記録だけでは論証が至難なので、物的証拠が見つからないかという事で、近年考古学上からの解明が注目されている。

即ち、卑弥呼が魏から拝受した（親魏倭王の印）や（一〇〇枚の魏鏡）が発見できれば、邪馬台国の所在地の確定の決め手になりうる筈だからである。そこで近年発掘されて、魏鏡ではないかと話題の三角縁神獣鏡だが、これまでに四五〇枚以上もの多数の鏡が主に近畿地方から出土している。その数もさることながら、刻まれている年号が実在しない年号であり、また肝心の寄贈元の中国でこの種の鏡が発掘されていない等々の理由で、卑弥呼の拝受の魏鏡が混入しているのか、それとも全て国産品なのかで学者たちの見解は喧々諤々の状況であり、大和説の物的証拠の決め手とはなっていない。

仮に魏鏡が近畿地方中心から出土したと論証されても、大和説の決め手にはならない。その理由は北九州の邪馬台国が後に東遷したのではないか、または大和朝廷が北九州の邪馬台国を征服して大和近在の氏族たちに賜与したのではないか等々、何とでもケチが付けられるからである。

因みに、私見は「邪馬台国の北九州説支持、その一方邪馬台国の東遷説不支持」、端的に言えば「邪馬台国と古代大和朝廷とは無関係」とする歴史観を持っている。

本稿では邪馬台国問題には触れないが、その後の古代大和朝廷の謎解きの前提条件として、ご留意頂きたいと思う。

「記紀解読の前提条件について」

古事記と書紀は、七世紀末の天武天皇の発意で国史の編纂が開始され、約三〇年余を要して完成するわけだが、この編纂の実権者は終始藤原不比等であり、彼は大化の改新の大立者の藤原鎌足の息子であった。

そもそも、ほぼ同時期に二つの歴史書がなぜ編纂されたのであろうか。一般的な解釈は、古事記は建国神話と恋愛歌謡の物語歴史書であり、一方の書紀はより具体的な内容を持った歴史書であるとされる。そこで、古事記と書紀の特色と編纂事情を整理してみたい。

（一）古事記

①古事記の編纂事情

古事記は、稗田阿礼の口唱を大安麻呂が筆記したとある。

その文体は、漢文と当時の大和言葉が混合した口語体で書かれているとされ、その内容は、神話の世界と神宮皇后直前までの記録が六〇%程度、神宮皇后と応神天皇の記録が約二〇%、仁徳天皇からの応神王朝の記録が一九%、継体天皇から推古天皇までの記録は僅か一%程度で、且つ推古天皇で終了しており、実質的には応神王朝で終わっている。

要するに古事記は、編纂時の七一二年を遡る事一〇〇

年程前までの歴史の記録である。古事記自身の告白によれば、その理由として「比較的近い歴史であり、皆も承知している筈なので簡単な内容に留めた」と言い訳している。

編纂当時にしてみれば「近世史」とも言うべき蘇我氏が活躍する時代、即ち継体天皇から推古天皇の時代の約一〇〇年間の記録が極めて粗雑に扱われた形となっており、更には推古天皇の崩御後から編纂時期までの約一〇〇年間の記録が一切ないというのは、どうしてであろうか。

そこで大胆な仮説となるが、この古事記は六二〇年頃に聖徳太子と蘇我馬子が編纂したと記録されている「天皇記・国記」をベースとし、且つ「天皇記・国記」は、六世紀半ばに完成したとされる帝紀・旧辞をベースにしていたと推理する。

「天皇記・国記」は、蘇我蝦夷が乙巳の変で中大兄皇子の兵に攻められ、蝦夷が自宅に火を掛けて自殺した時に、蝦夷の館からかろうじて持ち出されたと記録されている。

恐らく記紀の編纂時には、編纂者たちの手元にあった筈である。古事記の原典が「天皇記・国記」と推定すると、推古天皇記で終わるのは至極尤もである。なぜならば、これらの編纂者であった聖徳太子と蘇我馬子が亡くなって数年後には、推古天皇も崩御しているからである。

推測するに、天皇記・国記の継体天皇から推古天皇までの約一〇〇年間の記録は、編纂者の蘇我氏一族にとっては蘇我氏の登場と大活躍の時代であり、勝利者兼最大の権力者として真実と創作を織り交ぜた壮大な蘇我氏礼賛の記録となっていたに違いない。ところが古事記は、蘇我氏の大活躍時代を一〇数行程度で「はしょった」形になっているのである。

この理由を憶測すれば、古事記の編纂者の藤原不比等にとっては、この蘇我氏礼賛の記録は極めて都合の悪い代物であり、天皇記・国記どおりの古事記への転載は、編纂趣旨に反するので、結局削除・削除の連続となった結果が。原因と考える

②古事記編纂時の手元資料

●帝紀と旧辞

これらは現存していないし、どんな内容であったか全く見当もつかないが、その原資料は大王家と豪族たちの「家伝書」と「伝承」だったのであろう、その主要部分は天皇記・国記、即ち古事記に反映されていると推理する。

●天皇記・国記

これまた現存していないし、その内容が転載された後世の文献もないので、内容は全く分からない。

編纂者の主役は蘇我馬子であったので、間違いなく蘇我氏礼賛の記録が満載であったであろう。

●伝承

論証できない時の常套手段として、学者たちは「そんな類の伝承があったのであろう」と逃げを打つが、そもそも伝承というものにどれほどの信頼性をおいて良いのであろうか。

現在でも、五〇年前の出来事の口伝えのみの伝承にどの程度の真実性があるであろうか。人間は記憶が曖昧となると、自分に都合の良いように思い込むし、喜怒哀楽が増幅されて記憶されるのが通例である。生き証人の記憶で遡れるのは精々五、六〇年が限界であろう。信頼性がおける情報となると、三〇年が限界ではないだろうか。

例えば、江戸末期から今日まで記録媒体の文書等が一切なかったと仮定して、一五〇年前の幕末や明治維新の真相を現在の古老たちからその伝承をかき集めたとしても、当時の真相には近づけないと確信する。

天皇記・国記の編纂時は六二〇年頃だが、その二〇〇年前の四〇〇年頃にどんな事件が起きて、当時の大王たちと豪族たちの婚姻関係はどうだったのかと古老に聞いたとしても、ほとんど伝承はなかったであろう。

古老の伝承がほぼ真実を述べていると思われるのは、天皇記・国記であれば五八七年の蘇我氏と物部氏の戦いが上限であろうし、古事記編纂時の七一二年であれば六七二年の壬申の乱が遡及の限界であろう。

要するに、伝承主体の歴史書で真実性があるのは、精々直近三〇年間の現代史に限られ、一〇〇年以上昔の出来事の古老の伝承などはむしろないほうが良い程度の情報だったと見做したい。

●古文書・木簡

大王家や豪族たちの家伝書が存在していたであろう事は十分推測できる。ただ、わが国に文字すなわち漢字が伝来したのは四〇〇年頃以降であり、当時のわが国にどの程度の紙の製造技術があったのかは分からないが、そもそも紙の耐用年数は短いので、遺跡の発掘ではこの古代の古文書は発見されないであろう。

よく遺跡から文字を記載した木簡が発見されているが、斉明天皇の時代の七世紀でも木簡が主要の記録媒体であったのかもしれない。

要するに、四世紀から七世紀のこの約三、四〇〇年間の出来事を記録した古文書が当時存在したとしても、大量の情報を盛り込んだ物ではなかったと推測する。

●海外の文献資料

○古事記と同時期に編纂された書紀には、海外文献とし

て魏志倭人伝と晋書を明記しており、この文献は間違いなく編纂者の手元資料として存在していた。

○また書紀には、参考文献として明示している百済本紀、百済記、百済新撰の朝鮮半島の歴史書も、手元にあった。

○宋書を参考文献としたとの記紀の記録はないが、宋書の完成が四八六年であり、書紀は宋との交流を克明に記録しており、手元資料としてあったと推定して良いと思う。

約二〇〇年以上昔の五世紀半ばのこの出来事が、わが国の伝承か古文書にあったとは考えられず、その記載の内容と文脈が余りに唐突過ぎるので、恐らく隋か唐との交流の中でこの宋書がわが国に齎された可能性は高いと推測できる。

○隋書となると、完成が六三六年であり記紀の完成と近接し過ぎており、完成間もない随書は未だ入手していなかったと推測する。

その根拠として、隋書記載の遣隋使の表敬の言葉の「倭の国王は男王であった」（後記参照）とあり、一方の記紀では時の天皇は推古女帝であったとしてあり、明らかに食い違っている。この矛盾の解釈について、随書が間違っているとする説、摂政の聖徳太子か実力者の蘇我馬子を国王と勘違いしたとする説等があるが、書紀には推古女帝が隋の使節を難波と飛鳥で歓待したとあり、その隋の使節の帰国報告もあったであろうから、隋書が男王と偽る理由はない。

この食い違いの原因は、隋書を手にしていない記紀の編纂者が時の天皇を推古女帝と創作したところ、海外文献で嘘が露見してしまったと解釈すべきである。

六〇〇年、遣隋使曰く、
「開皇二〇年、倭王、姓は阿毎、字は多利思比孤、阿輩雞彌と号す。使いを遣わして闕に詣る、・・・（中略）・・・王の妻の名は雞彌と号す。後宮に女六、七〇〇人有り、太子を名付けて利歌彌多弗利と為す。城郭無し。」

●金石文

これは全くの想像であるが、石上神宮にある百済の照古王が三七六年に倭国王に寄贈した七枝刀や、稲荷山古墳や江田船山古墳出土の鉄剣・太刀は六世紀前後創作の物であるので、この同種の鉄剣・太刀を大和近在の豪族たちにも与えていた筈であり、これらの存在は十分承知していたと推理したい。

要するに、物的資料として参考にしていたとの仮説である。

(二)日本書紀

①編纂時の政治情勢

六四五年の乙巳の変で、天智天皇は蘇我蝦夷・入鹿の蘇我氏宗家を討伐して、政治の実権を取り返すことに成功するが、天智天皇が崩御するや弟の天武天皇が天智天皇の後継者の大友皇子を討ち滅ぼして（壬申の乱）天武天皇が即位する。

天武天皇は在位一四年で崩御するが、天皇は藤原鎌足を忌み嫌っていたので、息子の藤原不比等は天皇の存命中は隠れ潜んでいたようである。

ところが、天武天皇が崩御するやその皇后で天智天皇を父とする持統天皇が即位し、女官の橘美千代の導きで藤原不比等は見出されて頭角を現すようになる。

持統天皇と藤原不比等の二人の思惑は、次のような狙いから全く一致するのである。それは、持統天皇にとっては天武天皇の数多くの皇子たちを押しのけて、彼女の唯一の皇子である草壁皇子とその直系への皇位継承の

ある。

記紀の編纂者たちは、文献や伝承だけでなく物的資料も参考にしたと解釈するのである。おそらく、百済王寄贈の七枝刀が百済の歴史書に載っていたので、古事記が海外文献とも整合性が取れている証として掲載したのではあるまいか。

願望があり、藤原不比等にしてみれば草壁皇子の遺児で後の文武天皇に己の娘の宮子を妃に入れる事に成功しており、この持統天皇の血統による皇位継承と、外戚藤原不比等の孫への皇位継承は悲願であった筈で、両者の思惑は全く合致するのである。

この二人の仲立ちとして、持統天皇の女官ながら藤原不比等の後妻となっていた橘美千代の存在が大きかったとされる。

天武天皇の遺児の他の皇子たちとの差別化のためには、持統天皇にとっては夫の天武天皇の賛辞ではなく父の天智天皇の賛辞が重要であり、藤原不比等にとっては氏素性の分からぬ出来星の外戚としては箔が不足しており、天智天皇を押し上げる事に成功する乙巳の変の大功労者藤原鎌足像の創作が必要であった。こうして書紀は、編纂者の都合の良いように創作されることとなる。

②改ざん時の政治情勢

ところがこの書紀が、奈良時代の聖武天皇の皇女の孝謙女帝の時代に、藤原氏の氏長者となった藤原仲麻呂により改ざんされていた事が判明した。

この時の政治情勢は、聖武天皇の時代に藤原不比等の四人の子の実力者が相次いで病死、その後は橘美千代の子の橘諸兄が最高権力を握るなど、藤原氏の栄華に陰りが見え始めていた。その政治的ライバルの橘諸兄亡き後

も、藤原不比等の娘の光明皇后が生んだ孝謙女帝の後継者をどうするかで、各氏族の思惑が錯綜して、藤原氏の栄華の保証がなかった時代であった。

藤原不比等の孫であった藤原仲麻呂は、孝謙女帝の寵愛を得て、恵美押勝という苗字を拝領し、皇族以外では初の太政大臣にも就任するという絶頂期を迎える。

そこで藤原仲麻呂は、藤原氏の磐石化を図るべく、藤原氏の家伝書である藤氏家伝(大織冠伝)を創作、これに合わせて書紀を改ざんしたのである。

恐らくこの改ざんの狙いは、藤原氏の始祖とも言うべき藤原鎌足の更なる礼賛が主体であり、これに加えて奈良時代の価値観や社会通念及び律令政治の職制等を追加して、大国唐にも自慢できる立派な歴史を持った日本国を印象付けたかったのではないか。

学者は、この改ざん前の七二〇年完成の書紀を指して「日本紀」と称し、七六〇年に改ざんされた物を「日本書紀」と称し、現在我々が目にしている代物が完成したのである。

残念ながらこの「日本紀」は現存していない。

平安時代以降の人々も「日本紀」は見ていないので、「日本紀」がどんなものであったのか全く分からない。

③日本書紀編纂時の手元資料

●古事記・天皇記・国記、豪族の家伝書

古事記・天皇記・国記をベースに置きながら、推古天皇崩御後即ち天智天皇の父親の舒明天皇紀から天武天皇紀までを新規に追加する。これに加えて豪族たちの家伝書を集め、物語主体の古事記に国史に相応しい内容と体裁を創作したと推測する。

●百済の歴史書

この書紀編纂の最大且つ最高の参考書が、百済本紀、百済記、百済新撰であった。これらの原本は現存していないが、一二世紀の高麗国で編纂された三国史記にその残存が垣間見られるとされている。

百済本紀、百済記、百済新撰は、中国の歴史書を参考とした暦に基づいた立派な歴史書で、暦のない古事記と違って格調のあるものだったので、書紀もこれに習うこととなる。

わが国の四世紀から七世紀の伝承・記録は恐らく古事記レベルのものしかなかったのであろう、そこでこの百済三書の内容を拝借して、わが国の国威を示す内容に変更を加えて完成したのが「日本紀」であったと推理する。従って、書紀の内容は朝鮮半島との外交や軍事作戦や百済・新羅・高句麗の王族たちの名前がよく記載されており、書紀のボリュームの半分以上がこの半島との関わりである。

(三) 古事記・日本書紀の編纂時と改ざん時の社会通念と価値観の除去の必要性

①大王家の万世一系の欺瞞

この欺瞞は、これまで数多くの指摘がなされてきたので論を省くが、古代大和朝廷では大和の和邇氏・息長氏の姫たちの血統が天皇家の皇統に大きく影響する。

この和邇氏・息長氏の実態解明が、古代史の謎解きの重要なポイントとなる。

②大王家を貴種とし、ひたすら従順に服属する豪族たちの存在の欺瞞

何時の時代のどの家柄においても、単に生まれが良いと言うだけの「貴種」と言う概念が定着するには、由緒ある血統が数代以上継続する事と、始祖か中興の祖に圧倒的な武力と財力を持っている事が必要な筈である。

記紀の記録のような、独自の武力と財力を持たない天皇や皇子たちが、大豪族たちから尊崇を勝ち取るには、圧倒的な武力と経済力を背景とした累代が必要であり、恐らくこの概念が定着化し始めるのは七世紀後半頃からで、本格化するのは奈良時代からと考える。

例えば、源頼朝は貴種ではあったが全くの孤立無援の身であった。その彼が旗揚げした時は、関東武士たちはほとんど無視する。ところが自分たちの領地の権益を蔑ろにする平氏を打倒するために、裸の王様の頼朝を担ぐ事とし、平氏の打倒に成功する。しかし、彼が亡くなるや息子の頼家や実朝といった貴種を亡き者にして、自分たちに都合の良いようにシャッポを変えて行く。これが人間の本性なのである。

貴種とか権威とかの抽象的な箔を、強力に周囲の者に見せ付けるには、圧倒的な直属の兵力と財力の裏づけが必要なのである。

記紀の貴種と言うロジックのマジックに騙されないことが、史実の究明には極めて重要と考える。

③大王家と外戚の関係の固定観念の除去

奈良時代以降の「外戚」には、摂関家の藤原氏のように下位の者が上位の者に姫を差し出して、その孫の支配権を狙うという事が一般化する。その一方、何時の世も上位の者が下位の者の支援を当てにして姫をもらうケースがある。

例えば、天武天皇の妃に天智天皇は皇女を三人も差し出し、天智天皇の妃に天武天皇は一人も差し出していない。これを兄の天智天皇が弟の天武天皇に皇女三人も人質として差し出したと解釈する人はいない。事の真相は、天智が天武の支援を当てにしていたからであろう。古代の四世紀から七世紀にかけても、権力を勝ち取ろうとする者が先ず取る手段は、この天智方式であったと思う。権力の地位が磐石化すると、人質の要素の姫の提供

が多くなるような気がする。

この外戚の本質を見極めるためには、貴種の概念同様当時の政治権力の基盤の強弱をよくよく検証しないと、後世や今日の定義や固定観念で捕らえると、史実を見間違えることとなる。よく通説が唱える言葉に、「婿入り婚で前王朝を継承した」という表現があるが、この古代の貴種と言う観念が醸成されていない時代は、氏素性だけが取り柄の天涯孤独の王子が実力を備える前大王家の姫を妃に迎えて、その大王位を継承するというような事は、なかったと考える。

例えば、仁徳天皇が大豪族の葛城襲津彦の娘の磐之媛皇后の嫉妬と我が儘に振り回される記録があり、継体天皇が仁賢天皇の皇女の手白香皇后を迎えて、欽明天皇を設けるという記録がある。これらの記録は平安時代以降であれば十分「入り婿」としてありうる話であるが、この古代の時代ではそんな単純な事ではなく、仁徳天皇も継体天皇も相当の財力と軍事力を有していて、なお且つ外戚の実力を取り込みたいと思ったと解釈すべきである。この時代の外戚には血統だけが売り物の王子を入り婿で迎えても、他の豪族への勢力の誇示とはならなかった筈である。

④大王家や氏族の家督の長子相続の思い込み

この長子相続が安定的に定着するのは江戸時代からである。その理由は、儒教思想の定着化と政治的に安定していた事にある。政治的に安定していない時代は、基本的には「弱肉強食」が一般的にならざるを得ない。

持統天皇と藤原不比等は、草壁皇子の即位前の死去により、数多の天武天皇の異腹の皇子達の即位を排除しつつ、草壁皇子の遺児の文武天皇への皇位継承を図るべく、天智天皇が「不易の常典」として長子相続を定めていたという捏造を行う。

しかし、記紀自身が数多くの皇位継承で長子相続が行われなかったと告白しているように、兄弟や叔父・甥等で腕力と財力と才智に長けた者がその後継者となり、もしかしたら下克上も少なからずあったかも知れない。

これは、大王家だけでなく全ての豪族たちの共通の出来事と考えるべきで、例えば蘇我氏の氏長者は、蘇我馬子の長男の蝦夷に、蝦夷の長男の入鹿にと錯覚しがちだが、長男であったかどうかに疑問を持たなければならないし、また氏長者は馬子亡き後馬子の兄弟が相続したのかもしれない。

政情が安定していない時代は、天皇の崩御や氏長者の死去に際しては、長子に関係なく軍事力に長けた者が後を襲うのが常識である。その時には、その者を擁立しようと言う周囲の支援が欠かせないが、支援の豪族たちを確保するためには当然その見返りが必要であり、権力を狙う者には財力と武力が必須である。

武力と財力なくして、貴種であるとか高位高官であるというだけで、政治的地位を確保できた時代は奈良時代後半から平清盛が登場するまでの平安時代だけである。

⑤文官・武官の家柄の峻別の固定観念の払拭

「大連」や「大臣」という姓は、「武官」あるいは「文官」と解釈する傾向がある。しかし、これも奈良時代に入ってからこの分別が行われ、それ以前の豪族には未だこの分別はなかったと考えるべきである。

天武天皇時代に「八色の姓」の制定により基本的な氏族の家柄のランク付けが行われるが、この官位制度がそれ以前の遥か昔の時代にもあったかのように記録している。「大連」姓だから政治には口を出さず天皇の指示による兵力を操っていたとか、「大臣」姓だから自らの武力はさほど持たず、天皇の側近として政治の補佐をしていたとかの固定観念は、古代史の解明には捨て去らなければならない。

例えば、蘇我氏には東漢人という武力集団があって、蘇我氏自身は財力だけを持っていたというイメージがあるが、これは間違いである。蘇我氏があれだけの政治力を発揮できた背景には、蘇我氏の同属たちを指導者とした強力な軍団を保持した上に、武器の製造能力に長けた東漢人という強力な軍団を与力として抱えていたと考えるべきである。

天皇や皇子たちは、六世紀中頃には貴種の観念の浸透と直属の軍団が遊離して、尊崇されるも「裸の王様」的な存在となったと推測するが、それ以前は直属の軍団で並み居る豪族に睨みを利かさなければ、政治的地位は保持できなかったと考える。

⑥大豪族の主要地盤

通説は、飛鳥時代の主要豪族の地盤として、奈良盆地の東南部に物部氏、大伴氏、阿倍氏、蘇我氏の基盤があったとしている。この狭い盆地の一角に、当時の国家を軍事的にリードする大豪族の地盤があったとする考え方は、明らかに間違いである。

この狭い大和盆地の一角を細分化した領地の支配で、吉備氏や尾張氏のような大国を軍事的に制圧する事は勿論、なお且つ朝鮮半島に軍事作戦を遂行できる筈がない。

仮にその分布が正しいとしても、それはあたかも江戸時代の諸大名の上屋敷・下屋敷の延長戦程度の敷地に過ぎなかったと考える。

古来、大和の国は豊かではない。たとえこの大和一国全域を支配していたとしても、全国の統治はできない。要するに、大軍を動員するためには大きな領土が必須となり、古代の豪族たちの葛城氏、物部氏、大伴氏、蘇我氏等の領土は河内や和泉だけでなく、瀬戸内海沿岸部を

支配下に置いていたに違いなく、その経済力と軍事力を背景として国内の反対勢力の鎮圧や海外遠征が可能となった筈である。

この時代は、平安時代の中央貴族が各地の荘園から租税を徴収したような事はなかったのである。

この推論に対しては、六世紀には全国に天皇家の直轄領の屯倉（みやけ）が置かれて、収納した物品が全国から大和に搬送されたし、また大豪族の地方の直轄領からも同じように大和に物品が集中したとの反論が予想される。しかし、これが行われるようになるのは中央集権制度がある程度確立される蘇我氏の全盛時代以降であり、それ以前の群雄割拠の時代では道中の安全な搬送はほとんど不可能であったと推測する。

それを推測させるのが、記紀が記録する古代大和朝廷の政情の混乱状況である。

以上、長々と記紀の解読に際する前提条件を述べた。

そこで、本稿のわが国の古代史の謎の解明に取り組む前提条件として、日本書紀の相当部分は創作部分が多いと推定できるので、解読のベースとしては古事記の記録を尊重し、既述の社会通念と価値観の補正を行いつつ、一方史実と推定できる部分は日本書紀等の文献も参考とし、最新の考古学の成果を拝借し、謎解きに取り掛かりたいと思う。

次回は、いよいよ本題の古代史の謎解きにチャレンジする。

つづく

祝出版

童話　二宮金次郎の一生

森　実与子著

大日本報徳社　200円

小学校低学年生でも読めるオール振り仮名づきの本です。子供の情操教育に最適です。

まんじ語録（その二）

新井宏

世に、世界の四大聖人として、釈迦、キリスト、孔子、ソクラテスの四人の名前があげられているが、この四人とも、ほぼこの前後に生れている。

（94号、三戸岡道夫、孔子春秋）

瞼の内側が燃えるように明るくなった。仰天した雅量は、思わず悲鳴をあげかけたが、舌が痙えるだけで声が出ない。雅量の瞼の裏で、赤い炎が燃え盛る。真っ赤な炎が次第に割れて人の姿がおぼろに見えた。

（94号、森下征二、茉莉花伝）

わが国や中国の政治史上の人物評価では、大衆の受け止め方は敗北者への同情と覇者への誹謗が必ず対になる傾向がある。

（94号、隆恵、敗北者賛美と勝利者誹謗）

……後白河という人は甚だはた迷惑な御仁であった。

（94号、隆恵、敗北者賛美と勝利者誹謗）

通常、これらの地方史を素材にして作家はイマジネーションを働かし小説をものにするのだろうが、この場合は全く逆。一人の著名な作家の一作品が地方史を作り上げてしまっている。

（94号、山田嘉久、関寛斉のこと）

茶会に集う人達は他人の持物のアラを探し出す嫌な性がある。

（94号、忠内正之、古い物・遠い夢）

「もし、息抜きが必要でしたら……」

「いえ、いつも息抜きですから。」

（94号、松下壽男、残暑見舞い）

清貧を説きて市井に生きし作家
中野孝次逝くいと密やかに
（94号、石黒修身、行雲流水）

おそらく彼の出家も長続きはしまい。いずれ然るべき口実をもうけて俗界に戻ってくるにちがいない。この期待は不思議と小町を安堵させた。しかし、遍昭は戻ってこなかったのである。
（94号、島津隆子、小野小町物語）

惚けは死の恐怖から逃れるモルヒネなのかも知れない。
（94号、太田和貞、丙午の女）

「……捕まえていったいどうするつもりなのだ。家で飼うのか」「いいえ、たべるんですよ。鼠は結構旨い動物ですから」
（94号、太田精一、遥かなるカメルーン）

沼田少佐の罪名は俘虜虐待を黙視、放任したという責任であったが、虐待にもいろいろある。不十分な待遇が即虐待の汚名になるのも、敗戦国なればこそであろう。
（94号、紙透寛夫、紙透家の人びと）

精神統制で純粋培養されたそれまでの価値観を全面否定する社会構造の変化に途惑いながら、挫折感と劣等感とを引き摺って新しい時代を生きて行くことになった。
（95号、千坂精一、神風特攻隊の人びと）

かかる状況下、拙作が突如出現した。序章以下全二六篇、総字数七二八言の長篇叙事詩に驚かれた参加者も多いと思う。私の知る限りこれより長い詩は……「千字文」を詩として参入しても世に七篇しかない。
（95号、鯨游海、潮騒録）

この語録には、新井氏の言葉も解説もないが、まんじに寄せる新井氏の愛着が感じられ……
（95号、太田精一、編集後記）

ついでにいうと司馬作品に「忠臣蔵」は登場しない。
（96号、山田嘉久、街道をゆくの荻生徂徠）

夫婦して乗るのかと言う顔付きで
サハラの駱駝やれやれと立つ
（96号、石黒修身、行雲流水）

人の仕事とはなんだろう。どんなに理想に燃えた仕事でも、終りは突然やってくる。では人の仕事とは、なし

金持ちがパライソに入るよりも、駱駝が針の穴を通る方がまだやさしい（新約聖書マタイ伝）
（95号、鍋屋次郎、針の穴を通った駱駝）

子路は孔子よりも九歳も若く、武勇を好む、粗野で気の荒い青年だった。まるで任侠の世界にいたかと思える乱暴者であり、孔子の塾を武道塾とでもまちがえたのか、鶏の羽をつけた冠をかぶり、豚の皮で飾った剣を付けるという異様な格好で乗り込んできた。
（95号、三戸岡道夫、孔子春秋）

街角公園けやきの木陰
書店のまえも素通りに
汗をふきふき水を飲み
そうだおでんを食べに行こう
（95号、松下壽男、友に寄す）

子供のころ幸次郎は、父正義は生きながらにして銅像のようだと感じたことがあった。……父は大きく固く、中に虚心を湛えている。だからこそ打てば響くのである。
（95号、松下壽男、ロダンの二宮金次郎）

十死零生の呪縛を解かれた生残り組は、国家ぐるみのとげられたことがらで測るものなのか、それともなしとげられなかったことがらで測るものなのか。
（96号、松下壽男、ハート・トゥ・ハート）

晏嬰のように泥にまみれて政治をし、国を運営している者から見れば、孔子の政策は政治の現実を知らなすぎるし、甘っちょろく、理想論すぎて、独善的にしか見えなかったのである。
（96号、三戸岡道夫、孔子春秋）

小町の情熱にもようやく枯渇が見えはじめる。子もなく、定まった男性もいないわが身を、舵のない舟に置きかえてみたりする。もはや今ひとたびの命の灯を掻き立ててくれる男性に巡り逢うこともないだろう。
このような時、小町の許に一首の和歌が届いた。
（96号、島津隆子、小野小町物語）

商品としての奴隷は、この島に「収容」ではなく「貯蔵」されていたのだ。
（96号、太田精一、遥かなるカメルーン）

遂に得し詩礼知る人足ばやに
われを遺して逝きて帰えらじ
（96号、鯨游海、潮騒録）

実名か、ペンネームか、あるいは最初の宮仕えの時の女官名か、それとも二度目の折のものがいいのかと、定家に問われた彼女はこたえた。

言の葉のもしこの世に散らば忍ばしき
昔の名こそとめまほしけれ

（97号、島津隆子、平家の女・和歌に託した人生）

当世風にいえば、「きれた」のである。

（97号、千坂精一、裏切られて）

子路は単純なおとこであるが、もともとは武闘派の人間なので、戦いのこつは心得ていた。勝つ方に乗るのが、軍事の定石である。

（97号、三戸岡道夫、孔子春秋）

天皇自ら異国人と会見し、外交上の裁断を下すべきではない。天皇自ら対応すれば逃げ場がなくなる。外交実務は然るべき者に任せ、天皇が直接責任を負ってはならない。

（97号、森下征二、茉莉花伝）

正統派美人と気さくな美人。……欲張りな私は、両方になりたい。欲張りな男は、両方が欲しくて、二人の間を行ったり来たりするのではないか。

（97号、森実与子、三つのコンサート）

人が歴史を、歴史が人を作るのか
永久のテーマに秋思尽くせず

（97号、曽根竣作、流離の渚）

わが妻は幼な児にして北辺に
果てし父の面差し朧ろ

（97号、石黒修身、行雲流水）

麻薬の匂いのしない一流ジャズメンがいったい何人いるというのか。……国務省はどうやってその問題を解決したと思うかね。……世界的な麻薬シンジケートと手を組んだのさ。ツアーの先々で確実に麻薬が手に入れば、ミュージシアンは麻薬を持ち歩く必要はない。

（97号、松下壽男、ハート・トゥ・ハート）

膨大な作品を遺した司馬だが、意外なことに彼の作品中から「関東」（特に私の故郷千葉県）に係わる事件や人物を引き出そうとすると、これが簡単なようで簡単でない。

（97号、山田嘉久、九十九里浜で泣いた司馬）

「まんじ卍」は……すでにインダス文明時代の人がつ

かっていた。……が、それは卍ではなくてナチス・ドイツの標幟であった逆卍である。皮肉なことには、卍の起源は、ユダヤ人の属するセム族のうちにあった。

（97号、中山喬央、還暦からの考古学）

瀏陽市は人口百三十万人、花火工場が七百から八百あり、世界の花火の六十%を生産している。……九割が輸出で、日本との取引は殆どない。

（97号、吉田忠雄、花火の町瀏陽をたずねて）

私は日本人です。フランス語、英語、スペイン語などは外国語で書類作成までに時間がかかりますし、私のこの憤りを適格に表現することはできません。したがいまして日本語で書類を作成させて頂きます。

（97号、太田精一、遥かなるカメルーン）

江戸時代、一流中の一流といわれた辰巳芸者は、その粋を誇るために、冬でも足袋をはかずに素足で歩いた。逆に夏は羽織を着たので、羽織芸者ともいわれた。辰巳芸者は一流芸者の粋を誇るため、意識的に暑さ寒さに挑戦したのである。

（98号、三戸岡道夫、うどんげの花）

右近殿、その十ケ条は、最初に言われた神はただ一人と言うことと、最後に言われた七日に一度の休みとを除けば、至極当たり前のことではないか。何故八百万の神ではいけないのか。

（98号、鍋屋次郎、針の穴を通った駱駝）

コルトレーンの演奏は、音で時間を埋め尽くそうとしていた。時間をねじ伏せて、支配して、永遠を手にいれようとしているかのようであった。

（98号、松下壽男、ハート・トゥ・ハート）

一二四二年ベーコンは黒色火薬に関する最も重要な論文を書いた。これは暗号によって書かれた。そのため十九世紀末まで、その内容を理解することができなかった。……中世では火薬を扱う人は危険人物とみなされていた。

（98号、吉田忠雄、花火の歴史を楽しむ）

宅急便の歴史は行政との闘いの歴史であった。

（98号、伊治哲、ベンチャーの先駆者逝く）

エジプトの穀物と金は外交的な手紙にもしばしば現れており、軍事力以上に力がありました。

（98号、中山喬央、還暦からの考古学）

外つ国に嫁ぎし吾子の筆躍る
伯仲長じ季さらに肥ゆと
（98号、鯨游海、潮騒録）

わたしは、一九二八年、ドイツ生れのスタインベルク・ピアノ。人間でいえば今年七十七の喜寿を祝う歳です。……一時は廃棄の運命を辿る寸前のところまでいきました。ところが、どういう巡り合わせか、わたしは今すっかり若返って昔の音色を取り戻したばかりか、華やかな舞台に立つことができるまでに復活させてもらうことができました。
（99号、伊治哲、わたくしたちはスタインベルク）

照る日、曇る日の唱えは大衆に題名だけでも語呂うけする性格を持っていた。
（99号、大和禎人、湯漕ぎのうた）

夢か、狂気か、幻なのか。実朝にとっては宋渡の動機などどうでもよかった。
自身を取巻く多くの惨状から、どこへでもいい、脱出できさえすればそれでよかった。
（99号、島津隆子、暗殺の叙事詩）

筆者は、報徳に関する文献類を読み進め、報徳思想を理解するにしたがって、『尊徳は巨大なり』の思いが一層深まっていった。
（99号、堀内永代、報徳仕法と企業経営）

すると民主主義というのは、親に感謝する必要はない。親孝行をしなくてもいい、兄弟はけんかしろ、仕事はだらだらと怠けろ、親戚は仲悪くなれ、お金はむだ使いせよ、ということなのでしょうか。日本って変な国ですね。
（99号、三戸岡道夫、うどんげの花）

美の基準は人によってさまざまであり、また好みもさまざまであろうが、私の三大美女は、入江たか子、山田五十鈴、原節子の三人である。
（99号、三戸岡道夫、うどんげの花）

井戸茶碗になり澄ました萩茶碗の名品がかなり埋れているのではなかろうか
（99号、忠内正之、古い物・遠い夢）

「臣下の命運は主君しだいできまるもの。寄らば大樹でござるよのう」
その物言いは、信吉に上杉離叛をすすめているようにも受け取られた。

（100号、千坂精一、大樹を渡り生き抜いた男）

思温が見つめた。青い瞳を懸命に見つめた。若い思温の激しい想いが彼女の上に一気に注ぐ。思わずうろたえた太后が、剣を離して身体を後に引いた時、思温の潰れた左目から涙が一滴微かに落ちた。太后の胸に、思わず熱いものが込みあげる。潰れてしまった左目から、どうして涙がでるのだろうか
（100号、森下征二、断腕太后）

妓王が涙を抑えつつ下がったあの日、仏御前は改めて召されていた。そのとき初めて妓王が障子に残した「いずれは秋にあはではつべき」の歌を局の中にみつけた。これを読んで仏御前は全身を打たれたような気がしたのだ。
（100号、相原精次、いづれか秋にあはで果つべき）

伝言は、古谷太郎だけでじゃなくて、ぶちゃ自身のでもあったんだ。もう俺達も八十歳に近い、余命もいくばく。大村は全部吐き出して、二十二分隊の少年兵当時の清純な気持ちに戻りたかったんだよ
（100号、鈴木昭三、六十年目の伝言）

藤五郎はまず馬の耳元で何事かささやき、……今度は、馬の正面に立って、じっと馬の目を見つめる。動物はなんでもそうだが、目を合わせる行為は威嚇するのと同じである。……正気の沙汰ではない。……が、馬はじっと、藤五郎のことをみつめ続けている。
（100号、瀧澤中、まんじゅう奉公）

バスク地方に異常な関心を示す司馬だか、彼にはバスク人を取り扱った小説まである。短編「奇妙な剣客」は平戸に上陸したバスク人の剣客の物語である。……この小説を司馬が書いたのは昭和三十七年、「南蛮のみち」を旅した二十年も前のことである。
（100号、山田嘉久、「南蛮のみち」をゆく）

わたしは詩人ではない
これが　詩であるわけがない
そう言いつつ　詩を創る
（100号、青木昭成、この町・他）

昇りゆくエスカレーター側壁が
写せり己が時のたしかさ
（100号、曽根竣作、湘々湖南）

念の為と思い辞書を引いて愕然とした。不が元来は「大きい、多くの、はなはだ、しばしば」等の意味だっ

た事をその時始めて知った。
（100号、鯨游海、聖徳銀行秘書室）

そもそも異説を出すのは余程の自信と職を失なうかも知れない覚悟が必要です。その点私達のように本業が別にある者は気が楽で却って本音で勝負出来るのです。
（100号、鯨游海、聖徳銀行秘書室）

「待っててくださいね。……お昼、待っててください」……お昼を一緒に食べようってことなのかしら、私はどきまぎしながら聞き返しました。「どこで待っていればいいんですか……」。すると先生は、驚いたような奇妙な表情を見せ「違います。すぐにお昼を食べないで、……」
（100号、森実与子、歯医者さん）

死とは、全ての者が共通に受け入れることができる唯一の理解なのだ。
（100号、松下壽男、新美先生のこと）

深草信也は経済という素材を使って、芸術の創造をやっているのだ。
（100号、三戸岡道夫、極楽楽園）

なぜか、金沢の中心街といわれる香林坊に隣接してわたくしたちの学校があった。まるで銀座四丁目に隣合せて学校があるようなものだ。
（101号、伊治哲、金沢からまたひとつ昔が消えた）

古王国時代のファラオの彫像は永遠の地位を約束された自信に満ち溢れたものでしたが、中王国時代のそれは、その地位が永遠のものでない事を知っている一人の人間として描かれています。
（101号、中山喬央、還暦からの考古学）

専門分野だけに特化し、特異な才能を発揮する人材は古今数多く輩出しているが、総合力で秀でる光悦に勝る人物はいない。
（101号、忠内正之、古い物・遠い夢）

私大出の私が東大赤門をくぐるのはこれで二回目である。
（101号、山田嘉久、「本郷界隈」を歩く）

伊豆学の泰斗佐東三博士は、（伊豆半島を）あたかも成人女性の子宮を逆さまにしたような形だと表現している。筆者はその神秘な胎内を見たことがないが、なんとなくそのような気がする。

「量より質」という言葉があるが、「質より量」もまた真である。量もそのボリュームがふえると、そのエネルギーが質に変化するのである。
（100号、三戸岡道夫、あとがき）

女性は時として悪魔にもなり、天使にも変貌するものだ。しかし、その女性がどこから天使になり、どこから悪魔に変るのか誰も知ることができない。
（101号、島津隆子、将軍義政と愛妾）

強者の側に立ったときの女の傲慢ぶりこそ、女が動物に近いといわれるゆえんだ。
（101号、島津隆子、将軍義政と愛妾）

右近が絶対に許せないと思ったことは、秀吉にとってお吟の死の「バツの悪さ」である。お吟の美貌を聞いて側女としようとして、死をもって反抗されたその「バツの悪さ」は、利休がいる限り続くものである。
（101号、鍋屋次郎、針の穴を通った駱駝）

果てしなく続く広大な遠州灘をながめながら遥か彼方から聞こえてくる潮騒の音は、子守唄であり、青春の賛歌であった。
（101号、松下魏三、赤堀四郎博士の一生）

（101号、堀内永代、風説天城の鬼火）

チャイ出され値切り交渉ややありて
トルコの石を妻は買いたり
（101号、石黒修身、行雲流水）

「右行く先頭四つ右へ、距離五百」
対戦車砲の号令忘れず
（101号、曽根竣作、一兵として）

アッツ草が無事に今年も芽吹きを見て、赤い可憐な花をつけた。二鉢がミニ盆栽よろしく、他の大方枯れ果てた鉢物の中にあるので、いっそう奇跡であり……。アッツ草の値段はたったの五三〇円なのであった。
（101号、大和禎人、アッツ草幻想）

昨今の歌壇は、専門歌人から一般の歌人に至るまで、少しでも目立つような前衛振り、その反動としての、「ただごと歌」が多く、混迷を極めている。
（102号、石黒修身、行雲流水）

「大菩薩峠」の挿絵を描いた石井鶴三さんが独自の挿絵画集を世に問うことがあった際、気難しい作家中里介山が激しい抗議をよせた……

（102号、大和禎人、挿絵界の春秋）

しかし潜在する意欲は消えるものではない。欲しいものは欲しいのである。

（102号、忠内正之、古い物・遠い夢）

一世を風靡した唯物史観も、それが史料として使えたのがモルガンの古代社会だけであった為、その後の様々な研究によって、考え方を変えなければならなくなった。

（102号、中山喬央、還暦からの考古学）

神の教えを地球上にあまねく広めようとした「神聖境界」はその最終目的地であるジパングで皮肉な結果を招いてしまったことになる。

（102号、山田嘉久、司馬遼太郎の紀行文）

俯瞰する城下の町並みは、ひっそり沈んでいた。

峻険な山々に囲まれたその盆地は、出羽国置賜郡米澤藩十五万石の城下町である。

（103号、千坂精一、たまごの殻）

運命とは一つの実感である。いや、実感でしかないと言った方が当っている。この投げ捨てた言葉にこそ、人生の無常観がこめられている。

（103号、島津隆子、草庵に結ぶ夢）

ちょいといかさま気味であるが、器用な大道芸人が見世物をやりながら抜歯をしたことが記憶に残っている。

（103号、堀内永代、伊豆の歯科医業の祖）

汝がために作られし曲をゆったりと

「館野泉」は左手で弾く

（103号、石黒修身、行雲流水）

ワカンナイっていう言葉なら俺にもワカルヨ。でも、何がワカンナイって言っているんだい

（103号、松下壽男、ハート・トゥ・ハート）

買えなかった後悔は、買った後の失望の悔いと比べても先の方が遥かに辛いものである。

（103号、忠内正之、古い物・遠い夢）

日本人と知った皇太子は「何のために此処にきたのか、日本の何処から」と聞いたようだったが、私は皇太子よりも美しい妃殿下の握手を選んだ。

（103号、山田嘉久、「オランダ紀行」をゆく）

秀吉はあの世で官兵衛を五大老の一角に入れて置けばよかったと臍を噛んでいたであろう。

（103号、平山恵敏、司馬史観の黒田官兵衛）

考えてみれば、初めから食いものにするなどと公言して買収に乗り出すようなお人よしはどこにもいるはずがない。

（103号、伊治哲、法は最低の道徳）

哀悼白川静文學博士……

誤てる説文解字糾し了へ研精覃思白寿まえ逝く

讃荒川静香選手五輪金杯……

イナバウァ胡蝶の舞に秘められし

拮据の血指知る人ぞ知る

（104号、鯨游海、潮騒録）

では無官の平民が全財産を献じたという先例がありましたでしょうか

（104号、三戸岡道夫、あばれ天龍）

文章を取扱う部署の者たちには、文章は意味が判ればよいとして、修飾語はいっさい使わず、簡潔にするよう指示して、美辞麗句を思考する無駄な時間を省かせる。これは現在の物書きにとっても耳が痛い教訓である。

（104号、千坂精一、たまごの殻）

遺されし人の心を癒す詩

「千の風に」は詠み人知らず

（104号、石黒修身、行雲流水）

真島教授は実験を重視し、理論には慎重で冷淡に思えるほどで……難しいことや創造的なことでなければ関心を示さないし、また人の真似でない新しい考えがあれば評価し、そのような内容がなければ成功しても関心がなかった。このような学風が四郎に染み込んで後年の弟子達にも伝わった。

（104号、松下魏三、赤堀四郎博士の一生）

岩手弁は日本の標準語からは掛け離れておりますが、英語の発音に似ておるのです。

（104号、松下壽男、ホメラレモセズ……）

今回も、合評会の予習としてマークした皆さんの文章から語録を作成しました。その結果、合評会にお見えでない方の分や、筆者が欠席した会の分は、どうしても引用が疎になったようです。なお、題名部分はスペースの関係で勝手に短縮させて頂いた場合がありますが、ご了解下さい。

短歌

行雲流水（十七）

石黒修身

近詠二十首

あかあかと水辺の桜照らしつつ汽水の湖（うみ）に夕陽沈めり

桜咲く過疎の集落あまた過ぐ一輛のみの山陰の旅

中海（なかうみ）の島で求めし鉢牡丹穀雨の朝に鮮やかに咲く

海を背に風紋消えて乱れたる砂丘の傾りよろけつつ降る

☆　☆　☆　☆

「フオルモサ」美しい島と葡人らが名付けし国をいま訪ね来し

悠久の民族（たみ）の遺産を守り来し中華の奇跡を「故宮」に見たり

「日本の時代」と呼びてガイドらは統治の功をためらはず謂う

その時代「帝国」を冠せし大学の椰子の樹繁るキヤンパスを彷く

台北の街で行き交う老人に短歌詠む人の面差しを覗る

「九份」の小店を守る姑娘は「蘇州夜曲」をオカリナで吹く

老友は四人連みて台北の夜の巷をそぞろ歩きぬ

短日の滞在なれどこの国の紛うことなき自存を識れり

☆　☆　☆　☆

描きしは男の美学・ひたすらに卑を戒ましめし城山氏逝く

ひたむきに拉致の娘返せと訴えし温容の父老いて退くとう

銃をもて身を守るのは権利とう米国市民の意識訝る

「サルコジ」になりてフランス変るのか花のパリは穏やかであれ

老人と呼ぶには若き男らが昼を闊歩す団塊世代か

「尊厳死証明」とりて安らげり吾が残生を計り得ぬまま

胆に寄る臓器剔られて十余年七十路半ばを淡々と生く

故郷は変りかわれど生い立ちの身に沁みつきし吾れの望郷

秋の小片 ―詩集「ろかいゆ」より―

松下壽男

なつはいってしまった
ぼくはないてしまった
サルビアの華が緋い
きみはいってしまった

*

キョウモ
ボクハ
カイヲ
ミガク

ホントウハ
クモッテイルノハ
ボクノココロ

*

炎吐き吐き突っ走る
僕はいま
天翔る
馬

大地離れて突っ走る
僕を誰か止めてくれ

*

莫迦野郎
擲石而砕月

*

ゆれるゆれるはなびらゆれる
あかいコスモス
しろいコスモス
しろいコスモス
あおいコスモス
ゆれるゆれるえがおがゆれる

我ハ蜂彼方此方ノ星巡ル

*

あまりに僕には
僕には僕が悲しくて
それで君にも
マダラノサザメクブラウスハ
セミシグレノナカヲ
カレノコッタアジサイニ
ヒノシズクひかった
君にも僕と
いっしょに哭いて欲しかった

*

いもうとの
ひとみはうつろ
またひとつ
はなびらあせてさるびあはちる

ホメラレモセズ　クニモサレズ（四〜六）

松下壽男

四　貞三の話

良知一党とはいうものの小作の三男坊の貞三は、生まれながらの穀潰しであった。とはいえ、利発で機転の利く彼は、本家の伯父には可愛がられた。野遊びのお伴にはもってこいだったのだ。貞三も、伯父のお伴をして遠野やら岩手山やらへ出かけることで、随分見聞を広めることができたのだった。小学校を出たあと、親や本家の手伝いをして過ごしていたころ、凶作に見舞われた。彼は、村を出て自活しようと思い立った。親はむしろ口減らしができると喜んだ。伯父に話すと、それもよかろう、ところでどこへ行く気だいと聞かれた。日本は広いからと知ったような口を聞くと、伯父は、旅先で出会った男じゃが、遠州の牧之原の辺りにも良知一党がおって、あっちの方は台地や砂丘の開墾で結構景気がいいそうじゃ、行ってみるのもよかろうと、懐の財布から無造作に札の束を引き抜き、餞別だ取っておけと貞三に渡した。貞三はその金額に驚いた。畳に額を擦り付けて礼を言った。家で、風呂敷包み一つの荷造りをすると、雪道を歩いて花巻に出、その夜はもう東京行きの鉄道に乗っていた。

初めての東京は珍しいものばかりだった。日清戦役の戦勝気分で沸き返っていた。東北の凶作など取るに足らないことのように思えた。毎日を物見遊山で過ごすうちに、伯父からの餞別も残り少なくなってしまった。彼は、どや街と呼ばれる一角の蚕棚のような部屋で寝泊まりし、人足寄場に通い始めた。暮れも正月もないまま新年になった。そこは、東北の百姓の掃きだめのような所だった。訛り言葉が懐かしくはあったが、会話を交わせば切なくなった。凶作や飢饉の惨さをあらためて知るのであった。寄場に通っても仕事にありつけない日が幾日も続いた。どやは東北人で溢れ返っていた。

餞別が底をついてくると、伯父の言葉が貞三の心に響いてきた。遠州の牧之原まで行きたいのだがと言って、

行き先の駅名もわからぬまま東海道線の切符を買った。

夜遅く金谷の駅に降り立った貞三は宿屋を探した。大井川から吹き寄せる風が冷たかった。翌朝、宿の障子を開くと目の前に台地がそそり立っていた。朝飯を済ませると彼は台地に上った。頂上には平らな土地が広がっていて、きれいに刈り込まれた腰丈ほどの潅木が、もこりもこりと一面見渡す限り続いていた。なるほどこれが茶畑というものかと貞三は感心した。彼は、茶原の中の一本道を歩き続けた。深緑の繁みに隠れるようにして所々白い茶の花が咲いていた。遠くに群青色の太平洋が見下ろせた。

牧之原台地は、海に向かって、開いた手を伏せたような形をしていた。話に聞く旗本士族の開拓は、その甲の部分から始めたのだろうと陸一は思った。そして指の付け根の辺りを過ぎた頃から開墾の現場に出くわすようになってきた。五人、十人という人数で、松林を切り開いたり、切り株を引き抜いたりする姿を眺めて、なるほどここなら働き口があるだろうと考えた。そしてここらに良知という家があるべかと訪ねてみるのだった。

良知といやあ榛原にゃ結構あるずら、まず静波の町に出てみるだにと教えられて、台地を下り始めると、海辺の街道に沿った町並みが、川に晒した褌のように長々と続いていた。

町は思いのほか賑わっていた。宿屋も選べるほど並んでいたし、店々の品揃えも豊富だった。翌日、界隈を歩き回ってみて、その町は、郡役所が置かれ、お茶や海産物の集積地であることがわかった。

貞三は、軒を連ねた問屋の一軒で、近郷に良知という地主の家はないかと聞いてみた。すると番頭は、訝しそうに奥に下がり、壮年の男を連れてきた。普段着姿ではあったが、鼻の下に立派な髭を蓄えていた。

地主と呼ばれるほどでもないが確かに土地は持っておる。わしに何か用かね。あらためて問われてみると何とも不躾な用事であった。陸一は、へどもどしながら、ともかくも話してみた。わしには憶えのないことだが、親父は旅行好きだったから、案外旅先でそんな話しをしたかもしれん、ひょっとして良知違いかもしれんが、これも何かの縁だろう、開墾で人手のほしい所だから家に来るがいいと、納屋に住まわせてもらうことになった。

ここまで話すと、貞三は、やれやれほっとしたという表情で陸一を見た。陸一は、頷いて、しみじみと貞三を見つめた。彼と祖父とのそんな因縁があって今の自分があるのだと思うと、宿命や運命というものを信じざるを得なかった。貞三は、木の間越しの日差しを仰いだ。

「そうそう、報徳訓だったべな。それからのう・・・」

次の日から、貞三は、開墾の仕事に付いて行った。まだ日雇い扱いだった。帰って土間で夕飯をとった後、主人が貞三に日当を渡した。賄いと日掛けの分をさっ引い

てあるがと言われたが、貞三には手取りがあるだけでありがたかった。

貞三は、始終腹が減った。納屋を抜け出して町の蕎麦屋へ通ったり、使いのついでに饅頭を買って帰ったりした。まだ育ち盛りの彼であった。

一月ほど経った頃、夕飯が済むと主人が貞三を呼んだ。来月からは、お前を月雇いにしよう。ついては、いつまでも納屋に住んでいる訳にもいかぬだろうから長屋を借りろと言う。そうしたいのはやまやまだが、先立つものがないのでと正直に貞三が答えると、これがお前の日掛けだと帳面を見せてきた。主人は、日当の中から相当な額を天引きして貞三のために積み立ててくれていたのであった。しかも毎日記帳を欠かさなかったのだ。これだけあれば町外れの長屋の一間は借りられようと言われて、貞三は嬉しくなった。ありがたくて涙が出た。何度も礼を述べ、このご恩には一生懸命働いて必ず報いますと話した。主人は、礼には及ぶまい、これはすべてお前の稼ぎなのだ。わしはただそれを毎日少しずつ蓄えておいたに過ぎない。しかし一月貯まれば長屋も借りられる。これを積小為大という。よくよく憶えておくがいいと嬉しそうに話すのだった。

翌日、貞三は主人から金を受け取り、長屋の一間に移り住んだ。居場所が定まると、布団や簡単な家財道具は月末払いで手に入れることができた。他所者の貞三に信用がついたのである。それには主人の口利きもあったのだ。瀬戸物屋のおかみから、あんた東北から流れてきたんだってね、でも見込みのある男だと良知の旦那も言ってたよ、気張って働きよと言われたときは胸が熱くなった。信じられていることが嬉しかった。翌日から貞三は一層精を出して働いた。

日曜日の朝、といっても当時の貞三には盆暮れ正月の他に休日はなかったが、付いて来いと言われて、羽織姿の主人の後ろを歩いていくと、そこは「遠江国報徳社静波出張所」という墨書きの看板が掛かった建物だった。主人は、羽織姿の仲間と談笑しながら、会衆の方を向いて上座に座った。貞三は、人波の末席に座った。

やがて司会が開会を告げると会衆は一斉に立ち上がり先導者に合わせて報徳訓を唱和するのだった。初めて耳にするそれは、お経のようでもあった。しかし父母、吾身、衣食住、田畑山林などの身近な言葉が貞三を惹きつけた。しかも簡潔だった。年々歳々報徳を忘るべからず。この最後の戒めの言葉が貞三の心に強く響いた。

続いて元気のよい若者が演台の前に立った。飯田栄太郎というその講師は、分度ということについて話をした。棒ほど願って針ほど叶うと言うが、針ほど願って棒ほど叶う生き方がある。それが分度の生活である。それは暮らしの無駄を切り詰めて少しでも余剰を産み出すことから始まる。日に一銭の日掛けも、週に七銭、月に

三十銭、年になんと三円六五銭の額になる。正に積小為大である。暮れに三円六五銭の買い物をしたいと願うものは、日々一銭の余剰を作ればよいのでる。日々一銭の日掛けを願う生活は難しいものではなかろう。すなわち針ほど願って棒ほど叶うのである。この生き方はわが身だけに留まらない。一家、一村、一国に及ぼし、十年、百年の日掛けを続ければ日本の前途は洋々たるものである。会場から拍手が沸き起こった。

続いて、顎に白毛交じりの髭を蓄えた講師が壇上に立った。その橋本孫一郎という講師は推譲について話をした。分度を立て積小為大で積み立てた財を自分や家族のために使うのはよいことである。さらに子孫に残すこともよいことである。そこまでは自らに譲る自譲である。しかしその上によりよい推譲がある。それは他譲である。財を世のため人のために使うのである。損をする、もったいないと感ずる向きもあるだろうが、そうではない。尊徳先生は、高弟福住正兄と箱根の福住楼の温泉に浸かりながらこんな話をしておられる。湯をこっちへこい、こっちへこいと掻き寄せるとかえって離れていってしまうが、あっちへいけ、あっちへいけと押しやるとこっちへ流れてくるものじゃと。他に譲れば巡り巡って自分の方へ返ってくるというのは天の道自然の理に叶ったことなのである。徳を以て徳に報いるという報徳の心は森羅万象に行き渡っているのである。米でも茶でも、作物の為を思って丹精すれば、必ず豊かに育って見せるのである。前にも増して大きな拍手が沸き起こった。

終いに、掛川農学社の鈴木良平講師が、砂地での甘藷の栽培と芋切り干しの製法について話した。茶も生葉で売っては誰も買う客はいないだろう。甘藷も切り干しにして売ることで町や都会の客に喜ばれるのである。飢饉の備えであった甘藷も立派な商品作物になるのである。しからば砂地に適し、しかも芋切り干しに適した甘藷とは如何なる品種か。

貞三は農学というものに初めて出会ったのだった。なるほど百姓にも理に叶った工夫が、農学が大切なのだ。この報徳社の常会が終わった後も、もっと詳しく知りたい聴衆が講師の周りに集まっていた。帰り道で主人が貞三にどうであったかと聞いてきた。貞三は来月も来たいと答えた。主人はよかろうと頷いた。

毎月の報徳社の常会へ主人に付いていくうちに報徳訓が空で唱えられるようになった。主人が東の空に向かって、毎朝、報徳訓を唱えるのを見て、彼も始めてみた。講話を聞くうちに自分も報徳の実践を試してみたくなった。まず農地を手に入れることだ。彼は自ら日掛けを始めた。

主人から、お前は今年は徴兵検査であろうと言われた。満で二十歳の正月を迎えていた。徴兵検査には村に帰らねばならん。親元に検査の日を問い合わせてみるが

よかろう。貞三はしぶしぶ手紙を書いた。兵役が嫌な訳ではなかった。しかし切り捨てられるようにして出てきた家族や村であった。しかも二年間の無沙汰の思いを無学な彼がどう書き送ったらよいものか。春めいてきた頃やっと書き送った手紙に返事は来なかった。大切な徴兵検査の連絡を寄越さぬことはなかろうと主人は訝った。貞三は、もしや家族も村を棄てたのかもしれぬと思った。

夏になっても返事は来なかった。主人に言われて役場に問い合わせてみると、飢民については予め徴兵猶予の扱いになっとるのかもしれん。本籍地の方から何も言ってこないとなればそういうことであろう。それに検査はとうに終わっている県が多いのだ、という話だった。

今さら故郷に帰って確かめる気も起きなかった。検査の後で顔を出せば忌避の処罰を受けぬとも限らない。貞三は悔しかった。悲しくなった。空しさが込み上げてきた。彼は家族が飢える前に自ら村を出たのだった。家族に棄てられたわけでも村を棄てたわけでもなかった。もちろん徴兵の義務を抛棄したわけでもなかったのだ。しかし彼は国から棄民として扱われたような気がした。飢民は棄民というわけなのか。あらためて自分が寄る辺のない存在だと感じた。村からも国からも疎外されていると感じた。寄る辺といえば、ただ主人が居るだけであった。ただただ主人がありがたかった。

貞三は、兵役に服していればおよそ無給で働く二年の間、おめおめと給金を受け取ることが堪えられなく思えてきた。実のところ、お上に対して癪に障っていたし、主人に対して申し訳なかった。三十日の夕に、衣食住の掛かりの他は給金は受け取れぬと主人に駄々を捏ねた。主人は、そこまで言のなら、わしが預かっておくから、入り用な時には言いなさいと答えた。その夜、貞三は家賃、炭代、ランプの油代など最低限の経費を書き出して、あらためて主人に月々これだけいただければ、兵役のつもりで暮らしていけますと告げた。主人は、感動を隠さなかった。貞三お前はまさしく分度を立てたのだ。二年間続けてみるのもよかろうと言った。

貞三は、しゃにむに働いた。日掛けをやめたのは心残りではあったが、彼の心には夢を抱くゆとりはなかった。おれは棄民だ、お上から棄てられた人間だという憤りを押さえ込むためにも働きづめなければならなかった。そして働かなければ主人に申し訳がなかった。

二年が経った月末に、主人は貞三を呼んだ。よくがんばった。晴れて除隊になったぞと帳面を開いて見せた。月々の未払い分の給金を記した帳面であった。しかし貞三には、あてにしていない給金だった。ああそうですかと目を通すと途中から金額が増えていた。これは一体なんですかと訪ねると、主人は、軍隊にも昇進というものがあるじゃろうと答えた。貞三は涙を拭った。

帳面の額があれば、わが身一つなら暮らしていけるだけの土地を買うこともできるだろう。しかし貞三は頑なに固辞した。主人も、ならばもうしばらく預かっておくぞと折れる他はなかった。

翌月から貞三は額面通り給金を受け取ったが、分度生活は崩さなかった。何倍も増額をして日掛けを再開した。そして主人から厚く信頼されていることがわかった。貞三は開墾の現場の一つを任されるようになったのだった。

わが身を兵役になぞらえて謹慎生活を送った貞三の行いは、次第に美談として知られるようになっていた。国運を懸けてもロシアとの開戦は避けられないと言われる時世であった。戦意高揚の材料として、お上や軍までが貞三を称揚した。お陰で彼の徴兵猶予は公認された形になったが、彼の思いは複雑だった。

貞三は遠江国報徳社から分度生活の模範として表彰を受けることになった。彼は飯田栄太郎に伴われて朝早く静波主張所を立ち、相良の町を通って牧之原を越え、掛川の町へ向かった。途中橋本孫一郎の双松学舎に立ち寄って塾生一同の祝福を受けた。昼前に掛川の報徳社に着いた貞三は、その威容に目を奪われた。正面に落成したばかりの大講堂がそびえていた。その大講堂で、貞三は社長の岡田良一郎から賞状と報償金を授与された。貞三は、ただただもったいないばかりであった。

自らの行いの動機は確かに主人への忠心であった。しかしお上への忠心ではなかった。むしろ憤りなのであった。とはいえそれを公言することは憚れた。だからといって自ら美談だと認めることは彼の至誠が許さなかった。

貞三は自らの行いが美談として語られることにいたたまれなさを感じた。貞三は、修業が足りないと思った。報徳の実践を積むことで心の所在のなさを乗り越えることができるだろうと考えた。彼は主人にお暇をいただきたいと申し出た。主人は驚きを隠せなかったが、報徳の修業を積みたいという貞三の願いを聞くと、お前はまだ若い、今のうちに見聞を広めることもいいだろうと頷いて報徳社の伝手を当たってやろうと約束した。

半月後、遠江国報徳社社長から関東の尊徳ゆかりの報徳社の社長に宛てた紹介状と、件の二年間分の給金の差額が手渡された。これは、お前が生み出した余剰であり、わしも大いに役立てた。そしてもはやわしの預かるべき余剰ではない。自譲するなり他譲するなりお前が報徳の為に役立てるべきである。頭を下げて受け取った貞三は、主人一家や使用人らに見送られて関東に旅立った。日露戦争の勃発した年であった。

初夏の太陽は西に傾き、青く澄んでいた空も黄みを帯び始めていた。貞三は陸一に顔を向けると、

「長々しゃんべって、遊んじまったべえ」

と、大きな伸びをするのだった。

「貞三さんは、関東で、どんな修業をしたんだべ」

興味溢れる陸一の笑顔とは裏腹に、貞三の顔が悲しそうに曇った。

「修業といえば、修業かもしれんがの。人の心の中にもよ、人道と天道があるんだべ。関東で体の弱い女工と仲よくなって、にっちもさっちもいかなくなって・・・。まあ、若い陸一さんには、ここまでの話だべ」

貞三は再び開墾を始めた。陸一も無言でそれに従った。陸一は、人には学問とは違った学び方があることがわかったのだった。それは学び方というより生き方であった。生きることが学ぶことになる生き方であった。しかもその生き方は人をも学ばせるのであった。今はわからないことでも、生きて行けば学べるだろうという希望をもたらして、心の荒地を耕す力となるのだった。

(開墾と同じだな)

と、汗を拭きながら陸一は思った。

五　村の若者

陸一は、家で両親と夕飯を済ませると、特別の用事のない限り、村の若衆宿へ行って暇を潰した。それは、学校を卒業したあと嫁取りをするまでの、村の若者の習わしであった。

若衆は小学校時代に経験した子供衆の繋がりをひきずっていた。確かに遊びの雰囲気が流れていたが、祭りや夫役、防災、冠婚葬祭といった村の行事の力になる存在であった。そしてどの行事を取っても様々なしきたりがあって、なにより経験がものを言う世界だった。その年、一七才で初めて若衆の仲間入りをした陸一は、小学校を卒業した子供と同じ扱いであった。

お前は年嵩だからと、わざと放ったらかしにされながら、農学校を出てこんなこともわからんのかと年下の先輩から罵られることが度々あった。こんなことは農学校では学ばなかったと反論することは無意味だった。彼らも十分承知の上であったのだ。陸一は、自分は度量を試されているのだ、一年間の我慢だと言い聞かせて堪えるのだった。しかしそのような辛い時間も、じきに楽しみに替るのだった。しきたりを踏みさえすれば、役はいつのまにか遊びの時間に呑み込まれていくのだった。村では、役も遊びも、生きていくための辛い労働の時間からの解放なのであった。

若衆仲間でも徴兵帰りの若者が大きな力を持っていた。徴兵検査で甲種合格になった彼らは、体格もよかったうえに練兵に明け暮れる生活の中で鍛え上げられていた。彼らがいると若衆宿がぴりっとした雰囲気になるのだった。彼らの役のこなしぶりも一味違っていた。仲間を班に分け、仕事の進み具合を頭を通して逐一報告させた。相談事も全員に図らず頭だけの少人数で済ませた。役と遊びの間に、役割や上下の間に自然にけじめがついて行った。若衆の中には徴兵帰りがいないことを確かめてから、宿に入って来るものも居た。彼らは、決まって、昔はよかったとぼやくのだった。

そんな先輩から付いてこいと言われて、闇夜の中を歩かされたことがあった。二人して、ある家の背戸の前まで忍び込むように進んでいくと、先輩が草履を脱ぎ、出てくるまでここで待ってろと言い渡した。辺りの田んぼから蛙の鳴き声が賑やかに聞こえてきたが、陸一は心細かった。家の中から微かに娘らしい声が聞えてきたがやがてまた静かになった。陸一はこれが夜這いというものかと思った。出てきた先輩に草履を差し出すと、よしよしと言われて二人は帰り道を急いだ。道々、えがった、えがったを繰り返していた先輩は、自分が新入りだった頃は、夜這いは若衆と娘衆との決めごとだったと話した。決めごとだから守らにゃなんめえ。若衆にも娘にも落ちがないよう順番を決めて毎夜皆がせっせと回っていたという。新入りは草履持ちと決まっていたが、しきたりを呑み込んだ頃に中に入れてもらえるのだという。陸一は返答に困って、ただ黙って先輩の後を付いて歩いた。それ以来、陸一が誘われることはなかった。

夏のうちから秋祭りの準備が始まった。若衆は村の最大行事である祭りの実動部隊であった。神楽の稽古、寄付集め、しめ縄作り、飾り作りと、若衆宿は忙しかった。

振る舞われるままに酒におぼれ、それでも力を合わせて全てのしきたりを踏み外すことなく二日三晩が過ぎ去ると、若衆宿では気怠さに包まれながら片づけに追われるのだった。

祭が終わり宿の片付けも終わると、年番は陸一らに雨戸を閉めさせた。若衆はランプの下に車座になった。年番長が巾着袋を取り出すと、中身を畳の上にぶちまけた。若衆は歓声を上げた。そして皆でその金を数え始めた。実際のところは年番しか知らないのだが、どうやらそれは、祝儀や、寄付を元手に準備をやりくりしながら生み出した余剰のようであった。勘定が終わると、さあ行くぞ、と若衆はこぞって宿を抜け出した。まだ日の暮れていない街道を、一同は身を隠すようにして花巻の町へ向かった。その町外れの新開地には遊廓があった。そのうちの、あらかじめ話がつけてあったのであろう一軒に入った彼らは、待合室に押し込まれるように座らされた。じきに着飾った厚化粧の女郎衆がやって来て、賑々しく若衆の手を引いては、待合室を出ていった。陸一は困ってしまった。心の準備も何もなかったのである。新入りだけになった時、彼は心細さを感じるよりも、むしろほっとしたのだった。が、やがて年嵩の女郎衆がやって来ると、最後に残された彼らを根こそぎ引き連れていくのだった。

その年、陸一があらためて文字の力を実感させられる

出来事が起こった。

その年最後の田の草を取りに出ていた陸一が、そろそろ家に戻って昼飯しようかと畔に足をかけた時、大地が揺れた。慌ててその場に身を伏せたが、じきに揺れは収まった。しばらく音をひそめていた蝉が、また一斉に鳴き出した。彼は家路についた。翌朝も村は前日の地震の話で持ちきりだった。陸一は学校で新聞を読ませてもらって、「東京全市焦土と化す」という見出しに驚いたのだった。大正十二年、一九二三年九月一日、関東大震災であった。

六　陸一の勉強

年が明けて四月になると、若衆宿は新卒者を迎えた。一八才の陸一は新入りの立場を後輩に譲って、年齢相応の言動が許されるようになった。若衆宿に繁く足を運ばなくても、もう咎められることはなかった。陸一は読書の習慣を取り戻した。

陸一は貞三の使いを買って出て、花巻の街に出た。しかし足は母校には向かなかった。もう自分とは違う世界のように感じられるのだった。彼は、用事を済ませると、本屋に足を運ぶのであった。

看板ばかりが厳めしい、見慣れた本屋の軒先で、陸一は、新本が平積みにされている、珍しい光景に出くわした。化粧箱のハトロン紙に貼り付けた、拓本を思わせる題字の墨色に鮮烈な印象を受けた彼は、手に取って見て、はっとした。そこには「春と修羅　心象スケッチ　宮沢賢治」と題されていたのだった。箱から抜き出してみると、コバを折った凝った表紙は、褐色の寒冷紗にアザミの模様が青々と染め散らされていた。その野趣に溢れた、それでいて瀟洒な装幀から、俯き加減で農場を歩く宮沢先生の後ろ姿が浮かんでくるようであった。二円四〇銭は決して安い買い物ではなかったが、彼は後先のことを考えず買い求めた。店主は、先生に頼まれて置いてはいるが、正直なところ売れたのは初めてだと打ち明けた。陸一は大切に懐に入れて家路を急いだ。

宮沢先生が童話や脚本を作っていることは学生時代から知っていた。その幾つかは聞かされたり、演らやらされたりしていた。しかしそれも多彩な才能の一つだと陸一たちは思っていた。しょせん先生の趣味だべと。

しかしながら、あらためて詩集を手に取って読んでみると、宮沢先生は一人の詩人であった。これまで知っている先生の全てが詩に投影されているのであった。化学や土壌学の授業で耳にした言葉や言い回しが散りばめられていて懐かしかった。先生の授業から受けた漠然とした印象が結晶して詩集になっているようにも感じた。

しかも先生は、これまで陸一が目にしてきた詩とは大いに違った詩を書いていた。実のところよくわからない詩がほとんどであったが、そこには唱えるだけで気が満

ちてくるような律動があったのだった。

春と修羅という表題の通り、「小岩井牧場」のような、ほのぼのとした詩と、「永訣の朝」のような壮絶な悲壮美を感じさせる詩の対比に、宮沢先生の心象の陰影が、奥行きの深さが感じられるのであった。

修羅という凄惨な響きを持つ言葉は、最愛の妹を失った先生の心の荒地の風景を表しているように陸一には思われた。それはあの頃、雪の農場や北上川の荒涼とした川べりで見かけたことがあった、黒いマントと帽子に身を包んで、とぼとぼと、うな垂れて歩いていた先生の、心の中のスケッチなのだと陸一は思った。

とりわけ陸一は「原体剣舞連（mental sketch modified）」に強く魅かれた。江刺の在の原体村に伝わる子供の舞が、横文字を散りばめた躍動感溢れる詩文の力によって、世界を、宇宙を揺るがす鼓動を持ったように思われた。ローカルはユニバーサルでさえあったのだ。修羅となって世界の果てまでさ迷った先生の魂が、故郷の岩手に立ち返り、無尽蔵のエネルギーの波動を受けながら再びむくりむくりと立ち上がるようであった。故郷は失った最愛の人々の魂と交感できるのだ。故郷には必ず春がやって来るのだ。修羅という言葉に象徴される先生の心の闇と、それとは正反対の躍動感溢れる先生の心の光。その明暗の無限の尺度は、先生が巻頭の序で主張するように第四次延長に感応する感性があってのことだろう。陸一は、今さらのように、自分はとても宮沢先生のように感ずることはできないと思うのだった。

陸一は、本を閉じ、丁寧に箱にしまうと、ランプの灯を消して、薄っぺらな夜具に身を沈めた。

貞三はしばしば陸一に町の肥料屋や機械屋への使いを頼むのだった。菜種かすや魚粉などの昔ながらの金肥の他に化学肥料が出回ってくると、貞三の知識では追いついていけなかった。

現金収入の乏しい百姓にとって、お金で贖う金肥は、正に金の肥料であった。しかも大抵は付けで買って収穫後に支払うのだった。たとえ思うように収穫が上がらなくても、払わなくてならないのだった。なかには高利貸のように利子を付けて支払いを要求する肥料屋もいた。

鋤や鍬などの道具のほかに、農業機械も村に入ってきた。足踏み式の脱穀機は秋の短い北国にはありがたい機械であった。しかし一旦故障を起こすと、修理にはそれなりの知識や技術が必要だった。

かつてひどい目を見たことのある貞三は、町の商人たちを狐や狸と思っているのか、肥料や機械の購入時には必ず陸一を立ち会わせた。

陸一は化学肥料の袋を前にすると成分表を確認し、それを元に価格を問い質すのだった。すると肥料屋の対応は、がらりと変わるのだった。

温泉の多い花巻一帯は、酸性の強い土壌であった。賢

治から土壌学を学んだ陸一は、肥料の投入と、石灰による土質の改良とどちらが収益に結びつくかを研究し、自分の畑で試してみた。生育状況が思った通りの結果を示すにつれて、陸一は嬉しくなってきた。自分の勉強が村で役に立つかもしれないと思った。

町に出たついでに立ち寄った書店で「二宮翁夜話」という本を見つけた陸一は、さっそく買い求めて少しずつ読み始めた。百年も昔の江戸時代の出来事なのに、わかりやすく新鮮だった。絶妙なたとえ話もあって、童話を読むように情景をありありとが心に浮かばせるのであった。それは尊徳二宮金次郎の談話の聞き書きであったが、その書物を通して、陸一は、尊徳の人柄に強い魅力を感じたのだった。

とりわけ「折節他より、新茄子到来せるを、糠味噌を漬けて食せしに、自然秋茄子の味あり、是に依って意を決し、其の夕より、凶歳の用意に心を配り、人々を諭して、其の用意を為さしめ」というくだりには圧倒されてしまった。尊徳は茄子の漬物の一切れから天下の飢饉を読み取ったのであった。そして自分は、宮沢先生のようには感じることはできなくても、二宮尊徳のように感じることはできるようになるかもしれない。なりたいものだと思うのだった。

その年の暮れ、陸一はいつもの書店で、紺色の真夜中を思わせる表紙の上に西洋画の貼り付けてある美しい本を見つけた。その絵には、雪景色の中をぽつんと外套を着て歩いている独りの男が描かれていた。平積みになっている一冊を手に取ると、図案化された金箔押しの題字は「イーハトヴ童話　注文の多い料理店　宮沢賢治著　菊池武雄挿画装幀」と読めるのだった。やはり宮沢先生の書物だった。開いてみるとまず美しい挿し絵が目に飛び込んできた。読めばもっと美しかろうと、陸一は、定価一円六〇銭で買い求めることに決めたのだった。

後日、金を渡した店主からは、やはり売れないという話を聞かされた。

その本の中の故郷を舞台にした童話は、美しいばかりではなく実に風刺が効いていた。その風刺は、とても子供にはわかるまいと思われたが、ただ当たり前に読み進めても岩手の自然の優しさや厳しさが命あるもののように心に伝わってくるのだった。

なかでも陸一は、「烏の北斗七星」に強く魅かれた。その話は烏になぞらえた戦争の風刺であった。しかもそれは余りに美しかった。徴兵帰りの若衆から聞いた軍隊とは大違いであったが、もし軍隊というものがこういうものならばという憧れがわいてくるのであった。その憧れは、故郷と女性という最愛の存在に対するより強い憧れから生ずるものなのかもしれなかった。

荒涼とした冬の平地の故郷を、山烏から守るために戦いに明け暮れる義勇艦隊の青年将校には、彼の帰りをは

らはらしながら待っている、美しく真っ黒な一番声のいい許嫁がいた。無事に帰還を果たした決死の任務が昇進によって報われた後に、（どうか憎むことのできない敵を殺さないでいいように早くこの世界がなりますように、そのためならば、わたしのからだなどは、何べん引き裂かれてもかまいません）と祈る青年将校がいた。その姿を蔭ながら見て、始終きらきらきらきらと涙を流し、うれしさのあまり溜め息をもらす許嫁の娘であった。陸一は何度も読み返して胸が熱くなるのを感じた。その夜は、帽子を手にして、俯いて北斗七星に祈る軍服姿の烏の挿し絵がそっくり夢に出てきたのだった。



まんじ110号特集号発行についてのお知らせ

先日のまんじ104号合評会にて、掲題の件につきまして参加されました同人各位のご賛同をいただきましたので、下記明細の通り計画を進めたいと思いますので御連絡申し上げます。

記

1. 発行日は平成20年11月１日です。
2. 原稿〆切は平成20年６月末です。従って来年の６月末には『まんじ』109号と、110号特集号の、二つのご寄稿をお願いすることになります。
3. 特集号ですから、読み切り物で四百字詰原稿用紙30枚（12,000字）程度のものをお願いします。新作でも既発表の物でも結構です。
4. 製作会社は栄光出版社です。

以上

発行人　三戸岡道夫
編集担当　中山　喬央

（司馬雑感 十二）

司馬遼太郎と京都

山田嘉久

一 司馬遼太郎の特ダネ

私の学生時代、「老いらくの恋」という言葉が流行語になったことがあった。

たしか住友本社総理事で歌人としても有名だった川田順が歌の弟子で三十歳近くも齢の違う元大学教授夫人と家出した事件だったと思う。

新聞の見出しにこの言葉を使ったのが当時、産経新聞文化部記者だった司馬遼太郎だったとは最近になって初めて知った。

司馬は川田の詩集の一節にこの言葉があったのを見つけたのだ。

「墓場に近き老いらくの恋は怖るる何ものもなし」

この事件は昭和二十三年暮れの出来事だが、現在でも高齢者の恋愛に使われる言葉となっている。

昭和二十年、兵役から帰還した司馬はその年の暮れに大阪の新世界新聞という三流新聞社に入社するが、六か月で退職。京都に本社がある新日本新聞社に転職する。しかしここも倒産したため産経新聞に再就職して京都支局で大学、宗教担当となった六カ月後の事件だった。

それから昭和二十七年に大阪本社地方部に転勤となるまで丸四年間、京都を舞台に活躍するわけだが、もう一つ、司馬が京都時代に遭遇した事件が金閣寺放火事件だった。全紙一斉にトップ記事として扱ったが、犯人の動機まで触れたのは司馬の執筆した産経記事のみだった。

「宗門へ不満の弟子が放火」

の見出しは司馬の特ダネとなった。司馬は宗教担当の「寺回り」として事件の本筋（警察からの）取材とは別に、直接鹿苑寺の庫裏に入り込み、その庫裏の黒板に犯人が書いたと思われる「また焼いたるぞ」の文字を見つけた結果だった。

そして他社を尻目に、かねてから昵懇だった住職の話を聞きだすことに成功する。

この事件を題材にした水上勉の「金閣炎上」（昭和五十四年刊）にもこのことが書かれている。

「新聞記者連の面接を拒絶していた村上慈海師は、七月三日午後に、当時産経新聞京都支局員だった福田定一とだけ陰寮で会見した。福田定一記者は、のちの司馬遼太郎氏である。」

なお司馬自身の初期（昭和三十七年）の作品に「古寺炎上」という短編がある。てっきりこの事件を題材にした小説かと思って読んだら、洛西のある古寺を舞台に焼死した高僧の謎を追いつつ、当時の観光ブームの京都を批判した内容だった。

いずれにしても司馬の原点は新聞記者として取材に明け暮れた京都にある。作家と一本立ちしてからも京都を舞台とした作品がいかに多いことか。

「歴史も人間風土もいまに連続していると感じられるのは、日本にあっては京都と土佐のみである。」（旅のなかの歴史）とも書いている。

また彼の後半生のライフワークとなった「街道をゆく」シリーズでも京都を舞台としたものは「大徳寺散歩」「嵯峨散歩」「洛北諸道」「叡山の諸道」と数多いが、その周辺の「丹波篠山街道」「湖西のみち」もこれに入れてよいかもしれない。

以下、記者時代を含めて司馬と京都の関係を探ってみた。

二 「東」と「西」の本願寺

JR京都駅から北上して烏丸通りに面しているのが浄土真宗大谷派の本山東本願寺、そこから西へ三百メートルばかりの堀川通りにあるのが浄土真宗本願寺本山の西本願寺である。

同じ浄土真宗本山である「お東さん、お西さん」（京都の人はそう呼ぶ）の区別は門外漢である私にはよく分からない。親鸞上人の廟を東山大谷に建てたのが始まりだそうで、歴史的にみれば「西」の方がやや古く秀吉によって移転整備されたのに対して、それから十年後、家康によって誕生したのが「東」のようだ。

この辺の事情は五木寛之の「百寺巡礼」にも詳しい。

いま、世界最大級の木造建築である「西」の御影堂は「平成の大修復」中。御影堂の少し先、阿弥陀堂の前には「世界文化遺産、本願寺平成大修復」と大きく掲示されていた。工事期間は平成十年から二十年までの十年間というからスケールが大きい。

司馬が新聞記者の時代、「東」「西」とも他寺院では見られない「宗教記者クラブ」があったそうで（こちらの方は「東」の方が先に出来た）司馬はどちらにも顔を出していたようだ。

「西」の記者室には司馬がいつも寝転んで本を読んでいたというソファーがあったことは「司馬雑感4」で記した通りだが、記者室自体は今は全く見当たらず跡地は付属幼稚園となっていた。

しかし司馬は他の記者に比べると記者室での滞在時間は極めて短かったようだ。司馬は大学担当も兼務していたので京都大学の記者クラブにも行くことも多かったし、それに本願寺では記者室以外の司馬だけの「居場所」がいくつもあったからだという。それからするとソファーにのべつまくなしに寝転がっていたわけではないので前記「司馬さんのソファー」は死後の「司馬伝説」かもしれない。

他の「居場所」の一つが西本願寺の境内にある「飛雲閣」。金閣、銀閣とともに「洛陽の三閣」といわれて国宝となっているので今では無断で入り込むことなどとてもできないが、(我々は庭から眺めただけ)司馬の時代には融通がきいたのだろう。

(なお、その数年後、司馬は直木賞受賞作「梟の城」で世に出るが、この飛雲閣が早速、登場する。この小説の最後に主人公が秀吉の寝室に忍び込む場面があるが、これは飛雲閣を想定して書いたといわれる。この建物がその昔、秀吉が聚楽第を建てたときの居室だったという史実に基づいている。)

それともう一つの「居場所」は近くの龍谷大図書館。記者クラブに顔を出してもすぐに図書館に直行して「資料と首っ引き」だったという。なお竜谷大には前記五木寛之も五十歳になってから聴講生として通学している。

司馬の記者時代、西本願寺に始終出入りしている近所の菓子屋の若者に司馬が「イツごろから出入りしての？」と聞くと「へえ、戦国時代」との答えに京都の歴史を感じたと随筆「「京都国」としての京都」に書いている。

その和菓子屋がどこなのか私は本願寺前をうろついた。あるいは「笹屋伊織」ではないかと推量したが、この店の創業は一七一六年とあるので司馬の書いた和菓子屋はもっと古いことになる。その後、別の随筆(歴史の亡霊)を読むと堀川通りに面した「亀屋陸奥」であることがわかった。銘菓「松風」の本舗でしられるこの店の創業は実に一四二一年。三代将軍足利義満が死去して間がない頃というからたしかに古い。

幕末、「西」は長州色が強く、勤皇方についたのに対して「東」はもともと家康によって分派しただけに佐幕派だったために鳥羽伏見ノ戦の前後に実に狼狽したさまを司馬は前記随筆で書いている。

しかし新撰組の駐屯所となったのは「東」ではなく「西」だったのもややっこしい。新撰組＝徳川＝「東」となるのが筋道だが、当時「東」は「禁門ノ変」で焼け野原だったので土方歳三が「西」に目をつけたためだった。ここで新撰組は大砲の空砲実験など「実に極楽に地獄」(西本願寺のパンフレット)の嫌がらせをしたが、土方を主人公とした「燃えよ剣」ではあまりこの辺のことは書いていない。

このことは「池田屋ノ変」の発端となった長州藩士古高俊太郎への凄惨なリンチについて殆ど触れていないことと軌を一にする。土方歳三の漢(オトコ)ぶりを書きたかった司馬としては土方のマイナスの部分は目をつぶったのであろう。それは司馬の歴史小説(特に初期の作品において)が史実に忠実であろうとするよりも一種の美学を物語ろうとするものであることを示している。

ともかく困り果てた「西」では新たに隣地に新撰組本陣を建設して移ってもらうのだが、その新本陣もわずか六ヶ月の命だった。この年、王政復古の大号令が発せられたのである。

今、新本陣跡には豪壮なホテルが建っている。

三「王城の護衛者」

その「燃えよ剣」の一節である。

「鉄鋲を打った城門のような門がそびえていた。会津本陣とはいえ、ありようは浄土宗別格本山金戒光明寺である。が、寺院建築というよりも、丘陵を背負い城郭に似ている。」

その金戒光明寺には平成十五、一六年と二回訪れた。京都の人々から「黒谷さん」とよばれているそうだが法然上人が草庵を結んだところで浄土宗最初の霊跡として名高い。

京都守護職に任命された松平容保は此処を宿舎兼駐屯地としたので近藤勇や土方などもこの寺をしばしば訪れている。

容保については司馬は中篇「王城の護衛者」で主人公として取りあげている。京都守護職となった容保は一方では熱心な尊王家で、その誠実さぶりを孝明天皇は大層お気に召していたようで、自ら二度、内密の震翰(天皇自らの書状)を下しているのである。

「極蜜々書状遣候」で始る震翰は「朕はそちを最も頼みにしている。一朝有事のときには、その力を借りんと欲する」。容保は泣いて、この主上のためにと誓った。しかし天皇の崩御とともに容保と会津藩の悲劇が始る。その勤皇家の容保が最後には朝敵となってしまったのは歴史の皮肉だと司馬は書く。

書状のなかで、天皇はくりかえし「少しも漏洩無之様」と書いていたことを容保は生涯守り通した。家族にまで明かさなかった。

容保は肌身に長さ一尺あまりの竹筒をつけていた。入浴のときだけ脱衣所の棚に置いた。明治二十六年の死

後、竹筒の中身を一族が検めるとなんと孝明天皇からの震翰二通だった。

「竹筒一個、書類二通という品目で、いまも容保の怨念は東京銀行の金庫の中にねむっている」がこの本の最後の文章である。

その後日談が「歴史を紀行する」にある。

「王城の護衛者」を書き終えた司馬に容保の摘孫から電話が入る。「秩父宮妃殿下がこの本を読まれて感激、すぐに電話せよとのことでした」とのこと。松平家の出である妃殿下が昭和の始め秩父宮家に輿入れされたときには「なにも朝敵の家の娘を皇室にいれることはない」との意見があったそうだ。その妃殿下がこの本を熱心に読まれたという。

電話を受けた司馬は「この瞬間ほど私は会津人の悲傷のなまなましさと深さを粟粒立つほどに感じたことはなかった。」と感動的に書いている。

さらに後日談。それから二十年後の平成元年、電話をかけた張本人（松平保定氏）と司馬は始めて会津で会われたことを「街道をゆく（白河、会津のみち）」で記している。

この金戒光明寺の裏手の墓所には容保に従い鳥羽伏見の戦いに斃れた会津藩士三百名が眠っている。

一方、薩摩藩士五百名の墓は紅葉で名高い東福寺（臨済宗総本山）の奥「即宗院」にある。一般の観光客は東福寺の通天橋あたりの紅葉を愛でるだろうがその先までは訪れない。此処には西郷隆盛自筆の銘文が刻まれていた。

さらに坂本竜馬を始め幕末の志士たち壱千名の墓は全国で唯一の幕末専門の「霊山博物館」の奥地にある。

四　司馬が好んだ南禅寺、青蓮寺そして大徳寺など

司馬が記者時代好んで行ったのは南禅寺の方丈や青蓮寺の庭園だったという。ここで本を読んだり瞑想にふけったりしていた。

南禅寺の方丈は今、国宝になっているが、その三門（「三解脱門」の略だが、「山門」のどちらでもよいと司馬は書いている）は石川五右衛門の

「絶景かな、絶景かな。春の詠めは値千金とは小さなたとえ、この五右衛門が目からは万両―」で知られる。楼上で見得を切る五右衛門と、三門の下から見上げる真柴久吉（羽柴秀吉）とがにらみ合う、いまも繰り返し演じられる人気の場面だが、実は完全なフィクションでこの三門ができたのは五右衛門の死後であるらしい。

念のため登ってみたがさしたる風景ではなかった。

また青蓮寺の庭園は小堀遠州の作として名高い。

そして（街道をゆく）シリーズの「大徳寺散歩」。

この作品は平成元年の作だが、私も大徳寺には二回ほど行った。

最初は平成八年夏、「京の三名園」として天竜寺、竜安寺とともに回った。二度目は十三年秋、東福寺、永観堂などとともに秋の紅葉を楽しんだ。

「大徳寺散歩」では司馬は読者の予備知識として、まず京における臨済宗の大本山について触れている。

建仁寺―開祖は臨済宗の祖栄西（一一四一―一二一五）。栄西はまた宋からはじめて茶の種子をもたらした人としてしられる。

そして前述の石川五右衛門で有名な南禅寺。

東福寺―建造物が立派なことから「東福寺の伽藍づら（面）」といわれる。

天竜寺―室町幕府の官寺であるため「天竜寺の武家づら」と呼ばれた。

妙心寺―花園大学の経営によるので「妙心寺のソロバンづら」

これに比べて大徳寺の特長は「大燈国師（一二八二―一三三七）以来のきびしい禅風をまもるべくできるだけ世間から超越しているところにある」と司馬は書く。また千利休以来、茶道の本山としてしられてきたため「大徳寺の茶づら」と呼ばれた。

不思議に大徳寺は古今有名人との関係が深い。

まず一休の寺として知られる。一休は著者不明の「一休噺」として庶民の人気者になったし、明治以降も頓智話の主人公として愛され続けた。私ごとながら小学二年の頃、学芸会で一休噺を朗読したことから私にとっては今でも一休には特別な思いがする。人の好悪はそんな簡単なものかもしれない。

実際の一休は司馬によると女犯の破壊僧でしかも彼自身、必要以上にそれを公表したという。大徳寺と堺を結びつけたのも一休（宗純）だといわれる。堺の富商たちはこぞって年少の頃から大徳寺禅を学び「宗」の一字をもらった。今井宗久、津田宗及など。また堺で納屋貸しを営んでいた千家の与四郎も「宗易」と称した。千利休のことである。

晩年の秀吉は自己肥大がはなはだしく一個の愚者となっていたが、利休も同じように自己肥大になっていたと司馬は考える。一介の茶頭にすぎないのに、大徳寺楼上の利休像は雪駄をはいて立っている。その下を勅使も通れば秀吉も通る。不遜、無礼が賜死の理由だったという。

また大徳寺は秀吉が信長の菩提を弔った寺としても知られているし、有名な沢庵和尚もこの寺の住持になっている。

国宝の唐門は一日中見ていても飽きないことから「日暮の門」ともいわれるが、境内には二十以上の塔頭が立っている。「大徳寺散歩」では司馬は多くの塔を見て回

っているが、これは彼にして初めて出来ることで、多くの塔頭のうち公開されているのは四つに過ぎない。

数多くの塔頭の中で最も有名なものは小堀遠州が自らの菩提所として創建した孤逢庵だが、ここも非公開となっている。(北端にある芳春院もその名が示す前田利家の未亡人マツ(芳春院)が寄進し小堀遠州が設計した。)

私も二回とも見学できたのはいずれも「瑞宝院」のみだった。瑞宝院はキリシタン大名で知られる大友宗麟の創建によるものであるが、ここでの見学は厳しかった。まず靴の脱ぎ方がなってないと住職に怒られた。禅堂では履物は端然とそろえなければならないと教えられた。上がってから広い廊下に全員正座させられて住職の禅話が長々と続く。

はじめのうちは前方の有名な枯山水の「独座庭」を鑑賞していたがそのうち足の痺れに悲鳴をあげるほどになった。

同じようなことを司馬は書いている。

戦後まもなく進駐軍の将校夫人たちが見学したとき、彼女らはハイヒールをぬぎちらして式台にあがった。これをみた和尚が大喝したというのである。当時、進駐軍関係者に大喝したのはこの和尚ぐらいのものではないかと司馬は書いている。

前述の通り大徳寺では一部しか公開されていないが、これがすっかり観光寺院になったときにはこの名刹は崩壊するであろうと司馬は記す。

五　東寺

名著「空海の風景」の舞台にもなった東寺

その五重塔は新幹線の車窓からも見えるが、その高さは基壇を含めて五十七メーターあるそうだ。現存する木造の古塔のなかでは最大。平安遷都の際に創建された官寺を八二三年に空海が嵯峨天皇より賜り、真言宗の根本道場としたのは「空海の風景」に詳しい。この小説は構想から完成まで十年を要したといわれる。

司馬はこの名著を書いていた頃の昭和五十年代は毎年、暮れから正月にかけて京都のホテルで過ごすことが習慣になっていたようだが、訪問客との待ち合わせの場所は常に「東寺の御影堂の前」を指定していたことを「古寺巡礼」(高野山管見)で書いている。

東寺は正式名は「教王護国寺」と呼ばれるが、司馬はこうも書いている。

「(空海は)自分の密教をもって鎮護国家を説き、あるいは教王護国などといって恩を売りつけ、地上の権力を自分の道具として思想の宣布をはかろうとした。」

「空海は、東寺を密教の道場にするにあたって、思い切った閉鎖的方針をとった。東寺に他宗の者を雑居せしめないということであった。」

南大門から金堂、講堂、食堂が南から北へ一直線に並ぶ伽藍配置はこの寺独自なものという。金堂は豊臣秀頼によって慶長八年(一六〇三)に再建された。講堂には空海の密教思想を表現し曼荼羅を立体化した二十一体(五仏、五菩薩、五大明王、六天)の仏像が並んでいるが、その殆どが国宝級と聞いて驚いた。

私の故郷千葉県では国宝は(国立歴史民俗博物館を含めても)全県でも八つしかないのにとも思いながら見学した。

ここはまさしく密教の世界である。中央に大日如来が安置され、それを囲むように多くの如来。さらにこれらの仏を外敵から守るために右に多聞天、梵天、持国天、左に広目天、帝釈天、増長天が並んでいる。会わせて二十一体が密教の世界を構成しているわけである。

司馬は書く。「その造形の異様さに、人間の空想力というものはこれほどまで及ぶものかと呆然とする思いがする。」「それほど思想人としての空海は、日本人ばなれしている。」(「我が空海」)

司馬は「空海の風景」を書くにあたって仏教の述語は一切使わないことを心がけたとこの本の「あとがき」に書いている。それでもなお私などには難解と思えるのは、一にかかって当方の仏教知識の浅薄さによるものだろう。大乗と小乗、顕教と密教、正蜜と雑蜜の違いなど私の知識を越える。

六　幕末の京都

司馬作品の初期の傑作「燃えよ剣」「新撰組血風録」には前記、西本願寺や金戒光明寺のほか京都の各地が登場する。

八木邸と前川邸

新撰組の屯所となった壬生八木邸。新撰組最初の筆頭局長だった芹沢鴨はこの屋敷の一室で近藤、土方、沖田らによって襲撃され惨殺された。

新撰組による「最初の粛清」だった。

「芹沢への初太刀は沖田、起き上がろうとしたところへ歳三が二の太刀を入れ、それでもなお縁側へ転び出て文机でつまずいたところを、近藤の虎徹が、まっすぐに胸を突きおろした。」(「燃えよ剣」)

ところが同じ著者の「新撰組血風録」では「芹沢の背から胸にかけて、土方歳三の一刀が、氷のような冷静さでゆっくりと刺しつらぬいた。」となる。(芹沢鴨の暗殺)

地元ボランティアの人が熱心に説明してくれたが、縁側の刀傷や文机が生々しかった。奥の「離れ」は現在、菓子店になっており名物「屯所餅」をご馳走になった。

八木邸とせまい道路一つを隔てた前川邸(近藤、土方らの宿舎)には翌年出かけたが、此方の室内は非公開だったものの、前述の古高俊太郎を拷問したという土蔵を外から見ることが出来た。

近くの壬生寺にも詣でる。境内には壬生塚とともに村田英雄が唄った「アー新撰組」の歌碑がご愛嬌だった。壬生寺はまた壬生狂言でも知られているが、司馬には短編「壬生狂言の夜」がある。新撰組助勤松原忠司と浪人の後家との心中事件を扱った新撰組裏面史となっている。

島原角屋

新撰組の隊士たちが足しげく通ったという島原の「角屋」も見学した。この種のものでは全国で唯一の「国重文化財」なのだそうな。

現地ガイドから揚屋と置屋の違い、太夫と花魁の違いの説明を聞いたがここの柱にも新撰組による刀傷が残っていた。

池田屋跡、寺田屋、近江屋跡

一八六四年（元治一）初夏、三条の池田屋で密会していた尊攘派浪士を新撰組が急襲、一網打尽にした「池田屋ノ変」の跡地には今、「池田屋騒動之跡碑」が立っているだけである。

司馬はこの事件で命を落とした長州人吉田稔麿を高く買っている。その惚れぶりは長編「世に棲む日々」に詳しい。また「街道を行く（長州路）」の最終章には「幕末の長州の若者のなかで、吉田稔麿というのが好きである」とも書いている。彼は松下村塾の塾生で久坂玄瑞や高杉晋作以上に松蔭に愛されたが、最後は沖田総司の手によって死んだ。

一方、「竜馬がゆく」でおなじみの伏見の舟宿「寺田屋」は今でも残っていて一般に公開されている。幕府捕吏に襲われた竜馬が入浴中の仲居おりょうの機転により命拾いをしたあの宿である。またこの宿は薩摩藩士同士討ちの「寺田屋騒動」でも知られている。

京都市内で泊まったシティホテルの近くに「阪本竜馬遭難の地」碑を見つけた。竜馬暗殺の地となった「近江屋」跡である。

司馬は追うもの（新撰組）と追われるもの（竜馬）を同時進行形で描いた。「燃えよ剣」を書き始めた頃（昭和三七年）には「竜馬がゆく」の連載中でもあった。

（また司馬はほぼ同じ頃「幕末暗殺史」（後に「暗殺」と改題）も書いている。）

「男の典型を一つずつ書いてゆきたい。そういう動機で私は小説家になったような気がする。」

当時の司馬の言葉である。

また当時の随筆「上方住まい」によれば、大坂住まいの彼はしばしば京都に泊まりこんでいる。昼は仕事をして夜は祇園、先斗町を歩いたとある。

「この散歩は京都における新撰組の事件地図をつくるうえで都合がいい。むろん坂本竜馬の足跡の地図も歩いているうちに自然にできあがるわけである。」

なお、「竜馬がゆく」では只一回、竜馬と土方が京の

街中ですれ違う場面が出てくる。

七条油小路の本光寺

近藤みずから口説き落として新撰組に加えた才人、伊東甲子太郎が粛清された場所は七条油小路にある小さな寺（本光寺）の狭い境内にあった。我々を待っていた九十歳過ぎの尼さんから長々とその経緯を聞いたがあまりにも小声のため殆ど聞き取れなかった。

近くに「天満屋事件跡」という標識もあった。さて天満屋事件とは？

それほどこの辺には幕末の史跡が多い。

（竜馬の暗殺を新撰組の仕業と睨んだ十津川郷士中井庄五郎は天満屋に斬り込んだが、逆に新撰組によって返り討ちに遭ってしまう。これが「天満屋事件」だと後でわかった。「街道をゆく（十津川街道）」にもその復讐劇が描かれている）

鳥羽伏見の戦い

薩摩軍の本陣となった「御香宮神社」。今は安産の神社となっている。境内に香ばしい清泉が湧いたため「御香」の名がついたそうだが、今でも湧き出すのか数人の人がペットボトルに水を受けていた。

「御香宮とは妙な名だが、延喜式による古社で、伏見郷一円の鎮守である。――徳川期を通じて巨大な神域となった」とこの戦いを描いた短編（四斤山砲）で記している。

一方、新撰組は幕軍の一員として近くの伏見奉行所を本陣とした。

「いま、どうなっています」と御香宮の神主さんにきくと「団地どすわ」と吐き捨てるようにいった。」と（燃えよ剣）に書かれている。明治以後、陸軍の基地や米軍に接収されていた時期もあったという。

「日本歴史は関が原でまがり、さらに鳥羽伏見の戦いでまがった。その場所にひとかけらの碑もなく、ただ団地は見渡すかぎり、干し物の列である」と司馬は書いているが、我々が訪れたときには団地の片隅に「伏見奉行所跡」の石碑だけがひっそりと建っていた。

伏見奉行所と御香宮神社の延長線上に薩摩藩の大砲が火を噴いた龍雲寺がある。大山弥助（巌）の率いる薩摩大砲隊は宮神社の頭上を越して幕府軍を攻撃した。薩摩藩などの西軍三千に対して幕府軍（東軍）の兵力はその五倍の一万五千を擁したにもかかわらず負けたのはこの砲弾の違いだったといわれる。この様子は「燃えよ剣」にも詳しい。

明和元年（一七六四）創業という料亭「魚三楼」で昼食を取ったが、玄関口にはこの戦いの弾痕が残っていた。

七　京都近郊を歩く

1　「丹波篠山街道」（街道をゆく4）

司馬は昭和四十七年、京都の長岡から丹波篠山街道を亀岡まで訪ねているが、その街道に沿って保津川が流れている。私も昭和三十年代に保津川下りを楽しんだことがあったが、たしか京都から山陰本線に乗って亀岡で降りた記憶がある。

亀岡といえば明智光秀の本拠地。（なお明治以前は亀山といった。）

当然、司馬は光秀が天正十年（一五八二）、軍勢を率いて亀山城を発し、本能寺に信長を襲った「本能寺ノ変」を記しているが、かって長編「国盗り物語」を執筆しているとき、光秀の心理的要因を考えて数日間ふさぎ込んでしまったことを吐露している。

たしかに光秀にとっては信長を殺してもその後、天下を獲る成算は全くなかったが、それを敢えてした要因はなんだったのか。後世の史家は様々な要因を挙げているが（怨恨説、野望説、朝廷関与説、足利義昭関与説、秀吉黒幕説、はては光秀非関与説まで）司馬は光秀が善政を敷いていた所領地丹波を信長によって理由なしに取り上げられてしまったことであると考えている。

いま改めてこの「国盗り物語」を再読してみると、たしかにこの主張は貫かれていることに気がついた。

その後、この地は江戸時代には青山氏の所領になったが、江戸屋敷は渋谷の近くにあったので、いま東京の「青山通り」にその名を残している。

またデカンショ節の一節の「丹波篠山　山家の猿が花のお江戸で　芝居する」の由来は旧青山藩主が一高の生徒に教えたのが全国にひろまる端緒になったことを司馬は披露している。

司馬はこの後、丹波篠山街道から三田に入っているが、この地は旧国名でいえば丹波ではなく摂津である。したがって京都からは遠くなるが、逆に大坂や神戸には近くなる。司馬が訪れた昭和四十年後半には既に土地造成が始まっていて、篠山の静けさとはまるで違った雰囲気を嘆いている。

しかし私が訪れた昭和三十年代には全くの田舎で一面に名物のイチゴ畑が広がっていた。

その三田から南の山を越えると温泉地で有名な有馬に出る。戦国期は有馬氏の所領だったが、江戸期に入ると有馬氏はなぜか筑後久留米二十一万石の大大名となる。この理由を司馬は有馬旧伯爵家の当主である作家有馬頼義に直接聞いたが、氏も知らなかったそうだ。

この有馬温泉の奥地にイノシシ料理が名物の鄙びた武田尾温泉がある。

2　「叡山の諸道」と「嵯峨散歩」

前者は「街道をゆく」シリーズの十六巻目（昭和五十五年）、後者は二十六巻目（昭和六〇年）に当たる。

司馬は「叡山の諸道」を歩いた数年前に前述「空海の風景」を書いているので、当然、この本でも空海のライバルで叡山の創建者である最澄について多くのページを割いている。

また信長の「叡山焼き討ち」についても触れている。

元亀二年（一五七一）、信長は叡山に立てこもる僧のみならず子女にいたるまで数千人を皆殺しにした。執行官の光秀は当然、反対したし信長の忠実な部下であった秀吉すらもこのときばかりは職務をいい加減に行ったといわれる。

日本最初の「集団大虐殺」（ジェノサイド）であり、のち信長は伊勢長島の一向一揆の弾圧で二度目のそれをやる。

また司馬は知人である福田徳郎氏（本職は朝日新聞のカメラマン、後の写真部長）が叡山の無動寺で法華大会を受ける式に立ち会っているが、その模様を詳細に記している。

後年、私は直接、当の福田住職から当時の話を聞く機会があった。

「嵯峨散歩」にも前記の保津川が出てくる。この川は古来は舟も筏も通さぬ川だったため、丹波の木材はすべて陸路で京に運ばれていた。これを保津川下りにしたのが角倉了以であり、彼は嵐山の一端にある大悲閣に祀られている。

この後、司馬は近くの天竜寺も訪れている。夢窓国師の創建になるもので、京都五山の第一位、世界遺産にも登録されている。

その更に奥に紅葉で名高い高雄、槙尾、栂尾の三尾がある。その中の神護寺は空海の住んだ寺として知られている。

私がこのあたりを訪ねた昭和四十年代には「高雄」というネーミングのカラーテレビがよく売れていた。

3　天王山

大阪府内でも京都寄りの高槻市に住んでいた私は、日曜日には子供たちを連れて大阪と京都の境にある天王山にはよく出かけた。海抜わずか二七〇メーターの小山ながら日頃、運動不足の私は元気に遊びまわりながら登ってゆく子供たちの後を追うのが精一杯だったのを思い出す。

秀吉と光秀が天下を争った山崎の合戦もこの付近が戦場となった。東海道線「山崎駅」を挟んで天王山と反対に位置するのが「山崎八幡宮」だが、中世の油販売を独占した油の神様として知られ「国盗り物語」にも登場する。

勿論、現在では戦国時代のような盛大さは微塵もないが、それでもなお昭和の時代になっても、味の素、昭和産業といった食用油の大会社が氏子となっているのは歴史の面白さだと司馬は書いている。

（了）

赤堀四郎博士の一生（七）

松下魏三

十　化学研究者としての初陣

いつもひたむきな向学心に燃えていた四郎は東北帝大理学部化学科の学生生活が夢のように過ぎ、大正十四年（一九二五年）の三月卒業した。

大学三年間の学費を援助してきた味の素本舗は四郎の能力と努力を高く評価し、さらに大学院五年間の学費の援助を快諾したので、引き続き眞島研究室で有機化学の研究をすることになった。

大学院では研究するテーマは自ら選ぶことになったが研究生活を支援している味の素の会社のために少しでも役立つような研究をと考え、アミノ酸に関する文献をいろいろ調べたが、すでに多くの学者が研究しており適当な研究テーマを見つけることができなかった。いろいろ思案しているうちに二つばかりのテーマを選んで眞島先生の意見を伺った。

先生は渋い顔をして「こんな問題はわざわざ研究しなくても、大体の見当はついている。やってみなければわからない問題を解くのが本当の研究だ」といわれた。その後いろいろ考えてみたが、駆け出しの研究者として思案にくれていると、先生に呼ばれ、「醤油の香気成分を研究しなさい。」といわれ、テーマは決まったのでほっとした。しかし、このテーマの内容をどのように分析し、どのような方法で研究していくべきかを考えると気が重くなるばかりであった。

その頃日本の有機化学の研究は花の色素や生薬（漢方薬など）の有効成分の研究が中心で植物や動物から特殊な成分を純粋に取り出して、その化学構造を推定することとさらにそれを化学的に合成して確かめるという研究が多かった。草花や生薬の成分は分離することは比較的やさしいが、大変根気が必要であった。ところが醤油は複雑な発酵という作用で長い時間をかけて微生物がつくるので、発酵作用によって非常に多くの成分ができる。したがって微量の成分を一つ一つ調べて、香気のある物質を見分けるのは大変困難な仕事であった。「大変難しそうでありますから・・・・・」と尻込みしていると、眞島先生は「難しいからこそ研究する価値があるのだ」と叱られた。

眞島先生は明治四十二年（一九〇九年）から約八年間、難物といわれた東洋特産の〝うるし〟の研究をし、その構造式を確かめた国際的に有名な研究者であるから、その大先生に叱られては一言も返す言葉はなかった。

しかし四郎は少年時代大蔵省の専売局で給仕をしながら夜学に通い、化学分析室で実験をし、その後千葉医専の薬学科に学び、さらに西沢先生の指導によりトリモチの研究に明け暮れた経験があるので、旧制高校出身の大学院生の誰にも負けない自信があった。だから先生の激励の言葉であると受け止め直ちに実験に取りかかった。

醤油は原料である大豆と麦または米を蒸して麹を混ぜ発酵させると、でんぷんがアミラーゼという酵素の働きでブドウ糖に変わり、大豆のタンパク質はプロテアーゼという酵素の働きでアミノ酸になる。そしてこのブドウ糖とアミノ酸がさらに反応して味とにおいが出てくる。これが醤油の色となり香りとなるのである。

このような色がついて香りができる反応を発見したフランスの女性化学者の名をつけて〝マイラルド反応〟といっている。

これはカステラなどの焼菓子の表面の焦げた茶色の色とにおいもこの反応で、卵や小麦粉のタンパク質と砂糖を混ぜて高温で焼いた時に起こるのもマイラルド反応である。

カステラは高い温度でマイラルド反応を速く進めるのであるが、醤油は低い温度で何か月もかけてゆっくり熟成する反応で、あのような褐色と香りとうま味が出るのである。

このように低い温度で長い時間をかけて醤油が熟成されていくことは日本の伝統的な醸造技術であった。

四郎は醸造についての知識はなかったが、醤油がマイラルド反応によって出来る成分を見つけ、その正体を確かめてからこれを合成してみようと考え、研究をはじめた。

まず、上等の醤油を二百リットル買ってきて、この醤油に水蒸気を通して蒸留し、留出した液をエーテルに混ぜて抽出し、抽出したものから有機酸を除き、さらに蒸留すると、残ったものは香気の強い油のようなものとなり、約十グラムとれた。

早速この十グラムの油を分析してみると、いくつかの有機化合物を見つけることが出来た。その中にはすでに先輩の研究者が発見して報告されているものが多かっ

たが、それらの物質をいろいろ調合してみたが、醤油の香ばしい香りは出てこなかった。しかし、きっと残ったもののなかに未知の成分があるのではないかと考えて、いろいろな実験を繰り返してみたが見当がつかなかった。

ところが、ある時今までとは全く別の実験をしていると、イオウと水素が化合して卵が腐ったようなにおいがする硫化水素を使ってみると、偶然にも残った溶液が醤油に似たようなにおいがした。

このとき四郎はもしかすると醤油の香気成分にはイオウが含まれているのではないか。イオウであれば昇汞（塩化第二水銀）という薬品を使えば捕えることができるのではないかというアイディアがひらめいた。

昇汞は猛毒の水銀と塩素の化合物で昔は消毒薬として使っていた。薬学出身の四郎は昇汞は水に溶けにくいがエーテルには溶けることを知っていた。

たまたま過日、亡くなった次兄の養子先である京都の薬局に遊びに行っていた時退屈しのぎに見た「日本薬局方」という書物の中に「昇汞は水に難溶性であるが、エーテルにはよく溶ける」と書いてあったことを思い出した。

そこで早速冷蔵庫にしまっておいた醤油から抽出したエーテル溶液を少し取り出して、昇汞のエーテル溶液を混ぜてみた。すると、たちまち白く濁って、よくみると水滴のようなものがいくつかついている。これを冷やしたら結晶になるかもしれない。と考え、一晩冷蔵庫に入れておいたところ、水玉みたいだったものが綺麗な結晶になっていた。

結晶というものは、有機化学を研究する者にとって、ものが綺麗になった証拠であり、この結晶をさらに分析すれば何か手がかりが得られることになる成功への登竜門である。

四郎は誰も思いつかなかった昇汞という水銀化合物を使って醤油から抽出した物質の結晶化に成功したのである。

このことは化学実験をする者にとって並並でない才能をもっていることがよくわかる。

この結晶は量は僅かであったが、水銀を含んでいるから目方は非常に重い。構成している元素を分析するには十分な量であったので、いろいろな分析操作をして、これがイオウを含んでいるアルコールの一種であるメチオノールという物質であることがわかった。

このメチオノールが発酵の途中でメチオナールというアルデヒド(註)に変わるのである。

これが醤油の香気成分であるとほぼ見当をつけて、醤油とは関係のない化合物から合成してみたところ、非常に強い醤油の香りがした。

この合成したメチオナールとの比較によって確かめられた醤油の香気成分の発見は、今まで誰も研究していなかった分野を四郎自らの着想と努力によって見つけたもので、今までの学説を改めるとか、将来企業として発展するようなものではないが、化学の研究者としての自信をもつことができた初陣の成果であった。

四郎は後に「この研究を非常に思い出深い研究であり、昨日のようにはっきりと記憶に残っている」と語っている。

この研究が注目されるのは、第一に、誰も思いつかなかった水銀化合物を用いて結晶化に成功したこと。第二に、別の実験で硫化水素を用いた溶液のにおいをかいだところ、醤油のにおいに似ていた。これはひょっとすると醤油の香気成分の中にイオウが含まれているのではないか。それならば昇汞によって捕えることができるのではないか。という一種の〝ひらめき〟が働いて昇汞のエーテル溶液を醤油のエーテル抽出物に混ぜてみよう。と考えた四郎の頭の回転の素晴らしさである。

この直感の鋭さは凡庸な化学者ではないことを立証しているのである。

どのような学問でも理論だけでは進まない段階があり、一種のひらめきのような直感が必要になる。この研究は四郎の頭の回転と直感の鋭さを示しているものである。

このような直感は湯川秀樹博士がベットのなかで中間子理論を考え出したことやペニシリンの発見者のフレミングがバクテリアを培養したペトリ皿(註)に不注意で落した鼻水のまわりのバクテリアが消えていたことからリゾチームというバクテリア溶解酵素を発見した逸話は優れた発明や発見には予想もしないひらめきや直感がきっかけとなっていることを物語っている。

四郎は後に「わが青春」（静岡新聞・一九九〇年一月六日～三月二〇日）のなかで、

「本物のしょうゆのにおいというのは非常に複雑で、合成したものはしょうゆに近い香りは得られても発酵という自然のプロセスが作り出す、あの芳醇な香気には今一歩不足していた。現在では百種類以上の香気成分がわかっているが、これらを合成して調合してもしょうゆの香りそのものにはならない。自然の働きは複雑微妙で今の化学ではこれを超えられない。」と述べているように、常に現象を冷静に見つめて、慎重にしかも謙虚に取り組んでいく優れた化学者らしい姿勢がうかがわれる。

つづく

(註) アルデヒド
脱水素されたアルコール。（広辞苑）
アルコールと酸の中間のもの。

(註) ペトリ皿
検査や実験などのときに使う、ふたつきの丸く浅いガラス皿。

還暦からの考古学（十）

三角縁神獣鏡に対する考え方の変化（その4）

中山喬央

先ず官営の「尚方作」の銘文を民間で真似をしたと考えられる「上方作」系浮彫式獣帯鏡は、瑞獣を主文としますが、漢鏡4期に細線式が出現し、そこから漢鏡5期に浮彫式が現れた流れを汲むもので、江南で作成された浮彫式獣帯鏡とは繋がりません。

次に飛禽鏡は羽根をひろげた鳥を浮彫り風に表現した徑一〇㎝以下の小型鏡ですが、四ヵ所に乳（小さな丸い突起）を配した型式は、今のところ山東・河北両省から出土しているだけなのです。

画像鏡は二世紀の初めに江南で創作された徑二〇㎝を超える大型鏡が有名ですが、楽浪では今のところその大型鏡は一面しか見つかっておらず、徑一〇㎝程度の徐州系統と思われるものが比較的多く見つかっているからです。

一方夔鳳鏡と獣首鏡には、二世紀中頃から後半にかけ

漢鏡7期の鏡

漢鏡7期の鏡は三段階に分けることが出来ます。

これを出土地毎に楽浪郡・九州・九州以東に分けて分析して見ますと、すべての地域で6期の鏡出土枚数を上回りますが、楽浪郡と九州は第一段階だけが多く、第二・第三段階に入りますと、6期よりもずっと下回ってしまうのに対し、九州以東だけが、高水準を維持します。

楽浪郡

先ず楽浪郡の出土状況を説明します。

第一段階は、上方作系浮彫式獣帯鏡・飛禽鏡・画像鏡・夔鳳鏡・獣首鏡などがあります。

このなかで斜縁を持つ上方作系浮彫式獣帯鏡・飛禽鏡・画像鏡の三種類の鏡は、中国であまり例がありませんが次に述べる理由で、二世紀後半に山東南部、江蘇北部で作られた徐州系統の鏡と考えることが出来ます。

第二段階には画文帯神獣鏡が現れます。

神獣鏡とは、東王父・西王母、伯牙などの神仙と、龍や虎などの霊獣を浮彫り風に表した鏡のことで、二世紀はじめに先ず四川で三神三獣の環状乳神獣鏡が作られます。

この鏡が多く見られるようになるのは二世紀第3四半期に四神四獣鏡が現れてからです。ここまでを漢鏡7期第二段階前半とします。

第二段階後半に入りますと、二世紀末頃に鏡の製作地がそれまでの四川中心から長江中・下流域に移ります。そして三世紀初めになりますと霊獣の肩と腰の部分が環状に突起し、神仙と霊獣が鈕の周りをまわっていた四神四獣環状乳神獣鏡から、神仙と霊獣が全て同一方向を向いている同向式神獣鏡、鈕に向かって四神と蟠龍（わだかまっている龍）形の霊獣を配した求心式神獣鏡と、三世紀の江南を代表する鏡となる東王父と西王母及び霊獣が鈕をはさんで向かいあっている、対置式神獣鏡が

ての年号を記した紀年鏡がありますので、「広漢西蜀」の銘文や文様の特徴などから二世紀後半の四川における工官（これも官営工房）系統の鏡です。楽浪出土と伝えられる延熹七年（一六四）銘獣首鏡がその例ですが、これを含め三世紀に作られた江南の夔鳳鏡や、華北の獣首鏡とは識別することが出来ます。

現れます。

また之とは別に青龍・白虎・朱雀・玄武の四神と、多数の神仙を数段に分けて配列した重列式神獣鏡が、二世紀末に現れ三世紀を通じて江南に多数見られます。

次が第三段階です。

最近三角縁神獣鏡と間違えられて新聞報道された斜縁神獣鏡について説明します。

この斜縁神獣鏡は後漢の終りから三国時代にかけ、中国大陸のお墓から出土する鏡である事は、前から知られていました。

この鏡の特徴は、縁が三角縁神獣鏡のように大きく正三角形に盛り上がってはおらず、斜縁の部分が、なだらかに薄くなっており、面徑も小さく、大きくても十数cmが限度の鏡ですから三角縁神獣鏡とは、はっきりと識別ができると思われてまいりました。又その外縁の形から「半三角縁の神獣鏡」とも呼ばれてきました。

しかし山東省滕州市から出土した斜縁同向式二神二獣鏡は、愛知県・東之宮古墳出土の三角縁銘帯階段式二神二獣鏡（徑二一・一㎝）と大きさや図像表現、構成が同じ工房で作った可能性を感じる程大変良く似ておりますので、東之宮古墳出土の鏡は斜縁神獣鏡と考えた方が良いのではないかとする説が出てまいりました。

今回新聞報道されました鏡も、この二つの鏡と大変良

く似ております。

その一方で斜縁神獣鏡は徐州系統の上方作系浮彫式獣帯鏡や画像鏡と共通する文様があり、楽浪の貞梧洞八号木槨墓で漢鏡6期の内行花文鏡と一緒に出土していますので、三角縁神獣鏡よりは前の鏡だと考える事ができます。

又この鏡は、斜縁同向式二神二獣鏡や斜縁四獣鏡が徐州地域で見つかり、遼寧省遼陽出土の「同（銅）出徐州」銘の方格規矩鏡と文様要素が一致するため、徐州系統であると考えられております。

日本列島

今度は日本列島での漢鏡7期鏡出土状況について概観してみます。

第一段階で最も多い鏡は上方作系浮彫式獣帯鏡です。多くは前期古墳からの出土ですが、地域によって状況が異なります。

畿内は定型化した前方後円墳・前方後方墳から多数の鏡と一緒に出土します。

奈良県天理市・天神山古墳、神戸市・西求女塚古墳、神戸市・ヘボソ塚古墳等がその例です。

畿外では鳥取県米子市・石州府二九号墳、兵庫県揖保川町・養久山一号墳、長野県松本市・中山三六号墳のような古墳以前の墳丘墓、若しくは前期小型古墳から一面だけ出土する例が多く見られます。

弥生終末期に遡る破鏡には福岡市・野方中原一号石棺墓、京都府福知山市・狸谷十七号墓などがあります。

今度は径一〇㎝未満が特徴である飛禽鏡の出土例についてお話します。

弥生終末期に遡る例として次の四つを紹介します。

福岡県朝倉町・外之隈Ⅱ区一号墓では副葬時に破砕された状態で見つかり、五面の三角縁神獣鏡を出土した前方後円墳の赤塚古墳に近接する方形周溝墓である大分県宇佐市・高森一号墓からは完形で発見されました。また岡山県総社市・宮山墓は特殊器台をもつ前方後円形の墳丘墓ですが、後円部の竪穴式石室から鉄刀・鉄剣・ガラス玉などと一緒に出土しました。その他福井県武生市・岩内山D一号墓でも検出されています。

一方この鏡の破片が、福岡県宮田町・汐井掛二八号墓や、古墳時代前期末の前方後円墳である広島県福山市・石槌権現五号墳の前方部裾の土坑墓から出土しました。

この古墳では後円部の埋葬中心部に仿製鏡が副葬されていました。

次に画像鏡に移ります。

畿内では奈良市・天神山古墳や神戸市・西求女塚古墳のような多数の鏡が副葬されている前方後円墳から見つかるのに対し、畿外では福岡県大牟田市・潜塚古墳のような小型古墳や、大分県竹田市・石井入口七二号住居址のように、破鏡として見つかっています。

破鏡や獣首鏡も畿外の古墳では一面だけの出土が普通です。

画文帯神獣鏡

第二段階に入りますと画文帯神獣鏡が現れます。

この鏡は二世紀後葉から三世紀初めにかけて日本列島に入ってきたと考えられています。それは第二段階後半の同向式神獣鏡を出土した徳島県鳴門市・萩原一号墓が一つの手がかりを教えてくれます。そこは副葬時に鏡を破砕する弥生的な風習を持つ、出土土器が庄内式併行の前方後円形の積石墓だったからです。

そして分布域がそれまでの鏡が西日本全体から出土していたのに対し、瀬戸内東部と畿内に集中し、北部九州では著しく減少して、完形鏡は前方後円墳の熊本県岱明町・院塚古墳から出土した同向式神獣鏡一面だけとなります。

その出土状況は特に前半期の環状乳神獣鏡に強く現れますが、後半期はやや分布域が拡大します。

主要な出土古墳は奈良盆地東南部の桜井市・茶臼山古墳から四面以上、天理市・天神山古墳から四面がまとまって出土した他、奈良県広陵町・新山古墳から三面、京都府八幡市・石不動古墳、大阪府和泉市・黄金塚古墳、神戸市・西求塚古墳、香川県寒川町雨滝山・奥十四号墳から二面ずつと、畿内及び瀬戸内東部のみとなっております。

ここで画文帯神獣鏡の形式について考えてみます。

前期古墳から出土する画文帯神獣鏡のなかで半数以上を占める形式は、前半期の環状乳四神四獣鏡です。次いで後半期には同向式神獣鏡・求心式神獣鏡・画文帯四獣鏡などがあり、三国代に下がる型式として、京都府山城町・椿井大塚山古墳出土の対置式神獣鏡や、神戸市・夢野丸山古墳から重列式神獣鏡が見つかっています。

この鏡が特に注目されるようになったのは、未盗掘のまま学術的発掘が行なわれ、三三面の三角縁神獣鏡が出土して一躍脚光を浴びた黒塚古墳での出土状態でした。

この古墳は先に述べた天神山古墳に近接しておりますが、三三面の三角縁神獣鏡は何れも棺外で鏡面を木棺に向けて副葬されていたのに対し、棺内埋葬空間の北端に鏡面を北に向け立てかけた状態で一面の画文帯神獣鏡が出土したのです。

この黒塚古墳三四面の鏡の出土状況につきましても項を改めまして考えてみたいと思います。

ここで思いおこされますのが、判明しているだけでも三二面の三角縁神獣鏡を含む三七面の鏡が出土した椿井大塚山古墳出土の見事な画文帯対置式神獣鏡のことです。

この鏡につきまして樋口隆康は報告書のなかで次のように述べています。

この鏡は中谷與一氏が警察で証言しており、石室の発見される前に、その外方から出土した三面のうちの一つである。他の二面がどれかについては明らかでない。

径一三・八㎝、鋳上がりの極めて良好な、しかも鮮鋭な図文の鏡である。他の諸鏡と異なり、緑錆は殆どないが、朱痕が僅かながら付着している。……この鏡と同型のものはないが、同じ画文帯神獣鏡で、環状乳の獣形の体躯が短く、上に騎人のない式としては、江蘇省博物館に陳列してあった南京市光華門外趙士崗呉鳳凰二年（二七三年）墓出土の鏡がある。盛行年代の一点を決める資料として注目されよう。

一方森浩一は自分が発掘に参加した大阪府和泉市・黄金塚古墳の鏡の出土状況につき次のように説明しています。ここでも画文帯神獣鏡が四面三ヶ所から異なった状態で出土しています。

この古墳は長さ八五メートルほどの前方後円墳で、後円部の頂上に三つの粘土槨があり、それぞれ銅鏡を埋納していた。中央の壮大な粘土槨には長大な木棺がおさめられていて、その木棺内には遺骸の足元から少しはなれたところに半三角（斜）縁の二神二獣鏡（径十七・四㎝）一面がおさめられていた。……これに対して、景初三年という『魏志』倭人伝に記録されているのと同一の年号を鋳出した平縁の画文帯神獣鏡（径二三・八㎝）一面は、棺外の槨内に鉄製武器や工具類と共に雑然とおかれていた。……この景初三年銘の神獣鏡は、文様構成のうえから見ると、熊本県の江田船山古墳、大阪府八尾市・郡川東塚、奈良県・新沢千塚などに十数面の同型鏡の知られている画文帯神獣鏡に酷似していて、しかもこの同型鏡をもつ古墳は五世紀後半から六世紀初頭のものが多く……すなわち和泉黄金塚の景初三年銘の神獣鏡は、もし中国で類似した鏡がないかぎり、これらの一群の鏡との関連がたどれそうである。

なお島根県加茂町の神原神社境内の方墳で出土した景初三年銘のある三角縁神獣鏡は、内区の主要な文様構成では酷似するが、銘帯や縁の表現が異なり、とくに銘文が完全に近く、和泉黄金塚の銘文はそれを省略しているところから理論的には先行する。

和泉黄金塚の東槨では、棺内の遺骸の頭骨を囲むようにして三面の銅鏡があった。三角縁龍虎鏡（径二四・五㎝）と二面の画文帯神獣鏡（径十四・四㎝と十五・二㎝）で……同じ和泉黄金塚の西槨では遺骸の頭部の横に画文帯神獣鏡（径十八・五㎝）一面が鏡面を上にして置かれ、その上に勾玉と管玉からなる首飾りがそろえて置いてあった。

ここで森浩一は景初三年銘紀年鏡が特別扱いされていなかった事実を発表しています。

一方岡村秀典は森浩一が述べた二つの景初三年銘紀年鏡について、次のような見解を述べています。

大阪府和泉市・黄金塚古墳から出土した景初三年（二三九）銘鏡（径二三・〇㎝、この鏡は森浩一が径二三・八㎝と発表している鏡と同一のものであるが、両者の間で〇・八㎝違いがある）は、漢鏡7期の画文帯同向式神獣鏡を忠実に模倣したもので、これを画文帯神獣鏡の典型と誤認する人も多い。しかし子細にみると、図像の表現がずいぶん稚拙で、内区の四ヵ所に三角縁神獣鏡に通有の乳を加えている点が、本来の画文帯神獣鏡と違っている。内区の外周に半円方形帯がまわり、その方格に「景初三年、陳是（氏）作詔（鏡）、詔之、保子宜孫」の十四字の銘文を入れている。

島根県加茂町・神原神社古墳の景初三年銘鏡（径二三・〇㎝）は、これを三角縁神獣鏡に改造したものである。内区の図像はほぼ黄金塚鏡を踏襲しているが、半円方形帯を銘帯にかえて「景初三年、陳是作鏡、自有経述」ではじまる四一文字の長文を入れ、周縁の平縁を三角縁に、外区の画文帯を鋸歯文帯に改作している。

このように和泉黄金塚古墳・神原神社古墳出土の景初三年銘鏡に対する両者の見解は異なりますが、ここから見えてくることは紀年鏡がその年号の年に作られたという考えは必ずしも正しいものではないという事です。

更に黒塚・椿井大塚山・和泉黄金塚三古墳の画文帯神獣鏡の出土状況を見ますと、三角縁神獣鏡と比べ数は少ないのですが、和泉黄金塚の景初三年鏡を除きますと、何れも棺内の最も重要なところから出土したり、ひときわ丁寧に作られていたりしております。

そして畿外を含めましても、この画文帯神獣鏡は前方後円（後方）墳からの出土が多く見られ、これも第一段階の鏡とは異なります。

画文帯神獣鏡の破鏡の例は、いまのところ北九州の三例だけです。それは福岡県朝倉町・外之隈1区一号墓検出の環状乳神獣鏡、福岡県久留米市・祇園山古墳裾の甕棺墓で見つかった画文帯四獣鏡と熊本県阿蘇町・狩尾湯の口二号石棺墓から出土した、同向式若しくは求心式神獣鏡です。

ここで樋口隆康の画文帯神獣鏡に関する論考を紹介します。

古墳副葬鏡として三角縁神獣鏡につぐ多量の出土例をもつ画文帯神獣鏡は、その製作は東漢（後漢）末から三国、西晋代に中心があり、三角縁神獣鏡とほぼ同じ時代に属するが、我国では後者が初期の古墳の副葬品を代表するのに対し、前者は一部これと重なり合いながらも、一時代遅れる古墳から出土することが多い。しかも副葬鏡の組合せからみると、九州では両者は伴出せず、地域も異にしているのに対し、それ以外の地では、一部の三角縁神獣鏡が画文帯神獣鏡と組合う事も多い。その理由として、当時の対華貿易の情勢が考えられる。華北系と見られる三角縁神獣鏡は三世紀の対華北貿易の行なわれていた間に渡来してきたと思われる。一方画文帯神獣鏡は華南系であって、対江南貿易の主として行なわれた四、五世紀の間に多く入ってきた。しかも九州では、北部が華北貿易に関係が深かったのに対し、江南貿易は南九州の豪族も積極的に参与した。そこに両鏡が分布と時代を異にする結果が生じた。ところが九州以外の地では、前代に三角縁神獣鏡を手に入れた豪族の子孫が、次の江南貿易で画文帯神獣鏡をも入手したので、一部に両鏡が伴出することもあったわけである。……

これは長江下流域と南九州との交易を含む、中国大陸日本列島間の貿易状況につき地域毎の考察をしたものです。

斜縁神獣鏡

第三段階は斜縁（半三角縁）神獣鏡の時代です。

三世紀前半に中国から伝播したと考えられているこの鏡は、日本列島でも前期古墳の中では比較的新しい段階のものから出土し、和泉黄金塚古墳の他、畿内を中心として五十面あまり出土しています。

小林三郎は、関東で出現期古墳といわれている木更津市の高部古墳群三十号墳中心主体部出土の二神二獣鏡と、三二号墳中心主体部で見つかった四獣文鏡（破鏡で出土）を斜縁神獣鏡であるとしていますが、岡村秀典は三十号墳出土のものは、画像鏡と斜縁神獣鏡の中間的な型式のものであり、三二号墳で見つかったものは、上方作系浮彫式獣帯鏡の弥生終末期に遡る破鏡であるとしています。そして斜縁神獣鏡の破鏡例は、大分県犬飼町・舞田原遺跡と大分市・守岡遺跡の例があると考えています。

三角縁神獣鏡

次がいよいよ三角縁神獣鏡が出現する時代に入ります。

では何故中国大陸・朝鮮半島で今のところ一面も出土しておらず、日本列島だけで五二〇面あまりも見つかっている三角縁神獣鏡を、当初小生が中国鏡の中の魏鏡と考えたのでしょうか。

まず第一は、魏の年号を記した三角縁神獣鏡が見つかっていたからです。その次は、『三国志』魏書東夷伝倭人条における「銅鏡百枚」の記事です。

そしてそれらが伝播したルートとして、中原・華北・楽浪を通じての文化の流れを考えたことがあります。

その他勘案事項とした、主だったものを三つほど紹介します。

先ず第一は鈕孔（ちゅうこう）の形態と外周突線です。

この研究をした福永伸哉の説（一九九一年）を紹介します。

三角縁神獣鏡はこれまでに舶載、仿製をあわせ約四五〇面が確認されているが、そのうち鈕の部分が残存しているものが四〇〇面ほどある。筆者はこれまでに二二〇面の三角縁神獣鏡を実見し、その鈕孔形態を観察した。……まず舶載鏡について検討していこう。

その特徴的な鈕孔形態とは、いわば偏平な長方形といえるものである。……

これに対し後漢～三国時代にかけて製作された他の鏡式の鏡においては、国内で実見できる資料および内外の様々な図録に掲載されているものを見る限り、その鈕孔形態は九〇％以上が円形及び半円形で占められる。大雑把に言うなら、神獣鏡系には円形が多く、内行花文鏡、方格規矩鏡には半円形が多いという傾向があるが、いずれにせよこれまでに見つかっている中国鏡の多くが三角縁神獣鏡とは異質な鈕孔形態であることをまず確認しておきたい。……

円形、長方形という鈕孔形態の差は、一見とるに足らないわずかな違いのようにも思えるが、実は鋳型製作時のある工程における手法の差として、明らかに意味のある違いを示していると考えられるのである。……

すなわち鋳型における凹凸は製品である鏡の凹凸をちょうど反転したものになるから、鈕となる部分は半球状の凹部になっているはずである。鈕孔を作る為にはこ

の凹部に土でこしらえた細長い棒状のブリッジを渡して、湯のまわらない部分を確保することが必要である。しかし半球状の凹部にただブリッジを乗せただけでは、湯を流し込んだ際に動いたりして鋳造に不都合が起きることが考えられる。そこで実際にはブリッジを設置する部分の鋳型を多少削り取って、ブリッジが安定するような足場を確保する細工が行なわれたと推定される。

このように鈕孔の形態は、この鋳型に施した削り取りの形を反映したものなのである。……

ここで魏の紀年鏡の鈕孔形態について検討してみると、黄初という呉の領域で製作されたと考えられているものを除けば円形系統二例、長方形系統九例と、長方形系統が多数である。

これに対し呉の紀年鏡は、方形一面、円形七五面と圧倒的多数を円形が占めている。

このように鈕孔形態においては両者は明確な違いがある。

次に複波鋸歯文帯（外区が外向鋸歯文—複線波文—外向鋸歯文）の外側を回る外周突線について福永伸哉は次のように述べています。

この外周突線を持つ鏡は、全体の九割以上が我国の古墳から出土している。

そして外周突線を施す鏡は、中国中原ではなく、中国東北周辺部や朝鮮半島で見ることができる。

一方、外周突線が最も多く認められる鏡は斜縁二神二獣鏡で、九割が明瞭な外周突線を持っている。その為、この鏡から外周突線手法が開始されたと考えられる。しかしこの鏡の鈕孔形態は円形である。

ここで三角縁神獣鏡と外周突線の関係を考えて見ると、その殆どに長方形の鈕孔があり、初期段階のものと考えられている四分割タイプの同向式神獣鏡・二神二獣鏡のほぼ半数に外周突線を持つが、やがて乳によって内区が六分割される三神三獣鏡タイプになるとそれがあまり見られなくなるという傾向を示す。

三角縁神獣鏡以外の鏡で長方形の鈕孔と外周突線を併せ持つ鏡としては、L字文が右向きになる中国製方格規矩鏡にない特色を持つ方格規矩鏡があり、椿井大塚山古墳（京都府山城町）・向野田古墳（熊本県宇土市）・津古生掛古墳（福岡県小郡市）などから見つかっている。

これらの鏡を作った工人は、三角縁神獣鏡を作った工人と関係があるものと考える事が出来る。

そして鈕孔の形は分っていないが、文様が良く似た方格規矩鏡が遼陽三道濠と北京大営村で発見されており、

三道濠鏡には三角縁神獣鏡以外では唯一、「同（銅）出余（徐）州」の銘があり、大営村鏡が出土した磚室墓では西晋泰始七（二七一）年の銘を持つ磚が用いられていた。

この年代も三角縁神獣鏡の紀年銘、景初三年・正始元年（二三九・二四〇）と近い年代である。

そして我国で中国鏡を模倣して作られたと言われている仿製鏡については、外周突線は殆ど見あたらないが、長方形の鈕孔については三角縁神獣鏡の仿製鏡にかぎり見ることが出来る。

以上の観点を総合すれば、外周突線と長方形の鈕孔を併せ持つ三角縁神獣鏡は魏鏡と考えることが出来る。

これが福永伸哉の論考「三角縁神獣鏡の系譜と性格」の概要です。

二番目は、銘文から三角縁神獣鏡を魏鏡と考えた研究です。

河北省易県出土の方格規矩鳥文鏡の銘文「吾作明鏡甚独奇、保子宜孫富無訾」銘は、静岡県磐田市・松林山古墳出土の三角縁二神二獣鏡の銘文と完全に一致するだけでなく、不自然な「鏡」や「独奇」の字形、「人べん」の癖など、鏡の工人が同一人であると思われるほど良く似ております。

また島根県安木市の造山一号墳で見つかった方格規矩鳥文鏡の銘文「吾作明竟甚大工、刑模周刻用青銅、保子宜孫」は、滋賀県野洲町・大岩山古墳出土の三角縁神獣車馬鏡の銘文「鏡陳氏作甚大工、刑模周刻用青銅、君宜高官至海東、保子宜孫」と共通した個所が多く見られます。

島根県安木市・造山一号墳出土の方格規矩鏡は、中国河北省易県出土の鏡と共に魏鏡であると考えられておりますので、銘文で多くの共通点を持つ三角縁神獣鏡も魏鏡という事になります。

三番目は、鉛同位体比による馬淵久夫の青銅器原料産地の推定研究結果です。

舶載三角縁神獣鏡のそれは呉の紀年銘鏡の鉛同位体比と重ならず仿製三角縁神獣鏡ともやや異なり、華北系の鏡であることをうかがわせている。

一方同研究は、同笵または同型といわれている三角縁神獣鏡同士が、一般に誤差の範囲を超えて、同位体比が一致しない傾向があるということも指摘し、小林行雄の「同笵鏡論」に対する疑惑の念を小生の心の中に生じさせました。

これにつきましても項を改めまして考えて見たいと思っております。

以上の研究成果を総合して三角縁神獣鏡が魏鏡であるとした私の考えは、二〇〇四年五月十五日付朝日新聞一面記事の報道を批判した、新井宏氏の「卑弥呼の鏡の焦り」『まんじ』九六号（二〇〇五年五月一日発行）により、大きく変る事となります。

追記

二〇〇七年五月三〇日、鈴木敏弘氏より、同氏が最近訪問され、実見された中国・河南省博物館で三角縁神獣鏡として展示されていた鏡の写真を送っていただいた。

この鏡は三角縁を有し、紫金山古墳出土の勾玉文帯神獣鏡（径三五・九㎝）と文様が酷似し、更に先に斜縁神獣鏡の欄でも触れた、愛知県・東之宮古墳出土の三角縁銘帯階段式二神二獣鏡（径二一・一㎝）や、奈良県・黒塚古墳出土の八号鏡、三角縁神人竜虎画像鏡（径二二・三㎝）とも一脈相通ずるところがある鏡であった。

その一方で松山市・朝日谷二号墳出土の尚方作二禽二獣鏡（径十八・五㎝）と勾玉様の文様が大変良く似ており、前橋天神山古墳出土の尚方作二禽二獣鏡（径十八・五㎝）とも文様の共通点が多いので、該当する鏡は直径十八㎝と、三角縁神獣鏡とするにはやや小振りでもあり、王仲殊のいう三角縁画像鏡と考えることとした。

以上鈴木敏弘氏のご好意に深謝いたしますと共に、愚考を述べました。ご叱責をお待ちします。

参考文献・資料

岡村秀典『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館、一九九九年。

小林三郎「鏡からみた大和王権と武蔵」『楽未央』明治大学文学部考古学研究室、二〇〇七年。

樋口隆康「画文帯神獣鏡と古墳文化」『史林』四三・五京都大学文学部史学研究会、一九六〇年。

樋口隆康『椿井大塚山古墳発掘調査報告』真陽社、一九九八年。

樋口隆康『黒塚古墳』橿原考古学研究所、一九九九年。

樋口隆康『三角縁神獣鏡新鑑』学生社、二〇〇〇年。

福永伸哉「三角縁神獣鏡の系譜と性格」『考古学研究』三八・一考古学研究会、一九九一年。

福永伸哉『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会、二〇〇五年。

馬淵久夫「鉛同位体比による青銅器原料産地の推定」『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』クバプロ、一九九五年。

森浩一『鏡』社会思想社、一九七八年。

鏡（その2）

中山喬央（たかひろ）

中国の鏡

中国では四千年前の斉家文化で銅鏡が二面検出されています。一面は甘粛省広河県斉家坪で出土した直径約六㎝の鈕が細く小さな素文鏡であり、いま一面は青海省貴南県・尕馬台（がまたい）遺跡で見つかった直径約九㎝の鏡の背面に七つの角をもつ星の形をした文様を鋳出したもので、星の外側を櫛歯状の斜線文で飾った、鈕が小円形をした鏡です。これら新石器時代晩期の銅鏡が最も古いといわれています。

殷（商とも言います）代の銅鏡は、一九三四年に河南省安陽侯家荘で発見されています。

更に有名な安陽小屯にある「婦好墓」の発掘が一九七六年に行なわれ、新たな鏡の出土品を見ることができました。

しかし銅鏡の製作と使用が全国的に行き渡るようになるのは戦国時代に入ってからで、この時代の各地で発見された鏡には、形式と文様に若干の地方差ができます。

漢代に入りますと、とくに前漢中期以降は中央集権体制が強固になり、文化・芸術の方面まで統一の方向に進みますので、銅鏡も前漢中期以降、中原と南方、北方の辺境地区を含めて全国的に形式が同じになります。

このような状態は後漢前期まで続きます。

当時の鏡は文様の主なものは線で構成され、見た目には平面的なものでした。

しかし後漢時代中期に入りますと、全く新しい種類の鏡が現れます。

先ず文様の主な題材が神仙・人物・龍虎・瑞獣（麒麟・白虎など、めでたいしるしとして現れる動物）とか車馬で、その内容は、神話・伝説・歴史故事に及び、作り方も浮彫式で見た目には半立体的となります。

これらの鏡は大体「神獣鏡」と「画像鏡」の二種類に分ける事ができます。

ここで銅鏡の型式編年研究に大きな貢献をした洛陽焼溝漢墓の調査結果についてお話します。

一九五二年から一九五三年にかけ二二五基の前漢中期から後漢後期までの漢墓が発掘されましたが、銅鏡一一八面と鉄鏡七面が出土しました。

その中で後漢中期・後期に属する二〇余面は「内行花文鏡」「方格規矩鏡」「獣帯鏡」「獣首鏡」と「夔鳳鏡」などで、浮彫式文様のある神獣鏡は、後漢後期のものが一面だけしか見られませんでした。

ところが長江下流域の現在の浙江省杭州を中心とする地域では大量の神獣鏡・画像鏡が見つかっています。

この地域は文献の記載によれば紹興付近に往時、銅鉱と錫鉱があり、現在錫を掘りつくして無くなってしまった為つけられたという事が考えられる、無錫という地名も近くにあることを考え合わせますと、当時の銅鏡生産中心地であった可能性が高まります。

詩経に書かれている鏡

詩経は中国最古の詩集で、殷の時代から春秋時代（前一〇～前六世紀）までの詩三一一編（内六編は詩題だけです）が収められています。

これは国風、雅、頌の三部門から成り、民謡を国別にまとめた国風には周南・召南・邶・鄘・衛・王・鄭・斉・魏・唐・秦・陳・檜・曹・豳の一六〇編があり、宮廷での歌謡をおさめた雅は大雅三一編・小雅七四編に分かれ、宗廟の祭祀に使う楽歌の頌には周頌・魯頌・商頌四〇編があります。

孔子が編集したといわれていますが、これには異論もあります。

漢代初期の魯の人、毛亨が伝えたので「毛詩」とも呼ばれています。

この『詩経』邶風の柏舟の詩に、次のような詩句があります。

汎彼柏舟　　彼らに怒られるだけ
亦汎其流　　私の心は石ではない
耿耿不寐　　だからころがすことはできない
如有隠憂　　私の心は席ではない
微我無酒　　だから巻いてしまうことはできない
以敖以遊　　立派にふるまって
　　誰のそしりも受けることはすまい

我心匪鑒　　私の心は石ではない
不可以茹　　不可転也
亦有兄弟　　我心匪席
不可以拠　　不可巻也
不可以茹　　威儀棣棣
薄言往愬　　不可選也

ただよう柏の舟は
あてどなくただよい流れてゆく
目が冴えて眠ることができない
それは深い憂いがあるからだ
私に酒が無いではない
それを飲んで心を晴らすのだ

私の心は鑒ではない
だから茹することはできない
兄弟はあるにしても
彼らをたよりにはできない
往って訴えてはみても

逢彼之怒

この詩は、深い憂いの中にある主人公が、「私の心は鑒ではない。だから茹することはできない。」と詠っているのですが、この鑒の字は、鑑の字であり、鏡を意味します。

『毛詩詁訓伝』では「鑒は形をはっきり見るための道具。茹は度るという意味である」としています。

これから後漢末時代の鄭玄は「鑒でものをはっきり見るとき、ただ形や色が分かるだけで、その真偽を区別することはできない。しかし私の心は鑒とは違って、人々の善悪や表裏を推測する事ができる」と解釈しました。

一方、宋の朱熹は『詩集伝』で、「私の心は鑒でないので、ものごとを推測することができない」と言っています。彼は鏡には茹る能力があるが、自分の心にはそれがないと解釈しているのです。

後の文章が「わたしの心は石ではない。だから転がす事は出来ない。」とか「私の心は席ではない。だから巻いてしまう事は出来ない。」となっているのですから、朱熹の判断の方が正しいものと思われます。

ただここで問題になるのは「茹」を何れも「はかる」と言う意味に解釈している事です。

茹の字の本来の意味は食べるということです。

そこから最近の学者、聞一多は、茹は口に含む、すなわち鑒が其の中に影を含むことと考えました。

そして彼はこの詩に現れる鑒を水鏡として理解しました。水の中に影がやどるのが「茹」の意味だという事です。

一方青銅器の銘文に現れる鑑の字は、大きなたらいのような銅器の名前として春秋時代に出現しますが、何れも臣・人・皿・金を構成要素としています。このなかで臣の字は眼精の象形文字だったものです。

また動詞「かんがみる」の鑑（監）の字は西周初期の金文から見られますが、古いものは臣と人が一つになって皿（平たい水盤）の上に顔を映した形につくっています。

西周初期の器の銘文に「其于之朝夕監（其れ之に于いて朝夕に監みよ）というものがあります。

こうした事柄から鑑の字が鏡の意味に用いられたの

は、鑑という器が、水鏡に用いられたからだと考える事も出来ます。

男女の間をとりもつ鏡

先ず鏡が恋人達の間で贈り物とされた有様を詠った詩を紹介します。

貽我青銅鏡　我に青銅の鏡を貽り
結我紅羅裾　我が紅羅の裾を結ぶ

南北朝の陳（五五七～五八九年）の徐陵が編集した、漢から梁までの五言詩・楽府・歌行を集めた『玉台新詠』巻一の「羽林郎詩」に掲載されたものです。

内容は近衛兵が胡姫に青銅の鏡を贈ったというもので、後漢時代の作だといわれています。

次に劉宋時代（四二〇～四七九年）の短編小説集『異苑』に次のような話が載っています。

晋の義熙三年のこと、山陰の徐琦は、外出するたびに容貌の大変美しい女性を見かけた。徐琦は自分の帯びていた銀の鈴を贈物とした。女性は「あなたの素晴らしい贈物を嬉しく思います。」と言って、徐琦に青銅の鏡を贈り、二人は夫婦のちぎりを結んだ。

また唐代の小説『遊仙窟』にも主人公が、衣を重ねて共寝した男女が翌朝それぞれの着物を着て別れる後朝に、相手の女性に対して、鏡を詠んだ詩を附して揚州の青銅鏡を贈った記事が掲載されています。

次は男女間での鏡の贈答が物語化して、複雑な筋書きとなったものを紹介します。

これは『神異経』からです。

むかしある夫婦が別れ別れになるに際して、鏡を割ってそれぞれが半分を持ち再会のしるしとすることにした。後でその妻が他の男と通じると、鏡は鵲となって夫の前に飛んでいった。夫はこのことから妻の不貞を知った。

後代の人が鏡を鋳るとき、背面に鵲を鋳出すのはこの故事に始まります。

『神異経』は漢の武帝の時代の東方朔の著とされていますが、実際には六朝中期以降の作品と考えられます。

ここで鏡に鵲が鋳出されるのは、六朝時代には既に盛んに行なわれていた七夕行事の、七夕の夜に鵲が天の河に橋をかけて牽牛と織女のとりもちをする伝説と関係があるものと判断されます。

これは鏡に男女の間を取り持つという伝承的機能があるという事をあらわすものです。

尚実際に陝西省出土の唐鏡に、上部に月、中段に鵲らしい一対の鳥、下部に龍が鋳出されているものがあります。

同じように夫婦が別れるときに、鏡を分割する話ですが、こちらは再び一緒になり幸せな老後を過ごしたというものです。

唐の孟棨の『本事詩』情感篇にこの「破鏡団円」の故事が載っています。

六朝末、陳の太子舎人の徐徳言という人がおりましたが、彼の妻は陳の後継君主の妹で、楽昌公主に封ぜられ、大変な美人でした。陳の政治が乱れた時、徐徳言は夫婦の生活がこれまでどおり平安に続かない事を心配して夫人に対し「お前の才色からすれば、国が亡びれば必ず権力者の家に入り、二人の仲は途絶えることになるだろう。もし二人の縁が断たれないものであるならば再び逢いたい。そのために信となるものが必要だ。」と言いました。そして一つの鏡を二つに割り、それぞれが其の半分を持ったうえで「他日、正月十五日に街の市場でこれを売って欲しい。私が生きていれば、その日に鏡の売り手を尋ねます。」と約束しました。

陳が亡びますと、その妻は揚素の家に入り、その寵愛を受ける事となりました。一方、徐徳言は方々苦労してまわり、やっと都に出ることができました。そして正月十五日に街の市場で、一人の召使が半分の鏡に馬鹿高い値段をつけて人々から笑われているのを探し当てました。

徐徳言はその召使を家に連れて行き食事をさせ、それまでの経緯を話し自分の持っている残り半分の鏡と合わせました。そしてその鏡に詩を書き付けたのです。

陳氏はその詩を見ると、泣くばかりで食事もしないようになりました。

揚素はこの事を知ると、この夫婦の為に悲しみ、すぐに徐徳言を呼び寄せ妻を返すと共に沢山の贈物をしました。

このようにして徐徳言夫婦は、江南に帰り老後を幸せに過ごしました。

実際に一つの鏡を二つに割って別々の棺とか墓に入れた例があり、これらは夫婦の墓である一つの証拠になるかも知れません。

洛陽焼溝の前漢墓では、一つの銅鏡を割って別々の棺に入れた例があり、六朝期の四川省昭化県・屋基坡の崖にある墓では、陶製の鏡を二つに割って、二つ並んだ墓

にそれぞれ副葬しています。

宮殿を飾った鏡

宮殿を飾る鏡は四角な鏡が多いようです。

西晋（二六五～三一六年）の陸機は弟の陸雲に、魏の武帝の遺物について書いたと考えられる手紙を出し、そのなかで次のように述べています。

仁寿殿前に大方銅鏡あり。
高さ五尺余ばかり。
広三尺二寸。
立ちて庭中に著き、これに向かえば、
便ち人の形体を写して了了たり。
また怪事なり。

仁寿殿の前庭に大型の四角な銅鏡が立ててある。
高さは五尺余りで幅は三尺二寸ある。
庭でこの鏡と対面すると
人の姿をそのままはっきりと映して
不思議である。

『晋書』載記では北方で勢力を持った赫連勃勃が作った温宮・涼殿と呼ばれる避暑避寒用の離宮のことを次のように述べています。

絡わするに随珠を以ってし、
綵わするに金鏡を以ってす。
曦と望と互いに表に升ると雖も、
中に昼夜の殊なるなし

玉を連ねて巡らし
それをつなぐところに青銅の鏡をおいた
戸外では昼と夜の区別があるが
宮殿のなかは何時も光り輝いて真昼のようだ。

おそらくこの離宮には、その壁に鏡がはめ込まれていたものと思われます。

『北斉書』幼主紀には、幼主高恒が宮園の造営をした情景を次のように述べています。

宮苑を増益し、
偃武脩文台を造り、
其の嬪嬙諸宮中に鏡殿・宝殿・璅瑁殿を起こし、
丹青彫刻し、妙は当時を極む。

宮殿の庭園を拡張して
矛を収め、文を修める建物を建てた。

天子に仕える女官達は、後宮に鏡を飾った建物や、宝物を置いてある建物とか、海亀の甲羅をちりばめた建物を作り、それぞれの建物の彫刻したところは赤や青で塗って、その有様は並ぶもののない贅を尽くしたものであった。

『隋書』文四子伝には次のような記載があります。

秦孝王俊は、宮室を成治し、侈麗を窮極す。
また水殿をつくり、香もて塗り壁を粉し、
玉の砌に金の階、
梁柱楣棟の間には、
周らすに明鏡を以ってし、
間するに宝珠を以ってして、栄飾の美を極む。
毎に賓客妓女と其の上に絃歌す。

秦の孝王俊は、宮殿を贅沢で華やかなものに作り変えた。
そして苑池のある御殿を造った。それは白い色で美しく壁を塗り、
石畳は玉を使い、階段には金箔を張った。
梁、柱、庇、棟の間には、曇りなく照り輝いている鏡を配置し、その間を金、銀、珠玉で飾り、この上もない美しさを造りだした。

何時も来客や遊女達と其の御殿で弦楽器を弾いて歌いながら楽しんだ。

以上は何れも宮殿を飾った鏡の例ですが、今度は宮殿にある鏡の恐ろしい利用方法を書いた作品です。

六朝期の小説的作品『西京雑記』巻三にある方鏡伝説です。

漢の高祖初めて咸陽宮に入る。……方鏡あり。広は四尺、高さ五尺九寸、表裏に明ありて人直に来たりて之に照らせば、影は則ち倒見す。手を以って心を捫して来たれば、則ち腸胃五臓を見し、歴然として礙ぐるなし。人の疾病の内に在るあれば、則ち心を掩いて之に照らせば、則ち病の在る所を知る。また女子に邪心在れば、則ち胆張りて心動く。秦始皇、常に以って宮人を照らし、胆張り心動く者は、則ち之を殺す。

漢の高祖が初めて咸陽宮に入りました。……そこには幅が四尺、高さが五尺九寸の四角な鏡がありました。
裏も表も両方とも磨かれていて、人が鏡に真直ぐに歩いて来ますと、影が逆さまに見えるようになっていました。手で心臓のところをなでて来ますと、たちまち五臓六腑がはっきりと見えました。

病気にかかっている人がいた場合は、心臓を手で覆い隠してこの鏡に向かいますとたちまち病気にかかっている場所がわかりました。

また女官で悪い考えを持っている者がいた場合は、たちまち胆臓が広がり、心臓が騒ぎます。

秦の始皇帝は何時も宮中にいる女官達を、この鏡で照らし、胆臓が大きくなったり、心臓が乱れている者は直ちに殺しました。

南朝末の文人、江総は「方鏡銘」という文章を書き、そのなかで方鏡の背面に、八卦と黄道に沿って天球を二八に区分し星宿（星座）の所在を明らかにした二八宿が図刻されていると述べてます。

この鏡には「輝を兎苑に増し、永く龍光に侍す」（月のように美しい庭園で輝きを一段と高め、長い間皇帝の寵愛を受けた光栄ある鏡）という銘文がありますので、この方鏡も皇帝の宮殿に配置されていたものと考えられます。

次回は鏡の精神的・神秘的な用途について考えて見たいと思います。

参考文献

王仲殊「銅鏡」『中国大百科全書・考古学』中国大百科全書出版社、一九八六年。
王仲殊『三角縁神獣鏡』学生社、一九九八年。
小南一郎「鏡をめぐる伝承―中国の場合―」『鏡』社会思想社、一九七八年。
樋口隆康『三角縁神獣鏡新鑑』学生社、二〇〇〇年。

祝出版

政治の「なぜ？」は図で考えると面白い

瀧澤　中著

青春出版社　1000円

難かしい政治のことをとてもわかりやすく書いてあります。読んだ人のためになる本です。

針の穴を通った駱駝（八）

鍋屋次郎

富山城に隠居している前田利長から、江戸で大きなキリシタン事件が発生して、江戸は勿論のこと京・大坂で大がかりなキリシタン弾圧を行う、との情報を得て金沢に戻った高山右近は、利長によって金沢城近くに建立された南蛮寺、自宅敷地内の天主堂、能登弐カ所の天主堂、バテレン館などで、信徒名簿をはじめ、信徒の名前が書かれている一切の書類、来訪者名簿など、幕吏の探索に備えて個人名にかかわるものは、すべて焼却させた。

また、バテレン（宣教師）とイルマン（修道士）には、いつでも退去できるように身辺整理を依頼していた。

右近は富山から戻ると、翌日には宇喜多久閑、内藤如庵などキリシタン信仰安住の地を求めて金沢にやって来た人達や、右近を慕って金沢にやって来た高槻・明石以来の家臣達を自宅に招き、ことの経緯を説明した。彼等は全員身辺の整理をすると共に、右近に従って潔く殉ずる決意を固めて戻っていった。

昨日、右近は富山から帰ってから初めて登城して、藩主前田利常と、利常の脇に控える筆頭家老横山に対して

「殿、江戸よりキリシタン召し捕りの指示がありましたら、即刻、この右近を召し捕ってください。覚悟はできております。江戸のキリシタン召し捕り指示には、躊躇なく従ってください。それが右近の前田家に対する最後のご奉公です」

ここまで言って、持ってきた風呂敷包みを開き

「殿、これは今まで戴きました知行の残りです。千五百両あります。これを殿にお返し申し上げます」

と、横山の方に差し出した。

利常は何も言わず右近を見つめていた。しばし後、横山家老が

「高山殿、時の流れ、致し方もない。我らも苦しい。

今のお言葉、有り難く頂戴致す」
そこまで言うと、今年十六歳になる前田利常が
「高山殿、今までの奉公、大儀であった。そのうちに江戸から指示があろう。それまでゆっくり過ごせ。その後のことは横山がよしなに取り扱え」
と、全てを横山家老に任せる発言をした。

前田家藩主への挨拶をすませた右近が最も気がかりなことは、娘ルチアのことであった。娘の夫横山康玄は、前田家筆頭家老横山家の後嗣でもある。妻のジュリアにも話した上で横山家老宅を訪ねた。
右近は
「横山殿、江戸表より、この右近を召し捕りに来るとのこと。身どもは潔く縛につきデウスに殉ずる所存です。お世話になった前田家とそれにつながる皆様方には一切ご迷惑をおかけしたくない。いや、かけるべきでない。それで、娘ルチアを、横山家から離縁していただきたい。『キリシタンの娘故離縁致す』この一言で結構です」
右近のこの言葉に、横山は
「心中お察し申し上げる。あれほど良くできた嫁は見あたりません。康玄は嘆くでしょう。分かりました。高山殿のいろいろなご準備もおありと思うので、明日離縁状を持たせて高山殿のもとにお返ししましょう」
ここまで言った横山は、目頭を押さえながら座布団をずらし、右近の前に平伏し
「高山殿、長いことこの前田家にお尽くしくだされ、お礼の言葉もありません。高山殿がいなかったら、この横山、筆頭家老は勤まらなかったと思います。高山殿がご出立の日まで、何なりとお世話をさせていただきます。ご遠慮なくお申し付けくだされ」
この時、襖の向こうの廊下から
「藤波ご家老がお見えでございます」
との声と同時に襖が開き、裃姿の正装した藤波が入ってきた。
右近が、何事かと思い見上げると、藤波はその場に平伏し
「高山殿がこの前田家に尽くされたことは筆舌に尽くし得ません。この藤波、時によっては高山殿に悪態を吐き、ご無礼をつかまつったこと、平にご容赦願いたい。高山殿の、いかなる難問をも見通してしまうお知恵と、何人も真似のできないお人柄には感服致しております」
と挨拶した。驚いた右近は
「これは」
といって横山を見ると、
「高山殿、藤波殿は今日あることを予想して、身どもに、『高山殿がお見えになったらすぐ知らせてくれ。城中の公式な場ではご挨拶できない』といわれていたので、迎えにやらせたのです」
と横山が説明した。
右近は改めて藤波に今までお世話になったことの礼を述べた。

横山家のもてなしを受けた右近は、今にも雪が落ちてきそうな真っ暗な夜道を、供も連れず一人歩いていた。紺屋坂の両側は武家屋敷の塀が連なり、どこからか犬の遠吠えが聞こえてくる。人の気配は全くない。
右近は歩きながら、これからどのような苦難の道が待ちかまえているか、人前では「不安」は一切表に出していないが、一人になったときは「不安の思い」は浮かんでくる。
いかなる事態にも、一切無抵抗で従う覚悟はできている。家族共々腰縄付きで連行されることもあるだろう。その場合心配なのは妻ジュリアと二人の孫である。昨年長男夫妻が突然病死した後は右近夫妻が生活を同じくしている。冬の北陸路を、それも冷え切った山坂を歩き続けることになるであろう。彼等は耐えられるであろうか。

主よ、これから迎えるいかなる艱難にも
耐えることのできる
強い信仰を与え給え
家族、とりわけ妻と孫達を強め給え

と祈った後、彼は暗唱している旧約聖書詩編二十三編の聖句を詠じた。

主は我を緑の野に伏させ
憩いの汀(ミギワ)に伴いたもう。
主は我が魂を活かし
御名の故をもて、われを正しき道に導きたもう。
たとい、我、死の陰の谷を歩むとも
災いを恐れじ。
汝、我と共にいませばなり
汝のむち、汝の杖、我を慰む。

いつの間にか右近の自宅の近くに来ていた。
翌日、横山家の家紋を染め抜いた駕籠が二つ、数名の共を従えて右近宅の前に止まった。中から横山康玄とルチアがでてきた。
二人は奥座敷に通され、右近夫妻と挨拶を交わしたが、互いに悲壮感はない。むしろ、定められた道を歩き続けることを受容した者の強さか、信仰の強さか、笑顔さえ浮かんでいる。

右近は康玄に向かって
「康玄殿、運命と思ってお許しあれ」
と挨拶すると、康玄は
「神のなさること。何の疑いもなく受け入れます。これからの皆様の旅路の上に、神の祝福が豊にありますようお祈り致しております」
と言って、右近、ジュリア、ルチアを一人ずつゆっくりと眺め渡した。
ルチアが康玄に
「今まで、あなた様と過ごした日々は生涯忘れません。有り難うございました」
と挨拶した。

翌日には、宇喜多久閑、内藤如安や、高槻・明石以来右近を慕って能登で暮らしていた家臣数名が右近の屋敷に集まった。
いずれも右近と共に殉ずる覚悟を決めた者達である。
そこへ豪姫が入ってきた。
「右近殿、皆さん、お別れにまいりました。できることなら私もご一緒したいのですが、前田家への影響を考えるとそうはなりません。いかなる事態になりましょうとも、わたしの心の中はデウスを信じ続けております。これから皆さんの上に、予想もつかない艱難が迫ってくると思います。私は皆様のことを祈り続けています」
ここまで言って、目頭を押さえ、嗚咽を堪えた。
右近は
「豪姫様、よくお越し頂きました。有り難うございます。私どもも、金沢を離れても豪姫様のことは忘れ得ません。さあ、姫様がここにおいでのことが誰かに分かると危険です。お城にお戻りください」
その声に、豪姫は嗚咽を堪えながら城に戻っていった。

その夜更けてから、二頭の早馬の蹄の音が城の中に消えていった。表門は夜通し篝火が焚かれているが、蹄の音が消えると、瞬く間に城内あちこちに明かりが灯されていった。

横山家老はじめ、家老全員登城を命ぜられ、右近の屋敷の外も、慌ただしい物音がしていた。

翌朝、城内の大広間で利常の両側に家老全員が並び、江戸からの上使を迎えた。
正使稲葉頼母が立ち上がって
「前田利常殿、上意でござる」
といって、作法通り折り畳んだ上意書を前に掲げ、やがてそれを開いて読み出した。利常はじめ家老達は平伏している。

「上意
前田家は永年に渡ってご禁制のキリシタンを匿い、更にその活動を禁じなかったことは、不届き至極である。かくなる上は、高山右近とその家族、宇喜多久閑、内藤如安その他キリシタン全員を明日にも捕縛し、吟味の上キリシタンを捨てない者は速やかに長崎奉行宛護送せよ。バテレン・イルマンも同様にせよ」
といって、その上意書を利常の前に開き、秀忠の署名と花押を見せた。
利常は
「ご上意、確かに承りました。本日、即刻ご指示の通りに致しましょう。また、これを機に、前田領内からキリシタンを一掃することをお誓い申し上げます。上様によしなにお取次くださいますよう、伏してお願い申し上げます」
と答礼した。稲葉は
「前田殿、長崎送りの人数が固まり次第、その氏名を江戸老中と長崎奉行まで至急報告されよ」
と指示した。

翌日は江戸からの上使達は城内で休息しながら前田家のキリシタン取締ぶりを眺めている。
この日を予想して、藤波家老の発案で、城内馬場の近くに座敷牢を三棟設けてあった。外観は極めてみすぼらしかったが、内側は暖もとれ布団も用意してあった。

その日の夕刻までには、右近一家五名、宇喜多久閑・内藤如安はじめ高槻以来の家臣十五名の合計二十二名を座敷牢に収容した。
藤波家老が江戸から来た上使にその人数と氏名を報告すると
「少ないのではないか。数百名と伝えられているキリシタンはどうしたのか」
と語調強く迫ってきた。
藤波は
「確かにキリシタン最盛期はそのような人数もありました。当前田家でも、昨年来、南蛮寺をはじめキリシタン集会の禁止、バーデレとイルマンの追放を行い、一度はキリシタンを信じた者の多くが棄教致しております。もしも信用できないと仰せであれば、南蛮寺へご案内致しましょう。その上でご確認賜りたい」
とやや開き直った語調に、上使達は引き下がった。というのも、前田家内でアンチ右近の筆頭が藤波家老である、という風評が江戸まで届いていただけに、藤波の発言は信頼された。

翌日、上使達は江戸へ帰った。

「この中に高山右近様は乗船されておられますか」
と言いながら、全員を見渡した。右近は立ち上がって
「身どもが高山右近です」
と答えると、その男は
「身どもは肥前長崎の橋本信介といいます。高山様のキリシタンとしての信仰の深さ、お人柄は、バテレン・オルガンチーノ様から何度も聞かされております。一度お目に掛かりたいと思っていました。我々にはこれから異国でどのような生活が待っているか分かりません。パライソに迎えられるまで、つまり、この世に生がある限り、あなた様に我々の指導者となっていただきたい。是非ともお聞き届け願いたい。そして、今からでも、朝夕の祈りを導いていただきたい。また、その折りに、キリシタンとしての教えを戴きたい。お願い申し上げます」
と言って右近に向かって丁寧に頭を下げた。
と同時に、別の男性が立ち上がって
「高山様、お願いします。私達が高山様とご一緒できたのはデウスのお恵みです」
というと、船倉のあちこちから
「お願いします」
の声が聞こえた。
右近は立ったままそれらの様子を見ていたが、改めて全員を見渡して
「身どもが高山右近です。どこまで皆さんのご期待に応えられるか分かりませんが、これもデウスから与えられた任務と考え、朝夕の祈りの先導と、キリシタンの教えをお話ししましょう」
というと、橋本信介が立ち上がって
「高山様、早速お聞き届けいただき有り難うございます。宜しくお導きください」
と挨拶すると、全員が座ったままではあるが
「お願いします」
と頭を下げた。

マニラに着くまで十五日間は天候に恵まれ、見張りの役人がいるわけでもなく、船倉から出ることだけが禁じられていた。従って、船倉での一日は、武士、商人、農民などの出身身分区別は一切ない状態の中で朝の祈りから始まり、右近の短い説教が行われ、夕べは一日の感謝の祈りでその日が終わり、船倉の中は、恰も天主堂にいるような、信仰の喜びに満ちあふれて、異国に向かう不安は消えていった。
ときには自己紹介や、信仰に入った動機など、全員から信仰の証しが聴かされた。

マニラ湾に入ると、船が接岸する岸壁の上に、多くの人が出ている。船が近づくと、バテレンの法衣を着た数人とその後方の二～三十人の人達が手を振っている。

船が接岸すると、右近達五十名は、船員の案内で、何ら束縛を受けず、岸壁に迎えに出ていたバテレンに引き渡された。

バテレンや一緒にいる人達の素振りから歓迎していることは分かるが、何を言っているのか分からない。
右近がラテン語で
「師よ、歓迎を感謝します。日本からやって来ました日本のキリシタン信徒です。私が高山右近です」
と、ラテン語聖書に書かれている単語を並べるような形で話したところ、バテレンは驚き
「貴方が右近・高山ですか」
といって、大きな目を更に大きくして抱擁してきた。
右近の肩や背中を軽く叩き、歓迎と親近の態度を示した後、他のバテレンや集まっている人達に向かって
「かれが右近・高山です」
と右近を紹介すると、皆は一斉に拍手した。

彼は、マカオでバリニャーノ師に仕えていたソテリーナ師で、現在はマニラ司教区長の職にあった。バリニャーノ師はマカオで右近のことを絶賛し、東洋一、いや世界にまれなキリスト教徒であると言っていたとのこと、また、バリニャーノ師からの手紙には、常に右近のことが書かれていたので、初めて会っても、旧知の間柄のような気がする、といって右近の両手を握りしめた。
日本からキリシタンが追放されてやってくることを聴いたので、その中には右近がいることを確信していた。このめぐり会いもデウスの恵みである、と感謝していた。

右近一行は、この数ヶ月獄中生活を強いられ、時には拷問を受け、そのような中で「キリスト・イエスの十字架上の死」を仰ぎ、自らの殉教の日を待っていた彼等には、船中での祈りの日々と、そして目の前のこの歓迎は思ってもみなかったことであり、帰ることのできない異国に来ていることの不安や悲しみは薄らいでいた。

イエズス会サンタ・アンナ天主堂につくと、直ちに一行を歓迎し感謝するミサが行われた。
ソテリーナ師は、右近がラテン語に通じていることが分かったので、ミサをスペイン語でなくラテン語で行った。それを聞いた右近が、分かる範囲内で意訳して一行に伝えた。

その後、用意されていた古い建物三棟に分宿することとなった。
ソテリーナ師は、現地フィリピン人の生活自立を支えるため、トウモロコシやサトウキビ栽培用の農地の開墾

を奨励していたので、日本人一行はそれを手伝うこととなった。

また、一行五十人の中には大工仕事や織物技術が得意な者などがいて、それぞれ得意な分野で仕事をし、日が経つに連れてそれらを見に来た現地人を指導し、現地人との交流も深まっていった。

やがて一年が経過した。日本人一行は、毎日の祈りに始まる信仰生活、適度な労働もあり、何の不安もなく生活していた。しかし、日本での生活慣習が懐かしく、味噌を造って「みそ汁」を口にしたときは、皆、涙を流さんばかりに感激した。

やがて一年を経過しようとした頃、右近は高熱が続いた。ソテリーナ師をはじめ天主堂挙げて治癒を祈り続けたが、慶長二十年（一六一五）一月八日、ついに天に召された。六十三歳の生涯であった。

高山右近の葬儀には多くのマニラ市民が列席し、天主堂にはとても入りきれなかった。献花の花が次々と持ち込まれた。

葬儀では、ソテリーナ師が全会衆に向かって次のように述べた。

「皆さん、右近・高山はキリスト・イエスの教え、聖パウロの言葉を、命がけで守ってきました。

キリスト・イエスは次のように教えています。

『あなた方は地の塩である。

だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味がつけられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。

あなた方は世の光である。

山の上にある町は、隠れることができない。また、ともし火を灯して升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。

そうすれば家の中のもの全てを照らすのである。そのようにあなた方の光を人々の前に輝かしなさい。

人々があなた方の行いをみて、あなた方の天の父を崇めるようになるためである』（注①）

パウロの言葉は

『自分の体を神に喜ばれる聖なる生け贄としてささげなさい。

これこそ、あなた方のなすべき礼拝です。

あなた方は世に倣ってはいけません。

むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、

何が神の御心であるか

何がよいことで神に喜ばれ

また、完全なことであるかをわきまえるようになりなさい』（注②）

そして最後に

『富んでいる青年が、天国に入るためにはどうすればいいか、とイエスに質問したときに、

持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい

と言ったところ、その青年が悲しみながら立ち去って行く姿を見て、弟子達にこういいました。

金持ちが神の国に入るのは難しい。金持ちが神の国に入るよりも、駱駝が針の穴を通る方がまだ優しい』

と教えられました。（注③）

皆さん、ここに信仰の旅路を立派に走り抜き、

今や天国で神のお褒めにあずかっている兄弟、右近・高山は、

その生涯を、神の御旨に忠実に、

何が善かをわきまえ知り、

地の塩、世の光として歩み続けました。

そして、彼の信仰が

彼をして、

針の穴を通ることができる駱駝に至るまで成長させ

今、天国に駆け上り、

神の御許に平安を得ているのです」

（完）

(注①) New Testament Matthew 5:13~16

(注②) New Testament Roma 12:1~2

(注③) New Testament Matthew19:23~24

現在も、マニラ郊外パゴ公園近くに、高山右近を記念した像が建っている。



編集後記

森実与子さんが『報徳』に連載された「童話　二宮金次郎の一生」が出版されることになりました。その「あとがき」で森さんは「自分を捨てて、人のために尽くすという考えや生き方は、現代の私たちが忘れかけている大切なことです。誰もが自己中心に生きたら、世の中は滅茶苦茶になってしまいます。他人への思いやりや理解、そして自分を捨ててこそはじめて、自分を見出すことができるという人間として大切な精神や魂を、金次郎は、私たちに教えてくれているのです。……」と述べています。

この考えはまさしく三戸岡さんの「あばれ天龍―金原明善の一生」に受継がれています。そして今の若い世代にも「報徳の意味は、勤労、分度、推譲の六文字だが、この六文字が人間として生きていく上でもっとも大切な三本柱である。だから僕は報徳学園の生徒だという誇りを持って学園生活を送りたい」「他人のことを思いやり、自分の仕事をきっちりこなす金次郎のような人に、僕もなりたいと思う」と、継承される兆しが見えております。

話は変りますが一〇五号には十九名の方々からご寄稿をいただきました。様々な分野の方々から様々なジャンルへの作品ですが、一つの歴史事象、同一の地域における歳月の隔たった描写等、内容につながりのあるものが何時も見受けられ楽しんでおります。深い縦のトンネルを持つ才能のある方々が、同じ土俵を持ちながら違うトンネルを持つ人々と集まり、その上には共通のブリッジがひろがっているという集団で、勉強させてもらっているという感じです。それを見事に裏書していただいたのが新井さんの「まんじ語録」でした。

（ＴＮ）

まんじ　第105号

平成19年８月１日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　中　山　喬　央（なかやま　たかひろ）
事務局長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX　045（544）5947

（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ

（印刷製本）　大和印刷株式会社
〒332-0031　川口市青木１－12－20
TEL 048（254）3311　FAX 048（254）3313

表紙の絵について
「平常心」

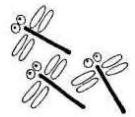
田寺（たでら）怜葦（れい）　画

まんじ

No. 106

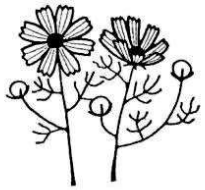
2007.11.1

まんじ第百六号　目次



桐の花影（その一）……忠内正之…4
薬草園「天城杏仁の里」（中）……堀内永代…10
空風（七）……太田精一…19
同胞の御楯となりてわれら逝く（二の二）……千坂精一…32
信じて託す―米山梅吉の一生―……三戸岡道夫…50
ダンスにはまった私　二……島津隆子…60
幽けき大正デモクラシー……大和禎人…67
わが愛誦歌（四）―戦後の歌壇逍遥……曽根竣作…72
霧笛（短歌三十首）……曽根竣作…76
短歌行雲流水（十八）……石黒修身…80
掌編小説3　ダブル・ハピネス……亜木陽一…85

れんししゅう（恋詩集）しさくのかなしみ……松下壽男…87
ホメラレモセズ　クニモサレズ（七～九）……松下壽男…88
青の漂流（二）……宅見勝弘…103
文化勲章に輝く赤堀四郎博士の一生（八）……松下魏三…112
司馬遼太郎の東北物語（司馬雑感十三）……山田嘉久…114
孫への手紙……伊治哲…125
脚気病とかけて……新井宏…131
還暦からの考古学（十一）……中山喬央…136
鏡（その3）……中山喬央…146
漢詩潮騒録（五十二）……鯨游海…160
編集後記……編集子…
表紙……田寺怜葦
カット……宮城正彦
……鈴木國男
……清水トム



桐の花影（その一）

―吉良側の忠臣蔵―

忠内正之

はじめに

この原稿が冊子「まんじ」に載る頃は、今年も年末になっているだろう。年末には、またぞろ忠臣蔵が色々な形でもてはやされる。識者の言に依れば忠臣蔵で生活している人々がかなり居るらしい。

従って面白おかしく語られないと読者や視聴者に受けないので史実がかなり歪められている。一方的でもある。

そこで生酔の吉良人である筆者としては非力乍らも一文を掲げて吉良側の実態に迫って見たい。

世に日本の三大仇討ちという。即ち鎌倉時代の曽我兄弟の仇討ち。江戸初期の荒木又右衛門が主役となった仇討鍵屋の辻。そして元禄忠臣蔵である。ここで忠臣蔵の概要をおさらいして見よう。

元禄忠臣蔵

一七〇一年（元禄十四年）赤穂藩主浅野内匠頭は勅使の饗応役を命ぜられた。その指導を吉良上野介に依頼した。伝聞によれば上野介の意地悪さに我慢出来ず、ついに江戸城内「松の廊下」で義央に切りかかった。幸い致命傷にはならなかったが、規則に従って内匠頭は即日切腹、義央は無罪、そして赤穂藩は取り潰しとなった。「あまりにも不公平」と人々の人気は赤穂に同情的であった。

赤穂側は大石内蔵助を中心に赤穂浪士四十七人が苦労の末、一七〇二年（元禄十五年）十二月十四日本所松阪町吉良邸を夜襲、吉良の首を取るという大事件を引き

起した。これが元禄事件のあらましである。平和で文化的であった元禄時代では大事件であった。のちに忠臣蔵という芝居になって大ヒットするに至った。

曽我兄弟の仇討ち。荒木又右衛門の仇討ちでは仇がはっきりと明確である。特に荒木の場合は公認の仇討ちである。尤も仇討ちの勝者となっても荒木の場合結末は不幸だったようではある。

忠臣蔵の場合では味方があっても仇の存在が明白ではない。吉良側が「仇に成った」という自覚が全く無かったからである。

刃傷の原因は殆んど判明していない。幕府の処断があまりに早急で、内匠頭からの事情聴取が疎かにされたのも一因である。

上野介にして見れば廊下で大奥留守居役梶川与惣兵衛と打合せをしていたところ後から「この間の遺恨覚えたりしか？」と呼びかけられ振り向いたところを突如切り付けられたのだから心当りが無いだけに唯驚くだけであった。殿中のこととて応戦はしなかった。否泰平の世に生きる文官としては機に応じ対抗する力は無かったのが本音であろう。

ここで問題となるのは内匠頭が乱心の上での刃傷か正気の沙汰かの違いである。目付は助け舟のつもりで何度も問い糺したが、正気の私恨だと言い張った。傷付けただけだから乱心と認めてもらえば一名は助かり、多少の減封はあっても家名は残ったのではないか？正気だと私恨の刃傷であり、殿中で、しかも勅使下向のさ中であれば将軍綱吉も激怒せざるを得なかったのである。

殊に綱吉は生類憐みの令に見られる様なエキセントリックな性格である。親思いの孝養心が厚く、出自の芳しくない母桂昌院を従一位に叙せられるべく朝廷に働きかけている最中でもあった。

即日切腹となった点は気の毒ではあるが、幕府としては已むを得ない措置であった。

従って長矩対上野介がここで直ちに味方と仇の構図に考えられないのであって、前の2件とは異なって、スタートは仇討ちのケースでなかったと考えられる。赤穂方も仇討ちの官許を得た訳でもなかった。

幕府の融通性に乏しい官僚政治の欠陥が事件を複雑にした。当然問題を起した両者共に咎められるべきは仕方が無いがもう少し弾力的な扱いが出来たのではないかと悔まれる。

役職遂行の上で当事者となり、心ならずも仇と狙われることとなった吉良家は災難というより他は無かった。

ここで刃傷の経緯について探って見よう。

殿中刃傷

元禄十四年（一七〇一）還暦を迎えた義央は正月十一

日に江戸を発った。毎年、年頭には幕府から朝廷へ高家衆が挨拶に参上し、対する答礼として伝奏の勅使が江戸へ下るのが恒例となっていた。

義央の朝廷への年賀使はこれで十五回目となる。年賀使以外の御使いまで入れると二十数回も将軍の名代として宮中に参内した。時として幕府と朝廷間の取次役として幕府の重大使命をおびた使いであったが、今回も桂昌院昇位の根回しをかねた年頭の挨拶とあって義央は張り切っていた。

従来の慣例では従三位止まりの将軍生母の位階を一気に従一位に昇らせるというのだから前例のない昇位である。桂昌院は元禄十五年に従一位に昇進しているので、昇位運動の功労者は朝廷や公家とのつながりの深い義央であった。

当時、朝廷の御料は政策的に僅かに二万二千石でしかなく窮乏していた。加増を行えば成功するものと考えられたが、駆引きにたけた公卿を相手に交渉を進めるのは容易なことではなかった。その根回しのため、義央が江戸に戻る予定は大幅に遅れることとなったのである。

その間に、東山天皇の勅使には柳原前大納言と、高野前中納言が、霊元上皇の院使に清閑寺前大納言が決定した。

二月四日には、勅使の御馳走役に赤穂藩五万三千石浅野内匠頭長矩、院使の御馳走役には伊予吉田藩三万石の伊達左京亮宗春が任ぜられた。高家衆の吉良上野介義央、畠山民部大輔基玄、大友近江守義孝、品川豊前守伊氏等が、接伴役を仰せつかった。

御馳走役は三万石から十万石までの柳の間詰の大名に命ぜられることになっていたが、この二人の人選に義央は関与していない。

大名にとってこの役は気の重い役目であり経済負担も嵩むので歓迎されなかった。内匠頭は既に十八年前十七才で同じ役目を命じられた実績があるのだから、事前に動いていれば逃れられたかも知れない。赤穂側の江戸詰の家臣にあまり有能な人物が居なかったのは不運であった。

勅使一行が到着するのが三月十一日、何を準備すればいいのか、高家の指導なしには如何ともし難い。他の高家衆は、筆頭の義央をさしおいてことをすすめるのに遠慮があった。いつ迄も京から帰らない義央に、長矩はじりじりとあせりをつのらせていた。院使の御馳走役を仰せつかった伊達宗春はまだ十九才で今回が初めてであり、頼りにされる立場の長矩としてはいっこくも早く義央と打合せがしたかった。

十八年前に義央の指導で御役をつとめたとはいえ、その頃のことは殆んど覚えていなかった。当時は名江戸家老大石頼母（内蔵介の叔父）が難なく仕切ったらしい。

そこで元禄九年に御馳走役をつとめた妻「阿久里」の

実家である備後三次藩五万石の浅野長澄のところへ格式を問い合せ、極秘の内証帳まで借りて内容を調べた。格式とは経費のことであり、内証帳とは支出の内訳を記した帳簿である。

指南役である義央に、どれだけの謝礼を包み、何を贈ればいいのか内証帳を見れば、おおよその見当はついた。進物が少ないのに立腹した義央が長矩に意地悪をして、勅使饗応の作法を教えなかったから、長矩も堪忍袋の緒が切れて忍傷におよんだというのは俗説に過ぎない。

殿中における服装をわざと間違えて教えたというのもおかしな話で、前にも御馳走役を経験した長矩はその点熟知していた筈である。さらに寛永寺と増上寺参詣のときの休息所の畳替えも、御馳走役の任務ではなかった。

よくよく調べてみれば、みなつくり話の様である。第一長矩を窮地に追いこんで、もし失態などしでかされたら、それこそ指南役である義央の責任が問われることになる。

更に刃傷の原因が賄路をめぐるトラブルとする説があるが、知識を伝授した見返りに謝礼を受けとることが当時の感覚で賄路にあたるとは思われない。長矩が謝礼をしなかったとしたら、それこそよほど当時の常識から外れている。

浅野家は金銭にこまかくケチだったと言われる。長矩の祖父長直の時代に赤穂城を築いたり、山鹿素行を招いて軍備に力を入れて来たため内実は苦しかったのである。しかし問題は謝礼の倹約よりもむしろ饗応費の倹約にあった。

長矩は役命を受けた時目付より「あまり華美にならぬ様に」と言い渡された。十八年前の天和三年に御馳走役をつとめた時に四百両の饗応費がかかっている。元禄十年につとめた日向飫肥藩主伊東出雲守（曽我兄弟に討たれた工藤祐経の子孫）の費用を聞き合せてみると千二百両使っている。そこでじぶんはその中間の七百両くらいに見積もればいいだろうと考えた。

これが大きな誤算であった。江戸は元禄八年の貨幣改鋳によって貨幣価値が下がり物価は高騰しつつあった。七百両の見積りを提示された高家の月番にあたる畠山基玄はいくらなんでも少なすぎると思ったがあからさまにそれを口にするのははばかられた。

桂昌院昇位の根回しのため義央が遅れて江戸へ着いたのは二月二十九日であった。京都での交渉は成功したものの予定外の時日を要した。

京都から戻った翌日から早速勅使饗応の対応に大童であった。浅野・伊達家の家臣達が何度も義央不在の間に足を運んだと言う。

六十をすぎた義央が疲れのとれないまま饗応役の指

南をつとめるのは難儀なことだった。おたがいに余裕のない中でトラブルが起きる心配があった。加えて饗応費の過少さが隘路となった。義央は普段妻女に仕事のことは口に出さないのに、愚痴をこぼした。

「畠山民部殿から浅野家が出してきた饗応費の見積もりを見せられたときには、あきれてものも言えなくなった。ここ数年、勅使の饗応がだんだん華美になってきているので抑え目にというのはわからぬではないが、それにしても七百両とは……」

世間知らずでわがままな大名を指導するのは容易でなく骨が折れる。大名にとっても高家の指図を受けて慣れない典礼をこなすのは気苦労が多かったと察せられる。加うるにこの物価高のご時世に例年より五百両も少ない予算とあっては義央が考える充分なもてなしが出来るとは思えない。義央は朝廷と幕府の間の調整を図るため手抜きのない完璧さを指導したのである。

文人育ちの官僚と、武断派の融通の利かない三世大名との間に確執が生ずるのは当然の成行きであった。

かくして勅使一行は予定通り三月十一日に江戸に到着し、辰の口の伝奏屋敷に入った。十二日には勅使院使が登城してそれぞれ天皇と上皇の詔を将軍に伝え、十三日には城内で能楽の催しがあり城中の饗応はスムースに終わった。十四日には将軍から返答の儀式があり、お返しものや桂昌院からのお礼があることになっていた。

冒頭の刃傷事件は十四日の午前中に惹起した。大老堀田正俊が若年寄稲葉正休に刺殺されて以来、殿中で刀の鯉口をきることはきつい法度となっていた。

内匠頭の一方的な狼籍と看做され、一方の義央は手向いしなかったことで神妙至極とされお構いなしとなった。あまつさへ「ゆっくり養生する様に」とのねぎらいがあった。

大切な儀式を台なしにされた将軍綱吉の激しい怒りが事後の劇的展開を大きくした。

勅答の儀式は辛うじて終えたが綱吉の怒りはおさまらなかった。さらに「私の遺恨で刃傷に及んだ」という目付衆の報告がその怒りに油を注ぐ結果となった。

綱吉は事件の裁決を老中たちの評定に任せず、ただちに即日切腹を申しつけた。いかなる理由があろうとも殿中で刃傷におよべば、加害者は切腹、被害者はお構いなしであるのがこれまでの先例であり長矩の裁決だけが苛酷であった訳ではない。

長矩の性格

喧嘩なら武家社会の慣習にしたがって両成敗となるが、義央が刀を抜き合わせなかったことが証明され、喧嘩と見なされなかった。しかしお家が断絶し失業してしまった赤穂藩の家臣たちには簡単な取り調べだけで即日切腹させられた長矩にひきかえ、場所柄をわきまえ手向かいをしなかったのは神妙であると義央になんのお咎めなかったことがひどく偏った処断と思われた。

しかし武士の面目が立たぬと激昂しているのは浅野家の一部の家臣たちであり地元赤穂の領民たちの反応は極めて冷淡であったらしい。苛酷な搾取を受けていたらしく断絶の報せが伝えられたとき、赤穂の領民たちは大喜びで、餅などをついて祝ったという。

真面目で一本気だった長矩の性格については前にも述べたが、長矩には短慮な性格と癇の持病があり、役目にあたる数日前より気分が秀れず、医師から投薬を受けていたという神経性の病が背景にあって乱心に及んだのではないかとの説がある。

俗に「増上寺刃傷」といわれる事件がある。松の廊下の刃傷事件に先立つこと二十二年前の延宝八年（一六八〇年）六月に起きた。

徳川四代将軍家綱の法要という大切な儀式の最中に、時の永井家当主永井信濃守尚長が、内藤和泉守忠勝に大刀で斬り殺された。原因はこの時もはっきりしなかった。尚長は即死、永井家の家禄は減封となった。内藤忠勝は切腹、家は断絶となった。この内藤忠勝は母方の叔父にあたる人物である。長矩は殿中で刃傷に及べばどうなるか、この叔父の例を学習している訳で、むしろ神経病のDNAを持っていたことが極度の緊張感を生じ乱心の原因となったのではなかろうか？

怪我を受けた義央は、名医栗崎道有の治療を受けて回復しつつあったが、刃傷の場面について道有に次の様に語った。

「おもてなしに粗相があってはならぬと、役目柄いろいろと指図をし、浅野の行き届かぬところはこちらで手配した。それが癪にさわったのかも知れぬが、刃傷におよぶ程の恨みを買うとは信じられぬ。ふり向いた瞬間、浅野の形相は狂気をおびていた。あれはどう見ても乱心したとしか思えない。また乱心であれば罪に問われることはなかったのだ」。

殿中刃傷事件の噂は、たちまち江戸中に知れ渡った。綱吉の圧政にやり切れない憤懣をつのらせていた人びとは、判官びいきから即日切腹させられた長矩に同情し、赤穂の浪人たちが敵討をするのではないかとひそかに期待した。

続く

薬草園「天城杏仁の里」（中）

堀内永代

「するとご老中の水野様は、本気で洋学の弾圧を始めるおつもりか。しかし、実際に手を下すのはあの目付の鳥居耀蔵だから、私へは滅多なこともあるまいと思うが」

太郎左衛門は、老中水野忠邦のやり方に危険を感じると同時に、友人である鳥居耀蔵の配慮に希望をつなぐのだった。

江川太郎左衛門が幡崎鼎の次に洋学の師と仰いだのが、三河田原藩の家老渡辺崋山だった。

渡辺崋山は当代随一の画家で、洋学に優れ、蘭方医の高野長英や小関三英らと共に、洋学者サークル『尚歯会』を主宰していた。

尚歯会の「歯」とは年齢のことで、中国思想では敬老のことを「尚歯」といった。当初尚歯会は、資金量と政治力のない小藩の天保の飢饉対策を検討する目的でできた勉強会であったが、同じく小藩の渡辺崋山がこの会

（四）

江川太郎左衛門が鳥居邸を訪問してから一年が過ぎた。太郎左衛門は、江戸詰めを終えて、本拠の韮山に戻っていた。天保九年（１８３８）六月、太郎左衛門に続いて副代官である剣豪斉藤弥九郎が、江戸九段の練兵館道場から韮山に帰ってきた。その時弥九郎の持ち帰った情報が、太郎左衛門に衝撃を与えた。

「殿、オランダ医官シーボルトの通訳で、殿の師でもあります幡崎鼎先生が、逮捕されました」

一瞬、太郎左衛門の太い眉毛がピクッと動き、顔が険しくなった。

「なに、幡崎先生が逮捕されたと・・・？　それは本当か・・・」

「本当です。次は誰が逮捕されるのかと心配です」

弥九郎は不安気に答えた。

に参加したことで、次第に洋学が大きなウエイトを占めるようになり、いつの間にか崋山が中心となってきた。

しかし、尚歯会の会合は、洋学から得た新しい知識の交換の場であって、政治的な集団ではなかったが、時節柄、時々海防問題も話題になっていた。

老中水野忠邦自身は、いたずらに洋学に反対するのではなく、むしろ洋学を学ぶことにより、諸外国の動静を知ろうとする様子も窺えた。しかし、洋学を学ぶ者は、得てして新しい知識を鼓舞するあまり、幕府が唯一認めた官学・儒学を軽んずる傾向があり、これを苦々しく思っていた。特に外国の軍事力を導入し、強力な洋式武器を使って、幕府に反抗しないとも限らない。これを水野忠邦は嫌ったのであった。

（五）

この頃幕閣では海防論争が急速に高まり、欧米列強の攻撃から、江戸を防衛するため、江戸湾沿岸に砲台を設置する計画が持ち上がっていた。

老中首座の水野忠邦は、江戸湾に砲台を設置する場所を調査することにし、調査班の主任に鳥居耀蔵を、副主任に西洋事情に明るい江川太郎左衛門を任命した。

奇しくも儒学対洋学の対決を思わす人事であった。

耀蔵も太郎左衛門も、この人事に異論はなかった。むしろ耀蔵は、調査主任を命ぜられた時に、この調査を機に、副主任の太郎左衛門に花を持たせて、天保飢饉の時と、大塩事件の時の借りを返そうとした。

耀蔵は、以前、自分の師である松崎慊堂から、

「江川太郎左衛門は洋学に優れたなかなかの人物であるが、切れ者だから油断できない。江川は次の時代の中心人物になるかも知れないから、よく気を付けて足元を救われないように・・・」

と注意されたことを思い出した。しかし、自分より五歳年下で、誠実な太郎左衛門に限って、よもやそんなことはあるまい。それに、長年の友人でもあると好意的に見ていた。

だが、江戸湾調査の細部の打合せに入ると、海岸線を測量する技師を誰にするかで、耀蔵と太郎左衛門の意見が分かれた。この頃から、一見円満に見えた二人の間に眼に見えない溝ができつつあり、かつての友好ムードがギクシャクし始めた。

江戸湾調査の主任鳥居耀蔵は、伊能忠敬に従って蝦夷地を測量した小人目付の小笠原貢蔵を測量責任者にした。

一方、江川太郎左衛門の方は、洋式測量技術に優れた内田弥太郎に測量させようとした。しかし、

「内田は伊賀者同心で、身分が低い。このような者に大事な幕府の仕事をさせることはできない」

耀蔵は、そう言って反対し、内田の測量士採用は、一

旦はボツになった。
しかし、太郎左衛門は、どうしても洋式測量でなければ正確な地図は出来ないと思っていたので、内密に内田の測量士採用を、幕府に申請していたのである。

それから一ヵ月後の天保十年（1839）一月九日早朝、準備が整った鳥居耀蔵と江川太郎左衛門は、それぞれ最初の測量地、三浦岬へと向かった。
主任の鳥居耀蔵の班は三十五人、副主任の江川太郎左衛門の班は十五人の構成で、それに荷駄人足などを含めると正副二つの班の総勢は、百余人の大所帯となった。このため、全員が一箇所に宿泊できず、やむなく寺院や大きな農家に分散して宿泊することになった。
この年はことのほか寒さがきびしく、耀蔵も太郎左衛門も風邪予防に万全の注意を払った。
ところが、第一測量地点の浦賀に到着すると、太郎左衛門が風邪を引き、高熱が出て、測量ができないというアクシデントが起きてしまった。
心配した耀蔵は、測量責任者の小笠原貢蔵を呼び、
「この薬を届けながら、江川殿のところへお見舞いに行って来てくれ。これは伊豆の薬草園で採れた『防風』（ボウフウ）という名の薬だ。文字通りカゼを防ぐ薬で、とてもよく効く。『これを飲んで早く治って下さい』と伝えてくれ」
と頼んだ。すると小笠原貢蔵は、
「かしこまりました。でも鳥居様、江川殿は本当に風邪でしょうか」
と上目使いに耀蔵を見た。
「仮病だというのか？　小笠原、なぜそう疑うのか」
自分を売り込むのは、この時とばかりに、
「実は、江川殿はひそかに測量士に内田弥太郎を申請したようです。その許可待ちのために、風邪と偽って測量実施を引き延ばしているのではないかとの噂があります」
小笠原は、得意顔をして言った。
「ウーン、まさかと思うがな。では、その辺もついでに探ってきてくれ」
耀蔵は、そう小笠原に頼んだ。
その日の夜遅く、太郎左衛門を見舞いに行った小笠原が、容易ならぬ情報を持って帰ってきたのだった。
「鳥居様、やはり内田弥太郎が測量士になるようです。それも渡辺崋山が推薦したようです。しかも内田は、高野長英の弟子なのだそうです」
「なに、渡辺崋山と高野長英が絡んでいるとな」
耀蔵は、あごを突き出し、見る見る眉間に不愉快のたてじわが深く刻まれた。耀蔵は感情が昂ぶると、あごを突き出す癖がある。
やがて、太郎左衛門の根回しが功を奏してか、内田の

測量士採用が幕府勘定所から許可され、内田が調査に加わってきた。

それから四日後、いよいよ浦賀海岸から測量が始まった。
明け五つ頃（午前九時）、太郎左衛門は耀蔵と連れ立って、浦賀の観音崎海岸の白い砂浜に立った。
後から見ると、二人の背丈はさほど変らないが、太郎左衛門は肩幅が広く丸みがあって、穏やかな人柄が伝わってくる。これに対して耀蔵は、痩せ型で、白刃のように、ひやりとした鋭さを感じるのは気のせいだろうか。
浦賀水道の向こうに房総半島が横たわって見える。
太郎左衛門は、肩に掛けた革ケースから遠眼鏡をゆっくり取り出して、対岸の房総半島を眺めた。
遠眼鏡で見ると、房総の富津岬が紺碧の海に突き刺さった槍のような形をしてはっきり見えた。まさに観音崎からは指呼の距離である。太郎左衛門は、
「やはりこの場所が砲台設置に最強の場所です。房総富津岬との間のこの浦賀水道は、きんちゃくの口のように狭い。この両岸に砲台を設置すれば、ここを通る艦船を狙い撃ちできます。鳥居殿、これでご覧下さい」
と遠眼鏡を耀蔵の前に差し出した。
耀蔵は、右の目に遠眼鏡を当てて房総を見ると、
「オーッ…」
と驚きの声を発し、あごを突き出して薄い唇をわなわなと震わせた。
房総まで海を渡って二里（八キロ）はある。それなのに手を伸ばせば浜辺の松が掴めるように近くに見えるのは、まさに魔法である。さすが西洋の道具である。
耀蔵は、さらに遠眼鏡を江戸湾からゆっくり太平洋に向けた。
じっと息を凝らして海を見ていた耀蔵は、やがて遠眼鏡を太郎左衛門に返すと、
「江川殿、素晴らしい遠眼鏡ですな、実に良く見える。貴殿はこれで測量されるのか…」
「左様、このほかに分度器や磁石など精巧な機器も使います」
太郎左衛門の自信に満ちた顔を見た耀蔵は、内心、
（小笠原貢蔵の旧式測量機具ではとても敵わない。この勝負は負けたわ…）
敗北感に打ちのめされ、がっくりと肩を落とした。
「ところで江川殿、この遠眼鏡はどこから入手されましたか…」
「これですか…　崋山先生からお借りしてきました」
「なに、崋山？　渡邊崋山とな…」
一瞬、耀蔵の青白い顔が引きつり、
「江川殿、崋山の如き洋学かぶれをお近付け召さるな」
そう捨て台詞を吐くと、あごを突き出してツツツ

ツ・・・と足早に太郎左衛門から遠ざかっていった。
そんなことがあってか、江戸湾調査が終了するまでの二ヶ月間、二人は必要な会話以外、遂に打ち解けて話し合うことはなかった。

江戸湾調査が終り、その報告書を提出する段になると、やはり鳥居耀蔵と江川太郎左衛門の見解が違った。
「江川殿、調査報告書は、測量責任者の小笠原貢蔵に書くように命じてあります。報告書が出来次第、ご老中に提出しますが、その写しをご貴殿にもお回ししますからお読み下さい」
「鳥居殿、少しお待ち下さい。手前も調査副主任の役目を頂戴しておりますので、測量技術者に測量させてあります。その測量図も一緒にご報告願います」
「これは異なことを申される。調査主任の私が命じて測量させた図面があれば、それで十分ではありませんか」
「そうではございましょうが、鳥居殿、測量図面は少しでも正確な方がよろしいかと思いまして・・・」
「すると江川殿は、主任の私が命じた測量責任者の図面では、お気に召さないと申されるのか」
耀蔵は、語気を荒げて太郎左衛門に詰め寄った。
「いえいえ、そのようなことは申しておりません。ただ、この度の江戸湾調査は、鳥居殿もご承知のとおり、江戸湾の防備に不可欠な砲台設置場所の調査ですから、できる限り多くの意見をもとに、検討することが必要かと思います。したがって、手前の方で作成した測量図の方も、ご検討にお加えいただければ幸いと申し上げておりますので・・・」

こうして調査主任としてのプライドを持つ耀蔵と、副主任として測量に自信を持って一歩も譲らない太郎左衛門とは、意見が噛み合わず、それぞれ別々に報告書を作成して提出することになってしまった。

その結果、耀蔵の下にあって小笠原貢蔵が書いた旧式な日本式測量図よりも、太郎左衛門の下で最新式の洋式測量機器を使った内田弥太郎の洋式測量図の方がはるかに正確な地図であった。当然、老中水野忠邦は太郎左衛門の提出した報告書を採用した。

大恥を掻いた耀蔵のショックは大きかった。儒学全体が否定されたかのように思った。一敗地にまみれた耀蔵は、測量責任者の小笠原貢蔵を呼んで、
「江川殿が内田を測量に連れて行かなければ、おれの出した報告書が老中に採用された筈だ。小笠原、悔しくないか？」
「鳥居様、かつて私が伊能忠敬先生と一緒に蝦夷地を測量した時は、お褒めにあずかりました。それなのに今度はクソミソに言われて悔しくてなりません。何時か敵を討たせて下さい」
と耀蔵と貢蔵の二人は、太郎左衛門を恨んだ。その恨みは、太郎左衛門の裏にいる渡辺崋山へも伸びていった。
（渡辺崋山もこのままにはしておくものか）
耀蔵の洋学者憎しの感情は、いや増しに増していくのだった。

（六）

鳥居耀蔵と江川太郎左衛門による江戸湾調査が終了した一ヵ月後、『無人島である小笠原諸島渡航計画』なる事件が起こった。耀蔵はチャンス到来とばかりに、密偵を放ってその内容を調べた。
（よし、これだ。この計画には必ず洋学者が絡んでいるに違いない。これをタネに洋学者共を一挙に根絶やしにしてくれよう・・・　しかし、小笠原諸島は韮山代官所の管轄だ。小笠原の無人島渡航計画を調べていけば、江川殿に突き当たるかも知れない。これはちょっと困ったな）
と耀蔵は少し躊躇するのだった。
耀蔵の太郎左衛門に対する感情は複雑で、いわば愛憎二途であった。太郎左衛門の信奉する洋学は憎いが、昔からの友情は壊したくない。耀蔵はジレンマに陥るのだった。だから洋学の弾圧も、太郎左衛門までは手を伸ばしたくない。だが、『尚歯会』の連中を探れば、きっと何かが掴めるに相違ない。そう思うと尚歯会の探索を止めるわけにはいかなかった。
耀蔵は、配下の小笠原貢蔵と花井虎一の二人を呼んで、小笠原無人島の話を聞かせ、
「渡航計画を誰が立てたか、目的は何かを探ってくれ。手柄を立てたら、老中にお願いしてよい役付をもらってやる」
とけしかけた。二人はこの話に飛びついた。
「必ず鳥居様のお役に立つ情報を掴んできます」
そういって二人は、別々の方向へ走っていった。
しかし耀蔵は、
（どうせたいした情報は掴めないだろう。ただ、無人島渡航の話をするのは、尚歯会の連中しかないだろうから、そこに繋がる情報が少しでも掴めれば、それでいいとしよう）
と二人の情報を、あまり当てにしていなかった。

それから数日後、小笠原貢蔵が、
「尚歯会の世話役高野長英が書いた『夢物語』の中に、エゲレス国が小笠原の無人島を買取り、それを基地にする考えがあるのではと書いてあります」
と報告してきた。それを聞いて、
「すると尚歯会の連中は皆そのことを知っているのだな。いや、そのことを話し合ったに違いない。日本国土を外国に売るということは、大反逆罪だ。よし、全員逮

捕だ。小笠原でかしたぞ」
耀蔵は、思わず相好をくずした。
小笠原貢蔵は、自分が報告した小さな情報から、大事件へと発展しそうな形勢となって、
「鳥居様、少しお待ちください。『夢物語』に書いてある話は、エゲレス側の一方的な考えを推測して書いただけで、それだけの理由で逮捕するのは無理かと存じます」
と恐る恐る小声で自分の意見を述べたが、
「いやかまわぬ。エゲレスと小笠原無人島との関係が判っただけで十分だ」
耀蔵は、眦を決してそう言い放った。それを聞いて、
(鳥居様は恐ろしいお方だ。鬼だ・・・　鬼目付だ・・・)
耀蔵の本当の恐ろしさを知った小笠原貢蔵は、恐れをなして早々に鳥居邸を退散した。
するとその翌日、今度は花井虎一が小笠原無人島渡航計画の立案者を調べてきた。
「鳥居様、この計画は常陸の無量寿順宣という破戒僧が立てたもので、無人島には珍しい果物が実り、珍鳥が飛んでいる。それを持ち帰ればひと儲け出来るのではないかと、ツテを求めて近海の事情に明るい渡辺崋山に近づいたようです」
「して崋山はどうした」
「崋山は所用があって、破戒僧には会っていないそうです」
「そうか、無人島渡航計画の言い出しっぺが判ったのは大手柄だ。やがてその話に崋山も加わるだろう。それを材料に、花井、直ぐに告発状を書いてくれ」
花井虎一は、短兵急な耀蔵の指示を聞いて吃驚仰天し、
「鳥居様、破戒僧の思いつきのような計画で、すぐそこまで告発するとはちょっと・・・」
と尻込みしたが、花井の下心を知っている耀蔵は、
「花井、何をためらうのだ。小笠原の無人島渡航計画はやがて大事件に発展する。そのような悪い芽は早く摘み取るにこしたことはない。花井、そちが嫌なら、他の者に告発状を書いてもらう」
耀蔵の眦がきりきりと吊り上った。花井は慌てて、
「いえ、嫌ではございません。書きます。書きます。書かせていただきます」
と承諾した。やがて、花井虎一の告発状が書き上がってくると、耀蔵はそれを持って、老中水野忠邦のところへ行った。すると、
「うむ、これはけしからぬ。鳥居殿、貴殿のお考えで、この件を処分してもらいましょう」
忠邦は、洋学者弾圧の第一弾を、耀蔵の判断に委ねたのだった。
耀蔵は、老中水野忠邦から、

(貴殿の考えで処分せよ)
と任されてから悩んだ。逮捕するとすれば誰と誰を逮捕すればよいのか自邸に帰って慎重に検討を始めた。
耀蔵は、書斎に入ると愛用の大きな文机の前に座り、もう一度、花井虎一の書いた告発状を読み直してみた。
(この告発状で全部を処分するには、ちょっと無理があるかな)
と考え込み、頬杖をついてしばらく瞑想した。
この書斎は、広いが意外に質素で、畳も渋色、座布団も木綿で薄かった。しかし、学問好きな耀蔵らしく、質素な部屋には不釣合いなほど大きく立派な本箱が幾つも置いてあり、さまざまな和漢の書籍が収められていた。
耀蔵は、文机の上に、幕府の評定所が作成した洋学者の人物調査を広げて思案した。
(うーん、どうしたものか)
そう思いながら、主な洋学者の名前を巻紙に書き出した。
(まず第一が三河田原藩の渡辺崋山か。次が蘭方医の高野長英と小関三英か。それとも江川太郎左衛門にまで及ぼさなくてはならないのか。さらに、幕府の役人の中にも洋学を学ぶ者が大勢いるな。困ったものだ)
そう思う一方、儒家の出である鳥居耀蔵は、目付という幕府の御用を務める仕事柄、洋学を学ぶものを野放しできないのであった。
耀蔵は巻紙に粛清すべき洋学者の名前を書いては消し、消しては書きと、考えに考え、悩みに悩んだが、ついに、
「もう、わからん・・・　今日は止めた」
耀蔵は、筆を放り出すと、気分転換のために隣の部屋に入った。
隣の部屋には、金座の頭取後藤三右衛門から贈られた、異国模様の色あざやかな分厚いペルシャ絨毯が敷かれ、舶来の応接セットが置かれてある。
耀蔵は、洋風の飾り棚から赤い葡萄酒の瓶を取り出し、ワイングラスに注いでグイッと飲んだ。
「ウィー、これは美味い。舶来の酒も悪くはないな・・・」
にやりと笑って、ソファの上に寝転んだ。時刻は夜中の九つ(午前零時)を廻っていた。
この部屋は、耀蔵の身内や、ごくごく親しい友と談笑するプライベートな部屋である。洋式の書棚には、最近買い求めた英蘭和対訳辞典や皮表紙金文字入りの洋書が並べられてあった。耀蔵も時代に遅れをとらないように、彼なりに勉強しているのである。
四半時の後、再び書斎に戻って、巻紙に目を戻した耀蔵は、
「ややや・・・」
自分でも奇怪な声をあげて驚いた。

確かに書いた筈の『江川太郎左衛門』の名が、真っ黒にぬり潰されているではないか。耀蔵は、無意識のうちに太郎左衛門の名を消していたのだった。

それから数日間、鳥居耀蔵は老中水野忠邦から与えられた洋学弾圧の問題について考えに考えた。その末に、（江川殿は簡単には罪にできない。彼の身代わりに渡辺崋山と高野長英を血祭りに上げよう）

そう腹を決め、

（崋山を中心とする尚歯会の会員が、この小笠原の無人島渡航計画を立てた）

という話をでっち上げた。

その結果、洋学を学ぶ者のうち、渡辺崋山、高野長英、小関三英が奉行所に召喚されることになった。

こうして江戸湾調査報告書が提出された二ヵ月後の天保十年（１８３９）五月、遂に洋学弾圧事件が始ったのである。

これが、悪名高い『蛮社の獄』である。

「蛮」とは未開の意味。中国思想では自国以外の国を未開の国といい、文化的に劣った学問を学ぶ結社を「蛮社」といった。

渡辺崋山は、北町奉行所の召喚を受け、家宅捜査の結果、自宅から幕府の攘夷政策を激しく攻撃した著作『慎機論』の原稿が押収され、これが決め手となって国許の田原藩に蟄居処分となった。

オランダの医官シーボルトの高弟であった蘭方医高野長英は、

（幕府は、対日通商を求めて渡航してきたアメリカ商船モリソン号を砲撃して追い払うのは無謀極まりない。幕府は世界の情勢にもっと目を向けるべきだ）

という内容の『夢物語』を書いた。これが幕府に反逆する罪に当たるとしてお尋ね（全国指名手配）となった。とても逃げ切れないと思った長英は、自首して永年（終身禁固刑）の判決を受けた。

また、身の危険を感じた岸和田出身の蘭方医小関三英は、左手首の動脈を切って自殺するなど、名の通った洋学者が処分を受けた。

江川太郎左衛門ら洋学を学ぶ者は、執拗な鳥居耀蔵の魔手に震え上った。

（次は江川殿をやらなければならないか・・・　困ったな・・・）

耀蔵は職務と友情の板ばさみに悩んだ。

「えいくそ、なるようにしかならんわい・・・」

あごを突き出し、薄い唇をわななかせて、半ば捨て鉢ぎみに細身の身体を震わせた。

（つづく）

空風（からっかぜ）（七）

太田精一

（二十八）

寮の周りの空地に、土筆が芽を出し始めた。寒さも次第に和らいで春が近い。

帰省していた寮生が戻って来た。暖かい光が窓に差し込んでいる。三月末の穏やかな日であった。

「売春防止法が四月から施行される。赤線がなくなるまでに東八番町に行かないと、筆下ろし出来なくなる」

山崎満が薄汚れた部屋の天井を仰いで呟いた。部屋にいた高津俊之と伸一は、山崎の唐突な言葉に戸惑いながらお互いに顔を見合わせた。山崎と高津は、伸一の文学部の同期生である。何でも語り合える仲で、寮でも同じサークルに属している。

有朋寮では、社会活動、趣味、勉強会など、同好の士がそれぞれ集まってサークルを形成し、そのサークルごとに部屋割りを決め、思い思いの活動をしていた。

東八番町は、仙台の遊郭街で、廓が軒を連ねていた。

「今月でチャンスがなくなるから、思い切って三人で東八番町に繰り出してみるか」

高津が二人に誘いをかけた。

「それはいいが、金がないだろう。金をどこで工面するかが問題だ」

伸一には、とてもそんな金を捻出する自信がない。

すると高津が、自分の腕時計を撫でながら言った。

「三人とも時計を質に入れたら一晩泊まれるくらいの金は都合付くのじゃないか」

「そうしよう。こんなことは思い立った時にやらなければ出来ないぜ。善は急げというじゃあないか」

山崎が賛成すると、すかさず高津が口を挟んだ。

「それを言うのなら悪じゃないか。だが、悪と決め付けるわけにもいかんかな。少なくとも法的には問題ない。ただ、脛齧りの身分だから親に申し訳ない気はする」

伸一は、二人の会話を聞いて迷っていた。だが、未だ

踏み込んだことのない男と女の未知の世界への憧れと期待が強かった。何よりも性への好奇心と欲求が、恥じらいと世間への後ろめたさを封殺してしまったのだ。

「遊郭の世界はどんなもんか、一度体験しておきたい気持もないではない。もう来月からなくなってしまうのだから、この際行ってみることにするか」

伸一も賛同し、三人は東八番町に揃って出掛けた。

まず金をつくらなければならない。町の近くまで行って一軒の質屋を見つけ店に入った。

おずおずと腕の時計を外し、店の主人の前に差し出した。

「これで金を借りたいのですが、いくらぐらい貸してくれますか」

「お見かけしたところ学生さんのようですが、いくらにもなりませんね。まあ、三個で千円といったところです。利子は、学生さんだから月一割に負けときます」

三人は、千円の金を手にして店を出た。

「これじゃあ一人も泊まれないかもしれない。三人一緒だと安い処に上ったとして、ショートでも無理かな」

山崎が呟いた。すかさず高津が、

「そうだな、三人で籤を引いて当たった奴が一晩泊まって来る。で、その体験談を二人に語るというのはどうだ」

高津の提案を聞いて伸一が言った。

「それはやっぱりよそうや。三人一緒にここまで来たんだから、同じ行動をしたいじゃないか。一軒一軒当たって安い処を探すか、それとも今日は、諦めて日頃食えないようなうまい飯でも食って帰るかだ」

「学割でもあるといいが、まさかそんなもんはないだろう。そうかといって一軒一軒覗いて値段の交渉をして歩くのも格好悪いしなあ。木本の言うように旨いものでも食って、一杯飲んで帰るとするか」

山崎は、やや自嘲気味に言って二人の顔を見た。

「やっぱり俺たちには縁がなかったのだ。せめて学校を卒業するくらいまでは童貞でいろということかな。どこかに後ろめたい気持ちがあるから、こんなことになっちまったのかもしれないな」

山崎と高津は伸一の言葉に肯いた。三人は、心残りであったが、ある種の安堵感に浸っていた。

東八番町の入口で踵を返し、東一番町裏の飲食街に向かった。夕日があかあかと街を照らしている。光が目に沁みて三人は、一様に手をかざした。その仕草は、まるでお互いに照れ隠しをしているようであった。

二年目の夏休みも終わりに近い頃である。

伸一は、浜松の藤本建材店でのアルバイトを早めに切り上げ有朋寮に戻った。九月になったばかりで寮は、閑散としている。それでも、ところどころに灯る窓明かりが寮生のいることを物語っていた。

虫の声に誘われて、伸一は窓を開けた。月が煌々と輝き地上を照らしている。涼風が肌に心地よい。その風に乗ってベートーベンの〝月光〟が流れて来た。

伸一は、その音のする部屋を訪ねた。すると寮生五人が、酒を酌み交わしながら外の月を眺め、曲に聞き入っていた。

夜のしじまの中で〝月光〟のメロディーが地上に注ぐ月の光の降臨を誘い、かすかに聞こえる虫の声さえもそのメロディーを彩っているように伸一には思えた。

(二十九)

十月になった。

警察官職務執行法改正審議で衆議院が大混乱し、強行採決の結果、与野党の対立が激化した。この警職法改正に反対し、あちこちで集会が開かれ、学内も騒然とし始めた。

だが、仙台の街は学内の騒音とはかかわりなく、静かに秋の装いを深めていた。

伸一は、山崎満と青葉城址を散策し、伊達政宗の立像(今は騎馬の銅像に変っている)の近くまで来た。黄金色に染まり始めた木々の葉が柔らかな日差しを受けそよいでいる。その立像の脇に立ち二人は仙台の街を見下ろした。

眼下には、広瀬川の清流が白く光っている。

立像の周りでは、たくさんの人が写真を撮っていた。

「あの、済みませんが、シャッターを押して頂けませんか」

二人の若い女性がカメラを差し出して来た。一人は、紺のスカートに白のブラウス、その上に桜色のスエターを着ている。鼻がやや低く丸顔で親しみのある顔立ちだ。

もう一人は、ベージュのスカートに紺のストライブの入った白いブラウスを着て、クリーム色のカーデガンを羽織っている。細面で切れ長な目をしていて、スリムな体つきである。

伸一は、二人が伊達政宗の立像の下で並ぶのを見定めシャッターを押し、カメラを返した。

「この友人と一緒にいるところを撮って貰えませんか」

初めて会った女性に頼むのは、厚かましいと伸一は思った。だが、思い切って聞いて見た。

満も伸一もこれまで女性には縁がなかった。二人とも一年半の寮生活で一度もお電話を貰ったことがない。

寮では、架かって来る電話を男性と女性に分け、男性からの電話は単に電話、女性からの電話はお電話として庶務部員が、スピーカーで呼び出す。

「どうせお前たちは、金もなさそうだし、顔も雰囲気も女にもてるタイプじゃあないな」

そう友人から揶揄されたことを二人はずっと気にしていた。
「そんなことがあるものか。俺たちにもお電話の架かってくることを証明してやろうじゃないか」
伸一は、そう言って満を青葉山に誘ったのだ。
(撮って貰った写真がきっかけで、今後二人の女性と話ができるかもしれない)
伸一も満もそれを期待した。
「いいわ。撮ってあげます。できた写真はどうすればよいのですか。お名前と住所と電話番号を教えてください。後で連絡しますから」
「有難う。よろしくお願いします。厚かましいお願いですみません」
伸一と満は、寮の住所と電話番号を教えた。
「あの・・・」
名前と住所を聞こうとして伸一は、口をつぐんだ。
「何か・・・」
「いいえ、何でもないんです」
写真をネタに交際を迫るように受け取られたくなかったのだ。
(写真を送るかどうかは、彼女たちの判断に任せることにしよう。もし好意があれば写真は送ってくれるはずだ)
伸一と満は、それに賭けることにした。

一ヶ月後に女性の一人から電話があった。
「木本君、お電話です」
伸一は、胸を躍らせながら電話口に出た。
「もしもし、木本ですが・・・」
「あの、佐伯久美子と申します。青葉山で写真を撮って頂いた・・・」
「ああ、あの時の女性ですね」
「お二人の写真も出来ましたのでお電話しました。どこかでお会いしてお渡し出来るといいのですが」
「有難うございます。山崎君と一緒にお会いしたいと思いますが、もう一人の女性もご一緒ですか」
「はい。あれは妹です。では、分かりやすいように東一番町の藤崎デパートの前で、今度の日曜日午後二時にお会いしたいと思います。ご都合はいかがですか」
「分かりました。今山崎の都合を聞いて来ますのでちょっとお待ちください」
早速満の都合を聞いて次の日曜日に会う約束をした。
伸一は、喜びを隠し切れないでいる。
「おい、木本いやに嬉しそうだな。さては今のお電話は、デートの誘いか」
「いや、山崎も一緒だからそんな艶っぽい話ではない。まあ、俺と山崎にも人並みに女性からお電話が架かってくるということだ」

(三十)

約束の日が来た。
晩秋の穏やかな日曜日である。
伸一と満は、二人を誘って近くの喫茶店「白鳥」に入った。店内は薄暗く、四人掛けの座席に座った。チャイコフスキーの「白鳥の湖」が流れている。
伸一と満はやや固くなって、話の糸口を掴めないままただ押し黙っているばかりだ。
「あの、この前お会いした時に言いそびれましたけれども、私は佐伯久美子、この子は妹の美代子です。あまり良く撮れていませんが写真を差し上げます」
伸一は、その写真をポケットに収め、改めて二人の顔を見た。
「お二人は姉妹とお聞きしましたが本当ですか」
「嘘なんか言いません。あまり似ていませんでしょう。本当に姉妹なのってよく聞かれるのです」
妹の美代子が言った。
「姉さんは、色白で丸顔でしょう。私は黒くって細長い顔ですもの。強いて共通点を挙げれば髪の色ね。二人とも同じように黒いでしょう」
屈託のない妹の話に打ち解けた四人は、寮生活から映画の話まで話題が途切れることなく、二時間余りを過ごした。
伸一は、聞き上手な姉の久美子に魅かれた。
「今度手紙を差し上げたいと思いますが、住所を教えて貰えませんか」
伸一は、帰り際に、そっと久美子に紙片を差し出した。
久美子は、妹の顔を見て、ためらうようにその紙片に名前を書いた。
(二人だけで会うことを久美子はあながち嫌ってはいない)
そう察知した伸一は、久美子をデートに誘うつもりであることを満に告げた。
「山崎、俺は姉の久美子さんと付き合いたいがいいか。もし君が付き合いたいのであれば言ってくれ」
「いや、俺はかまわないよ。特別何とも思っちゃいないさ。今のところ妹の美代子さんとも深い付き合いをしたいわけでもない。だが、連絡があれば二人だけで会ってもいいと思っている。まあそんなところだ」
「そうか、それなら話は早い。これから別行動になるかもしれないがいいのだな」
「ああ、君の好きなようにしろよ。まあいずれにせよ俺たちがまんざら女性に縁がないわけではない、ということが分かっただけでもよかったと思っているよ」
満は、大きな口を開けて豪快に笑い飛ばした。
伸一の恋を心から祝福するような邪心のない笑顔であった。
それ以来、伸一と満は、生涯の友となったのである。

初雪が降った。
十一月の下旬を迎え、仙台にも冬の訪れが近いことを告げている。街路樹の葉も落ちた。裸木の立ち並ぶ青葉通りが、ひときわ広くなったように見える。
山崎と共に佐伯姉妹と喫茶店「白鳥」で会ってから一ヶ月が経っていた。
伸一の久美子に宛てた手紙の返事が届いた。有朋寮に訪ねて来るというのだ。
久美子の手紙を手にした伸一は、胸のときめきを感じ、改めて深い思いを寄せていることに気が付いたのである。
どんど焼の日の一月十五日のことであった。
仙台では、女の正月と言い、女性の休日とされている。雪が激しく降って有朋寮の周りは一面の銀世界である。
伸一は、長町鹿野前のバス停で久美子を迎えた。
バスが来た。降りしきる雪の中に彼女は、降り立った。厚手のベージュのコートを着て、桜色の毛糸のマフラーで首を覆い、赤い手袋をしている。髪にかかる雪を払うようにして花柄の入った若草色の傘を差した。
「雪の中をよく来てくれたね」
伸一は、そう言っただけで久美子の差し出す傘に頭を入れ、彼女の肩を抱えながら歩き始めた。バス停から寮までの雪道が、伸一には、いつもよりずっと短く感じられた。
多くの寮生が冬休みで帰省し、有朋寮はひっそりとしている。
伸一は、久美子を案内し、寮の周りを一巡りした。
建物は、木製モルタル二階建てで、三つの棟に分かれ、食堂、浴室が渡り廊下を隔て付設されている。
雪が渡り廊下にも吹きつけて来る。二人は伸一の部屋に入った。同室の舟山は、帰省したまま戻っていない。
部屋は二人一部屋で、ベッド（寝床）は上下二段となっている。その二段になったベッドは、一畳半ほどの広さで、それぞれに畳が一畳敷いてある。木製の板敷きの床の上に机が二つ。その机のために床面積は、わずかしかない。
伸一は、下段のベッドを使っている。部屋は寒くベッドに上がってそこに敷いてある布団で暖を取ることにした。二人は、頭をかがめて伸一のベッドに入った。映画や小説の話に時間の経つのを忘れ、夕闇が迫っていた。
「そろそろ帰らなくては・・・」
久美子は明かりの灯った部屋を見渡して立ち上ろうとした。
その時、伸一に激情が走った。迸り出る情熱に駆られ紅潮した顔を久美子に向け、唇を探った。しばらく顔を左右に振って抵抗した久美子も感情の高ぶりを抑えることが出来ない。観念したように、目を閉じて伸一の唇

を受け入れた。
伸一は、情熱の赴くまま久美子の体をまさぐり始めた。
すると、彼女は予期しないほどの強い力で、伸一の手を跳ね除け、哀願するような目で彼を見た。
「お願い、それだけは止めてください」
「ぼくが嫌いなの」
「いいえ、私は木本さんが好きです。でも、それだけではどうにもならないの」
久美子は、眼に涙を浮かべ、改めて伸一の手を取った。しばらくじっと握り締めていたその手を離し、乱れた着衣と髪を直し立ち上った。
「雪はまだ降っている。バス停まで送って行こう」
「ええ、すみません。木本さんとこうしてお会いすることが出来て、本当に良かった」
外はすっかり暮れていた。外灯が舞い落ちる雪をぼんやりと映し出している。
「今度いつ会えるの。手紙を書くからね」
「また電話します」
久美子は俯いてじっとバスの来るまで、長靴の先の雪を無言で見つめている。
バスが来た。重い足取りでステップを上がり、窓際の席に座った。曇りガラスを拭いて見せた久美子の瞳は潤んでいる。微笑んで手を振る顔は、どこか淋しげであった。
「さようなら」
窓越しにそう言っている。久美子の口の動きで分かった。
チェーンを巻いたバスは、雪道を重い足取りで闇の中に消えて行った。

（三十一）

石原裕次郎主演の「嵐を呼ぶ男」が上映されていた。
看板を見るなり伸一は、その映画館に飛び込んだ。
裕次郎は「祐ちゃん」と呼ばれ国民的なアイドルとして日本国中の若者に人気があった。格好がよく、昭和三十年代を代表する日活の大スターである。
映画が終わり、ライトが灯った。
伸一は、興奮の覚めやらぬ顔で、明るくなった館内を見渡した。するとスクリーンに向かって左のブロックの三列目に久美子らしい女性が男性と並んで座り、親しげに語り合っている。
一瞬目を疑った。近寄って声をかけようとしたが、足がすくんで動けない。人違いであれば良いと願う気持ちが強く確かめる勇気が出ないのだ。見てはいけないものを見たような気がして、ただその場から逃れたかった。
寮に帰った伸一は
（あの映画館で見た女性は、久美子ではなく、彼女を

想う気持ちが幻影を生んだのではないか）

とさえ考えるようになった。

だが、あの雪の日から一ヶ月、久美子からまだ何の音沙汰もないことも事実である。伸一は久美子に手紙を書いた。

「前略、どんど焼の日にお会いしてから一ヶ月経ちます。いかがお過ごしですか。当方期末試験も終わり、ほっとしているところです。

さて、先日〝嵐を呼ぶ男〟を見に行った時に、映画館であなたを見かけたように思います。近くで確かめてみたわけではありませんので、はっきりしたことは分かりませんが、男性とご一緒で、親しげに語っていたようにお見受けしました。

もし、それが真実であり、その人と特別な関係であるようでしたら、この手紙に対するご返事をしたためる必要もなかろうかと思います。

小生の見間違いであれば、ご返事を頂きたいと存じます。そうであることを心から念じております」

返事は来なかった。

伸一は、いずれは結婚したいと思っていた。これまで特定の女性との交際のなかった伸一には、肌に触れ、身近に感じた初めての女性であった。

それだけに愛しく、激しく、狂おしく冷静さを欠き、燃え上がってしまっていたのである。

「木本、佐伯久美子さんのことで妹の美代子さんから電話があり〝白鳥〟で会って話しを聞いた」

手紙を出した一週間後に、満が妹と会っていたのだ。

「どんな話だ。実は、映画館で他の男の人といる処を見たように思ったので、それを確かめるために手紙を書いたのだ」

「そのことだ。映画館で木本の見たのは、やっぱり久美子さんだった。彼女は君に気が付かなかったらしいが、その時、確かに男の人と一緒だった。その男は、彼女の許婚だそうだ。許婚がありながら寮に行き君の部屋に入った。そして、そのことを言わなかった。木本さんには本当に申し訳ないと言っていたそうだ」

「やっぱりそうだったのか。俺の手紙に返事がなかったので、そうではないかと思っていた」

「美代子さんの話によると、彼女もずいぶん悩んでいたらしい。純粋でひたむきな学生が溌剌と生きる姿に魅かれて交際するようになった。話題も豊富で、楽しく充実した時間が持てたことを感謝している。でも、将来、君と結婚出来るかどうか分からないし、出来てもずっと先の話になるだろう。許婚を捨ててまで、一緒になったとしてもいつか破局が来るのではないかと不安に思えてならない。両親からもこれ以上深く交際しないほうが良いと釘を刺されたそうだ。彼女は、君を傷つけることになるので直接伝えることが出来なかったのだろう」

山崎の話を聞いて伸一は、久美子のことは、諦めざるを得ないと思った。

（彼女も苦しんだに違いない）

「私は、木本さんが好き。でもそれだけではどうにもならないの」

抱きすくめた時の久美子の言葉が、伸一の脳裏にいつまでも焼きついて離れなかった。

山崎と高津は、傷心の伸一を飲みに誘った。酒の弱い伸一であったが、この時ばかりは違っていた。飲めない酒をあおる伸一の耳元で、美空ひばりの歌う「哀愁波止場」が聞こえてくる。彼には、それが、久美子を哀惜する歌に思えてならなかった。

（三十二）

期末試験も終わり、いよいよ成績発表の時を迎えた。

伸一は、フランス語の成績だけが心配である。すると案の定、小山助教授から呼び出された。成績不良につき再試験ということになった。再試験は、口頭試問だ。

フランス語を履修した多くの寮生が、この再試験の対象となったのである。

伸一は、再試験に備えて猛勉強した。だが、一週間程度の勉強では、高が知れている。もし、この試験に落ちて、フランス語の単位が取得できなければ留年となる。彼は、留年だけはどうしても避けたかった。

口頭試問は、小山助教授と一対一で行われる。一から百までフランス語で言えとか、動詞の変化、形容詞、関係代名詞の用法など基礎的な知識と文法が中心であった。

「君は、筆記試験の成績が五十一点で六十点に満たないから落とそうと思いました。が、そのまま落としては気の毒な気もしたので一度だけチャンスを与えることにしました。今日の口頭試問では、努力の跡が見られますので、六十点を上げます。ところで、専門課程では何を専攻するつもりですか」

「社会学です」

「社会学ですか。社会学の学祖は、オーギュスト・コントでフランス人でしたね。フランス語の文献を読むつもりはないのですか」

「出来れば、読みたいと思います。これから勉強してすらすらと読めるようにしたいと思います」

「外国語をマスターするのは、容易ではありません。片平町の学部に進級しても、フランス語の勉強を続けてください」

これによって伸一は、何とか留年を免れ学部に進級することが出来たのである。

伸一と一緒に再試験を受けることになった寮生に中西忠夫がいた。口頭試問の後、希望学科を聞かれた。

「君は、何を専攻するつもりですか」

「フランス文学をやりたいと思っています」
「えっ、フランス文学。信じられませんねえ。君は今度の試験で六十点にも満たなかったのですよ。それがフランス文学！卒論もフランス語で提出することになっていますよ」
「はい、分かっています。学部に行ったら一所懸命勉強するつもりです。」
「フランス文学科の教授が君を入れてくれるかどうか分かりませんが、もし入ったとしたら相当勉強しなければなりませんね」
そう言われながらも中西は、後にフランス文学を専攻し、無事卒業して出版社に就職した。

山崎は、荷物をまとめて帰省の準備にかかっていた。彼は、試験の結果に自信があったわけではない。だが、試験後十日経っても連絡がなかったため、てっきり合格したものと安心していた。
ところが、現実はまるっきり違っていた。突然フランス語の権藤助教授から電報が舞い込んだのだ。再試験するから学校に出頭しろとある。
指定された日に登校してみると教室には、教養課程でフランス語を教える全教官が集まっている。
「山崎君、君は後期の試験が、五十点にも満たないので落第させようと思ったが、一回だけチャンスを与えようとフランス語の教授会で決まった。それには、全教官の立会いが必要だとの結論に達したので、こうして先生方に来て貰っているのだ」
権藤助教授は厳しい表情で、口頭試問を開始し、山崎は、何とか合格した。
「ところで、君は学部に行ったら何を専攻するつもりかね」
教養部のフランス語の篠原主任教授が聞いた。
「はあ、フ、フ！国文です」
山崎は、入学当初から仏文志望である。だが、フランス語の全教官を前にして、五十点以下では、とてもそのことを言い出せなかった。そのため心ならずも国文と言ってしまったのだ。

伸一は、念願の社会学科に進級が決まった。社会学は、希望者が、定員をはるかに超えている。新しい学問で特に戦後発達し、未開拓の分野が多く研究対象も広い。
それに東北大学には、高名な新開正隆教授が在籍し、日本社会学会会長を務めていた。新開教授は、学問的業績だけでなく、人格的にも優れ、学生からも尊敬され慕われていたのである。
また、マスコミ、産業界でも社会学専攻の学生の需要が増えつつあり、就職率も良かったことも人気の高い理由の一つであった。

志望者が、定員を超えている学科は、教養課程の成績によって振るいにかけられる。
伸一は、定員枠に入るかどうか心配であったが、定員二十人を二十三人に増やしたお陰で辛うじて滑り込むことが出来たのである。

(三十三)

青春を謳歌した有朋寮を退去しなければならない時が来た。有朋寮の入寮期間は、教養課程の二年間に限られている。退去後は、別の寮に入居するか、下宿先を探さなければならない。
伸一は、退去期限の少し前に、有朋寮で友人となった同郷の藤山と共に寮を出て、仙石線沿線の高砂の寺に移った。寺の住職は、父の跡を引き継いだばかりの青年僧である。寺は、幼稚園を付設し、その経営には、先代の未亡人が当たっていた。
通学には時間がかかり、買い物にも不便であったが、伸一にとって何よりも魅力は、下宿代が安いことだ。
藤山は、浜名湖の畔の農村出身で、実家は半農半漁である。中学を卒業するとすぐ親戚の織布工場に就職し、そこで四年間働いていた。
だが、単調な毎日の仕事に満足出来なかった。知的好奇心と向上心が、彼の進学意欲を駆り立てたのだ。
幸い勉強は、中学時代から良く出来た。入学試験を受け、静岡県立浜松西高等学校に合格した。四年遅れの新入生である。一般の生徒から見れば人生の大先輩で、すぐに〝親父〟というあだ名が付けられた。
浜松西校入学後、藤山は、水を得た魚のように潜在能力を発揮し、学力もつねにトップレベルで、東北大学工学部に合格したのである。
藤山と伸一は、しばらく寺の庫裏で同居していた。だが、藤山は、実験が続き、しばしば帰宅が遅れる。高砂は、大学から遠すぎるのだ。彼は、不便を感ずることが多く、半年ほどで市内の下宿に移って行った。
藤山と伸一は、同郷で年齢も近く、境遇も似ていたことから意気投合し、学部は違っても硬い友情で結ばれ、生涯の友となったのである。

社会学の授業は、一般講義と特別講義に分かれ、それに演習（セミナー）が加わる。伸一は、専門課程に進んでから、学問の面白さに目覚め始めた。
大学への愛着が増し、政治への関心も高まった。
前年の警察官職務執行法改正を巡る衆議院での大混乱に学生は、政治への不信感を強め、学生運動も活発化し、学内は、騒然として来た。
社会学の分野では、大衆社会論が、論壇を賑わせている。ホワイト・カラーを中心とする中間層が、マルクスの革命の担い手となる労働者階級とどのように向き合

って行くかについての議論が活発に行われた。
学生たちは、行きつけの喫茶店で、わずか一杯のコーヒーを啜りながら、長時間居座り続け、日本の将来とか、理想社会の実現などについて熱く語り合った。
仙台は、学生の街と言われている。喫茶店の店主も寛大で、こうした学生の〝居座り〟行為を許容する雰囲気があった。
他方で一般市民は、高度成長の恩恵を受け、生活が向上し、岩戸景気を謳歌していた。
皇太子の結婚式は、こうした景気に華やかな彩りを添え、国中が沸き立ち、仙台市民の関心も皇室に向けられた。
平穏な暮らしを望む市民感情と労働組合のリーダーや進歩的な学者、過激な学生の持つ政治的危機意識には大きな乖離が見られたのである。

藤山が高砂の寺を出た後、伸一は一人本堂の脇の庫裏に残った。
すると、歴史学専攻の池上勲男が、伸一の部屋に頻繁に訪れるようになった。伸一と池上は、しばしば夜遅くまで議論をした。
「すみませんもう少し静かにしてくれませんか。気が散って勉強に集中出来なくて困っています」
「それは、失礼しました。議論が白熱するとつい大きな声になってご迷惑をおかけしました」
伸一と勲男は、しばらく静かに話すことを心掛ける。だが、熱中するとすぐまた元に戻ってしまう。二人とも声の大きいことでは、人後に落ちないのだ。
「木本さん。まことに申し訳ありませんが、これ以上あなたに部屋をお貸しすることは出来ません。私たちの家でも、来年受験の息子を抱えて、静かに勉強させてやりたいと思っています。また、寺は静寂な雰囲気を保つことが必要です。でも、木本さんが来てから私たち家族も夜静かに眠ることも出来なくなってしまいました」
先代住職の未亡人から退去を求められた。伸一は、他に下宿を探さなければならなくなったのである。

友人から紹介をうけた伸一は、同じ仙石線高砂の仙台寄りの隣駅福田町の下宿に代わった。昭和三十四年田植えも終わり、稲の根付く初夏の頃であった。
下宿は、福田町から徒歩十五分北に向かった上田子の近藤美代治氏宅である。近藤氏の家は、数十軒の農家が集まった集落の中にあった。
彼は、農業のかたわら、酒、たばこ、日用雑貨の小売店を開いている。それに加えて下宿屋も始めたのだ。自分たちの住む母屋と少し離れた畑の敷地に別棟を増築して常時七、八人の学生を下宿させていた。
家族は、美代治氏の母親であるお婆さんと奥さん、子供二人の五人である。下宿代は安く、賄い付きで月四千五百円。食事は遅く帰る学生のために夜何時までも残してある。ご飯は、食べ放題だ。食べ盛りの貧乏学生には、実に好都合な下宿である。
お婆さんは、明治の人で学生のことを「書生さん」と呼んでいた。
伸一は、別棟の二階に部屋を借りた。六畳に一畳分の押入れを取り、畳五畳の部屋である。
周りは、田圃に囲まれ、すぐ近くを七北川が流れている。橋の上から川底を覗くと、鮎の泳ぐ姿が見える。夜は、静寂に包まれ、蛙の声がひとしお大きく聞こえる。
電車で一駅とその駅から徒歩で十五分ほど、池上の下宿から遠くなった。そのため、池上とは、たまにしか会えない。良き友で該博な知識を持つ論客との議論の機会の少なくなった伸一には、知的な刺激を失った寂しさを感ずるのであった。
伸一は、学部の学生となってから、社会学への学習意欲をますます深め、授業にも熱心に出席した。大学院に残ることも真剣に考えるようになったのである。

ソ連の宇宙ステーションが、月の裏側の写真撮影に成功。米ソの宇宙開発競争は、それぞれの国家威信をかけてますます熾烈を極めている。中国では、毛沢東が政権の座を去り、劉少奇が国家主席となって共産党政権の内部変動が、報じられていた。
ナセル大統領率いるアラブ連合共和国が前年の一九五八年に成立し、中東の諸部族の民族自立に大きな刺激を与えている。同じ年にガーナのアクラで行われた全アフリカ会議は、一九六〇年のアフリカ諸国の独立ラッシュを生むことになる。世界は、西欧の支配する時代から新時代に向けて大きく舵が切られつつあったのである。
そうした時代風潮を反映し、仙台でも左翼的な運動が活発となり、歌声喫茶を中心にロシア、中国、インドネシア、などの民謡や労働歌がよく歌われていた。
「かあさんの歌」「カチューシャ」「ともしび」「草原情歌」「ブンガワンソロ」など、全員で肩を組みながら歌うことによって学生たちは、青春の情熱を燃やし、新しい時代の息吹を感じていたのである。

（つづく）

同胞の御楯となりて われら逝く（二の二）

千坂精一

「久坂、俺たち特攻隊員は生きながらにして神であると言われているんだから、訓練で殉職したんじゃ神になり損うぞ。無事に晴れの日を迎えて出撃しようぜ」

そう張り切っていたが、久坂は、あの夜以来菊江のことが頭から離れず、また逢いたいの一心から事故死などしてなるものかと思っているだけであった。

訓練飛行の搭乗割は、久坂が竹田一飛曹、松本は栗山一飛曹との組であったが、それはそのまま、特攻出撃のときの搭乗割でもあるはずであった。

久坂が、飛行作業を終えて竹田一飛曹と搭乗員控所にもどってくると、入れ替わりに松本が、

「こんどは俺らの番だ。いっちょうやっつけてくるか」

とお道化ておいて、栗山一飛曹と並んで藤井隊長に申告すると、搭乗機目がけて早駆けしていった。

久坂は、栗山機の訓練を見学することにした。

七

二月十九日、米軍硫黄島に上陸開始。
同二十八日、米軍パラワ島に上陸開始。
三月五日、マニラの日本軍全滅。

その後、久坂たちの神風特別攻撃隊流星隊は、搭乗員が増員されて本格的な特攻訓練に入った。外出は禁止されて、くる日もくる日も猛訓練に明け暮れた。

敵艦船に見立てた背後の丘陵を目掛けて高度二千メートルから四十五度の急降下。海上を高度五十メートルの失速ぎりぎりでの直進。払暁や薄暮における離着陸などが毎日繰り返された。

伎倆を試す猛訓練だけに事故が多発して死傷者が出たので、飛行作業のときは宿舎で水盃を交わした。

松本は、

強い陽射しを受けて機体を眩しく光らせながら急上昇してゆく栗山機が、青い空に吸い込まれていった。

訓練中の栗山機がなんど目かの急降下に入ったときだった。見上げていた山村先任下士官が、

「あっ、角度が深い。栗山、機首を立て直せッ」

きこえるはずがないのにそう叫んだ。

栗山機は、久坂の視野のなかをぐんぐん突っ込んできて、反転する高度をすぎても機首を上げなかった。

（危ないッ）

久坂は、思わず立ち上がった。

栗山機が視界から消えると同時に、ドーンという爆発音が起こって、その方角に黒煙が立ち上った。

「松本ッ」

久坂はそう叫びながら、控所にいた隊員たちと一緒に黒煙目がけて早駆けした。

栗山機の墜落現場は、地面が大きく抉りとられていた。衝撃でめり込んだ発動機の残骸が残っているだけで、機体は四散して原形を留めていなかった。

隊員たちは手分けをして、広範囲に散らばっている栗山一飛曹と松本の骨片や肉片を丹念に探し求めた。

久坂は、どちらとも識別できない肉や骨の欠片をひとつひとつ拾い歩きながら涙が留処なく流れた。生まれたときは別々だが死ぬときは一緒だぞ、と誓い合った松本の最後に微笑んだ顔が瞼に焼き付いて離れなかった。

栗山一飛曹は、久坂たちを徹底的に扱き抜いた揚句に、松本を無理矢理冥土へ伴れて逝ってしまった。

二人の遺骨は、白木の箱におさめられて霊安室に安置されたが、久坂はしばらくのあいだ松本がひょっこりバアと帰ってくるような気がして仕方がなかった。

その後も、訓練中の事故はつづき、前川と松下が殉職して同期は五人に減ってしまい、寂しくなった。

そんなある日、愕然とするニュースが入った。

三月九日夜から十日未明にかけて東京の下町がB29の大空襲で焼野原になってしまった、というのである。

久坂は、自分の家族は早くから長野の母の実家に疎開したのを知っていたので心配なかったが、篠田分隊士の実家は本所だときいていたので気遣われた。

だが、篠田自身もまったくわかっていなかった。

このごろは、この南九州一帯も南西諸島を目指して北上しつつある敵機動部隊から発進してくるグラマン戦闘機などの空襲を頻繁に受けるようになり、前線基地さながらの殺伐とした雰囲気になっていた。

そんなある日、久坂たち流星隊員に絶えて久しい外出許可が出た。情勢が緊迫してきているので、いまのうちに特攻隊員たちを心残りのないようにたのしませておいてやろうという配慮からしかった。

ということは、基地にいる特攻隊員たちの冥土への旅立ちが近づきつつあるという知らせでもあるのだ。

久坂は、出撃するまえにもういちど菊江に逢いたいと思いつづけていたので、念願叶った喜びで上陸点呼の時刻を待ちきれずに衛兵所へ行ったが、掲示板に、

〈開花楼休業中〉

の貼紙が出ていたのでがっかりした。

衛兵に事情をきくと、女将の葬儀があったという。

あの豪快な女将がどうしたのだろうと訝りながら、とにかくいってみることにして急いで山を下りた。

久坂が開花楼を訪ねると、初老の男が出てきた。

「只今休業させていただいておりまして」

「女将さんが亡くなられたというのは本当ですか」

「はい。昨日葬儀をすませたところでございます」

「そうですか。本当だったんですか。では、取り込みのところを悪いですが菊江さんを呼んで下さい」

そう告げると、初老の男は返事をしないで久坂の顔を凝っと見詰めていたが、やがて小さく頷くと、

「どうぞお上がり下さい」

と言って、先に立って歩き出した。

久坂は、黙って男のあとに従いていった。長い廊下を歩いてゆくと、微かに線香の匂いが漂ってきた。

男は立ち止まると、襖をあけて久坂を請じ入れた。

部屋のなかへ入った久坂は立ち竦んだ。大きな仏壇のまえに白布に包まれた骨箱が二つ置かれてあった。

「女将さんと、菊江さんのご遺骨です」

「えっ」

久坂は、耳を疑った。

「菊江さんも亡くなったんですか」

信じられない思いで声が震えた。

「どうして――」

久坂は絶句した。

男の話によると、三日まえ女将が急な用事で隣り町へ行くことになった。いつも初老のその男が供をすることになっていたのだが、その日は生憎ほかの用事があったので、菊江にかわってもらったのだそうだ。

用事をすませて帰ろうとしたとき、空襲警報が発令されたので出先で引き止められたが、気丈な女将は、

「敵機のへなちょこ弾になんか当たりゃしないよ」

そう啖呵を切って帰っていったのだという。

運が悪かった。二人がグラマンの銃撃で斃れていたのは身を隠す場所のない土手の上だったのだそうだ。

合掌する久坂は怒りに震え、涙が滂沱と溢れ出た。

背後で初老の男が、

「わたしが、お菊さんを死なせてしまったのです」

そう言って嗚咽した。

久坂が開花楼を出たときは、もう夕闇が迫っていた。

「畜生。お菊さんを殺したグラマンを乗せている空母のどてっ腹に体当たりして、魚の餌食にしてやる」

久坂は、怒り心頭に発して、流れる涙を拭おうともせず、衝動に駆られて形振り構わず我武者羅に歩きつづけた。悲嘆に耐える大人の理性はなかった。

気がつくと、いつか基地へもどる道を歩いていた。

両側に蔓畑が広がる見通しのいい道のなかほどまできたとき、道端にもんぺ姿の女性が蹲っていた。

菊江がこんなところにいたのかと錯覚して駆け寄り、

「お菊さん」

と声をかけた。

振り向いたのは菊江ではなく、若い女性だった。

「どうしたんですか」

娘の顔は真っ青だった。

「急に心臓が苦しくなりまして、屈んでおりました」

「この町のかたですか」

「はい、そうです」

「家までお送りしましょう」

「有難うございます。でも、もう大丈夫ですから」

娘は立ち上がって歩き出したが、すぐに蹌踉けた。

「危ない。やはり送ってゆきます」

久坂は、娘に肩を貸すとゆっくり歩いた。鼻腔を擽る異性の微かな匂いが菊江のことを思い起こさせた。

その娘は、大江由紀と名乗った。

小学校長の娘だという由紀の家は古風な構えだった。

この町の旧家か、大地主でもあるのだろう。

玄関に出迎えた母親は、娘から事情を聴くとすっかり恐縮して、帰ろうとする久坂を執拗に引き止めた。

久坂は、小学校時代の校長を思い泛べて、厳めしい教育者を想像していた由紀の父親の大江広太郎が、案に相違して温容で気さくな人だったので吻とした。

すすめられるままに夕食をともにして寛いだ久坂は、初対面の大江一家がまるで家族のように思われて、久しく忘れていた団欒の雰囲気に溶け込んでいった。

「これからは遠慮なくきて、悠くり憩んで下さい」

広太郎にそう言われてすっかり腰を落着けた久坂は、問われるままに生い立ちや基地での様子などを夜の更けるまで話して過ごした。由紀は、相槌を打ったり、茶化したりして、燥ぎながら相手をしてくれた。

由紀が夜具を整えに立ったあとで、母親のひでが、

「今夜の由紀は、めずらしくたのしそうでしたよ」

そう満足そうに広太郎に言うと、広太郎も、

「あの娘は一人っ子のうえに病弱だったので、親しい友達もできずに、ずっと寂しい思いをしてきていたのが、今日偶然圭一君と知り合いになったので、まるで弟が授かったように嬉しく思っているのだろうよ」

としみじみ述懐した。

久坂は、床に就いて一人になると、大江一家の歓待で紛れていた菊江のことがまたまた思い出されて、

(あの夜、菊江はなぜあんなことをしたのだろう)

あれこれ想いを廻らせ、輾転反側して夜を明かした。

闇が薄れて仄白くなった障子に、裸身を横たえている菊江の豊満な胸の隆起が影絵になって浮かんだ。

そんな姿態を想起することは、死者への冒瀆だった。だが、そう思えば思うほど、かえってその幻影は鮮明に瞼に焼き付いて、いつまでも消えなかった。

八

四月一日、米軍沖縄本島に上陸開始。

その上陸部隊を支援する機動部隊を殲滅するため〈菊水一号作戦〉が発令され、南九州地区の陸海軍航空部隊は総力を挙げて特攻出撃することになった。

久坂は、〈菊水〉ときいて、すぐにそれが南北朝のむかし摂津湊川の合戦で北朝方の足利尊氏に敗れ、弟正季とともに七生報国を誓って自決した南朝方の忠臣河内の土豪楠木正成の旗印であることを思い出した。

さらに正成の嫡子正行も、父の遺志を継いで、勝算のない四条畷の戦いを挑むにあたり、吉野の如意輪堂に詣でて将士の名を過去帳に記載し、さらに板壁に、

還らじとかねて思えば梓弓
亡き数に入る名をぞとどむる

という遺詠を書きつけて弟正時とともに玉砕した。

もしこの作戦がその故事に因って命名されたとすれば、聯合艦隊司令部はまさに背水の陣を布き、乾坤一擲の勝負を賭けて反撃の挙に出るということになる。

久坂たちの流星隊にも、ただちに特別攻撃への参加が命ぜられて、指示あるまで待機することになった。

二村分隊長ほか傷病入院中の数名を除いて全隊員の出撃である。搭乗員宿舎はどこも緊張感で漲った。

「おいみんな、潔く死に花を咲かせようぜ」

豊田が、そう士気を鼓舞すると、すかさず中西が、

「こんど会うのは花の都の靖国神社だ。いいかみんな、沖縄の海からはずっと遠いが迷わずに集まろうぜ」

とつなぎ、みんな神妙に頷き合った。

久坂は、いよいよ死に神が迎えにきたと自覚して、なんども頷きながら自分を納得させることに努めた。

だが、出撃の搭乗割に久坂たち五人の名はなかった。

久坂は、竹田一飛曹と組であったが、発表された竹田一飛曹の組は先輩の長谷川二飛曹になっていた。

「なんだ、なんだ。俺たちの名前がないじゃないか」

川村がそう叫んだ。

「これはいったいどうしたことなんだ」

豊田が眼を剥いた。

「なぜだかわからん。隊長にきいてみよう」

「そうだ、そうだ。いこう、いこう」

五人は昂奮して宿舎をとび出した。

久坂は、死に神に嫌われて複雑な心境になった。

隊長室へ行くと、藤井隊長は日記か遺書を書いていたらしく万年筆を持ったまま険しい顔で振り向いた。

「隊長ッ」

豊田が意気込んで叫んだ。

「なんだ、騒々しい」

「はい。出撃の搭乗割に自分たちの名がありません」

「そのことか」

藤井隊長は、予期していたかのように万年筆をおいて立ち上がると、久坂たちのまえへ近づいてきた。

「貴様たちは、連れて行かんのだ」

「なぜでありますか」

久坂は思わず問い返した。それは反抗であった。

「よく聴け。貴様たち年少隊員は連れて行かんのだ」

「伎倆未熟だからでありますか」

中西が執拗に食い下がった。

「そうだ。貴様たちは足手纏いだ」

「自分たち五人も流星隊の一員であります。どうぞ一緒に連れて行って下さい。おねがいいたします」

久坂は懇願した。死の恐怖を考える遑はなかった。

「帝国海軍は貴様たち年少兵を特攻に参加させるほど切羽詰まってはおらん。なにも死に急ぐことはない」

藤井隊長の眼にうっすらと涙が滲んでいた。

「隊長、連れて行って下さい。お願いします」

誰も彼もが縋るように絶叫した。

藤井隊長は、きっとなって、

「くどい。これは命令だ。反抗は許さん。帰れ」

そう言うなり、くるりと背を向けた。

もはや、取り付く島はなかった。

久坂たちはやむなく宿舎に戻ったものの、虚しかった行動に歯噛みして、昂奮はつづいたままだった。

五人は部屋のなかで車座になり、善後策を協議した。

「俺たちを除外したのは、隊長の温情なんだろうか」

星野が誰にともなくそう投げかけた。

「温情なんて迷惑だ。俺たちだって一員なんだ。残されて生き恥を晒したくはない。そうだろう、みんな」

豊田が憤慨して言った。

「そうだ。伎倆は未熟でも突入することはできる」

中西が同調した。

「戊辰戦争のとき、官軍に攻められた会津藩は、少年たちで結成された白虎隊を前線に送り出している」

久坂はそう言いながら、一同を見回した。

「そうだ会津の白虎隊がいたな。久坂、まだいるか」

豊田がうながした。

「二本松の少年隊も、郷土を死守して玉砕している」

「そうか。国家危急存亡の秋は、どこでも少年隊が活躍しているんだな。よし、決めた。それでいこう」

「どうするんだ」

川村が豊田の考えを急いた。
「久坂、会津や二本松に倣って俺たちも年少隊を結成したことを宣言して、みんなで連署したらどうだ」
「それで、どうする」
「隊長じゃ握り潰されるから、飛行長に直訴しよう」
「そりゃあいい考えだ。久坂書け。俺が墨を磨る」
中西がそう言って立ち上がった。
久坂は、行きがかり上やむなく年少隊結成の決意を墨書し、そのあとへ各自が筆を回して署名した。
そして、五人は立ち上がると、書き上げた『特攻出撃請願書』を囲んで肩を組み、上半身で調子をとりながら天にも届けと『同期の桜』を高らかに斉唱した。

九

飛行長に直訴した二日後の夕刻、出撃の命令が出た。
藤井隊長と篠田分隊士がそろって搭乗員宿舎に入ってきたとき、隊員たちはごろ寝していたが、一斉に立ち上がって不動の姿勢をとり、挙手の礼で迎えた。
このとき、誰の胸にも、
(いよいよきたか)
という思いがあった。
「よし、やすめ、みんならくにして聴け」
藤井隊長は懐中から紙片をとり出して読み上げた。
「第五航空艦隊司令長官発令。神風特別攻撃隊流星隊は、明朝〇五三〇沖縄本島嘉手納湾に出撃し、集結中の敵艦船に体当たり攻撃せよ。以上」
この日のくるのを覚悟していた隊員たちではあったが、あらためて命令を受けるとみな硬直し蒼褪めた。
藤井隊長がその緊張を和げるように言葉を継いだ。
「いよいよ俺たちにも死して護国の鬼となるときがきた。冥土へはおなじ釜の飯を食ってきた仲間たちが一緒に逝く。竜宮城じゃ乙姫たちが待っているぞ。風呂に入って髭を剃り、下着も褌も真新しいのに替えてゆけ。明日の晩は美女を侍らせて酒盛りをやろう」
そんな冗談にも隊員たちの表情は弛まなかった。
篠田分隊士が替わって、
「明朝〇五〇〇指揮所前に集合。これから夕食までのあいだに身辺を整理して、遺品を揃えておくように」
と告げた。
「俺も貴様たちと一緒に最後の夜をすごしたいのだが司令部で作戦会議のあと壮行会をやってくれるというのでつきあえん。あとで酒と肴を差し入れるから、逝く者も残る者も同席して別離を惜しめ。よし、解散」
藤井隊長は篠田分隊士を促して宿舎を出ていった。
久坂たち残留組は、出撃する山村上飛曹、竹田一飛曹、福島一飛曹、長谷川二飛曹らの身辺整理を手伝った。久坂は、訓練飛行で組になり、なにかと世話になった竹田一飛曹につくことにした。

「久坂、頭の毛を五本切ってくれ」
搭乗員たちは坊主頭の天辺に十数本の長い毛を残していた。遺髪にするためばかりではなく、敵機と空戦して被弾炎上したとき、墜落する機内から天女が頭髪を掴んで引き上げてくれるという伝言があった。
久坂は竹田に言われたとおり、正確に本数をかぞえて丁寧に切り取ると、残りの長い毛は竜宮へ案内する美女が持ちいいようにそっと縒っておいた。明日はもうこの世にいない人だと思うと胸が詰まった。
竹田は、久坂から鋏を受け取って爪を切ると、頭髪と一緒に半紙に包んで遺品箱に入れた。そこにはほかに私物の腕時計と使い古した万年筆が入っていた。
そのあと竹田は、衣嚢から真新しい肌着、褌、靴下などをとり出すと、あとは遺品として整理した。
久坂は所在なく正座したまま傍らに控えていると、
「久坂、俺の形見だ。つかってくれ」
竹田がとつぜんそう言ってマフラーを差し出した。〈南無八幡大菩薩〉と墨書してある愛用品であった。
久坂が、
「いいえ、それは――」
咄嗟に辞退すると、
「いいんだ。これは貴様が使ってときには俺のことも思い出してくれ、俺はこっちのやつを巻いてゆく」
「でも、そちらには守護神が書いてありません」
久坂が知っていて、止めると、
「生還のない特攻出撃に、神仏の加護は必要ないさ」
そう言って、寂しく笑った。
それは、僅か二十年足らずでこの世に生きることを断念させられた者の悲痛な呟きだった。
久坂は、感極まって顔を上げることができず、膝の上に広げた竹田の使い古しのマフラーに書かれた豪快な筆跡を食い入るように凝視めつづけていた。
やがて、整理のできた者から遺書を書きはじめた。
久坂らは、たがいに頷き合うとそっと部屋を出た。
宿舎の裏側へまわると無言でその場に立ち尽くした。
久坂は、まだ明るさの残っている空を見上げた。薄曇りではあったが雨になりそうな気配はなかった。
どのくらいの時間そこにそうしていただろうか。
「貴様たち、そんなところでなにをしているんだ」
とつぜん声をかけられて、われに返った。
篠田分隊士が従兵を伴れて立っていた。
「これは、隊長と俺からの差し入れだ」
篠田はそう言って両手に提げていた一升壜を差し出した。従兵も篠田に倣って両手の二本を差し出した。
五人は反射的に近寄って、その酒を受け取った。
「尾頭つきの赤飯が届いているぞ。早く持っていけ」
「はい、有難うございました」
久坂たちは礼を言って宿舎へ持ち込もうとした。

「ちょっと待て」
篠田に声をかけられて、みな一斉に振り向いた。
「久坂、貴様は残れ」
「はい」
久坂は訝しみながら隣の星野に一升壜を渡した。
従兵は、篠田に敬礼をして帰っていった。
篠田が黙って歩き出したので、久坂は背後についた。
「久坂、俺と並んで歩け」
「はい」
久坂は、言われるままに篠田と肩を並べた。
なにを叱責されるのか、と久坂は素早く反省してみたが、思い当たることがなかったので、あたりが夜の帷に包まれはじめているのをさいわい図太く構えた。
「久坂、貴様たちは年少隊を結成したそうだな」
そのことなら、叱責を受ける謂れはなかった。
「はい。出撃からはずされたので請願いたしました」
「飛行長も隊長も、苦笑しておられたぞ」
「それでも分隊士は征かれるではありませんか」
「俺は三月十日の東京大空襲で家族全員を亡くした。もうこの世に未練はない。両親や弟妹たちの生命を奪ったB29がどの空母から発進してきたのかはわからんが、どいつでもいいから体当たりして仇を討つんだ」
「自分もやります。お手伝いさせて下さい」
「莫迦言うな。貴様には家族がいる。死んじゃいかん」
「同胞の生命を守るには、特攻隊員の一人一人が敵空母に体当たりして全滅させなければなりません」
「おなじ人間同士が、なぜこうまで憎悪を剥き出しにして喰み合わなければならないのか。俺は悲しいよ」
「国家存亡の秋にいたり、われら年少隊も先人に倣い、国土防衛の一翼を担って生命を賭ける覚悟です」
篠田がとつぜん立ち止まったので、久坂も足を止めた。二人のあいだに重苦しい沈黙のときがながれた。
篠田が、いきなり両掌で久坂の肩をむんずと摑んで、
「久坂、この戦争はもうすぐきっと終わる。特攻は無駄死にだ。貴様たちは請願なんかするんじゃない」
そう言いながら、篠田は顔を近付けて睨むと、両掌に力を籠めて久坂の全身を激しく揺すった。そして、
「せめて貴様たちだけでも生き残れ。約束しろよ」
と言った。
久坂は、予期せぬことを言われて返答に窮した。
「久坂、生き残って世の中が落ち着いたら文学をやれ。俺が果たせなかった目的を貴様が受け継いでくれ」
「文学を、ですか」

「そうだ。森鷗外を読め。俺は残念ながら中途半端で終わってしまったが、貴様は芥川龍之介も読破しろ」
篠田は懐中から文庫本を出すと久坂に押しつけた。
「鷗外の歴史小説だ。俺の遺品と思って熟読してくれ。なんども言うが貴様は生命を大切にするんだぞ」
そう言うと、篠田はくるりと背を向けた。
「分隊士――」
久坂の眼に涙が溢れた。篠田も肩を震わせていた。
「もういい。帰れ」
「分隊士――」
「帰れといったら、かえれっ」
「はい、帰ります。今日までお世話になりました」
久坂は取り付く島がなく、不動の姿勢をとって篠田の背後姿に挙手の礼をすると、やむなく踵を返した。
すこし歩いたところでそっと振り返ってみたが、篠田の姿はすでに漆黒の闇に包まれてしまっていた。
宿舎の周辺は、静寂を破って喧噪をきわめていた。
つぎつぎに蛮声を張り上げて唄われているきき馴れた歌は、いずれも悠久の大義に生きることを培われてきた若者たちに、さらに追い打ちをかけるような詞が盛り沢山に含まれているものばかりであった。
久坂は、入室を躊躇いその場に立ち尽くしていた。
やがて、唄い疲れて一座がしんとなると、その重苦しい空気を振り払うように誰かが気合いを入れて逆立ちをはじめた。
すると、それを切っ掛けにして乱痴気騒ぎになり、格闘技などで発散する者が続出した。
出撃してゆく隊員たちは、自分の生命の終わりが刻々と迫ってくることに堪えられないのであろう。
人は誰しも、自分の最期がわからないから気楽にいられるのであって、健康な若者がある日とつぜん死を宣告されたら、とても平静でいられるものではない。
そう思うと、久坂は居堪たまれずその場を離れた。
どのくらい歩き廻っただろうか。いつかさっき篠田分隊士に追い返された松林のあたりを彷徨していた。
久坂は、松の根方に腰をおろした。ときおり松籟をきくほかは物音ひとつなく、静かな夜であった。
月を眺めてぼんやりしていたとき、ふと微かな物音をきいた。空耳かと思ったがしばらくするとまたきこえた。耳を欹てるとそれは動物の呻き声のようだった。咄嗟に狐狸かと身構えてあたりに眼を凝らした。
注意して見据えると、十メートルほど前方で黒い影がむっくと起き上がった。狐狸ではなく人であった。
「お母さーん。お母さーん」
絶叫するその声は、明朝出撃する木村少尉だった。
木村は、絶叫を繰り返しながら日本刀を遮二無二振り回した。月光で光る刃が空を切って蹶き足掻いた。
無情の時刻は、容赦なく過ぎていった。

十

流星隊が特攻出撃したあとの宿舎は廃墟と化してしまった。久坂たちは親鳥を亡くした雛鳥たちが不安で身を寄せ合うように広い部屋の片隅に集まって起居したが、訓練機もない昨今では為すすべもなく無聊に苦しみ、いたずらに虚しい日々を送った。

そのあいだに木更津や百里ヶ原から特攻機が飛来して、整備と爆装をするわずかのあいだ翼を休めた。

そんなときは、流星隊の宿舎もその人たちのこの世で最後の仮寝の宿に宛てがわれたが、その夜の別離の宴はいつのときも流星隊の出撃前夜を彷彿させた。

零戦隊などは、

「俺たちは、空戦で敵機を撃滅するために伎倆を磨いてきたんだ。それがなぜ爆装して体当たりしなけりゃならんのだ。艦爆隊じゃないんだ、戦闘隊なんだぞ」

そう悲憤慷慨して、荒れに荒れた。

久坂たちが手分けして床をとりにゆくと、かならず、

「寝ろとはなんだ。貴様たちのような突っ込まねえ雛に、俺たちの気持がわかってたまるか」

と罵倒されて、思い切り撲られた。

久坂は、いつもその場は歯噛みして侮蔑に耐えたが、あとで床に入ってから独り悔し涙に眩れた。

(あのときみんなと一緒に出撃していれば、こんな恥辱を受けずにすんだのに――)

そう思われて臍を噛んだ。

あの日早朝、勇躍壮途に就く流星隊員たちと一緒に飛行場へ行った。満開の山桜が匂う小道を無言で歩く隊員たちの肩に、散り急ぐ花弁が降りかかった。

散る桜
残る桜も
散る桜

であった。

海軍では、高く上げた軍帽を振って別離を惜しむ。

久坂たちは、藤井隊長機をはじめ各隊員機が発進するたびに、略帽を千切れんばかりに振りつづけた。

最後の一機が芥子粒ほどになって、明るくなりはじめた空の彼方に吸い込まれてゆくのを見届けると、久坂は虚脱状態で飛行場近くの地下電話室へ向かった。

狭い室内ではすでに通信員たちが、それぞれ短波受信機を担当機の周波数に合わせて配置に就いていた。

久坂は、素早く予備の受話器をかけると、篠田機担当の受信機に紐線の先端の差し込みを突っ込んだ。

特攻機は、敵機動部隊を発見すると、まず自分の姓の一字を打電し、つづいて攻撃目標にする艦種の略号を打ち、突入開始と同時に電鍵の先端を締めてツーという連続音を発信させる。その発信音が絶えたときを体当たりした時刻と定めていた。

呼吸を殺して全神経を耳に集中させる緊張の長い時間がすこしづつ過ぎていった。なんども気にした時計の針がようやく発進して二時間近くの経過を示した。

このぶんだと、流星隊は早朝出撃が効を奏して、どうやら途中でグラマン戦闘機に迎撃されることもなく、無事に沖縄の海域に到達できそうであった。

特攻のはじめのうちは、零戦の直掩隊がかならず特攻機を目的地まで護衛していったのだが、その零戦も特攻機に使われるようになってからは、護衛する戦闘機がなくなり、途中でグラマンの迎撃を受ければ、増槽をはずして五百キロ爆弾を抱いた身重な特攻機は、為すすべもなく敵機の餌食になってしまっていた。

久坂は、吻と胸を撫でおろした。

待つこと久しく、藤井隊長機からの打電が入った。

「われ嘉手納湾上空に到着、敵機動部隊を捕捉せり」

受信した通信員がその電文を報告し、つづいて、

「流星隊は、これより全機突入を開始する」

旨を読み上げた。狭い電信室に緊張がはしった。

(いよいよだ)

久坂はその瞬間、両掌で受話器の上から耳を蓋い、篠田機からの発信を聴き漏らすまいと身構えた。

やがて、雑音のなかから微かな発信音が拾えた。

篠田は、肉親たちの生命を奪った憎いB29が悠々と翼を休めている空母を見つけたにちがいない。

――篠、空母、ツー。

符号が躍った。久坂の瞼に、篠田が憤怒の形相物凄く空母目がけて急降下してゆく様子が鮮明に映った。

(篠田分隊士っ、篠田分隊士っ)

久坂は心のなかでなんども叫びながら涙にくれた。

そして、連続音が途切れたときには、眼が眩んだ。

その夜の久坂たちは、電信だけでは信じられず、みんな還ってくるような気がして落ち着かなかった。

陰膳を据えての夕食だったが、先輩たちを喪った寂しさで胸が詰まり、誰も箸をつけようとしなかった。

ときおり、誰かが、

「あっ、爆音がきこえるぞ」

と叫び、そのたびに五人は戸外へ飛び出した。空耳とわかってはいても、凝としてはいられなかった。

久坂も、たしかに何回となく爆音をきいた気がした。

三月のあいだ起居をともにした先輩たちの出撃を見送った初体験の興奮から心労は極度に達していたが、夜が更けても頭が冴えて床に就く気になれなかった。

五人は出撃した隊員たちのことを沁々と語り合った。

久坂は、篠田の突入をあらためて脳裡に描きながら、

(体当たりする瞬間まで正気でいられただろうか)

と思った。

それは、いつか座学のときに副長から、

「突入のとき、恐怖のあまり失神する者が多いから失敗する。眼を見開いて成功を確認する気魄を持て」

と繰り返し注意されたことを思い出したからだった。

そのとき、久坂は、

(はたして人間は、いま自分が木っ端微塵に砕けるその瞬間まで平常心のままでいられるものだろうか)

と疑問を持った。

病気で極度に衰弱した人は意識が朦朧としているだろうし、交通事故などは予期せずに起こるから恐怖に戦く時間はないが、心身ともに健全な人間が突入態勢に入ってから目標に体当たりするまでの時間を正常な精神状態でいられるものだろうか。いかに特攻隊員が生きながらにして神であると煽てられても人間に神の真似ができるはずはない。突入態勢に入った瞬間に意識が朦朧として失神してしまうのではないだろうか。

しかし、それはあくまでも久坂自身の考えであって、体当たりして生還した者はいないのだから、どこまでも当て推量に過ぎず、真実は永遠に謎であった。

ならば勝手な憶測は、戦死者に対する冒瀆である。

久坂はそう考えて、篠田の心境推理はやめにした。

遣り切れない思いの長い夜は、いつか明けてきた。

十一

疾病や負傷で入室していた隊員たちがぼつぼつ退室して顔が揃ったのは、半月あまり経った頃であった。

しかし、復帰してきた隊員たちはみな逝きそびれた痛恨で塞ぎ込み、宿舎のなかは陰気に落ち込んだ。

寡黙に沈み、重苦しい日々がつづいた。

そんなところへ、ある日朗報が届いた。

南九州基地の残留隊員で再編成するというのだ。

久坂たち五人は、隊長に昇進した二村に呼ばれた。

「貴様たち年少隊員は特攻参加を請願したそうだな」

「はい、そうであります」

請願書をかいた久坂が、一同を代表して答えた。

「そうか。その決意はいまも変わりないか」

「はい。変わりありません」

「そうか。それなら貴様たちの請願を叶えてやろう」

「本当でありますか」

久坂は、心中雀躍した。

「念を押すが、どうしても特攻を志願するのか」

「自分たちは、本隊出撃のときに志願しております」

「あれは飛行長が許可しなかったのだから立ち消えだ」

「自分たちは、已むなく請願したのではありません」

「生きていたいとは思わんのか」

「自分たちは率先して帝国海軍を志願いたしました。娑婆の人たちが多く犠牲になっている国家危急存亡の秋に、たとえ年少兵とはいえ軍人の身でおめおめと生き長らえることはできません。二村隊長、お願いいたします。

自分たちもぜひ連れて行って下さい」

五人は、いっせいに、

「お願いいたします」

と叫んで、二村隊長に迫った。

二村隊長は、無言で久坂たち一人一人の顔を凝と睨んでいたが、やがて意を決したかのように大きく頷くと、

「よし、わかった。みんなで一緒に三途の川を渡ろう。いつでも出撃できるように心の準備をしておけ」

久坂たちは、二村隊長から確約を得て愁眉をひらいた。

新編成の特別攻撃隊は、『新選隊』と命名された。

名付けたのは二村隊長自身で、各隊にとり残された者たちを集めて再編成したのだから、浪士や武芸を修練した農民たちを募って結成し、崩壊する徳川幕府の楯となって活躍した新選組に因んでということであった。

新隊名を書いた木製看板が取り付けられた搭乗員宿舎は、久しぶりにがさつな賑わいをとりもどした。

どこからか飛来した特攻機が一夜翼を休め、翌日慌ただしく飛び立ってゆく繰り返しが次第に頻繁になって、基地はふたたび最前線の緊迫状態になっていった。

そんな追い詰められて殺伐とした状況下にあって、いっこうに搭乗機が補給されない苛立ちに切歯扼腕していた新選隊に、待ちに待った吉報が届いた。再製された九九式艦上爆撃機が支給されたのである。

流星隊出撃の選に漏れて名ばかりの特攻隊員になってしまい肩身が狭かった久坂たちは、欣喜雀躍した。

そのことを隊員たちに告げたときの二村隊長は、興奮気味であったが、やがて平静をとりもどすと、

「彗星より旧型の固定脚の九九式でそれも新品というわけにはいかなかったが、敵艦に体当たりするだけなら再製機で充分だ。機材払底の非常事態だから贅沢は言えない。宙に迷って身の置きどころのなかった俺たちにやっと収めてもらえる棺桶が届いたんだ。近いうちに出撃命令が出るだろうからみんな覚悟しておけ」

そう指揮官らしく部下を引き締め士気を鼓舞した。

翌日、さっそくこの世を見納める外出許可が出た。

陸上基地にいて地続きの町へ出られない辛さに耐えていた隊員たちは、久しぶりの外出を手放しで喜んだ。

久坂は、正装すると、これまで外出のたびに家族同様の扱いを受けた大江家へ訣れの挨拶に出向いた。

山を下る小道の両側につづく松林では、三十代後半から四十代にかけての微兵された補充兵たちが、肋骨が浮き出た上半身を露出して松根油を採取するための根株の掘り出し作業に汗を流していた。

このころは、揮発油はもちろん潤滑油も極端に不足していて、松根油で代用していたのである。

久坂は、体力の限界をこえる重労働に励んでいる補充兵たちの脇を通って外出するのを心苦しく思った。

山を下りると異様な光景を眼にした。陸軍の兵士たちがあちこちの畑に塹壕をつくっていたのである。

ここでもまた補充兵たちが狩り出されて、円匙で穴を掘ったり、畚を担いだりする重労働に従事していた。

これまで見掛けたことがなかった陸軍部隊がきて、本土決戦の防衛態勢を固めているところだった。

沖縄が陥とされればつぎはこの南九州が戦場になる。松の根株掘りや塹壕つくりを眼のあたりにして、久坂は土壇場に追い詰められたことを感じさせられた。

出迎えてくれた大江夫妻は、久坂がいつものように略装や飛行服姿でないのを訝っている様子だったが、すぐにすべてを察したらしく顔を強張らせた。

久坂は、あらたまると、山から下りてくる道すがらずっと考えつづけてきた訣別の挨拶を述べた。

「今日まで、あたたかいご歓待を戴いて参りましたが、いよいよ帝国海軍軍人としての本分を尽くす機会がまいりました。ながいあいだお世話になりまして有難うございました。数々のご恩は決して忘れません」

「ついに征かれることになりましたか」

「はい。やっと出撃する搭乗機が支給されました」

「蕾のうちにどんどん散っていってしまうのですね」

ひではそう言うと、目頭を押さえた。

「戦争ですからやむを得ません。自分たちが生命を賭けて守らなければ、日本の国は滅びてしまいます」

「人間の尊い生命を奪う戦争は罪悪だよ」

「むずかしいことはわかりませんが、攻められたからにはなにがなんでも守りとおさなくてはなりません」

「お母様には、お知らせしたのですか」

「郵便も電報も、厳に禁止されております」

「それでは、お会いしないで征かれるのですか」

むろん、この世の最後に一目なりと会いたい思いはあったが、遠隔地ではどうにもならなかった。

「仕方がありません。母は自分が海軍飛行予科練習生に合格したときからすでに覚悟をきめていたはずです。弟が一人いますからあとのことは心配ありません」

久坂はそう答えながら、自分自身をも諦めさせた。

いつまでたっても由紀が顔を見せないので、

「由紀さんは、お留守なのですか」

ときいてみた。

「このところ躰の調子が悪くて臥せっているのです」

広太郎が顔を曇らせた。持病の心臓疾患だという。

「お会いできるでしょうか」

「お会いさせなかったらあとで由紀に恨まれます。ぜひ会ってやって下さい。ちょっとお待ち下さいね」

ひでは、そう言うとそっと立っていった。

「圭一君が征くまえに、戦争が終わるとよかったね」

ひでがいなくなると、広太郎は低い声でそう呟いた。

「仕方がありません。いつ逝くのか、いつ逝くのか、と

死に神の顔色を窺っているよりはましです」

「君たちを軍国少年に育て上げたのはわたしたちの責任でもあるが、死という目標に向かって純粋培養されてきた君たちは、若いのに胆が据わっているんだね」

「それでも、いよいよ敵艦目がけて突っ込んでゆくときには、真っ青になって震え上がるかも知れません」

久坂は、そう言った途端に思わず身震いした。

そこへ、ひでが入ってきた。

「圭一さん、お待たせしました。こちらへどうぞ」

久坂の来意を伝えてきたひでの顔は、蒼褪めていた。

由紀は、髪を整え羽織を着て蒲団に正座していた。

久坂の顔を見た由紀が、

「圭一さん」

と細い声で呼びかけ、悲しい眼をして見上げた。

「ご病気とは知らずに来てしまいました。びっくりさせてしまってお躰に障ったのではないでしょうか」

「そんなことより、圭一さんも出撃なさるのですか」

「はい。いろいろお世話になりました」

「圭一さんが特攻だなんて、あんまり可哀相だわ」

そう言うと、由紀は躰を震わせて泣いた。

「お躰に障ります。どうぞ笑って送り出して下さい」

「そうでしたわね。花は桜木人は武士。武人の門出に涙は禁物でしたね。ごめんなさい。わたしが一生圭一さんを忘れないようによく顔を見せておいて下さい」

由紀は、細い腕を伸ばして久坂の両肩をつかんだ。

由紀の白い顔が久坂の眼のまえにあった。

「お別れしたくなくても、仕方がないのですね」

「弟のように可愛がって下さったお礼にぼくの残りの生命を差し上げますから、長生きして下さい」

久坂が、由紀の眼を凝っと見詰めてそう言うと、由紀は思いあまって久坂の躰をひしと抱き締めた。久坂は、全身の力を抜いてされるがままになっていた。

十二

まる二日降りつづいた雨がようやく上がり、終日強い風が吹き荒れた翌日、新選隊に出撃命令が出た。

明朝〇五〇〇の発進である。

流星隊とおなじ早朝出撃であったが、桜も躑躅も終わり、新緑の季節になっていて日の出が早くなっていた。

雨雲が払われた青空に旭光眩しく朝日が昇り、巨大な軍艦旗に見送られての出撃になるはずであった。

久坂は、冥土への旅立ちに緊張して、

(いよいよ、明日が俺の命日になる)

と、臍を固めた。

その日の夕刻、久坂たちは指揮所で整備の先任下士官から再製九九式艦上爆撃機についての詳しい説明を聴き、はやばやと増槽を五百キロ爆弾に取り替えて発進まえの再整備を受けるばかりに待機している搭乗機に乗

り込んで、計器類を丹念に点検した。
そのあと、ふたたび指揮所へもどって二村隊長から沖縄までの飛行計画と、敵機遭遇の回避作戦を聴いた。
そのとき、突然、監視所の半鐘が鳴りひびいた。
「敵機っ、敵機来襲っ」
櫓の上の監視員が大声で叫んだ。
見上げた遙か錦江湾の上空に黒い塊が無数に浮かび、ちょうど大編隊を解いて小編隊別にそれぞれの目標に向かって降下しはじめているところであった。
南九州特攻基地群への薄暮大攻撃である。
二村隊長が、すかさず、
「全員待避っ」
と叫鳴った。
久坂たちは、松林のなかへとび込み躰を伏せた。
やがて、急降下の金属音とともにバリバリツと機銃掃射をかけてきた。間隔をおいて正確に攻撃してくる。
久坂は、伏せたまま、
(ここで殺られたら犬死にだ)
と、ひたすら被弾しないことを念じつづけた。
そこへドカーンという物凄い爆発音が耳を劈いた。
(あっ、搭乗機がやられた)
久坂は、咄嗟に顔を上げて見た。
滑走路の先の松林のなかに太い火柱が立っていた。
まもなく、五百キロ爆弾を抱いて燃料を満載した搭乗機はつぎつぎに誘爆を起こしていった。あたり一面に火の海がひろがり飛行場は地獄の修羅場と化した。
いつか敵機は去っていた。
久坂たちは、凄まじい火勢に圧倒されて手のつけようがなく、紅蓮の炎をまえにして呆然と立ち竦んだ。
明日早朝、久坂たちを収容して、沖縄本島付近の海の底まで運んで行くことになっている軽合金の柩は、その目的を果たさずに無惨に破壊されてしまった。
久坂たちは、滑走路に並ぶと、夕闇を舐めるようにして燃え盛る地獄の業火に向かって挙手の礼を送り、『海ゆかば』を斉唱して、自分たちを収容しないまま茶毘に付されている豪華な柩を凝視めつづけた。
うたい終わると、久坂は、
(最初は無視され、こんどは逃げられた。いったいいつになったら死に神にとり憑かれるのだろう)
と、切迫した臨終のときが遠退いてしまったことによって、また新たな不安に襲われた。
この世に生まれてきて、未練のない者はいない。
これまでは、生命の極限状態に立たされるたびに、
(俺が死ぬなんて考えられない)
と恐怖をはぐらかしてきたが、またしてもそんな思いを繰り返さなければならなくなってしまった。
これでは蛇の生殺しと同様である。
「死ぬことができないのは、精神状態が劣悪だからだ」
と教官に叱咤されつづけてきた久坂たちは若さで一途に猛訓練に耐えて、独自の死生観をもっていた。
だから、いっそ飛び立ってしまえばそれでもう踏ん切りがつくのだが、それが出撃直前に躱されてつぎの出撃まで間隔があいてしまったばっかりに、これでまたいつとも知れぬ執行の日を待つ死刑囚のような不安と恐怖に戦く日々を耐えてゆかねばならなくなった。
それは、一寸さきも見えない厚い雲海に突っ込んでしまったときのようないい知れぬ焦燥感であった。
(いつまでこの遣り切れない思いがつづくのだろう)
ぽっかり孔のあいた躰のなかを、冷たい風が吹き抜けていった。
(了)

社　告(内規)

☆　同人参加へのお誘い

私達はひろく同志の参加を歓迎致します。
「まんじ」は作品発表のための共有の(ひろば)として季刊発行しております。
同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆　維持会会員へのお誘い

本誌愛読者の内、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数カ月分をまとめて前納して頂いております。
季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行ない、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行なっております。
＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇ー〇ー六四五九二
加入者名　まんじ

信じて託す

—米山梅吉の一生—

三戸岡道夫

プロローグ

信託とは『信じて託す』ということである。相手を信用して物事を託す、相手は信用されたのだから責任をもって任務を果たす、この人間相互の『信頼と責任関係』が、信託の基礎をなすものである。

最近は信託というと、銀行預金よりも少し利息のよい金融商品ぐらいにしか考えられていないが、それは信託の一部であって、信託とはもっと広くて深いものである。

すなわち『信じて託す』の中心にあるのは、公益の精神だからである。もちろん公益事業の中には営利事業を伴うものもあり、また営利事業をすることによって公益事業を達するものもあるのであるから、現実の信託においては公益事業と営利事業とは密接不可分である。その一部分だけが強調されると、最近のマネービルの金銭信託のようになってしまうのであるが、信託業務の中心を流れているのはあくまでも公益の精神である。

その信託銀行を大正十三年（一九二四）に日本においてはじめて創立したのが、米山梅吉である。

また米山梅吉は大正九年（一九二〇）に、日本にロータリークラブも設立している。ロータリークラブも根底を流れるのは公益の精神であり、信託とロータリークラブとは共通の精神に基づいているのである。

したがって米山梅吉が信託銀行とロータリークラブの両者の生みの親となったのも、梅吉の中に流れる公益精神のしからしむるところなのである。

第一章　幼少期

（一）

日本の信託銀行の祖であり、また日本のロータリークラブの祖でもある米山梅吉は、明治元年（一八六八）二月四日に生れた。

父は和田竹造

母は　うた

であり、その三男である。

父の竹造は天保元年（一八三〇）に生まれ、母のうたは文政十一年（一八二八）に生まれ、二人の結婚は安政元年（一八五四）前後であったから、当時としてはうたは晩婚であり、また、二歳の姉さん女房であった。梅吉は竹造が三十八歳のときに生まれた子供であった。

父の和田竹造は大和国高取藩植村家の家臣であった。そのため大和高取から藩主に従って江戸へ出てきて、植村家の中屋敷の内に住んでいたのであった。

植村家は二万五千石の大名であったが、家康の四代前から松平家に仕えていた譜代中の譜代であっから、江戸の上屋敷、中屋敷ともに、江戸城に比較的近い場所に与えられていた。

和田竹造の住む中屋敷は江戸の芝田村町にあり、米山梅吉はその芝田村町中屋敷で生まれたわけである（現在の東京の新橋と虎の門の間に当る）。

当時の植村家の藩主は植村家保（いえやす）であり、梅吉の生まれた明治元年正月の鳥羽伏見の戦いの時には、京都守護の職に当っていた。そしてこの年内に、次の藩主である家壺（いえつぼ）がその後を継いでいる。

したがって梅吉の生れた明治元年二月四日には、梅吉の父の竹造は、藩主家保に従って京都へ行っていた可能性があった。そして明治四年七月の廃藩置県によって、藩主家保とともに江戸へ戻ったとも考えられる。その時、梅吉は四歳になっていた。すなわち梅吉は生れて四歳までは父と離れ、母と兄たちとともに芝田村町に住んで、父の帰りを待っていたものと思われる。

母のうたは、伊豆三島神社（現静岡県三島市）の宮司である日比谷氏の娘であった。

こうした和田竹造一家の家族構成をみると、次のようであった。

父　竹造
母　うた
長兄　栄次郎
次男　菊松
三男　梅吉

すなわち、父の竹造、次男の菊松、三男の梅吉を合せると、めでたい『松竹梅』になるわけで、こうした縁起をかついで三男を梅吉と名づけたのであった。

さて米山梅吉が生れた明治元年という年は、その前年の慶応三年に大政が奉還され、明治元年三月には五ケ条の御誓文が発せられ、四月には勝海舟と西郷隆盛の会見によって江戸城が明け渡され、七月には江戸が東京と改められるなど、激動の年であった。

もちろん梅吉は生れたばかりなので、そんな世の中のことなどは直接は知らないのだが、しかしそのような日本の新しい船出ともいうべき明治元年に梅吉が生れたということは、なんとなく米山梅吉の生涯の輝やかしさを、暗示しているかのように思われるのである。

(二)

しかし梅吉の上に突然の不幸が襲った。

明治五年、すなわち梅吉が五歳のときに、父の竹造が突然病気によって死去したのである。竹造はまだ四十三歳という男盛りであった。竹造は藩主にしたがって京都守護のために京都に上っていたが、明治四年の廃藩置県によって江戸へ戻ると、その翌年死亡したのである。梅吉は幼少の頃、わずかの間しか父と一緒に暮らすことができなかったわけである。

廃藩置県によって藩主はその地位を追われ、また和田家では父も失って、梅吉たちはこれ以上江戸に住むことができなくなった。

幸い母が静岡県三島市の三島神社の宮司の娘であったので、一家は三島市の実家に身を寄せることになり、三島へ移った。

三島へ住んで三年たった明治八年（一八七五）に、梅吉は八歳になり、小学校へ行くことになった。梅吉は、長泉村納米里（現在の静岡県駿東郡長泉町）にある、長泉小学校の前身である、映雪舎に入学した。

明治新政府は明治五年に教部省（後の文部省）を設けて最初の学制を公布し、小学校を明治五年から始めたが、とりあえずこれらの学校はそれまでの藩の学校や、比較的大きい寺子屋などを母体にしたものが多かった。

したがって梅吉の入学した映雪舎も、もとはお寺の学校であったものが、小学校計画の中へ組み入れられたものであった。

梅吉は本来であれば三島にある小学校へ入学すべきなのに、あえて長泉村にある映雪舎に入学したのは、その時、梅吉の長兄の栄次郎が映雪舎の教師をしていたからであった。それに長泉村納米里にあるといっても、そこは三島から北西の方角にあってそれほど遠い距離ではなく、八歳の少年でもちょっと無理をして田圃の中の道を歩いていけば、通えない距離ではなかったからである。

この時の長兄の栄次郎は梅吉より十二歳の年上であるから、すでに二十歳になっていた。当時の知識階級と

いえば、漢学者、国学者、画家、武士、僧呂、神官などに限られていた。和田家では、父の竹造が武士、母のうたが神官の娘という、当時としてはもっとも知識のある家庭といってよかったから、長男の栄次郎が二十歳で、教師の力を身につけていたとしても、少しも不思議ではなかった。栄次郎は映雪舎の教員宿舎に住み込んで教鞭をとっており、そのような関係から、梅吉少年も映雪舎に入学することになったのである。

映雪舎という学校の名前は、学校が建っている土地の地域性を現していた。というのは長泉村の北西には富士山がそびえ、その美しい姿が目の前に立ちはだかるように眺められたからであった。いや眺められるというよりも、ほとんど首を上げて仰ぎみるように、頭の上にそそり立っているという感じであった。

すなわち富士山の眺めが日本一よいところといってよかった。だから富士山の純白の雪が映る学び舎ということで、開設者が「映雪舎」と名づけたのである。

映雪舎の初代校長は久我頑量という老年の僧侶で、とくに漢学にくわしい人であった。最初は寺の建物で学校をやっていたのだが、その後生徒数もふえてきて、教育専門に使う学校舎が出来た。校舎が出来ると、教師の住む教員宿舎も出来て、三島に住んでいた梅吉の兄の栄次郎もその宿舎に入って、教えるようになったのである。

どうして三島に住んでいた栄次郎が、隣村の長泉村の小学校で教えるようになったのであろうか。それは長泉村の中には教師の適任者がいなかった。そこで校長の頑量が三島方面にまで手を伸して、栄次郎を探しあてたのであろう。和田家ではつとに父を失っていた。母と弟たちのために、長男である栄次郎はなんとかして働かなくてはならない。映雪舎へ栄次郎が就職することによって、和田家は救われたといっていいのである。

また長泉村は三島の隣村といっても、経済的にも交通の面でも、三島の勢力範囲内にあり、長泉村の人々は買物でも何でも気軽に三島へ行っていた。従って住地感覚としては、三島も長泉村も同じようなものだったのである。

したがって梅吉少年も隣村の小学校へ通うといっても、それほどの違和感はなかったのであはあるまいか。梅吉は毎日三島の町から小浜山（現在の三島駅はその小山を切り開いた跡である）の松林を抜けて、長泉村納米里の映雪舎へ通学した。それが一番の近道であった。

(三)

その小学校へ通っていた時に、梅吉のところに、一生の運命を左右する重大な話が舞いこんできた。

明治十二年（一八七九）、五年生になった十二歳の梅

吉のところへ、土地の旧家である米山家から、（梅吉を養子にほしい）という話が出てきたのである。

梅吉は教養のある両親からの素質を受けて、知識意欲も旺盛で、学校の成績も抜群、いわゆる神童のほまれの高かった子供であったからである。

米山家は長泉村の上土狩に住む旧家であった。小学校のある納米里（なめり）とは、田圃つづきで隣接している村落である。

米山家は由緒のある旧家で、邸宅の跡に残っている碑文（昭和十六年に建立）には次のように書かれている。

米山氏の祖はその昔、駿河の守護今川氏の家臣であったが、その後農業に転じて土狩に住むようになった。その後北条氏の領土となってからは名主を務めた。そのため門を東の小田原の方角に向って建てたので、米山家を通称「東」と呼ぶようになった。代々、藤の字を名前に使うことが多かったが、十三代の藤三郎のときに梅吉が和田家より入って、家を継いだ。天文十年（一五四一）に初代の藤四郎が没してから、今日（昭和十六年）（一九四一）まで四百年である。記念のために旧邸の跡にこれを建てるものである。

四百年の歴史とは旧い家である。

さて、明治十二年のこの時点の米山家の家族構成は、

当主　藤三郎　三十二才
夫人　さく　三十二才
娘　春子　六才

という三人家族であった。

すなわち子供は女の子が一人しかいないので、神童のほまれの高い梅吉を養子に迎え、一人娘の春子と夫婦にして、米山家を継がせようとしたのであった。

話を持ちこまれた和田家としても、父の竹造はすでにこの世に居らず、長男の栄次郎が映雪舎の教師となって家を継いでいるものの、梅吉少年の将来が安心していられる状態ではなかった。長泉村のこのような旧家からの養子の話であれば、願ってもない話であった。しかし十二歳の梅吉少年には、養子縁組の判断など出来ようはずはなかったから、母のうたと長兄の栄次郎が相談して、この養子の話を受諾したのであった。

こうして十二歳の梅吉は三島の和田家から、長泉村上土狩の米山家へ移った。そして小学校は引続き同じ映雪舎へ通った。

米山家は農家であるが、地主であるから、家族の者が田畑へ出て働くことはない。田畑で働くのは、使用人か、小作人である。

だから梅吉も大家の坊ちゃんとして、学校の勉強に専念した。梅吉の兄の栄次郎が映雪舎の教師をしていたという関係もあり、梅吉は校長の頑量に特に目をかけられ、頑量から特別に漢学を教わり、授業の手伝いなどもした。梅吉が小学校で漢学の勉強をしていたことは、梅吉が中学校に入ってすぐ漢詩を作っていることによっても、それがわかるのである。

第二章　沼津中学校時代

米山梅吉は映雪舎小学校を十四歳で卒業すると、引きつづいて地元の沼津中学校に進学した。

当時の学制は、小学校は下等小学四年、上等小学四年の、計八年が就学期間とされていたが、梅吉はそれを六年間で卒業したことになる。

かつて沼津には、静岡徳川藩の藩校である沼津兵学校があった。が、明治五年に兵学寮本校（後の陸軍士官学校）に合併されて、解散された。沼津兵学校がなくなった後にできた集成舎を経て、明治九年にその時の学制に従って設立されたのが、梅吉の入学した沼津中学校であった。

これはもちろん私学で、教師は旧幕臣の学者たちが勤めていた。当時としてはすばらしい教師が揃っていたわけで、初代校長はやはり幕臣の江原素六であった。

米山梅吉はこの中学校で、十六歳の年末に中途退学して上京するまで二年半ほど学ぶのであるが、この中学校での在学経験が米山梅吉のその後の方向に、決定的な影響を与えたといってよかった。この沼津中学校で、梅吉は持って生れた好学の志と、一生を支配した文学傾向が培われたのである。

教頭の名和謙次は昌平黌の出身で、漢学の造詣が深く、著書も何冊もあった。梅吉の文章への才能は、この教頭によって啓発されるところが多かった。この頃の中学校の教科目は英数漢が主要科目であり、漢学の教師が二名、英語が三名、その他数名であった。

米山梅吉は長泉村上土狩から沼津まで、毎日歩いて通学した。二里（八キロメートル）少しの距離である。いつも右手には富士山が見え、雨でも降らないかぎり、梅吉にとっては楽しい通学の道筋であった。

沼津中学校の跡地は現在、沼津駅前大通り東側に、沼津兵学校跡として石に刻まれている。当時としては駿東郡唯一の最高学府であった。生徒の数はそれほど多くなかったから、師弟の接触が緊密で、ほぼ個人教授に近いといってよかった。そして学級はあったが、学科学科で成績のよい者は、随時進級が許された。

漢学は四書の輪講だった。生徒たちが次々に読み上げ

た後、教師が後から講義する。四書の講義で基礎知識を固めておいてから、史記列伝に移るのである。だから当時の中学生は、論語ぐらいは暗記していたものである。月末、学期末、学年末には試験があった。

さらに沼津中学校では、作文科に重きを置いた。一週間に一度、試文と称して、即題で書かせた。まず普通文で書かせ、後からそれを漢文に直す、復文というものもあった。上級になると、最初から漢文で書かせた。毎週の成績が控所に張り出されて発表されるので、みな筆を競った。

英語はウイルスン読本の一、二、三、ユニオン第四読本、パーレーの万国史などであった。

数学ははじめに一回講義を受け、あとは生徒それぞれに独習させ、二週間ごとに試験があった。それに合格すれば、それより上級の講義を聞く。落ちればさらに二週間勉強して、もう一度試験を受けるのだった。

中学生の梅吉は、俊敏、明朗、快活で、学友から愛された。

が、梅吉が特に仲のよかった友達が一人いた。それは稲村真里という学生で、梅吉よりも先に入学していた、一歳年上の秀才だった。その稲村真里にある日、梅吉は次のような手紙を出した。

ああ、君よ、君よ、稲村君よ。余は君にむかい、頓首再拝、謹んで一つ願いがある。何ぞや、他なし。余は君の挙動を察するに、居止端正、すこぶる大度あり。実に余は多くの朋友に交わるといえども、いまだ君のごとき良友はいない。故に願いというのは、願くば生長の後もたとえ千里を隔てていても、互に兄弟のように音信を通じて安否を訪問し、もって水魚の交わりをしてほしいと思うのである。君よ、君よ、少しく余の心中を愍察し、君においてもこれに意あれば、常に兄弟の誓を許すや否や。一片の返書を賜え。もし許されれば、また後日に為すところあらんとす。

梅吉叩頭百拝頓首々々。

梅馨より

稲村君閣下

梅馨というのは梅吉の雅号である。

十四歳の少年が書いたとは思えない、達者な文章である。この手紙に対して稲村真里もよろこんでこれに応じ、以後二人の間には、一生、水魚の交わりが続くのであった。

稲村真里はすでに父を失い（この点では梅吉と似ていた）、母の許を離れて、叔父の家から通学していた。そのような境遇から、とかく稲村真里は引っこみ思案な少年であったが、梅吉との親交によって明るくなり、二人はいつも行動を共にするのだった。

沼津中学校への通学は、往復で四里ほどであるので、往復三時間以上かかったが、梅吉は余裕綽々と通学した。歩いていても、物は考えられる。梅吉は文筆が達者だったから、歩いている時間を利用していろいろ考え、それを文章にして自分で雑誌を作って、学生たちの間に回覧した。

雑誌には論説もあり、詩文もあって、学友からよろこばれ、

（敬愛なる梅馨君）

として、一同が親しんだ。

演説会には梅吉は、開口一番、

「敬愛なる満堂の諸君……」

と呼びかけて、滔々と弁じたてた。

時々懇親会があったが、その席上では、

「敬愛なる諸君、僕が詩吟をやります。

浮影梅上大白を浮べ

……」

と、自作を朗吟するのが常であった。浮影梅というのは、狩野川に沿って建てられていた料亭である。

文筆に積極的だった梅吉は、中学校の中の回覧雑誌だけでは満足せずに、その頃東京で発行されていた『顕才新誌』という雑誌に投書を始めた。日本中に行き渡っていた雑誌であったから、これに掲載されることは当時の青少年の憧れであった。梅吉の投稿はたびたび採用されて載った。晩年になって米山梅吉はその頃のことをふり返って、

「その雑誌には私の文章と、夏目金之助というのが一番よく出た。それで夏目金之助という名前を覚えた、それが後の夏目漱石だった」

と語ったことがあった。

明治十四年には国会が開設されて、梅吉が沼津中学校に通っていた頃は、民権論の盛んな時代であった。沼津中学校にも政治思想が波及してきて、生徒たちも政治論に興味を持つようになった。沼津でも時々政談演説会が開かれたので、沼津中学校の生徒たちもそれに興味を持つようになった。

しかし学校では生徒たちが政談演説を聞きにいってはならないと、禁止していた。そこで生徒たちは申しわけに、退学届をポケットにしのばせて、政談演説を聞きに行ったということであった。

なおその辺の沼津中学校の様子が、米山梅吉の著「幕末西洋文化と沼津兵学校」の中に次のように記されているので、次に転記する。

出入坐臥総て兵学校張りで、かつては兵学校生徒を唯一の顧客としたる市中第一の某唐物店は同じ

く中学校生徒を好得意とし、文房具その他新式なる所用品一切の供給所であった。

街頭へ赴く時は美々しき部厚の洋書を小脇にし、少くともパーレーの万国史を読み得るまでは未だしとされた。漢書を携えては行々詩でも吟ずるといったように、断旧の知識と思想の錯綜がいろいろに表現して、教育上に矛盾あり牴牾を免れざるものありしは当時の事であろう。

英米の教育学が漸次輸入せられて自由思想の著るしく鼓吹され、民権論のごときもまた盛んになって、有志者はあるいは国会の開設を促し、あるいは政党を組織して天下翻然たる勢いであった板垣退助の如き名士の来りて政談演説会の催さるることなどがあれば、学生は当時これを聴くことを禁じられていたので、いったん退校届を投じてこれに赴くを常とし、校長をはじめ教師も知らざる真似をしていたというようなふうであった。

あるいはまた学校が裁判所に近かりしを奇貨とし、放課の時間には走して訟庭に入り、当時の代言人が長髪拳を振いては小事件に大雄弁を弄するのを傍聴して快とし、寄宿舎には消燈就眠の時刻を過ぎてなお談論風発を事としたというように、何らの拘束もなく、従って窮屈ということを知らず、まったく校長以下、教師の人格とその根底よりせる武士的精神に薫陶され、生徒は真によく活機に学ぶことを得たのであった。

沼津中学校の教科の中には、体操科というものがなかった。それで生徒たちはそれぞれ近くの勝景や名所旧跡などを訪れて、身体を練ることにつとめた。それは学校の方針であったので、その鍛練日は日が定められていた。

沼津の町の近くには千本松原があり、また狩野川をへだてて香貫山があった。足をのばして伊豆へ入れば、頼朝が源家復興の祈願をした三島神社がある。江川太郎左衛門がいた韮山も近い。頼朝と義経が対面した黄瀬川の上流にある藍壺の滝、佐野の滝などもある。もっと上流へ行けば、景が島の絶景も待っている。梅吉は稲村真里と一しょに、そのような所へ遠征を試みたのであろう。

このようにして沼津中学校の通学は、梅吉にとってもっとも楽しい時代であった。なんの苦労もなしに勉強ができた。成績はいい。友達も多かった。

しかし梅吉は学年が進むにしたがって、

（果して自分の人生はこのままでいいのであろうか）

という、前途に対する疑問を持ちはじめたのであった。というのは梅吉は和田家から米山家へ養子に来たのであるが、養子に来たということは、米山という家を継ぐということである。梅吉は、

（このまま行くと、米山という旧家を継いで、上土狩という土地で地主として一生を送らなければならないわけである。果して自分の人生はこれでいいのだろうか）

という疑問であった。

それは梅吉が、ある大地主の家の旦那の生活を知っていたからであった。その旦那というのはある由緒のある家から、ある村の大地主の家へ婿に入った男であった。中学校を卒業しており、大地主の若旦那としては申し分のない人間であった。しかし若旦那であるからやる仕事などなく、毎日何もしないで暮らしているのであった。若旦那の役目は、秋になると小作人が年貢の米を持ってくる、それを計って受取ることだけだった。その他には仕事がない。普段は何も用がない。親戚が多いので、その冠婚葬祭を一手に引き受けているのであった。

（俺も中学校を卒業すれば、あのようになるのか。俺の人生はそんなものでいいのか。そんな生き甲斐のない人生でいいのか）

梅吉はその若旦那の上に自分の将来を重ねて、そのように思い悩むのであった。普通の少年であれば何の疑問もなく、与えられた境遇に満足して本能的に順応していくのであるが、梅吉はそうではなかったのである。

村の中だけを見ていれば平穏であるけれども、眼を転じて広く世の中を見てみると、もう東京には大学が出来ていて、そこを卒業した人々が、官界や経済界、ジャーナリズム界で活躍していた。

（俺も生きるからには、あのように生きてみたい。いや、生きねばならない。あの若旦那のような生き方は嫌だ。しかしこの長泉村にとどまっていたのでは、それが出来ない）

右せんか、左せんかと、梅吉は悩むようになった。

文章に自信のある梅吉は、とりわけジャーナリズム、すなわち新聞記者になることを憧れていた。

（沼津中学校ではもう学ぶものは学んだ。これからは東京へ行って、石にかじりついても勉強したい）

という願望が、次第に梅吉の中で強くなっていくのであった。

（つづく）

ダンススにはまった私

二

ダンススクールへ

島津隆子

都内に住む私と、横浜方面に在住の友人たちの間をとって、世話役氏は東横沿線の、とある街にあるダンススクールを探してくれた。見学のために、スクールのドアを叩いたのは三年前の春の頃であったろうか。

私たちは偶然の切っ掛けと、ほんの少しの勇気と、自由になる自分の時間を持って、スクールの扉を開けたことになる。

きれいに磨かれた大きなフロアー、一面には鏡がはめ込まれ、静かに音楽が流れている。

ドアーのチャイムに若い貴公子然とした先生が、にこやかに現われた。ワイシャツにセーター姿の、清潔感漂う好青年である。

四人でグループレッスンを受けたいと、世話役氏が先生に話した。

それから三、四日後、私たちにもう一人の申し込み者が加わり、月旺日の12時30分から1時間30分間、五人でのグループレッスンが決まった。

すらりと背の高い美しい四十代の女性が、私たち年配組と一緒にレッスンを初めるというのだ。それだけで、かなりの引け目を感じるが、グループは六～七人からとのことである。

この場合、嫌(イヤ)と言うのは若い女性の言い分だろうと、ちゃっかり若さを盗み見しながら、共にレッスンを受けるのも面白い、と思うことにした。

そして、いよいよレッスンが始まった。

「まずレッスンの方法は、影(シャドー)といって、独りでステップを踏むことから始めます。皆さんは男性と組んでいるつもりになって下さい。男性は女性をイメージします。」

なるほど、男は影法師というわけか。

先生の号令で、女性は左足後退から四拍子の足型を踏むのだが、想像力貧困な私たちには、組むべき男性の影も形もみえない。

「下を向いてはダメですよ。背筋を伸ばしましょう！」

先生の号令と容赦のない注意が続く。

「では、音楽に合わせてみましょう」

こうして少しダンスっぽくなった処で、初日のレッスンは終了した。

これ以後、毎週のレッスン後はホテルのレストランで、たどたどしい身のこなしや足型を笑いの種にしながら、四人で遅いランチをとることになった。

こんなふうにブルース、ワルツ、チャチャチャ、ルンバ、タンゴと、影(シャドー)のレッスンは続けられた。

ワルツもルンバもタンゴもむずかしい。

「こんな複雑なステップは、とうてい覚えられそうにない」

覚えの悪い私はいつしか、他の四人にとり残され、果ては皆の足を引っ張るのではないかという強迫観念に苛まれていったのだ。

私の場合、それは一種の〝すり込み〟現象といえるものかもしれない。

幼児の頃から〝かけっこ〟はいつもビリ。ドッジボールの輪の中で、投げ込まれるボールを捕ろうとせずに逃げまどい、真先に標的になっていたものだ。運動神経は零と決めていたから、運動(スポーツ)の類は大の苦手であった。

そんな私が血迷ってダンスを始めたのだから、魔がさしたとしか言いようがない。

しかし、私独り、ここで引き退るわけにはゆかない。卑怯者にはなりたくなかった。

幼児期からの〝すり込み〟は忘れたふりをして、ダンスを踊るしかない処まで、われとわが身を追い込んでいった。

それでも、二ヶ月三ヶ月と経つうちに、世話役氏は四人の女性のパートナーを一人で勤めてくれるまでになっていた。

だが、初心者同士はなかなか呼吸(いき)が合わなくて、お互い緊張のために体が固くなり、足型を間違えないことだけに全神経を集中する。それでも、音楽に合せて、どうにか動けるだけで上出来だったし、嬉しいことであった。

世話役氏は交互に女性の相手をする立場なので、こちらに、強いリード感が伝わる。もちろん私たちも、足を

踏まないよう細心の注意を傾ける。
私は膝に弱味を抱えているので、足がもつれて一緒に転ばないようにと心を使った。
「そんなに女性を強く振り廻さないように気をつけて。女性は毀れやすいガラス細工だと思って、優しく扱って下さい」
世話役氏が先生から注意される。
「ええッ、私たちがガラス細工だなんて思ってくれる男性が、この世にいるのですか?」
女性たちはわが意を得たりとばかり、顔を見合せて微笑み合う。
ダンスの場合、男性は女性の三倍は大変なものらしいが、男性だって、リードしにくい女性もいることだろう。いわば相性の良し悪しということか。
「いや、そんなことはありませんよ。僕のリードがよければ、あなた方は踊りやすいんだから、とにかく男は女の三倍努力しなければ、といいますからね」
こう云った後で、世話役氏は、
「だけど先生のやり玉にあげられるのは、いつも僕だね。野郎にはきびしいね」
と笑った。

個人レッスン

半年が経った頃、私は皆の了解を得て、個人レッスンを先生に申し出た。
今迄パートナーは影法師と、順番が廻ってくる世話役氏だったが、今日からは先生である。
〃やっぱり個人レッスンはやめておけばよかったかな〃
と若い男性と踊ることに、何だかドキマギと慌てている私がいる。
だが、さすがに先生は馴れた手順と、ソフトなリードで、またたく間に私をダンスに引き込んだ。
ごく初歩の単調なステップで、さぞたどたどしかっただろうが、私は音楽(リズム)に乗って踊る心地よい感触を味わった。
もう転ぶ心配もなかったし、影法師を相手のあてどなさもなかった。
先生は私に男の子があったら、ちょうどこんな年頃かな、と思える四十歳前後である。呑み込みの悪い私のことなので、毎回同じ注意をくり返さなくてはならない。
だが、先生は嫌な顔もみせずに、根気よく丁寧に同じことを教えてくれる。
人間だから虫の居所の悪い日、体調のよくない日もあるだろうに、そのようなことは微塵も感じさせることがない。それは見事なほどである。
「覚えが悪くてごめんなさい」と云う私に、

「いいえ、皆同じですよ。早く覚える人は割合早く忘れるものだけど、時間をかけた人はなかなか忘れないから、大丈夫!」
「何度くり返しても、さっぱり上手く踊れない人が相手では、いいかげん嫌になりません?」
「いいえ、僕だって、そうやって今日があるんですから、当り前のことです。気にしないで下さい」
先生は笑いながら「根性打ち込め棒」と白く大きく書かれた棒を持ってきて、みせてくれた。裏側には「喝」とある。この棒を見ただけで、先生の辿った修練の日々の片鱗を垣間みた気がする。
〃この道に賢し〃と云うが、一つの道を貫ぬいた人は、精神も体も鍛えられて、賢い大人を感じさせるものだ。
私はよくパソコンや携帯電話の使い方がわからなくなり、止むを得ず娘に救いを求める。
「このことは、この前教えてあげたばかりよ。どうして覚えられないのか知ら」
ノートとボールペンを手に、私は訴える。
「こんどは忘れないようにメモしておきたいの。だからお願い、ゆっくりやって見せてよ」
だが、娘の指先が目にも止まらぬ早さで、パソコンのキー盤を二~三度叩くと、問題は解決してしまう。
私は腹の底で呟く。
「どうせなら、もっと優しく教えてくれればいいのに。てきぱきと出来るようなら、歳を取ったなんて嘆かないわよ」
それに比してと、私の無いものねだり癖である〃男の子への渇仰〃は深まるのだ。
遅々とではあるが、グループと個人レッスン併用の甲斐あって、足型だけはどうにかマスターすることができたようだ。だが間違わずにステップを踏む範疇から一歩も出るものでないことは、自分でもわかっていた。
いつも通り、ブルースで足ならしをし、次はボックス ルンバ、次はルンバの曲に変った。ルンバを踊りはじめた時、先生の動きが止まる。
「ルンバは妖しさを表現しましょう。パートナーをわざと無視して通り過ぎ、つながった手に引き戻されて、艶然とパートナーの肩に手をかける……という感じが出るといいのですが……」
ああ、やっぱり私には色気がないことを思い知る。そして、なお追い討ちがつづくのだ。
「あなたは正直な女(ひと)ですね。正直でよい女(ひと)が地のままで踊っている感じです」
「先生! 何ていうことをおっしゃるのですか。私は正直だの、よい女(ひと)などと云われることを最も恐れているのよ。若造のくせに…」
と云いたい言葉を呑み込んで、私は笑うしかない。そ

れにしても頭からくらった手痛い一撃である。

また、ある日のレッスンでの出来ごと。

いつものように先生がデッキに向い、手にしたCDを差し入れた。すると思いがけず流れ出た曲は「ベッサムムーチョ」であった。

私が若い頃、巷に流行ったなつかしい曲だ。現在はアメリカ版ダンス音楽のCDの中に、ラテン系として組み入れられているらしい。

「ルンバですよ」

先生の声でわれにかえったが、私はなんだか泣きたくなるようなセンチメンタルな心境に陥った。少しメランコリーな青春の残映がかすかに心をかすめたようだが、私は先生とルンバを踊った。しかも破綻なく一曲を踊ることができた。

一時間のレッスンが終り、教室を一歩出た途端、私は有頂天であった。ひとりでに笑いがこみ上げてきて、にんまりとした。

「こんな私にも踊れたわ！　しかもベッサムムーチョよ」

と一瞬の快哉をむさぼった。

そして、いつもの帰り途である駅前広場に出た。そこに一本の「欅」の大樹がある。その大木の根本を丸く大きく囲んで、ステンレス製のパイプのベンチがあるのだ。いわば区民の憩いの空間である。

私は三本の太い幹の葉が、まるで緑の日傘のように拡がって陽影をつくるベンチに向かうと、腰を下した。

体をふんわりと包んで吹き過ぎる風を感じながら、私は独りダンスの余韻に浸った。

もしかして、ダンスを踊るなど不可能かもしれないと、頭の片隅で考えていたのに、先生と快適に踊れた、先刻の摩可不思議を思った。そして、風に吹かれながら、人は太古の時代から、体でリズムをとり、大地を踏みしめて踊ってきたことに思い当った。

現代人の私にも、その血は流れているはずである。だからいくら鈍感な私でも、好ましい音楽と相手があれば、自然に踊りたい衝動に突き動かされるのは当然だと、実感した。

そして、古事記の中の一つの逸話を思った。

天照大御神と天の岩戸

須佐之男命の暴君ぶりは目に余った。

田畑の畔や灌漑用の溝の破壊、神々が新米を試食する神殿に大便をするなど、悪戯が過ぎた。

しかし、姉の天照大御神は、そんな弟の狼藉を、すべて善意に受け取っていた。

畔や溝を壊すのは「耕地面積を広げようとする考え」

神殿への排便は「泥酔して吐いた汚物」

と理解して弟をかばったが、弟は姉の心遣いなどどこ吹く風で、神へ衣服を捧げる機織屋へ、皮を剥いだ馬を放り込み、機織姫を衝撃死させるなど、傍若無人の悪戯はやむことがなかった。

「あんな乱暴者、もう呆れ果てた！」

堪忍袋の緒が切れた姉は、天の岩戸へ隠れてしまった。

すると、天地は全くの闇となってしまった。

天照大御神は日の女神である。その女神が姿を消してしまったのだ。来る日も来る日も夜ばかりの暗黒の世界となった。

暗闇に悪が蔓延り始めた。無法が世を支配したのである。

困り切った八百万の神々が河原に集まった。そして、何とか天の岩戸から天照大御神に出て来てもらう方法がないかと協議する。

知恵の神が奇抜なアイデアを提案した。

まず、邪気を祓う長鳴鳥を集めて鳴かせ、次いで、天の香具山から根こそぎ採ってきた榊の枝に、勾玉や八咫鏡などを飾った。

そして、一人の神が捧げ持ち、他の神が声高らかに祝詞を上げた。

この後、猛き女神、天宇受売命が襷姿で天の岩戸の前面に置かれた桶の上に飛び乗り、音楽に合わせて踊り始めたのだ。

衣服は乱れ、全身から汗が迸り、乳房がこぼれ出た。性の祭典である。

これに八百万の神々が拍子をとり、暗闇の天地に笑い声が渦巻いた。

この騒ぎに、天照大御神が岩戸を少し開けて外界を見ようとした。

その時、猛き女神が、

「あなたよりすてきな女神がいて、みんなで喜び合っている最中ですよ」

と天照大御神の嫉妬心をくすぐる。

そして、岩戸の細い隙間に鏡を当てた。鏡に写ったのが自分の顔とも知らぬ天照大御神は、それを女神と錯覚し、もっとよく見ようと、戸口から身を乗り出した。

その機会を捉え、戸口の横に隠れていた剛力の神が、天照大御神の手を取り、外界へと導き出したのだ。そして、

「二度と中へはお入り下さいますな」

そう云うと、神の一人が天の岩戸の入り口に縄を掛け、封印をした。

〃締め縄（注連縄）〃はここから起ったものという。

世界は再び日の光に満ち、万物は明るさをとり戻した。

天照大御神を気取るつもりは毛頭ないが、私は長い間、家庭という閉鎖的な暗い岩戸の中にいたのかもしれない。

誰かの手によってこじ開けられた岩戸から出て、私はダンスを始めたというわけだ。

そして、ありきたりの住み馴れた世界より未知の世界の方が刺激的で、面白いことがわかった。老化した体もそれなりに活性化し、心も華やいで明るくなったようだ。

どうやら単純な私がダンスにはまったということらしいが、この先はどうなるか全くわからない。

つづく

まんじ110号特集号発行についてのお知らせ

先日のまんじ104号合評会にて、掲題の件につきまして参加されました同人各位のご賛同をいただきましたので、下記明細の通り計画を進めたいと思いますので御連絡申し上げます。

記

1. 発行日は平成20年11月１日です。
2. 原稿〆切は平成20年６月末です。従って来年の６月末には『まんじ』109号と、110号特集号の、二つのご寄稿をお願いすることになります。
3. 特集号ですから、読み切り物で四百字詰原稿用紙30枚（12,000字）程度のものをお願いします。新作でも既発表の物でも結構です。
4. 製作会社は栄光出版社です。

以上

発行人　三戸岡道夫
編集担当　中山　喬央

幽けし大正デモクラシー

大和禎人

大正という時代に生まれ育った私は大正デモクラシーと言う言葉を曖昧ながら一つの護符のように大切にしている。たとえ幽けしの、得体知れぬ、あるいは掴みどころの空虚な実態でしかなかったにせよ、貴重なものとして抱き続けるフシのものなのだ。

大正十二年九月一日に襲われた関東大震災を上限とする見識に立ち冒頭に置き編纂された一冊の「昭和史」がある。小学館発行によるものだ。この年表に目を通すとき、大正末年となった十五年までの数年がいかに大切かを知るよすがを認識させられるのである。

「大衆文化の形成」として編者は震災後の三年を締めくくり、丸の内の復興、首都圏の拡大、奢侈傾向の強まり、サラリーマンの増大、女性の職場進出、洋裁化の始まり、「文化」のキャッチフレーズのもとに大衆文化が形成された。大正十四年には雑誌「キング」が創刊され、ラジオ放送の開始がそれを象徴する。そうしたことの政治的表現が大正デモクラシーの成果として見なされ、政党政治の確立、普通選挙法の制定、陸軍の四個師団（高田・豊橋・岡山・久留米）の削減などの軍縮であった。

だが、わずか数年で日本の状況は大きく変化する。タイトルは「戦争と国民」と塗り替えられるのである。

大正十二年九月から十五年末までの三年四ヵ月は国民生活上実に貴重な期間であったと言えるのである。震災の災害から立ち直るための民力の底力の見事さにも驚かねばならないし、普通選挙法の成立、軍縮におよんで、明日は知れずデモクラシーの萌芽を見たのであった。

ところで、この大正期のデモクラシーの代表的唱導者として吉野作造さんという人があったことを忘れてはならない。政治学者、評論家として東大法科を終え、袁世凱に招かれ天津に行き、その長男の教育にあたった。この事実は往時の日中関係を知る上で興味深い。

帰国後東大助教授となり、欧米に留学、帰って教授と

なり政治史、および政治学を講じた。

学生時代の野尻清彦氏、後の大佛次郎さんは幕末の正義の剣士鞍馬天狗を創造したが、随想に記して、吉野先生を敬するあまり、ある講演会のはねを待って、先生の後を追い、後ろ髪をつかんだという挿話を書いている。

やがて「中央公論」に政治論を発表、民本主義のスローガンを揚げて、普通選挙、貴族院、枢密院の権限縮小を論じた。大正十三年、軍部ににらまれて退官、一時新聞社に入ったが、ここでも普通選挙を推進する論説ほかを紙上発表したため、筆禍事件を問われて退社。再び東大の講師に迎えられ、政治史を論ずるかたわら明治文化の研究に没頭した。

著書は多く、「欧州動乱史論」、「日本無産政治論」「明治文化全集」二十四巻がある。わが国政治史の上に残した功績に亡びはない。

ところで、その吉野作造先生の住まいがわたしの生誕地の近隣にあった。本郷区と云った往時、私は幼少年期を過ごしている。上富士前町三番地を生誕地として中学校四年生までを過ごしているのだ。今の文京区となってからの地番は本駒込五丁目十八番地が相当し、吉野さんの家はそこから一〇〇メートルとはなれていない二〇番地に相当するところにあった。往時の市電矢来町系統が神明町車庫を発し、木戸坂を上りつめる傾斜地へ通り抜ける三角地に氏は居宅を構えておられたのである。素朴な二階屋であった。

「ここが吉野さんの家だ」

父は敬虔な口ぶりでわたしに教えた。

「で、どういう人」

「うむ、大学の先生だ」

子供を相手だからそれ以上のことは言わなかった。その頃、御大典祝賀、立太子祝賀などあい次ぎ、奉祝行事として市電は花電車を運行したものだったが、無蓋の市民の沸き立つ人気を呼び、私達少年は何時何分の通過予測のもとに走り出て見物したものだ。吉野さんの家を左手に通り過ぎ木戸坂の坂上に出て、神明町車庫を出た景物の花電車がゆっくりした速度で坂を上って来るのを歓呼して迎えたものだった。

今にして思えば夜空の映えた花電車はデモクラシーのささやかな一つの贈り物であったかも知れない。

もう一つ、ここに記しておきたいことがある。それは吉野さんの子女が私たちの通う小学校に在籍していたのである。吉野文子さんといって私たちが六年生の時、たしか一年下級であったと思う。全校の集会があり、終わると、学年を問わず先着順の並列の状態で昇降口へ殺到する。

「ホラ見ろよ、アレ吉野だ、文子だ」

たしか後年W大の教授になったN君あたりであった。

それ以前すでに便所の落書きがあった。往時のことで男子は一列砲列式の便所だった。前面に、

吉野文子の××××とあった。

ただし小学生のことだから、年齢なりの異性を意識する他愛ないものには相違なかった。

私たちの小学校は東京市富士前尋常小学校というのがその正しい名称であった。「尋常」は「普通の」というほどの意味に用いられ、僅かながら授業料負担があって昇降口土間に投入受け箱がそなえられていた。

吉野さんは子女を区内名門の誠之校とか有名校を選ばず普通の学区小学校に通わせていたものだ。一つの見識であったろう。今日その所在地はそっくり文京区立第九中学校となっている。文京区本駒込三―二八―九という地番である。ついでながらさらに言えば、富士前小学校は今日に存在していないのである。

かつての富士前小学校は昭和二十年二月二十五日旧本郷区内最初の被災校として空襲で焼失、二十一年三月二十五日廃校の運命を迎えている。私たちの母校と呼べる拠り所は永遠に姿を消してしまった。民家の壁に見る校歌を添える掲示由来記のみが侘しさを伝える。

そっくり第九中学校に名称を変えた地こそ夢幻の母校跡地。外構の赤煉瓦積み、上部鉄柵の構えのみ旧態を残す風物として名残りを伝える。

当時の公立小学校では吉野文子は異人種であった。当人には自覚はなくとも、その挙措すべてが俗風に馴染まないのであった。セーラー服を纏った異人種であった。吉野という姓からこの子の父親がどういう人かまでは認識においた眼差しとは思えない、好奇に晒されていたと思いたい。彼女は堂々として、すべての囁きに無関心であった。大柄で少しくおませな異邦人であった。

少しくくだくだしく所以を記したが、吉野文子さんのことも夢のまた夢と決着を記しておこう。

ただし、同嬢がセーラー服の洋装であって、往時では珍しく。ことさら注目を浴びたことを言い添える必要がある。男子三組、女子三組、昭和三年卒業という時点で洋服は男子でようやく一割、女児はいまだ一割に満たない時代であったことを付記しなければならない。

吉野さんの家の前に仮設交番が建てられ、お巡りさんが立っているのを目撃した。駒込警察署の手配であったろう。通行する者にとっては不気味であった。

「それは吉野さんの身に危険なことがあってはならな

いからだ、警察もご苦労なことだな」

今度は父はそう言った。

「あれじゃ家の人たちが出入りに不自由じゃない」

さしあたり吉野文子嬢の通学がどうかと心配だった。

「そう、なにより先生ご本人が不自由だろう」

立番勤務についている一人きりの警察官の無聊にも同情された。

女生徒吉野文子をそれと声をあげたN君は彼女を吉野作造先生の子女と認識した上の声を上げたものであろうか一切不明である。それと知らされてみると、闊達な作造先生の質をうけて、悪童どもの群れの中にあって悪びれず鷹揚な姿勢を保っているのだった。

昭和三年二月二十日、先に制定の普通選挙法による初総選挙が実施された。ただし男子成年のみ、（女子は一九四五年の終戦後ようやく実施）大正デモクラシー一つの細やかな結実であった。

折柄学年末、卒業をひかえた私たち六年生は男子三クラスが引率されて本郷区役所に近い本郷小まで行き模擬投票経験の機会を与えられている。

監督庁の方針にもとずいたものであったろう。普通選挙法の真義を知らぬまま、小遠足気分であった。今にして思えば大正デモクラシーの山場であったと知るのである。

昭和初頭の女性社会の社会進出は当初和装のお被布姿が一般であった。タイピストなどがその主流であった。

昭和七年十二月十六日、年末商戦たけなわの際、日本橋の百貨店白木屋（後の東急日本橋店）の白昼火災に際し、女店員十四名が墜死するという惨事があった。初の高層ビル火災に女店員は裾の乱れを気にしての墜落死であった。

この事件を契機に女性サラリーマンの洋装化へのきっかけになった。

吉野作造さんは昭和八年三月十八日、冥界に去られている。なんと夭折とも言うべき五十五歳、惜しむべし、市民のために全力を捧げ、一世を駆け抜けられた生涯であったと言えよう。大正デモクラシーを代表する大知識人であられた。

吉野さんの死後、日ならず日本の運命を傾ける事態が発生する。二月二十四日、日本代表松岡洋右が「日本は日支紛争に関し、国際連盟と協力せんとする努力の限界に達した」と宣言退場するという経緯があり、越えて三月二十七日には外相内田康哉により国際連盟を正式に脱退するという通告が行われている。博士はこの不幸な国運の成り行きを知らず眼を閉じられているのであった。

近ごろ親しむ温泉で伊豆の畑毛に大仙家という湯宿がある。丹沢トンネルの真上、東海道本線函南駅の至近という場所である。伊豆、箱根の温泉に飽きたらお勧めの湯宿である。霊峰の懐に位置する。大仙家の屋号もまた特別のものだ。由緒来歴を聞いていないが、経営者にとっては特別堅持する理由があるのだろう。小じんまりとしたホテル形式である。

腕の良い料理長を抱えていて、鮮魚は沼津魚市場及び東京築地市場、野菜物は沼津中央青果市場から直接自分の目でたしかめ仕入れをする凝りよう、

月ごとにメニューが変わる。

食前酒、先付、口代わり、壱の椀、お造り、進鉢、強肴、止肴、御飯、弐の椀、香の物、甘味

さらには盛り付けの妙にも感心する。

湯治湯としての特徴がまた面白い。独特なのだ。

浴槽の独特のスタイルは同所各旅館一致した様式が守られ、その趣向が興をそそるのだ。源泉そのままの冷水浴槽から、次いで多少の加熱槽があり、その上、42度の温水槽と三段階にしつらえ湯治効果を期待するのだ。もちろん温水浴だけの選択は自由なのだ。私は温水専科を堅持している。

さて、驚いたことにはこの宿のギャラリーに吉野作造先生の論文集が飾られていることだ。他には新派俳優の河合武雄の舞台写真その他がある。さらには浴場に至る通路にこの宿の子息が構えている大仙窯の作品が飾られ展示されているのであった。大きい作品ばかりだ。これらの作品を焼成するための窯場は庭先にあり、趣味に応じ実技の教授をうけることができる。

さて問題はことさらに吉野作造論文集がウィンドーに飾られていることにあり、フロントに尋ねたことだが、

「はぁー」というだけで、奥に尋ねるでもなく、失望させられた。宿のしおりにも触れる記事がいっさいないのだ。近傍の観光資料は揃えていても、内なる展示にはついに触れる応えがないのである。

一過性に終わった大正デモクラシーは滔々の歴史の中に埋もれ去った存在としてもはや一顧にも値しなくなったのであろうか。

「幽けし大正デモクラシー」と首題していささかの文辞を連ねたが、合掌を捧げて終わることにしたい。

（H一九・九・二六）

わが愛誦歌（四）

――戦後の歌壇逍遥

曽根竣作

この他に〈大空の斬首ののちの静もりか没ち日輪がのこすむらさき〉〈爾後父は雪嶺の雪つひにして語りあふべき時を失ふ〉なども著名歌である。

○観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日我には一生

栗木　京子

『水惑星』（昭59）所収、作者は京都大学理学部に在学中に、偶然目にした歌誌「コスモス」に惹かれ作歌を始めた。掲出歌は学生時代に作られたものと聞いているが、現実か虚構かは分らずとも明らかに失恋のうたである。

上句の出だしが中々巧みであるし、下句の断定に自己をも対象化した批評的な視点が見られ、しかもすぐれた比喩（回り、回ってゆく観覧車の日常茶飯的平凡な動き）を中心とする新鮮な表現の世界が展開されている。

この頃から、すでに閨秀歌人としての萌芽は見られたのであるが、その詠風には、ある感情や気分を自己の実感としてなまなましく描くのではなく、第三者的に描くことでかえってこの上なく冴えてリアルなものにするのが作者の技量であり特徴である。

掲出歌は、短歌に勤む者なら誰でも知っている程有名である。作者は昭和二十九年生まれの只今もっとも脂の乗りきっている女流歌人で、短歌雑誌、新聞、各地の短歌会などで八面六臂の活躍をされている。〈半開きのドアのむかうにいま一つ鎖されし扉あり夫と暮らせり〉〈夜の卓に冷ゆる林檎よ実のなかに雪中行事する人らゐて〉の二首も意味深く好きな歌である。

○マガジンをまるめて歩くいい日だぜ　ときおりぽんと股で鳴らして

加藤　治郎

『サニー・サイド・アップ』（昭62）所収。作者が俵万智と相前後して口語の歌を書き始めた時、この歌のようなアメリカナイズされた少し軽目の口語短歌が私達を楽しませてくれた。マガジンは、ややうす目の大型雑誌で、それをまるめて時々ぽんと擦り切れたジーパンの股で鳴らして歩く。邪魔になればお尻のポケットにねじりこむ。「いい日だぜ」というのが一首のキーワードである。ご機嫌な若者は、サングラスでもかけて海へ向って歩いているところかも知れない。

かと言ってそう単純な青春謳歌ではあるまい。「いい日だぜ」と言っているが、高揚した気分を一瞬掬い取っているその楽しさの向こう側には、やたらに明るいだけのむなしい半植民地風の平和が繰り広げられていた、ということかも知れない。

作者が、第一歌集『サニー・サイド・アップ』で登場した時代は、かの有名な俵万智の『サラダ記念日』と同じ頃で、ライトヴァースまたはニューウェーブの花盛りで、その青春性はそのまま時代を引っ張って行くようにも見えたが、必ずしもそうではないのが現状である。〈荷車に春のたまねぎ弾みつつ　アメリカを見たいって感じの目だね〉、この歌の「ね」掲出歌の「ぜ」といった助詞の口語性の活用語法に注目したい。

○侵攻はレイプに似つつ八月の涸谷越えてきし砂にまみるる

黒木三千代

『クウェート』（平6）所収、今を遡る十七年前の八月三日に起こったイラクのフセインによるクウェート侵攻を歌った一首である。

すでに、風化の彼方とも思われる時事詠であるが、当時一般の歌人が作ったクウェートのうたの中で先ず出色の作品であり今も記憶より離れない。「侵攻」を「レイプに似つつ」という出だしの性的喩をもって表現されたことによって、歌の中の「侵攻」は俄になまぐさい身体感と関係性を露呈しはじめる。「涸谷」は降雨のときのみ水の流れる谷のことであるが、この「涸谷」も「砂」も、あたかも「レイプ」の縁語であるかのように一首の中で効果的である。

このように、ことばに肉体をもたせる表現力は、たん

なる修辞の巧みさを越えた、この作者独特の才能である。言葉に身体性を感じさせたいというその詠風には、たしかに生身の重さと妖しさがある。

〈三月はぬたという食春泥によごるるごとき葱が甘くて〉〈椿あぶらとろとろとろええもう辛気ぢやなう　をみなのからだ折れ伏すところ〉などに見られる上方言葉の豊かな抑揚、アクセントの違いも多彩に取り入れているのも特色であるが、それでいて何か妖しく、なにやら得体の知れない、そうした女の姿、女の視線を主張しているようで興味深い。

○氷片にふるるがごとくめざめたり患むこと神にえらばれたるや　　小中　英之

『わがからんどりえ』（昭54）所収。「からんどりえ」はフランス語でカレンダーのこと。作者は若くして不治の病にかかり、つねに死と背中合わせの日々を余儀なくされた。

従って歌壇的なつき合いを殆んどせず、そのぶん時代の流行（前衛運動やライト・ヴァースなど）に左右されることのない、独自の静謐で四季の動きに鋭敏な完成度の高い作品世界を築き上げた。

掲出歌は、一見負の情感を表しているように見えるが、上句の「ごとく」で作者は目覚めの場面に高度な抽象性を持ち込み、現実そのものが、まるで氷片の冷たさを持つかのような感触を伝えている。だが下句の「患むこと神にえらばれたるや」には、決して受身ではない、また自虐的でもない、毅然たる自らの運命の自覚がうかがえる。

小生は、十有余年にわたり小中英之教室に通い、その警咳に接したのであるが、その透徹した鋭い詩心には及びもつかず、実に多くのことを学ばせて貰った。今でもわが作品には、小中氏の亜流的傾向が見られるのはそのためである。〈月射せばすすきみづく薄光りほほゑみのみとなりゆく世界〉〈この寒き輪廻転生むらさきの海星に雨のふりそそぎをり〉〈無花果のしづまりふかく蜜ありてダージリンまでゆきたき日ぐれ〉、創作のめぐりが常に静かなることも氏の特徴である。

○望蜀の瞳こらして十月の輝く水を蛇わたりゆく　　築地　正子

『薬切川』（昭60）所収。「望蜀」は隴を得て蜀を望むと後漢書にある人間の慾望の切りの無さを言うことば。

この作品は、実景の写実ともとれるし、また蛇の擬人化の手法による心象詠ともとれるが、やはり初句の出方から言ってきりっと引き締まった心象詠として頂きたい。

作者は、お茶の水の聖橋辺りを散策した東京っ子であったが、戦後、父の生地・熊本へ転居、その心情は決して満たされるものでなかった。しかし『常に豊かな自然に向って歌心をひらいてゐた』ことで、その作品はまさに風土との対峙によって練り上げられたというべきであろう。生の濃厚と気迫が横溢しているが、その作風は、しなやかさと骨太の強靭さが共存している。

第一歌集『花綵列島』に始まり第四歌集『みどりなりけり』を通読するに、女歌とは思えない剛毅さがあり、今でもその詠風を時折参考にしている。〈向日葵の面伏せてゐるかたはらを過ぎて文学のほとりにも出ず〉〈野葡萄もみのりそめたる紫の秋をわが身はうたはざるチェロ〉〈父もまた若き離郷者なりし日の明治の勇気塩のごとけむ〉なども大いに魅力のある作品である。

参考文献

現代歌人二五〇人（牧羊社）
現代名歌鑑賞事典（桜楓社）
現代百人一首（朝日文芸文庫）
現代短歌の鑑賞事典（東京堂出版）

祝出版

金原明善の一生

三戸岡道夫著

栄光出版社　　1,800円

日本中に心の木を植えた植林の金次郎。

霧笛

曽根竣作

黒ぐろとたたなはる森しづかなり樹々は数万（すまん）の芽立ちを秘めて

むらさきの雲垂れこめる街空を帰巣（きさう）の寒鴉（かんあ）明日へはばたけ

引地川けふ変りなくせせらぐを恩寵として夕岸ありく

編上げの最後の紐を結（ゆ）ひしとき風は捲き上ぐ雪を交へて

夕つかた丹沢山系染めゆける瞬時の燦もうつし世のもの

キャンパスの黄落（わうらく）明りを去りゆきし汝れを忘れず白きコートの

レクチャー終へかろき疲労に滲（にじ）みゆく天馬敦子のビオロンの音

見はるかすながつきの海渺々と白き巨船を浮かべたゆたふ

街空に茜きはまり群れ人のうしろでに就くはつき尽日

寄する波干（ひ）きゆく波も言挙げず埠頭に低く霧笛ひびかふ

ひんやりと朝の蛇口を迸るさつきの水を掌（て）に受けて佇（た）つ

べんべんたる年齢（よはひ）を思ふ紫のてつせん直ぐ立つ辺（ほと）りにあれば

むせ返す誕日の午（ひる）連れ立ちて銀座アスターの湯麺（タンメンたう）食ぶ

ことさらに祝ふ気もなく二人して淡々と首夏の巷にまぎる

駅よりの径ひとところ華やぎて夕闇に浮くもくれんの花

風に舞ふ柳絮やさしも川の面(も)に光を曳きて吸はれゆくなり

ユトリロの白よりそっと抜け出しし少女は画廊の片隅に坐す

檄文のつね巧みなりし図子武君(ずしたけし)逝きてみたびの夏回り来ぬ

勝敗はすでにありしか抗(あらが)ひて有隣堂の書架をうろつく

神を知らず仏恃(たの)まず過ぎ来しにけふ晴ればれとひとつ浮雲

うつつとも思へる夢を見し夜半の窓外しっとり秋霖の降る

雨だれの音に和しつつ呼気なせり八十一歳まだ生きんとす

滔々と時間をのせて流れゆくガンジスも真昼の幻影として

ひらきたる万朶の桜花濠の面にとどかんとしてかそかさゆらぐ

わが頭上さくらと蒼穹(そら)の交響詩奏づる果てに君逝きたまふ

雪もやふ空の下なるローカルの白きビル群無機にしづもる

くっきりと斑の文様浮かばせて王者の鯉は悠々と来る

乾きたる八月の空に風走り茜たゆたふ都会(まち)の果たてに

羽搏きをふと見上ぐれば昏れなづむ空旋回す椋鳥(むく)のひとむれ

色褪せし父のソフトの捨てがたくモボ気取りゐし昔日(せきじつ)おぼろ

短歌

行雲流水(六)

石黒修身

英国紀行詠他三十首

二〇〇七年六月から七月にかけて、スコットランドからロンドンに到る旅をした。主として、地方を代表する古都と歴史あるローカルな地方を巡ったが、季節的に緑濃い草原と、さまざまな花の咲き盛る景観に魅せられた。

歴史的な史蹟や、文豪ゆかりの地に興味は盡きなかったが、一方、大英帝国成立までの民族間の争闘の歴史や、今にしてなお夫々の民族が、独自の文化と伝統を守り、誇り高く生きている事実を目の当りにし、新しい感慨を覚えたものである。以下二十首

短夜(みじかよ)の故国を発ちていま着きしアバディーンの夜はしらじらとして

憧れしスコットランドの地を踏めり見たきものあまた心はずめり

ネッシーの伝説残るこの湖(うみ)は琥珀の水が満々として

幻のネッシーは見えずネス湖では古城の廃墟岸辺に残る

民族の象徴として三千年栄枯刻めるエディンバラ城

タータンの柄に家系を統(つた)うとうスコットランドの民の誇りは

タータンを巻く男らが不思議に似合うスコットランドは

スカートと呼ぶなこれはキルトぞとタータンを巻く男らは誇る

マクベスの悲劇を生みしコーダ城百花の園に蒼然と屹(た)つ

紗翁が想念(おもい)めぐらせマクベスの悲劇を書きし此処コーダ城

湖に沿う邑々を巡りたり「LAKE（湖水）　DISTRICT（地方）」と人は呼ぶなり

美しき湖水を望み百花咲くワーズワースの棲みしこの館（いえ）

ワーズワースが生活（たつき）をなせるこの館（いえ）は詩人の魂宿るがごとし

愛らしきピーターラビット生れたるポッターの里自然豊かに

ハワースの緑の野原を歩みたりブロンテ姉妹の育ちしところ

杳き日の映画のシーンが眼裏に「嵐が丘」が「ジェーンエア」が

沙翁の故郷たりしこの邑にゆかりの館百花咲く中

美しく鄙びたる邑を巡りたりコツツウオルズの田園広し

民族の争闘（いくさ）の末に鎮まりし「ユニオン・ジャック」に込めし歴史は

イギリスの旅の終りに訃を聞けり「宮沢喜一氏」ロンドンは雨

☆　☆　☆　☆

旅ひとつ終えて帰れば短歌詠まん想い逸れど律まとまらず

故郷のシンボックな菓子なりき「白い恋人」紛いを憂う

棚経に法衣も軽くバイク駆り大忙しの僧辞（さ）りにけり

「世界中の武器を買い占め棄てたい」と難民の少女テレビで語る

異邦なる横綱の妄に不信増し大相撲の威信とみに揺げり

スポーツの対外試合に喜憂する老人（おいびと）に残んのナショナリズムか

多摩川の河原で鶏飼い遊ぶ孫に卵を呉れし男は何処へ

政権を取るに手段は選ばぬか策略著るき党首は動く

迫りくる圧力に負け志萎えて宰相辞るを哀しむ

「清水の舞台」もそして「ルビコン」も老いて縁なく小安に居り

掌編小説3

ダブル・ハピネス

亜木陽一

宅急便の声がする。
婆さんが出掛けている間、ウトウトしていた。
あわてて起き上がる。
四国の親友・山田勘八からだ。
〝コワレモノ・ナマモノ注意〟の表示がある。
こわごわ開ける。
コワレないじゃがいもであった。
勘八が作ったメークインや前に貰ったことのあるオレンジ・ピンク色をした小さな堀りたてのじゃがいもだった。
うまそう。
台所に持って行った。

食堂のテーブルの上に新しい綺麗な色をした布が畳んである。
広げてみると、白地に勘八のくれた新しいじゃがいものようなオレンジ・ピンク色の大きなチューリップ模様の胸当てエプロンだ。
婆さん、仲々可愛いいものを買ったな。
いつもブルーとグレーの上下で決めているわしにはぴったりだろう。
大喜びでちょっと派手だがエプロンをしてみる。
鏡に写して見ると、わしも粋でお洒落で、少し気取って料理の先生に見えるカナ。
オホン。

では早速、夕食に向けて蒸しじゃがいもの小手調べ。
先日婆さんに教えてもらったばかり。
じゃがいもの土をたわしで丁寧に落とし、試食用にメークイン一個を四つに切り、小さいオレンジ色は二つに切った。
新しいエプロンが少し濡れた。

蒸器の下に水を入れて、布巾を敷いて、じゃがいもを被せて蒸す。
じゃがいもが蒸し上がったら、塩をパラパラッ。
わしはチューリップのエプロンをつけたまま、試食をする。
やっぱりうまい。

いい匂いがしてじゃがいもを食べていると、婆さんが帰って来た。
わしがエプロンを付けているのを見て、びっくり。
「おじいさんはもう――」
声が厳しい。
エプロンは次男の嫁さん用だった。
婆さんに、
「じゃがいも食べる？
お茶もあるよ」
「おじいさんはもう――」
言いながら、オレンジじゃがをパクリ。
「ア、　おいしい」
お茶を飲んで、ちょっと考えて、
確か同じものがもう一枚あったわ。
まだあったら、お揃いにしてみましょう。
急いで又、エプロンを買いに行った。

婆さんの背中に大きな声で、〝カ・ン・パ・チー〟。
婆さんはちらっと振り返り、手を高く上げた。
冷蔵庫を開けると、今婆さんが買って来た間八の刺身がデンと収まっていた。
婆さんが帰って来たら、夕食のじゃがいもを蒸しましょ。
今夜は間八の刺身と蒸しじゃが。
大好物でワクワクする。

れんししゅう(恋詩集)しさくのかなしみ　より　その一

松下壽男

詩

この一行も
生まれなかったポエジイを
十四行で葬るための
追憶の空しい錘だ

しかし今の私なら
詩人の夢も失せた今なら
大概のことに耐えられる

詩は一行も書かれまい
書かれても続くまい
脳髄を屑篭にする暴力に
私はとても耐えきれまい

詩をつくることにも耐えられる
言葉を疑う毎日を
耐えて暮らしていくために

ホメラレモセズ　クニモサレズ（七〜九）

松下壽男

七　金次郎像建設運動

翌年の春になると、陸一が試していた土壌改良の実験に、明らかな成果が現れてきた。野菜も雑草も生長していく有り様が大きく違っていたのだった。彼は、それを貞三に勧めてみた。貞三が始めると、多くの農家が真似をしだした。それを知って陸一をただ者ではないと認めだしたのは、肥料屋や機械屋であった。海千山千の彼らが、二十歳前の若い陸一を敬遠し、敬語を使い始めた。それを見て若衆仲間や百姓連中は陸一に一目置くようになった。無口だが分別のある男として陸一は認められていった。

若衆宿に行くと、陸一は、何かためになる話でも聞かせてみろとせがまれた。暇つぶしの座談であったし、彼に猥談を求めても無理な話であった。そこで陸一は読み進めていた「夜話」の中から幾つかを語って聞かせた。するとその若者たちが真剣に聞くのであった。座敷の奥に寝そべっていた頭までが起きてきて、彼の前に陣取るのだった。

誰の話だ。金次郎って聞いたことあんべか。このでくのぼう、二宮金次郎といやあ学校の読本に出てきたべ。柴刈りの途中さ座り込んで本さながめてた根性なしだべ。このばちあたり。いつの話だ。どこの話だ。年をとると、そんなええごと言ったべな。なんていう本に書いてある。さすが陸一は、学問が進んでるべ。今度来る時にはその本さ持ってこい、ということになった。

こうして若衆宿の夜は一五分なり三〇分なりが報徳読書会の様相を呈するようになった。夜話の残りの頁が少なくなると、金次郎さんの他の本を探しておけと言われるようになった。陸一は、花巻の町へ出たついでに本屋に寄って、報徳関係の書籍を集めておいてほしいと頼んでおくのだった。

次に寄った時には、書店は、新刊古本の幾冊かを揃えておいてくれた。中には大日本報徳社発行の機関誌「大日本報徳学友会報」も含まれていた。彼は、それらの中から、次は「報徳記」を読み聞かせることにした。しかしその本は、格調が高く中々の難文だった。陸一は易しく読みくだくために予習をしなくてはならなかった。機関誌はその予習のためのよい参考書になった。また機関誌を通して日本各地で報徳運動が盛んになっていることもわかってきた。愛知県豊橋市の、とある小学校の校庭に二宮金次郎の像が建った記事も紹介されていた。

陸一には、村に親友と呼べる仲間もできていた。彼らは共に貞三に農事に関する教えを請う者たちであった。手が空くと進んで貞三の開墾を手伝っていた。そして陸一を中心に報徳を人生の指針にしようと志すようになっていた。貞三もそのことは知っていたが、彼の口から報徳の話をすることはなかった。とはいえ彼が実地で示す農業経営は全く報徳の手本であった。

陸一の仲間は、自分たちの村に報徳を広めたいと考え始めた。そのためには幼いうちから報徳に親しませればいいだろう。そうだ、学校に二宮金次郎の像を贈ろうではないか、どうせ建てるならまだどこにもないという銅像がいいだろうと、とんとん拍子に話が弾んだ。ならば実行のために、これから日を決めて、集まって相談していこうということになった。

陸一らは、会合の場所を思案した。有志の集まりのために若衆宿を使うことは気が引けた。仲間の家に集まるのは尚更である。寺は不便な場所にあった。学校に金次郎さんを建てようとしているんだから、校長に掛け合ってみるかということになった。

まだ髭の似合わない壮年の校長は、盛岡の出身で、校舎に附属した宿直室兼校長宿舎にうら若い妻と住まいし、教育に情熱を注いでいる人物であった。彼は快く了承し、支援を惜しまなかった。時には妻女手作りの団子や汁粉が振る舞われることもあった。

月末の二七日、会合と定めた日は、いつものように陸一は早めに学校に向かった。新年度も二た月が過ぎて心なしか落ち着いた雰囲気のする職員室で、岩手日報を遡って読ませてもらっていると、宮沢賢治先生が昨年度いっぱいで花巻農学校を退職したという記事が載っていた。

「花巻川口町宮沢政治郎氏長男賢治（二八）氏は今回県立花巻農学校の教諭を辞職し花巻川口町下根子に同士二十余名と新しき農村の建設に努力することになった。きのう宮沢氏を訪ねると『現代の農村はたしかに経済的にも種々行きつまっているように考えられます、そこで少し東京と仙台の大学あたりで自分の不足であった農村経済について少し研究したいと思っています。そして半年ぐらいはこの花巻で耕作にも従事し生活即ち芸術の生きがいを送りたいものです、そこで幻燈会の如きはまい週のように開さいするし、レコードコンサートも月一回位もよおしたいとおもっています。幸い同士の

方が二十名ばかりありますので自分がひたいにあせした努力でつくりあげた農作ぶつの物々交換をおこないしずかな生活をつづけて行く考えです』と語っていた、氏は盛中卒業後盛岡高等農林学校に入学し同校を優等で卒業したまじめな人格者である」

記事の中の談話は、昨年立て続けに本を出していた先生だけに、あまりに唐突のように陸一には思えた。先生は一体何を考えているのだろうか。しかし陸一には想像の糸口すらつかめなかった。

銅像はどこに頼めばいいのだろう。寺の本尊は銅像に違いない、ならばまず住職に聞いてみよう。その夜は、相談もそこそこにして、山懐の寺へと向かうのだった。

そんな伝手で資料を手に入れてみると、金次郎さんの銅像の建設には予想外の費用がかかることがわかった。石像に比べると桁違いの額であった。しかも初の試みとなれば、原型代も掛かるのだった。原型の制作を誰に頼むか、どこの鋳造所に掛け合うかなどは、まだ皆目わからなかった。しかし村に日本で最初の金次郎さんの銅像をという触れ込みにはそれなりの力があった。

話を持ちかければ、長老たちも、ほほう、と感心するのであった。

次に彼らは、趣意書を作文し、発起人は良知陸一を筆頭に五名の若者が名を連ねた。そして学校のがり版を借りて、一〇〇部ほど刷り上げた。それぞれが手分けをし、それを持って家々を回って話をしてこようということになった。

翌月、会合に集まった彼らは、誰もよく話は聞いてくれた、それはよいことだべと賛同はしてくれたが、では寄付をしましょうという家はなかったと異口同音に語るのだった。小作の家は、構えを見ただけで戸口に立つのに気が引けたと言う者もいた。一軒一軒訪ねてみてつくづく村の貧しさが身に沁みたという者もあった。だからこそ趣意書を持って歩いた値打ちがあったと納得し合った。

地主の家にゃ気兼ねしてまだ誰も回っちゃいねえべ。結局地主連中に掛け合って、大口の寄付を取り付けなければ実現は難しいだろうという話になった。そこで仲間が集まって地主を回ることになった。

戸口で趣意書を見せると、主人が出てきて座敷に上がれと勧めてきた。断るとそれでも上がれと言うので、失礼しますと上がったが、地主の座敷に上がるのは初めてのことであった。

主人は、実によいことである、感動した、自分も二宮尊徳に心酔しておる。それなりの寄付は約束しようと語った。そして、女中の運んできた茶菓子でもてなされ、家族のことなどを訪ねられ雑談を交わして帰されたのであった。

帰り道は、さあ、これは手ごたえがあったのかなかったのかという話し合いになった。以前小作争議じみたことがあって、そろって地主の家に掛け合いに行った時も、座敷にこそ通されなかったが、地主はあのように優しい調子だったと一人が言った。まあとにかく口約束だけは取れたのだから一応の成果であろうと、その日は解散した。

その後も、様付きで呼ばれている地主の家を順ぐるりんに回ってみたが、その応対は、判で押したようであった。

次の月の会合では、もう一度自作農や小作農の家に働き掛けてみようということになった。小額でも多くの農民の寄付がなければ、金次郎さんの銅像は、村のものとは言えないだろう。さもなければ地主のものになりかねなかった。それに、たとえ口約束であっても、地主連中の理解を得られたことが、働きかけのよい材料になるだろうと考えた。そして今度は、一軒一軒回るよりも、何かの寄り合いの場で話を出した方が前向きになるのではないかと考えた。しかし戸主が若衆のように頻繁に集まる機会は村にはなかった。そこで庚申様や御稲荷さんの縁日など、村人の集まる機会にはできる限り足を運んで、気長に話を進めることになった。

若衆宿では、報徳記の読み聞かせが続けられていた。どうせこうして集まるのなら縄でも綯いながら話すのもよかろうという者が出てきた。綯った縄をみんなで町に売りに行こうということになって話が弾んだ。縄綯帳という帳面が作られた。綯った縄の束を積んでは、そこに名前を記すのだった。

その年、陸一は、二十歳になっていた。

陸一は、自分が押しも押されもせぬ村の一員であると胸を張ることができた。そして両親を支える若き自作農として自立をしていた。

彼の元に徴兵検査の通知が届いた。集合場所には壮丁になった同級生がたむろしていた。懐かしさで話が弾んだ。村役場の役人に近郷の検査会場まで連れて行かれた。結果は乙種合格だった。悔しかった。体格が小柄なことと、緊張の余り試験官の質問に何度も吃ってしまったことが原因だと思った。とはいえ両親はほっとした表情を見せた。

予備役として残る陸一らは、入営の日に同級生を村外れまで見送った。

八　労農党の集会

翌年、陸一はある小作人の集まりに出向いて、ひどい目に遭ったことがあった。

今夜小作が集まるという噂を聞いて、夕飯後に、茫々のすすきに囲まれた家に出向いてみると、部屋一杯に座った男たちが異様な厳しい目を彼に注ぐのだった。狭い殺風景な座敷であった。

自分を場違いなものに感じた陸一は立ち去ろうとし

たが、横の顔見知りが、陸一さん今は帰らん方がええと囁いた。

やがて屈強な大男にかしずかれるようにして、三つ揃いを着、メガネをかけた長髪の青白い青年が家の中に入って来た。彼は座敷の上座に座ると、自分は労働農民党の某ですと名乗った。

「みなさん、地主や資本家階級は、昨年の普通選挙法公布を以て、日本のデモクラシーの実現と宣伝しています。だが、みなさんの中に選挙権を持てる者がありますか。条件に納税額が定められている限り普通とは言えません。制限選挙であります。地主連中は、自分たちが村の代表であるから、民意は十分国政に反映されると主張していますが、ならば年貢を下げてほしいと言う小作の民意は、地主を通して、果たして国政に反映されるでしょうか」

陸一は、もっともだと思った。しかし彼は、世の中は急には変えられないと考えていた。一気に年貢を減らしたら国の財政は成り立つのだろうかと心配する自分もいた。

「地主はただの人であり、小作もただの人であります。地主は土地を持っており、小作は土地を持っていない、その違いがあるだけなのです。なのに、小作は地主から土地を借りて耕作し地主に年貢を払いながら生計を立てていかなければならない。そこに世の中の矛盾が生じるのです」

陸一は農村はそんな単純なものではないと感じた。貞三のように小作から地主になる者もあったし、父親のように地主の跡取りとして生まれながら小作になりかけた者もあった。しかも地主の貞三が、自作農の父を本家として、礼を尽くすのであった。天災や病気、運不運などのどうすることもできない条件があり、その元で人それぞれが生きていく中で、人と人の関係は絶えずどうしようもなく動いているのであった。それを財産のあるなしの関係だけで二つにわけるのには、無理があると陸一は思った。

「日本の国は着々と近代化が進んでいます。そして近代化が進めば財産を持つ者と持たない者に別れていくことは科学的にも明らかであります。そのことは西洋の歴史が証明しています。そして世の中の矛盾は革命によって一気に解決されるのです。しかし地主たちは革命を恐れて近代化から人々の目をそらせようとしています。相変わらず江戸時代の封建的な思想や習慣を押し付けて、地主は地主、小作は小作という、身分の違いをはっきりさせようとしているのです。二宮尊徳の報徳思想などその最たるものであります」

「い・いや、それはちがう」

思わず陸一は叫んでいた。報徳が小作の敵のように扱われるのを聞いて、黙ってはいられなかった。

「ほ・報徳は、農民の力で村を独り立ちさせてきた。飢饉を防いできた。荒地を開き収穫を増やしてきた。維新後の日本を富ませてきた。そ・それがどうして近代化から目をそらせることになるのか」

「それは、地主と小作の対立から目をそらせてきたからである」

「な・なにも報徳は目をそむけているわけではない。小作は自作をめざして働き、自作はより多くの農地を開き、地主は村が豊かになるために力を尽くしてきたのである」

「そんな空想的な話をしているのではない」

「な・な・なんだと。おれたちは荒地の開墾に取り組んでいる。それを空想と言うのか。地主も荒地から年貢は取れはしない。それが昔からの村のしきたりなのである。村のしきたりは地主も守る。そしておれたちは荒地が産み出した収益で土地を手に入れることができるのである」

陸一の話を聞いて色めきだった者たちもいた。

「荒地じゃあ土地が痩せていて、収穫も上がるめえ」

反論をしてきたのは小作の一人であった。

「いや、なまじ耕作を重ねた土地よりも肥えているもんだべ。ただ石灰で土質を改良せにゃならんだども」

「金肥に比べりゃ、石灰は安いもんだべ」「んだ、んだ」

「無駄口を挟むな。同士の話を聴け」青年にかしずくようにしていた大男が、陸一を睨め付けて恫喝した。青年が再び話し始めた。

「我々、革命をめざす小作の政党である労働農民党は、再来年の第一回目の普通選挙で多くの候補者を立てる予定であります。みなさんには選挙権はなくても、ぜひ応援をお願いしたい。そしてそれまでの間、地主から他の如何なる政党の応援や選挙運動を依頼されても、断固固辞していただくようお願いしたい。本日は、治安維持法下の厳しい情勢の中、多くの同士にお集まりいただき感謝に堪えません」

と、頭を下げて、青年は大男とともに立ち上がった。大男は、帰りがけにお前ちょっと来いと陸一に小声で声を掛けた。陸一は拒まなかった。

外へ出ると、突然横っ面に拳骨が飛んできた。不意を突かれた陸一は、よろめいた。

「この地主の犬め、警察に垂れ込んだらただじゃおかねえからそう思え」

青年と大男はそそくさと立ち去って、すすきの向こうの闇の中に消えて行った。

「地主の犬なんかじゃねえべ。たれ込むわけもなかんべ」

罵り合いを聞きつけた小作の一人が様子を見にきた。

「陸一さん、とんだ災難だったべ。せっかくだで、さ

パリ講和会議、ワシントン会議、平和記念東京博覧会、アインシュタイン博士の来日、東京放送局テスト放送、飛行郵便の開始。関東大震災後の帝都の復興も目覚ましいものがあった。

とはいえ、こういった出来事は、陸一ら村人にとっては新聞や書物の記事の上での出来事に留まっていた。洋服、写真機、蓄音機といった、いわゆるハイカラ文化は郊外で立ち止まっていた。花巻電気株式会社が東北地方に先がけて、近隣の村々に電燈を普及させてはいたが、電線は、まだ陸一の村には届いていなかった。そして世の中の動きを知るよすがの新聞すらも、陸一は、こうして学校の職員室に来て、読ませてもらっているのであった。

とはいえ、自由な暮らし、普通の暮らしへの願いは、村人の心に確実に広がっていた。そしてその願いに付纏うようにして、先行きへのぼんやりとした不安を感じるのであった。

村には地主がおり小作がいて、溝は深まっていた。それはあの夜の青年の言葉のように科学的に避けがたいもののようにも思われた。天道のようにも思われた。

陸一は、それが天道であっても、村は対立してはならない、地主も小作も、自分や村のよりよい暮らしのために互いを認めあって生きるべきだと考えた。それが天分の度合いを弁えた、人道に沿った行き方だと考えるのであった。しかしそれが天道に逆らう無駄な努力だと感じる時もあった。あの夜、闇の中から飛んできた拳骨がじわりじわりときいていた。

開墾の話に身を乗り出した男たちも、金次郎の銅像建設の寄付の話には、だんまりを決め込んだのだった。結局彼らは、報徳をもうけ話としか考えられないのだろうと陸一は思った。結局のところ社会は共同体の形成に向かうのか階級の形成に向かうのか。社会の形成とは天道なのか人道なのかと悩み迷う陸一だった。

金次郎さんだったらどうだろう、天地の間の世の中は必ず村の形成に向かうべきである、なぜなら世の中は、人の道にほかならないからだというだろう。では宮沢先生だったら。

今思えば、賢治から学んだ科学の総合する力は、確かに、陸一が報徳を学ぶ土壌になっていた。和魂洋才という時、才とは分析する力で、魂とは総合する力を指すものなのかもしれない。そう考えると賢治の科学は報徳とどこかで深く結びついているように感じる陸一であった。

そして賢治の元で学んだ科学は、とりわけ農芸化学は、荒れ地の力で荒れ地を耕す報徳の実践の力そのものだという思いがした。陸一は報徳と農芸化学によって村の若い指導者になろうとしていた。

しかしその村に科学として階級闘争が入ってきた。農村の慣習や文化は強引に分析され、分断されようとしていた。陸一が農村の自立と近代化の指針として考えていた報徳が封建制の遺物として排斥されようとしていた。

あの夜の一件以来、陸一は、もう一度宮沢先生に会いたいと思うようになっていた。しかし、もう母校を訪れても、先生はいないのであった。

岩手日報のどこを探しても、その後先生の記事はなかった。

収穫を前に、陸一は脱穀機に注す螺子と油を求めるために花巻の機械屋にやって来た。用事を済ませて、蕎麦を食べ、ついでに肥料屋、本屋と、町をぶらついていると、リヤカーに野菜を積んだ物売りの姿を見つけた。陸一は、見覚えのある歩き方だなと思った。俯き加減でひょうひょうと歩くその姿は宮沢先生に違いないと思った。陸一は、駆け寄っていった。賢治も気がついて手を上げた。

「宮沢先生、ご・ご無沙汰しています」

「やあ、君は、良知さんでしたね」

立ち止まった賢治は、薄茶色の作業ズボンに、ワイシャツを着て腰のバンドに手ぬぐいをぶら下げていた。

「ぼくはこれから町外れへ回って、家に帰るところなんです。よかったら一緒に来ませんか」

陸一は、リヤカーの後押しを始めた。そして後ろから声を掛けた。

九　羅須地人協会

明治政府の打ち出した国策は成果を上げていた。殖産興業の経済によって国は富み、富国強兵の軍国政治の実は上がり、日清、日露、大正の戦役に勝利した。

和魂洋才と口にするまでもなく、それらの成果をもたらしていたのが西洋の科学技術であった。

しかし国策の成果とは裏腹に、農村や都市の共同体から吐き出されていく小作人や労働者は困窮し、突出した兵力は腹を空かせた狼のように牙をむき始めた。

改革を求める運動は、西洋流に主義主張を貫く中で村や町の共同体を分断し、自らをもまた分断していくのだった。

矛盾を克服できない日本の魂が懊悩していた。和魂洋才の文化は、風俗のように容易には折衷されず、ますます分断の道を辿っているかのようであった。

新聞を読む限りでは、すでに日本の文明開化は成し遂げられたかに思えた。第一次世界大戦で戦勝国の仲間入りをして、日本の文明は西洋と同じ流れを進んでいるかに思われた。

「せ・先生は、作った野菜を売り歩くんですか」
「ははは、でも、やっぱりあまり売れません」
リヤカーを引きながら、賢治は答えた。
じきに二人は、町外れにやってきた。左手には雑木林が続き、林の下の段丘を下れば北上川が豊かに流れているのであった。道は細く川に沿って曲り始めた。右手には黄金に実った田んぼが広がり、その中を黒い電信柱が両肩に電線の束を支えて一直線に立ち並んでいた。リヤカーの左右には瓦葺きの町家や、茅葺きの農家やら酒屋やらが自由な鎖線を描くように立ち現れた。やがて林と畑とコスモスの花に囲まれた大きな二階屋が目に入ってきた。
片流れの三角屋根を持つその建物は、広いガラス窓で覆われていて、和風造りでありながら写真で見る西洋の水車小屋のような佇まいを感じさせた。
「夜セロを弾いていると、こんな所にも狐や狸が顔を見せるんですよ」
と、賢治は楽しそうに話すのだった。
その建物に続く小道の端に門柱が立っていて、白樺を皮ごと切った楕円の板には「羅須地人協会」と書かれていた。賢治はその看板の横手から、コスモスの花をかき分けるようにして、建物の前へと進んで行った。
玄関先には蓆が敷かれ、トマトとキャベツとピーマンが寂しく載っていた。壁に吊るされた黒板には
「丹精シタ作物デス
御持チクダサイ」
と書いてあった。丸みを帯びた、癖のある、懐かしい白墨の文字であった。
「たくさん持っていってもらえて、よかったよかった」
先生は、残された野菜を集めて陸一に見せながら、
「これが私の夕食のおかずです」
と語るのだった。
それを台所に持っていくと、賢治は、今度はリヤカーに積まれた作物を蓆の上にきれいに並べ始めた。
「せ・先生、これでは、売れっこありませんよ。利口な客は、町で先生のリヤカーを覗いた後で、た・ただでここから持っていくに決まっています」
「そうですね、やっぱり売れませんか」
作物を並べ終わると、賢治は陸一を招き入れた。
玄関を入ると、そこは山の分教場ほどの広さがあった。中央の達磨ストーブの周りを丸椅子が取り囲み、壁際にはオルガンや衝立黒板が置かれ、さながら教室のような雰囲気だった。隅には先生愛用のセロも立て掛けてあった。奥のテーブルの上には蓄音機や実験器具や、本や、書類やレコードやらが乱雑に置かれていて、農学校時代の先生の机の上と変わりがなかった。天井からは白いガラスの笠を被った透き通った電球が下がっていた。
「まずはお茶でも出しましょう」

賢治は奥からフラスコに水を汲んでくると、スタンドに乗せて、アルコールランプを点した。
「お湯が沸くまで音楽でも聴きますか」
と、蓄音機のぜんまいを巻き、レコードを回した。針の擦れる音の後で、深く豊かで、しみじみとした優しい音色が響いてきた。懐かしく切ないメロディーと共に、陸一の心に農学校時代の思い出が甦ってきた。教室、実験、イギリス海岸、農場、学友、校舎、並木、青い空・・・やがて音色は余韻を残すと、思い出と共に姿を消して、針の擦れる音だけが、再び耳に触れるのであった。
「せ・先生、これは、ト・トロイメライでしたね」
「そう、コルトーとカザルスの名演です」
「も・もう一度聴かせていただいていいですか」
「ええ、幾度でも。そのうちお湯も沸きましょう」
広いガラス窓から昼下がりの秋の陽射しがきらきらと注ぎ込んでいた。窓の外には白や赤や桃色のコスモスがしなやかに揺れていた。丸椅子に座った賢治の肩も陸一の首も、楽曲に合わせて揺れているのであった。
フラスコの湯が沸くと、賢治は、漏斗で濾した茶を、朱色をした琺瑯のコップに注いで持ってきた。一つを陸一に手渡すと、受け取った把手は温かかった。いただきましょうと二人は啜り出した。干し草のような明るい香りがし、ほのかな酸味が爽やかであった。
「ハーブですよ。下の畑で作っています、野菜も、稲も。段丘を開墾しているのです。農学校をやめてからは、ここでこうして暮らしています。時々若者たちが集まっては、音楽を聴いたり、演奏したり、詩や童話を読み合ったり、農業について語り合ったり、肥料の相談に乗ったりしていますが、たいていは地球の皮むきをしています。ぼくもお百姓の仲間入りです。良知さんは、一段と逞しくなりましたね」
「ぼ・ぼくも去年二十歳になりました。ちょ・徴兵検査も受けました。結果は、乙種合格でしたが」
「ご苦労様でした。ぼくと同じでしたね」
と、賢治は、にこりと笑った。
「さあ、私の前では吃ってください。自分の言葉で話してください」
陸一は賢治の配慮がありがたかった。肩の力が抜けていくようであった。
「せ・先生、羅須ってなんだべす」
エスペラント語を学び、岩手をイーハトヴと呼んでいた宮沢先生のことだから、「ラス」というのもその人工言語の一つだろうとも思った。とはいえ詩集を通して先生の心の修羅を感じ取っていた陸一は、羅須とは修羅の逆転を願って名付けたものかも知れないと思ったのだった。
当の賢治は困ったような顔をして、それから、
「君の名字の良知と同じ意味ですよ」

と、答えたのだった。
陸一は、先生の短い童話を読んだ後のような、はぐらかされたような、それでいて広い世界に導き入れられたような不思議な幸福感を味わった。癒されるのだった。陸一は悩みを語ろうと思った。
「先生、おら、村の連れらと、小学校に二宮金次郎の銅像さ建てようと運動を起こしたども、思うように進まねえっす」
賢治は、何度も頷いた。
「素晴らしいことじゃないですか。村の学校に銅像を建てる、村の若者の力で銅像を建てる、実に感動的なことじゃないですか。村には彫刻が、芸術が必要だ、ぼくもまさにそう考えて、岩手国民高等学校の生徒のために農民芸術概論を書きました。読んでみますか」
原稿を手渡された陸一は、心を弾ませて読み始めた。
「近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直観の一致に於て論じたい
世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない
自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する
この方向は古い聖者の踏みまた教へた道ではないか
新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある
正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである
われらは世界のまことの幸福を索ねよう　求道すでに道である」
これは、報徳の教えと同じだと陸一は思った。求道すでに道であるという言葉に、陸一は、二宮金次郎の姿を思い浮かべるのだった。
「農民芸術とは宇宙感情の　地　人　個性と通ずる具体的なる表現である」
陸一はこの一文で、羅須と言う意味が理解できたような気がした。羅須地人協会の羅須とは、地・人・個性と続く連なりのなかで宇宙感情のことなのだろう。要するに天なのであった。ならば確かに修羅の対極に位置しよう。自分の予感は外れてはいなかったと思った。
「それは人々の精神を交通せしめ　その感情を社会化し遂に一切を究竟地にまで導かんとする
かくてわれらの芸術は新興文化の基礎である」
そうだ、文明開化ばかりが文化じゃない、農民の心田開発こそおれたちの文化なのだと、陸一は思った。
「光象生活準志によりて　建築及衣服をなす」
陸一は、ここを読みながら報徳訓の「身命の長養は衣食住の三にあり」のくだりと引き比べてた。
「光象生産準志に合し　園芸営林土地設計を産む
香味光触生活準志に表現あれば　料理と生産とを生

ず　行動準志と結合すれば　労働競技体操となる」
（同じだ。ならば報徳の生き方こそが芸術的なのだ）
と、うなずく陸一であった。
しかし、
「リアリズムとロマンティシズムは個性に関して併存する」
という辺りから、陸一は解らなくなってきた。自分たち百姓にリアリズムとかロマンティズムとかいう語彙はなかった。しかし、その語彙がなければ農民の芸術は語れないものなのか。
そしてさらに「農民芸術の製作……いかに着手しいかに進んで行ったらいいか……」の章を至誠の心の表現として読み解こうとしていた陸一の感性は、
「無意識即から溢れるものでなければ　多く無力か詐偽である」
の一文に深く頷いたものの、それに続く、
「髪を長くしコーヒーを呑み空虚に待てる顔つきを見よ」
という一文から彼自身が描いた想像を、真っ向から拒絶したのであった。陸一の心に浮かんだのは、あの夜の労農党の青年の姿だったのだ。論争し、苦い思い出とともに決裂してきた青年の姿が、賢治の農民芸術論に登場してきたのだった。しかも農民芸術概論は彼らを見習えと言っているように陸一には思えた。
村には貧乏や無精のために髪を伸ばしている者はいても、普段コーヒーを飲める家は地主の中にもなかった。
陸一も、連れ立って花巻の町に遊びに来たときに新開地のカフェーでコーヒーを注文してみたことはあったが、旨いとは思わなかった。自分は町場の嗜好には向かないものだと決めつけていた。しかし賢治の農民芸術論には町場の人間が見本として登場しているのだった。
陸一は改めて部屋の中を見回してみた。
レコード、オルガン、チェロ、電燈。それらは町場の、舶来の製品であった。先生の使っていたリヤカーは、田舎では、地主の奥様が家庭菜園で使っているものしか見たことはなかった。賢治が作っている作物も、町で好まれる西洋野菜ばかりだった。ここは明らかに村ではない。郊外なのだ。先生が北上川の河原を開墾した下の畑も、荒れ地ではなく田園風景の一部であったのだ。
そして陸一に、自分の言葉で話してくださいと言いながら、自らは、方言では語らない賢治なのであった。
陸一は身近に感じた先生がいっぺんに遠くへ行ってしまうのを感じた。歩む道が違うのだと陸一は悟った。賢治とは着手し進んで行く道が違うのだ、おれたちの現実はもっと土臭いものだと。試験管の輝きやハーブの香ではなく、泥田のさざ波の光や草いきれの臭いなのだと。

（米で年貢を納めるかぎり、米を作らにゃなんめえべ）

小作の古老の呟きが陸一の胸に蘇ってきた。農民は食っていかなくてはならなかった。しかも百姓という生き物は、度重なる飢饉の中で、食い物を作っていながら食っていけない切なさを、身に染み込ませて生きてきたのだ。丹精した作物は年貢にとられてしまうのだった。だから、その生き方は、食う足しにならないものを作るという点で芸術家に似ていた。とはいえ、百姓は労働のために肉体を酷使するのだ。辛い暮らしの泥沼から抜け出したいのだ。だからおれたち百姓は、大地の上で自立しようと願うのだ。

一方賢治は食っていくことに関心はないように見えた。もとより作品を売って食っていく気はないようだし、農作物すら売れなくてもかまわないと言うのだった。

陸一には、賢治の居場所が、郊外の田園を見下ろす羅須地人協会が、どっちつかずの中間に位置するように思えてきた。町の裕福な商家の子息である賢治が田舎と向き合おうとする奮闘に敬意を感じはするものの、そこに形作られている文化は如何にも中間的で百姓の陸一には違和感を感じるのだった。陸一は、羅須地人協会のその場所が急に居心地の悪い場所のように感じ始めたのだった。

しかも陸一には、賢治は自立なくして支援するもののように思えるのだった。地に足がつかないまま中間文化を宣伝しているような賢治の活動に対して、何とも言えない危うさを感じ取る陸一であった。

「参考になりますか」

「んだす、いっぺえ」

しかし、とっさには、そんな答え方しかできなかった陸一であった。

「ところで良知さん、目の横の痣はどうしたんですか」

「労農党の手下に殴られたす。大したことねす」

「そうですか。それはお気の毒様。いよいよ村にも入って来ましたか。ぼくもこんな物語を書いたばかりです」

と、賢治は、乱雑な机の上から薄い冊子を引きずり出すと、頁を開いて陸一に手渡した。それは「月曜」という童話雑誌の創刊号の中の「オッペルと象」という物語だった。しかし読み進めて行くうちに、ただの童話ではないと陸一は思った。オッペルの酷使に堪えられなくなった象が仲間の暴動によって解放されるというその物語が、労農争議の風刺であることは明らかだった。

科学者として、資本主義と階級闘争、そしてその先の革命の因果関係を無視することのできない賢治なのだろうと思った。物語を描きながら、賢治が宗教に救いを求め、もがいているようにも思われた。その心を陸一は美しいと感じた。しかし美しいだけでは生きては行けない。そのことを賢治は百も承知のはずだと、陸一は思った。承知の上で先生は、魂の揺らぎを告白しているのだと思った。

とはいえ、もしこの「オッペルと象」が労働農民運動の動向を嗅ぎ回っている警察の目にでも触れたら。陸一はむしろ賢治に警告を与える立場であった。

「せ・先生、こ・これは、むやみに人に読ませるべきではありません」

「ハハハ、ご心配には及びません。もうこれ以上世に出す当てのないものですから」

賢治は、さびしく笑ってそう言った。

柱時計が四時を打った。礼を述べて、陸一は羅須地人協会の賢治と別れた。村に帰る道すがら、羅須地人協会でのひとときが彼の頭の中を駆け巡った。

賢治は自らの手で生きようとしていないように思えた。しかし書き残そうとしていた。生き残るための文学ではなく、生き辛い自らの生き方を残すための文学であろう、陸一にはそう思えた。

陸一は先生に自分の悩みを十分に打ち明けられなかったことを悔やみはしなかった。それを、もう吃りのせいにはしなかったし、自分を口下手だとも思わなくなっていた。むしろ先生に読まされた作品を通して、生き辛い先生の悩みを受け止めていた陸一なのであった。

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という農民芸術概論の言葉は、賢治の魂の叫びだろうと陸一は思った。しかし賢治の魂は救われていないように思われた。科学者の賢治は、科学に救いを求めていたのだろう。そして科学の帰結として、階級闘争と革命という物語を描く賢治がいるのだと陸一は思った。しかしその物語は魂を救うものではなかった。その物語が現実の世間や自分に及ぼす影響というものは決して救済ではないことを、作者の賢治は十分理解していた。オッペルと象のお話を、羊飼いの語る物語として屋上屋を重ねるようにして寓話性を強調している賢治なのであった。

その童話の中で、信仰するサンタマリアに労働の喜びを感謝していた象は、やがて搾取に堪えられなくなった。するとサンタマリアは仲間に手紙を書くように勧めるのだった。そして象は、赤い童子に手紙を託した。

「ぼくは、ずいぶんな目にあっている。みんなで出てきて助けてくれ」

象の仲間たちの選んだ道は暴力だった。しかも必然のようにして流れていくその結末によっても、象の魂は救済されてはいないのだ。オッペルの搾取から解放された象は、さびしく笑うのだった。

どうして象の魂は救済されなかったのだろうか。信仰する宗教の所為か。突然現れた赤い童子の所為か。仲間の選んだ手段の所為か。それとも象の書いた手紙の所為

なのか。何の所為かは作者の賢治自身にもわからないのだろう。陸一は賢治の悩みの深さを知るのであった。

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」

この命題は、どのようにして世界全体を幸福にするかにかかっている問題だと陸一は思った。

（まず、おれは、故郷の村からだ）と、

陸一は思った。自分の幸福は村全体の幸福によって実現し、世界に幸福な村が増えれば世界ぜんたいが幸福になるだろうと考えた。村とは一人一人の才能が発揮され魂が満たされる居場所なのであった。

それから、陸一は、賢治の才が魂の救済に結びつかないのは賢治が村人になりきっていないからだと考えた。陸一の目からは、羅須地人協会がそうであるように、賢治も郊外に留まっているように思えた。宮沢賢治とは、田園の人なのであった。

考えながら歩いていた陸一はやがて故郷の村に入った。黄金色に実った稲田の周囲に、まだ茫々とした荒地が残っていた。

その年、一九二六年一二月二五日、長く患っていた大正天皇が崩御した。摂政を勤めていた皇太子殿下が昭和天皇になった。

祝出版

道徳イノベーション
二宮金次郎の教え

三戸岡道夫・鯨游海共著

栄光出版社　1,500円

人生に勝つ71の提言
21世紀を生き抜くための道徳

青の漂流（二）

宅見勝弘

【前号のあらすじ】

一八六八年（慶應四年）七月（明治改元の二ヶ月前）、蝦夷地（北海道）アイヌ三大集落の一つ白老、サクサイヌが傷付いた和人を見つけた。和人は「箱館・五稜郭」から来た様子であった。サクサイヌは仙台藩元陣屋に運んでいくが、和人が居ないため、自分の家に連れて帰った。

第一章　五稜郭の残兵（続き）

サクサイヌが和人を背負って家に戻ると、妻のノンノが出迎えた。ノンノは幼い娘を抱いていた。

「その和人はどうしたの」

ノンノがサクサイヌに尋ねた。

「和人の里の近くで倒れていたので、助けたのだ」

サクサイヌは和人を介抱しながら答えた。

ノンノとサクサイヌは二年前に結婚していた。

アイヌでは年齢を数えることは無かったが、十代後半で結婚することが多かった。もし年齢を数えていたら、サクサイヌが二十二歳で、ノンノは十九歳であった。

ノンノはサクサイヌと又従兄妹であったが、幼い頃からの許嫁でもあった。

アイヌでは許婚を幼い頃から決めるが、実際に結婚する際には、女性の意思を尊重した。

先ず女性が作ったご飯をお椀に盛り、男性がご飯の半分食べ、残した半分を女性が食べると婚約が成立した。

求婚されても、女性が残りの半分食べなかったら、相手からの求婚を拒否することができた。

また、男女間で同様の求婚の儀式が整えば、他の部族でも他民族でも結婚ができた。

サクサイヌとノンノの共通の曽祖父であるロシア人のシウニンシク（ニコライ）とアイヌ人とが結婚したのもアイヌの習俗に従ったものであった。

「マツマエ（松前藩）であれば助けないが、センダイ

（仙台藩）なら助けてあげてよいだろう」

松前藩がアイヌ達を奴隷として苦役を強いていた。また、本土からの商人がアイヌを虐殺しているのを傍観していたので、快く思っていなかった。

仙台藩が統治する様になって、奴隷的な扱いは無くなり、友好的な関係になってきた。

「和人が災いをもたらさなければ良いけど」

ノンノは不安を口にしたが、夫の性格を知っていたので、咎めることはしなかった。

翌日、サクサイヌは一人で仙台藩元陣屋に再び訪れようとした。しかし、途中で異変に気付き、様子を伺った。

元陣屋に、和人の集団が攻め込んでいたのであった。前日は元陣屋に和人の姿が見えなかったが、僅か数人が残っていたようであった。

（また、和人同士で殺し合いをしている）

元陣屋の中では、一部で争いが起きている様子であった。元陣屋の和人が斬り付けられて運び出される様子も見えた。

（これでは、あの傷ついた和人を渡すことはできない）

サクサイヌは、傷付いた和人を暫く自分の家で匿うことにした。

サクサイヌが家に戻ると、和人が意識を戻していた。和人は礼を言うと、自らの境遇を説明した。和人は蝦夷地に暫く居て、アイヌの言葉を少し理解できたのである。

和人は、三好慎吾と名乗った。三好は、仙台藩の藩士であった。

蝦夷地を警備するために、彼は三年前に、この白老の元陣屋に派遣された。

白老から、蝦夷地の東にある択捉島振別の出張陣屋に派遣され、警備をしていた。当時、択捉島は仙台藩の領地とされていた。

彼が択捉島の警備を終えて、白老を経て、箱館の仙台藩の詰所に戻った。蝦夷地警備の経験から五稜郭の箱館奉行所に派遣されることになった。

五稜郭は五角形の城郭を持つことから名付けられた西洋式の城である。

一八五四年（安政元年）に箱館が開港したことから、外国からの防衛のために、江戸幕府が築造したものである。一八五七年（安政四年）に建設を開始し、一八六六年（慶應二年）に完成した。

蝦夷地幕府直轄の統治機関として、箱館奉行所が箱館開港時に設置されていたが、一八六四年（元治元年）に、五稜郭内に移転された。

一九六八年一月（慶應四年一月）、京都で江戸幕府軍と明治政府軍との戊辰戦争（鳥羽・伏見の戦い）が勃発し、その伝令が、箱館奉行所にも届いた。

箱館を支配する松前藩が明治政府軍側に付いたことも

あり、一八六八年（慶應四年）四月、五稜郭の箱館奉行所が明治政府軍の手に落ち、箱館裁判所（翌月箱館府と改称）となった。

一方で仙台藩が江戸幕府軍に付いたため、仙台藩士の三好は賊軍として命を狙われることになった。

三好は松前藩ら明治政府軍に襲われて、重傷を負った。

元陣屋の在る白老まで逃げてきたが、途中で力尽きたということであった。

サクサイヌには三好の言葉が分かったが、三好の言う明治政府軍と江戸幕府軍の違いは理解することができなかった。

平和を愛するアイヌ民族にとって、和人同士の殺し合いは全くの理解不能であった。

その後の仙台藩白老元陣屋が撤収しており、明治政府軍と見られる軍が奪い取ったことを、サクサイヌが身振りを含めて説明した。

「もし、私が、この地に居ると、敵が私を捕らえようとして、貴方達にご迷惑を掛けるかもしれない。直ちにこの場を退きたい」

三好は直ぐに立ち上がろうとして、苦痛に顔を顰めた。

三好の左足は、大腿部の腱を切断しており、歩ける状況でなかった。

「その傷では動くこともできまい。今、出て行っても捕虜にされるか、殺されるだけだ。和人の戦いが落ち着くまで、暫くはこの地で過ごすと良い」

サクサイヌは自分の家の近くに小屋を建て、三好に住ませた。

サクサイヌが三好を助けた時、つまり仙台藩白老元陣屋が明治政府軍に襲われた時から、約半年が経過した。

江戸城を脱出した榎本武揚らが率いる江戸幕府軍が、一八六九年一月（明治元年十二月）に、五稜郭において蝦夷共和国を樹立したのである。

五稜郭は、明治政府軍の手に一度は渡ったが、江戸幕府軍によって奪回されていたのであった。

「五稜郭が幕府の元に戻ったのであれば、仙台藩士として幕府のために戦いたい」

五稜郭が江戸幕府軍の支配下になったことが、白老の町にも伝わってきた。

未だ完全に傷の癒えていない三好が五稜郭に戻ろうとするので、サクサイヌは留めたのであった。

蝦夷共和国樹立してから、さらに約半年が経過した。三好は約一年を白老で過ごしていた。

一八六九年（明治二年）五月、五稜郭の江戸幕府軍は明治政府軍に降伏し、蝦夷共和国は消滅した。

五稜郭の戦いが終わった数日後、白老に一人の和人が現れた。鳥羽・伏見の戦いから五稜郭の戦いに至る戊辰

戦争が終わったことを、三好は未だ知らなかった。
サクサイヌが猟から戻った時に、家の前で、三好がもう一人の和人と言い争いをしていた。
新しく来た和人の身形は三好が白老に現れた時と同様に、戦闘の後の襤褸の服装であった。
（ミヨシと同じ様に五稜郭から来たのだろうか）
サクサイヌは新しく来た和人を見て思った。
二人の和人は暫く対峙していたが、三好は自らの日本刀に手をかけていた。
二人の間の緊迫した様子を見て、二人の間に争いが始まったら阻止しようとして、木陰から弓矢を用意していた。
サクサイヌの心配していたのは、三好がサクサイヌ達を守ろうとして、相手の和人に抵抗することであった。
突然、三好の方から、現れた和人に斬りかかろうとした。相手の和人は刀を抜こうとせず、何か語りかけながら、三好の真剣を避けていた。
片足の自由が利かない三好の真剣は、相手から容易に避けられていた。
相手が刀を抜こうとしないので、三好が追い詰めて、刀を振り下ろそうとした。すると、相手の和人が鞘から抜く動作と一連で三好の右脇腹から左肩へ掛けて斬り上げた。三好の心臓を刃先が抉っていた。
ほぼ同時にサクサイヌは弓に矢を番え、新しく現れた和人に向って矢を放った。
矢にはエゾトリカブト（蝦夷鳥兜）の毒を塗っていた。
矢毒はあくまでも熊を倒す時のためであり、アイヌ同士の争いでも、和人との争いでもエゾトリカブトを使うことをしない。咄嗟の行為で毒矢を使ったのであった。
毒矢は、三好を斬り殺した和人の左肩に刺さった。
和人は毒矢を抜くと、傷口を刀で抉り取った。しかし、エゾトリカブトの毒が回ったため、和人は三好の上に倒れこんだ。
エゾトリカブトは植物の中で最も危険な毒素であり、脳神経を麻痺させ、呼吸停止・心停止をもたらす。
和人は、奪った三好の刀を杖の様にして、サクサイヌの家へ向かって歩き出した。
家の中にはノンノと娘が居るので、サクサイヌは慌てて追いかけた。
和人は幼児を見つけると、暫く呆然としていた。しかし、幼児の碧い眼を見た瞬間、狂ったように襲いかかろうとした。
ノンノが娘を庇おうとして和人の前に飛び出した。和人は、三好を斬った方法と同じ様に、抜くと同時に斬り上げた。
ノンノは一瞬叫び声を上げたが、直ぐに息絶えた。
サクサイヌは妻が斬殺されるのを見て、ムカラ（斧）を手にして、和人に襲い掛かった。

和人は、まるで鞘に入っているかのように抜き身の刀を左腰に構えなおすと、サクサイヌに対しても斬り上げようとした。
しかし、サクサイヌが突進してきたため、深く斬り込み過ぎた。サクサイヌの腰の右半分を斬ったが、背骨で止まり、抜けなくなった。
サクサイヌは和人に組み付いたが、傷が深く、力を失い座り込んだ。
和人は斧を拾い上げると、サクサイヌの首筋に振り下ろした。
幼児は碧い眼で、両親の斬殺される光景の一部始終を見詰めていた。恐怖で泣くこともできない様子であった。
和人は斧をサクサイヌの首筋から引き抜くと、幼児に向って振り下ろそうとした。
その時、サクサイヌの傷口から血が噴出し、幼児の碧眼に降りかかった。
幼児の碧い眼が赤い血に覆われて見えなくなると、和人は我に返った様に、振りかぶった斧を放り投げた。
その時、和人の胸元から五つの花弁が舞い落ちてきた。花弁は、押し花として乾燥して色褪せていたが、かつては鮮明な紅色を思わせた。
五つの内の一つの花弁が吸い込まれるように幼児の掌に舞い落ちていった。

二　仙台藩白老元陣屋

一八六九年（明治二年）五月、白老のコタンで三好とサクサイヌ達が虐殺された日の翌日である。
白老元陣屋に、支倉兵衛が択捉島振別から戻ってきたのである。
支倉兵衛も三好と同じく択捉島の出張陣屋を警護する仙台藩士であった。
二年前に、支倉は元陣屋の白老に赴任し、白老から他の二十名と共に、出張陣屋である択捉島の地で警護をすることになった。
択捉島は、本州・北海道・九州・四国に次ぐ日本で五番目の大きさの島である（沖縄本島の二・七倍）
二十名程で島全体を警護するには、殆んど不可能であった。支倉達は現地のアイヌ人と宥和策を取り、ロシア船の来航を監視していた。
戊辰戦争（鳥羽・伏見の戦い）が始まり、白老の元陣屋が、賊軍として明治政府軍から攻撃されるという伝令が伝えられて、撤収した。
その時、択捉島の出張陣屋に居た支倉達は、白老や仙台、江戸での変化を正確に把握できない状態であった。
白老撤収から遅れて伝令が来たが、支倉は他の仙台藩士を先に帰し、他の二名と供に残っていた。
数ヶ月して、出張陣屋の国後・根室・厚岸・広尾を経

て、元陣屋のある白老へ向った。既に他の出張陣屋においても仙台藩は撤収していた。
白老元陣屋に戻ると、明治政府軍により管理されていた。
支倉が白老に着いたのが、五稜郭の戦いが終了した直後であった。支倉自身が明治政府軍に監視されていたが、拘束されることは無かった。
「仙台藩にとって、蝦夷地は何だったのであろうか」
支倉は元陣屋からアイヌの集落を眺めながら、自問した。
蝦夷地における江戸幕府の支配体制は何度も転換している。
江戸幕府成立以来、蝦夷地は蠣崎(かきざき)氏（後の松前氏）に支配させていた。
一七九二年（寛政四年）に大黒屋光太夫を伴い、ロシア船が来航したことが契機となり、江戸幕府は北方警備に努めることになった。
一七九九年（寛政一一年）松前藩から東蝦夷地一帯を取り上げ、幕府の直轄とした。
さらに、一八〇七年（文化四年）西蝦夷地も松前藩から取り上げ、蝦夷地全体を幕府の直轄地となった。
しかし、一八二一年（文政四年）に、幕政の方針が変わり、幕府から松前藩に返還している。
一八五五年二月（安政元年一二月）日露和親条約が結ばれ、箱館が開港したことから、蝦夷地の警備の強化が必要になった。
そこで、幕府は蝦夷地を再び直轄とした。なお、この条約でロシアとの間で択捉島・国後島は日本領とすることに決められている。
一八五六年（安政三年）幕府は仙台藩はじめ奥羽列藩に幕府領である蝦夷地の警備を命じた。
仙台藩は白老に元陣屋を建設し、択捉島に至るまでの東蝦夷地を警備した。（現在の北海道の南三分の一に相当する）
そして、一八五九年（安政六年）になり、警備した東蝦夷地の約半分が幕府領から仙台藩領地に変更された。択捉島と国後島は幕府領ではなく、仙台藩固有の領地とされた。
この時の三ヶ月後の一八六九年（明治二年）八月に、蝦夷地を北海道と改称すると同時に、択捉島は四地域に分けて、仙台藩・彦根藩・高知藩・佐賀藩が分割統治することになる。なお、国後島は、秋田の久保田藩が統治することになる。
仙台藩の命令で人生が翻弄されていることに、支倉は自分の先祖に重ねて合わせていた。
支倉兵衛の先祖は、二百五十年前の慶長年間（一六一三年）に仙台藩主の伊達政宗から遣欧使節としてヨーロッパに派遣された支倉常長(はせくらつねなが)であった。

支倉常長の血に繋がっていることが、これからも時代に翻弄される運命になるのでないか、と支倉兵衛は思った。
支倉は元陣屋からアイヌの集落を眺めていた。集落から不自然な煙が立ち昇っているのが見えた。
煙に惹かれるようにして、支倉は集落に向かって行った。
アイヌの家の前で和人が倒れているのを、三好は見つけた。
支倉は、倒れていた和人を助け起したが、既に和人は息絶えていた。支倉は、その死体に見覚えがあった。
「この男は択捉の陣屋に居た」
択捉島振別の警備を支倉達に引き継いだ仙台藩士の一人であることに気付いたのであった。三好の名前も続いて思い出した。
三好の尋常でない刀傷が、支倉の目を引いた。
普通であれば、死体の切傷は死体の左肩から右脇腹に斬り下ろされていることが多い。
しかし、この死体の傷は、右脇腹から左肩にかけて斬り上げる様に逆方向に裂かれているのであった。
三好の体を横たえると、支倉はアイヌの家に入って行った。煙は囲炉裏から立ち上っていた。
家の中に、夫婦と見られるアイヌ人の二人の遺体を見つけた。
二遺体とも三好と同じく右腰から斬り上げた傷を負っていた。
支倉は二人の遺体を検分した後、サクサイヌの腰から突き出ていた日本刀を見つめた。
暫く思案した後で、既に死後硬直していた死体から力任せに刀を引き抜き、血を拭った。
「この刀は柾目(まさめ)肌だ」
日本刀には樹木の木肌と同じ様な「鍛え肌」と呼ばれる文様が有る。柾目肌とは、樹木を縦に割った時の年輪の様な平行線の文様である。
多くの日本刀は、板目肌・本目肌といった木を横や斜めに切ったときの年輪の様な文様が殆どで、柾目肌は少ない。
「国包(くにかね)に違いない」
国包は仙台藩主伊達家に仕え、伊達政宗の時代から十三代続いている刀匠である。政宗の愛用の日本刀は山城大掾藤原国包(やましろだいじょうふじわらのくにかね)であった。
平行線のみが幾重にも現れる独特の柾目肌は、刃を鍛える際に一方向でのみで折り返す国包でしか現れない。
この斬殺体から国包を見つけたことで、支倉は戸惑いを感じた。
「この国包を所有していたのは、仙台藩士の中でも伊達家に近い武士なのか」
振別の出張陣屋に居た者が国包を持つ身分でないと

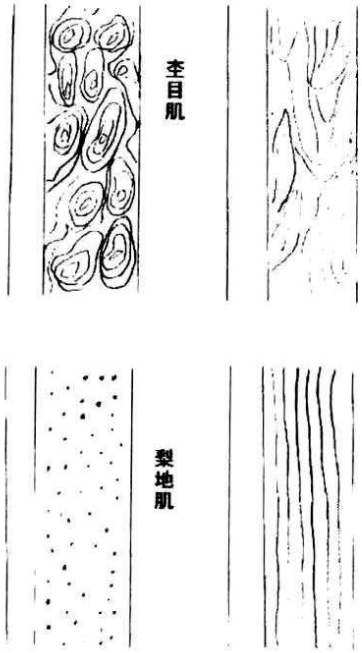
支倉は思った。
国包を愛用していた者には、北辰一刀流の千葉周作も居たが、多くは伊達家の武士であった。
支倉は、紅く血に覆われた幼児に気が付いた。支倉は国包を置くと幼児に駆け寄った。
幼児は固くなって、震えていた。支倉が幼児の顔を優しく拭うと、碧眼が現れた。
支倉は、幼児が右手を強く握っているのに気付いた。支倉が優しく手を拡げてみると、幼児の掌と同じ大きさの花弁が現れた。
「この花弁は、この惨劇を犯した者が残したのであろう」
花弁は、蝦夷地では見たことが無い花であった。支倉は自分の懐にあった和紙に大事に包んだ。
「この子をアイヌに返そう」
支倉は、幼児を抱えると、山の上の集落へ向って行った。
突然、集落からアイヌ達の放った矢が飛んできた。異変を知ったアイヌが支倉を侵略者と勘違いして襲ってきたのだった。
アイヌから放たれた矢を見て、支倉はひるんだ。矢にトリカブトの毒が塗られているのに気付いたのだった。矢に掠っただけでも命取りであることは、択捉での経験で知っていた。
支倉は知っているアイヌの言葉を叫んだが、矢が止むことが無かった。
幼児が心配でもあったので、支倉はこの場を立ち去ることに決めた。
支倉は幼児に覆い被さる様にして、元陣屋へ向けて駆け下りていった。
支倉は元陣屋に戻ると、この惨劇について、推理を働かせた。
悲惨な事件を起した人物に繋がる手懸りは多く残されていた。支倉は手懸りを覚書として残した。
『一、赤い花弁』
『二、名刀「国包」』
『三、遺体の刀傷』
『四、五稜郭の武士』
『五、碧い眼』
幼児の掌に握られていた花弁は、蝦夷地では全く見ることの無い品種であった。また、支倉が仙台でも見たことも無かった。
国包に関しては、三好が元々持つ身分ではないので、三好が譲られたのでなければ、殺害した者の刀であった。
右腰から左肩に掛けた刀傷は、独特の剣法を示していた。
事件が五稜郭の戦いの直後であり、五稜郭の敗残兵の

可能性が高かった。
支倉は、五番目に幼児の眼のことを書き残した。この碧い眼が災厄をもたらしたのでないか、という妙な感覚があったのである。

（続く）

前号に誤りがありましたので、お詫びして訂正致します。

86頁上2行目	寛永→寛政
88頁上4行目	一八六九年→一八六八年
89頁上16行目	いった→いく
89頁上19行目	していた→する
89頁上20行目	したところであった→する





<参考年表>

1792年（寛政4年）	ラクスマン・大黒屋光太夫根室来航
1854年（安政元年）	日露和親条約　箱館開港
1858年（安政3年）	仙台藩白老元陣屋建設
1867年11月（慶應3年12月）	大政奉還
1868年1月（慶應3年12月）	王政復古の大号令
1868年1月（慶應4年1月）	鳥羽・伏見の戦い
1868年7月（慶應4年7月）	仙台藩白老元陣屋撤収
1868年9月（明治元年9月）	明治改元
1869年1月（明治元年12月）	蝦夷共和国成立
1869年5月（明治2年5月）	五稜郭の戦い（箱館戦争）終戦
1869年8月（明治2年8月）	蝦夷地を北海道と改称

<参考文献>
『エトロフ島－つくられた国境』
『仙台藩白老元陣屋資料館』ホームページ

文化勲章に輝く

赤堀四郎博士の一生（八）

松下魏三

十一、結婚そして理学博士

四郎は東北帝大の大学院で醤油の香気成分であるメチオナールを発見し、その正体をつきとめ、学会でその名が知られるようになり、化学者としての自信をもつようになった。

その後大学院五年間の研究業績は指導教授である眞島利行博士に認められ、昭和五年（一九三〇年）に東北帝大理学部化学科の講師に任命され、酵素化学関係の講義を始めた。

いよいよ少壮の化学者として、国から給料をもらって、研究生活ができる帝国大学の教官となった。

この頃、一人前の研究者となった四郎に早速眞島先生から縁談が持ち込まれた。花嫁の候補は眞島先生の姪で、当時東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）の習字の教官をされていた岡田起作先生の九女で和子さんというお嬢さんであった。

結婚式は昭和五年（一九三〇年）の十一月東京で挙げた。媒酌人は四郎が錦城中学時代に化学を教えていただいた富永齊（ひとし）先生ご夫妻であった。

富永先生は錦城中学の教師、旧制第一高等学校や東北帝国大学の教授をされて、仙台市では住居も近く、四郎は富永先生のお宅にお邪魔して雑談をしたり、時にはドイツ語の指導をしていただいたことがあった。

また岳父である岡田起作氏は東京女子高等師範学校の書道の教官で漢学者でもあり、また数学にも優れた才能をもっており、さらにまたクラッシック音楽の愛好家でもあった。

岡田起作氏は四郎の父に似て新しいものが好きで明治三十年代の後半に自宅にピアノを買い入れ、娘たちにはピアノを習わせていた。

当時自宅にピアノがあるのは裕福な家庭で、ドイツ製のスタインベルクやベヒンシュタインという銘柄品が多かった。ところが岡田家のピアノは日本のヤマハ会社が最初に製造した頃の製品で、和子夫人は末子の余得で、このピアノを持って四郎のもとに嫁いだので姉たちから大変うらやましがられた。このピアノはその後赤堀家で長い間愛用されてきたが、戦後になって新しいピアノに買い替えたといわれている。

赤堀家で愛用してきたピアノは浜松市の日本楽器が製造したもので製品番号が五号となっていた。明治三十年（一八九七年）にヤマハ会社がピアノの第一号を売り出したので、岡田家から赤堀家に伝わったピアノは第五号で名誉ある製品であった。

この時代にピアノを購入した岡田起作先生の音楽に対する情熱は相当なものであった。したがって和子夫人も女学校を卒業してから東京音楽学校（現東京芸術大学）の選科に学んだピアニストであった。

結婚式が無事に終り、翌年の昭和六年（一九三一年）には大学院での「醤油の香気成分の研究」の次に「アミノ酸と糖の反応に関する研究」や「水素移動・脱水素法の研究」など学会では最先端をゆくこれら一連の「イミダゾール誘導体に関する研究」により理学博士の学位を授与された。

これらの研究は当時の学会では独創的で珠玉のように美しい」と賞賛され、同門の後輩である久保田尚志博士は、これらの研究を「天馬空を行く感じであった」と激賞している。

またこの頃には長男の弘道が生れて二重の喜びとなった。以後四郎を赤堀博士と呼ぶことにする。

（つづく）

（註）イミダゾール
分子式$C_3H_4N_2$　環中に窒素原子二個を含む五員環複素環式化合物・芳香族化合物に似た性質をもつ。無色の結晶・弱塩基性・誘導体にヒスチジン・ヒスタミン・ピロカルビン（アルカロイドの一）など。1・3-ジアゾール。（広辞苑による）

（司馬雑感　十三）

司馬遼太郎の東北物語（一）

山田嘉久

1「奥州白河、会津のみち」を歩く

人一倍、奥州に対する思い入れの濃い司馬遼太郎は後半生のライフワークというべき「街道をゆく」シリーズでも昭和四七年の「陸奥のみち」を皮切りに「羽州街道」（昭和五八年）、「仙台、石巻」（同六〇年）、「秋田県散歩」（同六二年）と続くのだが、奥州の入り口白河を旅したのは平成元年だった。

「平安朝の貴族、文人が、奥州―みちのく、陸奥、おくーに対していかにあこがれたかを理解せねば、かれらの詩的気分が十分にわかったとはいえない。」

とこの本「奥州白河、会津のみち」で書き出した司馬は、まず二つの白河の関跡に立ち、遠い古代に想いを馳せている。

また能因法師（九八八―一〇五〇?）の有名なエピソード（能因は実際には白河には旅せずに「都をば霞とともにたちしかど秋風ぞ吹く白河の関」と詠んだという故事）なども能因の時代の人々がいかに陸奥に憧れたかの表れだと司馬は云う。

司馬自身も中学の「数学の時間に勃然と白河の関を越えたくなり、一時間の授業のあいだぼんやりしていたことがある」と別の随筆で書いている。（随筆「歴史を動かすもの」）

司馬少年は能因法師が住んでいたと伝えられる大阪高槻の古曽部を訪ねるほど中学生の頃から能因法師と白河の関に魅かれていたという。

（一）白河城

我々も平成一七年紅葉の季節、「奥州白河、会津のみち」を追ったが、司馬のような「詩的気分」を味わうこともなく東北自動車道で一路、白河の街に入った。

「白河という町は、人口四万でしかない。小さいながらも知名度がたかいあたり、伊勢の松阪とか、津軽の弘前などに似ている」と書く司馬だが、我々はまず奥州関門の城「白河城」を訪ねた。

白河城は別名「小峰城」と呼ばれ、遠く南北朝時代の興国元年（一三四〇）頃、結城親朝によって築かれたといわれる。名称はこの地の別名「小峰ヶ岡」に由来する。

そして城郭は寛永九年（一六三二）、江戸時代の初代藩主丹羽長重が平山城として改築したもので、以後七家二一代にわたって奥州の関門としての役割を果たしてきたが、慶応四年（一八六八）戊辰戦争により落城、焼失した。

大手門の入り口に建つ「小峰城記」にはこのようなことが簡単に記されているが、司馬はこの間の事情を詳細に書いている。司馬お得意の戦国時代から幕末にかけての「人間模様」である。

司馬が「白河の祖」と書く丹羽長重の父は織田家の重臣だった丹羽長秀だが、秀吉は長秀はともかくその子長重をあまり重んじなかった。それにもかかわらず関が原の戦いでは長重が三成（豊臣方）に味方したのは「人間模様」の複雑さだろう。

そのため長重は家康の時代、江戸の芝浦で浪人となるが、これを救ったのが藤堂高虎だったと司馬は考えている。長重と高虎は姻戚関係にあり、芝浦で落ちぶれている長重を家康に懇願して常陸で一万石に取り立ててやった。そして家康亡き後、白河行きの幕命を持ってきたのも高虎だった。

かくて白河一〇万石の藩主となった長重は早速、幕府の内意を受けて（伊達政宗に対抗のためか）築城と城下町建設に着手するのである。城普請に三年を要した。

長重の死後、丹羽家は二本松に移るが政宗亡き後白河は要衝ではなくなったので榊原、本多、松平（奥平）、松平（結城）、松平（久松）と凡庸な藩主が続く。

そして江戸末期になって松平定信を迎える。自ら「白河楽翁」と号した定信はその後、幕閣に入り有名な「寛政の改革」を手がけるが成功したとは云いがたい。しかし白河では名君だったことは確かで、醸造、羅紗、漆器、紙などを藩の産物とした。司馬も「大名としては屈指の教養人だっただけでなく、渾身の民政家でもあった」と評価している。

幕末の白河藩主は阿部氏だが、慶応二年に棚倉に転封となってしまったので戊辰戦争が始ったときは大名不在だった。おかけで参戦せずに済んだものの、此処は両軍の激戦地になってしまった。

小ぶりながら堅牢な城内には戊辰戦争時の弾痕が柱や床板に残っており、激戦の跡をなまなましく伝えている。斉藤一が率いる新撰組もこの城で戦ったが、一時は城を落としたものの、再び新政府軍によって奪い取られた。

二の丸、三の丸跡は予想外に広く今は「白河バラ園」

「白河集古苑」となっている。奥州藤原氏の豊かさの象徴である金売り吉次の墓も近くにあった。司馬もこの本では「黄金花咲く」という一章を設けて、金を大量に産出した奥州こそ、日本文化を飛躍的に発展させた原動力になったと力説している。

そして司馬らしく此処に突如として空海が登場する。

「空しくゆき、みちて帰る」とは空海の言葉だそうだが、たしかに彼は手ぶらで唐に行き、溢れるほどの文化を持ち帰ったが「無料で」渡唐したわけではない。

「かれは、袋にずっしりと砂金を詰めて唐へわたったのである。（中略）くりかえすようだが、日本文化の最初の栄光である奈良、平安初期の文化が、奥州の金でささえられたことをわすれるべきでない」と書いている。

そして名著「空海の風景」を書いているときに「空海が長安でつかったであろうカネを想像すると、空おそろしい思いがする」とも述べている。

なお金売り吉次は司馬の初期の小説「義経」にも登場する。奥州と京都を往復していた吉次は、義経を奥州に連れて行ったとされている。

また吉次の墓の近くに小原庄助の墓もあったが、庄助とは果たして実在の人物かどうか、地元ボランティアのガイドの人に聞き漏らした。

（二）慧日寺（恵日寺）

裏磐梯の紅葉を愛でた翌日は会津に入る前に磐梯町にある慧日寺跡をまず訪れた。司馬が「会津に入るひとは、この遺跡に敬意を表すべきだとかねがね思ってきた」と書かれていたからである。

司馬が「旧仏教第一級の人物」と評価する徳一（生没の年不詳）が平安時代初期に開基した寺跡である。最も隆盛を極めた平安時代中頃には、寺院三百、僧兵数千、子院三千八百坊に及び、支配権は会津はもとより新潟県にまで及んだといわれる。

大同元年（八〇六）、磐梯山が大噴火を起して間もない頃に、徳一はそのふもとに草庵をむすんだが、それが慧日寺である。もともと会津の人々が持っていた磐梯山への山岳信仰と徳一の仏教が合体して広まっていった、ある種の神仏習合だろう。

宗教知識に乏しい私など徳一についてもよく知らないので、徳一と最澄の間で行われたという「三一権実論争」もこの本によって始めて知った。最澄の出現によって衝撃を受けた南都の旧仏教は最澄に何度か論争を挑むが、ことごとく最澄に論破されてしまう。そこで会津にいる徳一に白羽の矢が立ち、両者の論争は五年にわたる。

その後、慧日寺は伊達政宗の侵攻など度重なる戦禍に見舞われ、殆ど焼失した。江戸時代は歴代の会津藩主の保護を受けたが、明治の廃仏毀釈により廃寺。

五万坪に及ぶ広大な慧日寺跡は遺稿がよく保存されているため国史跡に指定され現在も調査研究が行われているという。

一〇数年前、此処を訪れた司馬を応対したという住職（現在は真言宗豊山派）が今回もこのようなことを説明してくれた。

（三）飯森山と鶴ヶ城

私が会津を訪れるのは今回で二回目だが、今回始めて国重文「さざえ堂」や「白虎隊資料館」「蒲生氏郷の墓」などを回った。氏郷は秀吉の命により伊勢松坂からこの地に九十二万石で転封され基盤を作ったが、七層の天守閣が聳える近代城郭に作り替え、また城下の名を「若松」とした。

資料館の館長は「司馬さんが来たときには白虎隊の詩吟を聞かせた」と自慢そうに話していた。

別名「鶴ヶ城」として名高いこの城を見学したが、城内に松平容保の京都守護職時代の写真を引き伸ばしたパネルがあった。イケメンである。司馬も「容保の容貌は、華奢で端正である。（中略）眉濃く、目元が涼やかで、二十代後半とは思えないほどに少年のにおいが濃い」と書いている。

近くの阿弥陀寺に新撰組の三番隊組長斉藤一の墓があった。

「剣の精妙さは京都の頃から鬼斉藤といわれ、京都時代はおそらく三十人は斬ったであろう。が、かすり傷一つ負わなかった」（燃えよ剣）

その斉藤は会津戊辰戦争では負傷した土方歳三に替って指揮をとった。そして晩年は会津人として一生を終えた。

司馬は「白河、会津のみち」のはるか昔、昭和四十年、中篇小説「王城の護衛者」を書く際にこの地を歩いている。

さらに昭和四五年「歴史を紀行する」（「街道をゆく」シリーズの先駆的作品）でも（会津人の維新の傷あと）と題して会津を取り上げている。それほど会津に対する思いは濃い。

いずれの作品でも司馬は明治政府の会津藩への仕打ちに深い同情を寄せたものになっている。

「歴史のなかで、都市一つがこんな目に遭ったのは、会津若松市しかない。」

「権力の座についた一集団が、敗者にまわった他の集団をこのようにいじめ、しかも勝利者の側から心の痛みもみせなかったというのは、時代の精神の腐った部分であったといっていい」とも激しく書いている。

その会津藩の悲劇を、司馬はまず藩祖保科正之から解き明かす。

「歴史を紀行する」では「一回の浮気が歴史を創った」と会津の歴史を語っているのはいかにもジャーナリス

ト出身の司馬らしい。二代将軍秀忠の正室お江の方は有名なヒステリーで秀忠の浮気を許さなかったが、唯一の例外によって正之が誕生した。

その正之の思想と人柄がのちのちまでも会津藩を性格づけることになる。司馬は正之について「もっとも重視したのは、風儀だった。風儀とは、文化のことである。――その「家訓」十五か条の第六条にも（家中、風儀を励むべし）と定めている」と書いている。

そして何よりも第一条が異様である。

「大君（将軍のこと）ノ儀、一心大切ニ存ズベシ。（中略）モシ二心ヲ懐クアラバ、ワガ子孫ニアラズ。面々、決シテ従フベカラズ」

江戸時代における武士の忠義とはあくまでその直接の主（藩主）をのみ対象としていたが、ところが会津藩にあっては藩主ではなく、その上の将軍に忠誠心を持てというのである。

もしその時の藩主が将軍に対して二心を抱くようなことがあれば「面々、決シテ従ウベカラズ」で藩主を無視してもいいという。他藩に見られない徳川宗家への絶対忠義の特異な国家観となっている。

幕末、藩主松平容保に京都守護職の命が下ったとき家老たちはこぞって反対したが容保は忠実に家訓を守った。「一説では君臣相擁して泣いたともいわれる。会津藩はその運命を当初から予想し、承知の上で凶のくじを引いた」とも書いている。

このような武士としての気迫と純粋佐幕の精神が渾然一体となって会津藩独特の藩風を作り上げていったと司馬は考えている。

有名な孝明天皇から容保に下された震翰（天皇の書簡）に纏わるエピソードについては前回の（司馬雑感十二）「司馬遼太郎と京都」で記したが、「白河、会津のみち」でも最終章は「容保記」としてこのことに触れている。

そして会津落城から会津人の苦難が始る。

明治政府は降伏した会津藩を藩ぐるみ流刑に処するように下北半島に送り斗南藩とした。まさに「挙藩流罪」である。送られた藩士一万七千八百二十七人。（四千三百三十二戸）

この地は三万石といわれたが実収は七千石にも満たない北の荒蕪地だった。藩士たちの生活は赤貧というような生易しいものではなく栄養失調により死亡する人が続出した。

廃藩置県。斗南藩は解体され会津人は弘前県そして青森県に吸収されていった。学制が敷かれた明治六年には青森県の教師の殆どは旧会津藩士だったといわれ、町村の指導者となった会津人も多かったという。

それにしても戊辰戦争に至る日本の歴史は「東西戦争」の連続だったという司馬の見方は興味深い。

まず平安末期に西方の平家が勃興した結果、東方はその隷下に入った。

それを亡ぼした東方の鎌倉幕府が西方を従え、関東の御家人が西方の守護、地頭となり西方に君臨した。

南北朝時代は当初は後醍醐天皇が関東の北条執権を亡ぼしたから「西」が優勢となったが、結局は「東」の足利尊氏が天下を制した。

織田、豊臣は西方政権だったが、豊臣氏を亡ぼした家康の江戸幕府から東方時代に入った。

戊辰戦争は西方（薩摩、長州）が東方を破った戦争だった。

しかし明治政府は東京を首都としたため東京は地方に文明を配分する配電盤の役割を担うことになった。（これは司馬の持論）したがって明治以後は東方の時代だというのである。

（三）大内宿

東山温泉で疲れを癒した我々は三日目、まず市内にある「会津藩主松平家墓所」（通称院内御廟―国史跡）を訪れた。墓所面積五万坪に及ぶ広大なもので、二百数十段の不揃いな石段を登るのは一苦労ではなかった。こんな難所を毎年登らねばならない松平家の子孫は大変だなとクダラヌことを考えながらようやく墓所にたどり着いた。司馬も五〇歩ごとに息を入れたと書いている。「墓所といっても山一つが築域で、それもよほど登らねばならない」

三代正容から九代容保までの墓が手前から碑石、その奥に表石、更に円墳の上に八角形の鎮石と並べられている。（二代正経は中腹に、また初代正之は猪苗代に葬られているとのこと。）壮大な規模である。

いずれも「霊神」（第一世正之が土津霊神、以下徳翁霊神、土常霊神、恭定霊神、貞昭霊神、欽文霊神と続く）と刻まれているところをみると神式なのだろう。

なお会津藩主は伊達の後、前述の蒲生、上杉、再び蒲生、加藤、保科、松平と約五百年も続いているのである。

会津本郷で本郷焼窯元「宗像竈」を見た後、下郷にある大内宿に向かう。

此処は江戸時代の宿場町が当時のまま残っており、「重要伝統的建造物群保存地区」に指定されている。

会津若松と日光を結ぶ会津西街道と呼ばれたこの古街道の両側に大型の草葺屋敷五〇数戸が整然と並んでいる。どの家にも屋号がついており、我々はそのうちの一つ「山本屋」で会津郷土そばの昼食をとった。

江戸時代はこの街道は会津から越後や関東に出るための裏街道として、また参勤交代の道としても使われた。松平氏も初代、二代で計一八回も使ったという。

司馬も「たったいま会津若松城下から、松平候の参勤交代の行列が入って来ても、すこしもおかしくない」と書いている。この時代、殿様が昼食をとった本陣は今はないが、庄屋屋敷が宿場の中央部にあった。

「よくみると、草ぶきの屋根がトタンぶきにかわっている家もたくさんあるのだが、旧観をたんねんに残しつつ修復されている家が多いために、ぜんたいの景観が死ぬことなしに息づいている。」とも司馬も書いている。

司馬によると、明治以降忘れられていたこの宿場町を「発見」したのは民俗学者の宮本常一氏だそうで、氏が文化庁に働きかけて保存地区となった。

ここで司馬は例により「道草」をしている。宮本常一氏のことである。戦前、戦後にかけて日本中の村落を歩き続けた彼が、戦後数年経ってから神奈川県湯河原の近くの村を訪ねたときのことを紹介している。村の五、六人の老人に「東京にいったことがあるか」と聞くとそのうちの一人しか行ったことがなかったそうである。東京からさほど遠くない地で、しかも昭和二〇年代の話である。このことから察すると日本人が今のように日本中を「やたらと動きまわるようになるのは、昭和三十年代ぐらいからではあるまいか」と司馬は推論している。

同じように日本人が自分の住居や村のたたずまいをやたらと改変したがるようになるのもその頃に違いない。

それだから此処大内宿でも明治以降、他に道路ができたため、すたれてしまい山間に孤立してしまったにもかかわらず、住民たちは住居や村をかえようとしなかったことが遠い昔からの日本人の心だったのではないか。

それが今に残る大内宿であるというのである。

いつものように司馬の「道草」論は自分の考え方を導き出す有効な手段として役立っていることをここでも思い知らされる。

「道草」(loiter)が読者の知らないうちにいつのまにか「本道」に戻っているのである。

2「羽州街道」と「仙台、石巻」を歩く

○羽州街道

司馬が初めて山形県を訪ねたのは昭和五十一年、「街道をゆく」(羽州街道)を書くためだった。それも最上川を見たいためであったが、なぜか最上川にはかって来たような錯覚を抱いている。それが

「五月雨を集めて早し最上川」

という芭蕉の句による擬似的錯覚だと気づいて、今更ながら芭蕉の「玄妙な力」を感じたと記している。

「羽州街道」とは山形県を南北に走る官道だが、北から天童二万石、山形五万石、上山三万石、そして米沢十五万石と四つの城下町を串刺しにしている。

同行の須田画伯は「山形県には尿前を越えてゆくのですか」と芭蕉の「奥の細道」の一節をそらんじていて、その記憶力のよさにさすがの司馬も感心する。

私も前日(平成十六年六月初旬)、鳴子温泉に泊まった際に、近くに「尿前」という奇妙な地名を見つけたが、芭蕉は陸奥の平泉から尿前越えをして出羽(山形県)に出たようだ。

司馬は「羽州街道」ではまず最初に「山寺(立石寺)」を訪れている。しかし司馬は「芭蕉はこの山の奥の院まで登って」と書いているが、本人が登ったとは書いていないのをみると多分根本中堂までで、その先の奥の院までは登っていないのであろう。全山の案内図をみて諦めたらしい。

私は六年前と今回と二度目の山寺だが、いずれも頂上の奥の院まで登った。一回目は真夏の最中でかなり苦しかった記憶があるので、今回は躊躇したが家内に健脚ぶりを披露しようと無理して登った。根本中堂から奥の院まで千十五段の石段が続く。巨岩の頂に建つ納経堂など参道に点在する堂宇を巡り、ようやく開山堂に到達。

此処が立石寺発祥の地だという。更に五大堂へ。

ここからの眼下の眺めがすばらしかった。苦労して登ってきた甲斐があったと感じられた。

(なお五木寛之も「百寺巡礼」によると二回山寺に登ったようだが、古希を過ぎた二回目のときは「あんなに高いところまではたして登れるのかと少し心配になってくる」と書いている。)

前回は友人どもと「立石寺」の呼び方は「りっしゃく寺」か「りゅうせき寺」か論争しながら登ったことを思い出した。古くは「りゅうしゃく寺」だったがその後「りっしゃく寺」が一般的になったそうだ。

この寺は最澄の弟子円仁(慈覚大師七九四―八六四)の建てた官寺だという。今回訪れた瑞巌寺、平泉の中尊寺、それに毛越寺いずれもが円仁の創建と伝えられているが、司馬によると円仁は東北に来たという記録がないので多分、彼の弟子安慧が創った寺だろうと書いている。

(五木寛之も前記「百寺巡礼(東北編)」の中で寺の縁起というものはあくまで伝説であり史実とは異なるという意味のことを書いている。東北全体で「円仁開山」が百数十あるといわれるが、円仁一人で短期間のうちにそれだけのことをするのは無理だろう。)

根本中堂の近くにある**「閑さや岩にしみ入る蝉の声」**の芭蕉の句碑の前で記念撮影。芭蕉は「おくのほそ道」で「山形領に立石寺といふ山寺あり。慈覚大師の開基にして、殊に静閑の地なり」と記してこの句を詠んだという。

芭蕉もまた、この老杉と怪石の続く石段を門人の曽良とともに、息をきりながら登ったのであろう。

司馬はその後、近くの上山で泊まっているが、私も前回の旅行では市内の古式な旅館に泊まった。そして翌日は小ぶりな上山城や斉藤茂吉記念館を見学した。館内には茂吉の遺稿、書簡や長塚節、伊藤左千夫など親交のあった文人の遺稿も展示されていた。記念館近くの金瓶集落が茂吉の生まれたところだという。

上山は江戸時代、羽州街道と米沢街道の分岐点にあたる宿駅であったようだが、「羽州街道」では司馬はなぜか幕末の志士清川八郎について語っている。彼はこの近くの出身らしいが司馬には「奇妙なり八郎」という優れた短編があることを思い出した。

米沢では司馬は名君上杉庸山ではなく米沢藩の基礎を築いた家老直江兼続について多くを語っている。

またその兼続にすべてをまかせた藩主上杉景勝については「謙信や兼続の華やかさよりも好きであるかもしれない」と司馬独特の好みを表明している。

さて司馬待望の最上川だが、想像とおり「流れが速い。水深がふかく水量が多いために決して気ぜわしく流れる感じではなく―そのすがたは風景というようなものではなく、人格というほかない大きな気迫を感じさせた」と記している。

最上川下りを楽しんだ私はさほど川の流れは速いとは感じなかったが、舟の乗り場が「戸沢藩船番所」とあったのに興味を感じた。また途中に「おしん」のロケ現場があった。

司馬が好きな正岡子規は芭蕉の最上川の句は「たくみ」があるとして嫌ったそうだが、子規自身の句

「ずんずんと夏を流すや最上川」

も彼本来のリアリズムな句ではないと批判している。それほど最上川とは平明な写実だけでは語れないというのが司馬の言い分である。

○仙台、石巻

「羽州街道」を書いてから約十年後、司馬は仙台、石巻を訪れている。

そのとき、伊丹空港から仙台行きの機上から甲斐の富士山の美しさに感嘆した司馬は「仙台の人（東北の人）が大挙して富士山を始めてみたのは果たしていつだろう」と奇妙なことを考えている。いかにも司馬らしい。

司馬は多分、十四世紀、南北朝時代に北畠顕家にひきいられて西上した奥州侍が最初だろうと推察している。

その次が伊達政宗。政宗は小田原にいる秀吉にぎりぎりになってから恭順の形をとるため死装束のような演技をして出向いたが、このとき富士山を見たであろう。しかもなぜか甲斐側から見ている。彼は小田原へは表街道の東海道ではなく米沢から越後に出て、信州に入り迂

回して甲斐に出たというのである。

時間稼ぎのためである。そんな抜け目のない政宗もいかんせん遅く生まれすぎた。奥州平定の緒についた頃には中央ではすでに秀吉の政権が成立してしまっていた。そしてその後、家康の世となると政宗の意識は「仙台百二十万石を豊かにすること以外に考えなくなってしまった」というのである。

司馬が若いころの政宗を描いた「馬上少年過ぐ」は晩年、詩情豊かな政宗自作の漢詩から題名をとった名作短編である。

塩釜では司馬は「塩と鉄」を考えている。

なお「塩釜」とは略字で、正しくは「塩竈」と表示する。家内もこんな難しい字は書けないと呟いていたが、司馬によると「竈」はカマド（ヘッツイ）のことで、カマドの上に乗っている「釜」とは違う。読みが同じなので両方が使われているが、日本語とはそれほどいい加減なものだと。

しかし「しおがま」の場合、大和言葉が最初にあって後に漢字をあてたものなのであながち難しい漢字を使わなくてもよいだろうとも書いている。

塩釜神社での塩つくりの作業を丹念に記した司馬は塩つくりに使われた大釜を見て、また鋳物の発達について考えている。

司馬得意の「鉄物語」である。

（司馬は日本文化の特徴を「コメと鉄」と捉えていたふしがある。したがって街道シリーズでも出雲のたたら製鉄を主題とした「砂鉄のみち」を始め多くの巻で「鉄」が登場する。）

また塩釜神社では司馬は江戸期、ここを参拝した山片蟠桃（一七四八―一八二一）にも触れている。

大阪の金融業枡屋の番頭（筆名もここからきている。）だった播桃は江戸期有数の思想家。晩年は仙台藩の財政立て直しに力を貸した。播桃がお気に入りの司馬は、この巻のほか「秋田県散歩」「北のまほろば」でも蟠桃について書いている。

（司馬の働きかけで大阪府に「山片蟠桃賞」が設けられたことは「司馬雑感4」で記した通り）

「松島は日本三景の一つだという。しかしどこがいいのかわかりませんよとだれもがいう。」「私は松島の悪口をいおうとしているのではない」と書く司馬だが、やはり観光地松島は気に食わないらしい。

（私にとっての松島湾観光は梅雨入り直前の絶好の観光日和もあって悪い印象ではなかったが。）

まず観光船の船首が極彩色の竜の蛇腹で飾られていること。（竜頭鷁首（りょうとうげきす））といって平安貴族が中国の真似をした悪趣味のひとつで、この船をみた司馬は「身が外国

にあるような感じがした」と書いている。
また「松島や、ああ松島や、松島や」の句。
「落語の大家さんが、熊公を前にして作りそうな句」でこれでは芭蕉が可哀想だ。松島を訪れた芭蕉はあまりの心の昂ぶりに句も出来ねば眠れもしなかったのが実情。そんな芭蕉が「ノンキなトウサンのような句」をつくるだろうかと。
「松島の観光に携わるひとたちはいますこし芭蕉にたいして粛然たる気持ちをもってやってほしいものである」と厳しい。
この後、司馬は瑞巌寺を訪れているが、我々も五大堂、瑞巌寺そして「伊達政宗記念歴史館」を気ぜわしく回った。歴史館には東北出身の歴史上の人物七十三名の蝋人形が飾られていたが、その多くの人たちは「街道をゆく」でも登場する。
陸褐南、原敬、高橋是清、狩野亨吉、内藤湖南、米内光政など。司馬が「街道をゆく（秋田県散歩）」で云う「東北人にしばしば見られる高度の市民感覚とか、精神の貴族性」を、「蒸留」したような人間群である。
司馬はこうも云う。「明治の薩長型のように、閥をつくってそれによって保身をはかるというところが一切ない」人たちである。

瑞巌寺は政宗が再興して以来、四百年近く火災にもあわず当初の姿を保っているという。後期桃山時代の代表的な建築。
我々はこの後、バスで平泉に向かったが、司馬によると「おくのほそ道」では芭蕉は松島の瑞巌寺に詣でたあと、一路平泉への道をとったが、途中みちを間違えて石巻にでてしまったそうだ。
平泉は源頼朝の奥州征伐以来、幾度となく戦火に見舞われ、中尊寺の堂塔も焼失したが、ただ一つ金色堂だけは例外的に九百年近く昔のままの姿を残しているのは奇蹟といっていい。
金色堂の須弥壇には藤原三代清衡、基衡、秀衡に遺体が葬られミイラ化していることで知られている。
ようやく平泉に達した芭蕉は毛越寺で「夏草や兵どもが夢の跡」また中尊寺では「五月雨の降のこしてや光堂」の名句を残している。
前述の立石寺での「閑さや岩にしみ入る蝉の声」と合わせて芭蕉一代の名句が奥羽における三つの古刹で出来ているが、
「くりかえして惜しまれるのは松島においても瑞巌寺でも芭蕉は句をつくらなかったことである」と「仙台、石巻」を結んでいる

孫への手紙

伊治　哲

――これは、妻が孫に宛てて書き送った手紙をもとに、もう少し詳しい話を聞き取って、私が創作したものである。私自身の原体験ではないが、幼い頃の妻になりきって、限りなく事実に忠実に、そして思いを込めて書き記した。いわば妻と私との合作でもある――

サキちゃん、今日はサキちゃんの満十五歳のお誕生日。おめでとう。
ついこの間までヤンチャな女の子だと思っていたのに、もう中学の三年生なのね。背丈はおばあちゃんより高くなったし、言葉遣いもすっかり大人びてしっかりしてきましたね。そんなサキちゃんを見るたびに、驚いたり、喜んだりしています。
中学三年生にもなると、今の自分のことだけではなく、自分のまわりの家族や友だち、学校や世の中のことが、少しずつ分かってくる年ごろです。
サキちゃんが、自分自身を見つめ、将来への夢を育てるためにも、自分の周囲をよく見て、よく考えて、一歩一歩着実にそしてまっすぐに成長してくれることを、おばあちゃんは心から願っています。
ところで、おばあちゃんは今福岡に来ています。
今しがた八人の友だちと賑やかな夕食を終って、ホテルの部屋にもどりこの手紙を書き始めました。シーンと静まった部屋のなかで、サキちゃんの顔を思い浮かべながら誕生祝いの筆をとりました。
「福岡……って、九州の福岡？　なぜ今ごろおばあちゃんが福岡にいるの？」サキちゃんはきっとそう思うでしょう。
それには深いわけがあるの。
おばあちゃんが小学生の頃の仲のよい友だち八人で、その頃とてもお世話になった先生に会いにこちらに来

たのよ。なぜわざわざ遠い福岡まできたのかって？　それをこれからお話しましょう。

これからお話することは、サキちゃんには想像もつかないほどの世界なんだけど、昔こんな生活があったことをサキちゃんには是非知ってほしいのです。

昭和十九年、今から六十三年も前にさかのぼります。おばあちゃんは名古屋市内の国民学校（今の小学校）四年生でした。サキちゃんの年齢より五歳年しただったのね。

その頃、日本の国はアメリカと戦争をしていました。子供のわたしたちは全く知らなかったけど、本当はその頃、日本はもう負け戦の連続だったんだって。とうとうあくる年の昭和二十年八月に戦争に負けてしまいました。太平洋戦争という激しい戦争があって、たくさんの人が犠牲になったことは、サキちゃんも日本史の勉強で教わったでしょう。

昭和十八、十九年頃には、アメリカの飛行機が日本の上空に飛んできて、東京や大阪、名古屋に爆弾を落し始めました。そのたびに「警戒警報」「空襲警報」のサイレンが鳴り響き、わたしたちは防空壕にかくれたり、公園のなかを逃げまどったりしました。

そのうちに、小さな子供たちが戦火に巻き込まれないようにしようと、学童の集団疎開が始まりました。爆撃の目標になる都会から学校ごと田舎に避難するのです。

おばあちゃんたちも、熱田の小学校から電車で一時間くらいかかる祖父江という小さな町に引っ越しました。親兄弟とも別れ、女の子ばかり三十人が一組になり、二人の先生に引率されて、後ろ髪を引かれる思いでたどり着いたのが、「安養寺」というお寺でした。少しずつ寒さがつのる昭和十九年十月のはじめの頃です。

持って来たものは、教科書のほかには、防空ずきんと上着にモンペ、それにわずかな着替えくらいです。

それでも、最初のうちは、修学旅行にでも来たような気持で、友達とふざけあったりしていました。しかし、そうではないことがだんだん分ってきました。

毎日の授業を受けるのも夜眠るのもお寺の本堂でした。冷たい風がスースーと吹き抜けます。本堂の濡れ縁に正座して受ける授業の辛かったこと。それでも、目の前の大きな仏さんがジーッとこちらを睨んでいるようで、歯を食いしばって我慢しました。夜は本堂の中の畳の上に布団を敷いて寝るのですが、薄い布団だから寒さが身にしみてなかなか寝つかれません。友達と抱き合って眠ったことを思い出します。

夢の中に、父や母、姉や妹の顔が浮かんできて、思わず「お母さん！」と叫びたくなります。あちこちで友だちのすすり泣く声が聞こえます。こんなに両親や姉妹が恋しく、淋しい思いをしたことはありませんでした。

この頃、食料も日用品もみんな配給制になっていました。お米は一人一日一合（〇・一八リットル）とか、石鹸は一家族二か月に一個とか、そんな状態でした。しかもお米から小麦粉やサツマイモに変っていったのです。代用食といいました。白いご飯などめったに食べられません。おうどんならいい方で、菜っ葉の入った麦ご飯や〝すいとん〟（小麦粉のだんご汁）だけという日が毎日続きました。だからいつも空腹で、お腹がクウクウと鳴っていました。

でも先生が言われるように「戦争に勝つまでは我慢しよう」と歯を食いしばっていました。

先生たちは、めそめそする女の子を慰めてくれたり、勉強が手につかない子を励ましてくれたりしました。夜もみんなが眠りにつくまでじっと見守ってくれました。時には、先生の食べるものを割いてでも、わたしたちに分け与えてくれたこともありました。わたしたちにとって、二人の先生はお父さんであり、お母さんだったのです。

先生たちが苦労して工面してきたのだと思います。ある日、大きなお釜いっぱいに茹でた〝味噌煮込みきしめん〟を食べさせてもらったことがありました。フウフウと息を吹きかけながら、箸の間から滑り落ちる〝きしめん〟を、必死になってすくい上げたことを覚えています。お風呂にいくのも大変です。一週間に一度か二度の入浴ですが、人数が多いので三、四人まとまって近所の農家に〝もらい湯〟に行くのです。農家の家族が風呂から上がるのを待って、順番に入れてもらいます。ブルブル震えながら外で待っている友だちを思うと、ゆっくりお湯につかってはおれません。〝ザブッ〟と入って〝ズブッ〟と出てきます。寒い冬でも〝カラスの行水〟でした。

みんなが入り終えると、一斉に「ありがとうございました」とペコンと頭を下げます。お百姓のお母さんが「大変だね」と言って、たまにはアツアツに蒸したサツマイモを一本ずつ分けてくれることもありました。家族の団欒を横目で見ながら、母親の温もりを分けてもらったようで、涙が出るほど嬉しかったことを思い出します。

いただいた、たった一本のサツマイモでも、自分で食べてしまってはいけないことになっていました。大切にふところに抱いて持ち帰り、先生に手渡します。先生は、いただきものを集めて、もう一度みんなに平等に分け直します。冷たくなったサツマイモのひと切れがどんなにおいしかったことか。

こんなこともありました。おばあちゃんのお父さん、サキちゃんからいうと〝ひいおじいちゃん〟が、久しぶりにお寺にやってきました。遠い道のりを自転車をこいで来てくれたのです。自転車の荷台には、苦労して買い求め、家族総出で焼いたという焼き魚がいっぱい詰まっていました。栄養不足を少しでも補ってやろうと持って

きてくれたのです。
みんなが歓声を上げて一斉にしゃぶりつきました。しかし、父はみんなの手前、わたしだけに話しかけるわけにはいきません。先生と二言三言挨拶をしただけで、また自転車をこいで細い田んぼ道を帰っていきました。父の後ろ姿をこんなに淋しく見送ったことはありませんでした。

泣いたり笑ったり、悲しんだり喜んだりして、十か月余りが過ぎたころ、やっと戦争が終りました。いよいよ、待ちに待った、自分の家に帰れる日がきたのです。じりじりと真夏の太陽が照りつける熱い日でしたが、わたしたちは朝から帰り支度に余念がありません。なによりも親兄弟に会えることが嬉しくて嬉しくてなりません。

ところが、二人の先生は、不思議なことに嬉しいのか悲しいのか、泣き笑いのような顔をしています。そして、次のようなお話をしました。

「日本は戦争に負けた。これまで先生は『勝つまでは我慢して頑張ろう』とみんなを励ましてきた。みんなも先生のいうことをよく守って、一緒に仲良く勉強をしてくれた。だのに、日本は負けた。先生はみんなに嘘をついてしまった。悪かった。ゴメン……」

と、深々と頭を下げました。そして

「しかし、みんなはまだ幼い。これからも、これまで以上に苦しい毎日が待っていると思うが、みんなが今日まで耐え抜いてきた〝我慢する力〟と、相手を〝思いやる心〟を忘れないでもらいたい。そして、遅れた勉強を早く取り戻して立派な日本人に成長してほしい」

と、涙で頬を濡らしながら、わたしたちの顔を一人一人見つめました。

わたしたちも、言葉の意味がよくは分からないままに、先生のまっすぐな気持と、どこまでもわたしたちをいとおしむやさしさを感じとって、一緒に頬を濡らしました。

先生たちの励ましに見送られて、喜び勇んでわが家に向かいましたが、名古屋の市内は空襲でマル焼け。お城の天守閣はもちろんあとかたもなく、見渡す限りの焼け野原です。

わが家だけはと願いつつ、夕暮れの焼け跡を駅から熱田までとぼとぼと歩きとおして、やっとの思いでたどり着きました。しかし、懐かしいわたしの家は影も形もありません。焼け残った残骸の跡に、みすぼらしいバラックの小屋が建っていました。

それでも、家族みんなが傷ひとつ負わず、元気な顔を合わせることができたことは、なによりも嬉しいことでした。疎開先で故郷の方角に向かい、みんなの無事を祈り続けた願いを、安養寺の仏様が聞きとどけてくださったのだと、手をとり合って喜びました。

こうしてわたしたちの疎開生活は終りました。

それから何十年もたって、世の中が少し落着きをとり戻した頃、疎開当時の友だちが一年に一度集まるようになりました。疎開したお寺の名をとって、「安養会」と名づけました。

ひとつ布団で肩を抱き合って忍び泣いたこと、お寺の本堂を吹き抜ける冬の風の冷たかったこと、ホカホカのお芋のおいしかったこと、きしめんや焼き魚に夢中になってしゃぶりついたこと……など、何十年も昔の思い出が尽きることなくよみがえってきます。

時には思い出深い安養寺も訪ねました。細い田んぼ道は広くなって舗装され、お世話になったご住職は既に亡くなられていましたが、お寺は昔のまま、なにごともなかったように静かなたたずまいを残していました。あんなに広かった本堂の濡れ縁が、思いのほか狭いのに驚きました。そのあたりから先生の声が聞こえてくるようで、一段となつかしさを覚えたものです。

新帯(にいのみ)先生といった男の先生は、その後八十一歳で亡くなられました。そのあとに、当時先生が詠んだたくさんの短歌が遺されていました。その中のいくつかを書き写します。

今宵また親を慕いて忍び泣く児等を思いてまくらぬらしぬ

はるばると暑さいとわず子を思い訪ね来にける親ぞ尊し

安養の阿弥陀如来のふところに抱かれ育つ児等に幸あれ

紅葉手を合わせて必勝祈りける児等がまことをみそなわしてよ

あどけなく喜々とたわむるみどり児の行く末思えば涙し流る

いつも朗らかに接してくださっていた新帯先生が、ひそかにこんな歌を詠んでわたしたちを見守っていてくださっていたのかと思うと胸が熱くなります。わたしたちの手で先生の歌集を作りました。みんなの宝物です。

母と慕った女の先生、石橋先生は、嬉しいことに今も福岡に健在です。毎年の安養会にはいつも名古屋までおいでくださったのですが、かなりのお歳になられたこともあり、今年は仲良しの友だち八人で福岡へ伺ったのです。

明日、先生と一緒に食事をしながら、先生のご健康を祝い、また六十年前の昔に帰って、懐かしい思い出を語り合いたいと楽しみにしています。

サキちゃん、これで、おばあちゃんが福岡に来たわけが分かったでしょう。

おばあちゃんのお話はこれでオワリ。

でもサキちゃんね。おばあちゃんのような辛くて悲しい経験はもうしてほしくないし、そんな時代は二度ときてほしくありません。いや、きてはいけないのです。

しかし、考えてみると、辛かったかわりに、かけがえのない良い先生と、いつまでも心を許せる友だちができたことはたしかです。苦しい時にこそ、本当の友だちができるといえるのかもしれませんね。

だから、どんなに辛くても苦しみから逃げてはいけないのよ。同じ苦しみの友だちと一緒に、その苦しみにぶつかっていくのです。そしたら道が開けるし、生涯の心の友ができるのです。

サキちゃんの中学生生活も今年が最後。来年は高校への進学が待っています。今のうちに、良い友だちをたくさんもって、お互いの思いやりを大事にしましょうね。

ちょっとむつかしかったかもしれないけど、今日はおばあちゃんのお話を聞いてくれてありがとう。今度はサキちゃんのお話を聞かせてね。楽しみにしています。

もう一度、サキちゃんのお誕生日、本当におめでとう。

（２００７．６．１４．記）

「まんじ」季刊発行内規

（発行日）　（原稿締切日〔注〕）

春季号……二月一日……十二月三十一日

夏季号……五月一日……三月三十一日

秋季号……八月一日……六月　三十日

冬季号……十一月一日……九月　三十日

〔注〕円滑な発行を期す為「一週間前編集長宛到着」に努めましょう。

脚気病とかけて

新井　宏

日露戦争に負けていたとしたら、脚気を続発させた森鴎外とその一派の陸軍医務首脳部の責任は極めて重大であった。幸いだったのは、海軍では陸軍とは異なり、日本海海戦で脚気が発生することなく戦闘員がベストコンディションで臨み、勝利をおさめることができたことである。

大正六年九月五日、森鴎外は一年三ヶ月にわたる『伊澤蘭軒』の新聞連載を終えるに当たって、「わたくしは学殖なきを憂ふる。常識なきを憂へない。天下は常識に富める人の多きに堪へない」と結んだ。

後に鴎外の代表作となる『渋江抽斎』や『伊澤蘭軒』は、一見して歴史考証学かと見紛う体裁で、難解であり、新聞連載は当初から不評で非難が相次いでいた。負けず嫌いで定評のある鴎外が、連載を終えるにあたり、世俗の批判に昂然として反論した部分である。

私はこの言葉が気に入っていた。常識に囚われていては、真の学問の進歩など有り得ないとの意に解釈して、引用さえしていた。しかし、どうやら私の理解は間違っていたようなのである。

その頃、鴎外は既に陸軍軍医総監・医務局長を辞任していた。終生の汚点「脚気病細菌説」の誤謬は、もはや権威や権力をもってしても覆い隠すことができなくなりつつあった。医務局長辞任とともに臨時脚気病調査会の会長職は降りたが、引き続き臨時委員として、脚気栄養障害説に反対し、細菌説を唱え続けてはいたものの、調査会の外では、脚気病栄養障害説が大勢となっていた。

それは、日清、日露戦争で膨大な脚気病死者を出した鴎外の責任を改めて問うことであった。鴎外が信奉していた学理が、世俗の白米障害説に敗れるという、鴎外に

とっては耐え難い時期であった。したがって、そのことを知って「学殖なきを憂ふる。常識なきを憂へない」を読むと、理解は自ずから異なったものとなる。

今でこそ、鴎外が脚気細菌説によって、日清・日露戦争で大量の脚気病死者を出したことは良く知られている。しかし、このことが公に指摘されたのは昭和五十六年のことである。事実、手持ちの筑摩書房昭和四十六年版の『森鴎外集』に付された膨大な解説には、脚気の「カ」の字さえ出ていない。

坂内正は『鴎外の最大の悲劇』の帯で次のように述べている。

……秘密とは、例えば近年明らかにされつつある陸軍兵食論の致命的誤りと、その誤りの固執とが陸軍に齎した脚気惨禍についての彼の重大な関与と責任である。その結果、陸軍は日清戦争で四万一千余の脚気患者と四千余の同病死者をだしただけでなく、次の日露戦争でも二十五万余の患者と二万八千人にのぼる同病死者をだしたのである。……

現在では、脚気病は過去のものとなり、その原因がビタミンB1の不足にあったことなど誰でも知っている。しかし、明治時代はそうではなかった。だから、今の基準で鴎外を裁くのは酷かも知れないとの考えもあろう。ところが、現実はそうではなかった。日清戦争を遡ること七年も前から、麦食混合や洋食が良い結果をもたらすという常識的なデータなら山ほどあったのである。

例えば、陸軍衛生統計によると大阪鎮台と近衛師団の脚気罹患率は明治十一年から十八年まで三十パーセントを上下していたのが、麦飯支給を開始した十九年以降、数パーセントに激減している。これはそれ以前から海軍で行われていた脚気対策を試験した結果であった。

麦食が有効なのは、海軍においては既に常識であった。明治二十二年には、海軍軍医総監高木兼寛が宮中に参内し、麦飯採用等の糧食改善によって海軍から脚気が遂に根絶したことを奏上さえしている。

ところが、鴎外は、統計によって得た法則は因果と関係させてはならないと主張する。要は、「麦食論」など理論ではないと逆襲し、一般栄養論として、白米食の優秀性を主張したのである。このように、鴎外の論争の手法は、相手の主張の論証不足あるいは論証不可の部分を衝いて、それを全体の主張の欠陥と理解させる筆力にあった。統計現象のように、多くは法則に従うが、中には例外がある場合が絶好の対象であった。

現代の疫学が統計学によって成立していることに比較すれば、如何に認識が誤っていたことであろうか。たばこが、肺がんの原因になると統計データが示すと、それではたばこを吸わない者がなぜ肺がんに罹るかと反論しているようなものである。

当時、パン食の欧米では、脚気病など全く問題になっていなかった。鴎外が学んだ学問は近代的な細菌学である。その学問で説明できないような漢方医的な「現象論」は、常識に過ぎず、論拠とはならないとの信念に立っていた。しかも、当時の陸軍や東京医科大学はドイツ医学の牙城であり、イギリス医学の流れを継ぐ亜流の海軍医学との対抗意識もあって麦飯を排除する「反栄養障害説」が強烈であった。ドイツ留学者としては四人目で、出世志向の強い鴎外が、白米食の消化吸収性の優れていることを武器にして、陰に陽に「麦食論」を駆逐しはじめる。これによって、陸軍内部で拡がっていた麦飯採用は完全に逆戻りしてしまう。

不合理の極まりであった。白米食の優秀性と、脚気に対する麦飯の効果とは全く無関係なことぐらい誰にでも判っていた。しかし、部分を捉えて論破する鴎外の手法が成果を収めて行く。そして大悲劇を迎えたのである。

日露戦争の戦死者数は五万五千名であった。それに対して脚気病死者が二万八千名である。しかも、その脚気病の責任を負うべき鴎外が、日露戦争後の明治四十年には軍医総監・医務局長に昇任する。脚気病防止のためになぜ麦食を採らなかったかとの非難が、影では渦巻いていたが、専門家である医学中枢部分は、誤謬を再生産してこれを塗布した。

このように並べ立てて見るだけでも、「常識よりも学殖」を優先させていた陸軍医学の首脳部の独善的な教条主義が強烈であったことが判るであろう。いくら麦飯が有効だという状況証拠を並べても、一顧だにしなかった世界が現実に存在していたのである。

似たような話が今の考古学界にもたくさんある。旧石器捏造事件などその最たるものであった。

ドラマは、一九八一年、宮城県の座散乱木遺跡で、四万数千年前の石器が発見され、日本にも中期に遡る旧石器時代があったことを高らかに宣言したことで始まった。

これに勢いを得たのであろうか、主人公の藤村新一は、三年後の一九八四年には古川市の馬場壇A遺跡でも十七万年前の石器を発見し、一気に旧石器前期まで遡らせる。それからというものは、留まることを知らぬように、わずか二十年たらずの間に、十万年単位で「日本人の起源」を更新し続け、ついには秩父市の長尾根、小鹿坂両遺跡そして宮城県築館町の上高森遺跡や北海道十津川町の総進不動坂遺跡で、五十万年、六十万年、七十

万年前の石器を発見し、世界の人類史の通説を覆す大発見を成し遂げる。

科学は本来疑ることからスタートする。世紀の大発見が二度、三度と続く異様さに対しては、疑惑を感じない方が異常である。それが毎年続くとなると「オカルト」以外の何者でもない。これが「常識」による判断である。

しかも当初の座散乱木遺跡に関してさえ、石器専門の小田静夫が人工遺物の確かな証拠は存在しないと真っ向から異議を唱え、火山学者の町田洋が火砕流の中から石器がでるわけがないと指摘していた。続々と現れる石器を見て、中国や韓国の学者さえ疑問を呈しているのに「大成果」はゆるがなかった。ヨーロッパの石器に詳しい竹岡俊樹が、氷河期を経ている石器が平面に並んで出てくる不思議さに加え、これらの石器が指先の微妙な制御のできない旧石器原人に作れるはずがないと指摘し、これは「事件だ」と言っても無視された。

「他人の持ち歌は歌わない」。それが考古学界の悪しき風習であった。批判は発掘者や発見者の功績を貶め横取りする行為のように忌み嫌われ、捏造が拡大再生産される過程を放任してしまった。

結局、事件はマスコミの暴露によってしか解決できず、考古学界は自浄の機会を失ってしまったのは周知の通りである。

学理すなわち「学殖」と言うものは、一般的に口当たりの良い「美しい理論」で成立っている。森鴎外らの陸軍医学陣が「細菌学」を信奉したのは、それが「美しい理論」であったからだ。考古学界も旧石器捏造を導いた岡村道雄の「美しい理論」に幻惑されてしまった。この「美しい理論」に合うように発掘成果を挙げるのが藤村新一に課せられた役割であった。

三角縁神獣鏡が魏鏡だという説も「美しい理論」である。

昭和三十二年に小林行雄が唱えた三角縁神獣鏡分配論や古代国家像は、考古学者ばかりでなく歴史学者も魅了し、その「美しい理論」の上に数多くの花が咲いた。それが「三角縁神獣鏡は魏鏡」という定説の本体であり、力強さの根源である。すなわち魏鏡説が否定されると、今まで積み上げてきた歴史観や考古学観が全て崩壊する危険があるので、常識や新資料に耳を塞いでも「魏鏡説」を守ろうとするのである。

しかし「美しい理論」が醜い新資料によって覆されてきたのが「科学」の歴史である。醜い新資料を素早く取り込んで、また新たな「美しい理論」を構築するのが「科学」であるはずなのに、考古学ではそうなっていなかった。

筆者は『理系の視点からみた「考古学」の論争点』と言う本を今年八月に大和書房から上梓した。内容は、最初から最後まで、考古学の定説に反論したものである。それも、抽象的な反論ではアマチュアの見解として無視されてしまうので、徹底して事実をデータで示す構成とした。

思えば、実に多くの「定説」に噛み付いてきたものである。従来の青銅器鉛産地定説を否定し、三角縁神獣鏡魏鏡説を否定し、弥生五百年遡上説を否定し、高麗尺定説を否定し、製鉄開始時期定説を否定し、古代の間接製鉄説や硫化銅鉱使用説を否定してきた。

日本で初めて実証主義を唱えた重野安繹は、根拠の曖昧なものは全て切り捨てて「抹殺博士」との異名を奉られたが、筆者の場合もあるいは同類なのかも知れない。しかし筆者は、否定した全ての「定説」に対して、より合理的な「美しい対案」を提示してきたつもりである。いや、より合理的な新説を提示する必要上、旧来の定説を批判したと言うのが筆者の立場であり、自分ではさほど人は悪くないと思っているのだが如何であろうか。

森鴎外はその生涯において、脚気に関しては一度も書いていない。いわば、人間として最も悩んだはずの事件を完全に素通りしてしまっているのである。だから現代の基準で、人間としての鴎外を批判するのはたやすい。

しかし、鴎外の凄さは晩年に『渋江抽斎』や『伊澤蘭軒』を書いたことである。その背景に「脚気」があったのは間違いない。そしてそれらの著作に続いて、私の信奉する学者『狩谷棭斎』を書こうとして、ついになし得なかったのも鴎外である。

私は、権力寄りの考古学者たちは大嫌いだが、森鴎外は好きである。

還暦からの考古学（十一）

三角縁神獣鏡に対する考え方の変化（その5）

中山喬央

二〇〇四年五月十五日付朝日新聞一面記事「卑弥呼の鏡」中国製と成分一致

二〇〇四年五月十五日付朝日新聞は一面にカラー刷のグラフまでいれて泉屋博古館（樋口隆康館長）とスプリング8を運営する兵庫県三日月町の高輝度光科学研究センターが共同で分析に取り組んだ、青銅鏡に不純物としてごく微量に含まれている銀とアンチモンに、強力なx線を当てて反応を調べる事により分析をした結果を報道しました。

その内容は、泉屋博古館所蔵の中国戦国時代から三国西晋時代（紀元前三世紀～三世紀）にかけての鏡六九面と、古墳時代前・中期（三世紀～四世紀）の三角縁神獣鏡以外の日本列島製の鏡十八面を分析した結果、中国大陸製の各時代毎の鏡と日本列島製の鏡はそれぞれ異なるまとまりをつくり、これを同館が所蔵していた三角縁神獣鏡八面の分析結果と比べてみると、従来日本列島で作られたと考えられていた二面は日本列島製の鏡の範囲に入り、他の六面は中国大陸の三国西晋時代の年号が入った中国製鏡のエリアと一致したので、卑弥呼の鏡である三角縁神獣鏡は中国製である可能性が高まったとするものでした。

この新聞記事の内容は当時の小生の考え方と一致しており深く気にとめませんでした。

しかし『まんじ』九六号（二〇〇五年五月一日発行）に新井宏が「卑弥呼の鏡の焦り」を掲載したことを契機として考え方が大きく変る事となります。

そこには山崎一雄が行った椿井大塚山古墳出土の三角縁神獣鏡の分析結果と全く比較検討してないとの記事がありました。

これには小生が驚きました。まさかそんなことはないだろうと思いながら、手許にあった考古学関係者なら誰でも知っている四五年遅れの、これも樋口隆康が全面的に関係した『昭和二八年（一九五三年）椿井大塚山古墳発掘調査報告』の八三頁「表2大塚山出土鏡の化学分析値」から錫・銀とアンチモンの値を取り出し計算してみました。これらは何れも樋口隆康が中国鏡だといっている三角縁神獣鏡のもので、これを朝日新聞に掲載された泉屋博古館所蔵鏡の数値と対比してみました。

その結果はあっと驚く内容でした。すなわち椿井大塚山古墳出土三角縁神獣鏡で表2により化学分析値が算出されている鏡二二面の数値は、全て泉屋博古館所蔵の三国西晋の神獣鏡といわれている範囲に入りませんでした。その上これらの鏡の数値は、泉屋博古館所蔵の古墳時代仿製鏡の範囲に半数を超える十二面が入り、更に三面がそれに隣接したところに、双方に属さないエリアに残る七面が入るという結果を示しました。

朝日新聞の一面記事が全く検証なしに載せられていると思いました。伝統ある泉屋博古館の研究論文が全く信憑性にかけるものであったといわれても仕方のないものであると考えました。スプリング8の測定がどのように精緻なものであったとしても、化学界の泰斗山崎一雄が分析した結果とここまで違うのはいったいどういうことだろうと思い煩うこととなりました。

その結果考えついたことは、山崎一雄の行った分析数値を樋口隆康が知らないはずはない。これを無視しているのだということでした。これは後で述べる黒塚古墳出土三角縁神獣鏡に対する樋口隆康の所見からも十分にうかがう事ができます。

一方新井宏は、「泉屋博古館の発表は、アンチモンは性質の良く似た錫の原料に含まれており、その比率は錫の産地によって異なるとの認識に基づいている。だからアンチモンと錫の比率が異なれば、鏡の製作地も異なり、その結果として三角縁神獣鏡は魏鏡だと云うのである。ところが、青銅鏡に含まれるアンチモンが錫原料から来るという認識自体が完全な間違いであった。～アンチモンは錫にも含まれるが、それ以上に古代の銅原料にはアンチモンが多量に含まれているのである。それは中国、日本に限らず、ヨーロッパにおいても一般的なことであった。～したがって原料中のアンチモンを論ずるには、錫との比ではなく銅との比を使用しなければならない。」と批判しています。

それはそれとして、錫とアンチモンに関する泉屋博古

館の発表数値と椿井大塚山古墳発掘調査報告の数値が共に有効性のあるもと考えた場合には、椿井大塚山古墳出土船載三角縁神獣鏡で半数を超える化学分析数値が古墳時代仿製鏡の範囲に入ったという事になりますので、それまでの三角縁神獣鏡が中国鏡すなわち魏の鏡であるという自分の考えに疑いが生じました。

ここで何故小生が、この『椿井大塚山古墳古墳発掘調査報告』を考古学関係者なら誰でも知っていると述べたかについて説明します。

『椿井大塚山古墳発掘調査報告』について

一九九八年一〇月一五日の日本経済新聞・私の履歴書で樋口隆康は次のように述べています。

考古学上の大きな争点に「三角縁神獣鏡」と呼ばれる銅鏡がある。女王・卑弥呼の国、邪馬台国の時代に、中国からもたらされたと考え、この鏡を手がかりに邪馬台国の勢力圏や所在地を考察するという問題をはらんでいる。松本清張さんら作家や中国の研究者をも巻き込み、日本製説、中国からの渡来人製作説など論争が続いている鏡だ。

この三角縁神獣鏡が大量出土し、考古学上有名な椿井大塚山古墳の調査は昭和二八年（一九五三年）三月二六日正午過ぎ、一本の電話で始まった。京都府教育委員会文化財保護課からで「高麗村（現在の京都府山城町）で鏡が出た。調べて欲しい」と言う。梅原末治先生は出張中で、電話を受けた私は、ちょうど研究室にいた横山浩一君、藤沢長治君、小野山節君の三人と現地に向かった。

……

工事主任の説明によると「一週間ほど前、斜面を掘っていて鏡三面が出土。その後、石室が見つかり鏡がぞくぞくと出てきた」と言い、バケツ三杯に入れた鏡の破片や朱の塊を持ってきた。大変なものが見つかったと驚き、私は取りあえず出土品を回収した。

翌日から四月四日まで、石室内を本格的に調査した。金関恕君、林巳奈夫君らにも協力してもらった。すると三角縁神獣鏡一面と別の種類の四神鏡一面が副葬された時の状態で出てきた。この間、梅原先生と小林行雄助手が一度顔を見せた。……

四年後の三二年に、大塚山古墳から出土したほぼ完全な形の鏡八面が古物商らの手を経て売りに出ているとの噂がたったのだ。京都府警木津警察署が捜査に乗り出し、七面を押収した。

私は木津警察署に頼まれ、〜「これらの鏡は大塚山古墳の出土品であることは間違いない」との鑑定書を書いた。

私はこの後、椿井大塚山古墳の調査報告書の作成に取り組んだ。梅原先生は既に京大を退官しておられたが「この報告は自分の名前で出す」と言われ、調査報告を早く出すよう度々催促された。私はようやく仕上げた報告を、三九年に梅原先生に提出した。

梅原先生はそれに多少手を入れ、先生の名前で京都府文化財調査報告として出版しようとされた。ところが小林さんが異議を唱えられたことで、京都府は出版中止にしてしまった。……

ただ、この調査内容について、世間で誤解されたところもあるため、ぜひ正式の報告書を出したいと思っていた。幸い、山城町の依頼を受けようやく出版にこぎつけた。発掘から四五年。調査担当者としてずっと気になっていたので、正直言って肩の荷を下ろした気持ちだ。

そして当該報告書の「まえがき」で樋口隆康は次のように述べています。

前期古墳の最も重要な資料である京都府相楽郡山城町（発見当時は高麗村）椿井大塚山古墳の主体部は昭和二八年に発見、調査されたものであるが、その報告書の出版が、あるトラブルのため中止され、一部の人を除いて、一般に公開されないままになってしまった。実際に発掘調査を担当したものとしては、この貴重な資料をひろく、研究者に活用して貰うためには、どうしても最初の調査内容を公刊する責務があるとかねがね考えていたが、幸い地元山城町も貴重な文化遺産の保存活用のためにも必要として、報告書の出版費を提供してくれる申し入れがあったので、当時の記録をそのまま公刊することにした。……

と一九九七年十二月三一日付けで記載しております。

更に当該報告書七六頁の第二章「結語」では

以上が、昭和三八年に、調査担当者として製作した報告書で、梅原末治教授に提出したものであった。梅原教授はそれに加筆されて、自分の文章として京都府の報告書として出そうとされたのである。

調査担当者としては、調査当時の事実を正しく残す為に、敢えて最初の原稿に戻し、加筆しないままに発表した次第である。

このようなこの報告書をめぐる事態は、広く考古学関係者の間に広まっておりました。

一方当該報告書の付論「椿井大塚山古墳出土鏡の化学成分と鉛同位体比（改訂）」では、山崎一雄等によって次のように述べられています。

そもそも椿井大塚山古墳出土鏡の化学分析を梅原末治から山崎が依頼されたのは昭和二八年（一九五三年）であった。……

梅原が山崎に化学分析を依頼した目的は、大塚山鏡に含まれていた四組の文様が同一の、いわゆる同型鏡について化学成分の異同を探り、これによって製作時期、製作地についての知見を得ることにあった。数回に分けて供与された合計二四面の鏡の破片の主成分ならびに微量成分の化学分析は昭和三九年（一九六四年）には終了していたが、種々の事情により発表の機会が得られないまま時日が経過して平成の時代に至った。

その間に鉛の同位体比を測定して鉛を含む考古遺物の製作地を推定する方法が一九六五年米国のブリルにより開発され、山崎は室住の協力を得て、この方法を大塚山鏡を初め多くの青銅器に適用した。……また別に馬淵らは東京国立文化財研究所において新しい測定機器により多くの青銅器について精密な研究結果を得た。大塚山鏡については、その重要性に鑑み、筆者ら四人（山崎一雄・室住正世・馬淵久夫・平尾良光）は協力して再度新しい機器により測定を行った結果を加えてここに報告する次第である。

鉛同位体比の考察結果については次のように述べています。

三二面の鉛同位体比はすべて日本産鉛の数値とは全く異なる。すなわち大塚山出土鏡は日本産の鉛を用いてつくられたのではなく、中国産の鉛が用いられている。……

四組の同型鏡についてはM七とM八、M九とM十、M二〇とM三一の鉛同位体比は明らかに誤差範囲を越えて異なっており、鉛の同じ原料を使用したものとは考え難い。すなわちこれらの組は一つのルツボで融解した青銅で同時に鋳造されたとは考え難い。

之に対しM十三、M十四、M十五の組は同位体比が近く他の同型鏡とも比較して検討した。山口県竹島御家老屋敷古墳と川崎市加瀬白山古墳の出土鏡と大塚山M十三・十四・十五との五面は同型であるが前二者と後三者の鉛同位対比は異なり、同じ材料で作られたとは考え難い。大塚山M十四の同位体比はM十三とM十五とは僅かながら異なるが、M十三とM十五の数値は近接し、特に二〇七／二〇六の値は極めて近いから、両者は同一材料で鋳造されたという可能性がある。

また大塚山M十八と長岡京市長法寺南原古墳出土の四神四獣鏡は同型であるが、その同位体比はやや異なり、この組も同じ材料で鋳造されたとは考え難い。……

以上述べた事をまとめれば、大塚山出土鏡三二面はすべて日本産鉛とは異なる鉛同位体比を示し、中国産の鉛

鉱石が用いられている。ただ中国のどこの鉱山の鉛かは特定できない。四組九面の同型鏡のなかには同時に鋳造されたものではないかと考えられる二面がある。

ここでどうして前述の二つの鏡を同時に鋳造した可能性があると考えたのかといいますと、同報告書八六頁図2「三角縁神獣鏡の微量成分（銀・アルミニウム・砒素・ビスマス・コバルト・ニッケル・アルチモンの七元素、鉄を除く）含有量によるクラスター（房・群れ・集団）分析」を参照すれば、同型鏡ではM十四とM十五の数値がやや類似し、同型鏡でないものではM三・M七とM九、M十二とM十七、M十とM二五、M十四とM二二、M二〇とM二一等が類似性が高いことを表しております。

しかし鏡の化学成分は、鋳物で溶融合金が凝固する時最初に析出する部分とあとから凝固する部分が組成を異にするため、ある成分が一部にかたよる偏析等があり、一面の鏡でも部分により変動する可能性があるため、偏析がおこらない鉛同位体比の数値の方を重要視して、M十三とM十五のクラスター分析では離れているが鉛同位体比で極めて類似している二つの鏡を、同時に鋳造したと考えたのです。

これに基づいて、今度は表3「大塚山古墳出土鏡の鉛同位体比」表からM十三・M十五同様類似性の高いものを探してみました。その結果M九とM二二、M十六とM二一、M二〇とM三三、M二三・M二五とM三二、M三三とM三六と同型鏡以外で同時に鋳造されたと考えることのできる鏡が多数みつかりました。

これは異なる文様の鏡、例えばM九とM二二の例でと、三角縁櫛目文帯並列式四神四獣鏡と三角縁銘帯交互式五神四獣鏡が同時に鋳造された可能性がある事を示すものです。

これからは、鏡の種類を買主の希望にあわせて作ったということを考えることが出来ます。

またここで述べました通り鋳造製品の化学成分は偏析などのため同じ鏡のなかでも場所によって異なる可能性がありますので、新井宏の銀・アンチモンと錫による分析にたいする批判もあり、先に述べたスプリング8による微成分の分析数値が正確に個々の鏡の成分を表していたのだろうかとも思いました。

富岡謙蔵の『古鏡の研究』

従来の鏡の研究に対する自分の考え方の軌道修正をせまられ、思いついたことは研究の原点に遡って勉強してみようということでした。

そこで掲題の本を見つけ研究を再開しました。

この本は大正九年（一九二〇年）二月に著者富岡謙蔵として発行されています。

しかし之は、富岡の死後、梅原末治が内藤虎次郎・濱田耕作等の要請により、自分の研究成果まで富岡の功績としてまとめ発表したものであることは容易に窺う事ができました。

ここで話題を本題から変えます。

前章の『椿井大塚山古墳発掘調査報告』が四五年後に刊行された件につき、小生は梅原末治が樋口隆康の手柄を横取りにしようとした結果起こった事であると考えてきました。

しかしその考えが少し変りました。というのはかっての学会の慣習では弟子は先生に自分の研究成果を譲り、先生はまたその教え子の研究成果を自分の指導によるものとして、自分の名前で発表するのが普通だったのであろうと梅原末治がまとめた『古鏡の研究』を読んだ結果考えたからです。

しかし梅原から樋口への時代ではそれを許さないような周囲の環境が醸成されるようになっており、それは黒塚古墳発掘時における樋口と河上の間でも継承されたのだと愚考しました。

一九九八年五月、日本考古学協会第六四会総会が青山学院大学で行われますが、その特別発表『奈良県天理市黒塚古墳の調査』において、河上邦彦は樋口隆康とは一線を画す発表を行います。これはその後の三角縁神獣鏡研究に大きな変化をもたらす基となります。

一九九九年一〇月『黒塚古墳調査概報』が奈良県立橿原考古学研究所から刊行されますが、その「Ⅸ黒塚古墳出土の鏡の意義」で樋口隆康は

……三角縁神獣鏡全体で見ても、八～九割が同型鏡である。同型鏡は戦国鏡から唐鏡まで存在するが、同じグループの鏡で、これほど同型鏡が多いのは三角縁神獣鏡以外には見られない。同型鏡は同時に同じ種類の鏡を多数作れるという利点がある。同型鏡が多いということは、この類の鏡の需要が特に高かったために大量生産されたということである。

このことは、邪馬台国の女王卑弥呼が魏王から銅鏡百面を賜ったという魏書東夷伝の記事と合致する。……

そこで何故三角縁神獣鏡が日本でもてはやされたか、それを解明する必要がある。それは当時、神仙思想が日本でもてはやされたことに原因がある。……要は不老長寿の思想である。それが当時、大和政権を中心とする日本国家を統治する首長達の秩序維持の基本思想にマッチしたのではないかと思われる。三角縁神獣鏡は画文帯神獣鏡と共に、その神仙思想をデザインしたものであり、当時の日本の指導者層にもてはやされたのであろう。

と述べています。

ここでも先に述べた通り樋口隆康は『椿井大塚山古墳発掘調査報告』で山崎一雄等がまとめた、三角縁神獣鏡同型鏡の大半が同時に鋳造されたものではないという研究結果と相反する、同型鏡は同時に同じ鏡を多数作れる利点があり、三角縁神獣鏡はその方法によって大量生産されたのだとする発表を行っています。

これは魏の官営工房による三角縁神獣鏡製作説と関連するものです。

一方河上邦彦は、同一の調査概報「あとがき」で

石室の床面は盗掘の痕跡が無く、副葬品がすべて残されていた。全長一三〇ｍの前方後円墳の副葬品がすべて残されていたことの学術的価値は極めて高い。

棺内副葬品は画文帯神獣鏡一面と若干の刀剣類および朱の固まりのみで、それら以外のすべてが木棺と石室壁体との隙間に置かれていた。また、三角縁神獣鏡はいずれも木棺側に鏡面を向け、西棺側に一七面、東棺側に一五面、棺北小口に一面を、棺の北半部をコの字形に取り囲むように配列していた。前期古墳の豊富な副葬品の内容と、副葬時の配列方法が具体的に判明する貴重な資料である。

この出土状況から、昭和二七年の京都府椿井大塚山古墳の鏡の配置状況がほぼ事実であったことを裏付けるとともに、鏡の多数埋納が単に副葬品を石室に入れるというものでないことを示した。……

鏡は葬具として埋納されたのではないと私は考えている。……

小林行雄による椿井大塚山古墳の被葬者が鏡の配布者であるという説は否定されるだろう。しかしながら三角縁神獣鏡は中国鏡であるか否かについての問題については、現状で解決すべき材料はみつかっていない。……

と述べ樋口隆康説との違いを表しています。

ちょっと横道にそれてしまいましたが再び富岡謙蔵の古鏡の研究にもどります。

三三二～三三三頁にかけ富岡謙蔵は次のように述べています。

余の三国を中心とせる時代の遺品と考定せる半肉刻神獣鏡（三角縁神獣鏡？）及び画像鏡（画文帯神獣鏡？）

に至りては、上述の如くその出土畿内に最も多く、而して何れも宏壮なる前方後円墳又は円塚において発見せり。この事実は先に九州北部を主とせる彼比の交通が大和朝廷の確立と共に、前代より既にその一部が存在を認められし、畿内に其の中心の移れるを示せるものにして、『三国志魏志』の倭人伝に見ゆる彼の国との交渉の記事を明瞭となし、従って又当時の我国の状態を窺わしむるものなり。……

画像鏡は……北方支那系統の遺品と認められ、神獣鏡亦三国時代を主となせるも、而も南方呉に多き年号ある式の神獣鏡を認めず、それと様式を異にせる類なるが上に、其の或物の銘文に洛陽、徐州等北方の地名の現はるゝことよりして、是れまた北方の作品と思われ、共に魏晋よりの将来品なるを推定して可なるが如し。然らば当時魏等との交通の盛んに行われしを示すものにして、よく『魏志』の倭人伝に載する記事と一致して、彼の卑弥呼の獲たる銅鏡百面等の蓋しこの類の鏡なりしを推測せしめて、彼の記事を解する上に光明を与ふ。

そして内藤虎次郎の卑弥呼倭姫説を支持して次の様にまとめています。

『魏志』の倭人伝に就いては、古来幾多の学者の研究あり、就中卑弥呼の何人なるや、又其の耶馬台国の何地を指せるかは、最も興味ある研究の対象として、種々論議されつつあり。今に至ってなほ定説を聴くを得ざるも、彼を以って九州の酋長と解し、従って耶馬台国を其の一部に比定せむとする説を採るもの多きが如し。されど是を上述の遺物の示すところによれば、当時既に大和朝廷の主権の確立して、宏壮なる墳墓を営み、これに副葬するに多数の支那将来の精巧なる鏡鑑を以てし、前代に特殊なりし九州北部の一種の遺跡の全く跡を絶ちて、其の鏡を出す遺跡の畿内の墳墓と同一なるに至れる事実は、日本の文化の統一の行はれたるを告ぐるものに外ならず。而して中心の畿内なりしことよりせば、所謂倭人の酋長として魏と盛に交通せる卑弥呼の、正にこれを大和朝廷の或る勢力ありし女性を指せりと解するを最も妥当とすべく、耶馬台国は当然大和に当つべきものなるを思ふ。此の点において吾人は我が内藤博士の卑弥呼即倭姫説のよく遺物よりする研究に一致するを認むるものなり。

これを読んで三角縁神獣鏡研究の原点がよくわかりました。

要は畿内の古墳を中心として出土する三角縁神獣鏡を、魏志倭人伝に出てくる卑弥呼が下賜された銅鏡百枚とすることにより、内藤虎次郎が提唱していた、耶馬台国、畿内説を補強することでした。

これで何故濱田青陵が鏡の研究につき次のように三方面に限定し、社会情勢とか人間の心的な面を外したのかが分かりました。

それは三角縁神獣鏡は、卑弥呼が魏から与えられ、それを自分に従う者に分ち与えたということにして、内藤虎次郎の考えを支持しなければならないという発想が、最初から大前提としてあったからです。

それでは濱田青陵の古鏡の研究に言及した内容を述べます。

凡そ古鏡の研究に三方面あり。一は其の質料の化学的研究にして、金属の性質合金の成分等を明にするにあり。二は其の形状文様の型式学的研究にして、形態と文様の発達変化を理論的に配列するに在り。三は其の銘文の文献的研究にして、記銘の意義を究め又史実との交渉を知るにあり。この三者の研究を綜合するにおいて、始めて古鏡の研究を完くするを得可し。

このようにして「真理」はその時点でみなが正しいと信じていることであって、どんどん変っていく。変る事が学問の進歩だという考え方を取り入れない三角縁神獣鏡は魏鏡であるという大前提が打ち出され、様々な発掘成果、研究発表はこれに抵触しないもののみ認めるという方針が貫かれて来たのだと考えます。

しかし現時点ではどちらに軍配をあげてよいのか分かりません。

ここでそのような先入観にとらわれず、三角縁神獣鏡に関する製造原料問題である鉛同位体比、出土状況と型式編年による年代・伝世鏡問題・仿製鏡問題、銘文の解釈、及び何故当時の首長クラスの古墳からそれが大量に出土するのかという人間の信仰面とか、社会経済情勢及びそれらの大陸・半島・列島間の相互交流の分析により、三角縁神獣鏡が創られた原因とその果たした役割に就いて考えてみることといたしました。

参考文献

河上邦彦「あとがき」『黒塚古墳調査概報』奈良県立橿原考古学研究所、一九九九年。
富岡謙蔵『古鏡の研究』丸善、一九二〇年。
樋口隆康『椿井大塚山古墳発掘調査報告』真陽社、一九九八年。
樋口隆康「黒塚古墳出土の鏡の意義」『黒塚古墳調査概報』奈良県立橿原考古学研究所、一九九九年。
山崎一雄・室住正世・馬淵久夫・平尾良光「椿井大塚山古墳出土鏡の化学成分と鉛同位体比（改訂）」『椿井大塚山古墳発掘調査報告』真陽社、一九九八年。

鏡（その3）

中山喬央

「人は水を監とするのではなく、民を監としなければならない」と。今殷王朝は天命をとりおとしてしまった。私はそのことを監として、一般大衆を丁重に取り扱っていくのだ。

という記事が掲載されています。

ここでは監の字がたんに鏡にうつすということではなく、自分の現在のあり方を反省的に見るための道具として使われています。このように中国の古代の人々は、歴史のなかに自分を位置づけて、現在の自分を反省し将来への戒めとしていました。

『詩経』大雅の分王篇では

殷之未喪師、克配上帝、宜鑒于殷、駿命不易

殷の王朝が未だ天下の人心を失っていなかった時、天の帝王の心に添った統治が行われていた。殷王朝の興亡を鑑とすべきである。大いなる天命を保つのは容易ではない。

中国鏡の精神的な用途

『尚書』は『書経』ともいいます。

先秦時代にあったと伝えられている六経のうち、なくなってしまったといわれている楽経以外の、孔子など中国の聖賢の言行や教えを記した儒教の正典である経書が、易・書・詩・礼・春秋と五経あり、漢代に諸家の流伝をもとに復元編纂されました。そして唐代の五経博士が詩・春秋の諸家のうち、毛氏の詩、左氏の春秋を正科といたしましたので、易経（周易）・書経（尚書）・詩経（毛詩）・礼記・春秋（左氏春秋）の五種が五経となりました。

反省的な意味で使われた監・鑒・鑑

『尚書』酒誥篇に

古人有言曰、人無於水監、当於民監、今惟殷墜厥命、我其可不大監撫於時

古人に次のような言葉がある。

同じく『詩経』大雅の蕩篇では

殷鑒不遠、在夏后之世

殷の人々が鑑として反省しなければならないことは、そんなに遠い昔のことではない。その前の夏王朝の王達の歴史だったのだ。

このように歴史的な事柄を鑑としたことから、歴史書も「鑑」と呼ぶようになります。范祖禹の『唐鑑』、司馬光の『資治通鑑』などの他、我国の『大鏡』『増鏡』などもこれに当ります。

戦国時代から秦・漢代の「反省する」という道徳的な例を考えてみます。

韓非は戦国時代の韓の貴族で、秦の李斯と共に荀卿（荀子）に学び法家思想を大成し、のち秦に使いして始皇帝には認められましたが李斯の反感に遭い自殺させられました。

彼が著した、政治の手段として法律・刑罰を重んずべきことを説いた『韓非子』観行篇では

古の人、目の自らを見るに短るあれば、故に鏡を以って面を観る。智の自らを知るに短るあれば、故に道を以って己をただす。鏡に疵を見わすの罪無く、道に過ちを明らかにするの悪なし。

と述べています。

又漢の「詩経」の研究者で、内伝・外伝があり、外伝が遺存している韓嬰の著である『韓詩外伝』巻五にも

夫れ明鏡なる者は、形を照らす所以なり。往古なる者は、今を知る所以なり。

と掲載されています。

一方『大戴礼記』には

なんじの前を見、なんじの後を慮れ

と、周の武王の践阼に際して作られた鑑の銘文が引用されています。

今度は唐時代の『隋唐佳話』巻上の話を紹介します。

「銅によって鏡を造れば衣冠を正すことができる。いにしえを以って鏡とすれば王朝盛衰の道理を知ることができる。人を鏡とすれば自分の行動の正否を判断できる。私はこれまでこの三つの鏡を宝として自分の誤りを防いできた。いま名臣魏徴が死んで、一つの鏡が失われてしまった。」と。

これは唐の太宗が梁公に言った話です。

易姓革命に関連した監

次は「天帝が天上から地上を見守る」という使われ方

をした監を紹介します。

『尚書』高宗肜日篇では

惟天監下民、典厥義、降年有永有不永、非天夭民、民中絶命

天は地上の民衆を見守り、義があるかどうかを常に正確に判断している。天がある人に与える寿命は、その人に義があれば長く、義が無ければ短い。短命に終わった者も、天が彼を若死にさせたのではない。人が義を修めず、自ら求めて寿命を中途で絶ってしまうのだ。

一方『詩経』周頌の敬之の場合もこれと良く似ております。

無曰高高在上、陟降厥士、日監在茲

天が高く遠い上方にあると思ってはならない。天帝は天地の間を上下しながら、人のなすことを見、日々間近から監視しているのだ。

『詩経』大雅の大明篇には

維此文王、小心翼翼、昭事上帝、聿懐多福、厥徳不回、以受方国、天監在下、有命既集……

この周の文王こそは、細心に慎み深く事を行い、その徳行は道に外れることなく、四方の国々を自分のものとした。天は地上の者達の徳の有様を見定めて、天命を文王に下した。

このように天が天上から地上を見守り、民衆の行動を観察する事により、その中から有徳者を見定めてその人物に天命を授け、中国の支配者とする際に、監の字を天から地上を見守るという意味で使っています。

ここで監・鑑・鏡の三文字についてその由来を考えて見ますと、先ず水の入ったたらいに向けている字の構成から、監の字が「水かがみを見る。ひいてはかんがみる。みはる。」という意味を表わす言葉として登場したことが分ります。その字に金を加えた鑑（鑒・鑒は鑑の別体）という字が現れますが、この字は鏡に映して見る。手本とする。いましめとする。という意味などに使われるようになりました。

そして鑑の字が久しく用いられてきた後、鏡の字がそれと並行して現れ、後漢時代になりますと字書『広雅』に「鑒、これを鏡と謂う。」とあるように、鑑と鏡とは同じものを指すようになります。

ところがその後、鑑の字が「かんがみる。反省する。」という意味で用いられる事が多くなり、一方、鏡は器物としての「かがみ」を表わすのが主たる目的の用語となったようです。

後漢滅亡から隋の統一までの六朝時代の書物『劉子新

論』因顕第二十では

火は吹熸を以って焔を生じ、鏡は瑩払（磨き清めること）を以って鑑と成る。

と器物としてのかがみを鏡の字で表わしております。

古鏡記

今度は天命があらたまるとその王朝はくつがえり、他の王朝が支配することになるのだという、易姓革命に基づいて書かれている隋書を批判した小説を紹介します。

魯迅はこの『古鏡記』を、事実の記録という体裁を取りながら虚構を積み上げ、事実とは異なる真実を照らし出そうとする中国小説史上、画期的な作品であると評価しています。

南北朝という四百年近い分裂時代を終わらせ登場した統一王朝隋は北京から杭州までの大運河を完成させましたが、短期間で崩壊しました。そして易姓革命により天命が革まったのだとする唐王朝によりその業績は否定されますが、この古鏡記は大業十年から、弟王勣の移動コースとして明らかに竣工したばかりの大運河の様子を照らし出しております。

このように歴史を鏡にするとは言いますが、隋を滅ぼした唐が編纂した『隋書』は平凡な鏡であり、作者はそれまでの中国における魔鏡の知識を活用して、平凡な鏡に照らし出すことの出来ない隋王朝の業績を表現しようと、この小説を著したことが考えられます。

隋の汾陰出身の侯生は類稀な人物であった。私（王度）はかって彼に師事していた。臨終の際彼は私に古い鏡を呉れて「この鏡を持っていればあらゆる邪悪な魔物を遠ざけることができる。」と言った。

私はいただいた鏡を宝物として大切にした。鏡の直径は八寸で、鈕は麒麟が蹲っている形をしていた。鈕の周りは亀・龍・鳳・虎が北・東・南・西の方角に配置されていた。その四方の外には、八卦（乾・兌・離・震・巽・坎・艮・坤で構成され、これらを二つあわせた六十四卦で、森羅万象を象徴させ、吉凶禍福を占うもの）があり、その外側には十二支の獣、更にその外側は、侯生が「二十四節気（陰暦で十五日を一期として一年を二十四に分けたもの。小寒・大寒・立春・雨水・啓蟄・春分・清明・穀雨・立夏・小満・芒種・夏至・小暑・大暑・立秋・処暑・白露・秋分・寒露・霜降・立冬・小雪・大雪・冬至）を表す象形の文字だと説明した、隷書に似た文字が配列されていた。

太陽の光を鏡に反射させると、鏡の背面の文様がそのままはっきり黒々と映し出され、高くかかげて叩くと澄んだ音が一日中ゆったりと鳴り続ける。

まさに不思議な霊力を持った物で、世の優れた人々が賞賛する非凡な鏡である。

侯生が言うところによれば

「私は昔、黄帝が十五枚の鏡を作ったという話を聞いた事があるが、その第一鏡は満月の数にのっとり一尺五寸あり、一鏡ごとに一寸ずつ直径を短くした。この鏡は八寸だから八番目の鏡である。」

はるか昔のことだから記録はないが、間違いないだろう。

漢の楊宝が玉環を入手して代々繁栄し、一方晋の張華は宝剣を失うや死を迎えた。今は世の中が乱れ、日々重苦しい。政治も過酷でこの世に安楽に暮らせるところはない。宝鏡もこの世から消え絶望している。

今は鏡の奇蹟を詳細に記して後世に残すこととする。数千年の後、もし鏡を入手することのできる人が現れたら、不思議な鏡の由来を知ることができるであろう。

隋の大業七年（六一一年）五月、私は御史（検察の属官）を辞めて山西省の黄河の東にある河東郡に帰郷していたが、たまたま侯生の死と出会ってこの鏡を手に入れた。

翌月長安に戻り、長楽坡というところで程雄の家に泊まった。

彼は一時的に預かった鸚鵡という名前の女を新しく働かせていた。彼女は大変端麗な美人であったが、私が旅装を解き、身なりを整えようとしてこの鏡を見ていたところ、離れた場所にいた鸚鵡がその鏡を見るや直ぐに額を地に打ちつけ血を流しながら「こちらでお世話になり続ける訳にはまいりません。」と言った。

そこで私は主人の程雄を呼んで彼女のことを尋ねたところ「二ヶ月前に、客がこの女を連れて東の方から来たのですが、女の病気がひどく、客から帰る時まで預かってくれと頼まれました。ところが未だに現れません。したがってこの女に付いて詳しい事はわかりません。」と答えた。

私は魑魅魍魎の類ではないかと疑って鏡を持って近づいた。女は「お助けください。直ぐ正体をあらわします。」といったので、私は鏡を覆った。そして言った。

「先ず正直に話をしなさい。しかるのちに正体を表せば命は助けてあげよう。」

女は再び丁寧にお辞儀をして話し始めた。

「私は華山の神様が祭られている廟の前に生えている、大きな松の木を棲家にしてきた千歳になる古狸です。たくさん人を化かしてまいりました。その罪は死に値するものです。遂に華山の神様から指名手配されましたので、黄河と渭水の間の方に逃げました。下邽の陳思恭という人に大変お世話になり養女になって、同郷の柴

華に嫁がされましたが、彼とは折り合いが悪く、東に逃げて韓城県で、李无傲という粗暴な旅人につかまり数年間引きずりまわされました。先ごろ彼につれられてここに来たのですが、留め置かれ、思いがけなくも天の鏡に遭い、化けている事が出来なくなりました。」

お前は古狸なのに人に悪さをしないのかと尋ねると「人に化けても人に仕えていますので悪さはいたしません。しかし逃げ隠れしながら化けていることは、神の道にもとる行いですから、死罪も致し方ないところです。」と答えた。

助けようと思うがどうかと聞くと

「あなたのご好意は大変ありがたく、ご恩は決して忘れませんが、天の鏡に照らされてしまいましたので、もう化けていることができません。ただ長らく人の姿をしておりましたので、狸の姿は恥ずかしくてたまりません。どうか鏡を箱の中におしまい下さい。そして酔って死ぬことをお許しください。」といった。

私が鏡を箱にしまったらお前は逃げてしまうのではないかと問いただすと、女は笑いながら

「貴方様は情け深く、命を助けると言われました。鏡をしまったら逃げるというのでは、貴方のご恩を裏切ることになります。もっとも天の鏡に一度照らされてしまったら、もう化けることはできません。ほんのしばらく命を永らえて、生きている楽しみを味わいたいのです。」

と話をした。

私は直ぐに鏡を箱の中におさめ、酒宴の用意をした。程雄の隣近所の人達も招いて盛大に宴を催した。女は大いに酔って立ち上がって舞いながら歌った。

宝の鏡よ宝の鏡よ
哀しいかな私の命
私が人の姿で生きてきた間
何人の男に仕えてきたのか
生きていればこその楽しみもあるが
死ねば心は安らぐ
何が良くて
この世ばかりにしがみつく

歌い終わると丁寧にお辞儀をし、老いた狸の姿にもどって死んだ。

その場の人々は皆驚嘆した。

大業八年四月一日、太陽が欠けた。私は御史台（検察の属官）で宿直をした後だったので、昼間役所で昼寝をしていた。目が覚めると昼間なのにあたりが暗くなっており、役人達が太陽が大きく欠けていると教えてくれた。服装を整えようとして鏡をとりだしたところ、鏡も暗くなっていて光を失っていることに気がついた。これ

で私は宝鏡も陰陽の光と影の微妙な動きと一致するように作られているのだと思った。そうでなければ、太陽の光が失われた時に鏡の光が無くなるはずがない。私は鏡の不思議な現象にしばし呆然としたが、にわかに鏡が光り輝き始め、太陽も次第に明るさを増していった。

太陽が元に戻ると鏡も同じように以前の輝きを取り戻した。これから後も、日蝕月蝕が近づいてくると、鏡は輝きを失った。

その年の八月十五日に、友人の薛俠が手に入れた長さ四尺の銅剣を持って我家にやってきた。剣には柄がついており、そこには龍と鳳がめぐるように飾られ、左の文様は火焔のよう、右の文様は水波のようで、光り輝き、特別のものであることが良く分かった。

彼は

「この剣は以前自分が試したところ、毎月十五日天気が晴朗な日は、暗い部屋に置くと自然に光を発し、辺りを数丈ばかり照らした。私は是を入手してかなりたったが、君は不思議な現象の現れることを好み、古いものを大切にすることは渇するものが水を欲しがるようなものだということを聞いている。今宵は君と一緒に試してみたいものだ」と言った。

私は大変喜んだ。その夜はさわやかに晴れ渡ったので、一室を密閉し彼と同宿した。私も宝鏡を出して傍らに置いたところ俄かに鏡が光輝き出し、その部屋を明るくした。お互いが日中のように良く見えるようになった。剣の方は何の変化も起らなかった。彼が鏡を箱にしまってくれと言ったのでしまったところ、今度は剣から光が出たが、それは一、二尺しか照らさなかった。

彼は

「天下の神物といっても強いものと弱いものが有るのだ」と言った。

この後満月の度に鏡を暗い部屋で取り出すと、あたり数丈を照らした。ただ月影が部屋に射し込んだ場合は鏡は光らなかった。流石に太陽と月の光には敵う事はできなかったようである。

その年の冬、著作郎を兼任することになった。詔を奉じての国史編纂で、蘇綽の伝記を載せようと思った。

私の家の使用人豹生は、年齢が七十歳になるが、もとは家臣として蘇家に仕え、歴史が好きで文章も概ね理解する事ができた。私の原稿を読んで悲しみに耐えない様子だったので、理由を尋ねると彼が私に対して次の様に説明した。

「私はかって蘇綽様から大切にしていただきましたが、その蘇綽様がお話になられたことが本当だった事が今わかりそれで悲しんでいたのです。

貴方様が今お持ちになられている鏡は、蘇綽様のご友

人であった河南の苗季子様が蘇綽様に贈られたもので、この鏡を蘇綽様は非常に大切にしておられました。蘇綽様が亡くなられた年、蘇様は快々として楽しまれないご様子でしたが、苗季子様をお呼びになって次のようにおっしゃいました。自分が死ぬ日はそう遠くないが、この鏡が誰の手に入るのか占ってみたい。私に立ち会って欲しいと言って、私に筮竹を持ってこさせてご自分で卦を立てられました。占いが終わると蘇様は、自分が死んで十余年たつと我家からこの鏡が無くなってしまってどこへ行ったのか分からなくなるであろう。しかし天地の神物であるからその動く先を占う事ができる。今黄河と汾水の間に、宝気が湧いており、占いに見える兆しと一致しているから、鏡はその方面に行くのであろう。私が又、人の所有物になるのですかと聞くと、蘇様は再び占って、先ず侯家の物となり、次いで王氏に所属するであろうとおっしゃいました。これから先は行くところが分かりません。」

豹生は言い終わると激しく泣いた。

私が蘇氏の子孫に問い合わせると、やはりその通りだったことが分かった。そして蘇公が亡くなった後で行方不明になったことは豹生の言った通りだった。

そこで私は蘇公の伝記を編纂した時、詳しく終末でその事に触れ、彼の易占いがひときわ優れていたと述べた。

大業九年の正月元旦、一人の西域の僧が我家に托鉢にやってきた。弟の勣が応対したが、その神秘的な雰囲気にうたれ、家の中に招待して、食事を提供した。しばらく話をした後で、その僧が弟に向かって次のように言った。

「お宅には二つとない宝鏡があるようですが、拝見させていただけませんでしょうか。」

弟が

「貴方はどうしてそれがわかったのですか。」と尋ねると、その僧がいうのには

「私は預言書の秘術を修得し、宝気を見分けることができます。お宅の上には毎日青い光が太陽に連なり、赤い気が月へと伸びていますが、これは宝鏡のものです。私が気付いてから二年になりますが、良い日を選んでお邪魔させていただきました。ですから今日、是非拝見させていただきたいのです。」

弟が鏡を取り出して見せると、僧は大変喜んで膝まづいて拝みながら受け取り、その鏡を見ながら弟に言った。

「この鏡には幾つかの霊力がありますが、未だ全てが表わされてはいないようです。金の脂を塗り、真珠の粉で拭き、高く掲げて日の光を照らしますと、その反射した光は必ず壁を透過するでしょう。」

又僧が溜息を吐いていう事には

「更に秘術を使えば内臓も照らし出す筈ですが、残念ながらその秘薬を持ち合わせておりません。ただ金の煙でいぶし、玉の水で洗い、更に金の膏と、真珠の粉を使って秘法の通り鏡を拭き、之を土の中にしまっておけば曇ることはありません。」と言って、金煙・玉水の秘法を教えてくれた。その通り実行してみたら確かに効果があった。しかし西域の僧が再び現れることはなかった。

その年の秋、私は長安を離れ、山西省芮城の県知事を兼任する事になった。

庁舎の前に周囲が幾抱えもある樹齢が何百年になるか分からない棗の木があった。代々の知事が着任すると皆この樹を神として祭った。そうしないとたちどころに災いが起ったからである。

私は怪しいことは人が起こすものであり迷信による祭りは廃すべきであると思ったが、県の役人達が全員頭を下げて祭りを行うよう強く頼んできたので、止むを得ずこれに従った。しかし心の中ではこの樹には魑魅魍魎の類が棲み付き、人の力では追い出すことができなかったので、その勢いが盛んになってしまったのだと考えた。

そこで密かに鏡を樹の割れ目に懸けたところ、夜の十時頃、庁舎の前に雷鳴がとどろき大きな声を出している物体がいることがわかった。行ってみると風雨がこの樹のまわりだけを取り囲み、稲光が上下していた。明け方になって大蛇が一匹見つかり、鱗は紫で尾が赤く、緑の頭に白い角があり、額には王の字があった。身体には何箇所か傷があり樹の下で死んでいた。

私は鏡を樹から下ろして収め、役人に命じて蛇を県の城門の外で焼かせた。次に樹を掘り出したところ、樹心に穴があり地中部分ほど大きくなっていて、大蛇がこれを棲家としていたことが分かったので、樹を掘り起こした跡を墳丘としたところ、とうとう妖怪の災いがなくなった。

その年の冬、私は御史と芮城の県知事を兼任したまま、正式の使者として黄河の北の地域に赴き、政府の食料庫を解放して陝東（河南省の黄河下流域）の飢饉対策を行った。当時は天下にひろがる大飢饉で、人民に疾病が蔓延し、蒲陝（山西省蒲県と河南省陝県の間）の地域では疫病が最も流行っていた。

河北の出身である張竜駒が、私の下で役所に勤めていたが、その一族郎党数十人が一時に病気に罹った。私はこれを気の毒に思ってその鏡を持ってその家に行き、竜駒に鏡を持たせて夜になると照らさせた。病人達は鏡を見て皆驚いて起き上がって言った。

「竜駒が月を持ってきて照らしたら、光の当った所は、氷が身体についたようで、体の中まで冷やされる」

直ぐに熱が収まり、夜中までには全員が快癒した。

私は、鏡は人に害を及ぼすところが無く、人々を救う力があるのだと気がつき、密かにこの鏡を持たせて人々の間を巡回させた。

その夜、鏡が箱の中で氷のように冷たい音を発し、その音は遠くまで伝わり長い間鳴り続けてからとまった。私は何のことだろうと一人思い悩んでいたところ、翌朝竜駒が私のところに来て次の様に言った。

「私は昨夜、夢の中で、突然一人の人物に会いました。竜の頭をし身体は蛇で、身に紫の服をまとい頭に赤い冠をつけていました。そして私に向かって、自分は紫珍という鏡の精で、前におまえの家に功徳を施したので夢の中で訪れたのだが、自分に代わって王公に伝えて欲しい。一般大衆が罪を犯したので、天は罰として病気にしたのだ。どうして自分に天のおきてに反して人々を救わせるのだ。その上、病は来月になれば治る事になっている。もうこれ以上自分を苦しめないでくれ。」

私はその霊験灼な不思議な働きを深く心に感じ、記録して残す事とした。翌月になると、鏡の言った通り病気は収束した。

大業十年、弟の勣が江蘇省六合の副知事を辞任して帰郷した。そして各地の山水に遊び神仙道の修行をしようとした。私はこれを止めさせようとして次の様に言った。

「今天下は乱れようとしており、盗賊が横行している。お前はどこに行こうというのか。俺とお前は気心の合う兄弟であり未だかって遠く離れた事が無い。お前の行おうとしていることは、まさに神仙になろうとするものである。昔、尚子平が五岳に入り、行方不明になったというではないか。もしお前がそのようになろうとするのなら、とうてい私は耐える事ができない。」

このように涙を流しながら弟を説得したが、弟は

「もう決心してしまいました。とめないで下さい。兄上はとてもすぐれた人ですからもうお分かりになっていらっしゃることと思います。孔子も言っておりますが、身分のいやしい男でもその志がかたければ、他人がそれを変えさせることはできないと。人生はせいぜい百年、一瞬の間に過ぎ去ります。思いを遂げる事ができれば嬉しく、それがかなわなければ悲しいものです。心置きなく目標に向かって進むのが聖人の教えに従う事です。」と言い返した。

私は止むを得ず別れを承知した。

更に弟が言うのには

「別れに際して頂きたい物があります。兄上が宝としている鏡は俗世間にあるもとは違います。私は雲の彼方霞の中に理想を求めようとしております。兄上どうか贈り物としてその鏡をいただけませんでしょうか。」

私は君にあげるのに惜しい物は無いと言って、弟に之を与えた。弟は行く先も告げずに出発した。

大業十三年の六月に弟は鏡を持って長安に帰ってきた。その時、彼は私に次の様に言った。

この鏡は本当に宝物です。兄上と別れた後、先ず嵩山の小室に行きました。石橋から降りたり玉壇に座ったりしました。日暮れ時に洞窟を見つけました。その中にあった石の広間は数人が入れる広さで、私はそこで泊まることにしました。月の光が輝く真夜中近くに二人の人物が入ってきました。一人は西域の胡人に似た風貌で顎鬚も眉毛も白く痩せた体をしていて山公と言い、今一人は、顔が大きく白い口鬚と長い眉毛を持ち、黒色の肌をし背は低く、毛生と名乗りました。そして私に向かって、おまえは誰だと尋ねました。

私は俗界を離れ、静かな場所、神聖な洞窟を探し、奇蹟を求める旅をしている者だと答え、その後、座り込んで二人と話し合いをしました。ところが彼らがしばしば突拍子もないことを言いましたので、魑魅魍魎の類ではないかと疑い、手をこっそり後ろにまわして鏡の箱を開け、鏡を取り出しました。鏡が光を発しますと二人とも声が出なくなって突っ伏し、やがて背の低い方は亀になり、胡人に似た方は猿となりました。鏡を掛けたまま朝を迎えますと、亀も猿も死んでいました。亀の身体は緑の毛、猿の身体は白い毛で覆われていました。

続いて箕山に入り潁水を渡りました。太和を経由し玉井をじっと見て参りました。玉井の傍らには、緑色の水を満々と湛えた池がありました。

樵に尋ねましたところ「この池は神聖な池で、村では八節毎にお祭をして幸せを祈っています。もし一回でもお祭を中断するような事をいたしますと、池の水の中から黒雲が湧き出し大きな雹が降って堤を壊し、岡の農作物も駄目にしてしまいます。」と言いました。

そこで私は鏡を取り出して池を照らしました。そうすると池の水が沸き立ち、雷鳴のような音がして、池の水が一滴残さず舞い上がり、二百歩程先の地上に落ちました。その中に人の背丈ほどで、腕より太い胴体している魚が見つかりました。首は赤く、額は白く身体は青と黄色の中間色で、鱗がなくぬるぬるしており、竜のような形をして蛇のような角がありました。口の先はちょうざめのように尖り、動くと光が出ました。泥水の中でのたうちまわって苦しんでおり、遠くに逃げることは出来ませんでした。

私はこれは鮫で水が無くなったから力がなくなったのだと思いました。刀でさばいて焼き魚にしましたが、たいそう油がのっており美味でしたので、之で数日間の食事を賄うことができました。

次いで宋の汴（開封）に出ました。そこで厄介になった張珂の家では娘が患っており、夜になると悲しい悲鳴を叫び、とても聞いていることが出来ないとのことでした。私が理由を尋ねましたところ、病気になってから一年あまりたちますが、昼間はなんでもなく夜になるといつもこのようになるということでした。私はその家に一泊することとし娘の声を聞いた時、鏡を開いて照らしました。病気の娘は「戴冠郎さま（雄鶏のこと）が殺された。」と言いました。娘の寝台の下には主人の張珂が飼っていた七・八歳の大きな年老いた雄鶏が死んでいました。

さらに江南方面に遊びました。広陵（江蘇省江都）で揚子江を渡ろうとした時、突然黒い雲が水面を覆い、黒々とした風が吹いて波が立ち、船頭達は真っ青になって、舟を出しても転覆するのではないかと怖がりました。

私は鏡を持って舟に乗り、水の数歩先を照らしますと、光は川底まで届き、風も雲も無くなって波も静かになりました。そこであっという間に天下の難所である揚子江を渡る事ができました。

次に摂山（江蘇省江寧）に登り、芳嶺に赴きました。絶頂を攀じ登ったり、深い洞窟に入ったりしました。鳥の群れが人を囲んで騒いだり、数頭の熊が道を阻んで蹲っていたりしましたが、鏡を振ると皆恐れて逃げ去ってしまいました。

さらに波の静かな浙江を渡っている時、潮が海から逆流してくるのに出会いました。走る波が凄まじい音を立てて数百里離れたところでも聞こえました。

船頭は「大波が近づいているので、南にわたることはできません。もし舟を戻さないと我々はきっと魚の餌になってしまいます。」といいました。

私がその鏡を取り出して照らしますと、逆流してきた大波の動きが止まり、雲のようにそそり立ちました。あたりの水が澄んできて川の水に五十歩あまり割れ目が出来て、大きな亀や鰐が逃げ去りました。舟は帆をあげてあっという間に対岸である南側の港に到着しました。

ところが振り返ってみますと高さ数十丈の大波が私達の渡ってきた航路を飲み込んでいました。

さらに天台山に登り洞窟を見て回りました。夜、山や谷を移動する場合も、鏡を身につけていると体の周囲百歩の間は光が届いて、細かな物まで皆見ることが出来ました。森の中で眠っていた鳥達も驚いて乱れ飛びました。

天台山から会稽に戻りますと、張始鸞という不思議な

人物に出会い、彼は私に周髀九章と明堂六甲の秘術を教えてくれました。

友人陳永と共に帰途につき、予章（江西省南昌）にも足をのばしました。そこで道士の許蔵秘にあいましたが、彼は許遜七代目の子孫で、刃を踏み、火の上を歩く術を身につけていると言いました。妖怪について話をしていると彼は

「豊城県の貯蔵庫を管理している李敬慎の家では三人の娘が魑魅魍魎に取り付かれているが、人々は何の病気であるか分からず、自分も治療してみたが効き目がなかった。」と話しました。

私は友人に豊城県の治安を担当している趙丹という有能が男がおりましたので、彼を尋ねてみることとしました。彼は部下に命じて私の宿を手配しましたが、私は彼に頼んで貯蔵庫を管理している李敬慎の家に泊まることとしました。彼は李敬慎に話を通しましたので、李は次の様に事情を説明してくれました。

「三人の娘は家の中の小さな部屋に同居していますが、いつも日暮れになりますと化粧して着飾ります。日が没した後はその小さな部屋に閉じこもり灯りも消してしまいます。聞き耳をたてていますとこっそりと談笑している声がして明け方には眠ります。呼び起こさないと目が覚めず日々に痩せ衰え食事も殆ど喉を通りません。こちらが無理に化粧をさせないようにすると、首を吊ったり、井戸に身を投げようとしますので、どうすることもできません。」

私は彼に案内してもらって小部屋を見ますと、東側に小窓がありましたので、昼間の内に窓の格子を四本切断し代わりに支柱を入れてわからないようにしました。

夕方になると彼は私に、化粧した娘達が部屋に入ったという報告をしました。夜になって耳をすまし普通の話し声が聞こえた時、私は窓の格子を外して鏡を持って中に部屋の中に入りました。三人の娘はいっせいに夫を殺したと叫びました。

初めは何も見えませんでしたが鏡を掛けたままで、明け方を迎えますと、先ず首から尾までの長さが一尺三・四寸ある一匹の鼬が目に入りました。次いで太っていて重さが五斤もある毛も歯も無い年寄りの鼠がおり、さらにもう一匹は守宮で、人の手ほどの大きさで体は硬い鱗で覆われきらきらと輝き、頭上に二本の角を持ち、体の長さは半寸、尾の長さが五寸以上で、その先の部分が一寸ほど白くなっていました。皆揃って壁の穴の前で死んでおりました。

この後、三人の娘の病気は快癒しました。

その後は神仙の真理を求めて廬山に行き、数ヶ月間勝手気ままに過ごしました。樹林地帯で過ごしたり、草原で野宿したりしました。

虎や豹が次々と現れたり、山犬や狼も入れ替わり立ち代りやってきたのですが、鏡をかかげて彼らを見ると必ず逃げ帰りました。

廬山の蘇賓は朝廷に出仕しておりませんが不思議な事柄を実に良く知っています。易の道も洞察し、過去から未来まで見通します。

彼が私に向かって言うのには

「天下の聖なる物は、人間世界には長く留まらないものだ。今世界は騒乱状態にあるので、他郷に留まっているのは良くない。貴方の鏡は未だに貴方を護っているが、速やかに故郷に帰ったほうが良い。」

私はその言葉の通りだと思い、直ぐに北に帰り河北で時を過ごしました。ところがある夜夢に鏡が現れて

「貴方の兄上に大切にしてもらったが、人間世界を捨てて遠く去る日が近づいており、最後の別れをしたいので、早く長安に戻ってください。」と言いました。

私は夢の中で之を認め、明け方になってこのことを思い出しますと何かぼんやりとして動悸が自然と高まりました。

私は直ぐに西の長安を目指し、今こうして兄上とお会いして、鏡の精との約束を果たす事ができましたが、この鏡もいずれ兄上の許から去って行くことになると思います。

数ヵ月後弟は長安から河東に帰って行った。

大業十三年（六一七年）七月十五日（満月の日）、箱の中で悲鳴があがった。その声は細く遠くに聞こえたが、やがて竜が咆え虎が吼えるように、俄かに大きく響き渡ったが、しばらく続いた後で漸く収まった。箱を開けて見たところ鏡が亡くなっていた。

翌六一八年三月、煬帝が殺されて隋が滅び、その年の五月に李淵が即位して国号を唐とします。

参考文献

小南一郎「鏡をめぐる伝承―中国の場合―」『鏡』社会思想社、一九七八年。

成瀬哲生「古鏡記」『中国古典小説選4』明治書院、二〇〇五年。

漢詩

潮騒錄（五十二）

鯨游海

寄高橋湯川兩家華燭之典

平成十九年五月

琴動梁塵弗醉無
葵櫻亂舞盡傾壺
誰人孤老最多涙
曾是偸兒掌上珠

押韻・無壺珠

〈高橋湯川兩家華燭の典に寄す〉

琴は梁塵を動かして　酔わざるは無く
葵桜乱舞して　尽く壷を傾く
誰が人か孤老の　涙最も多かるは
曽って是れ　掌上の珠を偸みし児ならん

〔注　解〕

琴＝洋琴。この日新婦は見事なピアノ演奏を披露して宴席を盛り上げた。動梁塵＝劉向・別録「聲動梁塵」歌声が余りにも美しいので、梁の上の塵が感激して動いた、という故事より。

葵＝向日葵。葵花とも。過日、新郎が新婦に「一番行ってみたい所は何処」と問うたのに対し、新婦は「葵の咲いている花園」と応えたという。当日会場は無数の葵で蔽い尽くされ、花嫁を驚喜させた。桜は新婦が演奏したピアノの曲名。

盡傾壺＝陶淵明・飲酒「杯盡壺自傾」より。酒が進むさま。

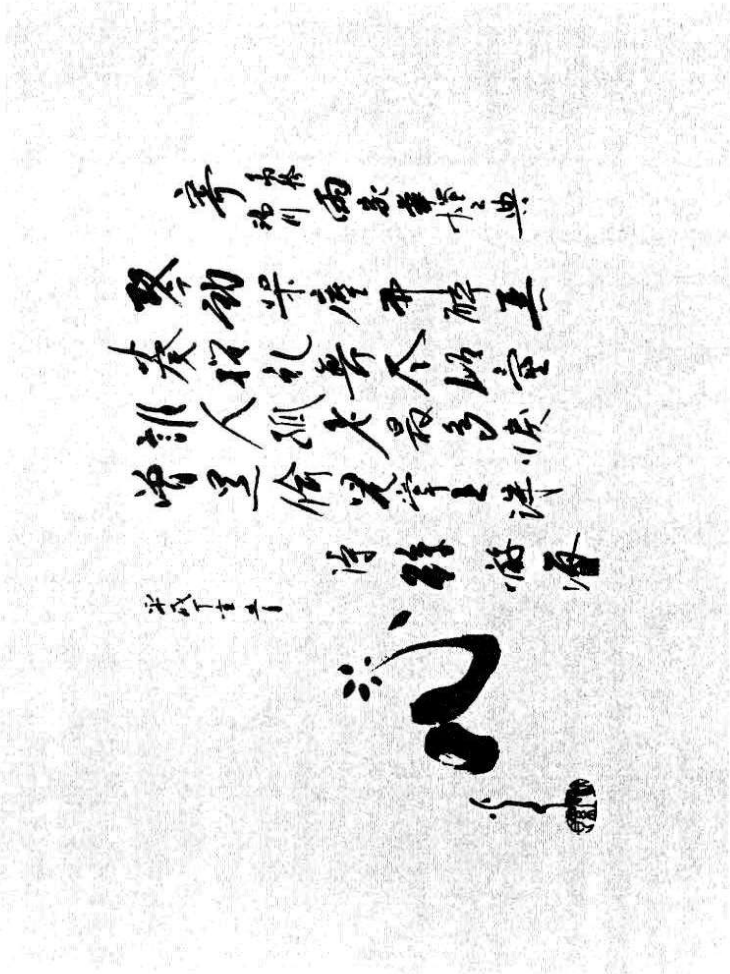
掌上珠＝杜甫「掌中探見一珠新」手の内の珠。最も大切にしている物。転じて最愛の子供。

孤老、偸兒は花嫁の厳父を、珠は母堂を指す。

〔口語訳〕

新婦の弾くピアノが余りにも美しく響き、あの故事にいう梁の上の塵が感激して動いたほどで、参会者でこのピアノに酔い痴れない者は唯の一人も居なかった。

会場には葵花が咲き乱れ、また新婦の奏でる箏曲の桜



（原寸）新聞紙大（素材）和紙（書）田寺芳山人書家

をモチーフにした名曲「桜」が舞い流れる中、卓上の酒壺が尽く傾むくばかりに宴は盛り上がった。
所で、涙を最も多く流しておられる寂しげなあの老人は一体誰方であろう。
これぞその昔、他家の掌中の珠――最愛の娘を偸んだ若者だった方に違いない。

☆咲き乱れ踊るひまわり舞うさくら
華燭の影の孤老淋しも

刑部詮議廳元尚書諸方重威堕羅網
平成十九年六月

天網權官敕任生
自汚晩節重威名
落花覆水不還返
木鐸當慙月旦評

押韻・生名評

〈刑部詮議庁元尚書諸方重威羅網に堕つ〉
天網の権官　勅任生
自から汚す晩節と　重く威き名とを
落花覆水　還た返らず
木鐸当に慙ずべし　月旦の評

〔注　解〕
天網＝老子「天網恢恢疎而不漏」天の法網は広大で疎いけれど、罪を犯した悪人を掬い漏らすことは無い。
權官＝権力の強い高官。敕任生＝天子が任命する高官。
落花＝五燈會元「落花難上枝　破鏡不重照」
覆水＝拾遺記「覆水不返盆」一旦こぼれた水は元の盆には戻らない。呂尚の故事。
木鐸＝金属製で木の舌の付いている鈴。法令を民に公布する際、これを鳴らして人を集め公示した。転じて世を教え導く人達、指導者層。更には新聞等報道機関をいう。
月旦評＝人物評。後漢書・許劭伝「月旦評」月の始めに許劭が仲間たちを集め要職に在る者の人物評、品定めをしたという故事。なお詩題の羅網は鳥を捕える網。転じて完備した刑法を寓意。刑部＝司法警察。尚書＝長官。

〔口語訳〕
天子の張り巡らす法網はあく迄広く遠く巡らされ、犯罪者を逃がさないよう司法は整備されている。その絶大な権力を有する勅命の高等官だった諸方威重。
その本人が何たることか、晩節に至ってこの重く且つ威厳ある名を汚して了うとは！
長官という花も実も有る地位も、詐欺と収賄という不名誉も一旦犯して了ったからには再び元には返らない。
しかし政官界の最高指導者たち、更には世論を導くべき責務のあるマスコミという公器の人物評価は、何と杜撰でいいかげんなものであったことか。当に慙じ入って然るべきだ。評価が彼をして長官たらしめたのだから。

☆晩節になぞ汚したる重き名を
勅命受けしその威き名を

憶凶弾

平成十九年五月

靜夜銃聲轟里隅
闇中忽見一篠朱
蒼民豈唯慄凶弾
世相廢頽政道愚

押韻・隅朱愚

〈凶弾に憶う〉
静夜の銃声　里隅に轟き
闇中たちまち見る　一条の朱
蒼民豈に唯　凶弾に慄くのみならんや
世相の廃頽　政道の愚かなるに於てをや

〔注　解〕
この頃、長崎では前市長が選挙中に凶弾に倒れ、米国東部ヴァージニア工科大学では、二十数名の無辜の学生が銃の犠牲となった。
更に愛知県長久手では、警官が賊に撃たれ生命を殞した。やりきれない陰惨な事件が、地球規模で起こっている。二十一世紀は何処にか行かん。
このような世相をもたらした過半の責任は政治にある。
さて、承句の朱は血を指す。慄はぶるぶる慄える。恐れ戦く。廃頽＝頽廃。退は仄字、頽は平字。
豈唯ＡＢ、累加形の句法。「豈に唯Ａのみならんや、Ｂに於いてをや」と読むのが標準的訓読。

〔口語訳〕
静かな夜、数発の銃声が住宅街に轟いた。
暗やみを透かして瞳を凝らしてみると、一条の眞赤な血が流れしたたるのが見えた。
市民は単に無法な凶弾にのみ恐れ戦くのではない。
こんな荒みきった社会、退廃した徳の無い世の中にして了った政治の愚劣さに対して、人々は怒り且つ恐れ戦いているのだ。あの理想の政治が行われたという堯舜の時代、貞観、開元の絢爛たる時代が再び出来しないものであろうか。

☆月隠れ静謐つんざく銃の音
政治に怒る鬼の号か

《漢詩の流れ41》 宋代の詞①李清照

宋代に至り詞が隆盛してきた。北宋の初は天下太平で歌舞や新声新曲が競って現われたのに呼応したのか。

唐末から五代の近体詩は、盛唐の極盛期を過ぎ、詩題、詩風が成熟した結果、それを破ろうと試みた詩形であった。絶句（四行詩）や律詩（八行詩）の枠を破り、新しい詩歌を求めた末に現れた。詞、詩余、填詞ともいう。

その旗手となったのが女流、李清照である。北宋末から南宋にかけて現われた、閨秀にして中国文学史上第一流作家の名を負うた見識ある才女である。時代を反映して何処か哀愁を帯びる所が日本人にも受ける。

済南（山東省）の人で号は易安居士。学者の家に生まれ、夫趙明誠と協力し、古碑、書画、奇器等を蒐集研究し優れた業績も残した。金が南侵するや乱を避け南に逃れたが、その間に夫は病死し、家蔵の古物も失なった。

国敗れ、家亡び、やがて彼女も行方不明となる不幸な運命を背負った人である。それだけに作品は深遠である。

如夢令　（じょぼうれい）

昨夜雨疏風驟　昨夜　雨疎らに風驟かなり
濃睡不消殘酒　濃き睡りも　残んの酒を消さず
試問捲簾人　試みに簾を巻く人に問えば
卻道海棠依舊　却って道う「海棠は旧に依る」と
知否　知るや否や

知否　知るや否や
應是綠肥紅瘦　応に是れ緑は肥え紅は痩せたるなるべし

〔口語訳〕

昨夜は雨がバラバラと音を立て風も激しかった。ぐっすりと睡ったけれど、二日酔は未だ醒めてはいない。ためしに簾を巻いている者に尋ねると「海棠の花は大丈夫です」という。「お前、判ってるの、本当に判ってるの。きっと緑の葉ばかり茂って、紅い花は色褪せて了ったんじゃないの？」

怨王孫　（王孫を怨む）

湖上風來波浩渺　湖上風来たりて波浩渺
秋已暮　秋已に暮れ
紅希香少　紅は希に香りは少なし
水光山色與人親　水光山色　人と親しみ
説不盡　説いて尽さず
天窮好　天の窮まりて好しきを
蓮子已成荷葉老　蓮子（蓮の実）已に成りて荷葉老い
清露洗殘花汀草　清露は洗う　殘花と汀草
眠沙鷗鷺不回頭　沙に眠る鷗鷺は頭を回らさず
似也恨　恨むに似たるや
人歸早　人の帰るに早きを

平俗を嫌い、藝術に高踏を求めた非凡の才が詠んだ小詞。情と景が溶け合った絶品。詩題王孫は蟋蟀の異名。

編集後記

三戸岡さんからご著書『金原明善の一生』と『道徳イノベーション―二宮金次郎の教え―』（鯨さんとの共著）を送っていただきました。

金原明善は、静岡県西部の遠州が生んだ、天竜川の治山治水を始め、様々な公益事業に文字通り生涯を捧げた人物で、彼の行動はそれに続く豊田佐吉・本田宗一郎に大きな影響を与え、世界企業の誕生につながりました。又二宮金次郎は之に先駆け、実践哲学で大勢の庶民を物心両面から救い、後に続くこれらの人物から師とあおがれていたことが読了後よく分ります。

何れの本もすでに三戸岡さん鯨さんが、まんじ誌上で健筆を振るわれたものが基となっておりますが、製本されますと一段と磨きがかかり、読む人をして退屈させません。今の世に最も必要な道徳振興と環境保全推進の見地からも一読をお勧めしたい書であります。

話は変りますが最近まんじの編集をしておりまして、しみじみと幸せを感じております。それは様々な人生経験を積まれた同人各位の心からの叫びをいち早く知ることができるからです。食べ物だったらどんなに美味しい物でも飽きが来ると思いますが、読書の喜びは無限です。

そこから得る事のできる「知」は無限です。そしてどれだけ身につけても必ずその先があります。

孔子は『論語』のなかで「七十にして心の欲する所に従いて、矩（のり）を踰（こ）えず」といいましたが、編集子は馬齢のみはそれを踰えましたが、相変わらず欲望のままに生きることが社会の中で禁止されている為に止むを得ず、心の抑制をしているだけです。これからも悩み多く、間違いやすい人生を送ることになると思いますが、その一番大きなはどめが本書の編集です。（T・N）

まんじ 第106号

平成19年11月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道夫（みとおか　みちお）
編集長　中山　喬央（なかやま　たかひろ）
事務局長　鍋屋　次郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX　045（544）5947

（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　まんじ

（印刷製本）　大和印刷株式会社
〒332-0031　川口市青木1－12－20
TEL 048（254）3311　FAX 048（254）3313

表紙の絵について
「平常心」

田寺怜葦　画